



（岡山製本）

大正三年十月二十日印刷
大正三年十月二十三日發行

有朋堂文庫（非賣品）
源氏物語四

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

ながめする　㊁四一五ノ一一
ながめやる　㊃二六一ノ六
流れての　㊂四一三ノ一〇
ながらふる（命）　㊀四一九ノ三
なきかげや（見）　㊀四六四ノ一〇
なきたまぞ　㊀三六三ノ九
なき人を（戀ふる）　㊀六一三ノ八
なき人を（したふ）　㊁八八ノ一
なき人を（しのぶ）　㊂三一一ノ一一
なき人の　㊀四五三ノ一一
なき人も　㊂一五八ノ六
なき人は　㊁四七〇ノ二
なきものに　㊃四二〇ノ一
なく聲も（聲）　㊁二五〇ノ七

源氏物語總索引　終

| | | |
|---|---|---|
| 月かげは（同じ） | ㊂ | 一九九ノ三 |
| 月かげは（見し） | ㊀ | 四一七ノ二 |
| 月のすむ（河） | ㊁ | 二三ノ二 |
| 月のすむ（雲井） | ㊀ | 四二三ノ四 |
| 盡きもせぬ | ㊀ | 三〇四ノ八 |
| つゝむめる | ㊀ | 三〇〇ノ一〇 |
| つてに見し | ㊂ | 五一六ノ六 |
| つれなしと | ㊃ | 三三七ノ五 |
| つゆけさの | ㊀ | 五八〇ノ五 |
| 露けさは | ㊂ | 三〇八ノ二 |
| 露しげき | ㊂ | 一七六ノ四 |
| つらゝとぢ | ㊂ | 五一二ノ一 |
| つれ〴〵と（身を） | ㊃ | 二六四ノ六 |
| つれ〴〵と（わが） | ㊂ | 三三二ノ一〇 |
| つれなきを | ㊁ | 七八ノ九 |
| つれなくて | ㊂ | 三九九ノ二 |
| つれなさを | ㊀ | 八二ノ二 |
| つれなさは | ㊂ | 四四五ノ一 |
| 手を折りて | ㊀ | 五二ノ六 |
| 手にかくる | ㊂ | 四〇六ノ六 |
| 手につみて | ㊀ | 二〇七ノ二 |
| 咎むなよ | ㊁ | 四五八ノ一 |
| 時しあらば | ㊂ | 一五六ノ二 |
| 時ならで | ㊀ | 四三〇ノ二 |
| とけて寢ぬ | ㊁ | 八七ノ四 |
| 常世出でて | ㊀ | 四八五ノ二 |
| 年を經て（いのる） | ㊂ | 一六一ノ二 |
| 年を經て（まつ） | ㊀ | 六一九ノ三 |
| 年暮れて | ㊀ | 三九四ノ六 |
| 年月を（なかに） | ㊂ | 五三四ノ六 |
| 年月を（まつに） | ㊁ | 二〇三ノ九 |
| 年經とも | ㊃ | 二三六ノ二 |
| 年ふれど | ㊁ | 七七ノ六 |
| 年經つる | ㊀ | 五四四ノ一〇 |
| とまる身も | ㊀ | 三五二ノ四 |
| ともかくも | ㊁ | 四〇〇ノ八 |
| 友千鳥 | ㊀ | 四九一ノ二 |
| 鳥の音も | ㊂ | 五三六ノ一 |
| 鳥部山 | ㊀ | 四五二ノ一〇 |
| 問はぬをも | ㊀ | 一六二ノ五 |
| なほざりに | ㊀ | 五四四ノ一 |
| 長き世を | ㊃ | 二三七ノ三 |
| ながき世の | ㊀ | 四〇四ノ三 |
| 中たえば | ㊀ | 三〇二ノ一 |
| 中絶えむ | ㊂ | 五七四ノ七 |
| なか〳〵に | ㊁ | 四五〇ノ一〇 |
| なかみちを | ㊁ | 五二六ノ三 |
| ながむらむ | ㊀ | 五三七ノ一〇 |
| ながむるは | ㊂ | 五九九ノ二 |
| ながむれば | ㊃ | 二〇ノ四 |
| ながめかる | ㊀ | 四二五ノ一 |

こそ） ㊀ 五七七ノ二
住吉の（松に） ㊂ 二〇ノ三
せくからに ㊂ 二三一ノ四
蟬の羽も ㊀ 一六六ノ一〇
袖の香を ㊁ 三三九ノ九
袖ぬるゝ（こひぢ） ㊀ 三三六ノ二
袖ぬるゝ（露の） ㊀ 二八八ッ五
袖ふれし（梅） ㊃ 一三ノ三
袖ふれし（人） ㊃ 四三二ノ一〇
そのかみを ㊀ 三八八ノ五
そのかみの ㊁ 四七〇ノ二
そのかみや ㊀ 四一〇ノ九
その駒も ㊁ 二五八ノ八
そむきにし ㊁ 五二九ノ二
背く世の ㊁ 五三〇ノ四
それもがと ㊀ 四三〇ノ九
たえせじの ㊂ 五七四ノ九
絶えぬべき ㊂ 二九五ノ五
絶えはてぬ ㊃ 一九七ノ九
絶間のみ ㊃ 二五一ノ一
たをやめの ㊁ 四五四ノ四
誰が世にか ㊂ 一四九ノ七
薪こる ㊂ 二九二ノ二
竹河に ㊂ 三九〇ノ六
竹河の（そのよ） ㊂ 四二二ノ七
竹河の（はし） ㊂ 三八九ノ三
立ちそひて ㊂ 一三四ノ五
立ちとまり ㊀ 二一五ノ六
立ちぬるゝ ㊀ 二九七ノ一
橘の（香を） ㊀ 四四三ノ五
橘の（かをりし） ㊁ 二三九ノ四
橘の（かをる） ㊃ 三一八ノ二
橘の（小島） ㊃ 二五六ノ四
立ちよらむ ㊂ 五一四ノ一
たづかなき ㊀ 四九八ノ一
たづぬるに ㊁ 三六三ノ九
尋ねても ㊀ 六一六ノ二
尋ねゆく ㊀ 一八ノ二
たなばたの ㊂ 三三三ノ五
旅衣 ㊀ 五二六ノ五
旅寝して ㊃ 三五六ノ二
玉かづら ㊀ 六二一ノ三
たましひを ㊂ 二三三ノ六
たゆまじき ㊀ 六一〇ノ九
たれかまた ㊂ 一九ノ一
誰により ㊀ 五六六ノ一
契あれや ㊂ 二八四ノ八
契りおかむ ㊂ 八二ノ四
契りしに ㊁ 一七ノ六
千尋とも ㊀ 三二九ノ二
月影の ㊀ 四五八ノ六

咲きて疾く ㊀ 四六六ノ二
さきに立つ ㊃ 一四ノ一
さきの世の ㊀ 一三三ノ四
咲きまじる ㊀ 六一ノ九
咲くと見て ㊂ 三九六ノ七
咲く花に ㊀ 一三ノ四
櫻こそ ㊂ 五八六ノ六
さくらばな ㊂ 三九七ノ三
さくらゆゑ ㊂ 三九六ノ五
さゝがにの ㊀ 六六ノ三
笹わけば ㊀ 二九五ノ三
さしかへる ㊂ 四五八ノ四
さしぐみに ㊀ 一八九ノ六
さしつぎに ㊁ 五〇〇ノ一〇
さしとむる ㊃ 二〇二ノ九
さしながら ㊁ 五〇〇ノ六
里とほみ ㊂ 二五四ノ一三
里の名を ㊃ 二六三ノ一〇
里の名も ㊃ 二二三ノ一一
里わかぬ ㊀ 二三六ノ五
さもこそは ㊂ 三八ノ六
さよ衣 ㊂ 五六六ノ八
さ夜中に ㊁ 一一六ノ一〇
しほ〳〵と ㊀ 五三八ノ六
しほたるゝ(あまの) ㊃ 一五ノ一三
しほたるゝ(あまを) ㊁ 五五八ノ四
しほたるゝ(ことを) ㊀ 四七四ノ一三
下露に ㊁ 三三〇ノ三
しづみしも ㊁ 五三六ノ九
死出の山 ㊂ 三三七ノ五
しなてるや ㊃ 二一ノ六
忍びれや ㊃ 三一六ノ一一
しめのうちは ㊀ 六四六ノ二
しめゆひし ㊃ 一九四ノ一
霜氷 ㊁ 一三四ノ五
霜さゆる ㊂ 六〇六ノ五
霜にあへず ㊃ 三〇ノ一〇
知らざりし ㊀ 四九八ノ八
知らずとも ㊁ 一八七ノ一
しるべせし ㊂ 五六〇ノ一一
末とほき ㊁ 三四ノ四
巣がくれて ㊁ 四一八ノ一〇
過ぎにしが ㊃ 一七ノ九
過ぎにしも ㊀ 一六七ノ二
鈴鹿川 ㊀ 三八九ノ三
鈴蟲の ㊀ 一五ノ七
すべらぎの ㊃ 一三四ノ一〇
須磨の浦に ㊀ 五五二ノ三
住みなれし ㊁ 一六ノ八
住のえを ㊂ 一九ノ六
すみよしの（まつ

| | | |
|---|---|---|
| 雲の上の | ㊁ | 二四ノ二 |
| 雲のうへも | ㊀ | 一九ノ一〇 |
| くもりなき | ㊁ | 二〇三ノ二 |
| くやしくぞ | ㊂ | 七〇ノ七 |
| くやしくも | ㊀ | 三三〇ノ三 |
| くれなゐに | ㊂ | 六一五ノ二 |
| くれなゐの(涙に) | ㊁ | 一三三ノ六 |
| くれなゐの(花ぞ) | ㊀ | 二六七ノ三 |
| くれなゐの(ひと) | ㊀ | 二六一ノ三 |
| けさの間の | ㊃ | 四一ノ九 |
| 戀しさの | ㊂ | 二六六ノ六 |
| 戀ひわたる | ㊁ | 一九四ノ一 |
| 戀ひわびて(死ぬる) | ㊂ | 六一八ノ五 |
| 戀ひわびて(なく音) | ㊀ | 四八〇ノ二 |
| 戀ひわぶる | ㊂ | 七ノ九 |
| こゑはせで | ㊁ | 二五〇ノ一〇 |
| こほりとぢ | ㊁ | 八六ノ四 |
| 木がらしに | ㊀ | 五七ノ三 |
| 木枯の(吹き) | ㊃ | 四二七ノ二 |
| 木枯の(吹くに) | ㊀ | 四一七ノ三 |
| 九重を | ㊁ | 一三六ノ三 |
| 九重に(霞) | ㊁ | 四一二ノ九 |
| 九重に(霧) | ㊀ | 四一六ノ一 |
| 心あてに | ㊀ | 一一四ノ八 |
| 心ありて(池の) | ㊂ | 三九六ノ二 |
| 心ありて(風のにほはす) | ㊂ | 三六八ノ四 |
| 心ありて(風のよぐ) | ㊁ | 四三一ノ六 |
| 心ありて(ひくて) | ㊀ | 四八七ノ三 |
| 心いる | ㊀ | 三一八ノ六 |
| 心をば | ㊃ | 二三八ノ四 |
| 心から | ㊀ | 三九八ノ一 |
| 心から | ㊀ | 四八四ノ三 |
| 心から | ㊁ | 一四八ノ五 |
| 心こそ | ㊃ | 四二一ノ二 |
| 心さへ | ㊁ | 三九二ノ一 |
| 心には | ㊃ | 四〇六ノ三 |
| こゝろもて(草の) | ㊂ | 一九五ノ三 |
| こゝろもて(日影) | ㊁ | 三七六ノ七 |
| こてふにも | ㊁ | 三三九ノ五 |
| ことならば | ㊂ | 一六〇ノ一 |
| ことに出でて | ㊂ | 一七四ノ八 |
| 琴の音に | ㊀ | 四八七ノ九 |
| 琴の音も | ㊀ | 五七ノ九 |
| このしたの | ㊂ | 一五八ノ四 |
| このたびは | ㊀ | 五四二ノ九 |
| この春は(たれ) | ㊃ | 四ノ二 |
| この春は(柳の) | ㊂ | 一五六ノ四 |
| 小松原 | ㊁ | 五一三ノ六 |
| こりずまの | ㊀ | 四七二ノ一〇 |
| さえわたる | ㊀ | 三九四ノ四 |

風に散る(紅葉は) ㊁ 一四八ノ八
風吹けば(浪の) ㊁ 二三一ノ三
風吹けば(まづ) ㊀ 四〇九ノ七
かた〲に ㊂ 五六一ノ一
かたみぞと ㊃ 二〇六ノ一〇
かたみにぞ ㊀ 五四四ノ一〇
かれてより ㊀ 五六二ノ七
鐘つきて ㊀ 二四五ノ二
鐘の音の ㊃ 二九六ノ一
かのきしに ㊁ 一〇ノ二
かばかりは ㊁ 四一三ノ一
神垣は ㊀ 三八一ノ七
神人の ㊂ 二〇ノ六
龜の上の ㊁ 三二一ノ五
からをだに ㊃ 二九四ノ七
唐國に ㊀ 四六八ノ九
からころも(君が) ㊀ 二六〇ノ七
からころも(また) ㊁ 三五〇ノ七
からひとの ㊀ 二七一ノ八
かりがゐし ㊂ 三二六ノ二
枯れはつる ㊂ 三〇九ノ三
かはらじと ㊁ 一七ノ八
消えがてに ㊀ 五八六ノ三
消えとまる ㊂ 八二ノ二
消えぬまに ㊃ 四四ノ八
來しかたを ㊂ 六二一ノ六
來し方も ㊁ 一五四ノ三
岸遠く ㊃ 四二〇ノ二
きて見れば ㊁ 一九八ノ四
君がをる ㊂ 五一五ノ一〇
君がため ㊃ 一二五ノ二
君こふる ㊂ 三三三ノ一〇
君しこば ㊀ 二九五ノ一
君なくて(岩) ㊂ 五〇八ノ六
君なくて(塵) ㊀ 三六三ノ二
君にかく ㊀ 三〇二ノ三
君にしも ㊁ 一六一ノ六
君にとて ㊃ 二ノ八
君もさは ㊁ 五九ノ八
今日さへや ㊁ 二五三ノ三
今日ぞ知る ㊂ 四〇二ノ四
霧ふかき ㊂ 五五四ノ三
水鷄だに ㊀ 五七一ノ一
草がれの ㊀ 三五六ノ一〇
草わかみ ㊁ 二九四ノ四
國つ神 ㊀ 三八六ノ五
汲みそめて ㊀ 一九九ノ五
雲うへに ㊀ 六四三ノ二
雲ちかく ㊀ 四九七ノ九
雲のゐる ㊂ 四五五ノ三
雲の上を ㊂ 一九八ノ二

女郎花(しなるゝ)　㊂　二三二ノ二
女郎花(しなれぞ)　㊃　五九ノ四
女郎花(亂るゝ)　㊃　三五六ノ四
思ひあまり　㊁　二六二ノ九
思ふどち　㊀　五六五ノ二
思ふとも　㊁　二三二ノ四
思ふらむ　㊀　五二八ノ九
面かげは　㊀　一九七ノ九
おもはずに　㊁　四一七ノ六
をりからや　㊂　三八九ノ八
おりたちて　㊁　三八一ノ一〇
折りて見ば　㊂　三八四ノ一〇
折る人の　㊃　五ノ七
かへさむと　㊁　二〇〇ノ六
かへりては　㊀　五五二ノ五
香をとめて　㊂　三一三ノ八
かほ鳥の　㊃　一三五ノ三

篝火に　㊁　三〇〇ノ五
かきくもり　㊂　六〇九ノ一〇
かきくらし　㊃　二六四ノ一
かきくらす　㊃　四三〇ノ一〇
かきつめて(海士の)　㊀　五四二ノ二
かきつめて(見るも)　㊂　三三七ノ二
かきつめて(むかし)　㊂　八六ノ九
かきつられ　㊀　四八四ノ一〇
かきたれて　㊁　四一五ノ一
限あれば　㊀　三四八ノ六
かぎりぞと　㊃　四二〇ノ三
かぎりとて(別るゝ)　㊀　七ノ六
かぎりとて(忘れ)　㊁　四四五ノ三
かくれなき　㊀　三〇〇ノ三
かげをのみ　㊀　三二六ノ五
かけきやは　㊁　九〇ノ五
かけていへば　㊁　一三九ノ五

蔭ひろみ　㊀　三九四ノ一
かけまくは　㊀　四一〇ノ二
かこつべき　㊀　二二六ノ七
かざしをる　㊂　四八二ノ七
かざしける　㊀　三三〇ノ一〇
かざしても　㊁　四六二ノ九
かしは木に　㊂　一六〇ノ五
數ならで　㊀　五八〇ノ一
數ならぬ(ふせ屋)　㊀　九〇ノ一〇
數ならぬ(みくり)　㊁　一八八ノ二
數ならぬ(み島)　㊀　五六八ノ六
かずならば(いとひも)　㊁　三七四ノ六
かずならば(身に)　㊂　二八六ノ五
かすみだに　㊁　四三一ノ八
風さわぎ　㊁　三三二ノ三
風に散る(ことは)　㊂　三九六ノ六

浦にたく　㊀　四七五ノ二
浦人の　㊀　四七五ノ七
恨みわび　㊂　二六九ノ五
うらめしや（おきつ）　㊁　三五一ノ一
うらめしや（霞の）　㊂　一五八ノ八
おひそめし　㊂　三四ノ六
おひ立たむ　㊀　一七九ノ七
老の波　㊁　五五八ノ一
逢ふことの（夜を）　㊀　六八ノ二
逢ふことの（かたき）　㊀　四〇四ノ一〇
逢ふまでの（かたみに）　㊀　五四四ノ三
逢ふまでの（かたみばかり）　㊀　一六六ノ七
大かたに（聞かまし）　㊃　六〇ノ二
大かたに（花の）　㊀　三〇七ノ六
大かたの（秋の）　㊀　三八四ノ四
大かたの（秋を）　㊂　一九五ノ九
大かたの（憂き）　㊀　四二三ノ八
大かたの（世を）　㊃　四二九ノ九
大かたの（荻の）　㊁　三一七ノ四
大かたは（思ひ）　㊂　三一八ノ八
大かたは（わが）　㊂　二一七ノ二
あふさかの　㊀　六二七ノ二
逢瀬なき　㊀　四六〇ノ四
大空を　㊂　三三四ノ七
大ぞらの（風）　㊂　三九七ノ一
大ぞらの（月）　㊃　五〇ノ八
おきつ船　㊁　四二一ノ九
おきて行く　㊂　六七ノ一〇
荻の葉の　㊃　三四九ノ二
荻原や　㊂　二二〇ノ一
おくと見る　㊂　二九九ノ二
奥山の（松の）　㊀　一九〇ノ一
奥山の（松葉）　㊂　五〇八ノ八
おくれじと　㊂　六一六ノ一二
をしほ山　㊁　三三一ノ二
をじかなく　㊂　四九六ノ八
をしからぬ（命に）　㊀　四六八ノ二
をしからぬ（この身）　㊂　二九二ノ八
おしなべて　㊀　五七一ノ四
をちかへり　㊀　四四〇ノ一〇
をちこちの　㊂　四七八ノ九
をちこちも　㊀　五二七ノ一
少女子が　㊀　三八一ノ九
をとめ子も　㊁　一二九ノ二
おなじ枝を　㊂　五五二ノ六
おなじ巣に　㊁　四一八ノ三
おなじ野の　㊁　三六三ノ七
おぼつかな　㊂　三四八ノ一三
女郎女（さける）　㊂　五五四ノ一〇

今はとて(あらし) ㊂ 三三二ノ三
今はとて(もえむ) ㊂ 一一九ノ七
今はとて(やど) ㊁ 三九八ノ一三
いもせ山 ㊁ 三七一ノ一三
入日さす ㊁ 四八ノ一
いろ〳〵に ㊁ 一一三ノ八
色かはる(あさぢ) ㊂ 五〇二ノ二
色かはる(袖をば) ㊂ 五〇二ノ四
色まさる ㊁ 四七四ノ二
色も香も ㊂ 四三一ノ二
いはけなき ㊀ 二〇七ノ二
言はぬをも ㊀ 二四六ノ三
植ゑて見し ㊂ 三一九ノ七
うき雲に ㊁ 二三ノ一二
うきことを ㊁ 三九五ノ五
憂きことに ㊁ 一六四ノ四
浮島を ㊁ 一六三ノ八
うきふしを ㊀ 五二ノ八
うきふしも ㊂ 一七〇ノ一
うき身世に ㊀ 三〇九ノ五
うきめかる ㊀ 四七六ノ一〇
うきめ見し ㊀ 六三九ノ一三
うきものと ㊃ 四〇七ノ一三
うき世をば ㊀ 四六四ノ一
うき世には(あらぬ) ㊂ 一六七ノ一三
うき世には(ゆき) ㊂ 三一六ノ二
うぐひすの(聲にや) ㊁ 四三〇ノ一三
うぐひすの(さへづる) ㊁ 一三六ノ一〇
うぐひすの(ねぐら) ㊁ 四三一ノ四
うぐひすの(昔を) ㊁ 一三七ノ四
憂しとのみ ㊀ 四八六ノ三
うす氷 ㊁ 二〇二ノ一三
うちきらし ㊀ 三三一ノ一〇
うつしうゑて ㊃ 三九五ノ六
うちすてて(立つも) ㊀ 五四四ノ八
うちすてて(つがひ) ㊂ 四三一ノ二
うちはらふ ㊀ 六一ノ一二
うつせみの(羽に) ㊀ 一〇七ノ二
うつせみの(身を) ㊀ 一〇五ノ一三
うつせみの(世は) ㊀ 一六二ノ九
うちつけの ㊀ 五六二ノ九
うちとけて ㊁ 三四三ノ二
宇治橋の ㊃ 二五〇ノ一二
うちわたし ㊃ 六六ノ二
優曇華の ㊀ 一九〇ノ八
優婆塞が ㊀ 一三二ノ一
海にます ㊀ 五〇九ノ七
海松や ㊀ 五六七ノ三
うら風や ㊀ 五〇六ノ一
うらなくも ㊀ 五三八ノ九

荒れはつる　㊃　一〇四ノ四
荒れまさる　㊀　四七八ノ六
あはと見る　㊀　五二〇ノ八
逢はぬ夜を　㊀　二六四ノ二
哀をも　㊂　二四八ノ一三
あはれしる　㊃　三三七ノ一
あはれてふ　㊂　四〇四ノ六
あはれとて　㊂　四〇〇ノ一三
いかさまに　㊀　二八四ノ八
いかでかく　㊂　四三二ノ八
いかならむ(色)　㊁　四一〇ノ二
いかならむ(世)　㊂　四八七ノ三
いかなれば　㊁　五九二ノ七
いきて又　㊁　七ノ八
いくかへり(露)　㊁　四五四ノ二
いくかへり(行き)　㊁　一二ノ一
いくそたび　㊀　二四五ノ八
生ける世の(死には)　㊂　四〇四ノ一一
いける世の(わかれ)　㊀　四六七ノ一三
いさらゐは　㊁　一六ノ一〇
いさりせし　㊁　六二ノ五
伊勢島や　㊀　四七七ノ一
伊勢人の　㊀　四七七ノ一三
いたづらに　㊃　七七ノ六
いづかたの　㊀　四九一ノ九
いつかまた　㊀　四六五ノ三
いづくとか　㊂　五一六ノ九
いづくにか　㊃　二九二ノ一〇
いづこより　㊂　五八六ノ八
いつしかも　㊀　五六三ノ五
いつぞやも　㊂　五八六ノ四
いつとかは　㊂　二五六ノ一三
いつとなく　㊀　四九四ノ一三
いつのまに　㊁　七四ノ九
いづれをも　㊁　四七一ノ一
いづれぞと　㊀　三〇九ノ七
いづれとか　㊂　二四九ノ四
いでやなぞ　㊂　四〇〇ノ八
いときなき　㊀　三〇ノ四
いとゞしく　㊀　一五ノ九
いにしへを　㊁　一三七ノ二
いにしへの(秋さへ)　㊂　三〇八ノ八
いにしへの(秋の)　㊂　三〇六ノ一一
いにしへも　㊀　一三二ノ一二
命あらば　㊂　四七二ノ九
命こそ　㊁　五二〇ノ七
いぶせくも　㊀　五二八ノ三
いまさらに(いかならむ)　㊁　二三六ノ一三
いまさらに(いろに)　㊂　五九五ノ六
今も見て　㊁　三五七ノ二

| | | |
|---|---|---|
| あかれさす | ㊁ | 三三二ノ七 |
| 秋をへて | ㊁ | 四七五ノ一 |
| 秋風に | ㊂ | 三〇〇ノ四 |
| 秋霧に | ㊀ | 三五七ノ一三 |
| 秋霧の | ㊂ | 五〇五ノ二 |
| 秋の野の(草) | ㊂ | 二三八ノ三 |
| 秋の野の(露) | ㊃ | 三九八ノ六 |
| 秋の夜の | ㊀ | 五三五ノ二 |
| 秋はつる | ㊃ | 一〇六ノ八 |
| 秋はてて(霧) | ㊁ | 六九ノ四 |
| 秋はてて(淋しさ) | ㊂ | 五八七ノ一 |
| あけぐれの | ㊂ | 六七ノ一三 |
| 明けぬ夜に | ㊀ | 五三六ノ六 |
| あげまきに | ㊂ | 五二二ノ一二 |
| 淺からぬ | ㊁ | 六二ノ七 |
| あさか山 | ㊀ | 一九九ノ三 |
| あさき名を | ㊁ | 四五七ノ一 |

| | | |
|---|---|---|
| 朝霧に | ㊂ | 四九九ノ六 |
| 朝霧の | ㊀ | 一三二ノ六 |
| 淺けれど | ㊁ | 四〇〇ノ六 |
| あさぢふの | ㊀ | 四〇九ノ五 |
| 朝日さす(軒) | ㊀ | 二五六ノ三 |
| 朝日さす(光) | ㊁ | 三七四ノ九 |
| あさぼらけ(家路も) | ㊂ | 四五五ノ八 |
| あさぼらけ(霧立つ) | ㊀ | 二一五ノ四 |
| あさみどり | ㊁ | 四六七ノ一一 |
| あさみにや | ㊀ | 三三六ノ八 |
| 朝夕に | ㊂ | 二五七ノ九 |
| あしわかの | ㊀ | 二二〇ノ九 |
| あだしのの | ㊃ | 三九四ノ一三 |
| 新しき | ㊀ | 三七六ノ一 |
| あづさ弓 | ㊀ | 三一八ノ四 |
| あとたえて | ㊂ | 四三九ノ四 |
| あまがつむ | ㊀ | 四七八ノ一 |

| | | |
|---|---|---|
| あま衣 | ㊃ | 四三六ノ五 |
| あまたとし | ㊀ | 三七五ノ一〇 |
| あまの世を | ㊂ | 九六ノ四 |
| あま船に | ㊂ | 九七ノ二 |
| 雨となり | ㊀ | 三五五ノ一一 |
| あめにます | ㊁ | 一三六ノ一一 |
| あやなくも | ㊀ | 三六八ノ一三 |
| あらかりし | ㊀ | 五七八ノ一 |
| 荒き風 | ㊀ | 一八ノ一 |
| あらしふく | ㊀ | 一九八ノ五 |
| あらだちし | ㊀ | 三〇一ノ七 |
| あらためて | ㊁ | 七八ノ一一 |
| あられふる | ㊂ | 六〇〇ノ六 |
| あらはれて | ㊁ | 二五四ノ三 |
| ありし世の | ㊀ | 四二六ノ二 |
| ありと見て | ㊃ | 三六三ノ七 |
| ありふれば | ㊃ | 一七ノ六 |

元服、卽位 ㊀ 五五ノ二
繪を好まる ㊀ 六三七ノ二
夜居の僧より源氏の子なるを聞く ㊁ 四八ノ二
位を源氏に讓らんとす ㊁ 五四ノ一
朱雀院行幸 ㊁ 一三五ノ四
大原野行幸 ㊁ 三二五ノ六
玉鬘に對する情 ㊁ 四〇九ノ二
六條院行幸 ㊁ 四七一ノ四
讓位 ㊂ 一二ノ五
阿闍梨より宇治宮の事を聞く ㊂ 四三七ノ一

**ロ**

○六條院行幸 ㊁ 四七一ノ四
○六條御息所
源氏との情交 ㊀ 一三一ノ三
本性 ㊀ 一三一ノ七
秋好齋宮と伊勢に下らんとす ㊀ 三二〇ノ六
葵上との車爭ひ ㊀ 三二三ノ五
源氏の觀たる六條御息所 ㊀ 三二八ノ五
煩悶 ㊀ 三三二ノ六
嫉妬 ㊀ 三三四ノ九
病氣 ㊀ 三三四ノ二
嫉妬 ㊀ 三三六ノ二
同 ㊀ 三四二ノ一〇
葵上の死を弔す ㊀ 三五一ノ一
源氏の觀たる六條御息所 ㊀ 三七三ノ五
伊勢下りを決す ㊀ 三七七ノ一
母子伊勢下向 ㊀ 三八五ノ九
病氣 ㊀ 五八一ノ六
秋好を源氏に託す ㊀ 五八二ノ九
源氏の觀たる六條御息所 ㊀ 六三五ノ九
同 ㊂ 五〇ノ一〇
死靈紫上を惱ます ㊂ 七一ノ四
嫉妬 ㊂ 七四ノ九
死靈女三宮を惱ます ㊂ 一三五ノ五

**ワ**

○和歌
あひ見ずて ㊀ 四一八ノ六
あかつきの(霜) ㊂ 六〇六ノ八
あかつきの(別) ㊀ 三八二ノ二
あかなくに ㊀ 四九七ノ一

落葉宮を六條院に移す　㊂　三四五ノ五
六の君を落葉宮の養子とす　㊂　三五六ノ七
玉鬘を訪ふ　㊂　三八〇ノ九
左大臣に任ぜらる　㊂　四二〇ノ一〇
薫を六の君の聟にせんとす　㊃　二一ノ八
六君を匂宮に配せんとす　㊃　三一ノ五
六君の三つ目の祝　㊃　六一ノ六
匂宮を自邸に伴ふ　㊃　一〇八ノ八
○靫負命婦
桐壺更衣の母に使す　㊀　一〇ノ二
復命　㊀　一六ノ五
○指喰の女　㊀　四九ノ一〇

ヨ

○横川の僧都
浮舟を發見す　㊃　三六七ノ四
浮舟を介抱す　㊃　三七二ノ五
浮舟を小野の家に伴ふ　㊃　三七五ノ二
浮舟を加持す　㊃　三七七ノ六
小野に寄る　㊃　四一三ノ七
明石中宮に浮舟の事を語る　㊃　四二三ノ四
薫に浮舟の事を語る　㊃　四四三ノ一
○横川の僧都妹尼
浮舟を中將に逢はしめんとす　㊃　三九四ノ一
長谷詣　㊃　四〇四ノ三
浮舟の出家を悲む　㊃　四二一ノ六
○横川の僧都母尼
長谷詣　㊃　三六五ノ一
宇治院に宿す　㊃　三六六ノ九
吾妻琴を彈く　㊃　四〇一ノ三
○良清
源氏に明石の噂を語る　㊀　一七三ノ二
明石入道を取次ぐ　㊂　五一一ノ四

リ

○臨時客　㊁　二〇九ノ五

レ

○冷泉院
誕生　㊀　二八二ノ一〇
聰明　㊀　五五一ノ七

落葉宮の母上と語る ㊂ 一五一ノ八
威重 ㊂ 一五五ノ一〇
頭中將を訪ふ ㊂ 一五六ノ七
落葉宮に戀情をほのめかす ㊂ 一五八ノ一一
侍女の評 ㊂ 一六三ノ九
落葉宮を訪ふ ㊂ 一七二ノ二
柏木の遺物の笛を贈らる ㊂ 一七五ノ七
夢に柏木の歌よむを見る ㊂ 一七八ノ一
柏木の爲に法會を營む ㊂ 一八〇ノ八
薫を見て柏木女三宮の間を疑ふ ㊂ 一八二ノ一〇
夢、笛の事を源氏に語る ㊂ 一八四ノ一
落葉宮に對する戀 ㊂ 二〇五ノ一
小野の山莊を見舞ふ ㊂ 二〇七ノ九
落葉宮に戀を打明く ㊂ 二〇九ノ二
異性に對する性質 ㊂ 二一〇ノ七
落葉宮に文を贈る ㊂ 二一一ノ九
雲井雁に落葉宮方の返事を奪はる ㊂ 二三二ノ七
落葉宮母君葬式の世話 ㊂ 二四三ノ一二
落葉宮に對する慰問 ㊂ 二四七ノ二
山莊に落葉宮を訪ふ ㊂ 二四九ノ八
雲井雁の觀たる夕霧 ㊂ 二五六ノ二
源氏の觀たる夕霧 ㊂ 二五八ノ二
落葉宮を本邸に歸らしめんとす ㊂ 二六二ノ六
落葉宮への執心 ㊂ 二六七ノ六
花散里と女の批評 ㊂ 二六九ノ七
雲井雁の嫉妬をつくろふ ㊂ 二七三ノ六
落葉宮に迫る ㊂ 二七五ノ九
雲井雁を迎へに行く ㊂ 二八一ノ六
紫上の死に對する感想 ㊂ 三〇二ノ七
紫上を追慕す ㊂ 三〇六ノ五
五月雨の頃源氏と物語る ㊂ 三二八ノ一〇
姬達 ㊂ 三四四ノ九

雲井雁との相思 ㊁ 一〇三ノ二
幼き悲 ㊁ 一一五ノ一
惟光の娘に懸想す ㊁ 一三五ノ三
花散里に對する批評 ㊁ 一三二ノ一
進士及第 ㊁ 一三九ノ四
性質 ㊁ 二六四ノ三
同 ㊁ 二六五ノ四
紫上を隙見す ㊁ 三〇四ノ九
三條宮に風見舞に行く ㊁ 三〇八ノ二
紫上を思ふ ㊁ 三〇九ノ四
眞面目 ㊁ 三〇九ノ一〇
花散里及び紫上を見舞ふ ㊁ 三一〇ノ二
秋好中宮を見舞ふ ㊁ 三一二ノ九
源氏玉鬘の仲の親しきに驚く ㊁ 三一八ノ六
明石姫君方にて文を書く ㊁ 三二一ノ三
大宮を訪ふ ㊁ 三三三ノ九
玉鬘に意中をほのめがす ㊁ 三六〇ノ三
源氏と玉鬘の噂す ㊁ 三六六ノ三
雲井雁との關係 ㊁ 四四一ノ八
大宮の法事に參會 ㊁ 四四八ノ七
頭中將の觀たる夕霧 ㊁ 四五二ノ二
久し振にて雲井雁に逢ふ ㊁ 四五六ノ七
藤典侍との關係 ㊁ 四六二ノ二
中納言に任ぜらる ㊁ 四六七ノ六
三條院に移る ㊁ 四六八ノ四
朱雀院に伺候す ㊁ 四八一ノ三
人物、風采 ㊁ 四八二ノ三
朱雀帝の觀たる夕霧 ㊁ 四八七ノ六
女房の評 ㊁ 四八七ノ八
篤實 ㊁ 四九五ノ三
源氏の觀たる夕霧 ㊁ 四九七ノ二
右大將に任ぜらる ㊁ 五五〇ノ九
源氏の四十の賀を行ふ ㊁ 五五〇ノ九
女三宮に對する感情 ㊁ 五七八ノ九
大納言に任ぜらる ㊂ 一三ノ五
女三宮方にて音樂 ㊂ 三二ノ三
謹愼 ㊂ 三八ノ五
柏木の最後を訪ふ ㊂ 一三七ノ八
柏木女三宮の仲を推測す ㊂ 一四九ノ二

女一宮を預る ㊂ 二三ノ四
深慮 ㊂ 三三ノ九
女三宮方にて音樂 ㊂ 二六ノ一〇
容姿 ㊂ 三七ノ一
源氏の觀たる紫上 ㊂ 四七ノ六
病氣 ㊂ 五三ノ一
二條院に移る ㊂ 五四ノ二
危篤 ㊂ 七一ノ四
逝去の噂 ㊂ 七六ノ二
受戒 ㊂ 七八ノ四
病やゝ輕快 ㊂ 八一ノ一
重病、出家の望み ㊂ 二八九ノ一
法華八講を行ふ ㊂ 二九一ノ二
死期の近づくを知る ㊂ 二九四ノ八
逝去 ㊂ 二九八ノ八
送葬 ㊂ 三〇四ノ四
源氏の觀たる紫上 ㊂ 三一五ノ一
同 ㊂ 三三三ノ五
一周忌 ㊂ 三三三ノ六

## モ

○物怪 ㊀ 一三七ノ六
同 ㊀ 三三八ノ七
同 ㊂ 七一ノ四
同 ㊂ 一三五ノ五
同 ㊃ 三七九ノ八

## ヤ

○遣水の面目 ㊀ 八七ノ一〇

## ユ

○夕顔
頭中將との關係 ㊀ 六〇ノ三
本性 ㊀ 六一ノ一三
源氏に歌を贈る ㊀ 一〇九ノ一
素姓を包みて源氏に逢ふ ㊀ 一二六ノ三
源氏の觀たる夕顔 ㊀ 一二七ノ三
柔和 ㊀ 一二七ノ四
同 ㊀ 一二八ノ一一
無邪 ㊀ 一二九ノ一一
源氏の觀たる夕顔 ㊀ 一三〇ノ一三
變死 ㊀ 一三七ノ六
素姓分明す ㊀ 一五六ノ二
柔和 ㊁ 一八〇ノ八
○夕霧大將
誕生 ㊀ 三三八ノ七
元服 ㊁ 九二ノ八
字つくる式 ㊁ 九五ノ六
入學、寮試 ㊁ 九九ノ三

○松と竹との差別 ㊁ 八二ノ二

## ミ

○三つ目の祝 ㊃ 六二ノ二

## ム

○紫上
北山の侘住居 ㊀ 一七六ノ二
素姓 ㊀ 一八二ノ七
初めて源氏に逢ふ ㊀ 二二二ノ一
二條院に伴はる ㊀ 二一九ノ一〇
漸く源氏に懐く ㊀ 二三七ノ九
幼心に源氏を慕ふ ㊀ 二七四ノ一〇
無邪 ㊀ 二八〇ノ六
源氏の寵愛を受く ㊀ 二八八ノ九
怜悧 ㊀ 二八九ノ八
同 ㊀ 三二三ノ二
源氏と祭を見る ㊀ 三二八ノ一〇
源氏と婚す ㊀ 三六五ノ二
怜悧 ㊀ 三六七ノ七
源氏と別を惜む ㊀ 四五四ノ一
懇篤な同情 ㊀ 四九〇ノ三
須磨に使をやる ㊀ 五〇四ノ七
明石上の事を聞く ㊀ 五六四ノ五
源氏の觀たる紫上 ㊀ 五六六ノ五
明石上に對する感情 ㊁ 二四ノ二
槿に對する取越苦勞 ㊁ 七一ノ八
槿に對する嫉妬 ㊁ 八〇ノ五
源氏の評 ㊁ 八四ノ一〇
賀茂祭見物 ㊁ 四六〇ノ一一
明石上との初對面 ㊁ 四六四ノ七
女三宮に對する覺悟 ㊁ 五〇八ノ一三
汲量 ㊁ 五〇九ノ一〇
女三宮に對する感情 ㊁ 五一九ノ五
汲量 ㊁ 五一九ノ一三
寛恕 ㊁ 五二一ノ八
源氏の觀たる紫上 ㊁ 五二五ノ一
自尊 ㊁ 五四一ノ三
源氏の觀たる紫上 ㊁ 五四一ノ六
自制 ㊁ 五四二ノ七
女三宮との仲合 ㊁ 五四二ノ一一
藥師佛供養 ㊁ 五四四ノ九
明石上との仲合 ㊁ 五六〇ノ九
明石上の觀たる紫上 ㊁ 五七九ノ一
夕霧の觀たる紫上 ㊁ 五八〇ノ三
住吉詣 ㊂ 一六ノ三

慎密 ㊀ 三九九ノ六
煩悶 ㊀ 四〇五ノ八
法華八講、出家 ㊀ 四一九ノ七
御前の繪合 ㊀ 六四一ノ一
重患、逝去 ㊁ 四二ノ三
本性 ㊂ 四五ノ三
源氏の評 ㊂ 八四ノ二
○藤の御宴 ㊃ 一二九ノ八
○船樂 ㊂ 二九ノ一
○豐後介
玉鬘を奉にて宮に上る ㊁ 一六二ノ八
玉鬘への奉公 ㊁ 一六六ノ六
玉鬘の家司となる ㊁ 一九四ノ三

## へ

○辨の君
薫に昔語りをなす ㊂ 四五一ノ九
薫に柏木の祕密を語る ㊂ 四六六ノ二
素姓 ㊂ 五〇三ノ七
大君に薫に嫁せん事を勸む ㊂ 五四二ノ五
薫と語る ㊃ 一三ノ九
薫に浮舟の事を語る ㊃ 九八ノ一〇
浮舟を訪ふ ㊃ 二〇〇ノ三

## ホ

○法華八講 ㊀ 四一九ノ七
同 ㊂ 二九一ノ二
○螢兵部卿宮
多趣味 ㊀ 六四七ノ四
玉鬘を訪ふ ㊁ 二四六ノ七
源氏の觀たる宮 ㊁ 二五六ノ五
花散里の觀たる宮 ㊁ 二五六ノ七
合せ香を批評す ㊁ 四二五ノ三
書風の批評 ㊁ 四三六ノ一二
朱雀帝の觀たる宮 ㊁ 四九三ノ一一
眞木柱の姫君を娶る ㊂ 九ノ八
眞木柱との仲合 ㊂ 一〇ノ八
髯黒の觀たる宮 ㊂ 一一ノ一
源氏を訪ふ ㊂ 三一三ノ一

## マ

○眞木柱
父の邸に別れの歌を殘す ㊁ 三九八ノ五
螢兵部卿宮に嫁す ㊂ 九ノ八
紅梅に再嫁す ㊂ 三五九ノ五

源氏の観たる髯黒 ㊁ 二五八ノ一
熱心に玉鬘に懸想
す ㊁ 三七二ノ二
著實 ㊁ 三七三ノ九
玉鬘と婚す ㊁ 三七七ノ一
玉鬘への熱情 ㊁ 三七九ノ一〇
玉鬘を迎ふる準備 ㊁ 三八四ノ一
一徹者 ㊁ 三八四ノ六
本妻を諭す ㊁ 三八六ノ一
本妻に火取を投げ
つけらる ㊁ 三八九ノ五
式部卿宮を訪ふ ㊁ 四〇二ノ四
玉鬘を自邸に伴ふ ㊁ 四一三ノ三
本性 ㊂ 三七六ノ一〇
○髯黒北の方
狂氣 ㊁ 三八四ノ一〇
本性 ㊁ 三八五ノ九
髯黒に火取を投げ
つく ㊁ 三八九ノ五
嫉妬 ㊁ 三九一ノ五
父宮方に引取らる ㊁ 三九六ノ三
○常陸守
娘どもを傅く ㊃ 一三八ノ四
人物 ㊃ 一三九ノ一
媒人の言を聞く ㊃ 一四五ノ六
薫の文を見る ㊃ 三三三ノ一〇
○常陸守聟少將
粗野 ㊃ 一三九ノ一
浮舟に言ひ寄る ㊃ 一三九ノ三
浮舟を嫌ふ ㊃ 一四三ノ七
常陸守の實子に婚
を申込む ㊃ 一四五ノ六
野卑 ㊃ 一四九ノ五
常陸守の女に婚を
定む ㊃ 一五〇ノ三
常陸守の聟になる ㊃ 一五五ノ一
頑愚 ㊃ 一五五ノ一
浮舟母と歌をよむ ㊃ 一九一ノ八
○兵部卿宮(式部卿宮を見よ)

## フ

○普賢菩薩の乗物 ㊀ 二五四ノ七
○藤壺女御
素姓 ㊀ 二五ノ一
入内 ㊀ 二五ノ一三
宿下り、源氏との
情交 ㊀ 一九九ノ八
源氏の観たる藤壺 ㊀ 二〇〇ノ二
懐胎 ㊀ 二〇二ノ四
冷泉帝を生む ㊀ 二八二ノ一〇
中宮になる ㊀ 三〇三ノ八

度 ㊂ 九四ノ三
玉鬘に對する感想 ㊂ 九五ノ三
朧月夜の出家を見舞ふ ㊂ 九五ノ一三
女三宮を教訓す ㊂ 一〇〇ノ一二
柏木との疎隔 ㊂ 一〇四ノ八
柏木へ懇談 ㊂ 一〇五ノ四
柏木への諷刺 ㊂ 一一一ノ一
薫誕生についての感 ㊂ 一二五ノ一
朱雀院と對面 ㊂ 一三〇ノ七
感慨 ㊂ 一四四ノ七
同情 ㊂ 一四八ノ四
侍女の評 ㊂ 一六二ノ八
柏木の法會を營む ㊂ 一六五ノ一
夕霧より柏木の事を聞く ㊂ 一八四ノ一
女三宮の持佛供養 ㊂ 一八七ノ一
經卷書寫 ㊂ 一八八ノ四
女三宮の爲に三條宮を經營す ㊂ 一九二ノ九
六條院の庭に鈴蟲を放つ ㊂ 一九三ノ八
冷泉院を訪ふ ㊂ 一九九ノ六
秋好の出家を諫止す ㊂ 二〇〇ノ六
夕霧を諫めんとして果さず ㊂ 二五九ノ七
紫上の死を悲む ㊂ 三〇四ノ四
哀傷 ㊂ 三〇七ノ二
往事を悔恨す ㊂ 三一四ノ四
仁慈 ㊂ 三一六ノ六
籠居 ㊂ 三一七ノ八
匂宮を寵愛す ㊂ 三一九ノ二
女三宮を訪ふ ㊂ 三二二ノ五
明石上を訪ふ ㊂ 三二三ノ一〇
更衣の節 ㊂ 三二七ノ六
賀茂祭の日 ㊂ 三二七ノ一〇
五月雨の頃夕霧と語る ㊂ 三二八ノ一〇
六月頃蓮を見る ㊂ 三三二ノ六
七月七日 ㊂ 三三三ノ二
紫上の一周忌 ㊂ 三三三ノ六
哀傷いよ〳〵切なり ㊂ 三三四ノ二
出家の用意 ㊂ 三三六ノ三
逝去 ㊂ 三四一ノ一
源氏逝去後の人々の有樣 ㊂ 三四三ノ一
○髯黑大將
玉鬘に文を贈る ㊁ 三三一ノ一

玉鬘を慕ふ ㊁ 四一四ノ三
薫物を調製す ㊁ 四二三ノ一
文字の評論 ㊁ 四三三ノ一二
人々に冊子を書かしむ ㊁ 四三五ノ八
夕霧を訓戒す ㊁ 四四二ノ四
同 ㊁ 四五八ノ八
賀茂祭に紫上を誡む ㊁ 四六〇ノ二
太上天皇に準ぜらる ㊁ 四六六ノ一
子女妻妾の上の滿足 ㊁ 四六六ノ四
朱雀帝の觀たる源氏 ㊁ 四八五ノ二
女房の評 ㊁ 四八七ノ一〇
女三宮の世話を拒む ㊁ 四九六ノ九
朱雀院を訪ふ ㊁ 五〇二ノ一三
女三宮の世話を約す ㊁ 五〇四ノ八
紫上に女三宮の事を語る ㊁ 五〇七ノ五
實情 ㊁ 五〇七ノ八
四十の賀 ㊁ 五一〇ノ八
女三宮を娶る ㊁ 五一七ノ九
女三宮と紫上とに對する感 ㊁ 五二五ノ五
竊に朧月夜に逢ふ ㊁ 五三〇ノ八
精進落の饗宴 ㊁ 五四五ノ四
明石入道の文を見る ㊁ 五七二ノ六
明石姫君を教訓す ㊁ 五七六ノ七
寛恕 ㊁ 五八〇ノ八
住吉詣 ㊂ 一五ノ四
朱雀院五十の賀の準備 ㊂ 二五ノ五
女三宮に琴を教ふ ㊂ 二六ノ八
女三宮にて女樂 ㊂ 二八ノ一〇
音樂、音樂者論 ㊂ 三八ノ九
紫上と往事を語る ㊂ 四六ノ六
關係婦人の批評 ㊂ 五〇ノ二
憂悶 ㊂ 五四ノ一
六條御息所の死靈と語る ㊂ 七一ノ四
女三宮の懷胎を見舞ふ ㊂ 八二ノ五
柏木の艶書を發見す ㊂ 八六ノ五
煩悶 ㊂ 八八ノ九
女三宮に對する態

弘徽殿大后を訪ふ ㊁ 一三七ノ三
六條院を經營す ㊁ 一三九ノ九
妻妾共に六條院に移る ㊁ 一四四ノ二
異性に對する性質 ㊁ 一五二ノ三
玉鬘の消息を聞く ㊁ 一八一ノ七
玉鬘を引取る ㊁ 一八九ノ二
周到 ㊁ 一九五ノ五
衣配り ㊁ 一九五ノ六
新年に邸内の婦人をめぐる ㊁ 二〇一ノ一
明石姫君を訪ふ ㊁ 二〇三ノ五
花散里を訪ふ ㊁ 二〇四ノ五
異性に對する性質 ㊁ 二〇四ノ二
玉鬘を訪ふ ㊁ 二〇六ノ四
明石上を訪ふ ㊁ 二〇七ノ六
末摘花を訪ふ ㊁ 二一〇ノ三
空蟬の尼を訪ふ ㊁ 二二四ノ三
厚情 ㊁ 二二五ノ九
玉鬘に男に對する心得を敎ふ ㊁ 二三〇ノ二
好色 ㊁ 二三八ノ三
玉鬘に戀を訴ふ ㊁ 二三八ノ五
好色 ㊁ 二五一ノ九
自制 ㊁ 二五三ノ一
花散里の方に宿す ㊁ 二五三ノ三
玉鬘に物語の趣意を聞かす ㊁ 二五九ノ四
釣殿の納涼 ㊁ 二六九ノ一
夕霧の戀を憫む ㊁ 二七三ノ一〇
玉鬘に和琴を敎ふ ㊁ 二七五ノ九
玉鬘に對する煩悶 ㊁ 二七九ノ七
自省 ㊁ 二七九ノ七
頭中將を評す ㊁ 二九七ノ一
玉鬘方にて篝火の歌を詠む ㊁ 二九八ノ四
頭中將を評す ㊁ 三一一ノ三
野分に明石上を訪ふ ㊁ 三一六ノ八
野分に玉鬘を訪ふ ㊁ 三一七ノ六
夕霧の觀たる源氏 ㊁ 三一九ノ二
野分に花散里を訪ふ ㊁ 三二〇ノ五
玉鬘に對する煩悶 ㊁ 三二五ノ一
玉鬘に入内を勸む ㊁ 三三一ノ四
三條大宮の病を訪ふ ㊁ 三三三ノ一
頭中將に玉鬘の事を明す ㊁ 三三九ノ三
夕霧と玉鬘の噂す ㊁ 三六六ノ三
玉鬘に入内を勸む ㊁ 三八一ノ一

明石上に別を惜む ㊀ 五四一ノ一三
上京の首途 ㊀ 五四四ノ六
著京、參內 ㊀ 五四九ノ一
權大納言に任ぜらる ㊀ 五五〇ノ二
一門の榮華 ㊀ 五五五ノ一一
內大臣に任ぜらる ㊀ 五五六ノ七
厚情 ㊀ 五五七ノ一三
明石に乳母を下す ㊀ 五五八ノ八
紫上に明石の事を明す ㊀ 五六四ノ五
花散里を訪ふ ㊀ 五七〇ノ三
寛厚 ㊀ 五七三ノ五
住居參詣 ㊀ 五七四ノ三
六條御息所を訪ひて秋好を托せらる ㊀ 五八一ノ六
秋好の世話を燒く ㊀ 五八五ノ五
自制 ㊀ 五八八ノ三
秋好を冷泉に奉らんとす ㊀ 五八九ノ六
細心 ㊀ 五九二ノ一〇
末摘花を訪ふ ㊀ 六一三ノ二
末摘花を扶助す ㊀ 六二〇ノ二
異性に對する性質 ㊀ 六二〇ノ一〇
石山參詣、空蟬に逢ふ ㊀ 六二三ノ一
須磨の繪日記を發表す ㊀ 六四六ノ八
後圖 ㊀ 六五一ノ六
大堰邸に明石上を訪ふ ㊁ 一三ノ三
桂殿に宴す ㊁ 一八ノ五
大堰の邸に行く ㊁ 三七ノ二
藤壺を見舞ふ ㊁ 四四ノ四
秋好に春秋の優劣を問ふ ㊁ 五五ノ八
異性に對する性質 ㊁ 六〇ノ八
女五宮を訪ふ ㊁ 六三ノ一
槿の前齋院を訪ふ ㊁ 六六ノ四
槿に文を贈る ㊁ 六八ノ七
復槿齋院を訪ふ ㊁ 七二ノ九
源內侍に邂逅す ㊁ 七六ノ二
藤壺以下の人柄を評す ㊁ 八四ノ三
夢に藤壺を見る ㊁ 八六ノ九
槿に文を贈る ㊁ 八九ノ一
異性に對する性質 ㊁ 九二ノ五
夕霧に學問せさすべき志 ㊁ 九二ノ八
太政大臣となる ㊁ 一〇二ノ九

紫上と祭を見る　㊀　三二八ノ一〇
六條御息所の病氣を訪ふ　㊀　三三四ノ一一
悲歎　㊀　三五〇ノ四
朝顔と文の贈答　㊀　三五七ノ三
參內　㊀　三六〇ノ四
紫上と婚す　㊀　三六五ノ一一
細心　㊀　三七二ノ二
左大臣邸を訪ふ　㊀　三七四ノ四
野宮に六條御息所を訪ふ　㊀　三七九ノ二
異性に對する性質　㊀　三八六ノ九
桐壺帝の觀たる源氏　㊀　三九〇ノ一
異性に對する性質　㊀　三九五ノ九
厚情　㊀　三九六ノ五
竊に朧月夜に逢ふ　㊀　三九七ノ九
竊に藤壺に逢ふ　㊀　三九九ノ六
煩悶　㊀　四〇五ノ三
雲林院に詣づ　㊀　四〇七ノ一三
藤壺に紅葉を贈る　㊀　四一二ノ二
朱雀帝と語る　㊀　四一四ノ七
新年に藤壺を訪ふ　㊀　四二四ノ八
侍女の觀たる源氏　㊀　四二六ノ四
完全圓滿　㊀　四二九ノ八
朧月夜と密通露顯　㊀　四三二ノ八
好色　㊀　四三三ノ一
花散里を訪ふ　㊀　四三九ノ一
厚情　㊀　四三九ノ六
昔馴染の女を訪ふ　㊀　四四〇ノ三
須磨に退居せんとす　㊀　四四五ノ一
左大臣邸へ暇乞　㊀　四四八ノ一
紫上と別を惜む　㊀　四五四ノ一
花散里へ暇乞　㊀　四五七ノ三
後事を整理す　㊀　四五八ノ一一
藤壺へ暇乞　㊀　四六〇ノ一三
桐壺帝の陵に詣づ　㊀　四六三ノ三
仁慈　㊀　四六六ノ七
須磨に著す　㊀　四六八ノ五
京への音信　㊀　四七二ノ二
須磨の閑居　㊀　四八〇ノ五
寂しき生活　㊀　四九〇ノ六
三月上巳海に祓す　㊀　四九八ノ四
雷雨に遭ふ　㊀　五〇六ノ一一
夢に父帝の諭を蒙る　㊀　五〇八ノ八
明石に移る　㊀　五一一ノ四
明石上と文の贈答　㊀　五二六ノ九
明石上を訪ふ　㊀　五三三ノ一
召還の宣旨下る　㊀　五三九ノ一二

夕顔に通ふ　㊀　一二六ノ三
夕顔を誘ひて河原院に宿す　㊀　一三九ノ五
二條院に歸る　㊀　一四六ノ四
夕顔の屍を見に行く　㊀　一四八ノ五
病氣　㊀　一五四ノ五
夕顔の素姓を聞く　㊀　一五六ノ二
空蟬との音信　㊀　一六一ノ一三
軒端荻との音信　㊀　一六三ノ二
夕顔の法事を營む　㊀　一六四ノ三
病の爲に北山に赴く　㊀　一六九ノ一
名僧の加持　㊀　一七〇ノ九
明石上の噂を聞く　㊀　一七三ノ一一
紫上を隙見す　㊀　一七六ノ二
紫上の素姓を聞く　㊀　一八〇ノ一〇
紫上を貰はんとす　㊀　一八四ノ一一
病氣快癒、歸京　㊀　一八九ノ一三
葵上との仲疎し　㊀　一九四ノ一一
北山への音信　㊀　一九六ノ一一
藤壺との情交　㊀　一九九ノ八
夢　㊀　二〇三ノ一
尼君の病を訪ふ　㊀　二〇四ノ三
紫上を訪ふ　㊀　二〇七ノ一三
竊に紫上を迎ふ　㊀　二一九ノ一〇
夕顔歿後の無聊　㊀　二二九ノ一
異性に對する性質　㊀　二三〇ノ八
末摘花の琴を聞く　㊀　二三〇ノ一〇
頭中將と競ひて末摘花を挑む　㊀　二三九ノ一
末摘花に逢ふ　㊀　二四〇ノ一一
末摘花に熱心ならず　㊀　二四七ノ三
末摘花の容姿に驚く　㊀　二五〇ノ八
憐愍　㊀　二五七ノ一三
末摘花より衣服を贈らる、答禮　㊀　二五八ノ九
繪をかきて紫上と戲る　㊀　二六六ノ六
試樂に青海波を舞ふ　㊀　二六九ノ一
朱雀院行幸の舞樂　㊀　二七二ノ一
藤壺を訪ふ　㊀　二七六ノ八
紫上を鍾愛す　㊀　二八八ノ九
桐壺帝の觀たる源氏　㊀　二九一ノ一〇
源内侍を弄ぶ　㊀　二九二ノ二
朧月夜と邂逅す　㊀　三〇七ノ八
再び朧月夜に會ふ　㊀　三一四ノ六

○花散里
閑居 ㊀ 四四二ノ八
溫順 ㊀ 五七一ノ八
質朴 ㊀ 六一九ノ一二
六條東院に移る ㊁ 一ノ一
靜なる生活 ㊁ 三七ノ二
溫順 ㊁ 三七ノ五
源氏の評 ㊁ 八五ノ一二
源氏の訪問 ㊁ 二〇四ノ五
溫和 ㊁ 二五八ノ三
夕霧の三の君を預る ㊂ 二四ノ六
夕霧と懇談 ㊂ 二六九ノ七
○春秋の優劣 ㊁ 五八ノ七

ヒ

○光源氏
誕生 ㊀ 二ノ三
袴著 ㊀ 四ノ二
幼立 ㊀ 二〇ノ一〇
高麗人の觀相 ㊀ 二三ノ三
藤壺に親む ㊀ 二六ノ五
元服 ㊀ 二七ノ七
葵上を娶る ㊀ 三〇ノ三
本性 ㊀ 三三ノ一
同 ㊀ 三四ノ三
中川の家に宿る ㊀ 七〇ノ六
强ひて空蟬に通ず ㊀ 七六ノ七
同情 ㊀ 八〇ノ六
小君を介して空蟬に文通す ㊀ 八三ノ四
再び中川の家に宿る ㊀ 八七ノ九
失望して中川より歸る ㊀ 九三ノ一
三度中川の家に宿る ㊀ 九四ノ六
空蟬と軒端荻とを隙見す ㊀ 九五ノ六
軒端荻と契る ㊀ 九八ノ一二
物に紛れて歸邸す ㊀ 一〇四ノ一
空蟬へ文を遣る ㊀ 一〇五ノ三
夕顏の花を見る ㊀ 一〇九ノ一
大貳の乳母の病牀を訪ふ ㊀ 一一三ノ九
夕顏に返歌を贈る ㊀ 一一四ノ九
惟光に夕顏の樣子を探らす ㊀ 一一七ノ一二
空蟬に對する煩悶 ㊀ 一一九ノ四
六條御息所との情交 ㊀ 一二一ノ三

中君方にて浮舟の文を見る　㊃　二一七ノ二
大内記に浮舟の隱家を聞く　㊃　二二一ノ四
宇治に赴く　㊃　二二三ノ八
浮舟を隙見す　㊃　二二五ノ八
薫に假裝して浮舟に逢ふ　㊃　二三〇ノ五
煩悶　㊃　二四五ノ五
宮中の詩會　㊃　二五一ノ六
雪中宇治に行く　㊃　二五三ノ一
浮舟を連れ出す　㊃　二五四ノ一
浮舟引取の準備　㊃　二六五ノ五
好色　㊃　二六八ノ一二
宇治を訪ひて空しく歸る　㊃　二八七ノ八
時方を宇治に遣す　㊃　二九九ノ四
浮舟の死を悲む　㊃　三一一ノ四
薫と浮舟の事を語る　㊃　三一三ノ一
右近を招く　㊃　三一八ノ三
好色　㊃　三四六ノ三
浮舟の侍女侍從を呼ぶ　㊃　三五〇ノ四
宮の君への懸想　㊃　三五二ノ四
好色　㊃　三五二ノ四
同　㊃　三五三ノ二
○二條太政大臣
藤の宴に源氏を招く　㊀　三一四ノ六
性急　㊀　三九二ノ九
源氏朧月夜の密通を露す　㊀　四三二ノ八
輕忽　㊀　四三三ノ二
性急　㊀　四三四ノ八
我意　㊀　四三五ノ四
薨去　㊀　五三〇ノ五

## ネ

○子の日　㊁　二〇三ノ三

## ノ

○軒端荻
容姿　㊀　九五ノ二
陽氣　㊀　九八ノ四
源氏に逢ふ　㊀　一〇二ノ一
輕浮　㊀　一〇三ノ八
源氏との音信　㊀　一六三ノ二
○賭弓の會　㊂　二ノ五
○賭弓の還饗　㊂　三五七ノ五

## ハ

聞く ㊂ 四六一ノ六
初瀬に詣づ ㊂ 四七五ノ一
宇治に宿す ㊂ 四七八ノ一
宇治宮の觀たる匂宮 ㊂ 四八二ノ五
宇治の姫君へ慰問 ㊂ 四九六ノ二
異性に對する性質 ㊂ 五〇九ノ七
中君を挑む ㊂ 五一六ノ三
好色 ㊂ 五一六ノ一二
薫と宇治行を約す ㊂ 五五三ノ一
薫と宇治に行く ㊂ 五五六ノ一
中君に逢ふ ㊂ 五五八ノ二
又宇治に行く ㊂ 五六二ノ一
内裏を拔け出でて宇治に行く ㊂ 五六七ノ三
中君と睦じ ㊂ 五七一ノ七
薫を誘ひて宇治に行く ㊂ 五五七ノ一〇
苦心 ㊂ 五七八ノ一三
宇治に船遊す ㊂ 五八〇ノ八
中君に逢はんとして得ず ㊂ 五八四ノ一〇
嚴しく監督せらる ㊂ 五九〇ノ六
女一宮と語る ㊂ 五九一ノ一二
好色 ㊂ 五九三ノ一〇
宇治に疎し ㊂ 五九九ノ二
宇治へ弔に行く ㊂ 六一八ノ八
中君を京に引取らんとす ㊂ 六二二ノ一三
薫に中君引取の事を語る ㊃ 五ノ二
同情 ㊃ 六ノ一
六君との婚期定る ㊃ 三五ノ一
中君に對する態度 ㊃ 三六ノ七
異性に對する性質 ㊃ 三七ノ一二
六君と婚す ㊃ 五〇ノ一
好色 ㊃ 五四ノ一〇
中君を慰む ㊃ 五五ノ六
六君の三つ目の祝 ㊃ 六一ノ六
六君に對する愛情 ㊃ 六八ノ二
中君に宿して薫の移香を怪む ㊃ 七八ノ一一
薫より中君への文を見る ㊃ 一〇四ノ六
中君方に宿る ㊃ 一〇五ノ一三
浮舟の母北方の車を怪む ㊃ 一七三ノ四
浮舟を手籠にせんとす ㊃ 一七五ノ二
好色 ㊃ 一七九ノ一三
切に浮舟を想ふ ㊃ 二一三ノ一

匂宮の伴して宇治に行く ㊃ 二八七ノ八
宇治に使す ㊃ 二九九ノ四
同 ㊃ 三一八ノ一三

## ナ

○中君（宇治宮女）
心細き宇治の住居 ㊂ 五〇五ノ八
匂宮に逢ふ ㊂ 五五八ノ二
匂宮と睦じ ㊂ 五七一ノ七
憂愁 ㊂ 五八七ノ七
匂宮に心解けず ㊂ 六一八ノ八
寂しき生活 ㊃ 一ノ一
引移の用意 ㊃ 七ノ一二
引移前薫と語る ㊃ 九ノ六
京に移る ㊃ 一五ノ七
二條院に入る ㊃ 二〇ノ七
煩悶 ㊃ 三五ノ一
薫と語る ㊃ 四二ノ二
憂愁 ㊃ 五二ノ一
感懷 ㊃ 五九ノ六
憂悶、薫に文を贈る ㊃ 六九ノ三
薫に宇治に赴かん事を謀る ㊃ 七一ノ三
薫に迫らる ㊃ 七四ノ四
薫に浮舟の事を語る ㊃ 九二ノ三
産前の惱み ㊃ 一〇九ノ一
男子を産む ㊃ 一一一ノ三
薫に浮舟の事を語る ㊃ 一六七ノ二
薫に許さん事を浮舟の母に勸む ㊃ 一七二ノ四
浮舟を慰む ㊃ 一八三ノ八

## ニ

○匂兵部卿宮
誕生 ㊂ 一〇五ノ六
幼立 ㊂ 一八一ノ四
同 ㊂ 二九六ノ一〇
源氏の寵愛 ㊂ 三一九ノ二
幼立 ㊂ 三二〇ノ三
人品 ㊂ 三四三ノ二
異性に對する性質 ㊂ 三四四ノ二
匂ふ兵部卿の名 ㊂ 三五一ノ二
異性に對する性質 ㊂ 三五二ノ一〇
女一宮を戀ふ ㊂ 三五四ノ一
中の君に意あり ㊂ 三六一ノ七
却て宮の君に心あり ㊂ 三六八ノ七
宇治の姫君の噂を

末摘花の家に源氏の後を跟く ㈠ 二三五ノ四
源氏と競ひて末摘花を挑む ㈠ 二三九ノ一
源內侍を弄ぶ ㈠ 二九五ノ二
源氏の籠居を訪ふ ㈠ 三五四ノ七
貧振舞 ㈠ 四二九ノ二
源氏の謫居を訪ふ ㈠ 四九四ノ七
權中納言に任ぜらる ㈠ 五五七ノ五
本性 ㈠ 六三八ノ五
源氏の觀たる頭中將 ㈠ 六三八ノ三
內大臣となる ㈡ 一〇二ノ九
本性 ㈡ 一〇二ノ一〇
雲井雁と夕霧との仲を悟る ㈡ 一〇四ノ七
母大宮を恨む ㈡ 一一〇ノ三
雲井雁と夕霧との仲を隔てんとす ㈡ 一一七ノ八
玉鬘を戀ふ ㈡ 一六六ノ七
夢見の占 ㈡ 一六七ノ八
嚴酷 ㈡ 一七三ノ二
源氏の玉鬘を册くを誇る ㈡ 二八一ノ五
雲井雁を教訓す ㈡ 二八三ノ四
近江君を持扱ふ ㈡ 二八六ノ五
近江君を教訓す ㈡ 二八八ノ四
源氏の評 ㈡ 三一一ノ三
嚴格 ㈡ 三二五ノ三
源氏に玉鬘の事を明さる ㈡ 三三九ノ三
玉鬘の裳著に腰結の役を勤む ㈡ 三五〇ノ一〇
近江君を厭す ㈡ 三五五ノ二
夕霧と雲井雁との關係について煩悶す ㈡ 四四一ノ八
大宮の法會に夕霧を誘ふ ㈡ 四四七ノ一
藤の宴に託して夕霧を招く ㈡ 四五〇ノ一
太政大臣に任ぜらる ㈡ 四六七ノ六
致仕 ㈢ 一三ノ二
柏木の病を憂ふ ㈢ 一二〇ノ七
夕霧の觀たる頭中將 ㈢ 二六一ノ二
落葉宮に文を贈る ㈢ 二八四ノ三
源氏を慰問す ㈢ 三〇八ノ二
○時方

闕山　㈠　六二四ノ三
橘の小島　㈣　二五四ノ一一
筑紫　㈡　一五二ノ一〇
中川　㈠　七一ノ六
同　㈠　四四〇ノ三
奈良坂　㈣　三六五ノ四
奈良　㈡　五四九ノ五
西の京　㈠　一五八ノ一
同　㈠　一六〇ノ一
同　㈡　一五二ノ六
二條　㈠　一四五ノ一一
箱崎　㈡　一六七ノ五
長谷（初瀬）　㈡　一六七ノ九
同　㈢　四七五ノ一
同　㈣　一二八ノ六
同　㈣　三六五ノ二
同　㈣　四〇四ノ三
初瀬川　㈡　一八〇ノ二
東山　㈠　一四五ノ五
肥後國　㈡　一五八ノ二
肥前國　㈡　一五七ノ一〇
松が崎　㈢　二〇八ノ一
松浦　㈡　一六三ノ六
同　㈡　一六七ノ五
横川　㈣　三六五ノ一
同　㈣　三八八ノ二
六條　㈠　一〇九ノ一
同　㈠　一三一ノ四
六條京極　㈠　二〇四ノ七
同　㈢　一三九ノ一〇
○中將
小野を訪ひて浮舟を見る　㈣　三八八ノ二
浮舟の事を聞く　㈣　三九三ノ二
再び小野を訪ふ　㈣　三九五ノ八
浮舟を挑む　㈣　四〇五ノ九
浮舟に文を贈る　㈣　四二〇ノ四
浮舟の出家を悲む　㈣　四二五ノ四

## ト

○藤式部丞―賢女顔する女の話　㈠　六四ノ六
○藤內侍
賀茂祭の使　㈡　四六二ノ二
雲井雁を慰む　㈢　二八六ノ一
○頭中將
素姓　㈠　三一ノ六
源氏との間柄　㈠　三四ノ九
女子論　㈠　三七ノ五
女子三等說　㈠　三八ノ五
內氣なる女の話　㈠　六〇ノ三

○千枝常則 ㊀ 四八一ノ八
○持佛供養 ㊂ 一八七ノ一
同 ㊂ 一九〇ノ九
○地名
明石 ㊀ 一七三ノ六
同 ㊀ 四九三ノ三
同 ㊁ 五六一ノ五
愛宕 ㊀ 八ノ八
同 ㊂ 一八〇ノ一三
栗田山 ㊀ 六二四ノ二
石山 ㊀ 六二三ノ六
同 ㊃ 二三五ノ二
同 ㊃ 三〇九ノ二
一條 ㊀ 三二二ノ一二
泉河 ㊃ 一三〇ノ五
浮島 ㊃ 一六七ノ一
宇治 ㊂ 四三五ノ七
同 ㊂ 五一七ノ七
同 ㊃ 一三六ノ一二
同 ㊃ 二〇五ノ八
同 ㊃ 三三一ノ一〇
同 ㊃ 三六六ノ一
宇治山 ㊂ 四三六ノ五
打出の濱 ㊀ 六二四ノ二
大堰河 ㊁ 二ノ一一
大原野 ㊁ 三三五ノ六
小倉山 ㊂ 二五五ノ七
小野 ㊂ 二〇六ノ七
同 ㊃ 三七六ノ三
同 ㊃ 四五二ノ一
桂 ㊁ 一三ノ五
桂川 ㊁ 三二六ノ二
金の御崎 ㊁ 一五四ノ四
唐泊 ㊁ 一六四ノ五
川尻 ㊁ 一六四ノ五
北山 ㊀ 一六九ノ二
同 ㊀ 四六〇ノ一三
木幡山 ㊂ 四九八ノ一〇
同 ㊃ 二三四ノ九
京極 ㊀ 五九八ノ七
九條 ㊁ 一六六ノ六
栗栖野 ㊂ 二一二ノ一〇
黒谷 ㊃ 四二六ノ七
五條 ㊀ 一〇九ノ二
同 ㊁ 一九〇ノ四
嵯峨野 ㊁ 二六ノ一〇
同 ㊁ 五四四ノ九
三條 ㊃ 一九〇ノ三
須磨 ㊀ 四四五ノ二
同 ㊀ 四八〇ノ五
住吉 ㊂ 一五ノ四

窃に京に上る ㈡ 一六二ノ八
初瀬詣 ㈡ 一六六ノ六
右近と邂逅す ㈡ 一六九ノ一
容姿 ㈡ 一七七ノ四
優雅 ㈡ 一八〇ノ九
六條院に移る ㈡ 一八九ノ一一
源氏の訪問 ㈡ 二〇六ノ四
夕顔との比較 ㈡ 二三〇ノ八
方々よりの附文 ㈡ 二三〇ノ一三
夕顔との比較 ㈡ 二三七ノ七
煩悶 ㈡ 二四五ノ一
快活 ㈡ 二四六ノ七
源氏に物語の趣意を聞く ㈡ 二五九ノ四
源氏の和琴を聞く ㈡ 二七五ノ九
漸く源氏に接近す ㈡ 二九七ノ一
行幸見物 ㈡ 三二六ノ一一
源氏に入内を勸められる ㈡ 三三一ノ四
源氏の戀を聞く ㈡ 三三八ノ五
裳著祝 ㈡ 三四六ノ一〇
煩悶 ㈡ 三五九ノ一
源氏の評 ㈡ 三六七ノ六
柏木の訪問を受く ㈡ 三六九ノ四
懸想文集る ㈡ 三七四ノ二
髯黒と婚す ㈡ 三七七ノ一
悔恨 ㈡ 三七九ノ一〇
參內 ㈡ 四〇五ノ一一
男踏歌を見る ㈡ 四〇六ノ一〇
髯黒の邸に入る ㈡ 四一三ノ三
男子を生む ㈡ 四一九ノ一三
四十の賀に源氏を訪ふ ㈡ 五一一ノ二
夕霧と親む ㈢ 八ノ二
本性 ㈢ 八ノ三
螢兵部卿宮に對する心遣ひ ㈢ 一一ノ二
源氏の觀たる玉鬘 ㈢ 九五ノ三
髯黒死後の生活 ㈢ 三七六ノ三
大君を宮仕に出さんとす ㈢ 三七七ノ三
薫を愛す ㈢ 三七九ノ五
大君宮仕の事を夕霧に語る ㈢ 三八〇ノ九
中君に尙侍を讓る ㈢ 四一五ノ七
出家せんとして果さず ㈢ 四一七ノ四
薫に大君の事を訴ふ ㈢ 四二〇ノ一〇


## チ

素姓 ㊀ 二三一ノ一
源氏に逢ふ ㊀ 二四〇ノ一〇
羞恥 ㊀ 二四一ノ二
源氏の觀たる末摘花 ㊀ 二四六ノ九
容姿 ㊀ 二五三ノ九
源氏に衣服を贈る ㊀ 二五八ノ九
侘住居 ㊀ 五九五ノ一
著實 ㊀ 五九七ノ二
古風 ㊀ 六〇〇ノ九
羞恥 ㊀ 六〇二ノ二
叔母に筑紫下りを勸めらる ㊀ 六〇五ノ一〇
羞恥 ㊀ 六一七ノ三
源氏の觀たる末摘花 ㊀ 六一九ノ九
源氏の扶助を受く ㊀ 六二〇ノ二
から衣の歌 ㊂ 一九八ノ四
源氏の訪問 ㊂ 二一〇ノ三
玉鬘裳著祝の歌と贈物 ㊂ 三四八ノ二
古風 ㊂ 三四八ノ二

## セ

○攝政太政大臣
加冠の役を勤む ㊀ 二七ノ七
源氏を厚遇す ㊀ 三〇ノ三
同 ㊀ 二八〇ノ二
葵上歿後の悲痛 ㊀ 三六〇ノ四
悲歎、失意 ㊀ 四四八ノ一
攝政に任ぜらる ㊀ 五五六ノ九
薨去 ㊂ 四一ノ三

## タ

○大内記
匂宮に浮舟の事を語る ㊃ 二三一ノ四
匂宮を宇治に導く ㊃ 二三三ノ八
同 ㊃ 二五三ノ一
○大夫監
玉鬘を得んとす ㊂ 一五八ノ二
好色 ㊂ 一五八ノ三
粗野 ㊂ 一五九ノ一〇
○太宰大貳―舟中より源氏に消息す ㊀ 四八六ノ四
○玉鬘
素姓 ㊀ 六一ノ二
乳母と筑紫に下る ㊂ 一五一ノ一
田舍人の懸想 ㊂ 一五四ノ一〇
穩雅 ㊂ 一五六ノ二
大夫の監に迫らる ㊂ 一五八ノ二

同（宇治の大君）　㊂　五三七ノ三
感慨（源氏）　㊂　一四八ノ四
感懐（薫大將）　㊃　六四ノ一二
苦悶（女三宮）　㊂　六八ノ一三
後悔（薫大將）　㊃　三七ノ一一
自重（明石上）　㊀　五三二ノ一
嫉妬（雲井雁）　㊂　二五六ノ二
思慕（桐壺帝）　㊀　一八ノ一三
同（源氏）　㊀　二八〇ノ五
同（同）　㊀　四九〇ノ六
同（同）　㊀　五三七ノ二
同（同）　㊂　六一六ノ九
愁傷（薫大將）　㊃　三〇九ノ二
同（匂宮）　㊃　三一一ノ四
追慕（源氏）　㊁　四一四ノ三
取越苦勞（紫上）　㊁　七一ノ八
煩悶（空蟬）　㊀　八八ノ一三
同（六條御息所）　㊀　三三二ノ六
同（源氏）　㊀　四〇五ノ三
同（同）　㊁　二七九ノ七
同（同）　㊂　八八ノ九
同（藤壺）　㊀　四〇五ノ九
同（玉鬘）　㊁　二四五ノ三
同（同）　㊁　三五九ノ一
同（頭中將）　㊁　四四一ノ八
同（雲井雁）　㊁　四四七ノ四
同（夕霧）　㊁　四四七ノ一
同（紫上）　㊁　五二三ノ六
同（柏木）　㊁　二ノ一
同（同）　㊂　六八ノ三
同（同）　㊂　九三ノ二
同（同）　㊂　一一七ノ一
同（落葉宮）　㊂　二三八ノ一一
同（宇治の中宮）　㊂　五二ノ一
同（浮舟）　㊃　二四七ノ二
同（同）　㊃　二六一ノ七
同（同）　㊃　二九三ノ一
悲歎（源氏）　㊀　三五八ノ八
同（葵上父大臣）　㊀　三六一ノ二
同（落葉宮母御息所）　㊂　二三八ノ三
憂愁（宇治の姫君）　㊂　五八七ノ七
同（同）　㊂　五九六ノ六
憂悶（源氏）　㊂　五四ノ一一
離愁（源氏）　㊀　四四五ノ一
同（明石上）　㊀　五四六ノ一三
同（同）　㊁　六ノ一
戀慕（夕霧）　㊁　三〇九ノ四

## ス

○末摘花

| | | |
|---|---|---|
| 同 | ㊁ | 五三五ノ六 |
| 同 | ㊂ | 四ノ一 |
| 春の庭 | ㊁ | 一四二ノ七 |
| 同 | ㊁ | 二二〇ノ七 |
| 同 | ㊁ | 三二〇ノ八 |
| 同 | ㊁ | 五八四ノ二 |
| 同 | ㊂ | 一五二ノ一 |
| 同 | ㊂ | 三一九ノ一一 |
| 春の初 | ㊀ | 四二五ノ八 |
| 同 | ㊁ | 二〇九ノ一一 |
| 同 | ㊂ | 三〇ノ二 |
| 春の山 | ㊀ | 一八九ノ七 |
| 春の山里 | ㊂ | 四七八ノ一 |
| 春の山路 | ㊀ | 一七〇ノ五 |
| 春の夜 | ㊂ | 四三ノ一三 |
| 春の宵 | ㊁ | 二〇九ノ一一 |
| 藤の花 | ㊁ | 四五四ノ六 |
| 冬の朝 | ㊀ | 二二四ノ一一 |
| 同 | ㊂ | 二〇ノ一三 |
| 同 | ㊃ | 二四一ノ八 |
| 冬の庭 | ㊀ | 三三四ノ五 |
| 冬の初 | ㊂ | 一七ノ一〇 |
| 冬の山里 | ㊂ | 六一六ノ九 |
| 冬の夜 | ㊂ | 一九ノ一〇 |
| 暴風雨 | ㊀ | 四九八ノ一三 |
| 同 | ㊀ | 五〇六ノ一一 |
| 蟲の音 | ㊂ | 一九四ノ一〇 |
| 夜行 | ㊀ | 一五〇ノ六 |
| 山里 | ㊂ | 四四〇ノ九 |
| 山里の曉 | ㊂ | 五七二ノ二 |
| 山里の夕 | ㊂ | 二一〇ノ一〇 |
| 山里の夜 | ㊂ | 二一六ノ七 |
| 山の夜 | ㊀ | 一五〇ノ六 |
| 雪 | ㊀ | 二五六ノ三 |
| 同 | ㊃ | 二五三ノ二 |
| 夕顏 | ㊀ | 一一〇ノ九 |
| 同 | ㊀ | 一一〇ノ一三 |
| 雪の庭 | ㊀ | 二五三ノ一〇 |
| 同 | ㊁ | 八二ノ二 |
| 同 | ㊀ | 二五三ノ三 |
| 同 | ㊀ | 二五六ノ一三 |
| 夜の怪 | ㊀ | 一三七ノ六 |
| ○敍情文 | | |
| 哀傷（源氏） | ㊂ | 三〇七ノ二 |
| 同（同） | ㊂ | 三三二ノ六 |
| 同（同） | ㊂ | 三三三ノ二 |
| 同（同） | ㊂ | 三三三ノ六 |
| 悔恨（源氏） | ㊀ | 三四八ノ一 |
| 同（同） | ㊂ | 三一四ノ四 |
| 同（六條御息所） | ㊀ | 三五二ノ六 |
| 覺悟（紫上） | ㊁ | 五〇九ノ一〇 |

有明月　㈢　二八ノ三
荒庭　㈠　一〇ノ九
同　㈠　一三五ノ一
同　㈠　六一ノ八
宇治の山莊　㈢　四三五ノ九
宇治の冬　㈣　二五〇ノ三
海　㈠　四八二ノ四
海の荒れ　㈠　四九八ノ一三
大路　㈠　一一〇ノ二
岡邊の家　㈠　五三五ノ五
尾花　㈣　一〇五ノ一三
音樂　㈠　二七二ノ八
女の容姿と花　㈢　三六ノ二
篝火　㈡　二九八ノ九
櫻　㈠　三一四ノ一〇
五月雨　㈢　三二八ノ一〇
四季の庭園　㈡　一四二ノ七
時雨　㈠　三五五ノ二
新年　㈡　二〇一ノ一
深夜　㈠　一四二ノ七
同　㈠　一四三ノ一
霜月　㈠　六一一ノ九
須磨の浦　㈠　四七〇ノ三
同　㈠　四八四ノ三
同　㈠　四九〇ノ九
巷の朝　㈢　一二九ノ五
同　㈠　一三〇ノ二
同　㈣　二〇四ノ五
巷の家　㈠　一一七ノ三
月　㈠　五六ノ八
中川の宿　㈠　七二ノ五
夏の庭　㈡　一四四ノ一
夏の初　㈠　四四〇ノ六
同　㈠　四四二ノ一〇
同　㈠　六一二ノ八
同　㈡　二三八ノ五
夏の山里　㈢　二一〇ノ一〇
夏の夕　㈢　二四〇ノ六
野宮　㈠　三七九ノ一三
野分　㈡　三〇四ノ三
同　㈢　三〇四ノ九
同　㈡　三一〇ノ一一
敗邸　㈠　五九七ノ四
同　㈠　五九八ノ一三
同　㈠　六一三ノ一〇
同　㈢　二五五ノ八
蓮の花　㈢　三三二ノ六
同　㈢　八一ノ八
花の夕　㈢　三三ノ一一
濱の館　㈠　五一四ノ一一
春の暮　㈠　四五〇ノ一一

(中將) ㊀ 四一〇ノ六
まことや我ながら(源氏) ㊀ 五三八ノ一
まだなりあはぬ佛(薫) ㊃ 二〇八ノ七
自らも(夕霧) ㊂ 四〇三ノ二
自らも聞えまほしきを(葵上母) ㊀ 四五三ノ六
もてはなれたりし(源氏) ㊀ 一九七ノ五
山里の(中君) ㊃ 一〇五ノ七
行きはなれぬ(源氏) ㊀ 四〇九ノ二
ゆくての御事は(北山の尼) ㊀ 一九八ノ二
よべ大將殿の(横川僧都) ㊃ 四五四ノ三
よべ俄に(髯黒) ㊁ 三九二ノ七
昨夜参らむと(薫) ㊂ 五六五ノ一三
昨夜より(右近) ㊃ 二三六ノ八
萬に思ひ給へ(明石上) ㊀ 五六八ノ七
六條の大臣の(大宮) ㊁ 三三九ノ九

○敍景文

明石の浦 ㊀ 五二一ノ一二
曉 ㊀ 八三ノ八
同 ㊂ 五三四ノ三
秋の曉 ㊀ 三五〇ノ一二
同 ㊂ 四九二ノ一
秋の須磨 ㊀ 四八〇ノ五
秋の庭 ㊀ 一三〇ノ七
同 ㊁ 一四二ノ一〇
同 ㊁ 三〇三ノ一
同 ㊃ 一〇五ノ一二
秋の野 ㊀ 三七九ノ六
秋の廢院 ㊀ 一三二ノ九
秋の寺院 ㊀ 四〇八ノ四
秋の山里 ㊀ 六四二ノ八
同 ㊂ 二五〇ノ一
同 ㊂ 四四三ノ六
同 ㊂ 四八四ノ六
同 ㊂ 四九五ノ八
同 ㊃ 一〇二ノ一〇
同 ㊃ 三八四ノ五
秋の夕 ㊀ 一六〇ノ三
秋の夜 ㊀ 一五ノ四
同 ㊀ 五七ノ二
同 ㊀ 二四二ノ一
朝顏 ㊁ 六八ノ七
東遊 ㊂ 一七ノ二

御息所）　㊀　三五一ノ四
今日なむ都離れ侍る（源氏）　㊀　四六五ノ一
今日はいみじく（葵上母）　㊀　三七五ノ一
今朝こゝに（横川僧都）　㊃　四五六ノ三
今朝の雪に（源氏）　㊁　五二五ノ七
けざやかなりし（源氏）　㊁　六八ノ一〇
心のあくがるゝまでなむ（源氏）　㊀　五六七ノ四
この月の十四（明石入道）　㊁　五六四ノ一三
この年頃は（明石入道）　㊂　五六二ノ二
こよなう（源氏）　㊀　三五二ノ二
さらに聞えさせやり侍らず（王命婦）　㊀　四六五ノ二
更に聞えむ方なく（薫）　四六〇ノ二
知らせ給ふべき（末摘花）　㊁　三四九ノ五
その事となくて（朱雀院）　㊂　一〇一ノ一
その事と侍らでは（浮舟母）　㊃　一五六ノ七
只今の空の氣色を（匂宮）　㊂　四九六ノ九
年改りて（右近）　㊃　二一八ノ七
訪はせ給へるは（北山の尼）　㊀　二〇七ノ五
訪はせ給はぬも（源氏）　㊀　四六〇ノ二
なほ現とは（六條御息所）　㊀　四七六ノ七
猶おり給ひて（横川僧都妹）　㊃　三七七ノ八
春の野山（朱雀）　㊂　一六六ノ一三
春や來ぬるとも（源氏）　㊀　三七五ノ八
一日の御事は（中君）　㊃　六九ノ一三
一日の風に（柏木）　㊁　五九三ノ一〇
日頃おもく惱み（朱雀）　㊂　二四三ノ六
日頃少し（源氏）　㊀　三三五ノ一一
日頃何事か（薫）　㊃　一〇四ノ一〇
程經ばすこし（桐壺帝）　㊀　一一ノ一〇
紛るゝことなく

○精進落の饗宴 (二) 五四五ノ四
○消息文
あさましき事は (薫) (四) 三三一ノ二
葦垣の(近江君) (二) 二九三ノ九
あやしう(雲井雁) (三) 四〇二ノ一〇
如何なる事と (玉鬘) (三) 三九八ノ四
生けるかひなきや (源氏) (一) 一六二ノ八
いと覺束なさに (浮舟母) (四) 二九八ノ四
いとかたはらいたき(雲井雁) (三) 三九八ノ一
いと遙なる (太宰大貳) (一) 四八六ノ一〇
いともかしこきは (桐壺更衣母) (一) 一六ノ二
いともかしこきは (明石入道) (一) 五二七ノ八
寢ぬる夜に (浮舟母) (四) 二九四ノ一三
今はかぎりと (藏人少將) (三) 四〇三ノ九
今は限に(柏木) (三) 一一九ノ四
いみじき事に (浮舟母) (四) 三三二ノ一
院に覺束なり (源氏) (一) 三六〇ノ二
入らせ給ひにける (源氏) (一) 四一二ノ八
承り惱むを(空蟬) (一) 一六二ノ四
承りぬ(薫) (四) 七〇ノ二
うちつけなる樣 (薫) (三) 四六〇ノ二
幼き人の(朱雀) (三) 五二九ノ九
覺束なき月日 (源氏) (三) 四一七ノ一一
かへすがへす(源氏) (一) 五一六ノ七
かく旅の空に (源氏) (一) 四〇九ノ一
かく世を(源氏) (一) 四七七ノ一〇
數ならぬ身を (源氏) (一) 三三二ノ一三
桂に見ろべき事 (源氏) (三) 一三ノ五
聞えさせても (源氏) (一) 四一八ノ四
聞えさせまほしき事も(源氏) (一) 四五三ノ三
聞えぬ程は (六條

敏慧 ㈠ 三六九ノ八
同 ㈠ 五七八ノ七
娘を五節の舞姫に出す ㈡ 一三四ノ六

## サ

○櫻の宴 ㈠ 三〇五ノ一
○櫻の賭物 ㈢ 三九三ノ三
○左大臣（攝政太政大臣を見よ）

## シ

○試樂 ㈢ 一一〇ノ八
○式部卿宮（又兵部卿宮）
紫上を訪ふ ㈠ 二一五ノ二
失望、疑惑 ㈠ 二二六ノ二
髯黒の本妻を引取る ㈡ 三九六ノ三
名望 ㈢ 八ノ九
○四十の賀 ㈢ 五一一ノ六
同 ㈢ 五五〇ノ九
○朱雀院
行幸の準備 ㈠ 二四七ノ三
優柔 ㈠ 三九七ノ九
溫和 ㈠ 四一四ノ一〇
朧月夜を寵す ㈠ 四七八ノ一〇
夢に父帝の告を受く ㈠ 五二九ノ一〇
讓位の志 ㈠ 五五四ノ八
六條院御幸 ㈢ 四七一ノ四
御惱 ㈢ 四七八ノ一
女三宮の處置に苦心す ㈢ 四七八ノ五
女三宮を東宮に託す ㈢ 四七九ノ九
夕霧との懇談 ㈢ 四八一ノ二
女三宮を源氏に嫁せしめんとす ㈢ 四八六ノ一三
出家 ㈢ 五〇〇ノ一三
本性 ㈢ 五二八ノ四
西山に移る ㈢ 五二九ノ四
慈愛 ㈢ 五二九ノ四
五十の賀の準備 ㈢ 二三ノ五
女三宮を見舞ふ ㈢ 九九ノ六
慈愛 ㈢ 一〇〇ノ三
五十の賀 ㈢ 一一五ノ九
女三宮を見舞ふ ㈢ 一三〇ノ一
慈愛 ㈢ 一三〇ノ八
女三宮に筍野老を贈る ㈢ 一六六ノ六
落葉宮の出家を止む ㈢ 二六一ノ五

○弘徽殿女御(桐壺)—
重病 ㊀ 五五三ノ一
○弘徽殿女御(冷泉)
邪見 ㊀ 三七二ノ一〇
入内 ㊀ 五七三ノ一二
復讐心 ㊀ 三九五ノ一二
猜怨 ㊀ 四一六ノ五
猜疑 ㊀ 四三六ノ五
讒誣 ㊀ 四八八ノ九
復讐心 ㊀ 五五四ノ一
老後の性癖 ㊁ 一三八ノ一三
近江君への返事 ㊁ 二九四ノ一〇
○小君(空蟬弟)
素姓 ㊀ 七五ノ三
源氏の文を空蟬に通ず ㊀ 八四ノ五
源氏を中川に手引す ㊀ 九四ノ六
源氏を空蟬の室に手引す ㊀ 九八ノ一二
右衛門佐 ㊀ 六二四ノ一一
○小君(浮舟弟)—浮舟を訪ふ ㊃ 四五二ノ一三
○小宰相
薫との關係 ㊃ 三三五ノ一三
薫に浮舟の事を語る ㊃ 四三七ノ六
○小侍從
柏木に女三宮への媒介を迫らる ㊂ 五七ノ五
柏木を導きて女三宮に逢はす ㊂ 六一ノ九
柏木の文を女三宮に取次ぐ ㊂ 八四ノ六
祕密の露顯を柏木に告ぐ ㊂ 九二ノ六
柏木を訪ふ ㊂ 一二〇ノ七
○五十の賀 ㊂ 一一五ノ九
○五節の君—源氏に歌を贈る ㊀ 四八六ノ四
○惟光
源氏に夕顏の樣子を語る ㊀ 一一七ノ一一
夕顏の樣子を精探す ㊀ 一二四ノ四
忠實 ㊀ 一三五ノ一二
夕顏の屍を東山の寺に移す ㊀ 一四三ノ一〇
夕顏の屍を始末す ㊀ 一四八ノ五
北山に使す ㊀ 一九八ノ七
紫上に使す ㊀ 二一七ノ八

逢ふ ㊁ 四五六ノ七
夕霧の觀たる雲井雁 ㊁ 五八一ノ三
本性 ㊂ 四六ノ二
悋氣 ㊂ 一七六ノ八
落葉宮の文を奪ふ ㊂ 二三二ノ七
嫉妬 ㊂ 二三二ノ七
同 ㊂ 二五五ノ七
同 ㊂ 二七二ノ六
夕霧の觀たる雲井雁 ㊂ 二八一ノ二
怒りて父の邸に歸る ㊂ 二八一ノ六
○藏人少將
大君を戀ふ ㊂ 三七八ノ四
大君を垣間見す ㊂ 三九三ノ三
大君の宮仕を歎く ㊂ 三九七ノ五
同 ㊂ 四〇三ノ八
中君に心なし ㊂ 四〇六ノ三
男踏歌に出づ ㊂ 四一〇ノ七
三位中將に任ぜらる ㊂ 四二〇ノ一
宰相に任ぜらる ㊂ 四二〇ノ二
玉鬘を訪ふ ㊂ 四二四ノ九

ケ

○懸想文 ㊁ 三七四ノ二
○源氏君（光源氏を見よ）
○蹴鞠の會 ㊁ 五八二ノ九
○源内侍
源氏頭中將等との關係 ㊀ 二九二ノ二
好色 ㊀ 二九二ノ七
輕浮 ㊀ 三三〇ノ二
祭に源氏と歌の贈答 ㊀ 三三〇ノ三
尼になりて源氏に邂逅す ㊁ 一七六ノ二

コ

○紅梅右大臣
源氏に近江君の事を語る ㊁ 二七〇ノ九
妻子 ㊂ 三五九ノ一
大君を東宮に參らす ㊂ 三六〇ノ八
宮の君に琵琶を彈かしむ ㊂ 三六二ノ八
右大臣に任ぜらる ㊂ 四二〇ノ一〇
大饗 ㊂ 四二三ノ九
○木枯の女 ㊀ 五六ノ一

空蟬の事を源氏に語る　㈠　七五ノ四
○衣配り　㈡　一九五ノ六
○今上
元服　㈡　四三三ノ五
卽位　㈢　三ノ一〇
大君の冷泉に仕へたるを嫉む　㈢　四〇八ノ六
薰を女二宮の聟にせんとす　㈣　二八ノ四
圍碁に託して其意をほのめかす　㈣　二九ノ七
快決　㈣　一二四ノ三
○桐壺帝
桐壺更衣の寵愛　㈠　一ノ一
源氏の寵愛　㈠　二ノ三
更衣の死を悲む　㈠　八ノ七
靫負命婦をして更衣の母を訪はしむ　㈠　一〇ノ二
更衣思慕の情愈切なり　㈠　二〇ノ二
相人の說を聞く　㈠　三ノ三
藤壺入內　㈠　二四ノ二
朱雀院行幸　㈠　二七三ノ一
讓位　㈠　三一九ノ一
重病　㈠　三八九ノ一〇
崩御　㈠　三九二ノ五
○桐壺更衣
桐壺帝の殊寵を受く　㈠　一ノ一
源氏を生む　㈠　二ノ一三
寵遇愈加はる　㈠　三ノ四
后妃の嫉妬を受く　㈠　四ノ一
病の爲に里に下る　㈠　六ノ
逝去　㈠　七ノ三
葬式　㈠　八ノ七
三位を贈らる　㈠　九ノ一
○桐壺更衣母
更衣の葬式　㈠　八ノ七
靫負命婦との對面　㈠　一〇ノ一〇
逝去　㈠　二一ノ二

## ク

○雲井雁
素姓　㈢　一〇三ノ二
幼き悲み　㈢　一一五ノ一
頭中將の教訓を受く　㈢　二八三ノ四
夕霧との關係　㈢　四四一ノ八
久し振にて夕霧に

小野に浮舟を訪はんとす ㊃ 四四二ノ一
横川僧都に浮舟の事を聞く ㊃ 四四三ノ一
小君をして浮舟を訪はしむ ㊃ 四五二ノ一三
○柏木大納言
玉鬘に文を贈る ㊁ 二三二ノ一
父の使として玉鬘を訪ふ ㊁ 三六九ノ四
朱雀帝の觀たる柏木 ㊁ 四九四ノ八
女三宮に對する戀 ㊁ 五八一ノ九
女三宮を垣間見る ㊁ 五八五ノ二
女三宮に文を贈る ㊁ 五九三ノ一
自尊 ㊁ 五九三ノ一
煩悶 ㊂ 一ノ一
東宮に猫の話をなす ㊂ 五ノ三
女三宮の猫を得て寵愛す ㊂ 六ノ四
落葉宮を娶る ㊂ 五七ノ五
女三宮を慕ひて小侍從に謀る ㊂ 五八ノ三
密に女三宮に逢ふ ㊂ 六一ノ九
煩悶 ㊂ 六八ノ三
悔恨 ㊂ 七〇ノ二
女三宮に文を贈る ㊂ 八四ノ七
源氏の觀たる柏木 ㊂ 八九ノ二
露顯後の煩悶 ㊂ 九二ノ六
源氏との疎隔 ㊂ 一〇四ノ八
試樂の事務を執行す ㊂ 一〇五ノ一〇
病重る ㊂ 一一三ノ九
重態、煩悶 ㊂ 一一七ノ一
女三宮に文を贈る ㊂ 一一九ノ四
小侍從と語る ㊂ 一二〇ノ七
危篤 ㊂ 一三五ノ一三
權大納言に任ぜらる ㊂ 一三七ノ五
後事を夕霧に託す ㊂ 一三七ノ八
逝去 ㊂ 一四三ノ七
夕霧の觀たる柏木 ㊂ 一五〇ノ六
本性 ㊂ 一六三ノ一
○管絃の遊 ㊁ 二二四ノ二
○賀茂祭 ㊀ 三三二ノ五

## キ

○紀伊守
源氏の宿を命ぜらる ㊀ 七一ノ五

辨の尼に浮舟の事を聞く ④ 九八ノ一〇
蔦紅葉を中君に贈る ④ 一〇四ノ六
女二宮との婚期近づく ④ 一一〇ノ五
權大納言に進む ④ 一一〇ノ三
女二宮と婚す ④ 一一四ノ八
中君を訪ひて赤兒を見る ④ 一一七ノ一
天盃を賜はる ④ 一三一ノ一
宇治に行く ④ 一三六ノ二
浮舟を隙見す ④ 一三八ノ一
異性に對する性質 ④ 一三一ノ七
中君の觀たる薰 ④ 一六五ノ五
中君を訪ひて浮舟の事を聞く ④ 一六七ノ二
辨の尼に浮舟を媒せん事を頼む ④ 一九一ノ一〇
浮舟母の觀たる薰 ④ 一九四ノ七
宇治に行く ④ 一九六ノ一
浮舟を訪ふ ④ 二〇一ノ三
浮舟を宇治に伴ふ ④ 二〇五ノ八
なほ中君に情あり ④ 二一五ノ一
匂宮を見舞ふ ④ 二四五ノ五
浮舟への愛情 ④ 二四六ノ二
異性に對する性質 ④ 二四七ノ七
宮中の詩會 ④ 二五一ノ六
侍女の觀たる薰 ④ 二六二ノ一〇
浮舟引取の準備 ④ 二六四ノ八
匂宮と浮舟との關係を悟る ④ 二七二ノ五
宇治山荘を警固せしむ ④ 二八三ノ三
浮舟の死を悲む ④ 三〇九ノ二
匂宮を訪ひて浮舟の事を語る ④ 三一二ノ一
宇治に行きて浮舟の祕密を聞く ④ 三二三ノ三
浮舟の母を慰む ④ 三三〇ノ一〇
小宰相との關係 ④ 三三五ノ三
女一宮を隙見す ④ 三三八ノ一
女二宮を女一宮に親ましめんとす ④ 三四二ノ五
明石中宮に參る ④ 三四四ノ一
異性に對する性質 ④ 三四九ノ三
④ 三五三ノ五
和琴を彈く ④ 三五八ノ一三
宮の君を訪ふ ④ 三六〇ノ五
浮舟の噂を聞く ④ 四三七ノ六
憐愍 ④ 四三七ノ六

大君姉妹を隙見す　㊂　五一七ノ二
大君の靡かぬを恨む　㊂　五二一ノ一
異性に對する性質　㊂　五二八ノ三
大君に情を訴ふ　㊂　五二九ノ二
大君に迫る　㊂　五四六ノ五
匂宮と宇治行を約す　㊂　五五三ノ一
匂宮と宇治に行く　㊂　五五六ノ一
匂宮を中君に逢はす　㊂　五五八ノ一
匂宮と宇治に行く　㊂　五七五ノ一〇
なほ大君に對する
　戀を遂げず　㊂　五七七ノ三
苦心　㊂　五七八ノ一二
後悔　㊂　五九〇ノ六
大君の病を訪ふ　㊂　五九四ノ一
同　㊂　六〇一ノ三
大君を看護す　㊂　六〇九ノ三
宇治に籠居す　㊂　六一四ノ九
京に歸らんとす　㊂　六二三ノ一二
匂宮と中君の事を語る　㊃　五ノ二
厚情　㊃　九ノ一
中君と語る　㊃　九ノ六
辨の尼と語る　㊃　一二ノ九
二條院に中君を訪ふ　㊃　二三ノ八
今上の觀たる薫　㊃　二九ノ二
女二宮に意なし　㊃　二九ノ七
なほ大君を慕ふ　㊃　三四ノ三
異性に對する性質　㊃　三四ノ三
煩悶　㊃　三七ノ一二
中君を想ふ　㊃　三九ノ六
異性に對する性質　㊃　四〇ノ一
中君を訪ふ　㊃　四一ノ一
孝情　㊃　四九ノ一二
夕霧方の三つ目祝に參會　㊃　六一ノ六
按察の君の局に宿す　㊃　六五ノ一〇
異性に對する性質　㊃　六六ノ九
中君に戀情を訴ふ　㊃　七一ノ三
自制　㊃　七五ノ一二
中君に衣類を贈る　㊃　八三ノ七
中君に情を訴ふ　㊃　八七ノ一
中君に浮舟の事を聞く　㊃　九二ノ三
宇治の山莊に行く　㊃　九五ノ一二
寢殿を寺に改造せんとす　㊃　九七ノ三

冷泉院の厚遇 ㊂ 三四七ノ二
女三と柏木との間を疑ふ ㊂ 三四八ノ六
源氏との比較 ㊂ 三四九ノ一三
自負 ㊂ 三五〇ノ一〇
人品 ㊂ 三五〇ノ一二
深慮 ㊂ 三五一ノ一
薫中將の名 ㊂ 三五一ノ二
異性に對する性質 ㊂ 三五四ノ五
沈著 ㊂ 三五五ノ一
女一宮を思ふ ㊂ 三五五ノ二
異性に對する性質 ㊂ 三五五ノ一〇
玉鬘に愛せらる ㊂ 三七九ノ五
老成 ㊂ 三七九ノ六
玉鬘を訪ふ ㊂ 三八二ノ一二
玉鬘方の人々に睦じ ㊂ 三八五ノ一二
大君に對する淡き戀 ㊂ 四〇五ノ一二
冷泉院に召さる ㊂ 四一一ノ九
宰相中將に任ぜらる ㊂ 四一九ノ九
中納言に任ぜらる ㊂ 四二〇ノ一二
玉鬘の愚痴を聞く ㊂ 四二一ノ一
宇治宮の噂を聞く ㊂ 四三七ノ一
宇治宮に交を求む ㊂ 四三九ノ五
宇治宮を愛慕す ㊂ 四四〇ノ九
宇治の山荘を訪ふ ㊂ 四四三ノ一
姫君達を隙見す ㊂ 四四四ノ四
辨の君に逢ふ ㊂ 四五一ノ九
宇治宮父子に文を贈る ㊂ 四五八ノ一〇
匂宮に宇治の姫君の事を語る ㊂ 四六一ノ六
宇治宮を訪ふ ㊂ 四六四ノ一
身の上の祕密を聞く ㊂ 四六六ノ一二
柏木の形見の文を受取る ㊂ 四六九ノ一二
柏木の形見の文を見る ㊂ 四七〇ノ一二
中納言に任ぜらる ㊂ 四八四ノ一
宇治宮の姫君を託せらる ㊂ 四八四ノ一
異性に對する性質 ㊂ [illegible]ノ八
宇治宮逝去後の世話 ㊂ 四九四ノ八
宇治の山荘を訪ふ ㊂ 五〇〇ノ四
中君を匂宮に媒せんとす ㊂ 五〇八ノ一〇
大君に戀を打明く ㊂ 五一二ノ一

容姿 ㊃ 三四〇ノ一
女二宮との交際 ㊃ 三四八ノ八
○女五宮
源氏の訪問を受く ㊂ 六三ノ一
槿の前齋院を訪く ㊂ 九一ノ五
○女三宮
素姓 ㊂ 四七八ノ五
聟の候補者の樣々 ㊂ 四九五ノ三
裳著の祝 ㊂ 四九九ノ二
源氏に嫁す ㊂ 五一七ノ九
源氏の觀たる女三宮 ㊂ 五一九ノ一
嬌稚 ㊂ 五二七ノ三
容姿 ㊂ 五八五ノ三
源氏に琴を習ふ ㊂ 二六ノ八
嬌稚 ㊂ 二九ノ九
容姿 ㊂ 三六ノ二
夕霧の觀たる女三宮 ㊂ 三八ノ四
柏木に逢ふ ㊂ 六一ノ九
苦悶 ㊂ 六八ノ三
病氣 ㊂ 六九ノ五
懷胎 ㊂ 八〇ノ四
源氏の觀たる女三宮 ㊂ 八七ノ三
同 ㊂ 九四ノ九
源氏の教訓を受く ㊂ 一〇〇ノ二
薫を生む ㊂ 一二五ノ二
出家を望む ㊂ 一二八ノ九
朱雀院に對面 ㊂ 一三〇ノ一
出家 ㊂ 一三一ノ九
持佛供養 ㊂ 一八七ノ一
尼生活 ㊂ 一九三ノ八
源氏の訪問 ㊂ 三三三ノ五
源氏死後の生活 ㊂ 三四八ノ一
○女二宮
藤壺女御にかしづかる ㊃ 二五ノ一
母女御に死別す ㊃ 二六ノ三
沈著 ㊃ 二七ノ九
薫に定まらんとす ㊃ 三四ノ三
薫と婚す ㊃ 一二四ノ八
三條邸に移る ㊃ 一二五ノ三
女一宮との交際 ㊃ 三四八ノ八

## カ、クヮ

○薫大將
誕生 ㊂ 一二五ノ二
五十日の祝 ㊂ 一四四ノ七
筍を嚙る ㊂ 一六八ノ六
人品 ㊂ 三四三ノ三

夕霧に笛を贈る ㊂ 一七四ノ二
小野の山莊に移る ㊂ 二〇六ノ一
加持の僧に夕霧の事を聞く ㊂ 二二四ノ二
夕霧と落葉宮との仲を推測す ㊂ 二二六ノ三
愁歎 ㊂ 二三九ノ三
逝去、送葬 ㊂ 二四二ノ四
○男踏歌 ㊁ 二一六ノ一
同 ㊂ 四一〇ノ七
○朧月夜內侍
源氏と邂逅す ㊀ 三〇七ノ八
源氏の觀たる朧月夜 ㊀ 三一八ノ七
尙侍になる ㊀ 三九四ノ一〇
本性 ㊀ 三九八ノ五
源氏との密通露顯す ㊀ 四三二ノ八
再び朱雀帝に寵せらる ㊀ 四七八ノ一〇
紫上の評 ㊁ 八五ノ二
二條院に移る ㊁ 五三〇ノ八
源氏に逢ふ ㊁ 五三三ノ三
尼となる ㊂ 九五ノ二
○音樂、音樂者論 ㊂ 三八ノ九
○女
內氣なる女 ㊀ 六〇ノ三
浮氣女 ㊀ 五六ノ一
女の子 ㊂ 八五ノ九
面白き女よりは眞面目なる女 ㊀ 四七ノ三
下品の女子 ㊀ 四四〇ノ九
賢女顏する女 ㊀ 六四ノ六
嫉妬 ㊀ 四六ノ二
嫉妬深き女 ㊀ 四九ノ一〇
中品の女子 ㊀ 三九ノ五
主婦の資格 ㊀ 四一ノ九
上品の女子 ㊀ 四〇ノ五
女子の才色 ㊀ 三七ノ五
女子の三等 ㊀ 三八ノ五
女子論 ㊀ 六八ノ八
思慮過ぐる女 ㊀ 四五ノ二
身の處置 ㊁ 四九一ノ九
同 ㊂ 二五八ノ一〇
聟えらみ ㊁ 四九三ノ七
容姿と花 ㊁ 三〇六ノ三
同 ㊁ 三一九ノ七
同 ㊁ 三三三ノ五
同 ㊂ 三六ノ二
○女樂 ㊂ 二八ノ一〇
○女一宮

○大君（玉鬘女）
中君と圍碁　㊂三九〇ノ七
冷泉院に宮仕の事定まる　㊂三九七ノ五
冷泉院に參る　㊂四〇二ノ七
懷胎　㊂四一〇ノ一
女一宮を産む　㊂四一五ノ一
冷泉院の殊寵　㊂四一八ノ四
○大君（宇治宮女）
薫と應答す　㊂四五〇ノ一〇
匂宮への返事　㊂四九六ノ一
心細き宇治の住居　㊂五〇五ノ八
薫の戀を斥く　㊂五二九ノ一一
中君に薫に嫁せん事を勸む　㊂五三九ノ一一
逃れて薫に逢はず　㊂五四六ノ五
憂愁　㊂五八七ノ七
病氣　㊂五九四ノ一
憂愁　㊂五九六ノ六
病篤し　㊂六〇一ノ三
出家の望　㊂六〇八ノ三
逝去　㊂六〇九ノ一一
○大原野行幸　㊁三一五ノ六
○近江君
源氏其他の人々の噂に上る　㊁二六九ノ一
容姿、擧動　㊁二八六ノ五
浮躁　㊁二八七ノ九
粗野　㊁二九二ノ八
弘徽殿女御に文を贈る　㊁二九三ノ五
尙侍を望みて嘲弄せらる　㊁三五三ノ一三
夕霧を戀ひて歌を詠みかく　㊁四二〇ノ九
浮躁　㊁四二一ノ四
○落葉宮
柏木に嫁す　㊂五七ノ五
柏木との別を悲む　㊂一一三ノ二
柏木との死別の悲歎　㊂一四三ノ八
小野の山莊に移る　㊂二〇五ノ一
夕霧の戀を聞く　㊂二〇九ノ二
夕霧の仕打を怨む　㊂二二三ノ三
痛からぬ腹を探らるゝ煩悶　㊂二二八ノ一
悲歎　㊂二四七ノ二
一條邸に歸る　㊂二六三ノ三
夕霧を拒む　㊂二六八ノ八
六條院に移る　㊂三四五ノ五
○落葉宮母御息所

○宇治宮
寂しき生活 ㊂ 四二七ノ一
二女を育む ㊂ 四二八ノ三
志想高尙 ㊂ 四二八ノ九
やもめ暮し ㊂ 四三〇ノ四
二女に琵琶琴を敎ふ ㊂ 四三一ノ六
沈著 ㊂ 四三二ノ八
經歷 ㊂ 四三四ノ五
本性 ㊂ 四三四ノ五
宇治の山莊に移る ㊂ 四三五ノ六
宇治の阿闍梨に親む ㊂ 四三六ノ三
謹愼 ㊂ 四八二ノ七
姫君達の處置を憂ふ ㊂ 四八二ノ九
姫君達を薰に託す ㊂ 四八四ノ一
山籠せんとて姫君を訓誡す ㊂ 四八八ノ七
逝去 ㊂ 四九一ノ三
薰の觀たる大君 ㊂ 五一二ノ二
一周忌の用意 ㊂ 五二一ノ一
深慮 ㊂ 五三七ノ三
○空蟬
素姓 ㊀ 七五ノ七
源氏を避く ㊀ 八七ノ九
容儀 ㊀ 九八ノ一
再び源氏を避く ㊀ 一〇〇ノ五
源氏の觀たる空蟬 ㊀ 一一九ノ四
源氏との音信 ㊀ 一六一ノ一二
夫と共に伊豫に下る ㊀ 一六六ノ三
源氏の觀たる空蟬 ㊀ 二五八ノ六
夫に隨ひて上京す ㊀ 六二三ノ一
夫を喪ひて出家す ㊀ 六二八ノ二
源氏の訪問 ㊁ 二二四ノ三
○產養〔ウブヤシナヒ〕 ㊃ 一一三ノ三
○馬頭〔ウマノカミ〕
女子論 ㊀ 三九ノ五
主婦論 ㊀ 四一ノ九
思慮過ぐる女の話 ㊀ 四五ノ二
嫉妬深き女の話 ㊀ 四九ノ一〇
浮氣女の話 ㊀ 五六ノ一
女子論 ㊀ 六八ノ八

## エ、ヱ

○繪合 ㊀ 六四一ノ一
同 ㊀ 六四六ノ八
○繪物語 ㊁ 二五九ノ四

## オ、ヲ

煩悶　㊃　二六一ノ四
自殺を企つ　㊃　二六九ノ七
薫の觀たる浮舟　㊃　二七七ノ二
侍女等の憂慮　㊃　二七八ノ三
死を決して文を燒き棄つ　㊃　二八五ノ五
自殺の念愈切なり　㊃　二九三ノ一
死後の宇治邸の周章　㊃　二九七ノ一
橫川僧都に救はる　㊃　三六七ノ四
蘇生　㊃　三七七ノ六
素姓を隱す　㊃　三八二ノ八
中將に挑まる　㊃　四〇五ノ九
感懷　㊃　四一〇ノ七
出家　㊃　四一二ノ七
薫の噂を聞く　㊃　四三二ノ二
薫の使弟小君に逢はず　㊃　四五四ノ二
○浮舟母
浮舟をかしづく　㊃　一三八ノ四
少將を浮舟の聟にせんとす　㊃　一三九ノ三
憂悶　㊃　一五一ノ三
匂宮を隙見す　㊃　一六〇ノ五
中君に浮舟の處置を諜る　㊃　一六四ノ六
薫を隙見す　㊃　一六七ノ二
少將を隙見す　㊃　一九一ノ八
少將に歌を贈る　㊃　一九二ノ三
浮舟をもてあます　㊃　一九四ノ五
浮舟を慰む　㊃　一九五ノ八
浮舟を訪ふ　㊃　二六六ノ五
浮舟に文を贈る　㊃　二九四ノ三
悲歎　㊃　三〇四ノ二
○右近（夕顔侍女）
夕顔に供して河原院に到る　㊀　一三二ノ八
二條院に到る　㊀　一四四ノ九
源氏に夕顔の素姓を語る　㊀　一五六ノ二
玉鬘と邂逅す　㊂　一六九ノ一
源氏に玉鬘の事を告ぐ　㊂　一八一ノ七
○右近（浮舟侍女）
浮舟の祕密を心配す　㊃　二七八ノ三
浮舟の死を悲む　㊃　二九八ノ八
匂宮に招かる　㊃　三一八ノ三
薫に浮舟の祕密を明す　㊃　三三三ノ三
○右大臣（二條太政大臣を見よ）

- 源氏四十の賀に祈禱を行はしむ ㊂ 五四九ノ五
- 源氏に出家の望を語る ㊂ 二〇〇ノ六
- 源氏を慰問す ㊂ 三〇九ノ一〇

○槿齋院
- 源氏と文の贈答 ㊀ 三五七ノ三
- 齋院になる ㊀ 三九七ノ三
- 源氏の戀を拒む ㊁ 六六ノ四
- 源氏の評 ㊁ 八四ノ三
- 源氏の觀たる槿齋院 ㊂ 九七ノ一〇

○字つくろ式 ㊁ 九五ノ六

○雨夜の品定
- 品定 ㊀ 三四ノ六
- 頭中將の女子論 ㊀ 三七ノ五
- 頭中將の女子三等說 ㊀ 三八ノ五
- 左馬頭の女子論 ㊀ 三九ノ五
- 思慮過ぐる女の話 ㊀ 四五ノ二
- 嫉妬深き女の話 ㊀ 四九ノ一〇
- 浮氣女の話 ㊀ 五六ノ一
- 內氣なる女の話 ㊀ 六〇ノ三
- 藤式部丞の實驗談 ㊀ 六四ノ六
- 馬頭の結論 ㊀ 六八ノ八

○合せ香 ㊂ 四三五ノ三

## イ、ヰ

○韻塞の遊び ㊀ 四二九ノ二

○伊豫介―上京 ㊀ 一一九ノ一〇

## ウ

○浮舟
- 素姓 ㊃ 九八ノ一〇
- 宇治に宿す ㊃ 一三八ノ一
- 二條院に預けらる ㊃ 一五六ノ五
- 匂宮に迫らる ㊃ 一七五ノ二
- 乳母に慰めらる ㊃ 一八一ノ七
- 中君に慰めらる ㊃ 一八三ノ八
- 柔和 ㊃ 一八五ノ九
- 三條の別宅に隱さる ㊃ 一八八ノ六
- 三條の侘住居 ㊃ 一九五ノ八
- 宇治にて薰の世話を受く ㊃ 二〇五ノ八
- 羞恥 ㊃ 二一〇ノ七
- 謀られて匂宮に逢ふ ㊃ 二三〇ノ五
- 異性に對する性質 ㊃ 二三五ノ七
- 同 ㊃ 二三七ノ六
- 薄志 ㊃ 二四七ノ二
- 匂宮に連れ出さる ㊃ 二五三ノ一

紫上との仲合 ㊁ 五六〇ノ九
謙遜 ㊁ 五六〇ノ九
父入道の消息 ㊁ 五六二ノ二
姫君に入道の文を示す ㊁ 五七〇ノ三
住吉詣 ㊂ 一七ノ一
女三宮方にて音樂、㊂ 二八ノ一〇
容姿 ㊂ 三七ノ五
源氏の觀たる明石上 ㊂ 五一ノ九
紫上の觀たる明石上 ㊂ 五一ノ三
源氏の訪問 ㊂ 三三ノ一〇
○明石入道
素姓、人物 ㊀ 一七二ノ二
本性 ㊀ 一七三ノ九
娘を源氏に奉らんとす ㊀ 四九二ノ三
氣位 ㊀ 四九二ノ六
源氏を明石に迎ふ ㊀ 五一一ノ四
娘を奉らんと焦慮す ㊀ 五一七ノ五
氣位 ㊀ 五二〇ノ二
大堰の邸を修理す ㊁ 二ノ三
隱遁、京への文 ㊁ 五六一ノ五
○明石姫君
五十日の祝 ㊀ 五六六ノ八
紫上の養女となる ㊁ 三二ノ五
明石上と歌の贈答 ㊁ 二〇三ノ五
裳著の式 ㊁ 四三二ノ四
入内 ㊁ 四六三ノ一
懷胎、六條院へ退出 ㊁ 五三九ノ七
產期近づく ㊁ 五五三ノ一三
祖母より昔話を聞く ㊁ 五五四ノ九
自省 ㊁ 五五五ノ八
女三宮方にて音樂 ㊂ 二八ノ一〇
容姿 ㊂ 三六ノ六
紫上の病にて二條院に下る ㊂ 二九五ノ二
宮の君を引取る ㊃ 三五一ノ九
○秋好中宮
入内 ㊀ 六三一ノ一
冷泉帝の觀たる秋好 ㊀ 六三六ノ六
沈著 ㊀ 六三七ノ六
春秋の優劣を語る ㊁ 五八ノ七
中宮となる ㊁ 一〇二ノ一
季の御讀經をはじむ ㊁ 二二六ノ四
源氏の評 ㊁ 三一五ノ二

# 源氏物語 總索引

## ア


○葵上
源氏に嫁す　㊀　三〇ノ一三
源氏との仲疎し　㊀　一九四ノ一二
氣位　㊀　一九五ノ九
源氏の觀たる葵上　㊀　二七五ノ一
氣位　㊀　二八〇ノ一二
同　㊀　二八一ノ七
本性　㊀　三一三ノ六
六條御息所との車爭ひ　㊀　三三二ノ五
貫目　㊀　三二八ノ二
六條御息所の靈に惱さる　㊀　三三三ノ四
夕霧を生む　㊀　三三八ノ七
逝去　㊀　三四三ノ七
源氏の觀たる葵上　㊂　五〇ノ四
○明石尼君
明石姫君に舊事を語る　㊁　五五三ノ一三
住吉詣　㊂　一七ノ一
○明石上
素姓　㊀　一七二ノ一二
本性　㊀　四九三ノ一三
源氏と文の贈答　㊀　五二六ノ九
自重　㊀　五三二ノ一
深慮　㊀　五二八ノ五
自重　㊀　五二九ノ四
同　㊀　五三二ノ三
源氏に逢ふ　㊀　五三五ノ三
自重　㊀　五三五ノ一〇
源氏の觀たる明石上　㊀　五四二ノ一
源氏との別れを悲む　㊀　五四四ノ六
明石姫君を生む　㊀　五五八ノ八
住吉參詣　㊀　五七四ノ三
深慮　㊁　二ノ三
大堰の邸に移る　㊁　五ノ七
明石姫を紫上の養女とす　㊁　二七ノ一
自重　㊁　四一ノ五
源氏の評　㊁　八五ノ八
明石姫と歌の贈答　㊁　二〇三ノ五
源氏の訪問　㊁　二〇七ノ六
姫君入内につきて宮中に入る　㊁　四六三ノ一
紫上との初對面　㊁　四六四ノ七

# 總索引

一・二・三・四の四卷に涉り、主要の事物・人名・地名・名文佳句・消息・和歌等を採り、發音に從ひて五十音順に排列す。但人物中の細目は主としてその人の一生の徑路に關するを以て、特に頁順の排列に依れり。

○常陸宮——末摘花（源氏）

○三位中將某——夕顏（頭中將　源氏）——玉鬘

○太宰大貳某——五節君（源氏）

○大臣某——麗景殿女御（桐壺院）
　　　　　花散里（源氏）

○左大臣某
- 髯黑
  - 眞木柱（式部卿宮女）
    螢兵部卿宮　紅梅
  - 冷泉院女御（玉鬘）
- 承香殿女御
  朱雀院
  - 今上

○大臣某
- 明石入道
  - 明石上（中務卿宮孫女）
    源氏
- 按察大納言
  - 桐壺更衣
    桐壺院
    - 源氏
  - 紫上母
    式部卿宮

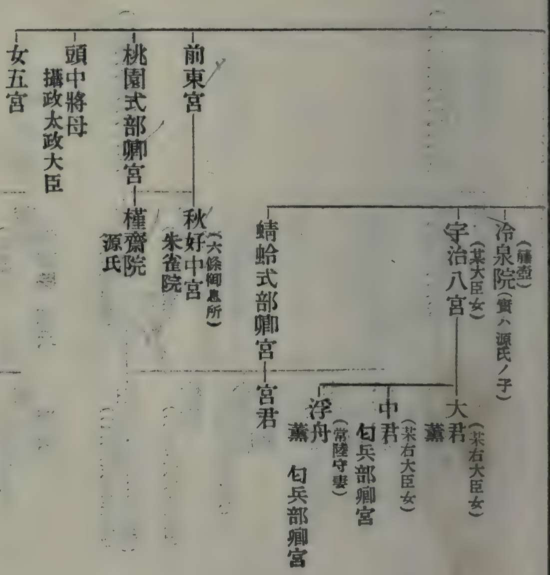
○大臣某
- 六條御息所
  前東宮　源氏

○右衛門督某
- 空蟬
  伊豫介　源氏
  ……軒端荻
  藏人少將　源氏
- 小君

○桐壺ノ前ノ帝
- 式部卿宮
  - 髯黑ノ先妻
  - 紫上（按察大納言女）　源氏
- 藤壺（某后）　桐壺院　源氏

○攝政太政大臣
- 頭中將（太上天皇妹）
  - 柏木……（薫）（二條太政大臣四君）
  - 紅梅（二條太政大臣四君）
  - 雲井雁（按察大納言妻）　夕霧
  - 玉鬘（夕顔）　髯黑
  - 近江君
- 葵上（太上天皇妹）　源氏

○二條太政大臣
- 弘徽殿大后
  - 朱雀院
- 朧月夜　朱雀院　源氏


冷泉院（藤壺）（實ハ源氏ノ子）
宇治八宮（某大臣女）
蜻蛉式部卿宮
宮君
大君（某右大臣女）
薫
中君（某右大臣女）
匂兵部卿宮
浮舟（常陸守妻）
薫
匂兵部卿宮
前東宮
秋好中宮（六條御息所）
朱雀院
桃園式部卿宮
槿齋院
源氏
頭中將母
攝政太政大臣
女五宮

- ○桐壺院
  - 朱雀院（弘徽殿大后）
    - 今上（髯黒妹）
      - 東宮（明石中宮）
      - 匂兵部卿宮（明石中宮）
      - 女一宮（明石中宮）
      - 女二宮（藤壺女御）　薫
    - 落葉宮（某更衣）　夕霧
    - 女三宮（先帝源氏宮）　源氏　柏木
  - 源氏（桐壺更衣）
    - 夕霧（葵上）
      - 東宮女御（雲井雁）
      - 六君（惟光女）　匂兵部卿宮
    - …（冷泉院）
    - 薫（女三宮）（實ハ柏木ノ子）
    - 明石中宮（明石上）　今上
  - 螢兵部卿宮

# 略系圖

この系圖は、編中の重なる人々の親族關係を明らかにして讀者に便せんことを目的としたるもの故、重要ならざる人物は省きて載せず。又重要なる人物にても、その關係の極めて簡單なるものは、亦省きて載せず。

舊き注釋書には藤壺女御を後に薄雲女院と呼び、頭中將を後に致仕大臣と名け、系圖にも後の呼名を擧げたれど今は何れもはじめより呼びなれたる名稱を用ひたり。

人名の右傍括孤中に記したるは母の名にして、婦人の名の左傍に記したるは關係ある男の重なるものの名なり。

予が本書の注譯に筆を執りそめしは昨大正二年の一月十六日にして、稿を終へしは今年の六月廿五日なり。この間凡一年有半の歳月をば經たれど、素より公務の餘暇の夜なべ仕事、出來ばえのはかゞ〵しからぬは我ながらもどかし。他日折もあらば修訂を加へて少しにても完全に近づかしめんことを力むべし。
本文の異同校讐につきては羽倉信一氏の手を借れること多く、校正につきては椿强祐氏を煩はしたり。稿を了ふるに臨み、こゝに記して二氏の勞を謝す。

大正三年七月

武笠三

（一）浮舟にいふ詞
（二）浮舟に取次げども
（三）此處は橫川などの樣に非常な山奧でもなければ「雲の」は「雲ゐ」の誤なるべし
（四）又御出なさる事も出來るのであらう
（五）小君の心
（六）浮舟の
（七）不滿足ながら
（八）薫が
（九）浮舟があかずして小君が歸り來たる故
（一〇）誰か浮舟を隱して小野へ置いてあるのでは無いかと
（一一）自分が前に宇治に捨て置きし事もある故其樣な推量もされる

せ給へるしるしに、何事をかは聞えさせむとすらむ。唯（一）一言を宣はせよかし」など言へば、妹尼「げに」など言ひ、斯くなむ（二）と移し語れども、物も宣はねば、かひなくて、妹尼「唯、かく覺束なき御有樣を聞えさせ給ふべきなゝめり（三）。雲の遙に隔たらぬ程にも侍るめるを、山深くとも（四）、またも必ず立ち寄らせ給ひなむかし」と言へば、（五）漫に居暮さむも怪しかるべければ、歸りなむとす。人知れずゆかしき（六）御有樣をも得見ずなりぬるを、覺束なく口惜しくて（七）、心ゆかずながら參りぬ。

いつしかと（八）待ちおはするに、斯くたど〳〵（九）しくてかへり來たれば、すさまじくなか〳〵なりと、思すこと樣々にて、（一〇）人の隱しすゑたるにやあらむと、わが御心の思ひ寄らぬ隈なく、（一一）落し置き給へりしならひに、とぞ。

源氏物語　終

(一)譯がわからぬ
(二)分って來る事もあるべし
(三)此御文は持ち歸りて下され、小君にいふ詞
(四)其樣な餘りひどい御挨拶では側の我々迄が薫へ申譯がない
(五)浮舟が
(六)妹尼が小君に
(七)浮舟は
(八)常のからだに見える時はなく
(九)尼になられたるを
(一〇)薫のわざ〳〵尋ねたるをいふ
(一一)恐縮に
(一二)何となく落附かぬ心持にて
(一三)此樣な事で歸つてはわざ〳〵御使に來た驗として薫に申上げる詞がなし

のこと思ひ出づれど、更に覺ゆる事なく、怪しう如何なりける夢にかとのみ、(一)心も得ずなむ。少し靜まりてや、この御文なども(二)見知らるゝ事もあらむ。今日は猶(三)持て參り給ひね。所違にもあらむに、いとかたはらいたかるべし」とて、廣げながら、尼君にさしやり給へれば、妹尼「いと見苦しき御事かな。(四)餘り怪しからぬは、見奉る人も罪さり所なかるべし」など言ひ騷ぐも、いとうたて聞きにくゝ(五)覺ゆれば、顏も引き入れて臥し給へり。(六)主人ぞ、この君に物語少し聞えて、妹尼「(七)物怪にやおはすらむ、(八)例の樣に見え給ふ折なく、惱みわたり給ひて、(九)御容貌も異になり給へるを、尋ね聞え給ふ人あらばいと煩はしかるべき御事と、見奉り歎き侍りしも著く、斯く(一〇)いと哀に心苦しき御事どもの侍りけるを、今なむいと(一一)辱く思ひ侍る。日頃も心地うちはへ惱ませ給ふめるを、いとゞ斯かる事どもに思し亂るゝにや、常より物覺えさせ給はぬ樣にてなむ」と聞ゆ。所につけてをかしき饗應などしたれど、幼き心地は、(一二)そこはかとなくあわてたる心地して、小君「(一三)わざと奉れさ



(一)僧都の顔に免じて其方の行爲を咎めず
(二)我ながら自分の餘りおとなし過ぎるに愛想をつかす
(三)佛道の師として頼むべき僧都を飛んでもない方の案内に頼んでつまらぬ物思をする事哉
(四)小君
(五)我方にては亡くした其方の形見と思ひて不憫をかけて居るものぢや
(六)つぶさに
(七)人違などとごまかして逃れる事も出來ねど
(八)變り果てたる我姿を
(九)薫に
(一〇)妹尼等が

いと有り難くをかしと思ふべし。

薫「更に聞えむ方なく、樣々に罪重き御心をば、(一)僧都におもひ許しきこえて、今はいかで、あさましかりし世の夢語をだにと、急がるゝ心の、(二)我ながらもどかしきになむ。まして人目は如何に。

と、書きもやり給はず。

薫「(三)法の師と尋ぬる道をしるべにておもはぬ山にふみまどふかな

(四)此人は、見や忘れ給ひぬらむ。(五)こゝには行方なき御形見に見るものにてなむ。

など、いと細やかなり。(六)斯くつぶ〳〵と書き給へる樣の、(七)紛らはさむ方なきに、さりとて、(八)その人にもあらぬ樣を、思の外に(九)見つけられ聞えたらむ程の、はしたなさなどを思ひ亂れて、いとゞ晴々しからぬ心は、言ひ遣るべき方もなし。流石に打泣きてひれ臥し給へば、いと世づかぬ御有樣かなと(一〇)見煩ひぬ。妹尼「いかゞ聞えむ」など責められて、浮舟「心地のかき亂る樣にし侍る程ためらひて、今聞えむ。昔

で奉らむ。僧都の御しるべには(一)確なるを、かく覺束なく侍ること」と、伏目にていへば、妹尼「そよや。(二)あなうつくし」など言ひて、妹尼「御文御覽ずべき人(三)は、こゝに物せさせ給ふめり。(四)見證の人なむ、如何なる事にかと、心得がたく侍るを、なほ宣はせよ(五)。幼き御程なれど、(六)斯かる御しるべに賴み聞え給ふ樣もあらむ」など言へど、小君「思し隔て、(七)おぼ／＼しくもてなさせ給ふには、何事をか聞え侍らむ。疎く思しなりにければ、聞ゆべき事も侍らず。唯この御文を、人傳ならで奉れとて侍りつる、いかで奉らむ」と言へば、(八)妹尼「いと理なり。猶いと斯くうたて(九)なおはせそ。流石にむくつけき御心にこそ」と聞え動かして、几帳のもとに押し寄せ奉りたれば、我にもあらで居給へるけはひ、(一〇)他人には似ぬ心地すれば、其處もとに寄りて奉りつ(一一)。小君「御返疾く賜はりて參りなむ」と、(一二)斯く疎々しきを心憂しと思ひて急ぐ。尼君御文ひき解きて見せ奉る。(一三)ありしながらの御手にて、紙の香など、例の(一四)世づかぬまでしみたり。仄に見て、例の(一五)ものめでのさし過人、

(一)浮舟の居らるゝ事は
(二)それよ／＼
(三)浮舟
(四)そばの人即ち妹尼等が
(五)事情を話して下され
(六)斯る使にさゝれたるは其丈の仔細がありてなるべし
(七)わざと覺束ない風を見せる樣な人には
(八)浮舟にいふ詞
(九)いやな仕向をなさるな
(一〇)浮舟と著しく分りたれば
(一一)文を
(一二)浮舟の隔てがましき仕打をつらく思ひてわざと歸を急ぐ
(一三)昔通りの顏の手で
(一四)餘り過ぎたる程
(一五)直に物に感心する出過者、少將尼左衞門尼などをいふなるべし

(一)浮舟の母
(二)どうかして浮舟を出世させたしと深く心配せしが
(三)まだ母は生きて居らるゝかしらと
(四)子供の時分に見し
(五)小君にも私が生きて居るとは知らせずして
(六)母
(七)薫
(八)是非うまく人違なりし樣に取りつくろひて事情を隱して下され
(九)僧は一體眞正直なものなれど此僧都は特別に物を隱す事のない人故
(一〇)ありたけ話して仕舞ひしに相違なし
(一一)相手の薫も身分の輕き人でもなし、隱す事はいよいよ出來にくし
(一二)浮舟が此場合になりても隱れんとするは
(一三)小君を簾內へ
(一四)浮舟の居る事は聞いて居れど
(一五)もう一通の御手紙を浮舟へ御渡し申したし

でらるゝ事ある心地せし。その後、とざまかうざまに思ひ續くれど、さらにはかばかしくも覺えぬに、唯一人物し給ひし人の(一)、いかで(二)と疎ならず思ひたゝめりしを、(三)まだや世におはすらむと、ればかりなむ心に離れず悲しき折々侍るに、今日見れば、この童の顏は、(四)小くて見し心地するにも、いと忍び難けれど、今更に(五)斯かる人にもありとは知られで止みなむとなむ思ひ侍る。(六)かの人若し世に物し給はば、それ一人になむ對面せまほしく思ひ侍る。この僧都の宣へる人(七)などには、更にありと知られ奉らじとこそ思ひ侍れ。(八)構へて僻事なりけりと聞えなして、もてかくし給へ」と宣へば、妹尼「いと難い事かな。僧都の御心は、聖(九)といふ中に、あまり隈なく物し給へば、まさに(一〇)殘いては聞え給ひてむや。後に隱あらじ。斜に(一一)輕々しき御程にもおはしまさず」など、言ひ騷ぎて、(一二)人々「世に知らず心強くおはします事ぞ」と、皆言ひ合せて、母屋の際に几帳たてて入れたり。(一三)この子も、(一四)さは聞きつれど、幼ければ、ふと言ひ寄らむもづゝましけれど、小君「(一五)まだ侍る御文いか

（一）相愛せし
（二）浮舟の心、他の人々の身の上は
（三）小君の樣
（四）浮舟に似て居る樣にも思はれる故
（五）浮舟の心
（六）小君に
（七）僧都に見つけられし以來夢中で居し時の事
（八）其樣な事のありし以來正氣がなくなり
（九）元と違ひたる樣に
（一〇）我が關係ある處の噂をして居るのかと

憎がりしかど、母のいとかなしくして、宇治にも時々率ておはせしかば、少しおよずけし儘に、互に（一）思へりし童心を、思ひ出づるにも夢の樣なり。まづ母の有樣はと問はまほしく、（二）こと人々の上は、自らやう／＼聞けど、親のおはすらむ樣は、仄にも聞かずかしと、なか／＼これを見るに、いと悲しくて、ほろ／＼と泣かれぬ。（三）いとをかしげにて、少し（四）うち覺え給へる心地もすれば、妹尼「御兄弟にこそおはすめれ。聞えまほしく思す事もあらむ。內に入れ奉らむ」と言ふを、（五）何か、今は世にあるものとも思はざらむに、怪しき樣に面變して（六）ふと見えむも恥かし、と思へば、とばかりためらひて、浮舟「實に隔ありとも思しなすらむが苦しさに、物も言はれでなむ。（七）あさましかりけむ有樣は、珍らかなる事と見給ひてけむを、さて（八）現心もうせ、魂など言ふらむものも、（九）あらぬ樣になりにけるにやあらむ、如何にも／＼、過ぎにし方の事を、我ながら更にえ思ひ出でぬに、紀伊守とかありし人の、世の物語すめりし中になむ、（一〇）見しあたりの事にやと、仄に思ひ出

いよ〳〵奥の方に引き入られて、人に顔も見合せ給はず、妹尼「(一)常も誇りかならずものし給ふ人がらなれど、(二)いとうたて心憂し」など言ひて、僧都の御文見れば、僧都「今朝こゝに(三)大將殿の物し給ひて、御有樣尋ね問ひ給ふに、初よりありし樣委しく聞え侍りぬ。御志深かりける御中を背き給ひて、あやしき山賤の中に、出家し給へる事。(四)かへりては、佛の責添ふべき事なるをなむ、承り驚き侍る。如何はせむ。(五)もとの御契あやまち給はで、愛執の罪を晴るかし聞え給ひて、一日の出家の功德は、量なきものなれば、(六)猶頼ませ給へとなむ。事毎には自ら侍ひて申し侍らむ。かつ〴〵この小君聞え給ひてむ。」

と書いたり。(七)紛ふべくもあらず書き明らめ給へれど、他人は心も得ず。妹尼「(八)この君は誰にかおはすらむ。猶いと心憂し。(九)今さへ斯く強ちに隔てさせ給ふ」と責められて、少し外樣に向きて見給へば、(一〇)この子は、今はと(一一)世を思ひなりし夕暮にも、いと戀しく思ひし人なりけり。(一二)同じ所にて見し程は、いとさがなく生憎に驕りて

(一)浮舟は
(二)此場合に無暗に尻込みばかりして居るのは
(三)薫
(四)其樣な譯では出家して却つて佛の罰を重ぬる樣な事情を聞きて驚きたり
(五)薫と元々通りの中になりて
(六)たとへ還俗しても其功德は失せぬものなれば其を力にし給へ
(七)はつきりと浮舟の祕密を此文に書きあらはしてある譯なれど
(八)小君は
(九)斯く艱顏すべき時になりても
(一〇)浮舟が
(一一)自殺を覺悟せし夕暮にも
(一二)一所に暮した時分は此子は性惡で憎い程腕白で、浮舟の心

ぢきなく、却りて臆し侍りてなむと、姫君に聞え給へ。自ら聞えさすべき事も多かれど、今日明日過して侍ふべし。(一)

と書き給へり。これは何事ぞと尼君驚きて、此方へもて渡りて見せ奉り給へば、(二)面うち赤みて、物の聞あるにやと苦しう、(三)物隱しけると恨みられむを思ひ續くるに、(四)答へむ方なくて居給へるに、妹尼「猶宣はせよ。(五)心憂く思し隔つる事」と、いみじく恨みて、事の心を知らねば、あわたゞしきまで思ひ居たる程に、小君「山より、僧都の御消息にて、(六)參りたる人なむある」と言ひ入れたり。怪しけれど、妹尼「これこそは、然は確なる御消息ならめ」とて、「此方に」と言はせたれば、いと淸げにしめやかなる童の、えならず裝束きたるぞ、歩み來たる。圓座さし出でたれば、簾のもとについ居て、小君「かやうにては侍ふまじくこそは、(七)僧都は宣ひしか」と言へば、尼君(八)ぞ答へなどし給ふ。文取り入れて見れば、「入道の姫君の御方に、山より」とて名書き給へり。(九)あらじなどあらがふべき樣もなし。(一〇)いとはしたなく覺えて、(一一)

(一)其方へ參るべし
(二)浮舟方へ持ち來りて
(三)我身の上が評判に上りたるにやと
(四)今迄身分を隱し居たりと妹尼等に恨まれるのを
(五)身の上を明し給へ
(六)僧都の御手紙を持ちて
(七)斯く簾外に置かるゝ樣に他人がましく私を御あしらひなさる事はない筈と
(八)妹尼
(九)僧都の
(一〇)人違ならんなどと
(一一)浮舟が

り給ひて、またの日殊更にぞ出し立て給ふ。睦じく思す人の事々しからぬ二三人ばかり送りにて、(一)昔も常に遣はしゝ(二)隨身添へ給へり。人聞かぬ間に呼び寄せ給ひ(三)て、薫「あこが亡せにし妹の(四)顏は覺ゆや。今は世になき人と思ひ果てにしを、いと確にこそものし給ふなれ。(五)疎き人には聞かせじと思ふを、往きて尋ねよ。母には(六)まだしきに言ふな。なか／＼驚き騷がむ程に、知るまじき人も知りなむ。その親(七)の御思のいとほしさにこそ、斯くも尋ぬれ」と、まだきにいと口がため給ふを、幼き心地にも、兄弟はおほかれど、(八)この君の容貌をば、似るものなしと思ひしみたりしに、亡せ給ひにけりと聞きて、いと悲しと思ひわたるに、斯く宣へば、いと嬉しきにも涙の落つるを、恥かしと思ひて、紛らはしに、小君「をゝ」(九)と荒らかに聞え居たり。

(一〇)彼處にはまだつとめて、僧都の御許より、

僧都よべ大將殿の御使にて、小君やまうで給へりし。事のこゝろ(一一)承りしに、あ

(一)小君の送りとしてつけて遣はし
(二)浮舟の處へ
(三)小君を
(四)浮舟
(五)生きて居るのぢや
(六)前から話すな
(七)其方の母の歎が氣の毒なればこそ
(八)浮舟の
(九)はい／＼
(一〇)小野
(一一)薫から事情を聞いて見ると浮舟を尼にしたのが甚だ極り惡く、なまじよい事をした積りなのが却つて惡い事をした樣に思はれて氣がひけると



小野にはいと深く繁りたる青葉の山に向ひて、紛るゝこともなく、遣水の螢ばかり(一)を、昔覺ゆる慰にて、ながめ居給へるに、例の遙に見やらるゝ谷の軒端より、前心ことに追ひて、いと多う(二)燈したる火の、のどかならぬ光を見るとて、尼君達も端に出で居たり。妹尼「誰がおはしますにかあらむ。御前などいと多くこそ見ゆれ。晝彼方(三)にひきほし奉れたりつる返事に、大將殿おはしまして、御饗應の事俄にするを、いとよき(四)折とこそありつれ」尼達「大將殿とは、この女二の宮の御夫にやおはしつらむ」など言ふも、いとこの世遠く、田舍びにたりや。誠に(五)然にやあらむ、時々かゝる山路(六)分けおはせし時、いとしるかりし隨身の聲も、うちつけに交りて聞ゆ。(七)月日の過ぎ行くまゝに、昔の事かく思ひ忘れぬも、今は何にすべき事ぞ、と心憂ければ、阿彌陀佛に思ひ紛らはして、いとゞ物も言はで居たり。横川に通ふ人のみなむ、このわたりには近き便なりける

(八)かの殿は、この子をやがて遣らむと思しけれど、人目多くて便なければ、殿に歸

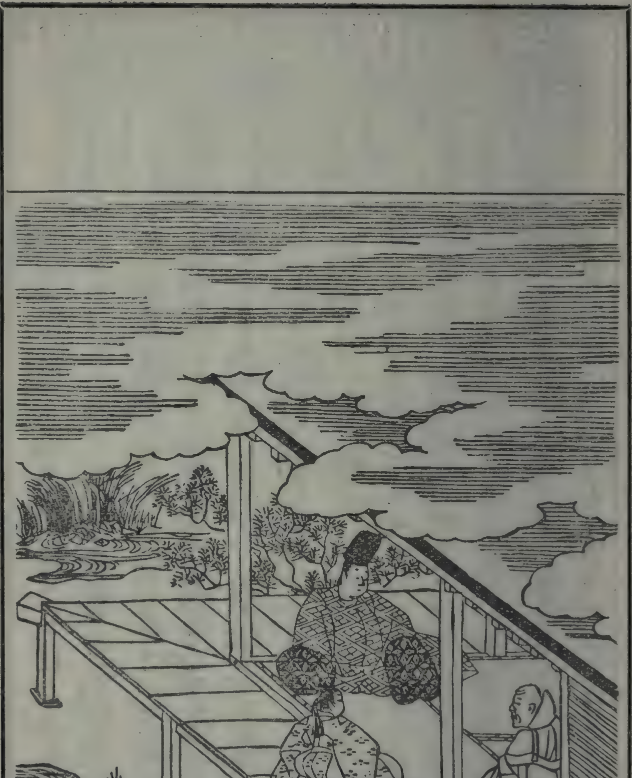
(一)螢は宇治の名物なれば也
(二)浮舟が
(三)僧都へ海草の干したるを贈りたる時の文の返事に
(四)丁度よい處へ貰ったといふ返事であつた
(五)浮舟の心
(六)宇治へ薫の來し時耳立ちて聞えし隨身の聲も
(七)浮舟の心
㊀浮舟の異父弟小君、薫の使として浮舟を訪ふ、浮舟避けて逢はず
(八)薫は小君を直に小野へやらんと

事につけてこそ然も侍らめ、さらでは佛の制し給ふ方の事を、(一)僅にも聞き及ばむ事は、いかで過たじと愼みて、心のうちは聖に劣り侍らぬものを、ましていとは(二)かなき事につけてしも、重き罪得べき事は、などてか思ひ給へむ。更にあるまじき事に侍る。疑ひ思すまじ。たゞいとほしき親の思などを、(三)聞きあきらめ侍らむばかりなむ、嬉しう心やすかるべき」など、昔より深かりし方の(四)心おきて語り給ふ。僧都も、げにと頷きて、僧都「いと尊き事」など聞え給ふ程に、日も暮れぬれば、中宿(五)もいと善かりぬべけれど、うはの空にて物したらむこそ、猶便なかるべけれと思ひ煩ひて歸り給ふに、この兄(六)の童を、僧都目とゞめて褒め給ふ。薫「これ(七)に附けて先づほのめかし給へ」と聞え給へば、(八)文書きて取らせ給ふ。僧都「時々(九)は山におはして遊び給へよ。(一〇)漫なる樣には思すまじき故もありけり」と、打語らひ給ふ。この子は心(一一)も得ねど、文取りて御供に出づ。坂本になれば、御前の人々少し立ち散れて、薫「忍びやかにを」など宣ふ。

(一)佛の戒律は知れる限り保たんと思ひて
(二)浮舟を尋ねる位の事で戒律を破らん事は
(三)浮舟の母の嘆が氣の毒故浮舟の實際の事情をよく聞取りて安心したしと思ふのみ
(四)佛道に志深かりし心持を
(五)小野へ一晩泊るのも、薫の心
(六)確と案内もして置かず突然に尋ねて行くも不都合ならんと
(七)此小君に文を托して豫め薫の尋ね行くべき事を匂はせて置いてくれ
(八)僧都が
(九)小君にいふ詞
(一〇)浮舟の關係につきて云ふなるべし
(一一)僧都の詞の意味が分らねど

（一）小君
（二）浮舟の近親なり
（三）此兄をまづ使に浮舟の處へやるべし
（四）僧都が一筆書いて渡してくれ
（五）其文には誰といふ事は書かず
（六）浮舟に通知してくれ
（七）此御案内をしたらば
（八）申上げたり
（九）私が案内せずとも薫が自分で出かけて勝手になされて仔細なかるべし
（一〇）自分が尋ねて行つたら浮舟を墮落せしむるならんとの御推量は痛み入る
（一一）自分は今迄僧にならずに居るが不思議な位の男なり
（一二）出家の願
（一三）母女三
（一四）薫一人を便にして居られるのが
（一五）浮世に離れがたくして居る中に
（一六）身の持方も
（一七）のつぴきならぬ事も、女二宮の聟になりたる事抔をいふ
（一八）據なき場合には妻をも持つが

つけに焦られむも、樣あしければ、さらばとて歸り給ふ。かの兄の童（一）、御供に率ておはしたりけり、こと兄弟どもよりは、容貌も淸げなるを、呼び出で給ひて、薫「これなむその人の（二）近きゆかりなるを、（三）これをかつ〴〵ものせむ。（四）御文一行賜へ。（五）その人とはなくて、唯尋ね聞ゆる人なむあるとばかりの心を、（六）知らせ給へ」と宣へば、僧都「某（七）このしるべにて、必ず罪得侍りなむ。事の有樣は、委しくとり（八）申しつ。今は（九）唯御自ら立寄らせ給ひて、あるべからむ事は、物せさせ給はむに、何の咎か侍らむ」と申し給へば、打笑ひて、薫「（一〇）罪得ぬべきしるべと、思ひなし給ふらむこそ恥かしけれ。（一一）こゝには、俗の形にて今まで過すなむいと怪しき。いはけなかりしより、思ふ（一二）志深く侍るを、（一三）三條の宮の心細げにて、頼もしげなき（一四）身ひとつをよすがに思したるが、さりがたき絆に覺え侍りて、（一五）かゝづらひ侍りつる程に、自ら位などいふ事も高くなり、（一六）身のおきても心に叶ひ難くなどして、思ひながら過ぎ侍るには、（一七）又えさらぬ事も、數のみ添ひつゝ過せど、公私に、（一八）遁れ難き



(一)罪ほろぼしに尼になつて居る事故
(二)薫自身は思ひ居れど
(三)母に知らせたらば
(四)母がたづねて行くかも知れぬ
(五)迷惑な案内をするとは思ふならんが山を下りて私を其小野まで連れ行き給へ
(六)是程に在處を突留めながらよい加減にしては置かれぬ筈の女なれば
(七)浮舟と
(八)薫が哀と思ひ居る樣子故
(九)男の身でさへ世捨人になつた積でも矢張
(一〇)戀愛の情のなくならぬもある
(一一)薫を案内した爲に浮舟と薫との情交が元に戾る樣では自分は飛だ罪を作る事になると
(一二)來月に入りて
(一三)薫の心
(一四)其でも是非と附屬もなくあせるのも

せにしかば、身を投げたるにやなど、樣々に疑多くて、確なる事はえ聞き侍らざりつるになむ。(一)罪輕めて物すなれば、いと善しと心安くなむ、(二)自らは思ひ給へなりぬるを、母なる人なむいみじく戀ひ悲しぶなるを、斯くなむ聞き出でたりと告げ知らせまほしく侍れど、(三)月頃隱させ給ひける本意違ふ樣に、物騷がしくや侍らむ。親子の中の思斷えず、悲しびに堪へで、(四)とぶらひ物しなどし侍りなむかし」など宣ひて、さて、薫「(五)いと便なきしるべとは思すとも、かの坂本に下り給へ。(六)斷ばかり聞きて斜に思ひ過すべくは侍らざりし人なるを、夢の樣なる事どもを、今だ(七)に語り合せむとなむ思ひ給ふる」と宣ふ氣色、(八)いと哀と思ひ給へれば、(九)容貌をかへ世を背きにきと覺えたれど、髮鬚を剃りたる法師だに、(一〇)あやしき心は失せぬもあなり、まして女の御身は如何あらむ、(一一)いとほしう罪得ぬべきわざにもあるべきかなと、味氣なく心亂れぬ。僧都「罷り下りむ事、今日明日は障り侍る。(一二)月たちての程に、御消息を申させ侍らむ」と申し給ふ。(一三)いと心もとなけれど、(一四)なほ〳〵とうち

(一)世間話に人にも噂すべき筈なりしかど
(二)評判になつたら浮舟が迷惑する事がありさうなりとて
(三)小野に尼になりて居るとは既に前から薄々聞き居て
(四)薫の心
(五)此樣な取亂した樣を見せてはならぬと
(六)薫の此樣に思ひ居らるゝものを死人も同然なる尼にして仕舞ひしは失錯なりしと思ひて
(七)よい加減な王孫の身分であらう
(八)我も此女を格別大切に思ひ居し譯にも非ず
(九)最初からつまらぬ身分ではありしかど

事の樣にもあるを、(一)世語にもし侍りぬべかりしかど、(二)聞ありて煩はしかるべき事にもこそと、この老人どものとかく申して、この月頃音無くて侍りつるになむ」と申し給へば、(三)然てこそあゝなれとほの聞きて、斯くまでも問ひ出で給へることなれど、むげに亡き人と思ひ果てにし人を、さは誠にあるにこそはと思す程、夢の心地してあさましければ、つゝみもあへず涙ぐまれ給ひぬるを、(四)猶僧都の恥かしげなるに、(五)斯くまで見ゆべき事かは、と思ひ返して、つれなくもてなし給へど、(六)斯く思しける事を、この世にはなき人と同じ樣になしたる事と、過したる心地して、罪深ければ、僧都「惡しき物に領ぜられ給ひけむも、然るべき前の世の契なり。思ふに高き家の子にこそものし給ひけめ。如何なる過にて、斯くまではふれ給ひけむにか」と問ひ申し給へば、薫「(七)なま王家流などいふべき筋にやありけむ。(八)こゝにも本よりわざと思ひし事にも侍らず、(九)物はかなくて見つけそめては侍りしかど、又いと斯くまで落ちあぶるべき際とは思ひ給へざりしを、珍らかに跡もなく消え失

(一)事情を推量するに
(二)亡き娘と同年輩と見ゆる浮舟が
(三)浮舟を死なせたくなしと深く心配して
(四)浮舟に取憑き居る魔物が、以下浮舟の詞をまねていふ
(五)尼になりて後世の勤がしたしなど
(六)薫の御關係あるべき事とは

へずなむ侍りし。(一)ことの心推し量り思ひ給ふるに、天狗木靈など様のものの、欺き率て奉りたりけるにやとなむ承りし。助けて京に率て奉りて後も、三月ばかりは亡き人にてなむ物し給ひけるを、某が妹、故衛門督の北の方にて侍りしが、尼になりて侍るなむ、一人もちて侍りし女子を失ひて後、月日は多く隔て侍りしかど、悲しびに堪へず歎き思ひ給へ侍るに、(二)おなじ年のほどと見ゆる人の、かく容貌いと麗しく淸らなるを見出で奉りて、觀音の賜へると喜び思ひて、(三)この人徒になし奉らじと惑ひ入られて、泣く〱いみじき事どもを申されしかば、後になむ、かの坂下にみづから下り侍りて、護身など仕うまつりしに、やうやう息出でて人となり給へりけれど、猶(四)この領じたりける物の、身に離れぬ心地なむする、この惡しき物の妨を逃れて、(五)後の世を思はむ、など悲しげに宣ふ事どもの侍りしかば、法師にては勸も申しつべき事にこそはとて、誠に出家せしめ奉りてしに侍る。(六)更に知召すべき事とは、いかでか空に覺り侍らむ。珍らしき

り心得給ひて、伺ひ尋ね給はむに、隱あるべき事にもあらず。なか〳〵あらがひ隱さむにあいなかるべしなど、とばかり思ひ得て(一)、僧都「如何なりける事にか侍りけむと、この月頃うち〳〵に怪しみ思ひ給ふる人の御事にや」とて、僧都「彼處に侍る尼どもの、初瀨に願侍りて、詣でて歸り侍りける路に、宇治の院といふ所に留まりて侍りけるに、母の尼の勞氣(二)俄におこりて痛くなむ煩らふと、告げに人のまうで來たりしかば、まかり向ひたりしに、まづ怪しきことなむ」とさゝめきて(三)、僧都「親の死かへるをばさしおきて、(四)持て扱ひ歎きてなむ侍りし。(五)この人も、亡くなり給へる樣ながら、流石に息は通ひておはしければ、昔物語に、(六)魂殿に置きたりけむ人の喩を思ひ出でて、さやうなる事にやと珍らしがり侍りて、弟子ばらの中に驗ある者どもを呼び寄せつゝ、代々に加持せさせなどなむし侍りける。某は、(七)惜しむべき齡ならねど、母の旅の空にて病おもきを助けて、念佛をも心亂れずせさせむと、佛を念じ奉り思う給へし程に、(八)その人の有樣、委しくも見給

(一)分別して
(二)病氣
(三)小聲で浮舟を見附けし事を語りて
(四)浮舟の方を
(五)浮舟も
(六)魂殿は殯宮也、此物語の事不詳
(七)母尼の老年なるをいふ
(八)浮舟の

(一)此様な事を言ひ出すは確ならず浮いた事でもあり
(二)其小野の家に我が世話せねばならぬ人が隠れ居るとか聞きしが
(三)實否を突きとめてからどうして居るぞと僧都に打明けて尋ねんと思ひ居るうちに
(四)浮舟は
(五)薫が浮舟を亡くした様に咎をかぶせる人もあつて迷惑する
(六)僧都の心
(七)自分がいくら僧であつても直に尼にして仕舞ひしは疎忽なりしと
(八)薫は確に浮舟の居る事を聞き居るのであらう、僧都の心
(九)是程御存知で

にはかゞしき住所も侍らぬうちに、斯くて籠り侍る間は、夜中曉にも、あひとぶらはむと思ひ給へおきて侍る」など申し給ふ。薫「そのわたりには、たゞ近き頃ほひまで、人多う住み侍りけるを、今はいと幽にこそなり行くめれ」など宣ひて、今少し近う居寄りて、忍びやかに、薫「(一)いと浮きたる心地もし侍り、又尋ね聞えむにつけては、如何なりける事にかと、心得ず思されぬべきに、かたゞゞ憚られ侍れど、(二)かの山里に、知るべき人の隠ろへて侍る様に聞きしを、(三)確にてこそは、如何なる様にてなども、漏し聞えめなど思ひ給ふる程に、御弟子になりて、忌む事など授け給ひてけりと聞き侍るは實か。(四)まだ年も若く、親などもありし人なれば、(五)ここに失ひたる様に、かごとかくる人なむ侍るを」など宣ふ。僧都、(六)然ればよ、ただ人と見えざりし人の様ぞかし、斯くまで宣ふは、輕々しく思されざりける人にこそあゝめれ、と思ふに、(七)法師と言ひながら、心もなく忽に容貌をやつしける事と胸つぶれて、答へ聞えむ様思ひ廻さる。(八)確に聞き給へるにこそあゝめれ、(九)かばか

㊀ 薫横川の僧都を訪ひて浮舟の身の上を聞く
(一)薫が比叡山に
(二)僧都を薫が
(三)僧都が頼まれて行きしに
(四)薫が
(五)前よりは懇にして祈禱などを頼みたれば
(六)京には母尼の住むべき適當の家もなきのみならず、私が此處に居る間は何時でも見舞ふ事の出來る便宜もあればと思ひて其處に置いてあります

# 夢浮橋

梗概 ㊀ 薫、横川の僧都を訪ひて浮舟の身の上を聞く。㊁ 浮舟の異父弟小君、薫の使として浮舟を訪ふ。浮舟避けて逢はず。

山におはしまして、例せさせ給ふ樣に、經佛など供養ぜさせ給ふ。またの日は横(一)川におはしたれば、僧都驚き畏まり聞え給ふ。年頃も御祈などにつけ、語らひ(二)給ひけれど、ことにいと親しき事は無かりけるを、この度一品宮の御心地の程に、(三)侍らひ給へるに、勝れ給へる驗ものし給ひけりと見(四)給ひてより、こよなう尊び給ひて、今少し深き(五)契加へ給ひてければ、重々しうおはする殿の、斯くわざとおはしたる事と、もて騒ぎ聞え給ふ。御物語など細やかにしておはすれば、御湯漬など參り給ふ。少し人々靜まりぬるに、薫「小野のわたりに、知り給へる宿や侍る」と問ひ給へば、僧都「然侍り。いと異樣なる所になむ。某が母なる朽尼の侍るを、京(六)

住(一)むらむ山里は何處にかあらむ、如何にして(二)樣惡しからず尋ね寄らむ、僧都に逢ひてこそは、確なる有樣も聞き合せなどして、ともかくも問ふべかゝめれ、など、唯この事を起き臥し思す。月ごとの八日(三)には、必ず尊き(四)わざせさせ給へば、藥師(五)佛に寄せ奉るにもてなし給へる便に、(六)中堂に時々參り給ひけり。それよりやがて横川におはせむと思して、かの兄(七)の童なる率ておはす。その(八)人々には、頓に知らせじ、(九)有樣にぞ隨はむ、と思せど、(一〇)打見む夢の心地にも、哀をも加へむとにやありけむ。(一一)流石にその人とは見つけながら、怪しき樣に、(一二)容貌ことなる人の中にて憂き事を聞きつけたらむこそいみじかるべけれ、と萬に道すがら思し亂れけるとや。(一三)

(一)浮舟の居處は、薫の心
(二)體裁よく
(三)藥師の縁日
(四)薫が常に佛事を營む故
(五)藥師に寄進すべきものあるに托して
(六)比叡山の根本中堂
(七)浮舟の兄弟なる小君
(八)浮舟の母等には、以下薫の心
(九)都合によりての事にすべし
(一〇)夢の樣な再會の場合にひとしほの哀を添へんとして小君を連れて行くのであらう
(一一)浮舟である事を突きとめながら、以下薫の心
(一二)尼等の中に居て
(一三)通ひ來る男がある抔といふ事が若し分りたらば

し人、(一)世に落ちあぶれてある様に、(二)人のまねび侍りしかば、いかでか然る事は侍らむと思ひ給へれど、(三)心とおどろ〳〵しう、もて離るゝ事は侍らずやと、思ひわたり侍る人の有様に侍れば、(四)人の語り侍りし様にては、然る様もや侍らむと、似つかはしく思う給へらるゝ」とて、今少し(五)聞え出で給ふ。(六)宮の御事を、いと恥かしげに、流石に恨みたる様には言ひなし給はで、薫「(七)かの事又然なむと聞きつけ給へらば、頑に好き〳〵しくも(八)思されぬべし。更に(九)然てありけりとも、知らず顔にて過し侍りなむ」と啓し給へば、明石「僧都の語りしに、いと物恐しかりし夜の事にて、(一〇)耳も留めざりし事にこそ。(一一)宮はいかでか聞き給はむ。(一二)聞えむ方なかりける御心の程かなと聞けば、(一三)まして聞きつけ給はむこそいと苦しかるべけれ。(一四)かゝる筋につけて、いと軽く憂きものにのみ世に知られ給ひぬめれば、心憂くなむ」と宣はす。(一五)いと重き御心なれば、必ずしも、打解け世語にても、(一六)人の忍びて啓しけむ事を漏させ給はじ、など思す。

(一)浮舟
(二)噂をしたる故
(三)自分から身投など恐ろしき事を思ひ立つ様な事はなさゝうな浮舟の性質故
(四)噂によれば其様にもありしならんと、魔物に誘はれし事
(五)浮舟の噂をする
(六)匂に浮舟をとられたる事を
(七)浮舟を薫が探し出したる事を匂が聞きつけたらば
(八)薫を
(九)浮舟が生きて居たりといふ事を
(一〇)我はよくも覚えて居らぬ
(一一)匂が此事を知り居る筈はなし
(一二)聞いて見ると何と評し様もなき匂の放埓な了簡故
(一三)匂には此事の知れぬ方がよい
(一四)匂は女の方にかけて
(一五)中宮は慎み深き人故、薫の心
(一六)世間話にても

（一）浮舟が
（二）尼にならせざりしを
（三）本人が是非と懇望して
（四）僧都が見出したる場所も矢張宇治なり
（五）尋ねて見て實際其人が浮舟ならばあさましかるべし、以下薫の心
（六）わざ／＼身を入れて眞僞を穿鑿するも餘り拘泥し過ぎる樣に人に噂されるかも知れぬ
（七）匂宮が浮舟存生の事を知りたらば
（八）浮舟の折角の道心をも妨ぐるならん
（九）匂が既に知つて居ながら、中宮に薫には此事を隱して下されと口止したる故、中宮が知つては居ながら我には言はざりしならんか
（一〇）匂が猶浮舟に關係するならば、我は竊に同情はしながらも浮舟はもう死んだものと諦めて逢はずに仕舞はん
（一一）浮舟が生きかへりたる上は將來又冥途でめぐり合ふ樣に自ら再會する機會もあるべし
（一二）矢張中宮は言はぬかしらとは思はるれど

じう（一）煩ひし程にも、皆人惜しみて（二）せさせざりしを、（三）正身の本意深き由を言ひてなりぬる、とこそ侍るなりしか」と言ふ。（四）所もかはらず、その頃の有樣など思ひ合するに、違ふ節なければ、（五）誠にそれと尋ね出でたらむ、いとあさましき心地もすべきかな、いかでかは確に聞くべき、（六）おりたちて尋ねありかむも、頑しなどや人言ひなさむ、又かの宮も（七）聞きつけ給へらむには、必ず思し出でて、（八）思ひ入りにけむ道も妨げ給ひてむかし、（九）さて然な宣ひそなど聞え置き給ひければにや、我には、さる事なむ聞きしと、さる珍らしき事を聞召しながら、宣はせぬにやありけむ、（一〇）宮もかゝづらひ給ふにては、いみじく哀と思ひながらも、更にやがて失せにしものと、思ひなしてをやみなむ、（一一）現人になりて末の世には、黄なる泉のほとりばかりを、自ら語らひ寄る風のまぎれも有りなむ、我が物に取返し見むの心は又つかはじ、など思ひ亂れて、（一二）猶宣はずやあらむと覺ゆれど、御氣色のゆかしければ、大宮に　さるべき序作り出でてぞ啓し給ふ。薫「あさましくて失ひ侍りぬと思う給へ

（一）其方は一々よく聞いて居る事故
（二）不都合な點はかくしておいて
（三）中宮さへ
（四）人にも物にもよる
（五）自分が話しては氣の毒な仔細もある
（六）小宰相が其意味をさとりて
（七）薫が小宰相の部屋へ
（八）僧都の噂を小宰相が
（九）以下薫の心
（一〇）殘らず話して下さればよいにと思へば中宮が恨めしけれど
（一一）浮舟との最初からの關係を隱し居し事なれば中宮の話すことを遠慮せられしも道理也
（一二）小宰相に聞きて後も
（一三）却て他人は知りて噂もして居るならん
（一四）小宰相にも
（一五）斯樣々々と浮舟との關係を有體には話しにくくて
（一六）浮舟の身の上に

君ぞ、（一）ことごと聞き合せける。（二）かたはならむ事はとり隱して、然る事なむ有りけると、大方の物語のついでに、僧都の言ひし事語れ」と宣はす。小宰相「（三）御前にだにつゝませ給はむ事を、まして他人はいかでか」と聞えさすれど、明石「（四）樣々なる事にこそ。（五）又まろはいとほしき事ぞあるや」と宣はするも、（六）心得てをかしと見奉る。（七）立ち寄りて物語などし給ふ序に、（八）言ひ出でたり。（九）珍らかに怪しと、いかでかは驚かれ給はざらむ、宮の問はせ給ひしも、かゝる事をほの思し寄りてなりけり。（一〇）などか宣はせ果つまじきとつらけれど、我も又、（一一）はじめより有りし樣の事聞え初めざりしかば、（一二）聞きて後も猶をこがましき心地して、人にすべて洩らさぬを、（一三）なかなか外には聞ゆる事もあらむかし、現の人々の中に忍ぶる事だに、隱ある世の中かは、など思ひ入りて、（一四）この人にも、（一五）然なむ有りしなども明し給はむ事は、口おもき心地して、薫「猶怪しと思ひし（一六）人の事に似てもありける人の有樣かな。さてその人は猶あらむや」と宣へば、小宰相「かの僧都の山より出でし日なむ、尼になしつる、いみ

(一)宇治へ行きて、一週忌の法會の時の事
(二)横川の僧都の噂せし浮舟と思はるゝ女の事
(三)宇治には
(四)浮舟
(五)大君浮舟との引續き死にたる點を氣にして問はるゝならんと思ひて
(六)僧都の物語を薫に傳へたらば自分の隱して居る事を聞いて仕舞つたと思ふべければ其が氣の毒にもあり
(七)匂宮が浮舟の亡くなりし當時はふさぎ勝ちで病氣づきしを
(八)色々の點から見て浮舟の事には滅多に口が出せぬと思ひて話す事を見合せたり
(九)薫が浮舟の事を
(一〇)僧都の噂を話さんとせしが
(一一)若し人違であつてはならぬと憚りてやめたり

憂く思う給へなりにし後は、道も遙けき心地し侍りて、久しくものし侍らぬを、先つ頃物の便にまかりて、(一)はかなき世の有樣とり重ねて思う給へしに、殊更道心を起すべく作りおきてたりける、聖の住處となむ覺え侍りし」と啓し給ふに、(二)かの事思し出でて、いといとほしければ、明石「(三)其處には恐ろしきものや住むらむ。如何樣にてか、(四)かの人は亡くなりにし」と問はせ給ふを、(五)猶打續きたるを思し寄るかと、思ひて、薫「然も侍らむ。さやうの人離れたる所は、善からぬものなむ必ず住みつき侍るを、失せ侍りにし樣なむいと怪しく侍る」とて、委しくは聞え給はず。(六)猶かく忍ぶる筋を、聞き顯しけりと思ひ給はむが、いとほしく思され、(七)宮の、物をのみ思して、その頃は病にもなり給ひしを思し合するにも、流石に心苦しくて、(八)かたがたに口入れにくき人の上と思しとゞめつ。

小宰相に、忍びて、明石「(九)大將、かの人の事を、いと哀と思ひて宣ひしに、いとほしくて(一〇)打出でつべかりしかど、(一一)それにもあらざらむ物ゆゑと、つゝましくてなむ。

(一)浮舟の身寄にも行衛を尋ね居らるゝ人あるべし
(二)身投前迄は母親一人は生きて居りき
◎小宰相薫に浮舟の事を語る、薫小野を訪はんとす
(三)薫
(四)一週忌の法事
(五)浮舟の身の上を
(六)浮舟の異父兄弟
(七)右近衛府の
(八)小君といふ
(九)兄弟の中で
(一〇)薫が明石へ
(一一)宇治
(一二)薫自身の人の謗に對する覺悟を語る也
(一三)誰でも好きな事につけては片偏るものぢや
(一四)通ひしに
(一五)大君浮舟引續きて死にたるは場所が惡いのかしらと

處にかあらむ、其處とだに尋ね聞かまほしく覺え侍るを、(一)行方知らで思ひ聞え給ふ人々侍らむかし」と宣へば、浮舟「(二)見し程までは一人はものし給ひき。この月頃に亡せやし給ひぬらむ」とて、涙の落つるを紛らはして、浮舟「なかく〵思ひ出づるにつけてうたて侍ればこそ、え聞え出でね。隔は何事にか殘し侍らむ」と、言少に宣ひなしつ。

(三)大將は、このはて(四)のわざなどせさせ給ひて、(五)はかなくても止みぬるかなと哀におぼす。かの常陸の子(六)どもは、叙爵したりしは藏人になし、我が御つかさ(七)の將監になしなど、勞り給ひけり。童(八)なるが、中(九)に淸げなるをば、近く使ひ馴らさむとぞ思したりける。雨など降りてしめやかなる夜、(一〇)后の宮に參り給へり。御前のどやかなる日にて、御物語など聞え給ふ序に、薫「あやしき山里(一一)に、年頃まかり通ひ見給へしを、人(一二)の謗り侍りしも、然るべきにこそはあらめ、誰(一三)も心の寄るかたの事は、さなむある、と思ひ給へなしつゝ、猶時々見(一四)給へしを、所(一五)のさがにやと、心

物をいと美しくひねら(一)せ給へば」とて、小袿の單衣奉るを、うたて覺ゆれば、心地惡しとて手も觸れず臥し給へり。尼君、(二)急ぐ事をうち捨てて、妹尼「いかゞ思さる」など(三)思ひ亂れ給ふ。(四)紅に櫻の織物の袿かさねて、(五)「御前にはかゝるをこそ奉らすべけれ。あさましき墨染なりや」と言ふ人あり。

・浮舟「あま衣かはれる身にや(六)ありし世のかたみの袖をかけてしのばむ

と書きて、(七)いとほしく、(八)亡くもなりなむ後に、物の隱なき世なりければ、聞き合せなどして、疎ましきまで隱しけるとや思はむ、など樣々思ひつゝ、浮舟「過ぎにし方の事は、絶えて忘れ侍りにしを、かやうなる事を思し急ぐにつけてこそ、ほのかに哀なれ」とおほどかに宣ふ。妹尼「さりとも、思し出づる事は多からむを、(九)盡せず隔て給ふこそ心憂けれ。(一〇)こゝには、斯かる(一一)世の常の色あひなど、久しく忘れにければ、(一二)直々しく侍るにつけても、昔の人あらましかばなど思ひ出で侍り。然(一三)あつかひ聞え給ひけむ人、世におはすらむや。かく(一四)亡くなして見侍るだに、猶何

(一)きれ地の耳をひねる事なりといふ
(二)頼まれし衣裳の事も打捨てて
(三)浮舟の樣子を心配する
(四)頼まれし衣裳也
(五)浮舟には此樣なのが相當
(六)俗體なりし時のはなやかな衣裳を身につけて
(七)以下浮舟の心
(八)何事も知れずには居ぬ世の中故我が死後此處の妹尼などが我身の素姓を人に聞きて
(九)いつまでも隱し居らるゝこそ
(一〇)我は
(一一)俗人の女の衣裳の事などは
(一二)今不意にかゝる衣裳を扱ひても品よきは出來ぬにつけても娘が居たらばと思ひ出す
(一三)我が娘を育みし如く浮舟を世話せし親が今も御存生なりや
(一四)死んだのを見て居ても矢張生きて居る樣にのみ思はれて何處に居る事ぞと在處が知りたい樣に思はれる故

おはしますと見奉りしみにしかば、世の中の一の所も、何とも思ひ侍らず、唯こ(一)の殿を頼み聞えさせてなむ、過し侍りぬる」と(二)語るに、(三)殊に深き心も無げなるかや(四)うの人だに、御有様は見知りにけり、と思ふ。尼君、「光る君と聞えける故院の御有樣には、(五)え竝び給はじと覺ゆるを、たゞ今の世に、(六)この御族ぞめでられ給ふなる。(七)左の大殿」と宣へば、紀伊守「それは、容貌もいとうるはしう淸らに、(八)宿德にて、際ことなる樣ぞし給へる。(九)兵部卿宮ぞいといみじくおはするや。女にて狎れ仕うまつらばやとなむ覺え侍る」など、(一〇)敎へたらむ樣に言ひつゞく。(一一)哀にもをかしくも聞くに、身の上もこの世の事とも覺えず。滯ることなく語り置きて(一二)出でぬ。(一三)忘れ給はぬにこそはと哀に思ふにも、いとゞ母君の御心のうち推し量らるれど、なかなか(一四)いふかひなき樣を見え聞え奉らむは、猶いとつゝましくぞありける。(一五)彼の人の言ひつけし事などを、染め急ぐを見るにつけても、怪しく珍らかなる心地すれど、(一六)かけても言ひ出でられず。(一七)裁ち縫ひなどするを、妹尼「(一八)これ御覽じ入れよ。

(一)薫の人物に惚れ込み居る故
(二)攝政關白をも
(三)浮舟のこと
(四)薫の優れたる處をば
(五)薫が竝ぶまじと
(六)薫の一門
(七)夕霧は如何
(八)故老にて
(九)匂宮
(一〇)浮舟に斯う言つて聞かせよと誰か敎へたかと思はるゝ位に
(一一)浮舟の心
(一二)紀伊守が
(一三)薫が我を、浮舟が紀伊守の話を聞きて思ふ也
(一四)見せて却つて愁をまさする樣な尼姿を母に見せるのは
(一五)紀伊守が賴みし布施の衣裳の事など
(一六)これは自分の法事の爲に用ふる物ぞなどと一寸でも言ふ事も出來ず
(一七)人々が
(一八)之を仕立てゝ下され

させ給ひてむや。織らすべきものは、急ぎせさせ侍りなむ」と言ふを(一)聞くに、いかでかは哀ならざらむ。(二)人やあやしと見むとつゝましうて、(三)奥に向ひて居給へり。尼君、「かの(四)聖の親王の御女は、二人と聞きしを、兵部卿の(五)宮の北の方は、いづれぞ」と宣へば、紀伊守「この(六)大將殿の御後のは、(七)劣り腹なるべし。(八)事々しくもてなし給はざりけるを、(九)いみじく悲び給ふなり。(一〇)はじめのはた、いみじかりき。ほと〳〵出家もし給ひつべかりきかし」など語る。(一一)かのわたりの親しき人なりけりと見るにも、(一二)流石おそろし。紀伊守「怪しく、(一三)樣の物と、彼所にてしも亡せ給ひける事。昨日も(一四)いと不便に侍りしかな。川近き所にて、(一五)水をのぞき給ひて、いみじく泣き給ひき。(一六)上にのぼり給ひて、柱に書きつけ給ひし、

薫　見し人はかげもとまらぬ水の上に落ちそふ涙いとゞせきあへず

となむ侍りし。言にあらはして宣ふ事は少けれど、唯氣色にはいと哀なる御樣になむ見え給ひし。(一七)女はいみじくめで奉りぬべくなむ。(一八)若く侍りし時より、優に

(一)浮舟が
(二)我が樣子を
(三)浮舟が
(四)八宮
(五)中君はどの人ぞ、八宮の姫君は二人なる由をかねて聞き居しに其が二人とも死にたりと紀伊守が言ふ故合點ゆかぬ也
(六)後の妾、即ち浮舟
(七)母方卑しき人なるべし
(八)存生中は薫が格別大切にもせざりしに
(九)死後には
(一〇)大君も非常に悲しまれたり
(一一)此紀伊守は薫の親しき人であつたわいと
(一二)浮舟の心
(一三)揃ひも揃つて
(一四)しにくい事でありし
(一五)薫が
(一六)殿に
(一七)薫の御樣子は
(一八)私が

（一）此方に來て、紀伊守「いとこよなくこそ（二）僻み給ひにけれ。哀にも侍るかな。（三）殘なき御さまを、見奉ること難くて、（四）遠き程に年月を過し侍るよ。親たち物し給はで後は、（五）一所をこそ御代に思ひ聞え侍りつれ。（六）常陸の北の方は、音づれ聞え給ふや」と言ふは、妹なるべし。妹尼「年月に添へては、徒然に哀なる事のみ増りてなむ。常陸はいと久しく音づれ聞え給はざめり。（七）え待ちつけ給ふまじき様になむ見え給ふ」と宣ふに、（八）我が親の名と、あいなく耳とまれるに、また言ふ様、紀伊守「まかり上りて日頃になり侍りぬるを、公事のいと繁くてむづかしくのみ侍るに、（九）拘づらひてなむ。昨日も（一〇）侍はむと思う給へしを、（一一）右大將殿の宇治におはせし御供に仕うまつりて、故八宮の住み給ひし所におはして、日暮し給ひし。（一二）故宮の御女に通ひ給ひしを、まづ（一三）一所は一年亡せ給ひにき。その（一四）御弟、また忍びて（一五）すゑ奉り給へりけるを、去年の春又亡せ給ひにければ、その（一六）御はてのわざせさせ給はむ事、かの寺の律師になむ、さるべき事宣はせて、某も（一七）かの女の裝束一領調じ侍るべきを、せ

（一）妹尼の方
（二）母尼が非常に老けて來た
（三）餘命のなき
（四）遠國に
（五）此母尼をこそ父母の代に
（六）常陸守の妻、此紀伊守の妹、浮舟の母とは別人
（七）常陸守の妻の來る迄母尼は生きて居り難かるべし
（八）浮舟が常陸といふを聞き咎めたる也
（九）かまけて暇がなし
（一〇）此處へ來んと思ひしに
（一一）薫の宇治へ行きし御供をして
（一二）薫は八宮の娘の許に通ひしに
（一三）大君
（一四）浮舟
（一五）宇治に置きたりしに
（一六）一週忌の法事
（一七）法事の時布施にやるべき女の衣裳を一襲こしらへねばならぬが拵へて下さらぬか

(一)浮舟の將來を祝ひたる也
(二)浮舟に
(三)我が若菜をつみて其の人の齡を祝すべき人は今は妹尼の外になし
(四)さう思ふ筈と、妹尼の心
(五)其につけても浮舟が尼でなかつたならばと
(六)「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして」
(七)他の花よりも梅花がなつかしきは匂宮などの戀しさが矢張心の底にしみ附き居るのか
(八)佛に奉る水
(九)仰山らしく
(十)母の孫紀伊守小野に來りて薰の噂をなす、浮舟の感傷
(一〇)去年一昨年は何事がありしぞ抔と母尼に問ひて見ても

入れて、人の持て來たりけるを、尼君見て、

妹尼　山里の雪間のわかな摘みはやしなほおひさきの賴まるゝかな(一)

とて此方に(二)奉れ給へりければ、

浮舟　雪ふかき野邊のわかなも今よりは君がためにぞ(三)年もつむべき

とあるを、然ぞ思すらむと(四)哀なるにも、妹尼「見るかひ(五)あるべき御樣と思はましかば」と、まめやかに打泣い給ふ。閨のつま近き紅梅の、色も香も變らぬを、「春やむ(六)かしの」と、こと(七)花よりもこれに心寄せのあるは、飽かざりしにほひのしみにけるにや。後夜に閼伽(八)奉らせ給ふ。下﨟の尼の少し若きがある、召し出でて花折らすれば、かごと(九)がましく散るに、いと匂ひ來れば、

浮舟　袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかとにほふ春のあけぼの

大尼君の孫の紀伊守なりけるが、この頃上りて來たり。三十ばかりにて、容貌淸げに誇りかなる樣したり。何事か(一〇)去年一昨年など問ふに、ほけ〳〵しき樣なれば、



(一)思ひ寄らずあさましき事もありし身なれば、いと疎まし、すべて朽木などの様にて、人に捨てられて歇みなむ、ともてなし給ふ。されば(二)月頃たゆみなく結ぼほれ、物をのみ思したりしも、(三)この本意のことし給ひて後より、少し晴々しくなりて、尼君とはかなく戯れもしかはし、碁打ちなどしてぞ明し暮し給ふ。行もいとよくして、法華經は更なり、こと法文などもいと多く讀み給ふ。雪深く降り積み、人目絶えたる頃ぞ、實に(四)思ひやる方なかりける。

年もかへりぬ。春のしるしも見えず、氷りわたれる水の音せぬさへ心細くて、(五)君にぞまどふと宣ひし人は、心憂しと思ひ果てにたれど、猶その折などの事は忘れず。

浮舟　かきくらす野山の雪を眺めてもふりにしことぞ今日も悲しき

など、例のなぐさめの手習を、行の隙にはし給ふ。われ世に亡くて年隔たりぬるを思ひ出づる人もあらむかしなど、(六)思ひ出づる時も多かり。若菜を(七)疎かなる籠に

(一)浮舟が自分の戀の經歷を回顧する也
(二)いつとなく常に煩悶し
(三)願通り出家して後
(四)氣のはらし樣なし
(五)「君にぞまどふ路はまどはず」とよみし句をば
(六)浮舟が
(七)疎末なる

思し忘れず訪はせ給はむ、いと嬉しくこそ思う給へ置かめ。(一)侍らざらむ後なむ、哀に思ひ給へらるべき」とて、泣き給ふに、(二)この尼君も離れぬ人なるべし、誰ならむ、と心得がたし。中將(三)「行末の御うしろみは、命も知りがたく頼もしげなき身なれど、(四)然聞えそめ侍りなば、更にかはり侍らじ。(五)尋ね聞え給ふべき人は、まことにものし給はぬか。さやうの事の覺束なきになむ、(六)憚るべき事には侍らねど、猶隔ある心地し侍るべき」と宣へば、妹尼「人(七)に知らるべき樣にて世に經給はば、然もや尋ね出づる人も侍らむ。今は斯(八)かる方に思ひ限りつる有樣になむ。(九)心の趣も然のみ見え侍るを」など語らひ給ふ。(一〇)此方にも消息し給へり。

中將(一一)大かたの世をそむきける君なれどいとふによせて身こそつらけれ

懇に深く聞え給ふことなど多く言ひ傳ふ。中將「兄弟と思しなせ。はかなき世の(一二)物語なども聞えて慰めむ」など言ひ續く。浮舟「心深からむ御物語など、聞き分くべくもあらぬこそ口惜しけれ」と答へて、この厭ふ(一三)につけたる答はし給はず。

(一)私の死後が氣がかり也
(二)妹尼も浮舟の縁者なるべし、中將の心
(三)浮舟の將來の世話をする事は
(四)斯う言ひ出すからには
(五)浮舟を常然世話すべき人は眞に無いのか
(六)其にこだはる譯ではなけれど
(七)浮舟が身を忍ばずに居たらば世話する人が尋ねて來るかも知れぬ
(八)隱れて暮す方に
(九)常人の意向も
(一〇)浮舟へも中將が
(一一)君の出家は只浮世を厭ひての事なるべけれど自分が厭はれた樣でつらく思ふ
(一二)中將の志の懇なる由を歌を取次ぎたる少將尼などが浮舟に語る
(一三)歌の返事はせず

(一)此時丁度よき機會なりしと見えて
(二)中將に隙見させたる也
(三)邪魔になるべき
(四)隙見せる中將の心、是程の美人とは思ひ寄らざりき
(五)浮舟の出家が自分の不行屆から起りしものでもある樣に
(六)自分の樣子が浮舟に聞えさうなれば
(七)中將の心
(八)浮舟が斯く隱れ居るにつきては世間に噂がありさうなものなるに
(九)中將の心
(一〇)是程の美人ならいやな心持もすまい
(一一)尼でも構はぬ竊に手に入れて仕舞はんと
(一二)通常の男女の情交は浮舟がいやがりなされし樣なるが、尼になりたる上は一通りの交りは差支なかるべし
(一三)亡き妻
(一四)浮舟に對する志が加はりては彌親しくすべし
(一五)浮舟の行末が心がかりなるに

はむと思ひて、(一)さるべき折にやありけむ、障子のかけがねのもとにあきたる穴を(二)敎へて、(三)紛るべき几帳など引き遣りたり。(四)いとかくは思はずこそありしか、いみじく思ふ樣なりける人をと、(五)わがしたらむ過の樣に、惜しく悔しく悲しければ、つゝみもあへず、(六)物狂ほしきけはひも聞えぬべければ、退きぬ。(七)斯ばかりの樣したる人を失ひて、尋ねぬ人ありけむや。又、(八)その人かの人の女なむ、行方も知らず隱れにたる、もしは物怨じして、世の背きにけるなど、自ら隱なかるべきを、など怪しく返すがへす思ふ。(九)尼なりとも、斯かる樣したらむ人はうたても覺えじなど、なかなか見所まさりて心苦しかるべきを(一〇)、(一一)忍びたる樣に、猶語ひ取りてむ、と思へば、まめやかに語らふ。中將「(一二)世の常の樣には思し憚る事もありけむを、かかる樣になり給ひにたるなむ、心安く聞えつべく侍る。さやうに敎へ聞え給へ。來し方の忘れ難くて、かやうに參り來るに、又今(一四)ひとつ志を添へてこそ」など宣(一三)ふ。妹尼「いと行末心ぼそく、(一五)うしろめたき有樣に侍るめるに、まめやかなる樣に

見出し給へり。尼君例の涙もろにて、

妹尼(一)「木がらしの吹きにし山の麓にはたち隱るべきかげだにぞなき

と宣へば、

中將(二)「まつ人もあらじと思ふ山里のこずゑを見つゝなほぞ過ぎうき

いふかひなき人の御ことを、猶盡せず宣ひて、中將「樣かはり給へらむ樣を、いささか見せ給へよ」(三)と、少將の尼に宣ふ。中將(四)「それをだに、契りし驗にせよ」と責め給へば、(五)入りて見るに、殊更にも人に見せまほしき樣してぞおはする。薄鈍色の綾、中には萱草など、澄みたる色を著て、いとさゝやかに、(六)樣體をかしく、今めきたる容貌に、髮は(七)五重の扇を廣げたる樣に、こちたき末つきなり。細に美しき面樣の、假粧をいみじくしたらむ樣に、紅く匂ひたり。行などをし給ふも、猶珠數は近き几帳にうち懸けて、經に心を入れて讀み給へる樣、繪にも畫かまほし。(八)うち見る毎に涙の留め難き心地するを、まいて(九)心かけ給はむ男は、如何に見奉り給

(一)今は浮舟も出家したれば君を泊めん樣もなし
(二)今は誰も待つ人はあらじと思へど矢張昔戀しさに素通りも出來ぬ
(三)浮舟
(四)せめてさうなりともして前に浮舟を見せんと我に言ひし約束のしるしにせよ
(五)少將の尼が
(六)浮舟が
(七)短く切り揃へたる髮の形容、冬は檜扇を薄様にてつゝみて持つ五重或は三重などいふある也
(八)少將尼の心
(九)中將の心を察する也

（一）「松門到㆑曉月徘徊、柏城盡日風蕭瑟」上のつゞきの句
（二）浮舟の心
（三）野山を修行して歩けば也
（四）浮舟の心
（五）道理で今日は涙がとまらぬと
（六）僧都の事下に見えず此處にて僧都は歸れるなるべし
（七）俗人の姿
（八）來たる人は浮舟の靡かぬを恨みし中將なり
（九）浮舟が尼になりて己の戀の無になりし事をも話さんとて
（一〇）他山の
（一一）此樣な處には得意の人の居るは不似合、中將の心
（一二）今は來るかひもなけれども紅葉の面白さに矢張昔に立返つて泊りてもゆきたし

せて、僧都「松門に曉いたりて月徘徊す」（一）と、法師なれど、いと由々しう恥かしげなる樣にて宣ふ事どもを、（二）思ふ樣にも言ひ聞かせ給ふかなと聞き居たり。今日は終日に吹く風の音もいと心細きに、おはしたる人も、僧都「あはれ山伏は、（三）斯かる日にぞ音は泣かるなるかし」と言ふを聞きて、（四）我も今は山伏ぞかし、理に（五）とまらぬ涙なりけりと思ひつゝ、（六）端の方に立ち出でて見れば、遙なる谷の軒端より、狩衣姿いろ〳〵に立ち雜りて見ゆ。山へ上る人なりとても、此方の道には、通ふ人もいとたまさかなり。黒谷とかいふ方より歩く法師の跡のみ、稀々は見ゆるを、例（七）の姿見つけたるは、あいなく珍らしきに、（八）この恨み侘びし中將なりけり。（九）かひなき事も言はむとて物したりけるを、紅葉のいと面白く、（一〇）外の紅に染め勝したる色々なれば、入り來るよりぞ物哀なりける。（一一）此處にいと心地よげなる人を見つけたらむは怪しくぞ覺ゆべきなど思ひて、中將「暇ありて徒然なる心地し侍るに、紅葉もいかにと思う給へてなむ。（一二）猶立ち返り旅寢もしつべき木のもとにこそ」とて、

(一)浮舟に違なし
(二)薫に
(三)小宰相に
(四)薫も浮舟も
(五)はつきり其とも突き留めずに
(六)薫に

㊈ 中將又小野を訪ひて浮舟の出家を悲しむ

(七)横川に
(八)小野に
(九)浮舟が若い身で尼になどなりては末遂げずして却て罪を造る樣なものなるに、私に相談もなく尼にして仕舞ひしは不都合なり
(一〇)浮舟にいふ也
(一一)浮舟が
(一二)お世話申すべし、浮舟にいふ詞
(一三)世間の榮華を見聞して其に惹かれて居ては世間を離るゝ事むつかしく
(一四)「陵園妾、顏色如レ花命如レ葉」白氏文集「陵園妾」の句

らず。宮は、「(一)それにもこそあれ。(二)大將に聞かせばや」(三)と、この人にぞ宣はすれど、(四)何方にも隱すべき事を、(五)定めて然ならむとも知らずながら、(六)恥かしげなる人に、うち出で宣はせむもつゝましく思して、歇みにけり。

姫宮癒り果てさせ給ひて、僧都も(七)上り給ひぬ。(八)彼處に寄り給へれば、いみじく恨みて、妹尼「(九)なか〳〵斯かる御有樣にて、罪も得ぬべきことを、宣ひも合せずなりにける事をなむ。いと怪しき」など宣へどかひなし。僧都「(一〇)今はたゞ御行をし給へ。老いたる若き、定なき世なり。はかなきものに思し取りたるも、理なる御身をや」と宣ふにも、いと恥かしくなむ(一一)覺えける。僧都「御法服新しくし給へ」とて、綾羅絹などいふ物奉りおき給ふ。僧都「某が侍らむ限は、(一二)仕うまつりなむ。なにか思し煩ふべき。常なき世に生ひ出でて、(一三)世間の榮花に願ひ纏るゝ限なむ、所狹く捨てがたく、我も人も思すべかゝめる。かゝる林の中に行ひ勤め給はむ身は、何か怨めしくも恥かしくも思すべき。このあらむ命は、(一四)葉の薄きが如し」と言ひ知ら

思ひ喜び侍りて、隨分に勞りかしづき侍りけるを、斯く(一)なりにたれば、怨み侍るなり。實にぞ、容貌はいとうるはしく淸らにて、行ひ(二)やつれむもいとほしげになむ侍りし。何人にか侍りけむ」と、物よく言ふ僧都にて、語りつゞけ申し給へば、小宰相「いかでか、(三)さる所によき人をしも取りもて行きけむ。さりとも(四)今は知られぬらむ」など、この(五)宰相の君ぞ問ふ。僧都「知らず。(六)さもや語らひ侍らむ。誠にやむごとなき人ならば、何か隱も侍らじをや。田舍人の女も、さる樣したるこそは侍らめ。(七)龍の中より、佛生れ給はずばこそ侍らめ。たゞ人にては、(八)いと罪輕き樣の人になむ侍りける」など聞え給ふ。その頃(九)かのわたりに消え失せにけむ人を思し出づ。この御前なる人(一〇)も、(一一)姉君の傳に、怪しくて亡せたる人とは聞き置きたれば、其にやあらむとは思ひけれど、(一二)定なきことなり、僧都も、僧都「かの人、(一三)世にあるものとも知られじと、よくもあらぬ(一四)敵だちたる人もある樣におもむけて、隱し忍び侍るを、事の樣の怪しければ、啓し侍るなり」と、生隱す氣色なれば、(一五)人にも語

(一)浮舟出家せし故に
(二)佛の勤にかゝりて容貌を衰へさせるも
(三)宇治の院に魔物が
(四)誰といふ事が分りしならん
(五)浮舟の事を心に思ひ居る故根問するなるべし
(六)もう素姓を話したかも知れぬ
(七)龍女が成佛せし例もないではなし
(八)性質の素直なると容貌の美しきことと等をいふなるべし
(九)宇治で居なくなりし浮舟の事を中宮が思ひ出す
(一〇)小宰相も
(一一)中君からの話で浮舟の死樣の變なる事は承知し居たれば
(一二)其も其ともきまらぬ事ではあり
(一三)自分が生きて居るを人に知られたくなしと
(一四)敵の樣な人もある樣な口振で
(一五)小宰相も

御物怪の執念き事、樣々に名のるが恐ろしき事など宣ふ序に、僧都「いと怪しく稀有の事をなむ見給へし。この三月に、年老いて侍る母の、願ありて初瀨に詣でて侍りし、歸さの中宿に、宇治の院といひ侍る所に罷り宿りしを、斯くの如、人住まで年經ぬる大なる所は、善からぬ物必ず通ひ棲みて、(一)重き病者の爲惡しき事どもやと、思う給へしも著く」とて、かの(二)見つけたりし事どもを語り聞えたまふ。中宮「實にいと珍らかなる事かな」とて、近く侍ふ人々皆寢入りたるを、恐ろしく思されて、(三)驚かさせ給ふ。(四)大將の語らひ給ふ宰相の君しも、(五)この事を聞きけり。驚かせ給ひける人々は、何とも聞かず。僧都、怖ぢさせ給へる(六)御氣色を、心もなき事啓してけりと思ひて、(七)委しくもその程の事をば言ひさしつ。僧都「その女人、この度罷り出で侍りつる便に、小野に侍りつる尼どもあひ訪ひ侍らむとて、まかり寄りたりしに、泣く〳〵、出家の志深き由懇に語らひ侍りしかば、頭おろし侍りにき。某が妹、故衞門のかみの妻に侍りし尼なむ、亡せにし女子の代にと、

(一)母尼をいふ
(二)浮舟を
(三)おこしたり
(四)薰の情人小宰相
(五)寢ながら聞き居し也
(六)中宮の樣子を見て
(七)委しく當時の事情を述べず半にてやめたり

(一)鼠色のころもは妹尼の仕立てなれて居る事故
(二)浮舟が來て以來思ひもよらぬ光を庵に添へたりと思ひ居しに

㊇ 僧都、明石中宮に浮舟の事を語る

(三)僧都の祈の效が著はれて
(四)女一宮の御寢所の次の間に夜詰をさせる
(五)お伽をつとめて草臥れたる人は
(六)女一宮と
(七)僧都を
(八)僧都のたのもしさが
(九)私の壽命ももう長からぬ樣に

給ふ。鈍色は手馴れにし事なれば、小袿袈裟などしたり。ある人々も、かゝる色を縫ひ著せ(一)奉るにつけても、「いと(二)覺えず、嬉しき山里の光と、旦暮見奉りつるものを、口惜しきわざかな」と、あたらしがりつゝ、僧都を恨み謗りけり。

一品宮の御惱、實にかの弟子の言ひしも著く、著き(三)事どもありて、癒らせ給ひにければ、いよ／＼いと尊きものに言ひのゝしる。名殘も恐ろしとて、御修法延べさせ給へば、頓にもえ歸り入らで侍ひ給ふに、雨など降りてしめやかなる夜、召して、(四)夜居に侍はせ給ふ。日頃いたく侍ひ(五)困じたる人は、皆休みなどして、御前に人少にて、近く起きたる人少き折に、同じ(六)御帳におはしまして、中宮「昔より頼(七)ませ給ふ中にも、この度なむいよ／＼後の世も斯くこそはと、頼もしき(八)事増りぬる」など宣はす。僧都「世の(九)中に久しく侍るまじき樣に、佛なども敎へ給へる事ども侍るうちに、今年來年過し難き樣になむ侍りければ、佛を紛なく念じつとめ侍らむとて、深く籠り侍るを、かゝる仰言にて、まかり出で侍りにし」など啓し給ふ。

(一)心ばかりは此世を厭ひて出家はしたれど我身の行末はどうなる事やら
(二)少將尼などが中將へ
(三)直筆をやつては困ると
(四)私共が寫したらば
(五)浮舟の返事したるが珍らしきにつけても、中將の心
(六)妹尼
(七)尼の身では浮舟にも出家を勸めるのが當前とは思へど
(八)若い身で尼になつて此先をどうする御積ぞ
(九)後々迄安心のなる樣にして置いてあげたしと
(一〇)「泣く〳〵」の上に「と」あるべし
(一一)法衣の事

思さるらむ、はかなき物のはしに、
浮舟「心(一)こそうき世のきしをはなるれど行方も知らぬあまのうき木を
と例の手習にし給へるを、包みて(二)奉る。浮舟「(三)書き寫してだにこそ」と宣へど、少將「(四)なか〳〵書き損ひ侍りなむ」とて遣りつ。珍(五)らしきにも、言ふ方なく悲しくなむ覺えける。

(六)物詣の人歸り給ひて、思ひ騒ぎ給ふ事限なし。妹尼「(七)斯かる身にては、進め聞えむこそはと思ひなし侍れど、殘(八)多かる御身を、いかで經給はむとすらむ。己は、世に侍らむこと今日明日とも知り難きに、いかで後(九)安く見置き奉らむと、萬に思ひ給へてこそ、佛にも祈り聞えつれ」と、伏し轉びつゝ、いといみじげに思ひ給へるにも、實の親の、やがて骸もなきものと思ひ惑ひ給ひけむ程推し量るぞ、先づいと悲しかりける。例の答もせで背き居給へる樣、いと若く美しげなれば、妹尼「いと物はかなくぞおはしける。つらき御心なれど」(一〇)泣く〳〵御衣(一一)の事など急ぎ

(一)我事終りたり
(二)一旦既に背きし世を又尼になりて再び背きし事よ
(三)浮舟の不慮の出家の爲に人々が
(四)中將へ浮舟出家の事を知らせやりたり
(五)中將が
(六)中將の心
(七)少將尼などに
(八)少將尼がよき序を以て見せんと言ひしに
(九)申上樣もなき飛んでもなき事につきては
(一〇)浮舟が出家されたりと聞きては我も追續ぎて出家したき心地す
(一一)浮舟が此文を
(一二)中將が浮舟の出家を聞きて是ではもう仕方がなしと思ふも氣の毒ではあるが、浮舟の心

浮舟「なきものに身をも人をも思ひつゝ捨ててし世をぞ更に捨てつる
今はかくて限りつるぞかし」(一)と書きても、猶自らいとあはれと見給ふ。

浮舟かぎりぞと思ひなりにし世の中をかへす〴〵もそむきぬるかな(二)

同じ筋の事を、とかく書きすさび居給へるに、中將の御文あり。(三)物騒しくあきれたる心地しあへる程にて、(四)かゝる事なむと言ひてけり。(五)いとあへなしと思ひて、(六)斯かる心深くありける人なりければ、はかなき答をもしそめじと思ひ離るゝなりけり、さてもあへなきわざかな、いとをかしく見えし髪の程を、確に見せよと一夜も(七)語らひしかば、(八)然るべからむ折にと言ひしものをと、いと口惜しくて、立ちかへり、

中將聞えむ方なきは、(九)

(一〇)岸遠く漕ぎはなるらむあまぶねに乗り後れじといそがるゝかな

例ならず(一一)取りて見給ふ。物の哀なる折に、(一二)今はと思ふも哀なるものから、いかゞ

みぞ生ける験ありて覺え給ひける。

皆人々(二)出で靜まりぬ。夜の風の音に、この人々(三)は、「心細き御住居(四)も、しばしの事ぞ、今いとめでたくなり給ひなむと、賴み聞えつる御身を、斯く(五)しなさせ給ひて、殘多かる御世の末を、如何にせさせ給はむとするぞ。老い衰へたる人だに、(六)今は限と思ひ果てられて、いと悲しきわざに侍る」と言ひ知らすれど、猶たゞ今は心安く(七)嬉し。世に(八)經べきものとは思ひかけずなりぬるこそは、いとめでたき事なれと、胸の明きたる心地ぞし給ひける。(九)つとめては、流石に人の許さぬこと(一〇)なれば、變りたらむ樣見え(一一)むもいと恥かしく、髮のすその俄におほどれたる樣に(一二)、しどけなくさへ削がれたるを、むづかしき事ども言はで(一三)、繕はむ人もがなと、何事につけてもつゝましくて、暗うしなしておはす。思ふ事を人に言ひつゞけむ言の葉は、もとよりだにはかばかしからぬ身を、まいて懷しく(一四)ことわるべき人さへなければ、唯硯に向ひて、思ひ餘る折には、手習をのみぞ、たけき事とは書きつけ給ふ。

(一)生甲斐ある樣に感じたり
(二)僧都が京へ出で行きし也
(三)少將尼等は
(四)浮舟の此處に寂しく暮さるゝも一寸の間の事
(五)尼になつて仕舞はれて
(六)尼になれば是が一生の終の樣に思はれて
(七)浮舟の感じ
(八)もう人並の生活をすべき身でなしと極まつて仕舞つたのが結構なのぢやと、浮舟の心
(九)翌朝は
(一〇)無理に尼になつた事故
(一一)人に見らるゝも
(一二)亂れひろがりたる樣に
(一三)小言をいはずに梳つてくれる人がほしいと
(一四)親身に相談相手になりてくれる人も無ければ

(一)己のなじみなる僧都の伴人をもてなすとて
(二)銘々己の知人の稀に來たるを珍らしがりて一寸した饗應などせんとて其方にかゝり居る處へ
(三)浮舟の尼になる事を
(四)僧都が上に著たる自分の衣や袈裟を
(五)眞似事だけにとて浮舟に著せて
(六)何方へ向いて拜してよいか分らぬ時に
(七)なぜ其樣な無分別な事をなさる
(八)妹尼
(九)是程にしかけたものを邪魔するも良からぬ事と僧都が思ひて
(一〇)少將尼が
(一一)授戒の時に誦する文句也「流轉三界中、恩愛不能斷、弃恩入無爲、眞實報恩者」
(一二)經文には恩愛不能斷といへど我は疾くに恩愛を斷ちはてしものを、浮舟の心
(一三)流石に悲しからぬにもあらず
(一四)額髮は
(一五)かく美しき形を
(一六)容易にさせさうにもなく尼君等が一同にて止めたりし出家の事を

このわたくしの知りたる人にあへしらふとて、斯かる所につけては、皆とり〴〵(一)に(二)心よせの人々珍らしくて出で來たるに、はかなき事しける見入れなどしける程に、こもき一人して、斯かる事なむと少將の尼(三)に告げたりければ、惑ひて來て見るに、我が(四)御上の衣袈裟などを、ことさら(五)ばかりとて著せ奉りて、僧都「親の御方を拜み奉り給へ」と言ふに、何方(六)とも知らぬ程なむ、え忍びあへ給はで泣き給ひにける。少將「あなあさましや。など(七)斯くあうなき事はせさせ給ふ。上(八)歸りおはしましてば、如何なる事を宣はせむ」と言へど、斯(九)ばかりにし初めつるを言ひ亂るものしと思ひて、僧都諫め給へば、寄りてもえ(一〇)妨げず。僧都「流轉三界中」(一一)などいふにも、斷(一二)ちはてしものをと思ひ出づるも、流石(一三)なりけり。御髮もそぎ煩ひて、弟子僧「のどやかに、尼君たちして直させ給へ」と言ふ。額(一四)は僧都ぞ削ぎたまふ。僧都(一五)「かゝる御容貌やつし給ひて悔い給ふな」など、尊き事ども說き聞かせ給ふ。(一六)頓にせさすべくもなく、皆言ひ知らせ給へる事を、嬉しくもしつるかなと、これの

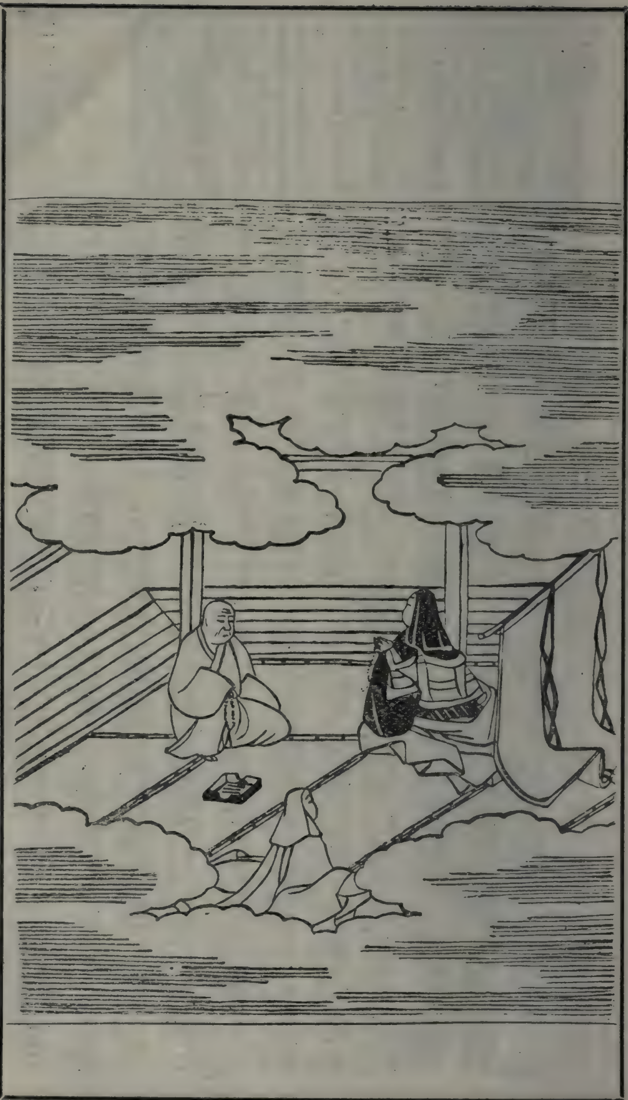
(一)病氣の加減の惡い樣な風を示して
(二)戒を受けても無駄になるかも知れぬ
(三)若き時は一向平氣なりしに
(四)浮舟が其樣に出家を御急ぎならば
(五)切りたる髮を入るべき爲なるべし
(六)僧
(七)弟子の僧の心、成程あの樣な境遇にありし人なれば俗體で居るも異なものならんと
(八)浮舟の出家を
(九)切るに忍びず躊躇したり
(一〇)自分の兄の僧
(一一)自分の部屋に

むと、いと口惜しくて、みだり心地(一)の惡しかりし程にしたる樣にて、浮舟「いと苦しく侍れば、重くならば忌む事(二)かひなくや侍らむ。猶今日は嬉しき折とこそ思う給へつれ」とて、いみじく泣き給へば、聖心にいといとほしく思ひて、僧都「夜や更け侍りぬらむ。山より下り侍る事、(三)昔は事とも思う給へられざりしを、年の老ゆる儘には、堪へ難く侍りければ、打休みて内裏には參らむと思ひ侍るを、然思し(四)急ぐ事なれば、今日仕う奉りてむ」と宣ふに、いと嬉しくなりぬ。鋏とりて、櫛の箱の蓋(五)さし出でたれば、僧都「いづら、大德達こゝに」と呼ぶ。初見つけ奉りし、(六)二人ながら伴にありければ、呼び入れて、僧都「御髪おろし奉れ」といふ。實に(七)いみじかりし人の御有樣なれば、うつし人にて世におはせむもうたてこそあらめと、この阿闍梨も理(八)に思ふに、几帳の帷子の綻より、御髪をかき出し給へるが、いとあたらしくをかしげなるになむ、しばし(九)鋏を持て休らひける。

かゝる程に、少將の尼は、(一〇)兄の阿闍梨の來たるに逢ひて、下(一一)に居たり。左衞門は、

年月經れば、女の御身といふもの、いとたい〲しき(一)ものになむ」と宣へば、浮舟「幼く侍りし程より、物をのみ思ふべき有樣にて、親なども、尼になしてや見ましなどなむ、思ひ宣ひし。まして少し物思知り侍りて後は、(二)例の人樣ならで、後の世をだにと思ふ心深く侍りしを、亡くなるべき程のやう〱近くなり侍るにや、心地のいと弱くのみなり侍るを、猶いかで」とて打泣きつゝ宣ふ。(三)怪しく、(四)かかる容貌有樣を、などて身を厭はしく思ひはじめ給ひけむ、(五)物怪もさこそ言ふなりしか、と思ひ合するに、(六)然る樣こそはあらめ、(七)今までも生きたる人かは、(八)惡しき物の見つけ初めたるに、いと恐ろしく危き事なり、と思して、僧都「とまれかくまれ、思し立ちて宣ふを、(九)三寶のいとかしこくほめ給ふ事なり。法師にて聞え返すべき事にあらず。御忌む事はいと易く授け奉るべきを、急なる事にて罷出たれば、今宵はかの(一〇)宮に參るべく侍り。明日よりや御修法始まるべく侍らむ。七日果てて罷出むに、(一一)仕う奉らむ」と宣へば、かの(一二)尼君おはしなば必ず言ひ妨げて

(一)都合のわるきもの
(二)出家でもしてせめて後世をでも助かりたしと
(三)僧都の心
(四)これ程の器量を持ちながら
(五)蘇生を祈りし時の物怪も、此人は世を恨みて身を投げんとせし人なる由を言ひし事前に見えたり
(六)出家を望む相當の譯があるならん
(七)一體ならばあの時にとうに死んで居る筈の人ぢや
(八)一度物怪に取り附かれたる人なれば
(九)出家は佛の稱讃し給ふ事也、其を法師の身でよせとは言はれず
(一〇)女一宮に
(一一)出家させてあげん
(一二)妹尼が居たらば、浮舟の心



(一)尼になりて僧都に戒を受けたしと
(二)浮舟の方に
(三)浮舟が
(四)用もないに手紙をあげるも工合悪き故
(五)人並にかはりて
(六)色々親切にして下さる僧都の御志を不束ながら有難く思へど
(七)世間並の生活は出來にくゝ此世に居たゝまれぬ心地する故
(八)人並の女としては
(九)無暗に出家などはしたがらぬものぢや
(一〇)出家せんと思ひ立つ當座は

し給ひて、忌む(一)事受け奉らむと宣ひつる」と語る。立ちて此方に(二)いまして、僧都「此處にやおはします」とて、几帳のもとについ居給へば、つゝましけれど、ゐざりよ(三)りて、答し給ふ。僧都「不意にて見奉り初めてしも、然るべき昔の契ありけるにこそと思う給へて、御祈など懇に仕う奉りしを、法師は、(四)その事となくて、御文聞え承らむも便なければ、自然になむ疎なる様になり侍りぬる。(五)いと怪しき様に、世を背き給へる人の御あたりに、いかでおはしますらむ」と宣ふ。浮舟「世の中に侍らじと思ひ立ち侍りし身の、いと怪しくて今まで侍るを、心憂しと思ひ侍るものから、萬に(六)物せさせ給ひける御心ばへをなむ、いふかひなき心地にも、思う給へ知らるゝを、猶世づかずのみ、(七)遂にえ留るまじく思う給へらるゝを、尼になさせ給ひてよ。世の中に侍るとも、(八)例の人にて、ながらふべくも侍らぬ身になむ」と聞え給ふ。僧都「まだいと行く先遠げなる御程に、いかでか、(九)ひたみちに然は思し立たむ。却りて罪ある事なり。思ひ立ちて、心(一〇)を起し給ふ程は強く思せど、

て、浮舟「心地のいと惡しうのみ侍るを、僧都の下りさせ給へらむに、忌む事受け侍らむとなむ思ひ侍るを、さやうに聞え給へ」と語ひ給へば、ほけ〴〵しう打肯く。(一)例の方におはして、(二)髮は尼君のみけづり給ふを、他人に手觸れさせむもうたて覺ゆるに、(三)手づから將えせぬ事なれば、唯少し解き下して、(四)親に今一度斯うながらの樣を見えずなりなむこそ、(五)人やりならずいと悲しけれ、いたく煩ひしけにや、髮も少し落ち細りにたる心地すれど、何ばかりも衰へず、いと多くて、六尺ばかりなる末などぞ、いと美しかりける。(六)筋なども、いと細に美しげなり。浮舟「斷かれとてしも」(七)と、獨言ち居給へり。

暮方に僧都ものし給へり。南面拂ひしつらひて、圓なる頭つきども、行きちがひ騷ぎたるも、例に變りていと恐ろしき心地す。(八)母の御方に參り給ひて、僧都「如何にぞ月頃は」など宣ふ。僧都(九)「東の御方は物詣し給ひにきとか。此のおはせし人(一〇)は、猶物し給ふや」など問ひ給ふ。母尼「然、(一一)此處に留りてなむ。心地惡しとこそ物

(一)母尼に
(二)浮舟が自分の居間にかへりて
(三)いつも妹尼に梳りて貰ふに
(四)浮舟の心
(五)尼にならぬ前の顏かたちを
(六)髮の毛が細きたちにて
(七)遍昭法師「たらちねは斯かれとてしもぬば玉のわが黑髮は撫でずやありけん」
(八)母尼
(九)妹尼は
(一〇)浮舟は
(一一)浮舟が

ほ悪の心や、斯くだに思はじ、など心一をかへさふ。(一)辛うじて鷄の鳴くを聞きて、いと嬉し。母の御聲を聞きたらむは、まして如何ならむ、と思ひ明して、心(二)地もいと悪し。供にて渡るべき人も頓に來ねば、猶臥し給へるに、(三)鼾の人はいと疾く起きて、粥などむづかしき事どもをもてはやして、(四)母尼「御前に疾く聞し召せ」(五)など寄り來て言へど、まかなひもいと心づきなく、(六)うたて見知らぬ心地して、浮舟「惱ましくなむ」とことなしび給ふを、(七)強ひて言ふもいと骨無し。

下衆々々しき法師ばらなど數多來て、下僧「僧都今日下りさせ給ふべし」「など俄には」と問ふなれば、下僧「一品宮(八)の御物怪に惱ませ給ひける、山の座主(九)御修法仕う奉らせ給へど、なほ僧都參らせ給はでは驗なしとて、昨日二度なむ召し侍りし。(一〇)左大臣殿の四位少將、昨夜夜更けてなむ上りおはしまして、后の宮の御文など侍りければ、下りさせ給ふなり」など、いと花やかに言ひなす。(一一)恥かしくとも、逢ひ(一二)て尼になし給ひてよと言はむ、(一三)さかしら人少くてよき折にこそ、と思へば、起き

(一)自ら制す
(二)行基の「ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」の歌を思へるなるべし
(三)供をして我が部屋に歸るべきこもきも來ねば
(四)さも結構な物の樣に取扱ひて
(五)浮舟に勸むる也
(六)給仕の人も氣にくはず
(七)何氣なく斷るを
七　僧都上京の序に小野に立寄る、浮舟僧都に乞ひて尼になる
(八)女一宮
(九)比叡山の座主
(一〇)夕霧の子息の四位少將
(一一)浮舟の心
(一二)僧都に
(一三)干渉する尼君などが留守にて

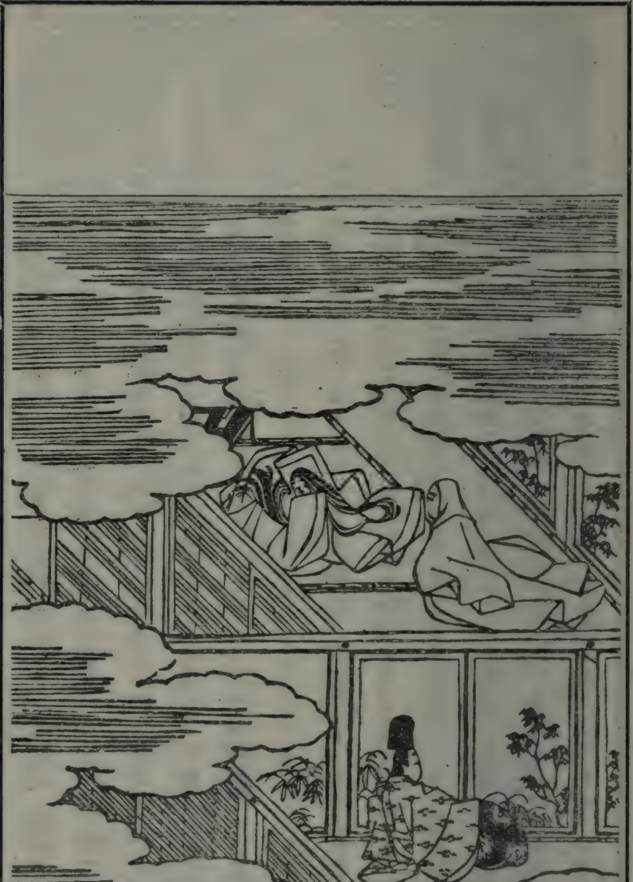
を思ひ亂れ、むづかしとも恐ろしとも物を思ふよ、死なましかば、(一)これよりも恐ろしげなる者の中にこそは、あらましか、と思ひ遣らる。昔よりの事を、まどろまれぬ儘に、常よりも思ひ續くるに、いと心憂く、親と聞えけむ人(二)の御容貌も見奉らず、遙なる東を(三)かへる〴〵年月をゆきて、たまさかに尋ね寄りて嬉し頼もしと思ひ聞えし兄弟(四)の御あたりも、(五)思はずにて絶え過ぎ、(六)さる方に思ひ定め給へりし人につけて、やう〳〵身の憂さをも慰めつべき(七)きはめに、あさましく(八)もて損ひたる身を、思ひもて行けば、(九)宮を少しも哀と思ひ聞えけむ心ぞいと怪しからぬ、唯(一〇)この人の御ゆかりにさすらへぬるぞ、と思へば、(一一)小島の色を例に契り給ひしを、などてをかしと思ひ聞えけむと、(一二)こよなくあきにたる心地す。初より(一三)薄きながらも長閑やかに物し給ひし人(一四)は、この折かの折など、思ひ出づるぞ(一五)こよなかりける。(一六)斯くてこそありけれと、聞きつけられ奉らむ恥かしさは、人より勝りぬべし、流石に(一七)此世には、(一八)ありし御様を、餘所ながらだに何時かは見むずる、と打思ふ。(一九)な

(一)此老尼等よりも恐ろしき地獄の鬼どもの中に居るのであらう
(二)八宮、以下浮舟の心
(三)往復しつゝ
(四)中君の
(五)不慮の出來事の爲に交りが絶え
(六)自分を世話せんとしてくれし薫を力にして
(七)間際に
(八)やり損ひたる
(九)匂宮を假令少しでも慕はしく思つた我が心がけしからん
(一〇)匂の爲に今の身の上にもなりしなりと
(一一)共に舟に乘りし時の匂の歌「年經ともかはらんものか橘の小島の崎に契る心は」
(一二)非常に匂がいやになる
(一三)情は薄いながら
(一四)薫は
(一五)戀しさが
(一六)此様にして生きて居ると薫に聞かれた時の恥かしさは他人に聞かれるよりも一層なるべし、
(一七)現世では
(一八)昔の薫の姿を
(一九)浮舟の心

の人々にや食はれなむと思ふも、惜しからぬ身なれど、例の心弱さは、一(一)橋危がりて歸り來たりけむ者の樣に、侘しく覺ゆ。こもき供に率て(二)おはしつれど、色めきてこの珍らしき男(三)の艶だち居給へる方に歸り去にけり。(四)今や來る今や來ると待ち居給へれど、いとはかなき頼もし人なりや。中將言ひ煩ひて歸りにければ、少將等「いと情なく(五)埋れてもおはしますかな。あたら御容貌を」など、(六)譏りて皆一所に寢ぬ。

夜中ばかりにやなりぬらむと思ふ程に、尼君咳嗽(七)におぼほれて起きにたり。火影に頭つきはいと白きに、黑きものをかづき(八)て、(九)この君の臥し給へるを怪しがりて、鼬(一〇)とかいふなる物が然る業する、額に手をあてて、母尼「怪し。これは誰ぞ」と、執念げなる聲にて見おこせたる(一一)、更にたゞ今食ひてむとするとぞ覺ゆる。(一二)鬼の取りもて來けむほどは、物覺えざりければ、なか〳〵心安し。如何樣にせむと覺ゆるむづかしさにも(一三)、いみじき樣にて生き返り、人になりて、又(一四)ありし色々の憂き事

(一)身を投げんとて行きたる者の路に丸木橋のあるを渡りかけて危がりて歸りたりといふ樣なる物語のありしなるべし
(二)浮舟が母尼の方へ伴ひ入りたれど
(三)中將
(四)浮舟がこもきを待つ也
(五)引込思案で
(六)浮舟を
(七)せきの出るに紛れて
(八)かぶりて
(九)浮舟の
(一〇)鼬のする樣な手つきで
(一一)浮舟の方を
(一二)身を投げんとせし時鬼に取られたる時は、浮舟の心
(一三)浮舟の心
(一四)昔の



(一)少將尼が中將に
(二)もう少し出て來る樣に浮舟に勸めてくれ
(三)少將尼等を
(四)ついぞ行つた事もなき母尼の方に浮舟が隱れたり
(五)浮舟の心中が氣の毒で
(六)浮舟が
(七)物の分らぬ人よりも一層つれなくせらるゝは何か譯のある事ならん
(八)浮舟は妹尼が世話すべき關係の人なりしが
(九)母尼
(一〇)母尼の樣
(一一)同年輩の尼ども

わざと言ふとも無きを、聞きて(一)傳へ聞ゆれば、いと哀と思ひて、中將「猶唯(二)いさゝか出で給へと聞え動かせ」と、この人々(三)をわりなきまで恨み給ふ。少將「怪しきまで、つれなくぞ見え給ふや」とて、入りて見れば、例はかり(四)そめにもさし覗き給はぬ、老人の御方に入り給ひにけり、あさましく思ひて、斯くなむと聞ゆれば、中將「かゝる所にながめ給ふらむ(五)心の中の哀に、大方の有樣なども、情なかるまじき人(六)の、いと餘り、思ひ(七)知らぬ人よりも勝にもてなし給ふめるこそ。それも物懲し給へるか。猶如何なる樣に世を恨みて、何時までおはすべき人ぞ」など、有樣問ひて、いとゆかしげにのみ思いたれど、細なる事は、いかでかは言ひ聞かせむ。唯、少將「知り(八)聞え給ふべき人の、年頃は疎々しき樣にて過し給ひしを、初瀬に詣であひ給ひて、尋ね聞え給へる」とぞ言ふ。姫君はいとむづかしとのみ聞く老人(九)のあたりにうつぶし臥して、寢も寢られず。宵惑(一〇)はえも言はず、おどろ〳〵しき鼾しつゝ、前にもう(一一)ちすがひたる尼ども二人臥して、劣らじと鼾あはせたり。いと怖ろしく、今宵こ

月さし出でてをかしき程に、晝文ありつる中將おはしたり。あなうたて、(一)こは何ぞと覺え給へば、奥深く入り給ふを、少將「(二)さも餘りにもおはしますものかな。(三)御志のほども、哀まさる折にこそ侍るめれ。(四)ほのかにも聞え給はむことも聞かせ給へ。(五)しみつかむ事の樣に思したるこそ」など言ふに、いとうしろめたく覺ゆ。(六)おはせぬ由を言へど、晝の使の、(七)一所など問ひ聞きたるなるべし、いと言多く恨みて、中將「御聲も聞き侍らじ。唯氣近くて聞えむことを、(八)聞きにくしとも思しことわれ」と、萬に言ひ侘びて、中將「いと心憂く。所につけてこそ物の哀もまされ、(九)餘り斯かるは」などあばめつゝ、(一〇)

中將「山里のあきの夜ふかきあはれをも物おもふ人はおもひこそ知れ

(一一)おのづから御心も通ひぬべきを」などあれば、少將「尼君おはせで、(一二)紛らはし聞ゆべき人も侍らず。(一三)いと世づかぬ樣ならむ」と責むれば、

(一四)浮舟うきものと思ひも知らですぐす身を物思ふ人とひとは知りけり

(一)どうしたものぞ
(二)それでは餘り愛想がなさ過ぎる
(三)中將のわざ／＼來た御志にも此樣な折ひとしは感ずべき筈
(四)中將の言ふ事も仄にでもよいから聞いて御上げなされ
(五)中將のいふ事を聞いて居ればそれが身體にしみ附いて離れぬ物でもあるかの樣に恐ろしがられるのはけしからん
(六)浮舟も初瀬へ行きたる積にして斷りたれども
(七)浮舟一人殘り居る由を聞いて行つたものと見えて
(八)聞いて見た上でいやとも應とも極めて下され
(九)斯う頭から相手になつて下さらぬのはひど過ぎる
(一〇)批難しつゝ
(一一)我も物思のある身故君と我とはよく氣が合ふ譯なるに
(一二)うまく取りなすべき人も居ず
(一三)返歌をせねば餘り愛想がなさすぎる
(一四)自分は我身を別に憂しとも感ぜずに居るのに、物思ふ身ぞと人から言ひなされるのは心外也

(一)碁も甚だ覺束なかつた
(二)少將尼が自分の方が強からんと思ひて浮舟に先をさせたるに浮舟の方が餘程強かりしかば
(三)妹尼の
(四)碁を
(五)兼々自慢して居られしがいよ〳〵鼻を高くして、僧寛蓮碁の名手なるによりて碁聖大德と稱せらる、宇多醍醐の頃の人
(六)僧都の詞をまねる也、我が碁は天下に有名では無いが
(七)妹尼の碁は
(八)少將尼が額つきの見にくき尼の身で醉狂な遊藝の好みだてをするを見て
(九)面倒な事をしはじめたもの哉と碁を打ちたるを後悔して
(一〇)浮舟が
(一一)秋の夕の悲しさを思ひ知りて悲しむ譯ではなけれど、つく〴〵と眺め居れば淚がこぼれてせん方なし

碁をうたせ給へ」といふ。浮舟「いと怪しうこそはありしか」とは宣へど、打たむと思したれば、盤取りに遣りて、(一)(二)我はと思ひて先せさせ奉りたるに、いとこよなければ、また手直して打つ。少將「尼上疾う歸らせ給はなむ。この御碁見せ奉らむ。(三)かの御碁ぞいと強かりし。僧都の君早うよりいみじう(四)好ませ給ひて、(五)けしうはあらじと思したりしを、いと碁聖大德になりて、(六)さし出でてこそ打たざらめ、御碁には負けじかし、と聞え給ひしに、遂に僧都なむ二つ負けさせ給ひし。(七)碁聖が碁には勝らせ給ふべきなゝめり、あないみじ」と興ずれば、(八)さだすぎたる尼額の見つかぬに、物好するに、(九)むづかしき事もしそめてけるかなと思ひて、心地惡しとて臥し給ひぬ。少將「時々は晴々しうもてなしておはしませ。あたら御身を、いみじく沈みてもてなさせ給ふこそ口惜しく、玉に瑕あらむ心地し侍れ」と言ふ。夕暮の風の音も哀なるに、(一〇)思ひ出づる事多くて、

浮舟「(一一)こゝろには秋の夕をわかねどもながむる袖につゆぞみだるゝ

浮舟「はかなくてよにふる川の憂きせには尋ねもゆかじふたもとの杉(一)

と手習に交りたるを(二)、尼君見つけて、妹尼「二本(三)は、またもあひ聞えむと、思ひ給ふ人あるべし」と、戯言を言ひ當てたるに、胸つぶれて、面赤め給へるも、いと愛敬づき美しげなり。

妹尼(四)ふる川の杉のもとだち知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る

異なることなき答(五)を口疾く言ふ。忍びて(六)と言へど、皆人慕ひつゝ、此處には人少にておはせむ(七)を、心苦しがりて(八)、心ばせある少將の尼、左衛門とてある大人しき人、童ばかりぞ留めたりける。

皆出で立ちぬるをながめ出でて、あさましき事を思ひながらも(九)、今は如何はせむ(一〇)と、頼もし人に思ふ人一人ものし給はぬは、心細くもあるかなと、いと徒然なるに、中將の御文あり。「御覽ぜよ」と言へど(一一)、聽きも入れ給はず。いとゞ人も見えず、徒然と來し方行く先を思ひ屈し給ふ。少將「苦しきまでも眺めさせ給ふかな。御

---

(一)かく憂き身なれば初瀬詣もする氣にならぬ、二本の杉は初瀬の名木也「初瀬川古川のべに二本ある杉、年を經て又も逢ひ見ん二本ある杉」
(二)書きまぜてあるを
(三)二本の杉を歌によめるを以て見れば再會を望む人のあるならん　前の引歌によりていふ也
(四)浮舟の素姓は知らねども我は只亡き娘と思ふ
(五)つまらぬ返歌を
(六)妹尼は獨り窃に行く積なれど同行を望む者多くて
(七)浮舟が
(八)妹尼が
(九)我身の成行をあさましく思ひながらも、以下浮舟の心
(一〇)斯うなつては據所なしと諦めて力にして居た妹尼が留守では
(一一)少將の尼などが

あり美しきに、萬の咎見ゆるして、旦暮の見物にしたり。少し打笑ひ給ふ折は、珍(一)らしくめでたきものに思へり。

九月になりて、この尼君(二)初瀬に詣づ。年頃いと心ぼそき身に、戀しき人(三)の上も思ひ歎まれざりしを、斯くあらぬ人とも(四)覺え給はぬ慰めを得たれば、觀音の御しるし嬉しとて、かへり申(五)だちて、詣で給ふなりけり。妹尼「いざ給へ。人やは知らむ(六)とする。同じ佛なれど、さやうの所に行ひたるなむ、驗ありてよき例多かる」と唆かし立つれど、昔母君乳母など(七)の、(八)かやうに言ひ知らせつゝ、(九)度々詣でさせしを、かひ無きにこそ(一〇)あゝめれ、命さへ心に叶はず(一一)、類なきいみじきめを見るはと、いと心憂き中にも、知らぬ人(一二)に具して、さる道のありきをしたらむよと、そら恐ろしく覺ゆ。心強き樣(一三)には言ひもなさで、浮舟「心地のいと惡しうのみ侍れば、さやうならむ道の程にも、如何などつゝましうなむ」と宣ふ。物怖(一四)は然もし給ふべき人ぞかしと思ひて、強ひても誘はず。

(一)浮舟の
㊅妹尼初瀬詣、留守に中將來りて浮舟を挑む、浮舟老母の室に逃入る
(二)妹尼
(三)亡き娘
(四)亡き娘と別人とは思はれぬ浮舟を得たれば
(五)御禮參りといふ格で
(六)我と初瀬へ同行したりとて人に知れる譯もなし
(七)初瀬の樣な尊き處にて
(八)浮舟の心
(九)尼君のいふ樣な事をいひ聞かせて
(一〇)今此樣な運命になれるを見れば寺詣も效なきものと見える
(一一)死ぬ事すら出來ず
(一二)妹尼をいふ、母乳母に比較して元よりの知人ならぬをいふ
(一三)強情を張る樣には言はずして
(一四)成程臆病らしい人ぢやから其宮の事と妹尼が思ひて

猶(一)少し思し知るばかり敎へなさせ給へ。(二)忍ばれぬべくば、すき〴〵しきまでも何かは。

とあるを、いとゞ(三)侘びたるは涙とゞめがたげなる氣色にて、書き給ふ。

妹尼 笛の音にむかしのことも忍ばれて(四)かへりしほども袖ぞ濡れにし

怪しく、(五)物思ひ知らぬにやとまで見え侍る有樣は、(六)老人の問はず語にも聞召しけむかし。

とあり。(七)珍らしからぬも見所なき心地して、うち置かれけむかし。(八)荻の葉に劣らぬ程々に音づれわたる、いとむづかしうもあるかな、人の心は强ちなるものなりけりと、(九)見知りにし折々もやう〳〵思ひ出づるまゝに、浮舟「(一〇)猶かゝる筋の事人にも思ひ離たすべき樣に、疾くなし給ひてよ」とて、經習ひて讀み給ふ。心の中にも(一一)念じ給へり。斯く萬につけて世の中を思ひ捨つれば、(一二)若き人とてをかしやかなる事も殊になく、結ぼほれたる本性なゝめり、(一三)と思ふ。容貌の見るかひ

(一)浮舟が少しは我が切なる思を察してくれる樣に意見して下され
(二)我慢が出來る事なら私も此樣な色めかしき事は申上げぬ筈
(三)侘びたる樣なる中將の文面を見ては
(四)君の御歸りの後も悲しかりし
(五)譯が分らぬのかしらと疑はるゝ程なる浮舟の樣子は
(六)母尼の
(七)珍らしくもなき尼の返事なれば
(八)荻の葉が少しの風にも音を立つる如く屢ゝ中將の手紙をよこすのが面倒なり、以下浮舟の心
(九)匂宮に關係して其心を見知りし時分の事も
(一〇)色戀の沙汰は他人も思ひ切る樣な尼の姿に
(一一)佛を
(一二)浮舟は若い女なれど快活な所もなく
(一三)妹尼等が

調を爪爽やかに調ぶ。皆異物は(一)聲やめづるを、これをのみめでたりと思ひて、母尼「たけふ(二)ちちり〳〵たりたな」など搔き返し、はやりかに彈きたる詞ども、わりなく古めきたり。中將「いとをかしう、今の世に聞えぬ言葉こそは彈き給ひけれ」と譽むれば、耳(三)ほの〴〵しく、傍なる人に問ひ聞きて、母尼「今樣の若き人は、かや(四)うなる事ぞ好まれざりける。此所に月頃物し給ふなる姫君、(五)容貌はいと淸らに物し給ふめれど、專ら、斯かるあだわざなどし給はず、埋れてなむ物し給ふめる」と、我がしこにうちあざ笑ひて語るを、(六)尼君などは、かたはらいたしと思す。これに事皆さめて、(七)歸り給ふほども、山おろし吹きて聞え來る笛(八)の音、いとをかしう聞えて、(九)起きあかしたり。

つとめて、

中將「昨夜は、(一〇)かた〴〵心亂れ侍りしかば、急ぎまかんで侍りし。

(一一)忘られぬむかしのことも笛竹のつらきふしにも音ぞなかれける

(一)調子が合はぬ故他の樂器は皆やめたるを、母尼は自分の琴に人々が感心しての事と思ひて
(二)笛の譜をうたふ也
(三)よく聞えぬ故
(四)音樂などは嫌ひぢや、浮舟の彈かぬを見て今の人は皆然りと思ひていふなり
(五)浮舟
(六)妹尼
(七)興さめて
(八)中將の歸りつゝ吹く笛の音
(九)小野の庵の人々は
(一〇)亡き妻の事や浮舟の事で
(一一)亡き妻の事につけても目前につらき浮舟の事につけても涙のこぼれる事ばかりぢや

(一)中將の耳に
(二)琴の音を引立たせる
(三)母尼が感に堪へて
(四)上手に
(五)我が彈法が今のとは變れる故か忰の僧都が云云といひてとめる故
(六)きめつける故
(七)變な事をとめだてする僧都哉
(八)音樂をして
(九)琴彈きたりとて勤の妨となり罪をつくる事にはあらず
(一〇)侍女の名
(一一)倭琴をよこせ
(一二)僧都がとめるのをさへ恨めしく思ひて中將に愚痴を溢す程故
(一三)母尼の心に
(一四)笛の調子にも構はず

の、今は好まずなり行く物なれば、なか〳〵珍らしく哀に聞ゆ。(一)松風もいとよくもてはやす。(二)吹き合せたる笛の音に、月もかよひて澄める心地すれば、いよ〳〵めでられて、(三)宵惑もせず起き居たり。母尼「嫗は、昔吾妻琴をこそは、こともなく(四)彈き侍りしかど、今の世には、(五)變りにたるにやあらむ、この僧都の、聞き憎し、念佛より外のあだわざなせそと、はしたなめられしかば、(六)何かはとて彈き侍らぬなり。然るは、いとよく鳴る琴も侍り」と言ひつゞけて、いと彈かまほしと思ひたれば、いと忍びやかに打笑ひて、中將「いと怪しき事をも(七)制し聞え給ひける僧都かな。極樂といふなる所には、菩薩なども皆かゝる事をして、(八)天人なども舞ひ遊ぶこそ尊かゝなれ。(九)行ひまぎれ罪得べきことかは。今宵聞き侍らばや」と賺せば、いとよしと思ひて、母尼「いで主殿のくそ、(一〇)吾妻とりて」(一一)と言ふにも、咳きは絶えず。人々は見苦しと思へど、僧都をさへ、(一二)恨めしげに憂へて言ひ聞かすれば、いとほしくて(一三)任せたり。取り寄せて、たゞ今の笛の音をも(一四)尋ねず、唯己が心をやりて、吾妻の

妹尼(一)ふかき夜の月をあはれと見ぬひとや山の端ちかきやどにとまらぬ

と、(二)生かたはなる事を、(三)「斯くなむ聞え給ふ」と言ふに、心ときめきして、

中將(四)山のはに入るまで月をながめみむねやのいたまもしるしありやと

など言ふに、この(五)大尼君、笛の音を仄に聞きつけたりければ、流石にめでて出で來たり。(六)此所彼所うち咳き、あさましき戰き聲にて、なか〳〵昔のことなどもかけて言はず。(七)誰とも思ひわかぬなるべし。母尼「いで、その琴の琴彈き給へ。橫笛は、月にはいとをかしき物ぞかし。いづら。(八)くそたち、琴とりて參れ」と言ふに、(九)それなゝめりと推量に聞けど、如何なる所に(一〇)かゝる人、いかで籠り(一一)居たらむ、(一二)定なき世ぞこれにつけて哀なる。盤渉調をいとをかしく吹きて、中將「いづら。(一三)さらば」と宣ふ。女の(一四)尼君、これもよき程のすきものにて、妹尼「昔聞き侍りしよりも、(一五)こよなく覺え侍るは、山風をのみ聞きなれ侍りにける耳がらにや」とて、妹尼「いでや、(一六)これは僻事になりて侍らむ」と言ひながら彈く。(一七)今樣は、をさ〳〵なべての人

(一)此處へ御泊りなきは今夜の月をあはれと思召さぬのか
(二)つまらぬ歌を
(三)浮舟が斯く仰せらるると
(四)さらば何時迄も月を此處にて眺めん、若し浮舟の我が戀を容れてくれる事もあらんかと其をたのみにして
(五)母の尼
(六)話の途中幾度もせきをして
(七)中將を
(八)お前たち
(九)母尼ならんと
(一〇)此樣な老人が
(一一)「居たらむ」の下に「と」あるべし
(一二)己の若き妻は死し此老尼は生存し居れば也
(一三)さらば琴彈き給へ
(一四)妹尼
(一五)中將の笛の音が非常に面白く思はるゝは
(一六)私の琴は調子はづれになつて居りませう
(一七)當時は箏の琴は一般に廢たりゆくもの故

やぐ氣色ども(一)は、いとうしろめたう覺ゆ。(二)限なく(三)憂き身なりけりと見はててし命さへ、あさましく長くて、如何なる樣に流離ふべきならむ、ひたぶるになき物と人に見聞き捨てられても歇みなばや、と思ひ臥し給へるに、中將は、大方物思はしき事のあるにや、いと痛く打歎きつゝ、忍びやかに笛吹き鳴して、中將(四)「鹿の鳴く音に」など獨言つけはひ、まことに心地なくはあるまじ。中將(五)「過ぎにし方の思ひ出でらるゝにも、なかなか心盡しに、(六)今はじめて哀と思すべき人はた難げなれば、(七)見えぬ山路にもえ思ひなすまじくなむ」と、怨めしげにて出でなむとするに、尼君、妹尼「など、あたら夜を御覽じさしつる」とて、ゐざり出で給へり。中將「何か、(八)をちなる里も、試み侍りぬれば」など言ひすさみて、(九)いたく好きがましからむも、流石に便なし、いと仄に見えし樣の、目留りしばかりに、(一〇)徒然なる心慰めに思ひ出でつるを、(一一)餘りもて離れ、奧深げなるけはひも、所の樣にあはずすさまじ、と思へば、歸りなむとするを、(一二)笛の音さへ飽かずいとゞ覺えて、

(一)尼たちの
(二)浮舟が
(三)浮舟の心
(四)「山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつゝ」
(五)亡き妻を思ひ出すとなまじ此處へ來たのが却つて愁を求むる樣なものでて
(六)新に浮舟に同情を求むるもむづかしさうなれば
(七)前には此處に遁世せんと思ひしかど此處も世の憂目見えぬ山路とは思はれず、「世の憂目見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそほだしなりけれ」
(八)引歌未詳
(九)甚しく懸想の氣色を示すも此場合面白からず、以下中將の心
(一〇)妻を失ひし慰めに此女を見んと思ひかけし譯なるに
(一一)浮舟が餘り引込み過ぎ
(一二)妹尼が

中將「まつむしの聲をたづねて來つれどもまたをぎはらの露にまどひぬ(一)」

妹尼「あないとほし。これをだに(二)」など責むれば、さやうに(三)世づいたらむ事言ひ出でむもいと心憂く、又言ひ初めてば、かやうの折々に責められむも、むづかしう覺ゆれば、答をだにし給はねば、餘りいふかひなく思ひあへり。尼君(四)早うは今めきたる人にぞありける、名殘なるべし。

妹尼「秋(五)の野の露わけきたるかりごろもむぐらしげれる宿にかこつなとなむ、煩(六)はしがり聞え給ふめる」と言ふを、内にも(七)、猶(八)かく心より外に世にありと知られはじむるをいと苦しと思す心の内をば知らで、男君(九)をもあかず思ひ出でつゝ、戀ひわたる人々なれば、人々「斯くはかなき序にも、打語らひ(一〇)聞え給はむに、心より外に、世にうしろめたくは見え給はぬものを、世の常なる(一一)筋に思しかけずとも、情なからぬ程に、御答ばかりは聞え給へかし」など、引き動かしつべく言ふ。

流石にかゝる古代(一二)の心どもにはありつかず、今めきつゝ、腰折歌好ましげに、若

(一)尼君の待ち居らるゝといふによりて尋ね來しに我が目ざす浮舟には嫌はれて途方にくれたり

(二)此返事だけでもし給へ

(三)其樣な色めかしき返事、以下浮舟の心

(四)妹尼は若き時は派手な氣風の人なりし其の名殘なるべし、代りて次の如く返歌したり

(五)君のつらく思はるゝ露は途中の露なるべし、此宿の露にはあるべからず

(六)浮舟が

(七)簾內の人々も

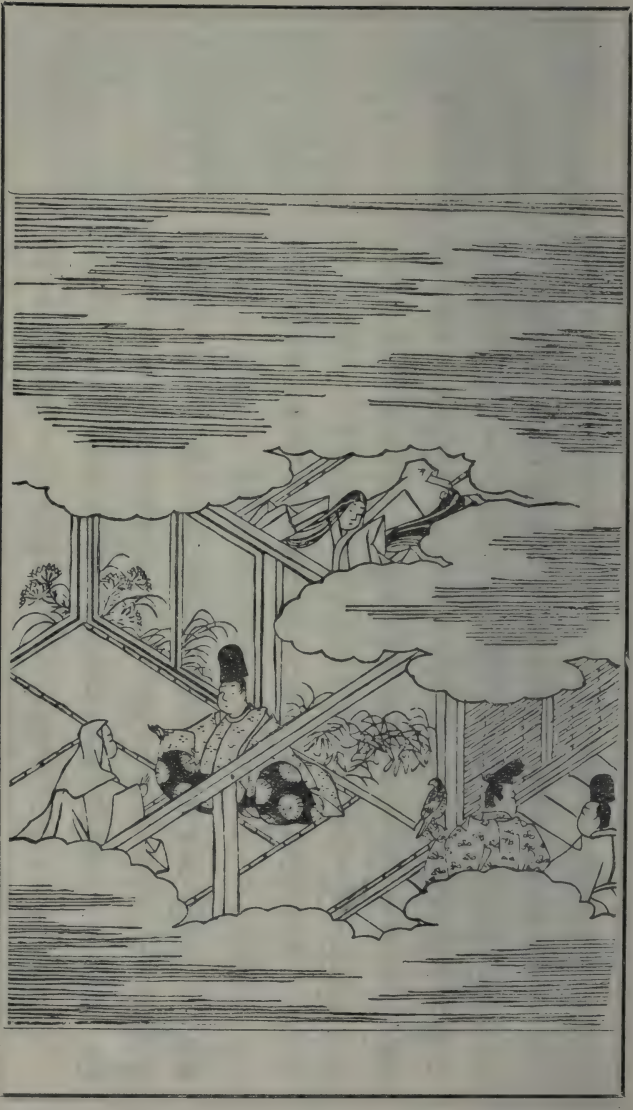
(八)浮舟が

(九)中將

(一〇)中將は浮舟が相手になりても決して案外な結果を生じ心配になる樣な事はなき人故

(一一)假令色戀の沙汰は無いにしても

(一二)尼たちの昔形氣に似合はず



しく侍る。(一)何事も心に叶はぬ心地のみし侍れば、山住もし侍らまほしき心ありながら、(二)許い給ふまじき人々に、思ひ障りてなむ過し侍る。(三)世に心地よげなる人の上は、かく屈したる人の心がらにや、ふさはしからずなむ。物思ひ給ふらむ人に、(四)思ふ事を聞えばや」など、いと(五)心留めたる樣に語らひ給ふ。妹尼(六)「心地よげならぬ御願は、聞えかはし給はむにつきなからぬ樣になむ見え侍れど、(七)例の人にてはあらじと、いとうたゝあるまで世を恨み給ふめれば、(八)殘少き齡の人だに、今はと背き侍る時は、いと物心ぼそく覺え侍りしものを、(九)世をこめたる盛にては、遂に如何となむ見給へ侍る」と、親がりて言ふ。入りても、妹尼(一〇)「情なし。猶聊にても聞え給へ。(一一)かゝる御住居は、(一二)漫なる事も哀知るこそ世の常のことなれ」など、こしらへて言へど、浮舟「人に物聞(一三)ゆらむ方も知らず、何事も言ふかひなくのみこそ」と、いとつれなくて臥し給へり。客人は、中將(一四)「いづら、あな心憂。秋(一五)を契れるは、すかし給ふにこそありけれ」など、怨みつゝ、

(一)我は
(二)親達の許さぬに憚りて遁世もせずに居る
(三)自分が屈托勝なせいかして得意げなる女は我身に不似合に思はる
(四)浮舟
(五)浮舟に氣のある樣を示して
(六)浮舟は失意の女を欲しとの御願には丁度よく叶ひて共に憂きを語る相手によささうなれど
(七)人並に男は持つまじと浮舟がけしからぬ位に世を恨み居る故
(八)私如き老人でも遁世する時は
(九)生先長き若い身では今は遁世の心深くても行末はどうかと心配する
(一〇)浮舟にいふ詞
(一一)中將に返事をし給へ
(一二)一寸した事にも
(一三)返事の仕樣も知らず
(一四)返事は如何
(一五)前に「秋と契れる」人ある由故其人を私ぞと思ひて返事を待ち居しに

(一)浮舟方へ
(二)中將をいふ
(三)返事なされても仔細あるまじ
(四)返事せぬは無情なり
(五)浮舟は偏窟な人で返事せず
(六)此庵へ引取りはしたれど我思ふ通りにならぬ故持扱ひて居る
(七)浮舟が返事せぬも尤と、中將の心
㊄ 中將再小野を訪ふ、笛を吹く、老耄せる母の得意の倭琴
(八)中將の心
(九)中將が小野へ
(一〇)少將の尼
(一一)浮舟を
(一二)少將尼に取次がせて浮舟へ傳へさせし也
(一三)浮舟が返事もせぬけ外に契れる男があるらしく思はる、「誰をかもまつちの山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし」
(一四)妹尼が
(一五)浮舟の

と書きて、少將の尼して入れたり。(一)尼君も見給ひて、妹尼「この御かへり書かせ給へ。いと心憎き氣つき給へる人なれば、(二)うしろめたくもあらじ」と唆かせば、浮舟「いと怪しき手をば、いかでか」とて更に聽き給はねば、(三)妹尼「はしたなき事なり」とて、(四)尼君、

妹尼 聞えさせつる樣に、(五)世づかず人に似ぬ人にてなむ。

うつしうゐて思ひみだれぬをみなへしうき世をそむく草の庵に(六)

とあり。此度は然もありぬべしと、(七)思ひゆるして歸りぬ。

(八)文などわざとやらむは流石にうひ〳〵しく、仄に見し樣は忘れず、物思ふらむ筋何事と知らねど、哀なれば、八月十日あまりのほどに、小鷹狩の序におはした(九)り。例の尼呼び出でて、(一〇)中將「一目見しより、(一一)靜心なくて」など宣へり。(一二)答へ給ふべくもあらねば、尼君、妹尼「まつちの山のとなむ見給ふる」(一三)と言ひ出し給ふ。對面(一四)し給へるにも、中將「心苦しき樣にて物し給ふと聞き侍りし人の御上なむ、(一五)殘ゆか

(一)中將が又小野へ
(二)中將が立寄るかも知れぬと思ひて用意したれば
(三)娘の存生中が思ひ出さるゝ樣な饗應
(四)尼ではあれど
(五)隱れて居る女は
(六)亡き娘の事を忘れかねて
(七)世話する
(八)頭から浮舟に懸想の心で尋ね來たにしても斯く山深き路を遙に來る勞は察して貰ふべきなるに
(九)わが亡き妻に擬へて世話せらるゝ女ならば私にも引合せて下されてもよい筈
(一〇)浮舟を人の物にしたくなし、遠方なれど我がものにして見たし

またの日歸り給ふにも、中將「過ぎ難くなむ」とておはしたり。(一)然るべき心遣したりければ、(二)昔思ひ出でたる御まかなひの、(三)少將の尼なども、袖口さま異なれども(四)をかし。いとゞ涙目に尼君はものし給ふ。物語の序に、中將「忍びたる樣に物し給ふらむは、(五)誰にか」と問ひ給ふ。煩はしけれど、仄にも見つけ給ひてけるを隱し顏ならむも怪しとて、妹尼「忘れ侘び侍りて、(六)いとゞ罪深くのみ覺え侍りつる慰めに、この月頃見給ふる人になむ。(七)如何なるにか、いと物思しげき樣にて、世にありと人に知られむ事を苦しげに思ひて物せらるれば、かゝる谷の底には誰かは尋ね聞えむと思ひつゝ侍るを、いかでかは聞き顯させ給ひつらむ」と答ふ。中將「うちつけ心ありて參り來むにだに、(八)山深き道のかごとは聞えつべし。まして思しよそふらむ方につけては、(九)こと〴〵に隔て給ふまじき事にこそは。如何なる筋に世を恨み給ふ人にか。慰め聞えばや」など、ゆかしげに宣ふ。出で給ふとて、疊紙に、

中將(一〇)あだしのの風になびくな女郎花われしめゆはむ道とほくとも

（一）妹尼が
（二）中將の弟
（三）妹尼位の
（四）僧の寂しき樣子に目なれて自然優美な處を失ふ樣になるべし

聞ゆれ」と宣ふ樣も、實に何心なく美しく、（一）打笑みてぞまもり居給へる。中將は山におはし著きて、僧都も珍らしがりて、世の中の物語し給ふ。その夜はとまりて、聲尊き人々に經など讀ませて、夜一夜あそび給ふ。（二）禪師の君、細なる物語などする序に、中將「小野に立寄りて、物哀にもありしかな。世を捨てたれど、猶（三）さばかりの心ばせある人は、難くこそ」など宣ふ序に、中將「風の吹き揚げたりつる隙より、髮いと長くをかしげなる人こそ見えつれ。あらはなりとや思ひつらむ、立ちて彼方に入りつるうしろで、なべての人とは見えざりつ。さやうの所に、よき女は置きたるまじきものにこそあゝめれ。旦暮見るものは法師なり。（四）自ら目なれて覺ゆらむ。不便なることなりかし」と宣ふ。禪師の君、「この春初瀬に詣でて、怪しくて見出でたる人となむ聞き侍りし」とて、見ぬ事なれば細には言はず、中將「哀なりける事かな。如何なる人にかあらむ。世の中を憂しとてぞ、然る所には隱れ居けむかし。昔物語の心地もするかな」と宣ふ。

流石に思し咎むるこそ」など、古代の人どもは物めでをしあへり。妹尼「いと清げにあらまほしくも、ねびまさり給ひにけるかな。同じくば(一)昔の様にても見奉らばや」とて、妹尼「(二)藤中納言の御あたりには、絶えず通ひ給ふ様なれど、心も留め給はず、(三)親の殿がちになむ、物し給ふとこそ言ふなれ」と、尼君も宣ひて、妹尼「(四)心憂く物をのみ思し隔てたるなむいとつらき。今は猶、(五)然るべきなゝめりと思しなして、晴々しくもてなし給へ。この五年六年、時の間も忘れず、戀しく悲しと思ひつる(六)人の上も、斯く見奉りて後よりは、こよなく思ひ忘られにて侍る。(七)思ひ聞え給ふべき人々世におはすとも、今は世に亡きものにこそは、やう〱思しなりぬらめ。萬の事(八)さしあたりたる様には、えしも有らぬわざになむ」と言ふにつけても、いとど涙ぐみて、浮舟「隔て聞ゆる心は侍らねど、怪しくて生きかへりける程に、萬の事夢の様にたどられて、(九)あらぬ世に生れたらむ人は斯かる心地やすらむと覺え侍れば、今は(一〇)知るべき人世にあらむとも思ひ出でず、(一一)ひたみちにこそ睦まじく思ひ

(一)昔の通り我が聟にしておきたし
(二)中將の今の妻の邸
(三)父の邸にのみ中將が居るといふ噂なり
(四)浮舟にいふ也
(五)斯うなるも運命ぢやと諦めて
(六)なき娘の事も
(七)浮舟を戀ひ慕ふべき人々
(八)年月のたつ間には段段悲も薄らぐものぞ
(九)別世界に
(一〇)我を
(一一)只一筋に尼君を力にして居る

(一)浮舟が見えたる也
(二)斯かる尼共の中にはどの樣な女が居るのかと
(三)少將尼が
(四)少將尼の心
(五)中將が浮舟に思ひつくに違ひなし
(六)妹尼の娘は浮舟とは比べものにならぬに其さへ
(七)妹尼が娘の事を忘れかねて
(八)思もよらぬ浮舟を得て
(九)浮舟の
(一〇)中將の心
(一一)從者等の
(一二)「此處にしも何匂ふらん女郎花人の物いひさがにくき世に」
(一三)世間の噂を中將が氣にする處が面白い

序に、中將「かの廊のつま入りつる程、風の騷がしかりつる紛に、簾の隙より、なべての樣にはあるまじかりつる人の、(一)打垂れ髮の見えつるは、(二)世を背き給へるあたりに誰ぞとなむ見驚かれつる」と宣ふ。姬君の立出で給へりつるうしろでを、見給へりけるな〻めりと思ひて、(三)(四)まして細に見せたらば、(五)心とまり給ひなむかし、(六)昔人はいとこよなく劣り給へりしをだに、まだ忘れ難くし給ふめるをと、心ひとつに思ひて、少將「(七)過ぎにし御事を忘れ難く、慰めかね給ふめりし程に、(八)覺えぬ人を得奉り給ひて、旦暮の見物に思ひ聞え給ふめるを、(九)打解け給へる御有樣を、いかで御覽じつらむ」と言ふ。(一〇)斯かる事こそはありけれとをかしくて、何人ならむ、實にいとをかしかりつと、仄なりつるをなか〳〵思ひ出づ。細に問へど、その儘にも言はず。少將「自ら聞し召してむ」とのみ言へば、うちつけに問ひ尋ねむも樣惡しき心地して、「雨も止みぬ。日も暮れぬべし」と言ふに、(一一)唆されて出で給ふ。前近き女郎花を折りて、少將「(一二)何匂ふらむ」と口ずさびて、獨言ち立てり。「(一三)人の物いひを、

ながめ出し給へる樣、いと美し。白き(一)單衣のいと情なくおざやぎたる(二)に、袴も檜皮色(三)にならひたるにや、光も見えず黒きを著せ奉りたれば、(四)斯かる事どもも見しには變りて怪しくもあるかな、など思ひつゝ、(五)こは〲しういらゝぎたる物ども著給へるしも、いとをかしき姿なり。御前なる人々、(六)「故姫君のおはしまいたる心地のみし侍るに、中將殿をさへ見奉れば、いと哀にこそ。同じくば(七)昔の樣にておはしまさせばや。いとよき御間ならむかし」と言ひあへるを、(八)あないみじや、世にありて、(九)如何にも〱人に見えむこそ、それにつけてぞ(一〇)昔の事思ひ出でらるべき、(一一)さやうの筋は、思ひ絶えて忘れなむ、と思ふ。

尼君入り給へる間に、客人、雨の氣色を見煩ひて、(一二)少將といひし人の聲を聞き知りて、呼びよせ給へり。中將「(一三)昔見し人々は、皆此處に物せらるらむやと思ひながらも、斯う參り來ることも難くなりにたるを、(一四)心淺きにや、誰も〱見なし給ふらむ」など宣ふ。(一五)仕うまつり馴れにし人にて、哀なりし昔の事ども思ひ出でたる

(一)浮舟の服裝
(二)さつぱりしたる
(三)蘇芳に黒みを帶びたる色
(四)服裝なども尼の中の生活は昔とかはりて
(五)しなやかならず手ざはり荒き著物を著て居る樣却て美し
(六)妹尼の娘の樣にのみ思はるゝに
(七)浮舟を中將の妻にしたし
(八)浮舟の心
(九)どの樣な樣でも男を持ちたらは
(一〇)薫匂などの事が思ひ出されていやなるべし
(一一)男の關係は
(一二)少將の尼
(一三)妹尼の娘の生きて居し時分仕へ居し女等は
(一四)私が薄情で來ぬと思はれるならん
(一五)少將の尼は中將夫婦に馴染の人故

(一)斯く御引込になつて仕舞ひし故御無沙汰勝になる
(二)出かけんとすれば行くならば己も同行せんなどと附纒はるゝ人々に邪魔をされる
(三)同行者を斷りて
(四)當世風の人眞似なり
(五)世間の輕薄な風に染まらぬ御志と有難く思はるゝ機會が多し
(六)供の人々に
(七)來なれたる妻の里なれば食事するも氣が置けず
(八)死せし娘よりも、以下妹尼の心
(九)中將の
(一〇)他人になりて仕舞ひたるが口惜し
(一一)せめて子供でもあればよいにと
(一二)浮舟の事を
(一三)浮舟
(一四)自分は又自分で

の中あはれに、過ぎにし方の事ども、思ひ給へられぬ折なきを、あながちにすみ(一)離れ顔なる御有樣に、怠りつゝなむ。山籠も羨ましう、常に出立ち侍るを、同じ(二)くばなど、慕ひ纒さるゝ人々に、妨げらるゝ樣に侍りてなむ。(三)今日は皆省き棄てて物し侍りつる」と宣ふ。妹尼「山籠の御羨は、なか〳〵(四)今樣だちたる御物まねびになむ。昔を思し忘れぬ御心ばへも、(五)世に靡かせ給はざりけると、疎ならず思う給へらるゝ折多く」など言ふ。(六)人々に水飯などやうの物食はせ、君にも蓮實など樣の物出したれば、(七)馴れにしあたりにて、さやうの事もつゝみなき心地して、村雨の降り出づるに留められて、物語しめやかにし給ふ。(八)いふかひなくなりにし人よりも、(九)この君の御心ばへなどの、いと思ふ樣なりしを、(一〇)餘所のものに思ひなしたるなむ、いと悲しき、(一一)など忘れがたみをだに留め給はずなりにけむと、戀ひ忍ぶる心なりければ、たまさかに斯く物し給へるにつけても、珍らしく哀に覺ゆべかゝめるまゝに、(一二)問はず語もし出でつべし。(一三)姫君は、(一四)われは我と思ひ出づる方多くて、

とて、委しき事ある(一)人々にも知らせず。尼君(二)の昔の婿の君、今は中將にて物し給ひける、弟(三)の禪師の君、僧都の御許にものし給ひける、山籠したるを訪らひに、兄弟の君だち常に上り(四)けり。橫川に通ふ道の便によせて、中將此處(五)におはしたり。前うち逐ひて、あてやかなる男の入り來るを見出し(六)て、忍びやかにておはせし人(七)の御有樣けはひぞ、さやかに思ひ出でらるゝ。これも(八)いと心細き住居のつれ〴〵なれど、(九)住みつきたる人々は、物淸げにをかしうしなして、垣ほに植ゑたる瞿麥も面白く、女郞花桔梗など咲きはじめたるに、いろ〳〵の狩衣姿の男どもの若き數多して、(一〇)君も同じ裝束にて、南面に(一一)呼びすゑたれば、(一二)うち眺めて居たり。年廿七八の程にて、ねび調ひ、(一三)心地なからぬ樣もてつけたり。尼君障子口に几帳立てて、對面し給ふ。まづ打泣きて、妹尼「年(一四)頃のつもりには、過ぎにし方いとゞ氣遠くのみなむ侍るを、(一五)山里の光に猶待ち聞えさする事の、打忘れずやみ侍らぬを、且はあやしく思ひ給ふる」と宣へば、中將「心

(一)妹尼が家内の人々にも知らせず
四　僧都の妹の娘の夫たりし中將小野を訪ひて浮舟を見る、僧都に浮舟の身の上を聞く、浮舟を挑む
(二)妹尼
(三)中將の弟
(四)横川へ
(五)小野へ
(六)浮舟が
(七)薫の
(八)此處も宇治と齊しく
(九)住みなれたる女等は
(一〇)中將も狩衣姿にて
(一一)中將を請じたれば
(一二)中將が
(一三)物の分つた風をして居る
(一四)月日が立つにつれて
(一五)此山里の光榮を添ふる君の御出が未だ續き居るを不思議に思ふ、よくも尋ね下さつたの意

（一）乳母が
（二）乳母か
（三）右近以外には
（四）此處に不斷居る人
（五）宮仕せず別の生活をして居る者も
（六）以下浮舟の心
（七）浮舟の關係ある處へ此人々が
（八）浮舟が生きて居る由を
（九）薫匂などから我が投身以來の事情を推量されると碌な推量はされざるべきを思へば
（一〇）京から來る人々に
（一一）妹尼が手許の召使にしたる
（一二）都の人々の意、「名にし負はばいざ事とはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」の詞をとる
（一三）前に浮舟のよめる歌の詞をとる、「ひたぶるに嬉しからまし世の中にあらぬ所と思はましかば」
（一四）面倒な譯のある人ならんと察して

しを、如何にあへなき心地しけむ、（一）何處にあらむ、我世に在るものとはいかでか（二）知らむ。（三）同じ心なる人もなかりし儘に、萬隔つる事なく語らひ見馴れたりし右近なども、をり〳〵は思ひ出でらる。若き人の、かゝる山里に今はと思ひたえ籠るは、難きわざなりければ、唯いたく年經にける尼七八人ぞ、（四）常の人にてはありける。それらが女孫やうの者ども、京に宮仕するも、（五）こと様にてあるも、時々ぞ來通ひける。（六）かやうの人につけて、（七）見しわたりに往き通ひ、（八）自ら世にありけりと誰にも〳〵聞かれ奉らむこと、いみじく恥かしかるべし、如何なる様にてさすらへけむなど、（九）思ひやりよろづ怪しかるべきを思へば、（一〇）斯かる人々にかけても見えず。たゞ侍從、こもきとて、（一一）尼君のわが人にしたりける二人をのみぞ、この御方に言ひ分きたりける。みめも心様も、昔見し（一二）都鳥に似たることなし。何事につけても、（一三）「世の中にあらぬ所」はこれにやあらむとぞ、且は思ひなされける。斯くのみ人に知られじと忍び給へば、誠に（一四）煩はしかるべき故ある人にも物し給ふらむ

(一)我は幼時より運悪き身で、以下浮舟の心
(二)音樂などを習ふべき機會もなかりしかば
(三)少しも面白き處もなく育ちし事哉と
(四)老いたる尼等が慰みに琴など彈くを見るにつけては
(五)我身の上が
(六)愁に堪へずして身を投げし我を斯く救ひ留めしは誰の所爲ぞ恨めし
(七)斯く助けられて生きて居るのが心外にてつらく思はるれば
(八)生きて居るとも
(九)自殺と決心せし時は、以下浮舟の心
(一〇)他の人々は
(一一)我を人並の物にしたしと熱心に思ひ居しに我死せりと聞かば

ふ人は、琵琶弾きなどしつゝ遊ぶ。妹尼「斯かるわざはし給ふや。徒然なるに」など言ふ。(一)昔も怪しかりける身にて、心のどかに、(二)さやうの事すべき程も無かりしかば、(三)聊かをかしき様ならずも生ひ出でにけるかなと、かく(四)さだ過ぎにける人の、心をやるめるをり／＼につけては思ひ出づ。(五)猶あさましく物はかなかりけると、我ながら口惜しければ、手習に、

浮舟(六)身をなげし涙の河のはやき瀬をしがらみかけてたれかとゞめし

(七)思の外に心憂ければ、行末もうしろめたく、疎ましきまで思ひやらる。月のあかき夜な／＼、老人どもは艶に歌よみ、古思ひ出でつゝ、様々の物語などするに、答ふべき方も無ければ、つく／＼と打眺めて、

浮舟われかくてうき世の中に(八)めぐるとも誰かは知らむ月のみやこに

(九)今は限と思ひはてし程は、戀しき人多かりしかど、(一〇)こと人々はさしも思ひ出でられず、唯親いかに惑ひ給ひけむ、乳母萬に、(一一)いかで人並々になさむと思ひ入られ



と思ひ入りて、形をも變へ、かゝる山里には住み始めたるなりけり。世と共に戀ひわたる人(一)のかたみにも、思ひよそへつべからむ人をだに見出でてしがなと、徒然と心細きまゝに、思ひ歎きけるを、かく(二)覺えぬ人の、容貌けはひも勝り樣なるを得たれば、現の事とも覺えず、怪しき心地しながら、嬉しと思ふ。(三)ねびにたれど、いと淸げに由ありて、有樣もあてはかなり。(四)昔の山里よりは、水の音も和やかなり。造り樣ゆゑある所の木立おもしろく、前栽などもをかしく故を盡したり。秋にもなりゆけば、空の氣色も哀なるを、門田の稻刈るとて、所につけたる(五)物まねびしつゝ、若き女どもは歌謠ひ興じあへり。(六)引板ひき鳴らす音もをかしく、(七)見し東路などの事なども思ひ出でられて。

かの夕霧の御息所(八)のおはせし山里よりは、今少し入りて、(九)山にかたかけたる家なれば、松陰しげく風の音もいと心細きに、徒然と行をのみしつゝ、何時となくしめやかなり。尼君(一〇)ぞ、月などあかき夜は、琴など彈き給ふ。(一一)少將の尼君などい

(一)なき娘の形見と見るべき女を得たしと
(二)思ひもよらぬ浮舟が
(三)妹尼の樣
(四)宇治よりは、以下小野の住居の有樣をいふ
(五)人眞似しつゝ
(六)鳴子
(七)浮舟が昔の常陸に居し頃の事も思ひ出されて
(八)落葉宮
(九)一部分は山に造りかけたる家なれば、
(一〇)妹尼
(一一)仕ふる尼の名

(一)夢中で居る間に
(二)從來の身の上
(三)我を連れ行きし樣に思ふ
(四)今も此世に生きて居るとは知られたくなし
(五)浮舟が
(六)竹取物語の姫君の名、竹取の翁が竹の節の中より見附けたる也
(七)かぐや姫君は後天上に上り去りたれば也
(八)妹尼が
(九)母の尼
(一〇)妹尼

ふ。何處に誰と聞えし人の、然る所にはいかでおはせしぞ」とせめて問ふを、いと恥かしと思ひて、浮舟「(一)怪しかりし程に、皆忘れたるにやあらむ、(二)ありけむ樣なども更に覺え侍らず。たゞ仄に思ひ出づる事とては、唯いかで此の世にあらじと思ひつゝ、夕暮ごとに端近くて眺めし程に、前近く大なる木のありし下より、人の出で來て、(三)率て行く心地なむせし。それより外の事は、我ながら誰ともえ思ひ出でられ侍らず」と、いとらうたげに言ひなして、浮舟「(四)世の中に猶ありけりと、いかで人に知られじ。聞きつくる人もあらば、いといみじうこそ」とて泣い給ふ。あまり問ふをば苦しと(五)思したれば、え問はず。(六)かぐや姫を見つけたりけむ竹取の翁よりも、珍らしき心地するに、(七)如何なる物の隙に消え失せむとすらむと、靜心なくぞ(八)思しける。この(九)主人もあてなる人なりけり。(一〇)女の尼君は、上達部の北の方にてありけるが、その人亡くなり給ひて後、女たゞ一人をいみじくかしづきて、よき君達を婿にして思ひ扱ひけるを、その女の君の亡くなりにければ、心憂しいみじ

たり給へど、(一)さばかりにて生き留まりたる人の命なれば、いと執念くて、やうやう頭もたげ給へば、(二)物まゐりなどし給ふにぞ、なかなか面痩せもて行き、(三)いつしかと嬉しく思ひ聞ゆるに、浮舟「尼になし給ひてよ。(四)然てのみなむ生く様もあるべき」と宣へば、妹尼「いとほしげなる御様を、いかでか然はなし奉らむ」とて、唯(五)頂ばかりをそぎ、五戒ばかりを受けさせ奉る。(六)心もとなけれど、もとよりおれおれしき人の心にて、えさかしく強ひても宣はず。僧都は、「今は斯ばかりにて、(七)勞りやめ奉り給へ」と言ひ置きて、のぼり給ひぬ。

夢の様なる人を見奉るかなと、(八)尼君は喜びて、(九)せめて起しすゑつゝ、(一〇)御髪手づから梳り給ふ。然ばかりあさましう(一一)引き結ひて、打遣りたりつれど、いたくも亂れず。解き果てたれば、つやつやと淸らなり。(一二)一年たらぬつくも髪多かる所にて、(一三)目もあやに、いみじき天人の天降れるを見たらむ様に思ふも、(一四)危き心地すれど、妹尼「などかいと心憂く、(一五)斯ばかりいみじく思ひ聞ゆるに、御心を隔てては見え給

(一)あれ程の容態が直りたる位の事故中々命強くて
(二)食事し
(三)妹尼が早く全快せよかしと思ひ居るに
(四)尼にならねば生きて居やうがない
(五)かたばかり髪を切り取りて尼になりたる積にする也
(六)形式ばかりの出家では氣がすまねど浮舟は從來鈍き性質の人故
(七)養生をさせよ
(八)妹尼
(九)浮舟を
(一〇)妹尼が
(一一)髪を
(一二)老女のみ多き此菴故浮舟が目に立ちて、「百年に一年たらぬつくも髪我を戀ふらし俤に見ゆ」伊勢物語の歌
(一三)浮舟を見る尼等の感じ
(一四)今にも飛んで行つて仕舞ひさうに思ふ也
(一五)私の方では是程に親切を盡すになぜ分隔てをなさるぞ

（一）匂宮
（二）其時から氣が變になりたりと思はる
（三）自殺の本意をも遂げざりし事よと
（四）人心地つかざりし時分は夢中で少しは物を食ふ事もありしに
（五）正氣になりては却て
（六）今迄引續き熱氣のありしはさめて
（七）浮舟の惜しき器量を見れば
（八）浮舟が

つ、つく〴〵と居たりしを、いと淸げなる男の寄り來て、いざ給へ、己が許へ、と言ひて、抱く心地のせしを、宮（一）と聞えし人のし給ふと覺えし程（二）より、心地惑ひにけるなゝめり、知らぬ所にすゑ置きて、この男は消え失せぬと見しを、遂にかく本（三）意の如もせずなりぬる、と思ひつゝ、いみじう泣くと思ひし程に、その後の事は、絶えて、如何にも〳〵覺えず、人の言ふを聞けば、多くの日頃も經にけり、如何に憂き樣を、知らぬ人に扱はれ見えつらむと、恥かしく、遂に斯くて生きかへりぬるかと思ふも口惜しければ、いみじく覺えて、なか〳〵（四）しづみ給へりつる日頃は、現心もなき樣にて、物いさゝか參るをりもありつるを、（五）露ばかりの湯をだにまゐらず。妹尼「如何なれば、かく賴もしげ無くのみはおはするぞ。（六）うちはへぬるみなどし給へる事は醒め給ひて、爽やかに見え給へば、嬉しく思ひ聞ゆるを」と、泣く〳〵撓む折なく添ひ居て扱ひ聞え給ふ。ある人々も、（七）あたらしき御樣容貌を見れば、心を盡してぞ惜みまもりける。（八）心には、猶いかで死なむとぞ思ひわ

て、いと暗き夜、一人(一)ものし給ひしを取りてしなり。されど觀音、とざまかうざまに育み(二)給ひければ、この僧都に負け奉りぬ。今はまかりなむ」とのゝしる。僧都「斯くいふは何ぞ」と問へば、憑きたる人(三)、物はかなきけにや、はかゞ〜しくも言はず。正身(四)の心地は爽かに、いさゝか物覺えて見廻したれば、一人(五)見し人の顏はなくて、皆老法師のゆがみ衰へたる者どものみ多かれば、知らぬ國に來にける心地していと悲し。ありし世の事思ひ出づれど、住み(六)けむ所、誰と言ひし人とだに、確にはかゞ〜しうも覺えず。唯(七)、我は限とて身を投げし人ぞかし、何處に來にけるにか、とせめて(八)思ひ出づれば、いといみじと物を思ひ歎きて、皆人の寢たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風烈(九)しく川波も荒う聞えしを、一人物恐ろしかりしかば、來し方ゆく末も覺えで、簀子の端に足をさし下しながら、行くべ(一〇)き方も惑はれて、歸り入らむも中空(一一)にて、心強くこの世に亡せなむと思ひ立ちしを、嗚呼(一二)がましくて人に見つけられむよりは、鬼も何も食ひ(一三)て失ひてよと言ひつ

(一)浮舟が一人で居る處を
(二)浮舟を保護せし故、長谷の觀音の守りし也
(三)物怪を移されたる人の氣力の弱き故にや
(四)浮舟の
(五)見知りたる顏はなくて、浮舟の心
(六)自分の住所も自分の何人なるかをもよく覺え居らず
(七)浮舟の心
(八)しひて
(九)以下浮舟の回想
(一〇)何方へ行つてよいか分らず
(一一)中途はんぱで
(一二)死にそこなひて恥かしく人に見附けられるよりは
(一三)我身を

(一)我はつまらぬ僧故
(二)戒律の中に
(三)批難を蒙むるは
(四)運命なるべし
(五)僧都の事につきてつまらぬ噂を立つる事あらば
(六)浮舟に憑き居る物怪を他の人にうつして
(七)死後に執心を殘して中有に迷ふ間に
(八)宇治の宮をいふ
(九)一部分は取り殺せしに、大君をいふ
(一〇)浮舟は

し、弟子どもも言ひて、人に聞かせじと隱す。僧都、「いであなかま。大德たち、(一)われ無慚の法師にて、忌む(二)ことの中に、破る戒は多からめど、女の筋につけて、まだ謗取らず、過つことなし。齡六十に餘りて、今更に人のもどき(三)負はむは、然る(四)べきにこそはあらめ」と宣へば、弟子「善からぬ人の、物を便な(五)ゝ、言ひなし侍る時には、佛法の瑕となり侍ることなり」と、快からず思ひて言ふ。僧都「この修法の程にしるし見えずば」と、いみじき事どもを誓ひ給ひて、夜一夜加持し給へる曉に、(六)人にかり移して、何樣のものの、斯く人を惑はしたるぞと、有樣ばかり言はせまほしうて、弟子の阿闍梨、とりぐ〳〵に加持し給ふ。月頃はいさゝかも顯れざりつる物怪、調ぜられて、物怪「己は、此處までまうで來て、かく調ぜられ奉るべき身にもあらず。昔は行せし法師の、いさゝかなる世に恨を留めて、(七)漂ひありきし程に、よき女のあまた住み給ひし所に(八)住み著きて、かたへ(九)は失ひてしに、(一〇)この人は心と世を恨み給ひて、我いかで死なむといふ事を、晝夜宣ひしに、便を得

(一)命が
(二)小野へ
(三)妹尼が
(四)むさき事
(五)抑も見附けし以來引續きて珍しき
(六)すばらしき御器量かな
(七)容貌美しく生れたるは前生に善事を行ひたる報なりしといふ佛說
(八)不仕合にて
(九)それでは無いかしらと
(一〇)賜はるにしても賜はるにつきての次第道行があるべし
(一一)僧都の心
(一二)噂があらば

しも見附けけめ。試に助け果てむかし。それに止まらずば、(一)業盡きにけりと思はむ」とて、下り給ひけり。(二)悦び拜みて、(三)月頃の有樣をかたる。妹尼「かく久しう煩ふ人は、(四)むづかしき事自らあるべきを、聊衰へず、いと淸げにねぢけたる所なくのみ物し給ひて、限と見えながらも、斯くても生きたるわざなりけり」など、おほなおほな泣く〳〵宣へば、僧都「(五)見附けしより、珍らかなる人の御有樣かな。いで」とて、さし覗きて見給ひて、「實にいと(六)警策なりける人の御容面かな。(七)功德の報にこそ、かゝる容貌にも生ひ出で給ひけめ。如何なる(八)違ひ目にて、斯く傷はれ給ひけむ。(九)若し然にやと聞き合せらるゝ事も無しや」と問ひ給ふ。妹尼「更に聞ゆる事もなし。何かは、初谷の觀音の賜へる人なり」と宣へば、僧都「何か、(一〇)それ緣にしたがひてこそ導き給ふらめ。種なき事はいかでか」など宣ふ、怪しがり給うて、修法はじめたり。(一一)公の召にだに隨はず、深く籠りたる山を出で給ひて、漫に斯かる人の爲になむ行ひさわぎ給ふと、(一二)物の聞えあらむ、いと聞きにくかるべし、と思

せたるにや、などぞ思ひよりける。「河に流してよ」といひし一言より外に、物も更に宣はねば、いと覺束なく思ひて、(一)いつしか人にもなして見むと思ふに、つくづくとして起き(二)あがるよもなく、いと怪しくのみ物し給へば、遂に生くまじき人にやと思ひながら、打捨てむもいとほしくいみじ。(三)夢語もし出でて、初より祈らせし阿闍梨(四)にも、忍びやかに芥子(五)燒くことせさせ給ふ。

(六)うちはへ斯く扱ふ程に、四五月も過ぎぬ。いと侘しうかひなき事を思ひ侘びて、僧都の御許に、

妹尼 猶おり給ひて、(七)この人助け給へ。流石に今日までもあるは、死ぬまじかりける人を、憑き(八)しみ領じたるものの、去らぬにこそあゝめれ。(九)あが佛、(一〇)京に出で給はばこそはあらめ、此處まではあへなむ。

などいみじき事を書き續けて、奉れ給へれば、僧都「いと怪しき事かな。斯くまでもありける人の命を、(一一)やがて打ち捨ててましかば。然るべき契ありてこそは、我

(一)早く人並の身體にしてやりたしと思ふに
(二)起上る時もなく、浮舟の樣
(三)妹尼が
(四)長谷へ同行せし僧
(五)護摩をたかする也
㊁ 僧都浮舟を加持す、浮舟の蘇生、素姓をつゝみて語らず
(六)引續き
(七)山を下りて來て
(八)深くとり憑きてはなれぬ魔物が
(九)強く人に乞ふ時に相手をよびかくる詞
(一〇)京へ出ては大儀ならんが此處まで來る方には差支なからん
(一一)あの儘に捨てたらば殘念なりしなるべし

（一）母の尼
（二）浮舟
（三）大原の內也
（四）母妹二人の尼は
（五）妹尼
（六）遠路に疲勞を感じたる其の殘りで暫時煩ひもしたれど
（七）橫川の寺へ
（八）途中で斯樣々々の女を連れて來たり抔といふ事は
（九）母尼等の心
（一〇）あの樣な處へ捨て置かせたるにや

心苦しき事」と言ひあへり。車二つして、老人（一）の乗り給へるには、仕うまつる尼二人、次のにはこの人（二）を臥せて、傍に今一人乗り添ひて、道すがら行きもやらず、車とゞめて湯參りなどし給ふ。比叡坂本に、小野（三）といふ所にぞ（四）住み給ひける。其處におはし著く程いと遠し。人々「中宿をぞ設くべかりける」など言ひて、夜更けておはし著きぬ。僧都は親をあつかひ、（五）女の尼君はこの知らぬ人をはぐくみて、皆抱きおろしつゝ休む。老の病の何時ともなきが、（六）苦しと思ひ給へし遠道のなごりこそ、しばし煩ひ給ひけれ、やう〳〵よろしくなり給ひにければ、僧都は（七）のぼり給ひぬ。

（八）斯かる人なむ率て來たるなど、法師のあたりには善からぬ事なれば、見ざりし人にはまねばす。尼君も皆口がためさせつゝ、もし尋ね來る人もやあると思ふも、しづ心なし。（九）いかで、さる田舍人の住むあたりに、斯かる人落ちあぶれけむ、物詣などしたりける人の、心地など煩ひけむを、繼母など樣の人のたばかりて、置か（一〇）

（一）前に僧都に仕へしものが僧都が此處に逗留せる由を聞きて
（二）浮舟
（三）薫が浮舟に通ひ給ひしが
（四）此性體しれぬ女は、僧都の心
（五）眼前に在るを見ながら眞にある者とも思はれず
（六）火葬の火は
（七）人をやく樣な氣色は見えざりしに、屍骸はなく衣類調度などばかり燒きたる事なれば然見えしなり
（八）此下衆は死の穢に觸れたる者なればとて内へは入れずに返したり
（九）薫
（一〇）大君
（一一）八宮の御娘が亡くなられしとは
（一二）今は女一宮以外に薫の大事がる女はある筈なし
（一三）母の尼
（一四）ふさがりなりし方角もよくなりたれば
（一五）住所の小野へ
（一六）浮舟は

そのわたりの下衆などの、（一）僧都に仕うまつりける、かくておはしますなりとて、訪ひ出で來るも、物語などして言ふを聞けば、下衆「故八宮の御女（二）、（三）右大將殿の通ひ給ひしが、殊に惱み給ふこともなくて、俄に隱れ給へりとて騷ぎ侍る。その御送葬の雜事ども仕う奉り侍るとて、昨日はえ參り侍らざりし」と言ふ。（四）さやうの人の魂を、鬼のとりもて來たるにや、と思ふにも、（五）且見る〳〵あるものとも覺えず、危く恐しと思す。人々、「昨夜見やられし火（六）は、（七）しか事々しき氣色も見えざりしを」と言ふ。下衆「殊更ことそぎて、嚴しくも侍らざりし」と言ふ。（八）穢らひたる人とて、立ちながら追ひ返しつ。人々「（九）大將殿は、宮の御女（一〇）もち給へりしは亡せ給ひて、年頃になりぬるものを、（一一）誰を言ふにかあらむ。（一二）姫宮を置き奉り給ひて、世に他心おはせじ」など言ふ。

尼君（一三）よろしくなり給ひぬ。（一四）方もあきぬれば、斯くうたてある所に久しうおはせむも便なしとて歸る（一五）。人々（一六）「此人は猶いと弱げなり。道の程も如何ものし給はむ。いと

給ふよりも、この人を生け果てて見まほしく惜みて、うちつけに添ひ居たり。(一)知らぬ人なれど、(二)みめのこよなくをかしければ、徒にならじと、(三)見る限扱ひ騷ぎけり。さすがに時々目見あけなどしつゝ、涙の盡せず流るゝを、妹尼「あな心憂や。いみじう悲しと思ふ(四)人のかはりに、佛の導き給へると思ひ聞ゆるを、かひなくなり給はば、なか〳〵なる事をや思はむ。さるべき契にてこそ、かく見奉るらめ。猶いさゝか物宣へ(五)」と言ひつゞくれど、辛うじて、浮舟「生き出でたりとも、怪しき(六)不用の人なり。人に見せで、夜この河に落し入れ給ひてよ」と、息の下にいふ。妹尼「まれ〳〵物宣ふを嬉しと思ふに、あないみじや。如何なれば斯くは宣ふぞ。如何にして(七)さる所にはおはしつるぞ」と問へども、物も言はずなりぬ。身にもし疵などやあらむとて見れど、此處はと見ゆる所なく美しければ、あさましく悲しく、誠に、人の心惑はさむとて出で來たる假(八)のものにや、と疑ふ。

二日ばかり籠り居て、(九)二人の人を祈り加持する聲絶えず、(一〇)怪しきことを思ひ騷ぐ。

(一)妹尼をはじめ人々が
(二)此女が非常に美しき器量故死なせたくなしと思ひて
(三)見るものは皆
(四)わが亡き娘の代りとして佛が授けて下さったものと思ふに
(五)却って一層の悲を増すべし
(六)我は無益の人なり
(七)あの樣な所にどうして居たぞ
(八)化生のもの
● 下人の噂、僧都の母妹等女を伴ひて小野の家に歸る
(九)母の尼と浮舟と
(一〇)浮舟の素姓

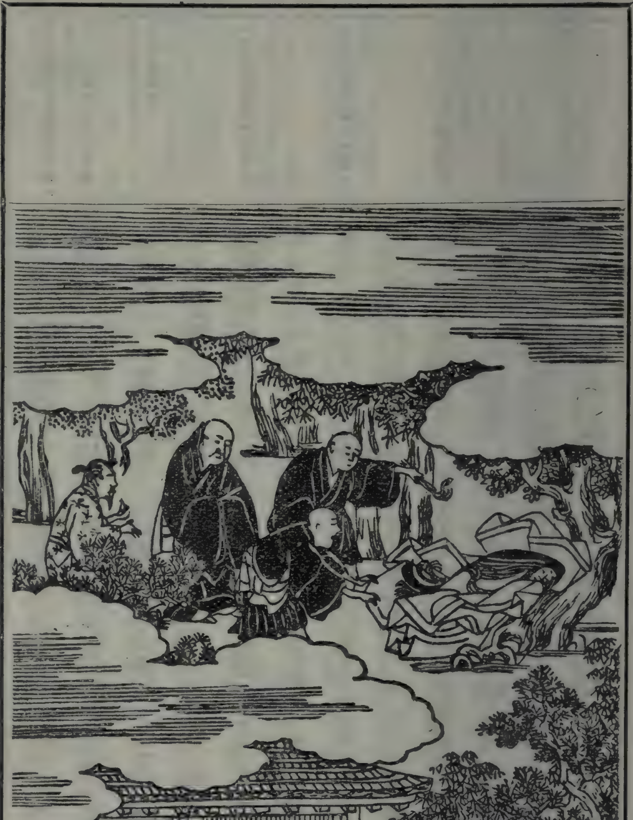
て、あてなるけはひ限なし。妹尼「たゞ我が(一)戀ひ悲む女の歸りおはしたるなゝめり」とて、泣く〳〵御達を出して、抱き入れさす。(二)如何なりつらむとも、有樣見ぬ人は、恐ろしがらで抱き入れつ。生ける樣にもあらで、流石に(三)目をほのかに見あけたるに、妹尼「物宣へや。如何なる人か、斯くては物し給へる」と言へど、物覺えぬ樣なり。(四)湯とりて手づから掬ひ入れなどするに、たゞ弱りに絶え入る樣なりければ、妹尼「なか〳〵いみじきわざかな」とて、妹尼「この人亡くなりぬべし。加持し給へ」と、(五)驗者の阿闍梨にいふ。僧「さればこそ。(六)怪しき御物扱ひなり」とは言へど、(七)神などの御爲に經讀みつゝ祈る。僧都もさし覗きて、僧都「如何にぞ、何のしわざぞと、能く調じて(八)問へ」と宣へど、いと弱げに消えもて行く樣なれば、「え生き侍らじ。(九)漫なる穢らひに籠りて煩ふべきこと。(一〇)流石にいとやむごとなき人にこそ侍るめれ。死に果つとも、(一一)たゞにやは捨てさせ給はむ。見苦しきわざかな」と言ひあへり。僧都「あなかま。人に聞かすな。(一二)煩しき事もぞある」など口がためつゝ、(一三)尼君は、親の煩ひ

（一）妹尼の娘は某中將の妻なりしが若死せし也、下に見えたり
（二）どの樣な樣にして居たのか見出されし時の樣子を知らぬ女等は
（三）あやしき女が
（四）妹尼が
（五）長谷へ同行せし僧都の弟子の阿闍梨
（六）餘計な世話をお燒きなさる
（七）加持に取りかゝる前に神分といひて般若心經をよみて神に手向くるなりとぞ
（八）つきものを調伏して
（九）此女の爲につまらぬ穢に觸れ出る事も出來ぬ樣になるべし
（一〇）此女は
（一一）むやみに捨てる譯にもゆかぬ
（一二）噂が高くなりては事が面倒になる
（一三）妹尼

(一)此怪しき者の死ぬべきをいふ
(二)批難する者もあり
(三)下人等に成るべく知らせぬ爲に
(四)母の尼が來れる也
(五)妖怪の爲に附纏はれたる
(六)長谷にて夢の告ありき

入れて、穢ひ(一)必ず出で來なむとす」と、もどくもあり。又、「物の變化にもあれ、目に見す〳〵、生ける人をかゝる雨にうち失はせむは(二)、いみじき事なれば」など、心心に言ふ。下衆などは、いと騷がしく、物をうたて言ひなすものなれば、人騷が(三)しからぬ隱の方になむ臥せたりける。

御車(四)寄せて下り給ふ程、いたう苦しがり給ふとて、のゝしる。少し靜まりて、僧都、「ありつる人は、如何なりぬる」と問ひ給ふ。僧「なよ〳〵として物も言はず、生きもし侍らず。何か物(五)にけどられにける人にこそ」といふを、妹の尼君聞き給ひて、何事ぞと問ふ。僧都「云々の事をなむ、六十にあまる年、珍らかなるものを見給へつる」と宣ふ。打聞くまゝに、妹尼「己が寺(六)にて見し夢ありき。如何樣なる人ぞ。先づその樣見む」と泣きて宣ふ。僧都「唯この東の遣戸になむ侍る。はや御覽ぜよ」と言へば、急ぎ行きて見るに、人も寄り附かでぞ捨て置きたりける。いと若く美しげなる女の、白き綾の衣一襲、紅の袴ぞ著たる。香はいみじく芳しく



つ、顔を見むとするに、(一)昔ありけむ目も鼻もなかりける女鬼にやあらむ、と(二)むくつけきを、頼もしく(三)いかき様を人に見せむと思ひて、衣をひき脱がせむとすれば、うつぶして聲立つばかり泣く。僧「何にまれ、かく怪しき事世にあらじ」とて、見果てむと思ふに、雨いたく降りぬべし。僧「かくて置いたらば、死に果て侍りぬべし。垣の下にこそ出さめ」といふ。僧都、「眞の人のかたちなり。(四)その命絶えぬを見る〳〵捨てむ事はいみじき事なり。池に游ぐ魚、山に鳴く鹿をだに、人に捕へられて死なむとするを見つゝ助けざらむは、いと悲しかるべし。人の命久しかるまじきものなれど、殘の命一二日をも惜まずばあるべからず。鬼にも神にも(五)領ぜられ、人に逐はれ人に(六)はかりごたれても、(七)これ横様の死をすべき物にこそはあゝめれ。佛の必ず救ひ給ふべき(八)際なり。なほ試にしばし、湯を飲ませなどして、助け試みむ。逐に死ぬべくば、いふ限にあらず」と宣ひて、この(九)大徳して抱き入れさせ給ふを、弟子ども、「忌々しきわざかな。いたう煩ひ給ふ(一〇)人の御あたりに、善からぬものを取

(一)比叡山の文珠樓に目のなき鬼の住みし由朱の盤といふ物語にありしといふ
(二)氣味惡けれど
(三)剛勇なる樣子を
(四)息のあるものを見殺しにするは殘酷也
(五)取られ
(六)誑かされたるにしても
(七)とにかく此人は横死すべき人と見える
(八)範圍の人なり
(九)強がりたる僧なるべし
(一〇)母の尼

(一)折あしき事哉
(二)反響
(三)留守番の翁の様子
(四)手にて額を撫であげながら、困りたる樣也
(五)私が此處へ來ても狐が平氣で居たりき
(六)一向たはひもない奴
(七)夜深けて尼や僧都に差上ぐべき食物の用意の方にのみ氣を取られて居ると見ゆ
(八)僧都をいふ
(九)性の惡い木精め

來たらむにこそ侍らめ。いと不便(一)にも侍りけるかな。穢らひあるべき所にこそ侍るめれ」と言ひて、ありつる宿守の男を呼ぶ。山彦(二)の答ふるも、いと恐ろし。あや(三)しの樣に、額(四)おしあげて出來たり。僧「此處には、若き女などや住み給ふ。斯かる事なむある」とて見すれば、宿守「狐のつかうまつるなり。この木のもとになむ、時々あやしきわざし侍る。一昨年の秋も、こゝに侍る人の子の、二つばかりに侍りしをとりて、まうで(五)來たりしかども、見驚かず侍りき」僧「さてその兒は死にやしにし」と言へば、宿守「生きて侍りき。狐は、さこそは人は脅やかせど、ことにもあらぬ奴(六)」といふ樣、いと馴れたり。かの夜(七)深きまゐりものの所に、心を寄せたるなるべし。僧都、「然らば、さやうの物のしたるわざか。猶能く見よ」とて、この物怖せぬ法師を寄せたれば、僧「鬼か神か狐か木精か。かばかりの天の下の驗者(八)のおはしますには、え隱れ奉らじ。名のり給へ〳〵」と衣をとりて引けば、顏をひき入れていよ〳〵泣く。僧「いで、あなさがな(九)の木精の鬼や。まさに隱れなむや」と言ひつ

長く艶々として、大なる木の根のいと荒々しきに寄り居て、いみじう泣く。僧「珍らしき事にも侍るかな。僧都の御房に御覧ぜさせ奉らばや」と言へば、實に怪しき事なりとて、一人はまうでて(一)、かゝる事なむと申す。僧都「狐の人に變化するとは昔より聞けど、まだ見ぬものなり」とて、わざと下りておはす(二)。(三)かの渡り給はむとする事によりて、下衆どもは、皆はかぐ\しきは(四)、(五)御厨子所など、あるべかしき事どもを、かゝるわたりには急ぐものなりければ、居しづまりなどしたるに、唯四五人して此處なる物を見るに、かはる事もなし。怪しうて、時のうつるまで見る。(六)疾く夜も明けはてなむ、人か何ぞと見顯さむと、心にさるべき眞言を讀み、印をつくりて試るに、しるくや(七)思ふらむ。僧都「これは人なり。更に非常の怪しからぬ物にあらず。寄りて問へ。亡くなりたる人にはあらぬにこそあゝめれ。もし死にたりける人を捨てたりけるが、蘇りたるか」と言ふ。僧「何の然る人をか、この院の内に捨て侍らむ。たとひ誠に人なりとも、狐木精やうの物の、欺きて取りもて

(一)僧都の處へ來て
(二)怪物の居る處へ
(三)尼君の此處へ來らるるによりて
(四)此句「居しづまりなどしたるに」へかゝる、役に立つ者どもは其々用事をして居る故
(五)勝手元などのせねばならぬ用事を
(六)僧都の心
(七)見極めがついたのであらう

(一)一寸とした座敷の用意などして
(二)同行したりし
(三)他の一人の僧と二人
(四)寢殿の後の方に
(五)氣味の惡い所哉と思ひて
(六)何者か居る樣なり、是浮舟也
(七)魔物ならん
(八)法を結びて、印は尊き意味ある手つき
(九)見つめて居る
(一〇)ぞつとする形容
(一一)つかつかと

にぞ宿り給ふ」と言へば、僧都「いとよかゝなり。公所なれど、人もなく心安きを」とて見せにやり給ふ。この翁、例もかく宿る人を見ならひたりければ、疎なるし(一)つらひなどして來たり。

まづ僧都渡り給ふ。いといたく荒れて、恐ろしげなる所かな、と見給ひて、僧都「大徳達經讀め」など宣ふ。この長谷に添ひたりし(二)阿闍梨と、同じ様なる今一人、(三)何事のあるにか、つきづきしき程の下﨟法師に、火ともさせて、人も寄らぬ後の方(四)にいきたり。森かと見ゆる木の下を、(五)疎ましげのわたりやと見入れたるに、白き物の廣ごりたるぞ見ゆる。「彼は何ぞ」と、立ち留りて火を明くなして見れば、物の(六)居たる姿なり。僧「狐の變化したるか。憎し。見顯さむ」とて、一人は今少し歩みよる。今一人は、僧「あな用な。(七)よからぬ物ならむ」と言ひて、さやうのもの退くべき印(八)をつくりつゝ、流石になほまもる。(九)頭の髪あらば太りぬべき(一〇)心地するに、この火燈したる大徳、憚もなく、(一一)奥なきさまにて、近く寄りてその樣を見れば、髪は

(一)母を
(二)僧都に通知したり
(三)僧都が
(四)僧都が宇治へ
(五)八十の老婆故惜くもなき命なれど
(六)御嶽精進には穢を忌む故若尼の死する事もあらば死の穢にならん事を恐るゝ也、御嶽精進は夜深更に金峯山を遙拜する勤
(七)連れ歸るべきなれど
(八)生憎天一神の方に當りて
(九)いつも僧都のとまりつけの處は
(一〇)院守の一家が
(一一)留守番の
(一二)も出なさるなら直に御出なされ、どうせあいて居る寢殿也

くてはいかでか、殘の道をもおはし著かむと、持て騷ぎて、宇治のわたりに知りたりける人の家ありけるに留めて、今日ばかりはやすめ(一)奉るに、猶いたく煩らへば、(二)横川に消息したり。(三)山籠の本意ふかくて、今年は出でじと思ひけれど、限の樣なる親の、道の空にて亡くやならむと驚きて、(四)急ぎものし給へり。(五)惜むべくもあらぬ人の樣を、自らも弟子の中にも、驗あるして加持しさわぐを、家主聞きて、「(六)御嶽精進し侍るを、いたく老い給へる人の重く惱み給ふは、如何」と後めたげに思ひて言ひければ、然も言ふべき事と、いとほしく思ひて、いと狹くむつかしくもあれば、やう〳〵率て(七)奉るべきに、中神(八)ふたがりて、(九)例すみ給ふ所は忌むべかりければ、故朱雀院の御領にて、宇治の院と言ひし所このわたりならむ、と思ひ出でて、院守、僧都知り給へりければ、一二日宿らむと言ひにやり給へりければ、「長谷になむ昨日皆(一〇)まうでにける」とて、いとあやしき宿守(一一)の翁を呼びて率て來たり。翁「(一二)おはしまさばはや。徒なる院の寢殿にこそ侍るめれ。物詣の人は常

❶ 横川の僧都の母長谷詣の歸途宇治院に宿す、樹下に倒れたる浮舟を發見して介抱す

(一)母子相伴ひて

(二)不快なりし故

(三)妹等が

# 手習

## 梗概

❶ 横川の僧都の母妹、長谷詣の歸途宇治院に宿す。樹下に倒れたる浮舟を發見して介抱す。❷ 下人の噂。僧都母妹等、浮舟を伴ひて小野の家に歸る。❸ 僧都浮舟を加持す。浮舟の蘇生。素姓をつゝみて語らず。❹ 僧都の妹の娘の夫たりし中將、小野を訪ひて浮舟を見る。僧都に浮舟の身の上を聞く。浮舟を挑む。❺ 中將再、小野を訪ふ。笛を吹く。老耄せる母の得意の倭琴。❻ 妹尼長谷詣。留守に中將來りて浮舟を挑む。浮舟老母の室に逃入る。❼ 僧都上京の序小野に來る。浮舟、僧都に乞ひて尼になる。❽ 僧都、明石中宮に浮舟の事を語る。❾ 中將又小野を訪ひて浮舟の出家を惜しむ。❿ 母の孫紀伊守、小野に來りて薫の噂をなす。浮舟の感傷。⓫ 小宰相、薫に浮舟の事を語る。薫小野を訪はんとす。

其の頃横川に、某僧都とかいひていと尊き人住みけり。八十あまりの母、五十ばかりの妹ありけり。ふるき願ありて、長谷に詣でたりけり。(一)睦まじくやむごとなく思ふ弟子の阿闍梨を添へて、佛經供養ずること行ひけり。事ども多くして歸る道に、奈良坂といふ山越えける程より、この母の尼君(二)心地惡しくしければ、(三)斯

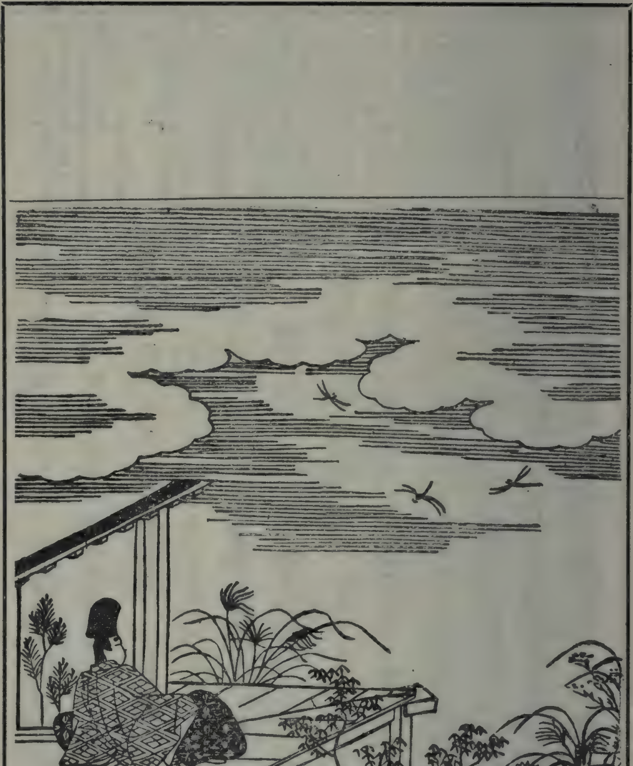
たて給へる姫君、また斯ばかりぞ多くはあるべき、怪しかりける事は、(一)さこそ聖の御あたりに、山の(二)懐より出で來たる人々の、(三)かたほなるはなかりけるこそ。この、はかなしや輕々しやなど思ひなす人も、かやうの打見る氣色はいみじうこそをかしかりしかと、何事につけても、(四)唯かのひとつゆかりをぞ思ひ出で給ひける。怪しくつらかりける契どもを、つくづくと(五)思ひ續けながめ給ふ夕暮、蜻蛉の物はかなげに飛びちがふを、

薫(六)「ありと見て手にはとられず見れば又行方もしらず消えし蜻蛉(七)あるかなきかの」と、例の獨言ち給ふとかや。

(一)世間の美人といふものも大抵此位のものならん
(二)八宮のそばて
(三)大君中君いづれも立派な女なるは奇妙也
(四)浮舟ですら
(五)同じ大君の姉妹たちを
(六)大君や浮舟を蜻蛉に比したる也
(七)「世の中と思ひしものをかげろふのあるかなきかの程にぞありける」

(一)斯く取次で話をするは安く取扱はるゝ樣で
(二)私と從兄妹といふ關係に於てよりも
(三)女一方に居らるゝ事故
(四)私に親しまれるのが
(五)御訪問も申上げにくし
(六)宮の君に自身の返事をかす也
(七)動もすれば「誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに」の歌を思ひ出して塞ぎ勝なる今の私の境遇なるに從兄妹の縁あれば抔仰せらるゝは眞に忝し
(八)是が一通りの奉公人であつたら、薫の心
(九)とにかく宮の姫君ともある人が今ではどうして斯く輕々しく男に直接に物を言ふ樣になつたのかしらと
(一〇)此宮の君こそ又必ず匂の煩悶の種になるならんと、薫の心
(一一)缺點のなき女はありにくき世哉とも
(一二)宮の君こそは父宮が大事にしたる姬君なれ

けざりし御有樣につけても、故宮の思ひ聞えさせ給へりし事など、思ひ給へ出でられてなむ、斯くのみ折々聞えさせ給ふなる、御後言をも喜び聞え給ふめる」と言ふ。(一)泣々の人めきて心地なの樣や、と物憂ければ、薫「(二)もとより思し捨つまじき筋よりも、(三)今はまして、然るべき事につけても、(四)思ほし尋ねむなむ嬉しかるべき。疏々しう、人傳などにてもてなさせ給はば、(五)えこそ」と宣ふに、實にと思ひ騷ぎて、君をひき動がすべかゝめれば、宮君「(七)松も昔のとのみ眺めらるゝにも、もとよりなど(六)宣ふ筋は、まめやかに頼もしうこそは」と、人傳ともなく言ひなし給へる聲、いと若やかに愛敬づき、やさしき所添ひたり。(八)唯なべてのかゝる住處の人と思はば、いとをかしかるべきを、(九)たゞ今はいかで斯ばかりも、人に聲聞かすべきものとならひ給ひけむと、生うしろめたし。容貌もいとなまめかしからむかしと、見まほしきけはひのしたるを、(一〇)この人ぞ、又例のかの御心亂るべきつまなゝめると、をかしうも、(一一)有り難の世やとも、思ひ居給へり。(一二)これこそは、限なき人のかしづき生し



(一)女三も女一も同樣なりしに
(二)女一は
(三)斯かる姫宮を生みたる中宮を生じたる明石浦
(四)明石腹の女二宮を妻に有てるわが運命は、薫の心
(五)女一と女二とを
(六)女一方の西の對を我が局にして居る
(七)薫の心
(八)宮の君も矢張皇統の姫君なるよと
(九)父の式部卿宮が薫に與へんとせられし中なるにといふ「實」で
(一〇)薫が宮の君方へ
(一一)薫の來れるを見て逃入る樣も恥かしげ也
(一二)此處等の樣子が世間並也と薫が思ふ
(一三)宮の君を人知れず大事に思ひ居る杯と申上げたらば誰も言ふ一通りの口上を改めて眞似する樣になる
(一四)「思ふてふ事より外に又もがな君ばかりをばわきて忍ばん」
(一五)宮の君に取次がず
(一六)宮の君が今思の外の境遇に居るにつけても父宮の自分に對する扱方などを思ひ出して隨つて薫の斯く侍女に對して噂をせらるるをも喜びて居らるる

と聞ゆばかりの隔こそあれ、帝々の思しかしづきたる樣、(一)こと〴〵ならざりけるを、猶この御(二)あたりは、いと異なりけるこそあやしけれ、(三)明石の浦は心憎かりける所かな、など思ひ續くる事どもに、(四)我が宿世はいとやむごとなしかし、まして並べて持ち奉らば、と思ふぞいと難きや。(五)宮の君は、(六)この西の對にぞ御方したりける。若き人々のけはひ數多して、月めであへり。(七)いであはれ、(八)これも又同じ人ぞかしと、思ひ出で聞えて、(九)親王の昔心よせ給ひしものをと言ひなして、(一〇)其方へおはしぬ。童のをかしき宿直姿にて、二三人出でて歩きなどしけり。(一一)見つけて入る樣どももかどやかし。(一二)これぞ世のつねと思ふ。南面の隅の間によりて、うち聲づくり給へば、少し大人びたる人出來たり。(一三)「人知れぬ心よせなど聞えさせ侍れば、なか〳〵、皆人聞えさせ古しつらむ事を、初々しき樣にて、まねぶ樣になり侍り。まめやかになむ、(一四)事より外を求められ侍る」と宣へば、(一五)君にも言ひ傳へず、さかしらだちて、侍女(一六)「いと思ほしか

(一)侍女等の氣のつかぬ處へ
(二)簾を下すは隱れる爲也
(三)此處の應答は遊仙窟の文句によれり薫の詞は遊仙窟の美人十娘が琴ひく處に「將ニ纖手一時々弄ニ小絃、耳聞猶氣絕、眼見若爲憐」とあるにより此答は十娘の侍女が十娘を說明する文句に「容貌似ㇾ舅、潘安仁外甥、氣調如ㇾ兄、崔季珪之小妹」とあるを用ひたり、下の「まろこそ」も「容貌似ㇾ舅」を用ふ、舅は伯父
(四)女一は今夜も中宮方へ御出の樣なるが
(五)思はぬため息の出たるも
(六)取直しもせず
(七)律は秋の調なれば也
(八)音樂好きの女どもは
(九)女三も女一に劣れる身分ならず、薫の心
(一〇)女一が中宮腹といふ點だけが勝れるのみ

たに渡らせ給ひければ、人々月見るとて、この渡殿に打解けて物語する程なりけり。箏の琴いとなつかしう彈きすさぶ爪音、をかしう聞ゆ。(一)思ひかけぬに寄りおはして、薫「など、かくねたまし顏にかき鳴らし給ふ」と宣ふに、皆驚かるべかゝめれど、少しあげたる簾(二)うち下しなどもせず、起きあがりて、侍女(三)「似るべき兄や侍るべき」と答ふる聲、中將の御許とか言ひつるなりけり。薫「まろこそは御母方の叔父なれ」と、はかなき事を宣ひて、薫(四)「例の彼方におはしますべかゝめる。何わざをか、この御里住の程にせさせ給ふ」など、味氣なく問ひ給ふ。侍女「何處にても、何事をかは。唯かやうにこそは過させ給ふめれ」と言ふに、をかしの御身のほどやと思ふに、漫なる歎(五)の打忘れてしつるも、あやしと思ひ寄る人もこそと紛らはしに、さし出でたる和琴を、(六)たゞさながら搔き鳴らし給ふ。(七)律の調は、あやしく折にあふと聞ゆる聲なれば、聞きにくゝもあらねど、彈きはて給はぬを、なかなかなりと、(八)心入れたる人は消えかへり思ふ。(九)我が母宮も劣り給ふべき人かは、后腹(一〇)

(一)匂には此處の侍女等が押れ親しめる樣が妬く思はる
(二)匂がしつこく一生懸命にかゝる故其に負けて匂にはどの女も靡くのであらうが、薫の心
(三)匂には我は何時も女を取られてひどい目に遇つて居る
(四)此處に居る女の中で匂が珍重して居らるゝ女を我が手に入れて
(五)自分が匂の爲にさせられた心配を匂にさせてやりたし
(六)眞に譯の分る女は匂よりは我に靡く筈
(七)中君が匂の妾たる今の狀態を
(八)中君自ら思ひて
(九)匂との中が次第に面白からずなりゆくにつけて世間の思はくを氣にかけながらも匂との關係はどうすることも出來ぬものと諦めて居る態度が立派なものぢや
(一〇)深く關係せぬ故
(一一)我は徒然なれば
(一二)女一宮の方
(一三)此間の事が癖になりて
(一四)わざ〳〵薫が西の渡殿へ出かけて來たるも
(一五)女一が中宮方へ

よ、といとほしく、(一)この宮には、皆めなれてのみ覺え奉るべかゝめるも口惜し。(二)おりたちて強なる御もてなしに、女はさもこそ負け奉らめ、(三)我がさも口惜しく、この御ゆかりには、妬く心憂くのみあるわざかな、いかで、(四)このわたりにも、珍らしからむ人の、例の心入れて、騷ぎ給はむを語らひ取りて、(五)我が思ひし樣に、安からずとだにも思はせ奉らむ、(六)誠に心ばせあらむ人は、我が方にぞ寄るべきや、されど難いものかな、人の心は、と思ふにつけて、(七)對の御方の、かの御有樣をば、ふさはしからぬものに(八)思ひ聞えて、(九)いと便なき睦になり行く、大方のおほえをば苦しと思ひながら、猶さし放ち難きものに思し知りたるぞ、有り難く哀なりける、さやうなる心ばせある人、こゝらの中にあらむや、(一〇)入りたちて深く見ねば知らぬぞかし、寢覺がちに(一一)つれ〴〵なるを、少しは好きも習はばや、など思ふに、今は猶つきなし。

例の(一二)西の渡殿を、(一三)ありしならひに、(一四)わざとおはしたるもあやし。(一五)姫宮夜はあな

(一)我々を
(二)私が試みよと申上げしは一般的に言ひしのみ敢て此我々の中へ御泊りなされと申せしには非ず
(三)中將の通り得ずして立留れるに對していふ
(四)侍女等の恥ぢて隱れたるは必ず恥づべき故ありての事なるべし
(五)此處の侍女等はどれもこれも辨のお許の樣な鐵面皮の奴ばかりならんと薫に思はれるのはつらいと
(六)薫が
(七)「大底四時心總苦、就レ中斷レ腸是秋天」白居易の句
(八)中將の君の
(九)中將の君を誰ぞと尋ぬる也
(一〇)女一宮の侍女なる
(一一)斯く直に名をあかすとはけしからん仕方
(一二)一寸にもせよ彼は誰かと床しく思ふ人に對して奧底なく名を言つて仕舞ふとは物の分らぬ仕方

薫「宿かさばひと夜はねなむおほかたのはなにうつらぬ心なりとも」とあれば、弁「何か恥(一)かしめさせ給ふ。大方(二)の野邊のさかしらをこそ聞えさすれ」と言ふ。はかなきことを唯少し宣ふも、人は殘聞かまほしくのみ思ひ聞えたり。薫「心なし。道(三)あけ侍りなむよ。わきても、かの御物恥(四)の故、必ずありぬべき折にぞあめる」とて、立出で給へば、おしなべて(五)斯く殘なからむと、思ひやり給ふこそ心憂けれ、と思へる人もあり。

東(六)の勾欄に押しかゝりて、夕陰になるまゝに、花のひもとく御前の叢を見渡し給ふも、物のみ哀なるに、薫「中(七)について腸をたゆるは秋の天」といふことを、いと忍びやかに誦じつゝ居給へり。ありつる(八)衣の音なひ、著きけはひして、母屋の御障子より通りて、彼方に入るなり。宮の歩みおはして、匂(九)「これより彼方に參りくるは誰ぞ」と問ひ給へば、侍女「かの御方(一〇)の中將の君」と聞ゆなり。猶(一一)あやしのわざや、誰(一二)にかとかりそめにも打思ふ人に、やがてかくゆかしげなく聞ゆる名ざし

るべし、硯の蓋にすゑて、心もとなき花の末々手折りて、玩びけりと見ゆ。かたへは几帳のあるにすべり隠れ、(一)あるは打背き、(二)おし開けたる戸の方に紛らはしつつ居たる頭つきどももをかしと見渡し給ひて、硯ひき寄せて、

薫「(三)をみなへし亂るゝ野邊にまじるとも露のあだ名を我にかけめや

心やすくは思さで」と、たゞこの(四)障子に後したる人に見せ給へば、うちみじろきなどもせず、のどやかにていと疾く、

中將「(五)花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露にみだれやはする

と書きたる手、唯片そばなれど、(六)由づきて大方めやすければ、誰ならむと見給ふ。(七)今まう上りける道に塞げられて、滯り居たるなるべしと見ゆ。辨の御許は、辨「いとけざやかなる翁言にくゝ侍り」とて、(八)

辨「(九)旅寢してなほこゝろみよ女郎花さかりのいろにうつりうつらず

(一〇)さて後定め聞えさせむ」と言へば、

(一)何の花とは一寸分らぬ
(二)側を向き
(三)斯かる大勢の女の中に交りても私は眞面目男なれば浮名は立たじ
(四)薫に近き襖を後にして向う向きて居たる女に
(五)女郎花は仇なるものと謠はれては居れど、さう誰にでも靡くものでは無い
(六)一寸走り書きしたるを見たばかりなれど
(七)此中將は今此處へ來たのが路が塞がつて居たので立留り居しなるべしと思はる
(八)薫が浮名の立つ氣遣なしなどと餘りきつぱりした老人の樣な口をききなさるが憎らしい
(九)果して美人に御心が移るか移らぬか一つ御ためしなされ
(一〇)浮名の立つ心配の有無は其後に定むべし



そのわたりの事かけて知り顔にも言はぬ事なれば(一)、心一つに飽かず胸いたく思ふ。(二)宮は、宇治の御物語など、細やかに聞えさせ給へば、今一所(三)は立出で給ふ。見つけられ奉らじ(四)、しばし御果(五)をも過さず心淺しと見え奉らじ、と思へば隱れぬ。東の渡殿に、あきあひたる戸口に人々あまた居て、物語など忍びやかにする所におはして、薫「某(六)をぞ女房は睦まじく思すべきや。女だに斯う(七)心安くはよもあらじかし。流石に然る(八)べからむ事、教へ聞えぬべくもあり。やう／＼見知り(九)給ふべかめれば、いとなむ嬉しき」と宣へば、いと答へにくゝのみ思ふ中に、辨の御許とて、馴れたる大人、辨「其(一〇)も睦まじく思ひ聞ゆべき故なき人の、恥ぢ聞え侍らぬや。物は然こそはなか／＼侍るめ。必ず(一一)その故尋ねて打ち解け御覽ぜらるゝにしも侍らねど、斯ばかり(一二)面なくつくりそめてける身に負はざらむも、かたはらいたくてなむ」と聞ゆれば、薫「恥づべき故あらじと、思ひ定め給ひてけるこそ口惜しけれ」など、宣ひつゝ見れば、唐衣は脱ぎすべし押し遣り、打解けて、手習しけるな

(一)宇治の事は知らぬ顔して居る事故
(二)句
(三)薫は
(四)薫に見られたくなし、侍従の心
(五)浮舟の忌明まで辛抱もせず
(六)私をこそ女中達は親しくせられて然るべきぢや
(七)薫のやうに
(八)女の知らで叶はぬ事を教へる事も出來る
(九)我が心を其方等が
(一〇)薫を親しむべき縁故もなき女が無遠慮な擧動をするのは怪しからんが世間は其樣なのが多い
(一一)薫の方で馴れ／＼しくするは必然すべき女だからといふ譯でもなければ、私如きが差出て御挨拶するも如何なものなれど
(一二)私は奉公人として鐵面皮にしつけたる身故尻込して居るも不似合に思はるゝ故御返事を申上ぐる

かめしうなりにたる御族なれば、なか〳〵(一)古よりも今めかしき事は勝りてさへなむありける。(二)この宮、例の御心ならば、月頃の程に、如何なるすき事どもをし出で給はまし、こよなく靜まり給ひて、人目には少し(三)生ひ直りし給ふかなど見ゆるを、この頃ぞまた、宮の君に、本性あらはれて拘づらひありき給ひける。涼しくなりぬとて、(四)宮、内裏に參らせ給ひなむとすれば、(五)「秋のさかり紅葉の頃などを見ざらむこそ」など、若き人々は口惜しがりて、皆參り集ひたる頃なり。水に狎れ月をめでて、御あそび絶えず、常よりも今めかしければ、(六)この宮ぞ、かゝる筋はいとこよなくもてはやし給ふ。(七)朝夕に目なれても、猶今見む初花の樣し給へるに、(八)大將の君は、いとさしも入立ちなどし給はぬ程にて、恥かしう心ゆるびなきものに(九)皆思ひたり。例の(一〇)二所參り給ひて、(一一)御前におはする程に、かの侍從は物より覗き奉るに、(一二)何方にも〳〵よりて、めでたき御宿世見えたる樣にて、(一三)世にぞおはせましかし、あさましくはかなく、(一四)心憂かりける御心かななど、人には、

(一)源氏時代よりも
(二)匂宮
(三)年とりて浮氣が直りしかと
㊂ 薫、中宮に參りて侍女等に戯る、和琴を彈く、宮の君を訪ふ
(四)中宮
(五)此六條院の
(六)匂
(七)匂に對する六條院の人々の感じ
(八)薫はさ程親しく立入りはせぬ間柄にて
(九)六條院の人々が
(一〇)匂と薫
(一一)中宮の
(一二)匂か薫かどちらへ靡きても、以下侍從の心
(一三)浮舟が生きて居られゝばよかりしに
(一四)浮舟の

み思(一)ひ歎き給ふ有樣にて、「懷しうかく尋ね宣はするを(二)」など御兄(三)の侍從も言ひて、この頃迎へ(四)取らせ給ひてけり。(五)姫宮の御具にていとこよなからぬ御程の人なれば、やむごとなく心ことにて侍ひ給ふ。限あれば(六)、宮の君などうち言ひて、裳(七)ばかりひきかけ給ふぞいと哀なりける。兵部卿の宮(八)、この君(九)ばかりや、戀しき人に思ひよそへつべき樣したらむ、父親王は兄弟ぞかし、など、例の(一〇)御心は、人を戀ひ給ふにつけても、人ゆかしき御癖やまで、いつしかと御心(一一)かけ給ひてけり。大將(一二)(一三)、もどかしきまでもあるわざかな、昨日今日といふばかり、春宮(一四)にやなどおぼし、我にも氣色ばませ給ひきかし、斯くはかなき世の衰へを見るには、水(一五)の底に身を沈めても、もどかしからぬわざにこそ、など思ひつゝ、人よりは心(一六)よせ聞え給へり。この院(一七)におはしますをば、內裏よりもひろく面白く住みよきものにして(一八)、常にしも侍はぬ人どもも、皆打解け住みつゝ、はる〲と多かる對ども廊渡殿に滿ちたり。左大(一九)臣殿、昔(二〇)の御けはひにも劣らず、すべて限もなく營み仕う奉り給ふ。い(二一)

(一)宮の君が
(二)中宮が御氣にかけらるるのに
(三)宮の君の兄、式部卿宮の子
(四)中宮方へ宮の君を
(五)宮の君は女一の御相手として相當の人故
(六)宮の君は身分ある人故なれどとにかく宮仕の事故
(七)唐衣を略して裳だけを穿く、平の侍女ならば唐衣をも著用する譯なれど其丈の區別ある也
(八)匂
(九)匂の心、宮の君丈は浮舟に似て居るかも知れぬ
(一〇)好色なる心は
(一一)宮の君に
(一二)薰
(一三)宮の君が斯く奉公に出るとは見ては居られぬ衰へ哉、以下薰の心
(一四)宮の君を春宮に奉らんかと父宮が思ひ
(一五)浮舟の樣に
(一六)宮の君に
(一七)六條院
(一八)詰めきりにして居ぬ人々も
(一九)夕霧
(二〇)源氏の
(二一)繁昌なる夕霧一門の事故

(一)匂に仕へよと
(二)匂の御志は辱なけれど、侍從の心
(三)中君と浮舟とは姉妹なれど面倒なる關係ある中故
(四)明石中宮に御奉公申したき由を申出でたれば
(五)匂が侍從を
(六)侍從が
(七)明石中宮へ
(八)侍從に對する中宮方の侍女等の評
(九)薫も中宮へ
(一〇)侍從が
(一一)中宮方は、侍從の心
(一二)多くの貴女たちの中にも浮舟位の女はなしと
◉宮の君中宮に引取らる、匂宮の懸想
(一三)宮の君と名づく
(一四)繼母の兄で右馬頭をつとめ人品もよくなき男が宮の君に懸想したるを
(一五)右馬頭に嫁せしめんと約束したりと中宮が便りに聞きて
(一六)宮の君
(一七)右馬頭などに遣つては棄てて仕舞ふ樣な物

給ひて、匂「かくて侍へ」(一)と宣へど、(二)御心はさるものにて、人々の言はむ事も、さ(三)る筋の事交りぬるあたりは、聞きにくき事もあらむと思へば、うけひき聞えず。(四)后の宮に參らむとなむ趣けたれば、匂「いとよかゝなり。さて(五)人知れず思し遣はむ」と宣はせけり。(六)心細くよるべなきも慰むやとて、知る便もとめて(七)參りぬ。(八)汚げなくてよろしき下臈なりとゆるして、人も誹らず。(九)大將殿も常に參り給ふを、(一〇)見る度ごとに物のみ哀なり。(一一)いとやむごとなきものの姬君のみ、多く參りつどひたる宮と人も言ふを、やうやう目留めて見れど、(一二)猶見奉りし人に似たるは無かりけり、と思ひありく。

この春亡せ給ひぬる式部卿の宮の(一三)御女を、繼母の北の方殊にあひ思はで、(一四)兄の右馬頭にて人柄もことなる事なき、心かけたるを、いとほしうなども思ひたらで、(一五)然るべき樣になむ契ると、聞しめす便ありて、中宮「いとほしう、父宮のいみじうかしづき給ひける(一六)女君を、(一七)徒なる樣にもてなさむ事など宣はせければ、いと心細くの

(一)段々考へつめれば
(二)匂宮
(三)浮舟
(四)畢竟自分が色戀に不慣れであつた罪なりと
㊉ 匂宮、侍從を迎へ取りて召使ふ
(五)薫さへ戀故には苦勞が多きに
(六)匂は
(七)浮舟の形見として
(八)中君
(九)中君と浮舟とは
(一〇)中君の浮舟に對する情が濃き譯はなし
(一一)匂が思ふ通りに
(一二)宇治に
(一三)右近と侍從
(一四)浮舟が
(一五)元々浮舟の侍女ではなけれど
(一六)浮舟に仕へて辛抱すれば又よい事もあるべきかと
(一七)浮舟なき今は
(一八)侍從が

やすくらうたき語らひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を、(一)思ひもて行けば、(二)宮をも思ひ聞えじ、(三)女をも憂しと思はじ、(四)唯我が有樣の世づかぬ怠りぞなど、ながめ入り給ふ時々多かり。

(五)心のどかに樣よくおはする人だに、かゝる筋には身も苦しき事自ら交るを、(六)宮はまして慰めかね給ひつゝ、(七)かの形見に、飽かぬ悲しさをも宣ひ出づべき人さへ無きを、(八)對の御方ばかりこそは哀など宣へど、(九)深くも見馴れ給はざりけるうちつけの睦なれば、(一〇)いと深くしもいかでかはあらむ。また、(一一)思すまゝに、「戀しやいみじや」など宣はむには、かたはらいたければ、(一二)彼所にありし侍從をぞ、例の迎へさせ給ひける。皆人どもは往き散りて、(一三)乳母とこの人二人なむ、とりわきて(一四)思したりしも忘れがたくて、侍從は(一五)餘所人なれど、猶語らひてあり經るに、世づかぬ川の音も、(一六)嬉しき瀨もやあると、賴みし程こそなぐさみけれ、(一七)心憂くいみじく、物恐ろしくのみおぼえて、京になむ怪しき所に、この頃(一八)來て居たりける。尋ね出で

思し靡く人のあらましかばと、思ふ身ぞくち惜しき。

薫　荻の葉に露ふきむすぶ秋風も夕ぞわきて身にはしみける（一）

と書きても添へ（二）まほしく思せど、さやうなる（三）露ばかりの氣色にても漏りたらば、いと煩はしげなる世なれば、はかなき事をも、え仄めかし出づまじく、かく萬に何やかやと、物を思ひ〱ての果は、昔（四）の人ものし給はましかば、如何にも〱外（五）様に心を分けましや、時の帝の御女を賜ふとも、（六）得奉らざらまし、又然（七）思ふ人ありと聞召しながらは、かゝる事もなからましを、猶心憂く我が心亂り給ひける橋姫（八）かな、と思ひ餘りては、また宮（九）の上にとりかゝりて、戀しくもつらくも、わりなき事ぞ、嗚呼がましきまで悔しき。これ（一〇）に思ひわびてのさし次（一一）には、あさましくて亡せにし人（一二）の、いと心をさなく滞る所（一三）なかりける輕々しさをば思ひながら、流石にいみじと物（一四）を思ひ入りけむ程、我が（一五）氣色例ならずと、心の鬼に歎き沈みて居たりけむ有様を聞き給ひしも、思ひ出でられつゝ、重り（一六）かなる方ならで、唯心

（一）女一を思へる也
（二）其畫に
（三）女一を慕ふ樣な樣子が少しでも人に知れては、薫の心
（四）大君存生ならば
（五）大君以外の女を顧みるべきに非ず
（六）娶らざるべし
（七）外に愛する女ありと帝が聞きて居ながら御娘を押附ける事もなかるべきに
（八）大君をいふ
（九）中君に心が集注して
（一〇）中君の事に
（一一）すぐ其次には
（一二）浮舟
（一三）思慮なく物をやつて仕舞ふ輕々しさ
（一四）浮舟が
（一五）薫の仕向けが仔細ありげなりとて
（一六）かねて薫が考へおきし浮舟に對する取扱方をいふ也

(一)小宰相の實家へ奉公に來て
(二)浮舟の橫死を
(三)氣味惡き
(四)其樣な噂をするなと其童に言ひ附けさせよ
(五)匂が
(六)明石が
(七)女一より女二へ
(八)薫が
(九)疾うから此樣に文通をさせて女一の文を見るべきであつた、薫の心
(一〇)女二へ
(一一)女一へ
(一二)芹川大將の物語といふ小說ありしなるべし
(一三)人名歟、或はたうぎん(當今即ち今上)のうつし誤りなるべし
(一四)薫が我身の上に
(一五)其物語の女の樣に

ひしか」と宣ふ。大納言「いさや、下衆は、確ならぬ事をも言ひ侍るものを、と思ひ侍れど、彼處に侍りける下童の、唯この頃宰相(一)が里に出でまうできて、確なる樣にこそ言ひ侍りけれ。かく怪しくて(二)亡せ給へる事、人に聞かせじ。おどろ〳〵しく、おぞき(三)やうなりとて、いみじく隱しける事どもとや。さて委しくは聞かせ奉らぬにやありけむ」と聞ゆれば、中宮「更にかゝる(四)事又まねぶなと言はせよ。かゝる筋に御身(五)をもて損ひ、人にも輕く心づきなきものに思はれ給ふべきなゝめり」と、いみじく思いたり。(六)

その後姫宮(七)の御方より、二の宮に御消息ありけり。御手などの、いみじく美しげなるを見るにも、いと(八)嬉しく、斯く(九)てこそ疾く見るべかりけれ、と思す。數多をかしき繪ども多く、大宮も奉らせ(一〇)給へり。大將殿打勝りてをかしきども集めて、參らせ給ふ。(一一)芹川(一二)の大將のとほ君(一三)の、女一宮思ひかけたる秋の夕暮に、思ひ侘びて出でて行きたる畫、をかしく畫きたるを、いと(一四)よく思ひ寄せらる。然(一五)ばかり

(一)薫の失ひたる浮舟は
(二)中君の
(三)浮舟の
(四)浮舟に匂が忍んで通ひなされるさうな
(五)浮舟を引取らんとて
(六)番人、守部
(七)浮舟も匂を
(八)噂に上る筈なるを

けれ。いかでかゝる御癖止め奉らむ。恥かしや、この人々」と宣ふ。大納言「いと怪しきことをこそ聞き侍りしか。この(一)大將殿の亡くなし給ひてし人は、宮の御二條の(二)北の方の御弟なりけり。異腹なるべし。常陸の前の守某が妻は、(三)叔母とも母とも言ひ侍るなるは、如何なるにか。その(四)女君に、宮こそいと忍びておはしましけれ。大將殿や聞きつけ給ひたりけむ。俄に(五)迎へ給はむとて、(六)まもり添へなど、事々しくし給ひける程に、宮もいと忍びておはしましながら、え入らせ給はず、怪しき樣に、御馬ながら立たせ給ひつゝぞ、歸らせ給ひける。(七)女も宮を思ひ聞えさせけるにや、俄に消え亡せにけるを、身投げたるなゝめりとてこそ、乳母などやうの人どもは、泣き惑ひ侍りけれ」と聞ゆ。宮もいとあさましと思して、中宮「誰か然ることは言ふとよ。いといとほしく心憂き事かな。さばかり珍らかならむ事は、(八)自ら聞えありぬべきを、大將もさやうには言はで、世の中のはかなくいみじき事、かく宇治の宮の族の、命の短かりける事をこそ、いみじく悲しと思ひて宣

(一)女一方の
(二)薫が
(三)女一は中宮方へ
(四)眞面目男の薫でも矢張女に懸想して居ると見える、あの樣な男の相手には氣のきかぬ女ではいけぬ
(五)薫をば
(六)誰でも薫には注意して應答して貰ひたく中宮は思へり
(七)薫が小宰相に
(八)眞の色戀の沙汰では無いと見える
(九)匂を小宰相が
(一〇)匂の懸想に對して
(一一)匂の見つともなきが浮氣を小宰相

見やり給ふ。侍女「今より習はせ給ふこそ、實に若くならせ給ふならめ」など、はかなき事を言ふ人々のけはひも、怪しうみやびかに、をかしき御方(一)の有樣にぞある。その事となけれど、(二)世の中の物語などしつゝ、しめやかに例よりは居給へり。(三)姫宮は、彼方に渡らせ給ひにけり。大宮、中宮「大將の其方に參りつるは」と問ひ給ふ。御供に參りたる大納言の君、「小宰相の君に、物宣はむとにこそは侍るめりつれ」と聞ゆれば、中宮「まめ人の(四)流石に人に心留めて物語するこそ、心地後れたらむ人は苦しけれ。心の程も見ゆらむかし。小宰相などはいと後やすし」と宣ひて、御兄弟なれど、(五)この君をば猶はづかしく、(六)人も用意なくて見えざらなむと思いたり。大納言「人よりは(七)心よせ給ひて、局などに立ち寄り給ふべし。物語細やかにし給ひて、夜更けて出でなどし給ふ折々も侍れど、例の目馴れたる(八)筋には侍らぬにや。(九)宮をこそいと情なくおはしますと思ひて、(一〇)御答をだに聞えず侍るめれ。辱き事」と言ひて笑へば、宮も笑はせ給ひて、中宮(一一)「いと見苦しき御樣を、思ひ知るこそをかし

(一)文をやる樣に女一に勸めん、女二よりもよこすがよし
(二)女二より差上ぐるは勿論の事也
(三)女二を
(四)明石と薫と兄弟なる緣を以て女二をも睦まじくして下されてこそ嬉しかるべけれ
(五)前に親しくなされしを
(六)薫が女一に心ありていふとは明石は思ひも寄らず
(七)薫が中宮の御前を辭して
(八)以下薫の心、小宰相に逢はん
(九)隙見せし渡殿
(一〇)女一宮の方へ
(一一)薫の樣子をいふ
(一二)夕霧
(一三)女一方の侍女等の御目にはかゝり難き故
(一四)便なく知る人もなきをいふ
(一五)是からは懇意にして頂きたしと思ひて參れり
(一六)落著かぬと

めりしを、所々になり給ひし折に、とだえ初め給へるにこそあらめ。今そゝのか(一)し聞えむ。それよりもなどかは」と聞え給ふ。(二)薫「彼よりはいかでかは。もとより數(三)まへさせ給はざらむをも、かく親しく(四)て侍ふべきゆかりに寄せて、思召し數まへさせ給はむこそ、嬉しくは侍るべけれ。ましてさも(五)聞え馴れ給ひにけむを、今捨てさせ給はむは、辛き事に侍り」と啓し給ふを、(六)好きばみたる氣色あるかとは、思しかけざりけり。

立出で(七)て、一(八)夜の志の人にあはむ、(九)ありし渡殿も慰めに見むかし、と思して、御前をあゆみ渡りて、西樣(一〇)におはするを、御簾の中の人々心ことに用意す。實にい(一一)と樣よく限なきもてなしにて、渡殿の方は、(一二)左の大殿の君達など居て、物言ふけはひすれば、妻戸の前に居給ひて、薫「大方には參りながら、この(一三)御方の見參に入ることの難く侍れば、(一四)いと覺なく翁び果てにたる心地し侍るを、(一五)今よりはと思ひおこし侍りてなむ。(一六)ありつかずと若き人どもぞ思ふらむかし」と、甥の君達の方を

その日は暮して、またの朝に大宮に(一)まゐり給ふ。例の宮(二)もおはしけり。丁子(三)に深く染めたる羅の單衣を、(四)細やかなる直衣に著給へる、いと好ましげなり。(五)女の御身なりのめでたかりしにも劣らず、白く淸らにて、猶ありしよりは面瘦せ給へる、いと見るかひあり。(六)覺え給へりと見るにもまづ戀しきを、いとあるまじき事と靜むるぞ、(七)たゞなりしよりは苦しき。(八)繪をいと多く持たせて參り給へりける。女房して(九)彼方に參らせ給ひて、(一〇)我も渡らせ給ひぬ。(一一)大將も近く(一二)參りより給ひて、御八講の尊く侍りしこと、(一三)古の御事少し聞えつゝ、殘りたる繪見給ふ序に、薫「(一四)この里にものし給ふ御子の、(一五)雲の上はなれて、思ひ屈し給へるこそいとほしう見給ふれ。(一六)姫宮の御方より、御消息も侍らぬを、かく(一七)品定まり給へるに思し捨てさせ給へる様に思ひて、心ゆかぬ氣色のみ侍るを、(一八)かやうの物時々ものせさせ給はなむ。(一九)某がおろして持てまからむ、はた見るかひも侍らじかし」と聞え給へば、中宮「怪しく、などてか捨て聞え給はむ。内裏にては、近かりしにつけて、(二〇)時々も聞え通ひ給ふ

㊉ 薫女一宮を慕ひて女二宮をして女一宮に親しましめんとす、薫明石中宮に參る、浮舟の噂、女一宮と女二宮との交際

(一)薫が
(二)匂宮
(三)匂の服装
(四)色濃き直衣の下に重ねて著たる様
(五)女一宮の
(六)匂が女一に似て居ると思ふにつけても女一の戀しさが先に立つを、薫の心
(七)女一を見ざりし時よりは
(八)匂が
(九)女一へ
(一〇)匂も
(一一)薫
(一二)明石中宮に
(一三)源氏紫などの噂
(一四)女二宮をいふ
(一五)平人になりてふさぎ込んで居るが氣の毒
(一六)女一より
(一七)女二が身分卑しくなりたる故見棄てられたる様に思ひて
(一八)繪抔を時々女二へ御賜り下され
(一九)私が頂戴して行つたのでは
(二〇)歴文の取遣もありしに

(一)無作法に
(二)今は見る人もなき故著てもよからん
(三)女一宮の穿き居られしと同様の品
(四)女二が女一に
(五)すべて昨日隙見せし通りにして見るを自らをかしく思ふ也
(六)薫の心
(七)姉の代りに妹を見る事故
(八)女一を
(九)帝が
(一〇)今は久しく文も差上げず
(一一)女二が平人なる薫の妻になりたりとて
(一二)明石の
(一三)女二が女一の文をよこさぬを恨み居らるゝと申上げん
(一四)女二が
(一五)わざと女二が女一へ文を差上げぬと申上げん

人おほく見る折なむ、透きたる物著たるは傍若(一)に覺ゆる。(二)たゞ今はあへなむ」と、手づから著せ奉り給ふ。御袴も(三)昨日の同じ紅なり。御髪の多さ、すそなどは(四)劣り給はねど、猶様々なるにや、似るべくもあらず。氷召して、人々に割せ給ふ。取りて一つ奉りなどし給ふ(五)心の中もをかし。(六)繪に畫きて、戀しき人見る人は無くやはありける、ましてこれは、慰めむに似氣(七)なからぬ御程ぞかし、と思へど、昨日かやうにて我まじり居、(八)心に任せて見奉らましかば、と覺ゆるに、心にもあらず打歎かれぬ。薫「一品宮に御文は奉り給ふや」と聞え給へば、女二「内裏にありし時、(九)上のさ宣ひしかば、聞えしかど、(一〇)欠しく然もあらず」と宣ふ。薫「(一一)唯人にならせ給ひにたりとて、彼よりも聞えさせ給はぬにこそは、心憂かゝなれ。今(一二)大宮の御前にて、(一三)恨み聞えさせ給ふと啓せむ」と宣ふ。女二「如何恨み聞えむ。うたて」と宣へば、薫「(一四)下衆になりにたりとて、思し貶すなゝめりと見れば、(一五)驚かし聞えぬとこそは聞えめ」と宣ふ。

（一）薫は
（二）以下薫の心
（三）大君の爲に出家の覺悟を踏みはづし初めて以來
（四）大君中君浮舟小宰相より今又女一宮を思ふをいふ
（五）薫の心
（六）女一宮を
（七）なまじ見て徒に戀情を高むるのみにてつまらぬ
（八）翌朝薫が起きし也
（九）女二宮
（一〇）女一宮とても必ず女二に勝れりとも限らずとは思はるれども
（一一）女一は
（一二）女一が非常に美しく見えしは氣のせいか又は場合によるかと
（一三）著たまへ
（一四）珍らしき著物
（一五）女三方
（一六）女三の侍女
（一七）侍女等は
（一八）女二の
（一九）薫が寵愛して斯かる事も言ふならんと
（二〇）薫が
（二一）自分の居間に
（二二）女二の方へ
（二三）なぜ著ぬのぞや

困じて居り。（一）かの人は、（二）やう〳〵聖になりし心を、（三）一節したがへそめて、（四）樣々なる物思ふ人ともなるかな、そのかみ世を背きなましかば、今は深き山に住み果てて、かく心亂らましやは、など思し續くるも安からず。（五）などて年頃（六）見奉らばやと思ひつらむ、（七）なか〳〵苦しうかひ無かるべきわざにこそ、と思ふ。（八）つとめて起き給へり。（九）女宮の御容貌いとをかしげなゝめるは、（一〇）これより必ず勝るべきことかはと見えながら、更に似給はずこそありけれ、（一一）あさましきまでにあてに薫り、えも言はざりし御樣かな、（一二）かたへは思ひなしか、折からか、と思して、薫「いと暑しや。これより薄き御衣奉れ。（一三）女は例ならぬ（一四）物著たるこそ、時々につけてをかしけれ」とて、薫「彼方（一五）に參りて、大貳（一六）に、羅の單衣の御衣、縫ひて參れと言へ」と宣ふ。（一七）御前なる人は、（一八）この御容貌のいみじき盛におはしますを、（一九）もてはやし聞え給ふと、をかしく思へり。例の（二〇）念誦し給ふ。（二一）我が御方におはしましなどして、晝つ方（二二）渡り給へれば、宣ひつる御衣、御几帳にうち掛けたり。薫「（二三）何ぞこは、奉らぬ。

(一)女一宮が、薫の心
(二)女一宮を隙見させて又大君の時の如く物思ひをさせるのかしらと
(三)女一宮を覗きつゝ立ち居るに
(四)自分の部屋へ
(五)明け放したるをやかましく言はれると
(六)薫の
(七)自分の姿を見らるゝも構はず
(八)薫が
(九)誰にも見知られたくなし、薫の心
(一〇)此下臈女房は
(一一)大變な事をした、以下女房の心
(一二)此隙見し居しは夕霧の子息等なるべし
(一三)隙見せし人ありと噂が立たば
(一四)小言が出るならん
(一五)隙見の男の
(一六)衣の音がせぬ故

宣ふ御聲、いとほのかに聞くも限なく嬉し。(一)まだいと小くおはしましゝ程に、我も物の心も知らで見奉りし時、めでたの兒の御樣やと見奉りし、その後絶えて、この御けはひをだに聞かざりつるものを、如何なる神佛のかゝる折見せ給へるならむ、(二)例の安からず、物思はせむとするにやあらむと、且はしづ心なく、(三)まもり立ちたる程に、此方の對の北面に涼みける下臈女房の、この障子は、頓の事にて、明けながら下りにけるを思ひ出でて、(四)人もこそ見つけて騷がるれ、(五)と思ひければ、惑ひ入る。この直衣姿を見つくるに、誰ならむと心騷ぎて、(七)己が樣見えむことも知らず、簀子よりたゞ來に來れば、(六)ふと立去りて、(八)誰とも見えじ、(九)すき〴〵しき樣なり、と思ひて隱れ給ひぬ。この御許は、(一〇)いみじきわざかな、(一一)御几帳をさへ現に引きなしてけるよ、左の大殿の君達ならむ、(一二)疎き人はた、此處まで來べきにも非ず、物の聞あらば、(一三)誰か障子は開けたりしと、必ず出で來なむ、(一四)單衣も袴も、生絹なゝめりと見えつる人の御姿なれば、(一五)人もえ聞きつけ給はぬならむかし、(一六)と思ひ

(一)こゝに女一宮の居らるゝとは薫が思はぬに
(二)女一宮也
(三)髪を
(四)薫の
(五)此人には
(六)此人に比ぶれば
(七)紫の薄色なるべし
(八)小宰相也
(九)涼を取らんとて氷を割りて却て骨が折れさうろ也
(一〇)薫が戀人の小宰相なるを知れり
(一一)小宰相に注意されても強情に割りて
(一二)小宰相は
(一三)女一宮にも
(一四)紙包の氷にて

きて割るとて、もて騒ぐ人々、大人三人ばかり、童と居たり。唐衣も汗衫も著ず、皆打解けたれば、御前とは見給はぬに、(一)白き羅の御衣著給へる人の、(二)手に氷を持ちながら、かく爭ふを少し笑み給へる御顏、いはむ方なく美しげなり。いと暑さの堪へがたき日なれば、こちたき御髪の、苦しう思さるゝにやあらむ、少し此(三)方に靡かして引かれたる程、譬へむ物なし。許多よき人を見集むれど、(四)似(五)るべくもあらざりけりと覺ゆ。御前なる人は、(六)誠に土などの心地ぞするを、思ひ鎭めて見れば、黄なる生絹の單衣、(七)薄色なる裳著たる人の、(八)扇うち遣ひたるなど、用意あらむはやと、ふと見えて、小宰相「なかなか(九)物扱ひにいと苦しげなり。唯然ながら見給へかし」とて、笑ひたるまみ愛敬づきたり。聲聞くにぞ、この(一〇)志の人とは知りぬる。(一一)心強く割りて、手毎に持たり。頭にうち置き胸にさし當てなど、樣惡しくする人もあるべし。(一二)この人は、紙につゝみて、御前にも(一三)斯くて參らせたれば、いと美しき御手をさしやり給ひて、拭はせ(一四)給ふ。女一宮「否持たらじ。雫むづかし」と



蓮の花の盛に、御八講せらる。六條院の御爲、(二)紫の上など、皆思し分けつゝ、御經佛など供養(一)ぜさせ給ひて、嚴しく尊くなむありける。(三)五卷の日などは、いみじき見物なりければ、此方かなた、女房につきて參りて、物見る人多かりけり。五日といふ(四)朝座に果てて、御堂の飾取除け、御しつらひ改むるに、北の廂も、障子ども放ちたりしかば、(五)皆入り立ちてつくろふ程、西の渡殿に(六)姫宮おはしましけり。物聞き困じて、女房も各局にありつゝ、(七)御前はいと人少なる夕暮に、(八)大將殿直衣著かへて、今日まかづる僧の中に、(九)必ず宣ふべき事あるにより、釣殿の方におはしたるに、皆まかでぬれば、(一〇)池の方にすゞみ給ひて、人少なるに、かくいふ宰(一一)相の君など、かりそめに几帳などばかり隔てて、(一二)打休む上局にしたり。此處(一三)にやあらむ、人の衣の音す、と思して、馬道の方の障子の細く明きたるより、やをら見給へば、例さやうの人の居たるけはひには似ず、(一四)晴々しくしつらひたれば、なかなか几帳どもの立て違へたる間より見通されて、あらはなり。(一五)氷を物の蓋に置

❾ 明石中宮の法事八講、薫女一宮を隙見す
(一)明石中宮が
(二)紫上の御爲など
(三)法華經の五卷目を講ずる日、即ち八講の眞中の日、此日薪の行道といふ儀式ある也
(四)朝座夕座とて毎日二度に講釋が行はるゝ也
(五)多人數入込みて室内を調ふる間
(六)女一宮
(七)女一宮の
(八)薫
(九)言ひ附くべき
(一〇)僧等が
(一一)小宰相也
(一二)隣との隔にして
(一三)小宰相は此處に居るのかしら、薫の心
(一四)女一宮の假に居る故也
(一五)此頃は氷を食用にはせず、身にあてなどして涼を取るに用ひし也

(一)數ならぬ私故今に御悔もさしひかへて居る
(二)私が浮舟に代りに死んだらばよかりしに
(三)世間の無常は知り盡せる我なれども人の知るべき程歎きはせぬによく推測りて尋ねくれたるよ
(四)禮
(五)いとゞ嬉しかりし
(六)薫が小宰相方へ
(七)薫の樣子
(八)薫は斯くわざ〳〵尋ね寄る事抔は容易にせぬ人で
(九)其薫に尋ねらるゝ住居としては小宰相の居處が一向つまらぬ處なり
(一〇)小宰相が
(一一)浮舟よりも、薫の心
(一二)なぜ此樣な奉公に出でたるならん
(一三)妾にして置いてもよい女なるに
(一四)妾にしたく思ふ樣な風は小宰相に見せず

小宰相あはれしるこゝろは人におくれねど(一)數ならぬ身にきえつゝぞ經る
(二)替へたらば。

と故ある紙に書きたり。物哀なる夕暮、しめやかなる程を、いとよく推し量りて言ひたるも憎からず。

薫(三)つねなしとこゝら世を見る憂き身だに人の知るまで歎きやはする

(四)この喜び、「哀なりし折からも、(五)いとゞなむ」など言ひに(六)立ち寄り給へり。(七)いと恥かしげに物々しげにて、(八)なべてかやうになどもならし給はぬ、人柄もやむごとなきに、(九)いと物はかなき住居なりかし。局など言ひて、狹く程なき遣戸口により居給へり、(一〇)かたはらいたく覺ゆれど、流石に餘り卑下してもあらで、いとよき程に物なども聞ゆ。(一一)見し人よりも、これは心憎き氣添ひてもあるかな、(一二)などてかく出で立ちけむ。(一三)さるものにて、我も置いたらましものを、と思す。(一四)人知れぬ筋はかけても見せ給はず。

(一)斯うしたら氣が紛れるかと他の女に關係する事も
(二)薫
(三)身に引受けて
(四)浮舟の遺族
(五)明石が伯父式部卿宮の喪に服し居らるゝ間は
(六)明石が六條院に
(七)匂の兄
(八)二宮が明石へ
(九)匂
(一〇)女一宮
(一一)女一宮
(一二)薫
(一三)一品宮の侍女
(一四)薫が
(一五)匂も年來小宰相をよい女と思ひて
(一六)薫の戀を妨げて自分のものにせんとするを
(一七)人と同樣に匂に靡くでもあるまいと小宰相が氣強くはねつけて匂をじらすと
(一八)薫は小宰相の人並ならぬを感心して居る
(一九)薫の
(二〇)小宰相が

いといみじけれど、あだなる御心は、(一)慰むやなど試み給ふ事もやう〳〵ありけり。かの殿(二)は、斯くとりもちて、(三)何やかやと思して、殘の人(四)を育ませ給ひても、猶いふかひなき事を忘れ難く思す。(五)后の宮の御輕服の程は、猶かくておはしますに、(六)二(七)の宮なむ式部卿になり給ひにける。重々しうて、常にしも參り給はず。(八)この宮(九)は、さう〴〵しく物哀なるまゝに、一品(一〇)宮の御方を慰め所にし給ふ。よき人(一一)の容貌をも、得まほに見給はぬ、殘多かり。大將殿(一二)の、からうじていと忍びて語らひ給ふ、小宰相(一三)の君といふ人、容貌なども清げなり。心ばせある方の人と思され(一四)たり。同じ琴を掻きならすつま音も撥の音も、人にはまさり、文を書き物うち言ひたるも、由ある節をなむ添へたりける。(一五)この宮も、年頃いといたきものにし給ひて、例の言ひ(一六)破り給へど、(一七)などかさしも珍らしげなくはあらむと、心強くねたき樣なるを、まめ人(一八)は、少し人よりは異なりと思すになむありける。かく物思(一九)したる樣も見知り(二〇)ければ、忍びあまりて聞えたり。

右近がもとに、白銀の壺に黄金入れて賜へり。人見咎むばかり大なる(一)わざはえし給はず、(二)右近が志にてしたりければ、心知らぬ人は、「いかで斯く」など言ひける。殿の(三)人ども、睦じきかぎり数多たまへり。(四)「怪しく(五)音もせざりつる人のはてを、斯くあつかはせ給ふ。誰ならむ」と、今驚く人のみ多かるに、常陸守來て、心もなく主人がり居るなむ、怪しと人々見ける。(六)少將の子產ませて、嚴しき事せさせむと惑ひ、家の内になき物は少く、唐土新羅の限をもしつべきに、限(七)あればいと怪しかりけり。この御法事の、忍びたる樣に思したれど、けはひこよなきを見るに、(八)生きたらましかば、我が身に並ぶべくもあらぬ人の、(九)御宿世なりけり、と思ふ。(一〇)宮の上も誦經し給ひ、七僧(一一)の前の事もせさせ給ひけり。今なむ、(一二)斯かる人持給へりけり、と帝まで聞召して、(一三)疎にもあらざりける人を、(一四)宮に畏り聞えて、隱しおき給ひけるを、いとほしと思しける。

(一五)二人の人の御心の中、(一六)古りず悲し、宮は生憎なりし御思(一七)のさかりにかき絶えては

(一)匂が
(二)右近のする樣にして匂の手向はしたれば
(三)薫の家來
(四)法會の場所へよこしたり
(五)一向今まで知られざりし女の法事を
(六)常陸守が娘の產祝に立派な事をせんと心配し
(七)身分低き故する事はよくもなし
(八)浮舟存生ならば、常陸守の心
(九)浮舟の
(一〇)中君も布施を寄進し
(一一)法會の役々の僧への饗應
(一二)薫に浮舟といふ隱し妻がありし由を
(一三)薫が寵愛の女を
(一四)女二宮に憚りて
(一五)薫と匂
(六)薫小宰相を訪ふ
(一六)いつ迄も同樣に浮舟の事が悲し
(一七)愛情の最も盛なりし時分に浮舟がなくなりて仕淨ひしは非常に悲しけれど

て居ると常陸守に知らせんと母が思ひ居る中に此樣な事になりし故
(一)薫の
(二)貴人を尊びて、常陸守の氣風をいふ
(三)薫の文を繰返し見て
(四)薫の家來にて
(五)薫が我が子どもを世話せんと仰せられしは
(六)浮舟が存生ならばと、母の心
(七)浮舟存生中は
(八)常陸守の子などを
(九)薫の心
(一〇)浮舟を
(一一)常陸守の子どもを世話するを人に譏られても構はぬと
(一二)若し生きて居るかも知れぬと思へば
(一三)法事はよき事なれば
(一四)法會にあづかる僧の人數
(一五)匂宮

と思ひける程に、斯れば、今は隱さむもあいなくて、ありし樣泣く〳〵語る。(一)大將殿の御文どもとり出でて見すれば、(二)よき人畏くして、鄙び物めでする人にて、驚き臆して、(三)打返し〳〵、守「いとめでたき御幸を捨てて、亡せ給ひにける人かな。己も(四)殿人にて、參り仕う奉れども、近く召しつかひ給ふ事もなく、いと氣高くおはする殿なり。(五)若き者どものこと仰せられたるは、頼もしき事になむ」など、喜ぶを見るにも、(六)ましておはせましかばと思ふに、伏し轉びて泣かる。守も今なむ打泣きける。さるは、(七)おはせし世には、なか〳〵かゝる(八)類の人しも、尋ね給ふべきにしも非ずかし。(九)我が過にて(一〇)失ひつるもいとほし、慰めむ、と思すによりなむ、(一一)人の譏懇に尋ねじと思しける。

四十九日のわざなどせさせ給ふにも、(一二)如何なりけむことにかと思せば、とてもかくても(一三)罪得まじき事なれば、いと忍びて、かの律師の寺にてなむせさせ給ひける。(一四)六十僧の布施など大に掟てられたり。母君も來居て、事ども添へたり。(一五)宮よりは、

（一）子どもの身分が
（二）御世話になるのが
（三）どういふ關係で薫へ奉公するかといふ事は人に知らせずして
（四）不肖な子どもを
（五）以下薫の心、成程母の詞の如く常陸守の子どもを贔屓するはつまらぬ緣者と睦まじくする譯なれど
（六）常陸守位の身分の人の娘を御妾に上げぬ事もない
（七）其娘を
（八）卑しき女
（九）一旦人妻となりし女
（一〇）浮舟は八宮の御娘なるを常陸守の娘なりと人が噂するにしても、元元本妻にした譯でもなき故浮舟に關係した事がわが瑕にはならず
（一一）浮舟をいふ
（一二）母
（一三）浮舟の緣で肩身が廣いと
（一四）母の三條の家
（一五）一寸來て
（一六）娘の產の時に此樣な處に引込んで居る
（一七）浮舟が
（一八）母が常陸守に
（一九）浮舟が落魄して居るならんと常陸守が言ひ居たりし故
（二〇）薫に引取られてから折く〳〵て立派に暮し

いとも畏きに、また數ならぬ（一）程は、なか〳〵いと恥かしう（二）なむ。人に何故などは知らせ侍らで、怪しき（四）樣どもを皆參らせ侍りて、侍はせむ、となむ物し（三）侍りつる」と聞ゆ。實（五）に殊なる事なきゆかり睦にぞあるべけれど、帝にも、さ（六）ばかりの人の女奉らずやはある、それに、然るべきにて、時（七）めかし思さむをば、人の謗るべき事かは、たゞ人はた、あやしき（八）女、世（九）に古りにたるなどを持ち居る類多かり、かの（一〇）守の女なりけりと、人の言ひなさむにも、我がもてなしの、それに汚るべくありそめたらばこそあらめ、一人（一一）の子を徒になして思ふらむ親（一二）の心に、猶（一三）この ゆかりこそ面だたしかりけれと、思ひ知るばかりの用意は、必ず見すべき事、と思す。

彼處（一四）には、常陸守立ち（一五）ながら來て、守（一六）「折しもかくて居給へる事」など腹立つ。年頃（一七）何處になむおはするなど、有の儘（一八）にも知らせざりければ、はかなき（一九）樣にておはしますらむと思ひ言ひけるを、京（二〇）になど迎へ給ひてむ後、面目ありてなど知らせむ

(一)非常なる悲にあひながら死ぬ事も出來ぬ命を
(二)斯く御親切なる仰を受くべきが爲に死なざりしにやと思ふ
(三)浮舟の
(四)母なる私が數ならぬ者故、其子の浮舟があの樣な處にも置かるゝならんと諦めて
(五)京へ引取らんとの薫の御詞を
(六)浮舟を失ひたる今は
(七)宇治といふ名もつらく思はる
(八)母の心
(九)一通の贈物は
(一〇)自分も不滿足なるべければ
(一一)薫に
(一二)石の代りに斑紋ある犀角を用ひたる石帶
(一三)仲信が歸らんとする時
(一四)浮舟
(一五)仲信が贈物を薫に見せたれば
(一六)母君が自身私に御逢ひなされて
(一七)母君の詞をまねていふ也

母(一)いみじき事に死なれ侍らぬ命を、心憂く思う給へ歎き侍るに、(二)かゝる仰言見給ふべかりけるにやとなむ。年頃は、(三)心細き有様を見給へながら、それは(四)數ならぬ身のおこたりに思う給へなしつゝ、(五)辱き御一言を、行末長く頼み聞えさせ侍りしに、(六)言ふかひなく見給へ果てては、(七)里の契もいと心憂く悲しくなむ。様々に嬉しき仰言に命延び侍りて、今暫しながらへ侍らば、猶頼み聞えさせ侍るべきにこそと、思ひ給ふるにつけても、目の前の涙にくれ侍りて、え聞えさせやらずなむ。

など書きたり。(八)御使になべての(九)祿などは、見苦しき程なり、(一〇)飽かぬ心地もすべければ、(一一)かの君に奉らむと志してもたりける、よき斑犀の(一二)帶、太刀のをかしきなど袋に入れて、(一三)車に乗るほど、「これは昔の人の(一四)御志なり」とて、贈らせてけり。(一五)殿に御覧ぜさすれば、「いと漫なるわざかな」と宣ふ。言葉には、仲信「(一六)自ら逢ひ侍り給びて、いみじく泣く〳〵萬の事宣びて、(一七)幼き者どの事もまで仰せられたるが、

(一)薫
(二)浮舟の事
(三)其方に手紙をあげんと
(四)其方は自分の娘の事故悲は如何ばかりならんと推察して
(五)なき浮舟の形見として然るべき折には我方に訪ね給へ
(六)仲信
(七)口上にて言はする也
(八)其方に對して特に懇なる志ある樣には見えざりしならんが
(九)其方を
(一〇)其方でも內々其積りで居てくれ
(一一)穢れに
(一二)強ひて仲信を呼び入れたり

過すに、大將殿(一)より御使忍びてあり。物覺えぬ心地にも、いと嬉しくあはれなり。

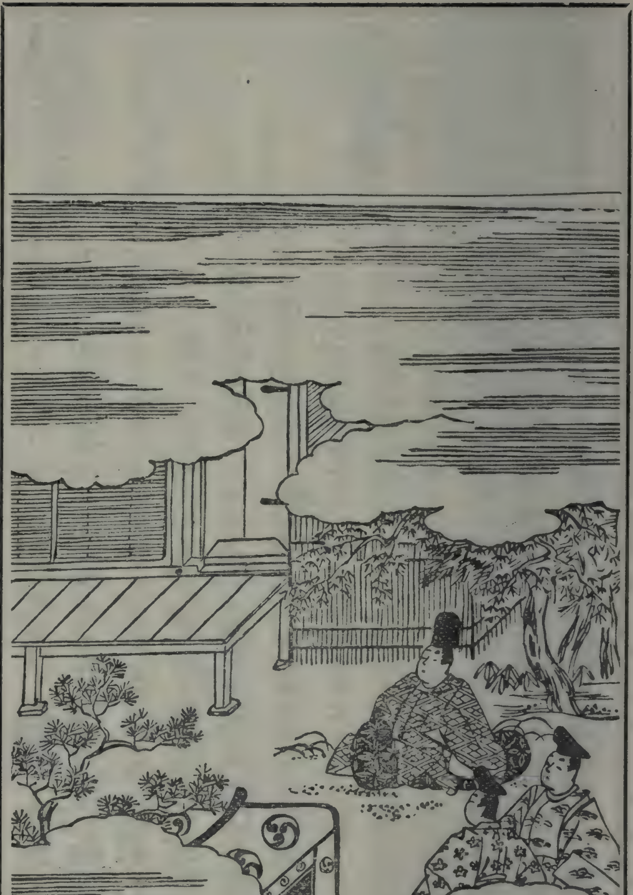
薫「(二)あさましき事は、まづ聞えむ(三)と思う給へしを、心ものどまらず、目もくらき心地して、まいて如何(四)なる闇にか惑はれ給ふらむと、その程を過しつるに、はかなくて日頃も經にける事をなむ、世の常なさも、いとゞ思ひのどめむ方なくのみ侍るを、思の外にもながらへば、(五)過ぎにしなごりとは、必ず然るべき事にも尋ね給へ。

など、細に書き給ひて、御使には、かの大藏大輔(六)をぞ賜へりける。(七)薫「心のどかに萬を思ひつゝ、年頃にさへなりにける程、(八)必ずしも志ある樣には見給はざりけむ。されど今より後、何事につけても、必ず忘れ聞えじ。(九)又さやうに(一〇)を人知れず思ひおき給へ。幼き人どももあゝなるを、公に仕う奉らむにも、必ず後見思ふべくなむ」など、言葉にも宣へり。痛くしも忌むまじき穢らひなれば、「深うも觸れ(一一)侍らず」など言ひなして、せめて(一二)呼びすゑたり。御返泣く〳〵書く。

添へなどせさせ給ふ。罪(一)いと深かンなるわざと思せば、輕(二)むべき事をぞすべきと、七日々々に經佛供養ずべき由など、こまかに宣ひて、いと暗うなりぬるに歸り給ふも、(三)在らましかば、今宵歸らましやは、とのみなむ。尼君に消息せさせ給へれど、尼「いとも〳〵忌々しき身をのみ思う給へ沈みて、いとゞ物もおぼえ給へられず、耄れ侍りてなむ、うつぶし臥して侍る」と聞えて、出で來ねば、強ひても立ち寄り給はず。道すがら、(四)疾く迎へ取り給はずなりにける事悔しく、水の音の聞ゆる限は、心のみ騷ぎ給ひて、(五)骸をだに尋ねずなりにける事、あさましくても止みぬるかな、如何なる樣にて、いづれの底の(六)うつせに交りけむなど、やる方なく思す。

かの母君(七)は、京に子生むべき女(八)の事により、つゝしみ(九)騷げば、例の家(一〇)にもえ行かず、漫なる旅居のみして、思ひ慰む折もなきに、(一一)又これも如何ならむと思へど、平かに産みてけり。忌々しければえ寄らず(一二)、殘の人々の上も(一三)覺えず、耄れ惑ひて

(一)自殺は
(二)罪の輕くなるべき追善をすべしと
(三)浮舟存生ならば、薫の心
(四)浮舟を京へ
(五)薫の心
(六)うつせ貝、貝殼
七　薫文を贈りて浮舟の母を慰む、法事
(七)常陸守の北方
(八)少將の妻
(九)穢を愼む也
(一〇)本宅にも入らず
(一一)少將の妻の產も如何ならんと
(一二)母北方が產所へ近よらず
(一三)他の子どもの身の上も考へられず



里の名をだにも得聞くまじき心地し給ふ。（一）宮の上の宣ひはじめし、人形とつけそ（二）めたりしさへゆゝしう、唯我が（三）過に失ひつる人なりと、思ひもて行くには、母（四）の猶輕びたる程にて、後の後見もいとあやしく、事そぎてしなしたるなゝめりと、心ゆかず思ひつるを、委しく聞き給ふになむ、（五）如何に思ふらむ、（六）さばかりの人の子にては、いとめでたかりし人を、忍びたることは（七）必ずしもえ知らで、（八）我がゆかりに如何なる事のありけるならむとぞ思ふらむかしなど、萬にいとほしく思す。（九）穢らひといふ事はあるまじけれど、御供の人目もあれば、のぼり給はで、御車の榻（一〇）を召して、妻戸の前にぞ居給へりけるも見苦しければ、いと繁き木の下に、苔を御座にて、とばかり居給へり。今は此處を來て見むことも心憂かるべしとのみ、見廻らし給ひて、

薫「我もまた憂きふる里を荒れはてばたれやどり木のかげをしのばむ（一一）

阿闍梨（一二）今は律師なりけり。召して、この法事の事おきてさせ給ふ。念佛の僧の數

（一）中君
（二）浮舟に名をつけしも縁起惡く思はれて、祓の人形は水に流すものなれば也
（三）薫自身が惡くて
（四）かねては母が卑しくて輕々しき故葬送も手輕にしたるならんと不滿足なりしに
（五）母が如何に思ふならん、薫の心
（六）かの母の子としては立派なりし浮舟なるに
（七）匂との關係などは母は知らずして
（八）薫に對して不滿足の事ありて浮舟が自殺したりと思ふかも知れぬなど
（九）浮舟は此家にて死にたるに非ざれば也
（一〇）轅の臺
（一一）今は我も再び此處へ訪ひ來る事もあるまじければ、今後は誰か此宿に昔を偲ぶべき
（一二）かの山の阿闍梨也

みじき事を聞えさせ侍りて、出でさせ給ひにき。(一)それに怖ぢ給ひて、(二)かの怪しく侍りし所へは渡らせ給へりしなり。その後、(三)音にも聞えじと思してやみにしを、いかでか聞かせ給ひけむ、唯この二月ばかりより、(四)音づれ聞えさせ給ひし。御文はいと度々侍るめりしかど、御覽じ入るゝ事も侍らざりき。(五)いと辱く、なか〳〵うたてある樣になむなどぞ、右近など聞えさせしかば、一度二度や(六)聞えさせ給ひけむ。それより外の事は見給へず」と聞えさす。(七)斯うぞ言はむかし、強ひて問はむもいとほしくて、つく〴〵と打眺めつゝ、(八)宮を珍らしく哀と思ひ聞えても、我が方を流石に疎には思はざりける程に、(九)いとあきらむる所なく、はかなげなりし心にて、この水の近きを便にて、(一〇)斯く思ひ寄るなりけむかし、我が此處に(一一)さし放ちすゑざらましかば、(一二)いみじく憂き世に經とも、いかでか必ず深き谷をもとめ出でましと、いみじく憂き水の契かなと、この川の疎ましく思さるゝ事いと深し。(一三)年頃哀と思ひ初めたりし方にて、荒き山路を行き返りしも、今は又心憂くて、この

(一)浮舟が
(二)三條の常陸守の持家〈浮舟が隱れし也
(三)匂に居處を知られじと
(四)匂が浮舟へ
(五)御返事を上げぬは勿體なく却て惡からんと
(六)浮舟が返事を匂へ
(七)薫の心
(八)匂を浮舟が、以下薫の心
(九)どうしてよいか分らず
(一〇)身投を
(一一)浮舟を置かざりしならば
(一二)浮舟がどの樣な苦勞をしても身投を思ひ立つことはあらじと
(一三)薫が年來ゆかしがりし人の爲に

に堪へ侍らずなむ。鬼などの隠し聞ゆとも、聊残る所も侍るなるものを」とて、泣く様もいみじければ、(一)如何なる事にかと紛れつる御心も失せて、せきあへ給はず。薫我は心に身をも任せず、(二)顯證なる様にもてなされたる有様なれば、(三)覺束なしと思ふ折も、(四)今近くて、人の心おくまじく、(五)目安き様にもてなして行末長くをと、思ひのどめつゝ過しつるを、(六)疎に見なし給ひけむこそ、なか〳〵(七)わくる方ありけると覺ゆれ。今は斯くだに言はじと思へど、(八)又人の聞かばこそあらめ。(九)宮の御事よ、何時よりあり初めけむ。(一〇)さやうなるにつけてや、(一一)いとかたはに人の心を惑はし給ふ宮なれば、常にあひ見奉らぬ歎に、身をも失ひ給へるとなむ思ふ。なほ言へ。我には更にな隠しそ」と宣へば、(一二)確にこそは聞き給ひてけれと、いといとほしくて、右近いと心憂き事聞召しけるにこそは侍るなれ。右近も侍はぬ折は侍らぬものを」と、(一三)ながめやすらひて、右近「自ら聞召しけむ。(一四)この宮の上の御方に、忍びて渡らせ給へりしを、あさましく思ひかけぬ程に、(一五)入りおはしたりしかど、い(一六)

(一)眞僞を疑ひし心もなくなりて
(二)何事も物を隠してする事の出來ぬ様にもてなされて居る身故
(三)浮舟を
(四)やがて側へ引取りて
(五)氣安い様にして末長く契らんと
(六)我が仕向けを浮舟が
(七)浮舟が愛情を分くる男がありし様に思はる、匂の事をほのめかす也
(八)外に聞く人なき故話してもよからん
(九)匂との關係
(一〇)其の關係でこそ、此句下の「常にあひ見」へかゝる
(一一)女を迷はせる事の上手な匂の事故
(一二)此口振では薫が匂の事を突留めしならんと
(一三)考へ込みて
(一四)中君方に浮舟が
(一五)匂が浮舟の處へ
(一六)右近乳母杯がひどい事を申上げたので匂は其儘出てゆかれたり

(一)薫の
(二)從來の身の不幸をも薫の爲に忘れて
(三)屢薫にあはれる様に早くなりたし抔と
(四)薫の引取りの噂もありし故
(五)侍女等も
(六)常陸守の北方、浮舟の母
(七)浮舟が薫に引取らるる用意をしたりしに
(八)合點のゆかぬ薫の御文、「波こゆる頃ともしらで」の歌をよこせし時の事
(九)内舍人等
(一〇)侍女等に不取締の所業ありと薫より仰ありと申して
(一一)變に事情を解釋して薫に申上ぐる事ありしが
(一二)薫の
(一三)浮舟が
(一四)浮舟をどうかして人並に出世させたしと
(一五)なまじ薫と關係が出來てこれが人の笑草になる様な結果に終りては
(一六)恐い方へ考へて浮舟が嘆き居たり
(一七)此事情以外には何があつたか考へても考へつきませぬ

る御住居の後は、何時となく物をのみ思すめりしかど、たまさかにも(一)斯くわたりおはしますを待ち聞えさせ給ふに、(二)もとよりの御身の歎をさへ慰め給ひつゝ、心のどかなる様にて、(三)時々も見奉らせ給ふべき様に何時しかとのみ、言に出でては宣はねど、思し渡るめりしを、(四)その御本意叶ふべき様に承る事どもも侍りしに、斯くて(五)侍ふ人どもも、嬉しき事に思ひ給へ急ぎ、(六)かの筑波山も、辛うじて心ゆきたる氣色にて、(七)渡らせ給はむ事を營み思ひ給へしに、(八)心得ぬさまの御消息侍りけるに、この(九)宿直など仕う奉る者どもも、(一〇)女房達亂がはしかゝなりなど、戒め仰せらるゝ事など申して、物の心得ず荒々しき田舍人どもの、(一一)怪しき様にとりなし聞ゆる事ども侍りしを、その後久しう(一二)御消息なども侍らざりしに、心憂き身なりとのみ、いはけなかりし程より(一三)思ひ知るを、(一四)人數にいかで見なさむとのみ、萬に思ひ扱ひ給ふ母君の、(一五)なかなかなる事の、人笑はれになりはてば、如何に思ひ歎かむなど、(一六)趣けてなむ常に歎き給ひし。(一七)その筋より外に、何事をかはと思ひ給へ寄る

ては、かねて、と言はむかく言はむと思ひ設けし言葉をも忘れつゝ、煩はしう覺えければ、(一)ありし樣の事どもを聞えつ。(二)あさましう思しかけぬ筋なるに、物もとばかり宣はず。(三)更にあらじと覺ゆるかな、なべての人の思ひ言ふ事をも、こよなく言少なに、おほどかなりし(四)人は、いかで然るおどろ〳〵しきことは思ひ立つべきぞ、(五)如何なる樣に、この人々もてなして言ふにかあらむ、と御心も亂れまさり給へど、(六)宮も思し歎きたる氣色いと著し、此處の有樣も、(七)然つれなしづくりたらむけはひは、自ら見えぬべきを、(八)斯くおはしましたるにつけても、悲しくいみじき事を、上下の人集ひて泣き騷ぐを、と聞き給へば、薫「(九)御供に具して失せたる人やある。猶ありけむ樣を確に言へ。(一〇)我をおろかなりと思ひて、背き給ふことは、よもあらじとなむ思ふ。如何樣なる、(一一)忽に言ひ知らぬ事ありてか、さるわざはし給はむ。(一二)我なむえ信ずまじき」と宣へば、(一三)いといとほしく、さればよと煩はしくて、右近「自ら聞召しけむ。もとより(一四)思す樣ならで生ひ出で給へりし人の、(一五)世ばなれた

(一)有體に身投の事を話す
(二)薫が
(三)有る可らざる事の樣に思はれる、薫の心
(四)浮舟は
(五)どの位迄右近等が取繕ひて話すならんと
(六)匂も、薫の心
(七)わざとつくりたる悲ならば自ら分る筈なるに
(八)薫が
(九)浮舟と共に居なくなつた人は無きか
(一〇)薫の仕向けが惡しと思ひて浮舟の遁世する樣な事は
(一一)如何なるせん方なき事情が突然に起りて
(一二)浮舟が身を投げたりとは
(一三)右近の心
(一四)思ひもよらぬ田舍にてそだちし浮舟が
(一五)宇治に來て後は

(一)喪中に
㊅薫宇治に行く、右近浮舟の投身の事情竝に匂宮との關係を語る
(二)薫
(三)宇治へ
(四)以下薫の心
(五)八宮關係の事につきては
(六)八宮をいふ
(七)豫期に反して大君に懸想せし意地きたなさを戒めて
(八)佛が我に
(九)浮舟の
(一〇)忌が明けてから行かんとは思ひしかど
(一一)其迄落附いて居られずして來りし也
(一二)右近の心
(一三)事情は知り居る事故
(一四)我が話さずともいつか薫に知れる譯なれば
(一五)間違つて薫の耳へ入らば事の眞相が却てわからなくなるべし
(一六)匂の一條の爲にこそは
(一七)薫の

じく泣く。装束もいとうるはしく、しあつめたる物どもなれば、「かゝる御服に(一)これをいかでか隠さむ」など、もて煩ひける。

大將殿(二)も、猶いと覺束なきに、思し餘りておはしたり(三)。道の程より、昔の事どもかき集めつゝ、如何なる契にて(四)、この父親王の御許に來初めけむ、かく思ひがけぬ果まで思ひ扱ひ(五)、この縁につけては、物をのみ思ふよ、いと尊くおはせしあた(六)りに、佛をしるべにて(七)、後の世をのみ契りしに、心ぎたなき末のたがひめに(八)、思ひ知らするなめり、とぞ覺ゆる。右近を召し出でて、薫「(九)ありけむ樣もはか〴〵しう聞かず。猶盡せずあさましう、はかなければ、忌の殘も少くなりぬ、過して(一〇)と思ひつれど(一一)、しづめあへず物しつるなり。如何なる心地にてかは、俄にはかなくなり給ひにし」と、問ひ給ふに(一二)、尼君なども氣色見てければ(一三)、遂に聞き合せ給はむ(一四)を、なか〳〵隠しても、事違ひて聞えむに(一五)、損はれぬべし、怪しきことの筋にこ(一六)そ、空言も思ひ廻らしつゝならひしか、斯くまめやかなる御氣色にさし向ひ聞え(一七)

(一)其の入水せんとする處を見つけて留めればよかりしにと
(二)注意し
(三)浮舟が書きし母への返歌
(四)何とも思はざりし侍從がなつかしく思はれて
(五)中君も外ならぬ縁なれば
(六)仰に從ひて當方に御仕へ申すにしても
(七)忌明
(八)浮舟の便料
(九)浮舟の爲に拵へたる品は多くあれども仰山らしき故皆取出さず、唯侍從に相當したる櫛の箱以下の物を與へたり
(一〇)かゝる頂戴物したるを、侍從の心
(一一)辭退する譯にはゆかぬ
(一二)櫛の箱の中なる樣樣の小道具など

れけむと思しやるに、(一)これを見つけてせきとめたらましかばと、わきかへる心地し給へどかひなし。侍從「御文を燒き失ひ給ひしなどに、などて目をたて(二)侍らざりけむ」など、夜一夜語らひ給ふに、聞えあかす。かの卷數に(三)書きつけ給へりし、母君の返事などを聞ゆ。(四)何ばかりのものとも御覽ぜざりし人も、睦まじく哀に思さるれば、匂「我が許にあれかし。(五)彼方ももて離るべくやは」と宣へば、侍從「(六)さて侍はむにつけても、物のみ悲しからむを思う給へれば、今(七)この御果など過して」と聞ゆ。匂「又もまゐれ」など、この人をさへ飽かず思す。曉にかへるに、(八)かの御料にとてまうけさせ給ひける櫛の箱一具、衣箱一具、贈物にせさせ給ふ。(九)樣々にせさせ給へりけることは多かりけれど、おどろ〳〵しかりぬべければ、唯この人におほせたる程なりけり。何心もなく參りて、(一〇)かゝる事どものあるを、人は如何見む、漫にむづかしきわざかな、と思ひわぶれど、(一一)如何は聞えかへさむ。右近と二人忍びて見つゝ、徒然なるまゝに、(一二)細に今めかしう、し集めたる事どもを見ても、いみ

(一)侍從の心
(二)匂の
(三)裳は禮意を表する爲のもの也、今は仕ふべき主人もなき事故裳は入らず、隨つて黑の裳の用意なき故薄紫の常の裳を持ち行く也
(四)浮舟存生ならば、侍從の心
(五)浮舟が
(六)侍從が匂に
(七)匂宮
(八)中君
(九)侍從の來たる事を
(一〇)侍從を
(一一)浮舟がはき〳〵せず
(一二)御遺言もなく
(一三)悲しさ堪へ難く、匂の心
(一四)然るべき病氣などにて死にたるよりも

(一)ありし御樣もいと戀しう思ひ聞ゆるに、如何ならむ世にかは見奉らむ、かゝる折に、と(二)思ひなして參りける。黑き衣ども著て、引き繕ひたる形もいと淸げなり。(三)裳は、たゞ今我より上なる人なきに打懈みて、色もかへざりければ、薄色なるを持せて參る。(四)おはせましかば、この道にぞ(五)忍びて出で給はまし、人知れず(六)心よせ聞えしものを、など思ふにも哀なり。道すがら泣く〳〵なむ來ける。

(七)宮は、この人參れりと聞召すも哀なり。(八)女君には、あまりうたてあれば(九)聞え給はず。寢殿におはしまして、渡殿に(一〇)おろさせ給へり。ありけむ樣など委しう問はせ給ふに、日頃思し歎きし樣、その夜泣き給ひし樣、侍從「怪しきまで言少に、(一一)おほおほとのみ物し給ひて、いみじと思す事をも、人に打出で給ふことは難く、物づつみをのみし給ひしけにや、(一二)宣ひ置くことも侍らず。夢にも、かく心強き樣に思しかくらむとは、思ひ給へずなむ侍りし」など、委しう聞ゆれば、まして(一三)いといみじく、(一四)然るべきにてともかくもあらましよりも、如何ばかり物を思ひ立ちてさる水に溺

(一)匂と浮舟との中
(二)匂の
(三)右近侍從等にも急ぎて懇親を求むるにも及ばず、どうせ始終御世話申上ぐべきなればと油斷せしに
(四)時方一箇人の右近等に對する同情も
(五)右近を乘すべき車をわざ〳〵匂が用意させてよこしたのに
(六)せめて侍從でも
(七)私はまして
(八)死の穢を忌みて私共をよせつけぬが當前なるに
(九)匂の御病氣の爲に
(一〇)浮舟に對する悲が深き爲に宇治方の穢だけは忌む事も出來難げなる御樣子
(一一)浮舟の忌に籠りたさうな御樣子也
(一二)忌明までの日數

む折になむ、仰事なくとも參りて、實にいと夢の樣なりし事どもも、語り聞えさせ侍らまほしき」と言ひて、今日は動くべくもあらず。大夫も泣きて、時方「更にこの(一)御中の事、こまかに知り聞えさせ侍らず。物の心も知り侍らずながら、類なき(二)御志を見奉り侍りしかば、(三)君達をも、何かは急ぎてしも聞え承らむ、遂には仕う奉るべきあたりにこそと、思う給へしを、いふかひなく悲しき御事の後は、(四)私の御志も、なか〳〵深さ増りてなむ」と語らふ。時方「(五)わざと御車など思し廻らして、奉れ給へるを、空しくては、いといとほしくなむ。(六)今一所にても參り給へ」と言へば、侍從の君呼び出でて、右近「さば參り給へ」と言へば、侍從「(七)まして何事をかは聞えさせむ。さてもなほ、この御忌の程には、いかでか(八)忌ませ給はぬか」と言へば、時方「(九)惱ませ給ふ御ひゞきに、樣々の御つゝしみども侍るめれど、(一〇)忌みあへさせ給ふまじき御氣色になむ。又かく深き御契にては、(一一)籠らせ給ひてもこそは、おはしまさめ。(一二)殘の日幾許ならず、猶一所參り給へ」と責むれば、侍從ぞ、

(一)宇治に居ても心が安まりさうにもなき故
(二)殘り居る宇治の人々等が
(三)時方等が
(四)前に警固せし内舍人等も
(五)一番終に匂の來られし時此者共が邪魔して浮舟に逢はせざりしが殘念と時方が思ひ出す也
(六)匂がつまらぬ歎をなさる事よと共時は思ひ居たれど、時方等の感じ
(七)匂の通ひ來し
(八)匂の斯く〳〵の仰によりて
(九)右近が匂へ參りたらば
(一〇)事情が明白にお分りになる程に
(一一)一寸他所へ行つたと噓をついても似合はしい時分になつたら

の人々召して、右近を迎につかはす。母君も、更にこの水の音けはひを聞くに、我も轉び入りぬべく、悲しく心憂き事の(一)どまるべくもあらねば、いと侘しうて歸り給ひにけり。(二)念佛の僧等を賴もしき者にていと幽なるに、(三)入り來たれば、事々しく、(四)俄に立ちめぐりし宿直人等も見とがめず。生憎に(五)限のたびしも、入れ奉らずなりにしよと、思ひ出づるもいとほし。(六)さるまじき事を思ほしこがるゝ事と、見苦しく見奉れど、此處に來ては、(七)おはしましゝ夜な〳〵の有樣、抱かれ奉り給ひて、船に乘り給ひしけはひの、あてに美しかりし事などを思ひ出づるに、心强き人なく哀なり。右近逢ひて、いみじう泣くも理なり。時方「(八)かく宣はせて、御使になむ參り來つる」と言へば、右近「今更に、(九)人もあやしと言ひ思はむもつゝましく、參りても、はか〴〵しく聞召しあきらむばかり、(一〇)物聞えさすべき心地もし侍らず。この御忌果てて、(一一)あからさまに物になむと、人に言ひなさむも、少し似つかはしかりぬべき程になしてこそ、心より外の命侍らば、いさゝか思ひしづまら

り。氣色ある文かなと見給ひて、

　匂　橘のかをるあたりはほとゝぎすこゝろしてこそなくべかりけれ(一)

煩はし。

と書き給ふ。(二)女君この事の氣色は、皆見知り給ひてけり。(三)哀にあさましきはかなさの、樣々につけて心深き中に、我一人物(四)思ひ知らねば、今までながらふるにや、それも何時まで、と心細くおぼす。宮も、(五)隱なきものから隔て給ふもいと苦しければ、ありし樣など少しは(六)取り直しつゝ語り聞え給ふ。匂「(七)隱し給ひしがつらかりし」など、泣きみ笑ひみ聞え給ふにも、(八)他人よりはむつまじく哀なり。(九)事々しくうるはしくて、例ならぬ御事のさまも、驚き惑ひ給ふ所にては、御訪らひの人しげく、(一〇)父おとゞ兄の君だち隙なきも、いとうるさきに、此處はいと心安くて、なつかしくぞ思されける。

いと(一一)夢の樣にのみ、(一二)猶いかで、いと俄なりける事にかはとのみ、いぶせければ、(一三)例

(一)人をして悲を催さしむる故鳴く音を愼むべしと也
(二)中君は浮舟と匂との關係を知り居れり
(三)以下中君の心、大君浮舟などの身の上をいふ
(四)呑氣故
(五)分つて居るのに隱して居るも苦しき故
(六)取繕つて中君に話す
(七)中君が浮舟を預かり居りし時の事をいふ也
(八)中君は浮舟の姉妹故他の人より睦まじく匂が思ふ也
(九)萬事鄭重にて匂の病氣をも非常に大事がる六君の所では、匂の心
(一〇)夕霧
五　匂宮浮舟の侍女右近を招く、侍從右近に代りて二條院を訪ふ
(一一)匂が浮舟の事を夢の樣にのみ思はれて
(一二)どうしてあの樣に俄に死んだのかしらとのみ
(一三)時方等



木石にあらざれば皆情あり」と、打誦じて臥し給へり。後（一）のしたゝめなども、いとはかなくしてけるを、宮（二）にも如何聞き給ふらむと、いとほしくあへなく、母（三）の直々しくて、兄弟（四）あるはなど、さやうの人は言ふ事あゝなるを思ひて、事そぐなりけむかし、など心づきなく思す。（五）おぼつかなさも限なきを、（六）ありけむ樣も自ら聞かまほしと思せど、長籠（七）し給はむも便なし、往きと往きて立ちかへらむも心苦しなど、思し煩ふ。

月（八）たちて今日（九）ぞ渡らましと、思し出で給ふ日の夕暮、いと物あはれなり。御前近き橘の香のなつかしきに、杜鵑の二聲ばかり鳴きて渡る。薫「宿（一〇）に通はば」と獨言ち給ふも飽かねば、北の宮（一一）に、こゝに（一二）渡り給ふ日なりければ、橘を折らせて聞え給ふ。

薫　忍びね（一三）やきみもなくらむかひもなき死出のたをさに心かよはば

宮（一四）は、女君の御樣のいとよく似（一五）たるを、哀におぼして、二所ながめ給ふ折なりけ

（一）浮舟死後の世話なども、薫の心
（二）中君も
（三）浮舟の母が下衆々々しき人物で
（四）死者の兄弟ある場合は其兄弟の爲に葬送を手輕にする物ぢや杯と下樣の人はいふものなればと母が思ひて
（五）宇治の樣子の
（六）浮舟逝去當時の事情も
（七）宇治に長逗留も出來ず急いで往つて直に歸るも氣の毒なりなどと
（八）四月になりて
（九）薫が宇治へ
（一〇）「なき人の宿に通はば時鳥かけて音にのみ鳴くと告げなん」
（一一）二條院
（一二）匂の居る日なれば
（一三）冥途の鳥と言はるる時鳥の泣く音に哀を感ずるならば君も定めし忍音に泣き居らるゝならん
（一四）匂
（一五）浮舟に

にても御覽ぜさせばやと、思ひ給へし人になむ。自ら然もや侍りけむ、(一)宮にも參(二)り通ふべき故侍りしかば」など、少し氣色ばみて、寓「御心地例ならぬ程は、漫なる世の事聞召し入れ、御耳驚くもあいなきわざになむ。よく愼ませ給ふべく」など、聞えおきて出で給ひぬ。

いみじくも思したりつるかな、(三)いとはかなかりけれど、(四)流石に高き人の宿世なり(五)けり、當時の帝后のさばかりかしづき奉り給ふ御子、(六)顏容貌よりはじめて、ただ今の世には類おはせざめり、(七)見給ふ人とても、斜ならず、樣々につけて、限なき人をおきて、(八)これに(九)御心を盡し、世の人立ち騷ぎて、修法、讀經、祭、祓と、道々(一〇)に騷ぐは、この人(一一)を思すゆかりの、御心地のあやまりにこそはありけれ、我も、かばかりの身にて、時の帝の御女をもち奉りながら、この人(一二)のらうたく覺ゆる方は劣りやはしつる、まして今は(一三)と覺ゆるには、心(一四)をのどめむ方なくもあるかな、さるは、嗚呼なり、斯からじ、(一五)と思ひ忍ぶれど、樣々に思ひ亂れて、寓「人(一六)

(一)自然御覽になつたかも知れぬ、匂に對するあてこすり也
(二)中君の姉妹なるをいふ
(三)匂が浮舟を、以下寓の心
(四)浮舟の生涯ははかなき一生なれども
(五)浮舟の
(六)匂をいふ
(七)匂の妻妾
(八)さしおきて
(九)匂が浮舟の爲に
(一〇)銘々の職とする道につけて
(一一)畢竟匂が浮舟を思ひて病にかゝれる故なり
(一二)浮舟に對する情は匂に劣れりとは思はれぬも、
(一三)死んだ者と思へば
(一四)悲のしづめ樣がなし
(一五)此樣に悲むまじと
(一六)「人非二木石一皆有レ情、不レ如レ不レ逢二傾城色一」白居易の句

（一）表立てては丁度女二を娶りし際故批難を受けさうなりしかば
（二）宇治に
（三）浮舟も
（四）私一人を守つて居る了簡も別段ない樣にも思はれしかども、匂密通の事をほのめかしたる也
（五）本妻と思へば其不埒を咎める氣にもなれど始から其積ではなき故
（六）御聞の次第もあるならん
（七）顯の心、是程の泣顔は見せたくなし
（八）取亂したる樣なるを
（九）見舞も言ひやりたかりしかども隱し居らるゝ事と聞きて遠慮したり
（一〇）慰み物としては匂に差上げても然るべき人物と思ひし女なり

侍りにし人の、同じゆかりなる人覺えぬ所に侍りと聞きつけ侍りて、時々さて見つべくやと思う給へしに、あいなく（一）人の譏も侍りぬべかりし折なりしかば、この怪しき（二）所に置きて侍りしを、をさ〳〵まかりて見る事もなく、又彼も、（三）某一人を（四）あひ頼む心もことに無くてやありけむとは見給へつれど、（五）やむごとなく物々しき筋に思ひ給へばこそはあらめ、見るにはた、殊なる咎も侍らずなどして、心やすくらうたしと思ひ給へつる人の、いとはかなくて亡くなり侍りにける。なべて世の有樣を、おもう給へつゞけ侍るにも悲しくなむ。（六）聞召す樣も侍るらむかし」とて、今ぞ泣き給ふ。（七）これも、いと斯うは見え奉らじ、嗚呼なり、と思ひつれど、こほれ初めてはいと留めがたき氣色の、いさゝか（八）みだり顔なるを、怪しくいとほしと思せど、つれなくて、匂「いと哀なる事にこそ。昨日ほのかに聞き侍りき。（九）如何にとも聞ゆべく思う給へながら、わざと人に聞かせ給はぬ事と聞き侍りしかばなむ」と、つれなく宣へど、いと堪へ難ければ、言少にておはします。顯「さる方（一〇）

や、唯(一)この事をのみ思すなりけり、(二)何時よりなりけむ、我を如何にをかしと、(三)物笑し給ふ心地に、月頃思し渡りつらむ、と思ふに、(四)この君は悲しさは忘れ給へるを、(五)こよなくも疎なるかな、物の切に覺ゆる時は、いと斯からぬ事に(六)つけてだに、空飛ぶ鳥の鳴き渡るにも催されてこそ悲しけれ、わが斯く坐に心弱きにつけても、若し心を(七)得たらむに、(八)さ言ふばかり、物の哀を知らぬ人にもあらず、世の中の常なき事を、(九)しみて思へる人しもつれなきと、羨ましくも心憎くも思さるゝものから、眞木柱(一〇)はあはれなり。これに向ひたらむ樣も思しやるに、形見ぞかしとうちまもり給ふ。やう〳〵世の物語(一一)聞え給ふに、(一二)いと籠めてしもはあらじと思して、

薫「昔より心にしばしも籠めて、(一三)聞えさせぬ事殘し侍る限は、いといぶせくのみ思う給へられしを、今はなか〳〵の上臈に(一四)なりにて侍り、まして(一五)御暇なき御有樣にて、心のどかにおはします折も侍らねば、宿直などに、(一六)その事となくてはえさぶらはず、(一七)そこはかとなくて過し侍りてなむ。昔御覽ぜし(一八)山里に、(一九)はかなくて亡せ

(一)浮舟の事をのみ匂が思ひ居られると見える
(二)此兩人のよい中になりしは
(三)匂の
(四)薫
(五)薫は非常に浮舟に對して冷淡なる哉、匂の心
(六)死別といふ樣な非常な事がなくてさへ
(七)わが涙を浮舟故と薫が氣附きたらば
(八)それ程に
(九)無常を深く思へる薫が却て平氣で居る事よと
(一〇)薫を浮舟の形見と思へば哀なり、「吾妹子が來ては寄添ふ眞木柱そも睦じやゆかりと思へば」
(一一)浮舟が薫に
(一二)浮舟の事をさのみ隱して居るでもあるまじと薫が思ひて
(一三)匂に言はずに居る事がある間は
(一四)薫が
(一五)匂が
(一六)用がなければ薫が匂を訪問せず
(一七)取紛れて昔の樣に睦まじく語る折を得ず
(一八)宇治
(一九)大君の妹の浮舟が意外の處に居ると聞きて

㊃ 薫、匂宮を訪ひて浮舟の事を語る
(一)匂の病氣見舞に
(二)薫の心、浮舟位の女の死を歎くとて
(三)匂へ見舞に
(四)蜻蛉式部卿宮、源の兄弟
(五)薫が薄色の喪服を著たる也
(六)內々浮舟の喪服の積で居るをいふ
(七)薫の樣
(八)薫に逢ふも何となく氣がおかれて、匂の心
(九)注意する故
(一〇)明石
(一一)匂の感じ
(一二)必ずしも此我が樣子を見て薫がわが胸の祕密を看破りもすまじ、匂の心
(一三)薫の心

宮(一)の御訪ひに、日々に參り給はぬ人なく、世の騷となれる頃、事々(二)しき際ならぬ思に籠りゐて、參らざらむもひがみたるべし、と思して(三)參り給ふ。その頃、式部(四)卿宮と聞ゆるも亡せ給ひにければ、御叔父の服にて(五)薄鈍なるも、心の中に哀(六)に思ひよそへられて、つぎ〳〵しく見ゆ。(七)少し面瘦せて、いとゞなまめかしき事まさり給へり。人々まかでて、しめやかなる夕暮なり。宮臥し沈みてのみはあらぬ御心地なれば、疎き人にこそ逢ひ給はね、御簾の内にも例入り給ふ人には、對面し給はずもあらず。見え給はむもあいなくつゝましく、見給ふにつけても、いとゞ淚のまづ堰き難さを思せど(八)、思ひしづめて、最おどろ〳〵しき心地にも侍らぬを、皆人は、つゝしむべき病の樣なりとのみ物(九)すれば、內裏にも宮にも(一〇)思し騷ぐがいと苦しく、げに世の中の常なさをも、心細く思ひ給ふる」とて、押し拭ひ紛らはし給ふと思す淚の、やがて滯らずふり落つれば、(一一)いとはしたなけれど、(一二)必ずしもいかでか心得む、唯女々しく心弱きとや見ゆらむ、と思すも恥かし。さり(一三)

りけり、さま異に志したりし身の、思の外に、かく例の（一）人にてながらふるを、佛などの憎し（二）と見たまふにや、人の（三）心を起させむとて、佛のし給ふ方便は、慈悲をも隱して、かやうにこそはあなれ、と思ひ續けつゝ、行をのみし給ふ。

かの宮（四）はた、まして二三日は物も覺え給はず、現心も無き樣にて、如何なる御物怪ならむなど騷ぐ（五）に、やうやう涙盡し給ひて、思し鎭まるにしもぞ、ありし（六）樣は戀しくいみじく思ひ出でられ給ひける。人には唯御病の重き樣にのみ見せて、斯く坐なるいやめ（七）の氣色知らせじと、かしこく（八）もて隱すと思しけれど、自らいと著かりければ、「如何なる事にかく思し惑ひ、御命も危きまで沈み給ふらむ」と、言ふ人もありければ、かの（九）殿にも、いとよくこの御氣色を聞き給ふに、されば（一〇）よ、猶（一一）餘所の文通はしのみにはあらぬなりけり。見（一二）給ひてば必ずさ思しぬべかりし人ぞかし、ながらへましかば、たゞなるよりは、我が爲にも嗚呼なる事も出で來なまし、と思す（一三）になむ、焦るゝ胸も少し醒むる心地し給ひける。

（一）出家志願なりし我身が
（二）俗體にて
（三）道心を起さしめんとて
（四）匂宮
（五）そばの者どもが
（六）浮舟の
（七）涙がちなる自分の樣子を
（八）匂が甘く人前をつくらふ積なれど
（九）薫
（一〇）薫の心
（一一）匂と浮舟との中は逢ふ事はなくて手紙の遣取だけといふ樣な中では無かりしなり、薫の心
（一二）浮舟は匂が見附ければ手を出さずには居られぬ人であつた
（一三）浮舟が

（一）右近等が
（二）薫
（三）薫の心
（四）飛でもなき間違即ち匂がかくれて通ふ事などの出來しも
（五）匂も
（六）緩漫で戀なれぬ心が悔しく
（七）女三の御病氣を心配する處へ又浮舟の歎が重なり悲みに堪へずして
（八）女二宮
（九）女二へ斷りの手紙、格別の忌でもなけれど浮舟の死を聞きし故
（一〇）忌々しき故遠慮して其方へ參らず
（一一）浮舟の
（一二）浮舟存生中は、以下薫の心
（一三）我が運命なりけり

も答へやらずなりぬ。殿（二）は、猶いとあへなくいみじと聞き給ふにも、心憂（三）かりける所（一）かな、鬼などや住むらむ、などて今までさる所にすゑたりつらむ、思（四）はずなる筋の紛ある様なりしも、かく放ち置きたるに心安くて、人（五）も言ひ犯し給ふなりけむかし、と思ふにも、我（六）がたゆく世づかぬ心のみくやしく、御胸いたく覺え給ふ。（七）惱ませ給ふあたりに、かゝる事おぼし亂るゝもうたてあれば、京におはしぬ。（八）宮の御方にも渡り給はず。

薫（九）事々しき程にも侍らねど、忌々しき事を近う聞き侍れば、心の亂れ侍るほども忌々（一〇）しくてなむ。

と聞え給ひて、盡せずはかなくいみじき世を歎き給ふ。（一一）ありし樣容貌いと愛敬づき、をかしかりしけはひなどの、いみじく戀しく悲しければ、（一二）現の世には、など斯くしも思ひ入れず、のどかにて過しけむ、たゞ今は、更に思ひしづめむ方なき儘に、悔しき事の數知らず、かゝる事の筋につけて、いみじう物思ふべき宿世な（一三）

㊂ 薫と匂宮各自の愁傷
（一）薫
（二）女三
（三）浮舟方を
（四）斯樣々々と今度の始末を傳ふる人もなかりしかば
（五）薫の
（六）外聞惡しと宇治の人人が思ふに
（七）薫に
（八）投身の翌々日
（九）早速行くべきであるが
（一〇）母女三の
（一一）籠り居る故直には行かれぬ
（一二）葬送はなぜ昨夜やつて仕舞ひしぞ
（一三）我に通知して
（一四）人の一生の終りなる葬式を
（一五）薫自身の爲にも
（一六）涙にくれて物も言はれぬといふのみを口實にして

て隱しける。

大將殿（一）は、入道（二）の宮の惱み給ひければ、石山に籠り給ひて、騒ぎ給ふ頃なりけり。さていとゞ彼處（三）をば覺束なく思しけれど、はかぐ\しく然なむ（四）といふ人は無かりければ、かゝるいみじき事にも、まづ御使の無き（五）を、人目も心憂しと思ふに、御庄の人なむ參りて、云々と申させ（七）ければ、あさましき心地（六）し給ひて、御使そのま（八）たの日、まだつとめて參りたり。使者「いみじき事は、聞くまゝに自ら（九）物すべきに、かく惱み（一〇）給ふ御事により、つゝしみて、かゝる所に日を限りて籠りたれば（一一）なむ。昨（一二）夜の事は、などか、こゝに（一三）消息して、日を延べても然る事はするものを、いと輕らかなる樣にて、急ぎせられにける。とてもかくても、同じいふかひ無さなれど、とぢめ（一四）の事をしも、山賤の謗りをさへ負ふなむ、此處の爲（一五）も辛き」など、かの睦まじき大藏の大夫して宣へり。御使の來たるにつけても、いとゞいみじきに、聞えむ方なき事どもなれば、唯涙（一六）におぼほれたるばかりをかごとにて、はかぐ\しう

衆下衆しく、(一)あへなくてせられぬる事かな」と誹りければ、「かたへ(二)おはする人は、殊更に斯くなむ京の人はし給ふなる」など、樣々になむ安からず言ひける。(三)かゝる人どもの言ひ思ふ事だにつゝましきを、まして物の聞は隱なき世の中に、(四)大將殿わたりに、骸もなく亡せ給ひにけりと聞召さば、(五)必ず思ほし疑ふこともあらむを、宮(六)はた、同じ御中らひにて、(七)さる人のおはしおはせず、(八)暫しこそ忍ぶとも思さめ、遂には隱あらじ、又定めて宮をしも(九)疑ひ聞え給はじ、如何なる人か率て隱しけむなどぞ、思し寄せむかし、(一〇)生き給ひての御宿世は、いと氣高くおはせし人の、實に亡きかげには、いみじき事をや疑はれ給はむ、と思へば、(一一)此處の内なる下人どもにも、今朝のあわたゞしかりつる惑に(一二)氣色も見聞きつるには口かため、案内知らぬには聞かせじ、などぞたばかりける。右近等(一三)「ながらへてば、誰にも、靜やかにありし樣をも聞えてむ。(一四)たゞ今は悲しさ醒めぬべき事、ふと人傳にきこしめさむは、猶いといとほしき事なるべし」と、この人(一五)二人ぞ、深く(一六)心の鬼添ひたれば、も

(一)つまらぬ樣に
(二)兄弟などある人はの孝なるべしといふ
(三)以下右近等の心
(四)薫方で
(五)薫が
(六)匂宮
(七)浮舟が匂にかくまはれて居るか居ぬかは
(八)暫時の間は匂が隱して居るとも薫が思ふべけれど
(九)薫が
(一〇)存生中は運よかりし浮舟が死後は飛でもない疑を受けられるのかと
(一一)即内の
(一二)樣子を語りたる者共に對しては
(一三)柱たちたらば
(一四)投身の事が明白になりては薫匂などの浮舟の死に對する悲も醒むべき譯なれば、其樣な事が傳聞で薫等の耳に入りたらば御氣の毒なるべし
(一五)右近侍從
(一六)瑕もつ足なれば

(一)母が
(二)浮舟の敷物
(三)車に
(四)浮舟の忌中籠り居るべき人々のみ連立ちて
(五)車を
(六)前にありし黨の家來筋の者など
(七)黨に
(八)わざと
(九)様子知りたる
(一〇)當然すべき作法も行はず

きにくし」と聞ゆれば、とざまかうざまに思ふに、胸のせき上る心地して、如何にも如何にもすべき方も覺え(一)給はぬを、この人々二人して、車寄せさせて、御座(二)ども、氣近う使ひ給ひし御調度ども、皆ながら脱ぎおき給へる御衾など様の物を取り入(三)れて、乳母子の大德、それが叔父の阿闍梨、その弟子の睦まじきなど、元より知りたる老法師など、(四)御忌に籠るべき限して、人の亡くなりたるけはひに眞似びて、(五)出し立つるを、乳母、母君は、いといみじくゆゝしと臥し轉ぶ。大夫内舍人など、(六)おどし聞えし者どもも參りて、内舍人「御葬送のことは、(七)殿に事の由申させ給ひて、日定められて、嚴しうこそ仕う奉らめ」など言ひけれど、右近等「(八)殊更に、今宵過すまじ、いと忍びて、と思ふ樣あればなむ」とて、この車をむかひの山の前なる原にやりて、人も近くも寄せず、この(九)案内知りたる法師の限して燒かす。いとはかなくて、烟は果てぬ。田舍人どもは、なかなかかゝる事を事々しくしなし、言忌など深くするものなりければ、「いと怪しく、例の作法など、(一〇)ある事どももし給はず、下

(一)身投した人をさうでない樣に言ひ紛らして
(二)母方薫匂なども浮丹は一體どうなり行きし事ぞと疑はんも
(三)匂との一件も浮丹が進んでした事ならず、右近と侍從と相談の詞
(四)母に死後に聞かれても格別恥かしき事でもなければ
(五)母に話して
(六)死の悲の上に死骸のなき事をさへ
(七)合點のゆく樣にして上げん
(八)屍體のなき異樣な樣にて
(九)母に話して
(一〇)母に
(一一)母の心
(一二)屍體の行方を尋ねて
(一三)效力は無いながら世間の噂はすさまじくて聞惱からん

にも、疎ましく悲しと思ひつゝ、侍従「さて亡せ(一)給ひけむ人を、とかく言ひ騷ぎて、(二)何處にも何處にも、如何なる方になり給ひにけむと、思し疑はむも、いといとほしき事」と言ひ合せて、「忍びたる事とても、(三)御心より起りてありし事ならず。(四)親にて、なき後に聞き給へりとも、いとやさしき程ならぬを、有の儘に聞えて、(五)斯くいみ(六)じく覺束なき事どもをさへ、かたぐ\思ひ惑ひ給ふ樣は、少し(七)あきらめさせ奉らむ。亡くなり給へる人とても、骸を置きてもて扱ふこそ世の常なれ、(八)世づかぬ氣色にて日頃も經ば、更に隱れあらじ。猶聞えて、(九)今は世の聞をだに繕はむ」と語らひて、忍びてありし樣を聞ゆるに、(一〇)言ふ人も消え入り、え言ひやらず。聞く心地も惑ひつゝ、然ば、(一一)このいと荒ましと思ふ河に、流れ亡せ給ひにけり、と思ふに、いとゞ我も落ち入りぬべき心地して、母「おはしましにけむ方を尋ねて、(一二)骸をだにはかぐ\しく收めむ」と宣へど、右近等「更に何のかひ侍らじ。行方も知らぬ大海の原にこそおはしましにけめ。(一三)さるものから、人の言ひ傳へむ事は、いと聞

(一)匂の一件によりて浮舟の心配したる事は母は知らぬ故
(二)母の心
(三)かねて怖るゝ女二宮から、以下母の心
(四)薫が浮舟を引取るべしと聞きて
(五)新參で氣の知れぬ女抔はなきかと
(六)こゝは山の中ぢやとて
(七)新參者は
(八)早く京へ行きたしと
(九)一部分は居らず
(一〇)浮舟の
(一一)前に見えたる浮舟の歌

にしつる事ぞ」と惑ふ。(一)かゝる事どもの紛ありて、いみじう物思ひ給ひつらむとも知らねば、身を投げ給へらむとも思ひも寄らず、鬼(二)や食ひつらむ、狐めくものや取りもて去ぬらむ、昔物語のあやしき物の事の譬にか、さやうなる事も言ふなりし、と思ひ出づ。さては(三)かの怖ろしと思ひ聞ゆるあたりに、心など惡しき御乳母やうの者や、かう迎へ(四)給ふべしと聞きて、めざましがりて、たばかりたる人もやあらむ、と下衆などを疑ひ、(五)今參の心知らぬやあると問へど、侍女(六)「いと世離れたりとて、あり(七)習はぬ人は、こゝにてはかなき事もえ爲ず、今(八)疾く參らむと言ひつゝなむ、皆その急ぐべき物どもなど取り具しつゝ、かへり出で侍りにし」とて、もとよりある人だに、(九)かたへは無くて、いと人少なる折になむありける。侍從などこそ、日頃の(一〇)御氣色思ひ出で、「身を亡ひてばや」など泣き入り給ひし折々の有樣、書きおき給へる文をも見るに、(一一)「なきかげに」と書きすさび給へるものの、硯の下にありけるを見つけて、河の方を見やりつゝ、響きのゝしる水の音を聞く

そめたりし方に渡り給はむとなむ急ぎ立ちて、この御事をば、(一)人知れぬ様にのみ、(二)辱く哀と思ひ聞えさせ給へりしに、御心亂れけるなるべし。あさましうて、心(三)と身を亡くなし給へる様なれば、かく心の惑に、ひがくしく言ひ續けらるゝなンめり」と、流石にまほならず(四)仄めかす。心得がたく思ひて、時方「さらば、(五)のどかに參らむ。(六)立ちながら侍るも、いと事そぎたる様なり。今御自らもおはしましなむ」(七)と言へば、あな(八)辱。(九)今さらに人の知り聞えさせむも、(一〇)なき御爲は、なかくめでたき御宿世見ゆべき事なれど、忍び給ひし事なれば、また漏させ給はでやま(一一)せ給はむなむ、御志に侍るべき、此處には、(一二)かく世づかず亡せ給へる由を人に(一三)聞かせじ、と萬に紛らはすを、(一四)自然に事どもの氣色もこそ見ゆれ、と思へば、とかく(一五)唆し遣りつ。

雨のいみじかりつる紛に、母君も渡り給へり。更に言はむ方もなく、母「目の(一六)前に亡くなしたらむ悲しさは、いみじくとも、世の常にて類あることとあり。これは如何

(一)匂の事をば
(二)浮舟が内々で
(三)自殺せられたる様なれば
(四)有體には言はず
(五)又ゆつくり參上すべし
(六)斯く立話しするも略式すぎる
(七)匂自身も御出あるべし
(八)以下侍従の心
(九)今になりて浮舟と匂との關係が人に知れるのも
(一〇)浮舟の爲には
(一一)祕密を守り通されるのが亡き人への御志なるべし
(一二)以下宇治の人々の心
(一三)横死の趣を人に聞かせたくなしと
(一四)時方に長居されては
(一五)色々と勸めて時方を歸したり
㊂　母の愁傷、屍骸なき葬送
(一六)目の前で死なせたならば



(一)合點のゆかぬ事、浮舟の死骸のなき樣子なるをいふ
(二)浮舟を
(三)匂が自分の名代に
(四)匂が
(五)萬一にも傳聞の誤にて浮舟實は無事なるかも知れずと其を賴みにして其方達に逢ひて實情を聞き來れと私を遣はされし匂の御心をも
(六)匂の浮舟に對する程の心盡しは
(七)侍從の心
(八)浮舟が
(九)薫がうるさく引取りの事を言ひ來る事もあり
(一〇)撮初から關係の薫へ引取らせんと用意して

たらむ、人にまれ鬼にまれ、返し奉れ。なき御骸をも見奉らむ」と言ひつゞくるが、心得ぬ(一)事どもまじるを、怪しと思ひて、時方「猶宣へ。もし人の(二)隱し聞え給へるか。確に聞しめさむと、(三)御身のかはりに出し立てさせ給へる御使なり。今は、とてもかくてもかひなき事なれど、後にも(四)聞召し合する事の侍らむに、違ふ事まじらば、參りたらむ御使の罪になるべし。又、(五)さりとても賴ませ給ひて、君達に對面せよと仰せられつる御心ばへも、辱しとは思されずや。女の道に惑ひ給ふことは、人の帝にも、古き例どもありけれど、まだ(六)かゝる事この世にはあらじとなむ見奉る」といふに、(七)實にいと哀なる御使にこそあれ、隱すとも、かくて例ならぬ事の樣自ら聞えなむ、と思ひて、侍從「などか、聊にても、人や隱い奉り給ふらむと、思ひ寄るべき事あらむには、斯くしも在るかぎり惑ひ侍らむ。日頃いといみじく(八)物を思し入るめりしかば、(九)かの殿の煩はしげに、ほのめかし聞え給ふ事などもありき、御母に物し給ふ人も、斯くのゝしる乳母なども、(一〇)初より知り

も立ち寄り給はめ。(一)え聞えぬ事」と言はせたり。時方「さりとて、かく覺束なくては、いかゞ歸りまゐり侍らむ。(二)今一所だに」と切に言ひたれば、侍從ぞ逢ひたりける。侍從「いとあさましく、(三)思しもあへぬ樣にて亡せ給ひにたれば、いみじと言ふにも、あかず夢の樣にて、誰も〱惑ひ侍るよし申させ給へ。(四)少し心地ものどめ侍りてなむ、日頃も物おぼしたりつる樣、一夜いと心苦しと思ひ聞えさせ給へりし有樣なども、聞えさせ侍るべき。(五)この穢らひなど、人の忌み侍るほど過して、今一度たち寄り給へ」と言ひて、泣くこといみじ。内にも泣く聲々のみして、乳母なるべし、乳母「あが君や、何方にかおはしましぬる。歸り給へ。空しき骸をだに見奉らぬが、かひなく悲しくもあるかな。旦暮見奉りても飽かず覺え給ひ、いつしか(六)かひある御有樣を見奉らむと、朝夕に頼み聞えつるにこそ、命も延び侍りつれ。打捨て給ひて、かく行方も知らせ給はぬ事。鬼神も、あが君をば(七)え領じ奉らじ。人のいみじく惜む人をば、(八)帝釋も返し給ふなり。我が君を取り奉り

(一)御面談の出來ぬは殘念
(二)もう一人の方即ち侍從にでも逢ひたし
(三)浮舟自身も思ひかけぬ樣にて
(四)少し落着きてから今迄の浮舟の物案じの樣匂に對する苦心の樣など御話し申すべし
(五)死の穢
(六)生甲斐ある御生活をなさるのを
(七)取つて行く事はあるまじ
(八)故事あるが不詳

（一）薫
（二）何か口實にする用事がなくて我が宇治へ參りて其事が薫へ知れたらば此方の祕密を薫に悟られるかも知れませぬ
（三）譯の分らぬ儘では居られぬ
（四）問合せよ
（五）時方が宇治へ
（六）時方の如き身輕き身分の人は
（七）埋葬する也
（八）以後君が此處へ御出なさる事はあるまじ

る事問ひ聞け」と宣へば、時方「かの大將殿（一）、如何なる事か聞き給ふこと侍りけむ、宿直するもの疎なりなど、いましめ仰せらるゝとて、下人の罷り出づるをも、見とがめ問ひ侍るなれば、（二）ことづくる事無くて時方まかりたらむを、物の聞え侍らば、思し合することなどや侍らむ。さて俄に人の亡せ給へらむ所は、論なう騒がしく、人しげく侍らむを」と聞ゆ。匂「さりとて（三）いと覺束なくてやあらむ。猶とかく然るべき樣に構へて、例の心知れる侍從などに逢ひて、如何なる事を斯く言ふぞと案内せよ（四）。下衆は僻事いふなり」と宣へば、いとほしき御氣色も辱くて、夕つ方行く（五）。

（六）かやすき人は疾く行き著きぬ。雨少し降りやみたれど、わりなき道にやつれて、下衆の樣にて來たれば、人多く立ち騷ぎて、人々「今宵やがてをさめ（七）奉るなり」など言ふを聞く心地もあさましく覺ゆ。右近に消息したれども、え逢はず。右近「ただ今物おぼえず、起きあがらむ心地もせでなむ。さるは今宵（八）ばかりこそは、かく

(一)非常な事
(二)匂宮
(三)變な返事を浮舟がよこしたのはどういふ積かしら、以下匂の心
(四)浮舟を想つては居る樣なれど
(五)浮舟が
(六)何處へか隠れる積であの樣な返事をしたのかしらと
(七)浮舟
(八)人々が
(九)あわてゝ物などに突當る也
(一〇)此使は事情をよく知り居らぬ男にて
(一一)匂に返事を
(一二)匂の心
(一三)浮舟が重病なりし事も聞かず、匂の心
(一四)一向何のけぶりもなくて

かけても、斯くなべてならず(一)おどろ〳〵しき事、思し寄らむものとは見えざりつる人の御心ざまを、猶如何にしつる事にかと、覺束なくいみじ。乳母は、なかなか物も覺えで、唯如何樣にせむ、如何樣にせむ」とぞ言はれける。宮(二)にも、いと(三)例ならぬ氣色ありし御返、如何に思ふならむ、我を、流石にあひ思(四)ひたる樣ながら、あだなる心なりとのみ、深(五)く疑ひたれば、外(六)へいき隠れなむとにやあらむと、思しさわぎて御使あり。ある限泣きまどふ程に來て、御文もえ奉らず。使者「如何なるぞ」と下衆女に問へば、下女「上(七)の、今宵俄に亡せ給ひにければ、物もおぼえ給はず。賴もしき人もおはしまさぬ折なれば、さぶらひ給ふ人々は、唯(八)物に(九)あたりてなむ惑ひ給ふ」と言ふ。(一〇)心も深く知らぬ男にて、委しくも問はで參りぬ。斯くなむと申(一一)させたるに、夢(一二)と覺えていとあやし。いたく(一三)煩ふとも聞かず、日頃惱ましとのみありしかど、昨日の返事は然(一四)りげもなくて、常よりもをかしげなりしものをと、思しやる方なければ、匂「時方行きて氣色見、たしかな

思ひ得る力なくて、唯騒ぎあへるを、(一)かの心知れるどちなむ、(二)いみじく物を思ひ給へりし様を思ひ出づるに、身を投げ給へるかとは思ひ寄りける。泣く〳〵この文を開けたれば、

母　いと覺束なさに、まどろまれ侍らぬけにや、今宵は(三)夢にだに打解けても見えず、物におそはれつゝ、心地も例ならずうたて侍るを、猶いとおぼつかなく、(四)物へわたらせ給はむ事は近かゝなれど、(五)その程こゝに迎へ奉りてむ。今日は(六)雨降り侍りぬべければ。

などあり。昨夜の(七)御返をもあけて見て、右近いみじく泣く。(八)さればよ、心細き事は聞え給ひけり、我に、などか聊か宣ふ事の無かりけむ、幼かりし程より、つゆ心おかれ奉る事なく、(九)塵ばかり隔なくて習ひたるに、今は限の道にしも、我を後らかし、氣色をだに見せ給はざりけるがつらき事、と思ふに、足摺といふ事をして泣く様、若き子どもの様なり。(一〇)いみじく思したる(一一)御氣色は、見奉り渡れど、

(一)様子を知り居る右近侍従
(二)浮舟の
(三)安々と夢に浮舟を見る事すら叶はず
(四)薫に引取らるゝ事は
(五)それ迄の間我が手許へ置くべし
(六)雨天らしき故見合せん
(七)浮舟の書きおきし返事
(八)右近の心、此御覺悟故心細い御話もなされたのぢや
(九)浮舟と我と
(一〇)右近の心
(一一)浮舟の

# 蜻蛉

## 梗概

㊀浮舟身を投げし後の宇治邸の周章。匂宮、時方を遣りて事情を探らしむ。㊁母の愁傷。屍骸なき葬送。㊂薫、匂宮各自の愁傷。㊃薫、匂宮を訪ひて浮舟の事を語る。㊄匂宮、浮舟の侍女右近を招く。侍從右近に代りて二條院を訪ふ。㊅薫宇治に行く。右近、浮舟の投身の事情及匂宮との關係を語る。㊆薫文を贈りて浮舟の母を慰む。法事。㊇薫、小宰相を訪ふ。㊈明石中宮の法華八講。薫、女一宮を隙見す。㊉薫、女一宮を慕ひて、女二宮をして一宮に親しましめんとす。薫、明石中宮に參る。浮舟の噂。女一宮と女二宮との交際。⑪匂宮、侍從を迎取りて召使ふ。⑫宮の君、中宮に引取らる。匂宮の懸想。⑬薫、中宮に參りて侍女等に戯る。和琴をひく。宮の君を訪ふ。

㊀ 浮舟身を投げし後の宇治邸の周章、匂宮時方を遣りて事情を探らしむ

(一)浮舟の居ぬを知りて、浮舟既に宇治川に身を投げしあと也

(二)作者の斷り也

(三)母より

(四)私を

(五)何と御返事をしたものかと

彼處には人々、(一)おはせぬを覓め騷げどかひなし。物語の姫君の人に盗まれたらむ朝の樣なれば、(二)委しくも言ひつゞけず。(三)京より、ありし使の歸らずなりにしかば、覺束なしとて又人おこせたり。使「まだ鳥の鳴くになむ、(四)出し立てさせ給ひつる」と使の言ふに、(五)如何に聞えむと、乳母よりはじめて、あわて惑ふ事限なし。更に

浮舟 鐘の音の絶ゆるひゞきに音をそへて(一)わが世盡きぬと君に傳へよ(二)

(三)巻數持て來たるに書き附けて、「今宵はえ歸るまじ」と言へば、(四)物の枝に結ひつけ(五)て置きつ。乳母、「あやしく心ばしり(六)のするかな。夢も騒しと宣はせ(七)たりつ。宿直人よく侍へ」と言はするを、苦しと聞き臥し給へり。乳母「(八)物聞食さぬいと怪し。御湯漬(九)」など萬に言ふを、さかしがる(一〇)めれど、いと醜く老いなりて、我なくば何處にかあらむ、と思ひやり給ふも、いと哀なり。(一一)世の中に得あり果つまじき様を、ほのめかして言はむなど思すには、まづ(一二)驚かされて先だつ涙を、つゝみ給ひて、物も言はれず。右近程近く臥すとて、右近「かくのみ物を思はせば、物思ふ人の魂は、あくがる(一三)なる物なれば、夢も騒しきならむかし。何方(一四)と思し定まりて、如何にも如何にもおはしまさなむ」と打歎く。(一五)萎えたる衣を顔におしあてて、臥し給へりとなむ。

(一)私が泣く音を添へて
(二)母に
(三)祈禱を行ひたるしるしに寺よりよこす札
(四)使が
(五)巻數を結びつけたる杖なるべし
(六)胸さわぎ
(七)母北方が
(八)浮舟が
(九)湯漬を差上げよ
(一〇)あの様に今は何かと世話をやけど、浮舟の心
(一一)決死の覺悟を
(一二)口へ出さぬ前に涙の方が先へ知りて
(一三)ふら〳〵と體を離れて迷ひ出すものなれば
(一四)匂か薫かどちらかにきめて
(一五)浮舟の様

侍るを、やがてその夢の後、寝られざりつるけにや、たゞ今晝寝して侍る夢に、人の(一)忌むといふことなむ見え給ひつれば、驚きながら奉る(二)。能くつゝしませ給へ。人離れたる御住居にて、時々(三)立ち寄らせ給ふ人の御ゆかりもいと恐ろしく、(四)惱ましげに物せさせ給ふ折しも、夢の斯かるを(五)萬になむ思ひ給ふる。(六)參り來まほしきを、(七)少將の方の、猶いと心もとなげに、物怪だちて惱み侍れば、(八)片時も立ち去る事と、いみじく言はれ侍りてなむ。その近き寺にも御誦經せさせ給へ。

とて、(九)その料の物、(一〇)文など書き添へて持て來たり。(一一)限と思ふ命の程を知らで、斯く言ひつゞけ給へるも、いと悲しと思ふ。(一二)寺へ人やりたる程、返事かく。言はまほしき事多かれど、つゝましくて唯、

浮舟 (一三)のちにまたあひ見むことを思はなむこの世のゆめに心まどはで

誦經の鐘の風につきて聞え來るを、つくづくと聞き臥し給へり。

(一)世間で凶兆とせる事が夢に見えし故
(二)此文を
(三)其方のゆかりの人即ち女二宮などの妬も恐ろしく
(四)浮舟の病氣勝なる折から
(五)色々と心配する
(六)其方へ行きたけれど
(七)產したる娘をいふ
(八)側を離れてはならぬとひどく夫に叱られる故行かれぬ
(九)布施にすべき物
(一〇)僧への頼み狀
(一一)浮舟の心
(一二)母より贈り來れる布施や文をやる也
(一三)此世の煩悩はさらりと捨てて一筋に後世に再會せんことを樂しみにして戲きたし

（一）侍女等が皆引移りの用意する也
（二）心持がいつもの樣でなし
（三）歩々屠所に近づく羊の歩みよりも
（四）匂が歸りて後文をよこしたる也
（五）屍體を留めずに死んだならば匂も恨のもつて行き處がなかるべければ結局心安かるべし
（六）薫にも自殺を決心せる樣子をほのめかしたけれど、浮舟の心
（七）方々へ觸れ散らしては
（八）薫と匂とは
（九）浮舟が穩ならぬ樣子で夢に見えたれば

ひ出で聞ゆるにも、すべて今一度ゆかしき人多かり。人（一）は皆おのおの物染め急ぎ、何やかやと言へど、耳にも入らず。夜となれば、人に見つけられず、出でて行くべき方を思ひ設けつゝ、寢られぬまゝに、心地も惡しく皆（二）違ひにたり。明けたてば、川の方を見やりつゝ、羊（三）のあゆみよりも程なき心地す。

宮は（四）いみじき事どもを宣へり。今更に人や見むと思へば、この御返事をだに、思ふ儘にも書かず。

浮舟　から（五）をだにうき世の中にとゞめずばいづこをはかと君もうらみむ

とのみ書きて出しつ。（六）かの殿にも、今はの氣色見せ奉らまほしけれど、處々（七）に書きおきて、離れ（八）ぬ御中なれば、遂に聞き合せ給はむ事いと憂かるべし、すべて、如何になりにけむと、誰にも覺束なくて止みなむ、と思ひかへす。京より母の御文持て來たり。

母　寢ぬる夜の夢に、（九）いと騷がしくて見え給ひつれば、誦經所々にせさせなどし

(註)浮舟自殺の念愈切なり、匂宮の文、母の文
(一)侍從の出行きし跡にて浮舟に匂に御斷り申上げたる由を浮舟に語りたる故
(二)浮舟
(三)侍從が
(四)浮舟が
(五)侍從が見て何と思ふならんと、浮舟の心
(六)翌朝になりたれども終夜泣き明したる事故さぞ目つきが見苦しからんと思ふ故
(七)假初に腰に纏ふ也、起きたる也
(八)自殺の覺悟をしたる也
(九)匂のかきし畫
(一〇)一層の悲しさを添へたり
(一一)引取つて靜に契らんと、以下浮舟の心
(一二)薫
(一三)死後色々いやな評判をする人のあるべきが豫め考へても恥かしけれど
(一四)薫に聞かれるよりはまだ死んだがまし
(一五)死後に
(一六)中君

右近は(一)言ひ切りつる由言ひ居たるに、(二)君はいよ／＼思ひ亂るゝこと多くて臥し給へるに、(三)入り來てありつる樣語るに、(四)答もせねど、枕のやう／＼浮きぬるを、(五)かつは如何に見るらむとつゝまし。(六)つとめても、怪しからむまみを思へば、無期に臥したり。物はかなげに(七)帶うち懸けなどして經讀む。(八)親にさきだちなむ罪失ひ給へとのみ思ふ。(九)ありし繪を取り出でて見て、書き給ひし手つき、顏のにほひなどの、向ひ聞えたらむ樣に覺ゆれば、昨夜一言をだに聞えずなりにしは、(一〇)猶今ひとへ增りていみじと思ふ。(一一)かの心のどかなる樣にて見むと、行末遠かるべき事を宣ひわたる人も如何思さむ、(一二)といとほしう、(一三)憂き樣に言ひなす人もあらむこそ、思ひやり恥かしけれど、心淺く、けしからず人笑へならむを聞かれ(一四)奉らむよりはなど、思ひ續けて、

浮舟 歎きわびて身をば捨つとも(一五)なきかげにうき名流さむことをこそ思へ

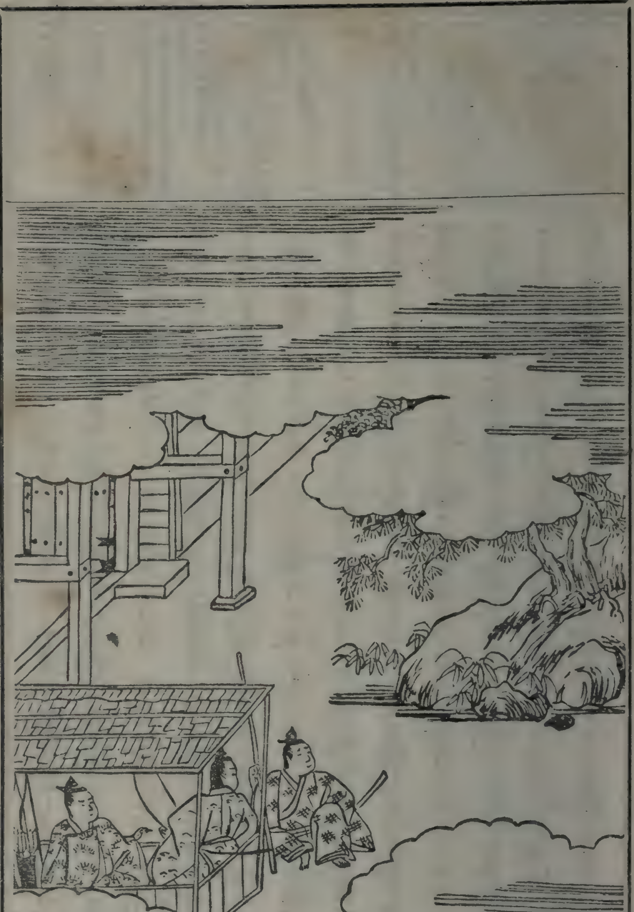
親もいと戀しく、例はことに思ひ出でぬ兄弟の醜やかなるも戀しく、(一六)宮の上を思

き給ふ事限なし。心弱き人は、(一)ましていといみじく悲しと見奉る。いみじき仇を鬼につくりたりとも、疎に見捨つまじき人(二)の御有樣なり。ためらひ給ひて、匂「唯一言もえ聞えさすまじきか(三)。如何なれば、今更(四)に斯かるぞ。猶人々(五)の言ひなしたる樣あるべし」と宣ふ。有樣委しく聞えて、侍從「やがて(六)さ思し召さむ日を、かねて然るべき様にたばからせ給へ。斯く辱き事どもを見奉り侍れば、身を捨てても思う給へたばかり侍らむ」と聞ゆ。(七)我も人目をいみじく思せば、一方に怨み給はむ樣もなし。夜はいたく更け行くに、この物咎する犬の聲絶えず、人々追ひ退けなどするに、(八)弓ひき鳴らし、怪しき男どもの聲して、「火危し」(九)など言ふも、いと心あわたゞしければ、歸り給ふほど、(一〇)言へば更なり。

匂(一一)「いづくにか身をば捨てむと白雲のかゝらぬ山もなく〳〵ぞ行く

さらば早(一二)」とて、この人を返し給ふ。御氣色なまめかしく哀に、夜深き露にしめりたる御香の芳しさなど、例へむ方なし。泣く〳〵(一三)ぞ歸り來たる。

(一)侍從
(二)匂の
(三)浮舟に話が出來ぬか
(四)今になりて斯く警戒を嚴重にするぞ
(五)誰か薫に告口したるものがあるならん
(六)浮舟を引取らんと思ふ日を前々から定めて御用意あれ
(七)匂自身も
(八)宇治邸の夜番の者どもの様也
(九)火の用心
(一〇)悲しさが
(一一)悲しさの餘り何處へ身を捨てたものかと思ひめぐらさぬ處もなく考へつゝ歸り行く
(一二)早く歸れ
(一三)侍從が





(一)匂の御出の途中の難儀一通りならず
(二)北甲斐なき事を申上げるのが不調法に思はれて困る
(三)滅多な奴が出て來たらどうしたものかと
(四)侍從の樣、垂れたる髮を脇の下より前に出して手に持ちたる也
(五)時方が侍從を
(六)侍從の衣の裾を時方が
(七)侍從に
(八)時方
(九)匂に
(一〇)立のまゝでは話も出來ねば
(一一)馬の側に垂れて泥を除くるもの
(一二)匂の心
(一三)女狂に身を持崩して

も語る、大夫、時方「(一)おはします道のおぼろけならず、強ちなる御氣色に、(二)あへなく聞えさせむ事なむ、たいぐ〵しき。さらばいざ給へ、共にくはしく聞えさせ給へ」と誘ふ。侍從「いとわりなからむ」と言ひしろふ程に、夜もいたく更け行く。宮は御馬にて少し遠く立ち給へるに、鄙びたる聲したる犬どもの出で來てのゝしるも、いと怖ろしく、人少にいと怪しき御ありきなれば、(三)漫ならむものの走り出で來たらむも、如何樣にかと、侍ふかぎり心をぞ惑はしける。時方「猶疾く〳〵參りなむ」と言ひ騷がして、この侍從を率て參る。(四)髮脇より搔越して、樣體いとをかしき人なり。(五)馬に乘せむとすれど、更にきかねば、(六)衣の裾をとりて、立ち添ひて行く。わが沓を(七)穿かせて、(八)自らは供なる人の怪しきものを穿きたり。參りて斯くなむと聞ゆれば、(九)(一〇)語らひ給ふべき樣だになければ、山賤の垣根のおどろ葎の陰に、(一一)障泥といふ物を敷きておろし奉る。我が御心地にも、(一二)怪しきありさまかな、かかる道に損はれて、はか〴〵しくは得あるまじき身なゝめり、と思し續くるに、(一三)泣

はしましぬ。蘆垣のかたを見るに、例ならず、(一)番衆「あれは誰そ」といふ聲々、(二)いざとげなり。(三)立退きて、心知りの男を入れたれば、それをさへ問ふ。前々のけはひにも似ず。煩はしくて、男「(四)京より頓の御文あるなり」と言ふ。右近が從者の名を呼びて逢ひたり。いと煩はしくいとゞ覺ゆ。右近「更に今宵は不用なり。(五)いみじく(六)辱き事」と言はせたり。宮、など斯くもて離るらむと思すに、わりなくて、匂「まづ時方入りて、侍從に逢ひて、さるべき樣にたばかれ」とて遣す。かど〳〵しき(七)人にて、とかく言ひ構へて、尋ねて逢ひたり。侍從「如何なるにかあらむ、かの殿(八)の宣はする事ありとて、宿直にある者ども、(九)さかしがりたちたる頃にて、いとわりなきなり。御前にも、(一〇)物をのみいみじく思したゞめるは、(一一)かゝる御事の辱きを思し亂るゝにこそはと、心苦しくなむ見奉る。更に今宵は、(一二)人氣色見侍りなば、なか〳〵にいと惡しかりなむ。やがて、さも(一三)御心づかひせさせ給ひつべからむ夜、こゝにも人知れず思ひ構へてなむ、(一四)聞えさすべかゝめる」乳母のいざとき事など

(一)いつもと違ひて警固嚴重なり
(二)油斷なげなり
(三)御案内の時方が
(四)浮舟の母より
(五)とてもだめ也
(六)御氣の毒
(七)時方は氣の利きたる男で
(八)薫の
(九)此頃は特に用心嚴しくするので
(一〇)浮舟も
(一一)斯樣に匂に無駄足をさせる事の御氣の毒さを御心配なさるゝならんと
(一二)匂の御出の樣子を人が悟りたらば
(一三)匂が御出あらん御支度ある夜に
(一四)此方から申上げん

見奉りつべし。やう〳〵怪しなど思ふ人も侍るべかめり。かう(一)かゝづらひ思ほさで、さるべき様に聞えさせ給ひてよ。右近侍らば、おほけなき事もたばかり出し侍らば、かばかり小き御身ひとつは、(二)空よりもゐて奉らせ給ひなむ」と言ふ。とばかりためらひて、浮舟「(三)斯くのみ言ふこそいと心憂けれ。(四)然もありぬべき事と、思ひかけばこそあらめ、もるまじき事と皆思ひとるに、わりなく、かくのみ(五)頼みたるやうに宣へば、如何なる事をし出で給はむとするにかと思ふにつけて、身のいと心憂きなり」とて、返事も聞え給はずなりぬ。

(六)宮、かくのみ猶(七)うけひく氣色もなくて、返事さへ絶え〴〵になるは、(八)かの人の、あるべき様に言ひ認めて、(九)少し心安かるべき方に思ひ定りぬるなゝめり、理、と思すものから、いと口惜しく妬く、さりとも我をば哀と思ひたりしものを、逢ひ見ぬとだえに、人々の言ひ知らする方によるならむかし、など眺め給ふに、行くかた知らず、(一〇)「むなしき空にみちぬる」心地し給へば、例のいみじく思し立ちて(一一)お

(一)屈託せずに然るべく御返事をなされ
(二)空を飛んでも匂が浮舟をお連れなさる事が出来ぬでもあるまい
(三)汝等が我を匂にのみ心惹かるゝ様に言ふのがつらい
(四)匂に靡くは尤な事と自分が思つて居るではなし
(五)匂と約束でもしてある様に匂が言はるゝ故
(六)匂宮
(七)浮舟が
(八)薫が
(九)身を任せて安心な薫の方に靡く事と浮舟が決心したものらしい
(一〇)「我戀は空しき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし」
(一一)宇治へ

（一）命の
（二）古手紙があとに殘らば
（三）匂の爲にも
（四）我が匂の手紙を仕舞ひおいたのかしらと薫に思はれるのが恥かし
（五）自殺を決行する氣にもなれぬ
（六）浮舟の心
◎ 匂宮又宇治に赴く、警固の嚴しきに妨げられて浮舟に逢はず
（七）三月
（八）匂宮に家を貸さんと約せし受領
（九）任國へ
（一〇）浮舟方へ言ひ遣す也
（一一）けどられぬ樣に
（一二）我方より人に漏れる氣遣はなし
（一三）以下浮舟の心
（一四）警固嚴しければ也
（一五）一寸の間でも匂を此邸へ入れる事も出來まじ

浮舟「何か、むづかしく、長かる（一）まじき身にこそあゝめれ。おち留まりて、（二）人の御（三）爲もいとほしからむ。さかしらにこれを取り置きけむよなど、漏り聞き給はむこそ恥かしけれ」など宣ふ。心細き事を（四）思ひもて行くには、またえ（五）思ひ立つまじきわざなりけり。親を（六）おきて亡くなる人は、いと罪深かゝなるものをなど、流石にほの聞きたる事をも思ふ。

（七）二十日餘にもなりぬ。かの家（八）あるじ、二十八日に下る（九）べし。宮は、（一〇）その夜必ず迎へむ。下人などに、能く氣色（一一）見ゆまじき心づかひし給へ。此方樣よりは、（一二）夢にも聞えあるまじ。疑ひ給ふな」など宣ふ。（一三）さて、あるまじき樣にて、おはしたらむに、今一度（一四）物をもえ聞えず、おぼつかなくて返し奉らむ事よ、又時の間にて（一五）も、いかでか此處には寄せ奉らむとする、かひなく恨みて歸り給はむ樣などを思ひ遣るに、例のおもかげ離れず、堪へず悲しくて、この御文を顔に押當てて、暫しはつゝめども、いといみじく泣き給ふ。右近、「あが君、かゝる御氣色遂に人

へば必ず憂き事見えぬべき身の、亡くならむは、何か惜しかるべき、親も暫しこそ歎き惑ひ給はめ、數多の子ども扱ひに、自ら忘(一)草摘みてむ、在り(二)ながら持て損ひ、人笑へなる樣にてさすらへむは、まさる(三)物思なるべし、など思ひなる。(四)兒めきおほどかに、たを〳〵と見ゆれど、(五)氣高う世の有樣をも知る方少くて、おふし立てたる人にしあれば、少し(六)おずかるべき事を、思ひ寄るなりけむかし。(七)むつかしき反古など破りて、おどろ〳〵しく一度にも(八)認めず、燈臺の火に燒き、水に投げ入れさせなど、やう〳〵失ふ。心知らぬ御達は、(九)物へ渡り給ふべければ、徒然なる月日を經て、はかなくし集め給へる手習などを、破り給ふなゝめり、と思ふ。侍從などぞ、見つくる時は、侍從「など斯くはせさせ給ふ。(一〇)哀なる御中に、御心留めて書きかはし給へる文は、人にこそ見せさせ給はざらめ、物の底に置かせ給ひて御覽ずるなむ、程々につけては、いと哀に侍る。さばかりめでたき御紙(一一)づかひ、辱き御言の葉を盡させ給へるを、斯くのみ破らせ給ふ、情なき事」と言ふ。

(一)忘るべし
(二)なまじ生きて居て身を持ちそこなひ
(三)死んで仕舞ひしよりも親の嘆はひとしほなるべし
(四)浮舟の性質をいふ
(五)親が卑しき田舍者にて氣高く世の有樣を知り居る點はなくて育てたる浮舟故
(六)恐ろしき事を
(七)跡にのこりて面倒な古手紙など
(八)始末せず
(九)遠からず薰に引取らるゝ故
(一〇)匂との中
(一一)匂の手紙の用紙の美しきをいふ

を、(一)さの如き非常の事の侍はむをば、いかでか承らぬやうは侍らむ、となむ申させ侍りつる。(二)用意してさぶらへ、(三)便なき事もあらば、(四)重く勘當せしめ給ふべき由なむ、仰言侍りつれば、いかなる仰言にかと、恐れ申し侍る」といふを聞くに、梟の鳴かむよりも、いと物怖ろし。答へもやらで、右近「(五)さりや、聞えさせしに違はぬ事どもを聞召せ。(六)物の氣色御覽じなるなゝめり。御消息も侍らぬよ」など歎く。乳母はほの打聞きて、乳母「(七)いと嬉しく仰せられたり。盗人多かゝなるわたりに、宿直人も初の樣にもあらず、(八)皆身の代ぞと言ひつゝ、あやしき下衆をのみ參らすれば、(九)夜行をだにせぬに」と喜ぶ。(一〇)君は、實にたゞ(一一)今いと惡しくなりぬべき身なゝめりと思すに、(一二)宮よりは、「如何に〳〵」と、(一三)「苔の亂るゝ」わりなさを宣ふ。いと煩はしくなむ。(一四)とてもかくても、(一五)一方々々につけて、いとうたてある事は出で來なむ、わが身ひとつの亡くなりなむのみこそ目安からめ、昔は、(一六)懸想する人の有樣の、(一七)いづれとなきに思ひ煩ひてだにこそ、身を投ぐる例もありけれ、ながら

(一)其樣な
(二)薫の命令の詞
(三)不都合あらば
(四)内舍人等を
(五)私の申上げし通りなるを御聞きなされ、浮舟にいふ詞
(六)薫が樣子をけどられたと見える
(七)薫の御注意は有難し
(八)各代人といふ名目で
(九)夜まはり
(一〇)浮舟
(一一)今の間に事が破裂してひどい目に逢はねばならぬと
(一二)匂宮
(一三)「逢ふ事をいつか其日とまつの木の苔の亂れて戀ふるこの頃」
(一四)浮舟の心
(一五)どちらかにつきて
(一六)生田川に身をなげし菟原乙女などの事をいふ、菟原乙女の事は萬葉九、大和物語などにあり
(一七)どちらがどうともきめられぬに

(一)此御召使どもを御覧なされと浮舟にいふ也
(二)薫よりは
(三)侍從が噂をして浮舟をおどしたる
(四)薫
(五)薫が私に
(六)以下薫の詞をまねていふ也、浮舟の宇治に居る間此御文の通りに匂が非常に身をやつして宇治へ來たれるのに
(七)浮舟の侍女の處へ誰か通ひ來るとの噂あり、匂の事をかく薫のいひなせる也
(八)事情をたゞしたる筈
(九)私存ぜざる事故

乳母「かゝる人御覧ぜよ。怪しくてのみ臥させ給へるは、物怪などの、妨げ聞えさせむ(一)とするにこそ」と歎く。

殿(二)よりは、かのありし返事をだに宣はで、日頃經ぬ。この威しゝ内舎人といふ者ぞ來たる。實にいと荒々しく、ふつゝかなる樣したる翁の、(三)聲枯れ、さすがに氣色ある、「女房に物とり申さむ」と言はせたれば、右近しも逢ひたり。内舎人「殿(四)に召し侍りしかば、今朝參り侍りて、たゞ今なむ罷り歸り侍りつる。(五)雜事ども仰せられつる序に、斯く(六)ておはします程に、夜中曉のことも、某等かくて侍ふと思して、宿直人わざとさし奉らせ給ふ事もなきを、この頃聞召せば、女房の御許に、(七)知らぬ所の人々通ふやうになむ聞召すことある、たいぐ\しき事なり、宿直の侍ふ者どもは、(八)その案内問ひ聞きたらむ、知らではいかゞ侍ふべき、と問はせ給ひつるに、承(九)らぬ事なれば、某は身の病重く侍りて、宿直仕う奉ることは、月頃怠りて侍れば、案内もえ知り侍らず、さるべき男どもは、懈怠なく催し侍はせ侍る

(一)かの武士等が
(二)浮舟の心
(三)匂に
(四)自分の心ではどちらがよいとも思はず
(五)匂が非常に熱心なるを見てはなぜあの樣にするのかと思へど
(六)薫を
(七)衝突が起りたる時どうしたものかと
(八)此樣な事も申上ぐるなれ
(九)心配なされてよい筈の事につきても今迄は心配なさらぬ御顔附で
(一〇)匂との事ありし後非常に氣をもまるゝ故
(一一)薫へ引取らるゝ用意を

人も率ておはしまさず、やつれてのみおはしますを、然る者(一)の見つけ奉りたらむは、いといみじくなむ」と、言ひ續くるを、君(二)、猶我を宮に(三)心よせ奉りたると思ひて、この人々の言ふ、いと恥かしく、心地(四)にはいづれとも思はず、唯夢の樣にあきれて、いみじく(五)入られ給ふをば、など斯くしもとばかり思へど、頼み聞えて年頃になりぬる人を(六)、今はとても離れむと思はぬによりこそ、かくいみじと物も思ひ亂るれ、實に(七)よからぬ事も出で來たらむ時と、つくづくと思ひ居たり。浮舟「まろは、いかで死なばや。世づかず心憂かりける身かな。かく憂き事ある例は、下衆などの中にだにも多くやはある」とて、うつぶし臥し給へれば、右近「かくな思召しそ。安らかに思しなせとてこそ聞えさせ(八)侍れ。思し(九)ぬべき事をも、さらぬ顔にのみ、長閑に見えさせ給へるを、この御事の後(一〇)、いみじく心いられをせさせ給へば、いと怪しくなむ見奉る」と、心知りたる限りは、皆かく思ひ亂れ騷ぐに、乳母おのが心をやりて、物染め(一一)いとなみ居たり。今まゐり童などの目安きを呼び取りつゝ、

らめ。唯御心の中に、少し思し靡かむ方を、(一)さるべきに思しならせ給へ。いでや、いと辱く、(二)いみじき御氣色なりしかば、人のかく(三)思し急ぐめりし方に心もよらず。暫時は隱(四)ろへても、御思のまさらせ給はむによらせ給ひね、とぞ思ひえ侍る」と、宮(五)をいみじくめで聞ゆる心なれば、ひたみちに言ふ。右近「いさや右近は、(六)とてもかくても、事なく過させ給へと、初瀬石山などに願をなむ立て侍る。この大(七)將殿の御庄の人々といふ者は、いみじき武道の者どもにて、(八)一類この里に滿ちて侍るなり。大方この山城大和に、(九)殿の領じ給ふ所々の人なむ、皆この內舍人(一〇)といふ者のゆかり(一一)かけつゝ侍るなる。それが婿の右近の大夫といふものを本として、萬の事をおきて(一二)仰せられたるなゝなり。(一三)善き人の御中どちは、情なき事し出でよと思さずとも、物の心得ぬ田舍人どもの宿直人にて、代り〴〵さぶらへば、おのが(一四)番に當りて聊なる事もあらせじなど、過もし侍りなむ。(一五)ありし夜の御ありきは、いとこそ(一六)むくつけく思う給へられしか。宮はわりなくつゝませ給ふとて、御供の

(一)其方へ一筋に靡く事に定め給へ
(二)匂の
(三)引取を急ぐ薫の方には心が傾かず
(四)匂と隱れて逢ひても
(五)侍從は
(六)どうなるにしても
(七)薫
(八)一族
(九)薫
(一〇)禁中宿衞の武官
(一一)一家親類になりて居る
(一二)薫が
(一三)薫と匂との心には
(一四)自分の當番の時には少しの過失も無き樣にと思ふ故に間違も起るべし
(一五)匂につれられて川を越したる事
(一六)無氣味に

(一)浮舟の乳母
(二)今斯かる事を話出すは機會が惡けれど
(三)一命にかゝはる程の事ではなけれども
(四)身分高き人
(五)薫か匂かどちらか一人に
(六)匂の浮舟を思ふ情が増して、浮舟の心匂の方に傾けりと思ひていふ也
(七)匂に
(八)浮舟の母が浮舟を
(九)乳母が薫方へ浮舟の引移るべき用意にかまけて
(一〇)其前に我方へ引取るべしと言ふ匂の心が
(一一)浮舟に

國にもいみじきあたら兵士一人失ひつ。又この過失したるも、善き郎等なれど、かゝる過失したるものを、いかでかは遣はむとて、國の内をも追ひ拂はれぬ。すべて女のたい〴〵しきぞとて、館の内にも置い給へらざりしかば、東の人になりて、まゝも今に戀ひ泣き侍るは、罪深くこそ見給ふれ。(二)ゆゝしき序のやうに侍れど、(一)上も下も、かゝる筋の事は、思し亂るゝはいと惡しきわざなり。(三)御命まではあらずとも、人の御程々につけて侍る事なり。死ぬるにまさる恥なることも、(四)善き人の御身には、なか〳〵侍るなり。(五)ひとかた〳〵に思し定めてよ。宮も、(六)御志増りて、まめやかにだに聞えさせ給はば、(七)其方ざまにも靡かせ給ひて、物ないたく歎かせ給ひそ。痩せ衰へさせ給ふもいと益なし。さばかり上の思ひいたづき聞えさせ給ふものを、(九)まゝがこの御いそぎに心を入れて、(八)惑ひ居て侍るにつけても、それより此方にと聞えさせ給ふ御事こそ、いと苦しくいとほしけれ」と言ふに、(一〇)今一人、侍從「うたて、恐ろしきまでな聞えさせ給ひそ。(一一)何事も御宿世にてこそあ

(一)文を返す事は
(二)文の中に間違つた事が書いてありし故
(三)此文を取次ぎし時に右近が此文をかへすは怪しと思ひし故
(四)匂の一件を知られしならん
(五)浮舟が
(六)右近がかの文を見しならんとは氣がつかぬ故
(七)他の方面から
(八)薰の樣子を知れる人が右近に語りしならんと
(九)匂との事は我から進んでした事ではなけれど、　浮舟の心
(一〇)二人の男に關係せしに
(一一)此二句挿入文
(一二)此男も彼男も
(一三)女が
(一四)後の男の方に
(一五)前の男が
(一六)前の男も女と離別したり

しからず怪しくなりぬべきなゝめり、といとゞ思ふ所に、右近來て、右近「殿の御文は、などて返し奉らせ給ひつるぞ。(一)ゆゝしく忌み侍るなるものを」と言へば、浮舟「(二)僻事のあるやうに見えつれば、所違へかとて」と宣ふ、(三)あやしと見ければ、道にてあけて見けるなりけり。よからずの右近が樣やな。見つとは言はで、右近「あないとほし。苦しき御事どもにこそ侍れ。殿は(四)物の氣色御覽じたるべし」と言ふに、(五)面さとあかみて、物も宣はず。(六)文見つらむとは思はねば、(七)こと樣にて、かの(八)御氣色見る人の語りたるにこそはと思ふに、誰が然言ふぞ、などもえ問ひ給はず。この人々の見思ふらむ事も、いみじく恥かし。(九)我が心もてありそめし事ならねども、心憂き宿世かな、と思ひ入りて寢たるに、侍從と二人して、右近「右近が姊の、常陸にて人二人見侍りしを、(一〇)(一一)程々につけては、たゞ斯くぞかし、(一二)此も彼も劣らぬ志にて、(一三)思ひ惑ひて侍りし程に、女は、(一四)今の方に今少し心よせ勝りてぞ侍りける。それに(一五)妬みて、遂に今のをば殺してしぞかし。さて(一六)我も住み侍らずなりにき。

かれ。をこなり」と宣ふ。畏まりて、少輔が常にこの殿の御事案内し、彼處の事(一)問ひしも思ひ合すれど、物慣れてえ申し出でず。(二)君も、下司に委しくは知らせじと思せば、問はせ給はず。彼處には、御使の例より繁きにつけても、物思ふこと様々なり。たゞ斯くぞ宣へる。(三)

薫 (四)波こゆるころともしらず末の松まつらむとのみ思ひけるかな

(五)人に笑はせ給ふな。

とあるを、いと怪しと思ふに、胸もふたがりぬ。(六)御返事を心得顔に聞えむもいと(七)つゝましく、僻事にてあらむも怪しければ、御文はもとの様にして、

浮舟 所(八)違の様に見え侍ればなむ。怪しくなやましくて何事も。

と、書き添へて奉れつ。見給ひて、流石に(九)いたくもしたるかな、かけて見及ば(一〇)ぬ心ばへよと、ほゝ笑まれ給ふも、憎しとはえ思し果てぬなゝめり。(一一)

(一二)まほならねどほのめかし給へる氣色を、彼處(一三)にはいとゞ思ひ添ふ。遂に(一四)我身は、け

(一)人に知られては
(二)道定が常に薫の動靜を此隨身に問ひ浮舟の事を問ひし事をも成程と合點したれど
(三)浮舟
(四)「君をおきてあだし心を我がもたば末の松山波も越えなん」の歌によれり
(五)我を
(六)浮舟が
(七)此歌の意味が分つて居る樣な顏をして返事せんも憚あり、さりとてつかぬ返事をするも變なれば
(八)他所への文が間違つてきたる樣に思はれる故其儘に返上する
(九)甘くやつたわい、薫の心
(一〇)今までつひぞ見ざりし分別のかしこさよと
(一一)浮舟を
㊂祕密を知れる浮舟の侍女等の心配、薫武士を遣はして宇治の山莊を警衞せしむ、浮舟自殺を期して祕密の文を燒く
(一二)正面からは言はねど匂の事をほのめかしたる薫の文を見て
(一三)浮舟方
(一四)浮舟の心

(一)事情の一端が分つて見れば
(二)無瑕なものの得がたきは、薫の心
(三)浮舟の人物をいふ
(四)匂の持物には丁度似合なり
(五)匂に浮舟を讓りてもよく自分は手を引籠めたき心地もすれど
(六)浮舟が我が本妻にする積の女ならば匂に通じたるも大なる瑕なるべけれど、元が慰みものゝ事故矢張今迄通りにしておかん、薫の心
(七)もう是限と見限つて浮舟に逢はずに居たらば
(八)自分が浮舟に嫌氣がさして、薫の心
(九)浮舟を
(一〇)匂は考ふまじ
(一一)匂が初熱心で後にあきたる女を二三人も一品宮方へ侍女に追ひやつてある
(一二)浮舟も其樣な目にあひて侍女になつて居るのを見聞したらば氣の毒な事ならん
(一三)浮舟の
(一四)大内記、仲信の婿
(一五)薫の家司
(一六)浮舟は
(一七)道定も浮舟を懸想するならん、わざと事情を知らぬ振して云ふ也
(一八)宇治へ隱れて行け

思ひたる樣なりしも、(一)片端心えそめ給ひては、萬思し合するにいと(二)憂し。有り難きものは、人の心にもあるかな、(三)らうたげにおほどかなりとは見えながら、色めきたる方は添ひたる人ぞかし、(四)この宮の御具にては、いとよき間なりと、(五)思ひも讓りつべく、退く心地し給へど、(六)やむごとなく思ひ初めはじめし人ならばこそあらめ、猶さるものにて置きたらむ、(七)今はとて見ざらむはた、いと戀しかるべしと、人わろくいろ〳〵に心の中に思す。(八)我すさまじく思ひなりて捨置きたらば、必ずかの宮(九)呼び取り給ひてむ、人の爲後のいとほしさをも、殊に(一〇)たどり給ふまじ。(一一)さやうに思す人こそ、一品の宮の御方に二三人參らせ給ひたゝなれ、さて出で(一二)立ちたらむを見聞かむいとほしく、など、猶捨てがたく、(一三)氣色見まほしくて、御文つかはす。例の隨身人間に召寄せたり。薫「(一四)道定の朝臣は、猶(一五)仲信が家にや通ふ」隨身「然なむ侍る」と申す。薫「宇治へは、常にや此のありけむ男は遣るらむ。(一六)幽にて居たる人なれば、(一七)道定も思ひ懸くらむかし」と、うちうめき給ひて、薫「(一八)人に見えでをま

(一)浮舟の事を
(二)宇治は
(三)外から男の來る樣の事はあるまじと
(四)匂が
(五)匂を案内して宇治へ連れ行きし我薫の女に手を出すとはひどいと
(六)薫が中君に懸想しつゝ、薫の心
(七)我が中君に對する戀は昔からの事にて今はじまつた極りの惡い事でもなし
(八)我心に快からざる事ありては中君の爲にも我爲にもよからずと思へばこそ
(九)匂が
(一〇)浮舟へ文を
(一一)もう浮舟へ通ひ初めたのかも知れぬ
(一二)匂の行先が不明で
(一三)浮舟などの事に
(一四)中君の處へ行けぬ時の匂の歎
(一五)浮舟

る人ありと(一)聞き給ひけむ、いかで言ひ寄り給ひけむ、(二)田舍びたるあたりにて、(三)かやうの筋の紛は、えしもあらじと思ひけるこそ幼けれ、さても、知らぬあたりにこそ、(四)然るすきごとをも宣はめ、昔より隔なくて、怪しきまで(五)しるべし、率てありき奉りし身にしも、後めたく思しよるべしや、と思ふに、いと心づきなし。(六)對の御方の御事を、いみじく思ひつゝ、年頃過すは、我が心の重さはこよなかりけり、さるは、(七)それは今始めて、樣惡しかるべき程にもあらず、もとよりの便にもよれるを、唯(八)心のうちの隈あらむが、我が爲も苦しかるべきによりこそ、思ひ憚るも嗚呼なるわざなりけれ、この頃かく(九)惱ましくし給ひて、例よりも人繁きまぎれに、いかで遙々と(一〇)書きやり給ふらむ、(一一)おはしや初めけむ、いと遙なる懸想の道なりや、(一二)怪しくて、おはし所尋ねられ給ふ日もありと聞えきかし、(一三)さやうの事に思し亂れて、そこはかとなく惱み給ふなるべし、昔を思し出づるにも、(一四)えおはせざりし程の歎いといとほしげなりきかしと、つくづくと思ふに、(一五)女のいたく物

奉り給ひて、數多の御子どもの上達部君達ひき續けて、(一)彼方に渡り給ひぬ。(二)この殿は後れて出で給ふ。隨身氣色ばみつる怪し、と思しければ、御前など下りて(三)火ともす程に、隨身召し寄す。薫「申しつる事は何事ぞ」と問ひ給ふ。隨身「今朝、かの宇治に、出雲の權守時方の朝臣のもとに侍る男の、紫の薄樣にて、櫻につけたる文を、西の妻戸によりて、女房にとらせ侍りつる、見給へつけて、云々問ひ侍りつれば、(四)こと違へつゝ、空言の樣に申し侍りつるを、如何に申すぞとて、童して見せ侍りつれば、(五)兵部卿の宮に參り侍りて、式部少輔道定の朝臣になむ、その返事はとらせ侍りける」と申す。君怪しと思して、薫「その返事はいか樣にしてか出しつるぞ」隨身「それは見給へず。(六)異方より出し侍りにける。下人の申し侍りつるは、赤き色紙の、いと淸らなるとなむ申し侍りつる」と聞ゆ。思し合するに、(七)違ふことなし。(八)然まで見せつらむを、かど〴〵しと思せど、人近ければ、委しくも宣はず。道すがら、(九)猶いと恐ろしく(一〇)隈なくおはする宮なりや、如何なりけむ序に、然

(一)夕霧邸
(二)薫
(三)松明の火
(四)實狀をいはず
(五)匂宮
(六)自分の居たる所とは別なる所にて其使にわたしたり
(七)先刻匂の見居し文に
(八)童をつけて見屆けさせたる隨身の計らひを氣の利きたる仕方と思へば
(九)薫の心
(一〇)やらずのがさぬ

聞かむもつゝましと思ひて、畏りて居り。殿も然見知り給ひて出で給ひぬ。宮(一)例ならず悩ましげにおはしますとて、宮達も皆參り給へり。上達部など多く參り集ひて、騒がしけれど、異なる事も(二)おはしまさず。かの内記は政官(三)なれば、後れてぞ參れる。この御文(四)も奉るを、宮(五)、臺盤所におはしまして、戸口に召寄せて取り給ふを、大將(六)、御前の方より立ち出で給ふ側目に見通し給ひて、切にも思すべかめる文の氣色かなと、をかしさに立ち留り給へり。引き(七)あけて見給ふ。紅の薄様に、細やかに書きたるべしと見ゆ(八)。文に心入れて(九)、頓にも向き給はぬに、大臣(一〇)も立ちて外様におはすれば、この君(一一)は障子より出で給ふとて、大臣出で(一二)給ふと、打咳きて、驚かい奉り給ふ。引隱し(一三)給へるにぞ、大臣さしのぞき給へる。驚きて御紐(一四)さし給ふ。殿もついゐ(一五)給ひて、夕霧「まかで侍りぬべし。例の(一六)御邪氣の久しく起らせ給はざりつるを、恐ろしきわざなりや。山の座主只今請じに遣さむ」と、忙がしげにて立ち給ひぬ。夜更けて皆出で給ひぬ。大臣(一七)は、宮をさきに立て

(一)明石中宮
(二)中宮の御様子が
(三)政務に隙なき役、兼官の式部少輔の忙しき役なるをいふ
(四)浮舟の返事
(五)匂宮
(六)薫
(七)匂が
(八)薫の推測する也
(九)匂が
(一〇)夕霧
(一一)薫
(一二)夕霧の來れる由をせきにて匂に知らする也
(一三)匂が文を
(一四)匂がはづし居たる胸の紐をかけたる也、直衣狩衣などの紐の胸をはづし居るはくつろぎ居る時の事也
(一五)跪きて會釋する也
(一六)明石の樣態を話す也
(一七)夕霧

(一)自分が内々で
(二)私用で來た其相手の人に艶書を渡すといふ事があるか
(三)仔細ありげな奴
(四)出雲權守時方
(五)使者の言があと先揃はず
(六)薫の隨身は利發者にて
(七)時方は出雲權守にて左衞門大夫を兼ねたりと見ゆ
(八)匂宮
(九)是程に跡をつけられんとは
(一〇)隨身より劣れる匂の使は考へずして
(一一)隨身が
(一二)薫が

に此處には度々參るぞ」と問ふ。使者「私に(一)訪ふべき人の許にまうで來るなり」といふ。隨身「私の(二)人にや、艶なる文はさし取らする。氣色(三)ある眞人かな。物隱しは何ぞ」と言ふ。使者「まことは(四)この守の君の御文、女房に奉り給ふ」と言へは、事違(五)ひつゝ怪しと思へど、此所にて定め言はむも異樣なるべければ、各參りぬ。か(六)どかどしきものにて、供にある童を、隨身「この男に然りげなくて目附けよ。左衞(七)門の大夫の家にや入る」と見せければ、童(八)「宮に參りて、式部の少輔になむ、御文はとらせ侍りつる」と言ふ。さまで(九)尋ねむものとも、劣の(一〇)下司は思はず、事の心をも深う知らざりければ、舍人の人に見顯されにけむぞ口惜しきや。殿(一一)に參りて、(一二)今出で給はむとするほどに、御文奉らす。直衣にて、六條院に、后の宮の出でさせ給へる頃なれば、參り給ふなりけり。事々しく、御前など數多もなし。御文參らする人に、隨身「あやしき事の侍りつる、見給へ定めむとて、今まで侍ひつる」と言ふを、ほの聞き給ひて歩み出で給ふまゝに、「薫「何事ぞ」と問ひ給ふ。この人の

と慕ふ。母「然なむ思ひ侍れど、彼所もいと物騒がしく侍り。この人々(一)も、はかなき事などえしやるまじく、せばくなど侍ればなむ。武生(二)の國府にうつろひ給ふとも、忍びては參り來なむを、なほ〳〵(三)しき身の程は、かゝる御爲こそいとほしく侍れ」など、打泣きつゝ宣ふ。

殿(四)の御文は今日もあり。薫「惱ましと聞えたりしを、如何」と訪ひ給へり。

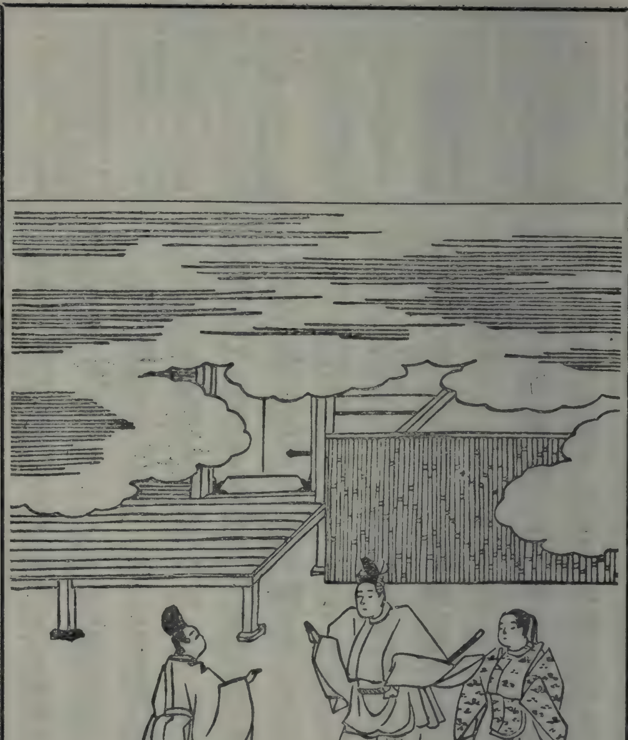
薫(五)自らと思ひ侍るを、わりなき障り多くてなむ。この(六)程のくらし難さこそ、なかなか苦しく。

などあり。宮は、昨日の御返もなかりしを、

匂如何に思し(七)たゞよふぞ。風(八)の靡かむ方も後めたくなむ。いとゞ耄れ勝りてながめ侍る。

など、これは多く書き給へり。雨降りし日、來逢ひたりし御使どもぞ、今日も來たりける。殿の御隨身、かの少輔(九)が家にて時々見る男なれば、隨身「眞人(一〇)は、何し

(一)浮舟附の人々は彼處へ行きては引移の用意なども出來さうにもなき程狹き故見合せたがよからん
(二)催馬樂「道の口武生の國府に我はありと親には申したべ心あひの風やさきんだちや」
(三)卑しき
㊃薫浮舟と匂宮との關係を悟る、文を浮舟に贈りて祕密を知れる由をほのめかす
(四)薫の
(五)自身見舞に行きたけれど
(六)引取らぬ間の
(七)匂
(八)「須磨のあまの鹽やく烟風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」
(九)大內記也、式部少輔を兼ねたる由前に見えたり
(一〇)汝は



なりなば、誰も〳〵、あへなくいみじと、暫時こそ思ひ給はめ、ながらへて人笑へに憂き事もあらむは、いつかその物思の絶えむとする、と思ひかくる(一)にはさはり所もあるまじう、爽やかによろづ思ひなさるれど、うち返しいと悲し。親の萬に思ひ言ふ有様を、(二)寝たる樣にてつく〴〵と思ひ亂る。惱ましげにて痩せ給へるを、乳母にも言ひて、さるべき御祈などせさせ給へ、祭祓などもすべき樣など言ふ(三)。「(四)御手洗川にみそぎ」せまほしげなるを、斯くも知らで萬に言ひ騒ぐ。母「人少なゝめり。よく然る(五)べからむあたりを尋ねて、今まゐりは留め給へ(六)。やむごとなき御中らひは、正身こそ何事もおいらかに思さめ(七)、善からぬ中となりぬるあたりは、煩はしき事もありぬべし(八)。かい秘めて、さる心し給へ」など、思ひ至らぬ事なく言ひ置きて、母「彼所にわづらひ侍る人も(九)、おぼつかなし」とて歸るを、(一〇)いと物思はしく、よろづ心細ければ(一一)、又逢ひ見でもこそと思へば、浮舟「心地のあやしう侍るにも、見奉らぬがいと覺束なく覺え侍るを、暫時も參り(一二)來まほしくこそ」

(一)宇治川に身を投げん事を思ひ立ちて見れば其方がよささうで萬事がさつぱりする樣に感ぜらるれど
(二)寝たふりしながら聞きつゝ
(三)母北方が
(四)戀故なるを母は知らずして、「戀せじと御手洗川にせし御禊神はうけずぞなりにけらしも」
(五)然るべき所を搜して新參者を連れて來て置き給へ
(六)上つ方の中となれば御當人の女二宮は穩やかに思ひ居らるゝにしても下々が面倒なもの故
(七)浮舟が女二と寵を爭ふ形となれば面倒な事があるに相違なし
(八)事を祕密にして
(九)常陸守の次女
(一〇)浮舟の心
(一一)再び逢はずに死ぬかも知れぬと思へば
(一二)母の處へ行つて居たし

む若き人侍ひにくげになむ。大方(一)は、いとめでたき御有樣なれど、さる筋の事にて、上(二)の無禮しと思さむなむわりなきと、大輔(三)が女の語り侍りし」と言ふにも、然(四)りや、まして(五)、と君は聞き臥し給へり。母「あなむくつけや。帝(六)の御女をもち奉り給へる人なれど、餘所(七)々々にて、惡しくも善くもあらむは如何はせむと、おほけなく思ひなし侍る。よからぬ(八)事を引き出で給へらましかば、すべて身(九)には悲しくいみじと思ひ聞ゆとも、また見奉らざらまし」など、言ひかはす事どもに、いとゞ心膽(一〇)もつぶれぬ。猶我(一一)が身を失ひてばや。遂に聞きにくき事は出で來なむ、と思ひ續くるに、この水の音の恐ろしげに響きて行くを、母「斯からぬ流もありかし。世に似ず荒ましき所に、年月を過し給ふを、哀(一二)と思しぬべきわざになむ」など、母君したり顔に言ひ居たり。昔よりこの河のはやく恐ろしきことを言ひて、人々「先つ頃渡守が孫の童、棹さしはづして落ち入り侍りにける。すべて徒になる人多かる水に侍り」と、人々も言ひあへり。君(一三)は、さても(一四)我が身行方も知らず

(一)匂は大體に於ては結構なる方なれども
(二)中君
(三)右近
(四)浮舟の心
(五)右近などさへ其點につきて中君を憚る必要ある上は我は一層憚らねばならぬと
(六)薫は女二の聟なれど
(七)女二と無關係の女を他に持つは餘儀なき事なるべしと思ひて浮舟を薫に差上ぐる也
(八)中君の夫たる匂と浮舟が關係する樣ならば
(九)自分には悲しき事なれども浮舟を勘當せねばならぬ
(一〇)浮舟が
(一一)自殺せん
(一二)薫が
(一三)浮舟
(一四)以下浮舟の心

つけては、物をのみ思ひ亂れし氣色の、少しうちゆるびて、かく渡り(一)給ひぬべかゝめれば、此所に參り來る事、必ずしも(二)殊更にはえ思ひ立ち侍らじ。かゝる對面の折々は、昔の事も心のどかに、聞え承らまほしけれ」など語らふ。尼「ゆゝしき身とのみ思う給へしみにしかば、細やかに(三)見え奉り聞えさせむも、何かはとつつましくて過し侍りつるを、打捨てて渡らせ(四)給ひなば、いと心細くなむ侍るべけれど、かゝる御住居は、心もとなくのみ見奉るを、嬉しくも侍かゝめるかな。世に知らず重々しくおはしますべかゝめる殿(五)の御有樣にて、かく尋ね(六)聞えさせ給ひしも、おぼろげならじと聞え置き侍りにし、浮きたる事にやは侍りける」などいふ。母「後は知らねど、唯今はかく思し離れぬ樣に宣ふ(七)につけても、唯御(八)しるべをなむ思ひ出で聞ゆる。宮の(九)上の、かたじけなく哀に思したりしも、つゝ(一〇)ましき事などの、自ら侍りしかば、中空(一一)に所狹き御身なりと、思ひ歎き侍りて」と言ふ。尼君打笑ひて、尼「この(一二)宮の、いと騒がしきまで、色におはしますなれば、心ばせあら

(一)薫に引取らるべきなれば
(二)是からはわざ〳〵は來られぬ
(三)つく〴〵浮舟に御目にかゝつて御話を申上ぐるも憚ありて
(四)浮舟が行つて仕舞はれたらば
(五)薫の
(六)浮舟を特に引取らるゝは一通りの思召ならずと前に私が申上げしが事實なりし事は今御分りになりしならん
(七)薫が
(八)御媒を有難く思ふ
(九)中君
(一〇)憚るべき事、匂の手前一件をいふ
(一一)たより所なく
(一二)匂宮

たつ山に籠るとも、必ず尋ねて、我も人も徒になりぬべし、猶心やすく隠れなむ事を思へ、と今日も宣へるを、如何(一)にせむ、と心地悪しく臥し給へり。母「などかかく例ならず、甚く青み痩せ給へる」と驚き給ふ。乳母「日頃怪しくのみなむ。はかなき物も聞食さず、悩ましげにせさせ給ふ」と言へば、母「あやしき事かな。物怪などにやあらむ」と、母「如何(二)なる御心地ぞと思へど、石山もとまり給ひにきかし」と言ふも、かたはらいたければ伏目(三)なり。暮れていと月いとあかし。有明の(四)空を思ひ出づる涙のいとゞ留めがたきは、いとけしからぬ心かなと思ふ(五)。母君昔物語などして、あなたの尼君(六)呼び出でて、(七)故姫君の御有様、心深くおはして、さる(八)べき事も思し入れたりし程に、目に見す〳〵消え入り給ひにし事など語る。尼(九)「おはしまさましかば、(一〇)宮の上などの様に聞え通ひ給ひて、(一一)心細かりし御有様どもの、いとこよなき御幸にぞ侍らましかし」と言ふにも、我女(一二)はこと人かは、思ふ様(一三)なる宿世のおはしはてば、劣らじを、など思ひつゞけて、母「世と共に、この君に(一四)

(一)其方も我も
(二)若し御懐胎かと思へど、月の障の爲に石山詣もとまりたる位なれば其にもあるまじ
(三)浮舟の樣
(四)匂と舟に乘りて川を渡りし時の事
(五)浮舟が自ら評する也
(六)辨の尼
(七)大君
(八)色々せねばならぬ心配をせし故に
(九)大君御存生ならば
(一〇)中君
(一一)便なき浮舟の爲に仕合せなりしならん
(一二)浮舟なりとて大君等と違ふ事はない、以下母北方の心
(一三)運よく行けば中君にも劣るまじと
(一四)浮舟故には

(一)これを設け給ひて、少し御心のどめ給ふ。この月の晦日がたに下る(二)べければ、やがてその日渡さ(三)むと思し構ふ。匂「斯くなむ思ふ。ゆめ〳〵」と言(四)ひやり給ひつゝ、(五)おはしまさむ事はいとわりなくある中に、(六)こゝにも、乳母いとさかしければ(七)難かるべき由を聞ゆ。

(八)大將殿は、卯月の十日となむ定め(九)給へりける。「誘ふ水あらば」(一〇)とは思はず、いと怪しく、如何にしなすべき身にかあらむと、浮きたる心地のみすれば、母の御許にしばし渡りて、思ひめぐらす(一一)程あらむ、と思せど、少將の妻子(一二)産むべき程近くなりぬとて、修法讀經など隙なく騷げば、石山にもえ出で立つまじ。(一三)母ぞこち渡り給へる。乳母出で來て、乳母「殿より、(一四)人々(一五)の裝束なども細かに思しやりてなむ。いかで淸げに何事もと思ひ給ふれど、まゝが(一六)心ひとつには、怪しくのみぞし出で侍らむかし」など言ひ騷ぐが心地よげなるを見給ふにも、君は、(一七)けし(一八)からぬ事どもの出で來て人笑へならば、誰も〳〵如何に思はむ、あやにくに宣ふ人は(一九)た、八重(二〇)

(一)此引取場所が出來たので
(二)受領が任國へ
(三)浮舟を引取らんと
(四)浮舟方へ
(五)匂が宇治へ行く事は
(六)浮舟方
(七)匂に逢ふ事は
(八)薫は
(九)浮舟引取の日を
(一〇)浮舟は引取つてさへくれゝば何方へでも行く氣にはなれず「侘びぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」
(一一)分別をつける間暫時其處に居たしと
(一二)常陸守の娘第二女
(一三)常陸守の北方が浮舟方へ來たる也
(一四)薫より
(一五)侍女等の衣裳迄も
(一六)私一個の計らひでは
(一七)浮舟
(一八)以下浮舟の心
(一九)匂宮
(二〇)「白雪の八重たつ山に籠るとも思ひ立ちなば尋ねざらめや」以下匂の文の詞を浮舟の思ひ出せる也

ぬべき心地してなむ」と、聞え給へば、女(一)「如何なる事に心置くものとも知らぬを」と、いらへ給ふ。薫「内裏(二)になど、悪様に聞しめさする人や侍らむ。世の人の物言ひぞ、いと味氣なくけしからず侍るや。されどそれは(三)、さばかりの數にだに侍るまじ」など聞え給ふ。

造り(四)たる所に渡してむと思し立つに、「かゝる(五)料なりけり」など、花やかに言ひなす人やあらむなど、苦しければ、いと忍びて障子張らすべき事など、人しもこそあれ、この内記(六)が知る人の親、大藏の大夫なるものに、睦まじく心安きまゝに、宣ひつけたりければ、聞きつぎて、宮(七)には隱なく聞えけり。「繪師(八)どもなども、御隨身どもの中にある、むつまじき殿人などを選りて、流石(九)にわざとなむせさせ給ふ」と申すに、いとゞ思し(一〇)さわぎて、我が御乳母の遠き受領の妻にてくだる家、下(一一)つ方にあるを、匂「いと忍びたる人しばし隱いたらむ」と、語らひ(一二)給ひければ、如何なる人にかはと思へど、大事(一三)と思したるに、辱ければ、匂「然らば(一四)」と聞えけり。

(一)嫉妬はどの樣な時にするものか我は知らぬ
(二)浮舟を引取りたらば帝へ告口をする者があるかも知れぬ
(三)浮舟は彼是人に噂される程の物々しき女でもなし
(四)かねて用意せし家也
(五)扨は浮舟を引取る積で此家は造りたるなり抔と仰山に噂されるがいやで
(六)匂を案内せし大内記の妻の親
(七)匂方へ
(八)匂に語る者の詞
(九)特別に調製せらる
(一〇)匂が
(一一)下京
(一二)匂が受領に
(一三)匂の熱心に賴むを斷るも恐れ多き故
(一四)然らば仰に從はん

浮舟「かきくらしはれせぬ峰のあま雲にうきて世をふる身をもなさばや(一)まじりなば。(二)

と聞えたるを、宮はよゝと泣かれ給ふ。さりとも戀しと思ふらむかしと思しやる(三)にも、物思ひて居たらむ樣のみ、面影に見え給ふ。(四)まめ人はのどかに見給ひつゝ、哀如何にながむらむと思ひやりて、いと戀し。

浮舟「つれ〴〵と身を知る雨のをやまねば袖さへいとゞみかさまさりて

とあるを、うちも置かず見給ふ。

女宮(五)に物語など聞え給ひての序に、薫「無禮しともや思さむと、つゝましながら、流石に年經ぬる人(六)の侍るを、怪しき所に捨て置きて、いみじう物思ふなるが心苦しさに、近う呼び寄せてと思ひ侍る。昔より異樣なる心ばへ侍りし身にて、世の中を、すべて例の人ならで、(七)過してむと思ひ侍りしを、かく見奉るにつけて、(八)ひたぶるにも捨て(九)難ければ、ありと(一〇)人にも知らせざりし人の上さへ、心苦しう罪得

(一)どうしてよいか分らぬ我身はいつそあの雲にでもなつて飛んで行つて仕舞ひたし
(二)「行く舟の跡なき波にまじりなば誰かは水の泡とだに見ん」
(三)浮舟を
(四)薫は浮舟の返事を
〔十一〕薫の浮舟を引取るべき準備、匂宮の薫を出し拔きて浮舟を引取るべき準備、浮舟自殺を企つ
(五)女二宮
(六)年來我が手をかけて居る女、浮舟を女二宮を娶る前より關係ありし女の樣に詐る也
(七)一生獨身で暮したしと思ひ居しに
(八)女二宮を娶りたるにつけて
(九)世の中を
(一〇)隱し妻の事までも氣になりて棄て置くは罪な樣に思はるゝ故引取らんと思ふ

語らふ。心ひとつに思ひしよりは、(一)空言もたより出で來にけり。後の御文には、

薫「思ひながら日頃になること。時々は、(二)それよりも驚かい給はむこそ、思ふ樣ならめ。疎なるにやは。(三)

など。はし書に、

薫「(四)水まさるをちの里人いかならむ晴れぬながめにかきくらす頃

常よりも、思ひやり聞ゆること勝りてなむ。

と、白き色紙にて立文なり。御手も細かにをかしげならねど、書きざま故々しう見ゆ。宮はいと多かるを、(五)小さく結びなし給へる、樣々をかし。侍女「(六)まづ彼を、人見ぬ程に」と聞ゆ。浮舟「今日はえ聞ゆまじ」と、恥らひて、手習に、

浮舟「(七)里の名を我身に知ればやましろの宇治のわたりぞいとゞ住み憂き

宮のかき給へりし繪を、時々見て泣かれけり。(八)ながらへてあるまじき事ぞと、とざまかうざまに思ひなせど、(九)外に絶え籠りてやみなむは、いと哀に覺ゆべし。

(一)右近が一人で氣を揉みし時よりは今は侍従といふ相談相手ある故事が計らひよし
(二)浮舟の方から手紙をよこして貰ひたし
(三)其方を疎に思ひて無沙汰するに非ず
(四)初句は長雨に宇治川の水のまさるをいふ、ながめ—長雨、眺め
(五)文句の長い文を
(六)匂への御返事を先にし給へ
(七)宇治のう(憂)といふ名を我身に思ひ知れば
(八)匂との中は到底永く續ける譯にはゆかぬと
(九)薫に引取られてふつつり匂に逢はずに仕舞ふは

そあらめ、また斯う(一)ながらも、京に隠し(二)すゑ給ひ、ながらへても思し(三)數まへむにつけては、かの(四)上の思さむこと、よろづ(五)隠なき世なりければ、怪しかりし(六)夕暮のしるべばかりにだに、かう尋ね出で給ふめり、まして我有樣のともかくもあらむを、聞き(七)給はぬ樣はありなむや、と思ひたどるに、我が(八)心にも疵ありて、かの人(九)に疎まれ奉らむは、猶いみじかるべし、と思ひ亂るゝ折しも、かの(一〇)殿より御使あり。これかれ(一一)と見るもいとうたてあれば、尚事(一二)多かりつるを見つゝ臥し給へれば、侍從右近見合せて、猶うつり(一三)にけりと、言はぬ樣にていふ。侍從「理ぞかし。(一四)殿の御容貌を類おはしまさじと見しかど、この(一五)御有樣はいみじかりけり。打亂れ給へる愛敬よ。まろならば、斯ばかり(一六)の御思を見る〳〵、え斯くてあらじ。后の宮にも參りて、常に見奉り(一七)てむ」と言ふ。右近「うしろめたの御心の程(一八)や。殿の御有樣に勝り給ふ人は誰かはあらむ。容貌などは知らず、御心ばへけはひなどよ。猶(一九)この御事は、いと見苦しきわざかな。如何ならせ給はむとすらむ」と、二人して

(一)永く續くにした處が
(二)我を引取りて
(三)我を寵愛あらば
(四)中君の手前も如何也
(五)況や物は隠されぬ世の中故、此句「まして我有樣の」へ續く
(六)匂に手籠にされかけし只一度の手がかりでさへ遂に斯く尋ね出されし事なれば
(七)薫の
(八)浮舟自身にも惡い處があるのが分つて
(九)薫に
(一〇)薫
(一一)同時に二つの文をあれ是と見るも異な物故
(一二)まだ長くある匂の文を見つゝ
(一三)矢張浮舟の心は匂の方へ移つたのぢやわいと
(一四)薫の
(一五)匂の
(一六)是程匂に慕はれるのを知りつゝ此儘宇治に居る事は出來ぬ
(一七)匂を
(一八)浮舟の
(一九)匂との關係は

思ひながら、強ちなる人（一）の御事を思ひ出づるに、恨み給ひし樣、宣ひし事ども、面影につと添ひて、いさゝかまどろめば夢（二）に見え給ひつゝ、いとうたてあるまで覺ゆ。

雨降り歇まで、日頃多くなる頃（三）、いとゞ山路思し絶えて、わりなく思されければ、「親のかふこ」（四）は所狹きものにこそと、思すも辱し。盡せぬ事ども書き（五）給ひて、

匂　ながめやるそなたの雲も見えぬまで空さへくるゝ頃のわびしさ

筆にまかせて書き亂り給へるしも、見所あり、をかしげなり。殊にいと重く（六）などはあらぬ若き心地に、いとかゝる心を思ひも勝りぬべけれど、初より契り給ひし樣も、流石に彼（七）は猶いと物深う、人柄のめでたきなども、世の中（八）を知りにしはじめなればにや、かゝる（九）憂き事聞き（一〇）つけて、思ひ疏み給ひなむ世には、いかでか在らむ、いつしかと思ひ惑ふ親にも、思はずに心づきなしとこそは、もて煩はれめ、かく心（一一）いられし給ふ人（一二）はた、いとあだなる御本性とのみ聞きしかば、かゝる程こ

（一）匂が
（二）匂
十　匂宮薫各浮舟に文を贈る、浮舟の煩悶
（三）匂が宇治へ行く事は出來ぬとあきらめて
（四）「たらちねの親のかふ蠶の繭籠りいぶせくもあるか妹に逢はずして」
（五）浮舟への文に
（六）重々しからぬ氣風の浮舟故、此樣な手紙を見てはひとしほ戀がまさる樣なれど
（七）薫は
（八）はじめて男を知りし相手なればにや
（九）以下浮舟の心
（一〇）薫が
（一一）早く薫に引取つて貰ひたしと待居る母にも匂との關係が知れたらば不埒な事をすると折檻せらるべし
（一二）匂は浮氣者の由なれば其愛情も永く續きはすまじ

て、夜深く率て(一)歸り給ふ。例の抱き給ふ。匂「(二)いみじく思すめる人は、斯うはよもあらじよ。見知り給ひたりや」と宣へば、實にと思ひて、うなづきて居たる、いとらうたげなり。右近、妻戸放ちて入れ奉る。やがてこれより別れて出で給ふも、飽かずいみじと思さる。

かやうの歸さは、猶二條院にぞおはします。(三)いと惱ましうし給ひて、物なども絶えて聞食さず、日を經て青み痩せ給ひ、御氣色も變るを、內裏にも何處にも思ほし歎くに、いとゞ物騷がしくて、(四)御文だに細には書き給はず。(五)彼所にも、かのさかしき乳母、女の子産む所に(六)出でたりける、歸り來にければ、心やすくも(七)え見ず。(八)かくあやしき住居を、(九)唯かの殿のもてなし給はむ樣をゆかしく待つ事にて、母君も思ひ慰めたるに、(一〇)忍びたる樣ながらも、近く渡してむ事を思しなりにたれば、いとめやすく嬉しかるべき事に思ひて、(一一)やう〳〵人もとめ、童のめやすきなど迎へて(一二)おこせ給ふ。(一三)我が心にも、それこそはあるべき事に、初より待ち渡れ、とは

(一)宇治の山莊へ
(二)其方の思ひ込んで居る薫は我が如く親切にはよもやあるまじ
(三)匂が
(四)浮舟への文を匂が
(五)浮舟方
(六)暇を貰ひて行つて居たりしが
(七)浮舟が匂の文を
(八)浮舟の今の生活は如何にも落著かぬ住居なれど
(九)薫のよく取扱ひてくれるを樂しみにして
(一〇)內々ではあれど近近薫が引取る積になりたれば
(一一)母北方が
(一二)浮舟方へ
(一三)浮舟の

(一)匂の態度は地體美しきが上に
(二)浮舟に思ひ附かれんと
(三)二日間逗留すべき由にかねて京の方を取繕ひある故
(四)匂と浮舟と
(五)浮舟が
(六)濃紫の衣に
(七)取合せ趣ありて
(八)上の袴、裳
(九)よき衣に著かへたれば
(一〇)浮舟に
(一一)女一宮の官女に此浮舟をしたらば御寵愛があるに違ひなし、匂の心
(一二)女一の侍女の中には
(一三)浮舟を盜み出さん事を
(一四)其迄の間に薫に逢ひてはならぬと
(一五)浮舟が
(一六)今此處だけですら薫を我に見かへる心はなきならんと
(一七)匂が

て引き破りつ。さらでだに見るかひある御有樣を、いよ〳〵あはれにいみじと、人(一)の心にしめられむと、(二)盡し給ふ言の葉氣色、いはむ方なし。(三)御物忌二日とたばかり給へれば、少し心のどかなる儘に、互(四)に哀とのみ深く思しまさる。右近は、萬に例の言ひ紛らはして、御衣など奉りたり。今日(五)は亂れたる髮少しけづらせて、濃き衣(六)に紅梅の織物など、間(七)をかしう著かへて居給へり。侍從も、あやしき褶(八)著たりしを、あざやぎたれば、(九)その裳をとり給ひて、君に著(一〇)せ給ひて、御手水まゐらせ給ふ。姫宮(一一)にこれを奉りたらばいみじきものにし給ひてむかし、(一二)いとやむごとなき際の人多かれど、斯ばかりの樣したるは難くや、と見給ふ。かたはなるまで遊び戲れつゝ暮し給ふ。忍びて(一三)率て隱してむ事を、かへすがへす宣ふ。(一四)その程、かの人に見えたらばと、いみじき事どもを誓はせ給へば、いとわりなき事と思ひて、(一五)答へもやらず、涙さへおつる氣色、更に(一六)目の前にだに思ひうつらぬなゝめりと、(一七)胸痛うおぼさる。恨みても泣きても、萬に宣ひあかし

えけむかしと思し遣りて、いみじく怨み(一)給ふ。(二)二の宮をいとやむごとなくてもち(三)奉り給へる有様なども語り給ふ。(四)かの耳留め給ひし一言は、宣ひ出でぬぞ憎きや。時方、御手水御菓子など、取次ぎて參るを御覽じて、匂(五)「いみじくかしづかるめる客人のぬし、さてな見えそや」といましめ給ふ。侍從、色めかしき若人の心地に、いとをかしと思ひて、(六)この大夫とぞ物語して暮しける。雪の降り積れるに、我が住む方を見やり給へば、(七)霞のたえ〴〵に梢ばかり見ゆ。山は鏡を懸けたるやうに、きら〳〵と夕日に輝きたるに、昨夜わけ來し道のわりなさなど、哀おほく添へて語り給ふ。(八)

匂　峰の雪みぎはのこほりふみわけて君にぞまどふ道はまどはず

「(九)木幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯めし出でて手習し給ふ。

浮舟　ふりみだれ汀にこほる雪よりもなかぞらにて(一〇)ぞ我は消ぬべき

と書き消ちたり。(一一)この中空を咎め給ふ。(一二)實に憎くも書きてけるかなと、恥かしく

(一)匂が
(二)薫が
(三)妻に持ち
(四)薫が浮舟を思ひ出して「衣かたしき」と歌ひし事
(五)大事にされる御客樣は其樣な事はせぬものぢや、時方を戯れていふ也
(六)時方と
(七)浮舟が
(八)匂が
(九)「山城の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ行く君を思ひかねて」
(一〇)二人の男の中に立ちて身を持扱ひたる心をほのめかせる也
(一一)「中空にてぞ」とあるを匂が氣にしたる也
(一二)浮舟の感じ

(一)浮舟が
(二)浮舟の服裝
(三)匂の感じ、常に見給ふ人は六君中君など
(四)浮舟の人柄のみならず其打解け姿までが
(五)右近にのみならず侍從に迄匂との關係を知らるゝ事よと
(六)侍從に向ひて汝は誰ぞと尋ぬる也
(七)「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へて我名もらすな」
(八)侍從が
(九)時方が
(一〇)聲低くもの言ふ也、時方をあがめたる形也
(一一)時方が、匂の在るを知らずして自分如き卑しき者を敬ふををかしがる也
(一二)宿守に
(一三)薫の來りし時浮舟が矢張此樣にして逢ひしならんと

ば、細やかなる姿つきいとをかしげなり。(一)ひき繕ふ事もなく打解けたる様を、いと恥かしく、まばゆきまで淸らなる人にさし向ひたるよと思へど、紛れむ方もなし。(二)なつかしき程なる白き限を五つばかり、袖口裾の程までなまめかしく、色々に數多襲ねたらむよりも、をかしう著なしたり。(三)常に見給ふ人とても、斯くまで打解けたる姿などは、見習ひ給はぬを、(四)斯かるさへぞ猶珍らかにをかしう思されける。侍從も、いと目安き若人なりけり。(五)これさへ斯かるを殘なう見るよと、女君はいみじと思ふ。宮も、匂「(六)これは又誰ぞ。(七)我が名洩すなよ」と口がため給ふを、いとめでたしと思ひ聞えたり。(八)此所の宿守にて住みけるもの、時方を主と思ひてかしづきありけば、このおはします遣戸を隔てて、所得顔に居たり。(九)(一〇)聲ひきしゞめ、畏まりて物語しをるを、(一一)答もえせずをかしと思ひけり。時方「いと怖ろしう占ひたる物忌により、京の内をさへ去りて愼むなり。外の人寄すな」と言ひたり。(一二)人目も絶えて心やすく語らひくらし給ふ。(一三)かの人のものし給へりけむに、斯くて見

(一)橘は常磐なるものなれば其にあやかりて我と君との中も永く變らじ
(二)朝夕見慣れたる處なれども珍らしき旅にでも出たる樣に思はれて
(三)橘の小島はかはる事もあるまじけれど我身は行末覺束なし、薫と匂と兩方へ心のわけちるゝつらさを含みていへる也
(四)匂が
(五)浮舟を
(六)匂自ら
(七)供人の感じ
(八)此借りたる家は
(九)十分に造り終らぬ樣也
(一〇)防ぎきれず
(一一)浮舟の
(一二)微行の服裝、狩衣なるべし
(一三)上衣を脱がせたれば

いとはかなけれど、千年も經べき縁の深さを」と宣ひて、

匂　(一)年經ともかはらむものかたちばなの小島のさきに契るこゝろは

女も、(二)珍らしからむ道のやうに覺えて、

浮舟　(三)たちばなの小島の色はかはらじをこのうき船ぞゆくへ知られぬ

をりから人の樣に、をかしくのみ(四)何事も思しなす。かの岸にさし著きて下り給ふに、(五)人に抱かせ給はむは、いと心苦しければ、(六)抱き給ひて、助けられつゝ入り給ふを、(七)いと見苦しく、何人を斯くもて騷ぎ給ふらむと見奉る。(八)時方が叔父の因幡の守なるが領ずる庄に、はかなう造りたる家なりけり。(九)まだいと荒々しきに、網代屛風など、御覽じも知らぬしつらひにて、(一〇)風も殊にさはらず、垣のもとに雪むら消えつゝ、今もかき曇りて降る。

日さし出でて軒の垂氷の光りあひたるに、(一一)人の御容貌もまさる心地す。宮も、所狹き道の程に、(一二)輕らかなるべき程の御衣どもなり。女も(一三)脱ぎすべさせ給ひてしか



れど、(一)かの人の御けはひに似せてなむ、もて紛らはしける。夜の程に、立ち歸り給はむも中々(二)なるべければ、此處の(三)人目もいとつゝましさに、時方にたばからせ給ひて、河より彼方なる人の家に率て(四)おはせむと構へたりければ、前だてて(五)遣したりける、夜更くる程に參れり。時方「いと能く用意して侍ふ」と申さす。こは如何にし給ふ事にかと、右近もいと心あわたゞしければ、(六)寢おびれて起きたる心地も戰かれて、おやしき童べの雪遊したるけはひの樣にぞ、震ひあがりける。「いかでか」なども言ひ(七)あへさせ給はず、かき抱きて出で給ひぬ。右近はこゝの後見に(八)留まりて、侍從をぞ奉(九)る。いと(一〇)はかなげなるものと旦暮見いだす、小さき船に乘り給ひて、さし渡り給ふほど、遙ならむ岸にしも漕ぎ離れたらむ樣に、心細く覺えて、つと(一一)著きて抱かれたるも、いとらうたしと思す。(一二)有明の月すみ昇りて、水の面も曇なきに、船人「これなむ橘の小島」と申して、御船しばしさし留めたるを見給へば、大きやかなる岩の樣して、され(一三)たる常盤木の影繁れり。匂「かれ見給へ。

(一)薫の
(二)其では來ぬがましな位故
(三)邸内の人々の
(四)浮舟を連れて行かんと
(五)かねて其準備をさせに遣つて置きたる時方が
(六)右近が
(七)浮舟に一言も言はせず
(八)あとの番に殘りて
(九)浮舟の供に
(一〇)浮舟が
(一一)匂にひつたり寄り添ひて
(一二)匂が
(一三)物古りたる

⑨匂宮雪中宇治に行く、夜浮舟と共に宇治川を渡りて大内記の所緣の家に宿す
(一)薫の樣子を見ていよいよ油斷がならぬと匂が思ひて
(二)匂が宇治へ
(三)追ひ續きて降る雪を待つ付に僅に殘れる雪
(四)宇治通ひの御供の煩はしさを厭ふ
(五)本官も兼官も
(六)御供として似合はしき樣に指貫の裾をかゝげたる姿も
(七)宇治方では
(八)匂宮が行くべき由通知はありたれども
(九)匂宮御出の通知
(一〇)浮舟
(一一)匂と浮舟との中の末始終を案じる也
(一二)匂の志の深さに免じて他人への憚も忘れて接待もする氣になる
(一三)斷つて返す譯にもゆかぬ故
(一四)右近同樣に浮舟が親しくする若き侍女で思慮ある女に事情を打明けて、此女名は侍從
(一五)匂を内へ

(一)かの人の御氣色にも、いとゞ驚かれ給ひければ、あさましうたばかりて、(二)おはしましたり。京には、(三)友待つばかり消え殘りたる雪、山深く入るまゝに、やゝ降り積みたり。常よりもわりなき稀の細道をわけ給ふ程、御供の人も、泣きぬばかり恐ろしう、(四)煩はしきことをさへ思ふ。案内の内記は、式部の少輔をなむ兼けたりける。(五)いづ方も〳〵、然るべき職ながら、(六)いとつき〴〵しく、引きあげなどしたる姿も、をかしかりけり。

(七)彼處には、(八)おはせむとありつれど、かゝる雪には、と打解けたるに、夜更けて右近に(九)消息したり。あさましう哀と、君も(一〇)思へり。右近は(一一)如何になりはて給ふべき御有樣にかと、かつは苦しけれど、(一二)今宵はつゝましさも忘れぬべし。(一三)言ひ歸さむ方もなければ、(一四)同じやうに睦まじく思いたる若き人の、心ざまも奥なからぬを語らひて、右近「いみじくわりなき事。同じ心にもて隱し給へ」と言ひてけり。諸共に(一五)入れ奉る。道の程に濡れ給へる御衣の香の、所狹う匂ふも、もて煩ひぬべけ

と打誦じ給へるも、はかなき事を口ずさみに宣へるも、怪しき哀なる氣色添へる(一)人樣にて、いと物深げなり(二)。事しもこそあれ(三)と、宮は寢たる樣にて御心さわぐ。(四)疎には思はぬなゝめりかし。かたしく袖を我のみ思ひ遣る心地しつるを、同じ心(五)なるも哀なり、侘しくもあるかな、(六)斯ばかりなる本つ人をおきて、我が方にまさる思はいかでか附くべきぞ、と妬う思さる。

翌朝、雪のいと高う積りたるに、文奉り給はむとて(七)、御前に(八)參り給へる御容貌、この頃いみじく盛に淸げなり。(九)かの君も同じ程にて、今二三(一〇)まさる差別にや、少しねび勝れる氣色用意などぞ、殊更にも作りたらむ樣に、あてなる男の本(一一)にしつべく物し給ふ。(一二)帝の御婿にて飽かぬことなしとぞ、世の人もことわりける。才なども、(一三)公々しき方も、後れずぞおはすべき。文講じ果てて、皆人まかゝで給ふ。宮の御文を、(一四)勝れたりと誦じのゝしれど、(一五)何とも聞き入れ給はず、(一六)如何なる心地にて、かゝる事をもし出づらむと、空にのみ思ほし耄れたり。

(一)薰が
(二)「狹席に」の歌をいふ
(三)謡ふべき歌もあらんにあの歌を歌ふとは薰も浮舟を深く思へるならんと
(四)薰が浮舟を、匂の心と
(五)薰が我と
(六)薰程な本夫をさしおきて我を薰より深く思ふ筈はないと
(七)自作の詩を
(八)今上の御前へ匂が
(九)薰
(一〇)年上なる
(一一)手本に
(一二)薰は帝の婿君として十分なりと世人も評判す
(一三)政務の才も
(一四)佳作なりとて人々がやかましく誦すれども
(一五)匂は
(一六)心に何の餘裕ありて詩などがよく作れた事ぞと心も空にて浮舟の事のみ思ひ居れり

(一)今でさへ動もすれば打絶えて來て下さらぬものを、永久に契の續く抔とはとてもあてにならぬ
(二)薫の心
(三)今迄さへ怺へて居しにこゝで泊るでもない、やがて氣遣なしに泊られる樣にして泊るべし
(四)浮舟の態度を薫が思ふ也
(五)浮舟を

八　宮中の詩會

(六)詩會の催ありて
(七)匂も薫も
(八)匂を作者の評する也
(九)つまらぬ女の事に熱中するのが疵ぢや
(一〇)匂の禁中にての宿直所に
(一一)薫が人に面會する爲に
(一二)おぼつかなきに
(一三)「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ」
(一四)「狹席に衣かたしき今宵もや我を待つらん宇治のはし姫」

浮舟　絶間(一)のみ世にはあやふき宇治橋を朽ちせぬものと猶たのめとや

(二)前々よりもいと見捨て難く、しばしも立ち留らまほしく思さるれど、人の物言ひの安からぬに、(三)今更なり、心安き樣にてこそ、など思しなして、暁にかへり給ひぬ。(四)いとようも大人びたりつるかなと、心苦しく(五)思し出づる事、ありしに勝りけり

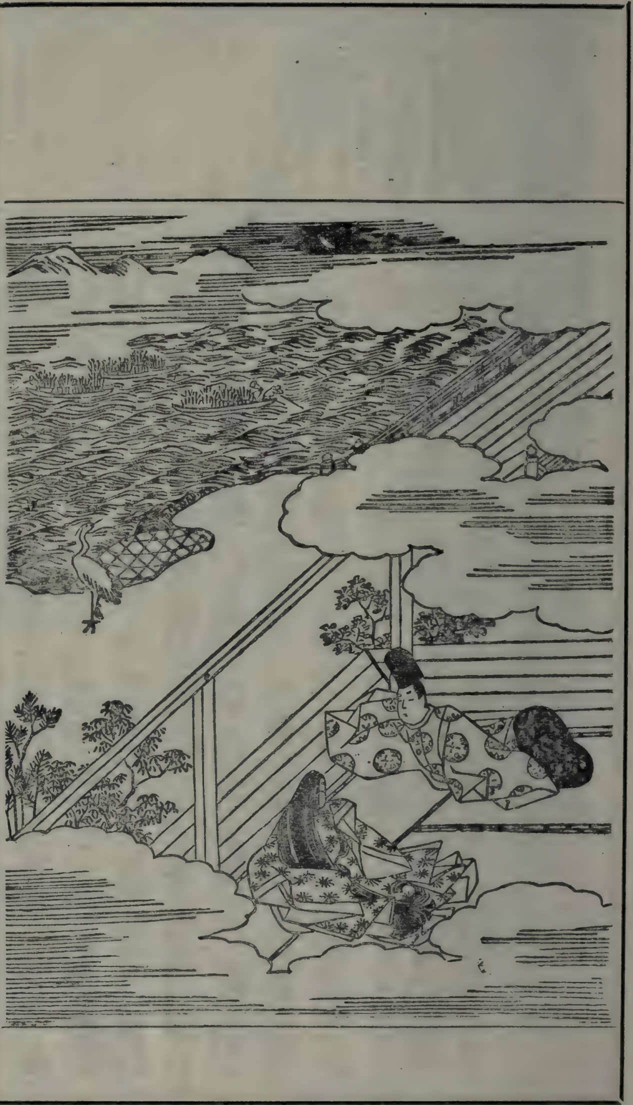
二月の十日のほどに、内裏に文作(六)らせ給ふとて、(七)この宮も大將も參りあひ給へり。折にあひたる物の調どもに、宮の御聲はいとめでたくて、「梅が枝」など謠ひ給ふ。(八)何事も人よりはこよなう勝り給へる御樣にて、(九)すゞろなる事思し入らるゝのみなむ、罪深かりける。雪俄に降り亂れ、風など烈しければ、御あそび疾く歇みぬ。(一〇)この宮の御宿直所に、人々參り給ふ。物まゐりなどして、打休み給へり。大將、(一一)人に物宣はむとて、すこし端近く出で給へるに、雪やう〳〵積り、星の光にお(一二)ぼおぼしきを、「闇(一三)はあやなし」と覺ゆるにほひ有樣にて、「衣(一四)かたしき今宵もや」

道の有樣にもあらぬを」など、朔日頃の夕月夜に、少し端近く臥して眺め出し給へり。男は過ぎにし方の哀をも思し出で、女は今より添ひたる身の憂さを歎き加へて、互に物思はし。山の方は霞隔てて、寒き洲崎に立てる鷺の姿も、處がらはいとをかしう見ゆるに、宇治橋の遙々と見渡さるゝに、柴積み船の所々に行き違ひたるなど、外にては目馴れぬ事どものみ取り集めたる所なれば、(一)見給ふ度ごとに、猶その(二)かみの事の唯今の心地して、いと斯から(三)ぬ人を見かはしたらむにてだに、珍らしき中の哀多く添ひぬべき程なり。まいて戀しき(四)人によそへられたるもこよなからず、やう〳〵物の心知り、都馴れ行く有樣のをかしきも、こよなく(五)見勝りしたる心地し給ふに、女は(六)かき集めたる心の中に、催さるゝ涙、ともすれば出でたつを、慰めかね給ひつゝ、

薰「(七)宇治橋のながきちぎりは朽ちせじをあやぶむかたに心さわぐな

(八)今見給ひてむ」と宣ふ。

(一)薰が
(二)大君在世の時の事
(三)相手が大君に似たる浮舟でなくても
(四)浮舟は大君の代りと見ても餘り不相應でなく
(五)近づきて却て此上なく器量を見あげたる心地
(六)薰と匂に對する樣々の情緒を
(七)其方との中は永久に續くべければ心配して心を痛むるな
(八)やがて分る事ぢや



らるゝ人を哀と思ふも、それはいとあるまじく輕き事ぞかし、この人に憂しと思はれて、(二)忘れ給ひなむ心細さは、いと深うしみぬべければ、思ひ(一)亂れたる氣色を、(三)月頃にこよなう物の心知り、ねびまさりにけり、徒然なる住處のほどに、思ひ殘す事はあらじかし、と見給ふも、心苦しければ、常よりも心留めて語らひ給ふ。

薫「(四)造らする所、やうやう宜しうしなしてけり。一日なむ見しかば、(五)此所よりは氣近き水に、花も見給ひつべし。三條宮も近き程なり。旦暮覺束なき隔も自らあるまじきを、この春の程に、(六)然りぬべくば渡してむ」と思ひ宣ふも、(七)かの人の、長閑なるべき所思ひ設けたりと、昨日も宣へりしを、(八)かゝる事も知らで、然思すらむよ、と哀ながらも、(九)其方に靡くべきにはあらずかしと思ふからに、(一〇)ありし御樣の面影に覺ゆれば、我ながらも、うたて心憂の身やと、思ひつゞけて泣きぬ。

薫「(一一)御心ばへの斯からでおいらかなりしこそ、長閑に嬉しかりしか。人の如何に聞え知らせたる事かある。(一二)少しも疎ならむ志にては、斯うまで參り來べき身の程、

(一)薫に
(二)薫が我を
(三)此幾月の間に浮舟は非常に物が分つて來て、以下薫の心
(四)浮舟を置くべき爲に
(五)宇治川よりはなつかしき樣なる川の邊にて、賀茂川なるべし
(六)都合よくば引取らん
(七)匂が浮舟を置くべき靜な處を用意せりと、以下浮舟の心
(八)薫は
(九)匂に
(一〇)匂の樣子が目先にちらつけば
(一一)從來は浮舟の氣風が其樣に神經質ならで大樣なるを嬉しく思ひ居しに
(一二)路の遠さといひ身分の重々しさといひ深き情がなくては來られる譯ではないに

なくもやつし給はず、烏帽子直衣の姿、いとあらまほしく清げにて、歩み入り給ふより、恥かしげに用意ことなり。女(一)、(二)いかで見え奉らむとすらむと、空さへ恥かしく恐ろしきに、強ちなりし(三)人の御有樣、打思ひ出でらるゝに、又この人に(四)見え奉らむを思ひ遣るなむ、いみじう心憂き。(五)我は年頃見る人をも、皆思ひ變りぬべき心地なむすると宣ひしを、實にその後(六)御心地苦しとて、(七)何處にも〳〵、例の御有樣ならで、御修法など騷ぐなるを聞くに、(八)又いかに聞きて思さむ、と思ふもいと苦し。(九)この人はた、いとけはひ異に心深く、なまめかしき樣して、久し(一〇)かりつる程の怠など宣ふも言多からず、戀し悲しと(一一)おりたゝねど、常にあひ見ぬ戀の苦しさを、樣よき程にうち宣へる、(一二)いみじく言ふには勝りて、いと哀と人の思ひぬべき樣をしめ(一三)給へる人柄なり。艶なる方はさるものにて、行末長く人の(一四)頼みぬべき心ばへなど、こよなく勝り給へり。(一五)思はずなる樣の心ばへなど、漏り聞かせたらむ時、斜ならずいみじくこそあゝべけれ、怪しう、(一六)現心もなく思し入

(一)浮舟
(二)薫にどういふ風にして逢つたものかと
(三)匂の
(四)薫に
(五)匂が浮舟に對して其方に逢ひてからは今迄の女を皆捨てたくなつたと仰せられしが、以下浮舟の心
(六)匂の病氣なりとて
(七)どの女の處へも何時もの樣に通はず
(八)今薫に逢ひたらば其を匂が聞きて何と思ふならんと
(九)薫もまた、以下浮舟の心
(一〇)無沙汰のわび抔
(一一)露骨には言はねど
(一二)言多くいふには勝りて
(一三)持つて居る人柄
(一四)人に頼もしがらるる氣風など非常に匂より勝れり
(一五)浮舟が飛んでもなき不埒な了簡を持つて居る事即ち匂を戀する事が薫に知れたらば、以下浮舟の心
(一六)盲目的に我を愛する匂をいとしく感ずれども

の、流石に日數ふるは、いと惡しきわざに侍る。御風よくつくろはせ給へ」など、まめやかに聞え置きて出で給ひぬ。(一)恥かしげなる人なりかし、(二)我が有樣を如何に思ひくらべけむ、など樣々なる事につけつゝも、たゞ(三)此人を時の間忘れず思し出づ。

(四)彼所には(五)石山もとまりて、いと徒然なり。(六)御文には、いといみじき事を書き集め給ひてつかはす。(七)それだに心安からず、時方と召しゝ大夫の從者の、(八)心も知らぬしてなむ遣りける。右近が古く知れりける人の、(九)殿の御供にて尋ね出でたる、さらがへりて懇がると、友だちには言ひ聞かせたり。萬右近ぞ(一〇)空言しならひける。月もたちぬ。(一一)斯う思し入らるれど、(一二)おはします事はいと理なし。(一三)斯うのみ物を思はば、更に得ながらふまじき身なめりと、心細さを添へて歎き給ふ。

(一四)大將殿、少しのどかになりぬる頃、例の忍びて(一五)おはしたり。寺に佛など拜み給ふ。御誦經せさせ給ふ僧に、物賜ひなどして、夕つ方(一六)此處には忍びたれど、これは理

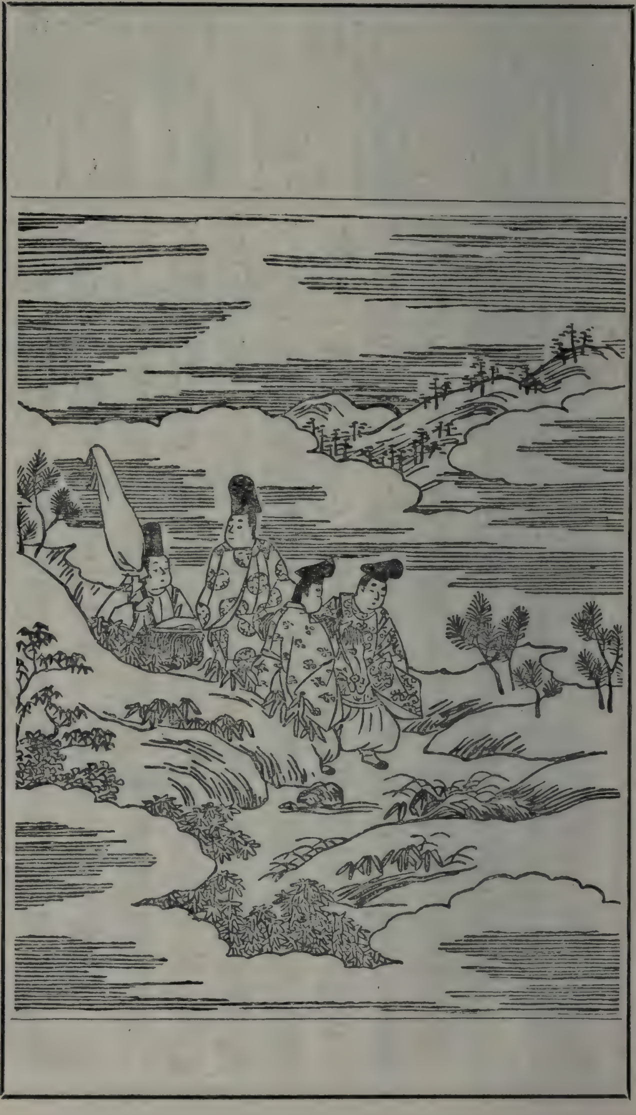
(一)薫の有樣をいふ、以下匂の心
(二)我を薫に比較して浮舟が何と思ひしならん
(三)浮舟
(四)浮舟方
(五)石山詣もやめになりて
(六)匂が
(七)其でも文だけでは安心が出來ず
(八)わざと事情を知らぬ男を擇びて使にやれり
(九)薫の供に來て右近が宇治に居るを見出して前とは打て變つて親切振を見せて使をよこすなりと右近が人前をごまかす
(一〇)浮舟と匂との中につきて萬事を言ひくろめる
(一一)匂が
(一二)宇治へは行かれぬ
(一三)匂の心
㊆薫宇治に行く、浮舟の羞恥、薫の愛情
(一四)薫
(一五)宇治へ
(一六)浮舟方へ忍び來たれど

(一)匂が自分の御殿へ
(二)匂が昨日見えざりしを今上が氣にかけて居らるゝ、文の詞なり
(三)自分が匂に逢はずして
◆薰匂宮を見舞ふ、匂宮の煩悶
(四)薰が匂方へ
(五)明石
(六)薰を
(七)匂が
(八)薰がいくら坊主くさくてもさりとは餘り淸僧ぶみて居る
(九)浮舟を捨て置きて
(一〇)薰が自分の老實を標榜し
(一一)匂が
(一二)浮舟の一件を見顯はしたるなればどの樣にも薰を攻撃してよい筈

き給ひて、猶心解けぬ御氣色にて、彼方に(一)渡り給ひぬ。「昨日のおぼつかなさを、(二)惱ましく思されたゝなる。よろしくは參り給へ。久しうもなりにけるを」など樣に(三)聞え給へれば、騷がれ奉らむも苦しけれど、誠に御心地も違ひたる樣にて、その日は參り給はず。上達部など數多參り給へれど、御簾の內にて暮し給ふ。夕つ方右大將(四)參り給へり。匂「此方にを」とて、打解けながら對面し給へり。薰「惱ましげにおはしますと侍りつれば、宮(五)にもいと覺束なく思召してなむ。如何やうなる御惱にか」と聞え給ふ。見るから(六)に、御心騷(七)のいとゞ勝れば、言少にて、聖(八)だつと言ひながら、こよなかりける山伏心かな、さばかり哀(九)なる人をさて置きて、心のどかに、月日を待ち侘びさすらむよ、と思す。例は、さしもあらぬ事の序にだに、我(一〇)はまめ人ともてなし名のり給ふを妬(一一)がり給ひて、萬に宣ひ破るを、かゝ(一二)る事見顯はいたるを、如何に宣はまし。されど、さやうの戲れ言もかけ給はず、いと苦しげに見え給へば、薰「いと不便なるわざかな。おどろ〳〵しからぬ御心地

(一)其方を大事にし過ぎると惡く言ふ位なり
(二)我を賴よりは
(三)其も因縁と思へば諦めもつくけれど
(四)其方が我にかくし立てをするのが氣にくはぬ、浮舟の事を下に持ちていふ也
(五)縁が深ければこそ浮舟に尋ね逢ひたるなりと
(六)匂の樣子の眞面目なるを見て中君が氣の毒になり
(七)中君の心
(八)匂が中君を娶りたる初は儀式もなくづるづるべつたりなりし故薫にも亦其樣にあるべきかと匂が推量するならん、以下中君の心
(九)薫の如き他人に萬事を任せて其の切なる情を知り遂に一夜を共に明しなどしたるが失錯にて斯く匂に嫌はるゝならんと
(一〇)浮舟
(一一)匂が
(一二)他の事に託して匂が中君に怨を言ふを
(一三)中君は薫の事を眞面目に匂が怨むなりとの思ふ故
(一四)誰か匂に告口をした者があるならんと
(一五)其告口をした者の有無を確めぬ間は匂に顏を合せるのも恥かし

につらしと思ひ聞ゆる事もあらむは、如何思さるべき。まろは御爲には疎なる人かは。(一)人もあり難しなど咎むるまでこそあれ。(二)人にはこよなう思ひ貶し給ふべかんめり。(三)それも然るべきにこそはとことわらるゝを、(四)隔て給ふ御心の深きなむ、いと心憂き」と宣ふにも、(五)宿世の疎ならで、尋ね寄りたるぞかしと思し出づるに、涙ぐまれぬ。(六)まめやかなるをいとほしう、(七)如何やうなる事を聞き給へるならむと驚かるゝに、答へ聞え給はむ事もなし。(八)物はかなき樣にて見そめ給ひしに、何事をも輕らかに推し量り給ふにこそはあらめ、(九)漫なる人をしるべにて、その心よせを思ひ知りはじめなどしたる過ばかりに、覺え劣る身にこそ、と思しつゞくるも萬悲しくて、いとゞらうたげなる御けはひなり。(一〇)かの人見つけたる事は、しばし知らせ奉らじと思せば、(一一)こと樣に思はせて怨み給ふを、(一二)たゞこの大將の御事をまめまめしく宣ふと思すに、(一三)人や空言を確なるやうに聞えたらむ、など思す。(一四)ありやなしやを聞かぬ間は、見え奉らむも恥かし。内裏より大宮の御文あるに、(一五)驚



は、かゝる山踏はし給ひしかば、怪しかりける里の契かなと(一)おぼす。二條院におはしまし著きて、(二)女君のいと心憂かりし御物隱しもつらければ、(三)心安き方に大殿籠りぬるに、寢られ給はず、いと寂しきに、(四)物思ひまされば、心弱く(五)對に渡り給ひぬ。(六)何心もなく、いと淸げにておはす。珍らしくをかしと見給ひし人よりも、又これは猶あり難き樣はし給へりかしと、見給ふものから、いとよく(七)似たるを思ひ出で給ふも、胸ふたがれば、痛く物思したる樣にて、御帳に入りて大殿籠る。女君も率て入り聞え給ひて、匂「心地こそいと惡しけれ。如何ならむとするにかと、心細くなむある。(八)まろは、いみじく哀と見置い奉るとも、御有樣はいととく變りなむかし、(九)人の本意は必ず叶ふなれば」と宣ふ。(一〇)けしからぬ事をも、まめやかにさへ宣ふかな、と思ひて、中君「(一一)かう聞きにくき事の漏り聞えたらば、如何樣に聞えなしたるにかと、人も思ひ寄り給はむこそあさましけれ。心憂き身には、(一二)漫なる事も、いと苦しく」とて背き給へり。宮もまめだち給ひて、匂「(一三)誠

(一)匂が
(二)中君が浮舟の事を隠し居たるも憎らしき故
(三)遠慮のいらぬ自分の室に
(四)浮舟の戀しさが
(五)中君方
(六)中君の樣
(七)浮舟
(八)我がいくら其方を愛して居ても我が死後には其方の心は直に變って薫に靡くならん
(九)人の一念といふものは必ずとほる物なれば、我が終に浮舟に遇ひしことを思ひていふ也
(一〇)中君の心
(一一)其樣なけしからぬ御詞が薫の方へ聞えたらば中君が何を匂に言ったのかと薫に思はれるのが心外なり
(一二)つまらぬ冗談も
(一三)自分が冗談でなく實際に其方をつらく思はば其方は何と思ふ

(一)浮舟を餘所へ連れ行くべし
(二)「飽かざりし袖の中にや入りにけん我魂のなき心地する」
(三)夜明けきらぬ中に歸らんとて
(四)浮舟を
(五)涙さへ留めがたき我なればまして君を留むる事は叶はぬ
(六)「しのゝめのほがらほがらと明けゆけば己がきぬ〴〵なるぞ悲しき」
(七)取つて返しもすべき程
(八)本氣になりて連れ歸らればならぬと思ひて
(九)大内記と時方
(一〇)二人
(一一)匂が宇治通ひにのみ

にも人に知られ給ふまじき樣にて、此處(一)ならぬ所に率て離れ奉らむ」とぞ宣ふ。今日さへかくて籠り居給ふべきならねば、出で給ひなむとするにも、「袖の中に」(二)ぞ留め給へらむかし。明け果て(三)ぬ前にと、人々しはぶき驚かし聞ゆ。妻戸に諸共(四)に率ておはして、え出でやり給はず。

匂 世に知らず惑ふべきかなさきに立つ涙も道をかきくらしつゝ

女も限なく哀と思ひけり。

浮舟 涙をも(五)ほどなきそでにせきかねていかに別をとゞむべき身ぞ

風の音もいと荒ましう、霜ふかき曉に、「己がきぬ〴〵」(六)も冷になりたる心地して、御馬に乗り給ふ程、引き返す(七)樣にあさましけれど、御供の人々、いと戲れに(八)くしと思ひて、たゞ急がしに急がし出づれば、我にもあらで出で給ひぬ。この五位二人(九)なむ、御馬の口には侍ひける。さかしき山越え果ててぞ、おの〳〵(一〇)馬には乘る。汀の氷を踏みならす馬の足音さへ、心細く物悲し。昔も(一一)この道にのみこそ

と辛きと、いみじく申させ給ひけり。東山に(一)聖御覽じにとなむ、人には物し侍りつる」など語りて、時方「女こそ罪深うおはするものにはあれ。(二)漫なる眷屬の人をさへ惑はし給ひて、空言をさへせさせ給ふよ」と言へば、右近「(三)聖の名をさへつけ聞えさせ給ひてければ、いとよし。(四)私の罪もそれにて滅ぼし給ふらむ。(五)誠にいとあやしき御心の、實にいかで習はせ給ひけむ。(六)かねて斯うおはしますべしと承らましにも、いと辱ければ、たばかり聞えさせてましものを、奥なき御ありきにこそは」と、あつかひ聞ゆ。(七)參りて然なむとまねび聞ゆれば、實に如何ならむと思し遣るに、匂「所狹き身こそわびしけれ。輕らかなる程の殿上人などにて、しばしあらばや。如何すべき、(八)斯うつゝむべき人目もえ憚りあふまじくなむ。大將も如何に思はむとすらむ。(九)然るべき程とは言ひながら、怪しきまで、昔より睦まじき中に、(一〇)かゝる心の隔の知られたらむ時、恥かしう、又如何にぞや、(一一)世の譬にいふ事もあれば、(一二)待遠なる我が怠をも知らず、怨みられ給はむをさへなむ思ふ。夢

(一)僧に逢ひに行かれたりと人には言ひおきたり
(二)何でもなきお伴の我我にまで迷惑をかけて嗟までつかせる
(三)僧に逢ひに行つたといふ事に相手の名迄きめたれば
(四)僧に逢はゞ罪滅しになるべしと戯れて言ふ也
(五)どういふ御心持で此様な事を思立ちなされた
(六)前々から仰があつたにしても態々の御出は勿體なき事故何とか私の方で計らふべきであつたに
(七)右近が匂の處へ行きて時方の詞を取次げば
(八)憚るべき人目も憚るべき心持がせぬ
(九)我と薫とは親しかるべき筈とは言ひながら
(一〇)薫の女を盗む様な我が了簡が薫に知れたらば
(一一)世間の譬にもいふ通り我過は見えず人の過はよく見ゆるといふ様な事歟
(一二)今度の事も畢竟薫が氣長すぎて浮舟を待遠がらするより起りたる事なるに、薫が其自分の缺點には氣がつかず浮舟をのみ咎むるならんと其が心配なり



いと斯う思ふこそ忌々しけれ。心に身をも更にえ任せず、萬にたばからむ程(一)、誠に死ぬべくなむ覺ゆる。つらかりし御有樣を(二)、なか〳〵何に尋ね出でけむ」など宣ふ。女、濡らし給へる筆を取りて、

浮舟(三)「心をばなげかざらまし命のみさだめなき世とおもはましかば

とあるを、變らむをば怨めしう思ふべかりけりと見給ふにも、いとらうたし。匂(四)「如何なる人の心がはりを見習ひて」など、ほゝ笑みて(五)、大將のこゝに渡しそめ給ひけむ程を、返すぐ〳〵ゆかしがり給ひて問ひ給ふを、苦しがりて、浮舟「え言はぬ事を斯う宣ふこそ」と、打怨じたる樣も若びたり。(六)自らそれは聞き出でむと思すものから、言はせまほしきぞ理なきや。

夜さり、京へ遣しつる大夫(七)參りて、右近に逢ひたり。時方(八)「后の宮よりも御使參りて、左(九)の大臣もむづかり(一〇)聞えさせ給ひて、人(一一)に知れさせ給はぬ御ありきは、いと輕々しくも無禮げなる事もあるを、すべて內裏(一二)などに聞召さむ事も、身の爲なむい

(一)色々と逢ふべき工夫をめぐらす間に
(二)いつそ此樣に再び逢はねばよかつた
(三)定めなきが命だけであるならば男心の定めなきをかこつ事もなくてよかるべきに
(四)誰の心替りに懲りて其樣な事を言ふぞと
(五)薫
(六)匂の心
(七)時方
(八)明石
(九)夕霧
(一〇)匂の出ありきを立腹して
(一一)夕霧の詞をまねていふ也
(一二)帝に聞かれても夕霧の越度になりて困る

(一)浮舟が
(二)日の暮るゝを嫌がる匂にひかれて
(三)匂が
(四)此處が不足と思はるゝ缺點なく
(五)中君
(六)六君に比べれば非常に劣るべき浮舟を
(七)夢中になつて居る際故
(八)匂が遙に勝れて居ると思ふ
(九)匂が
(一〇)浮舟の
(一一)匂に心が移るかも知れぬ
(一二)逢ひたくても逢はれぬ時は
(一三)行末かけて誓らぬ約束はしても

例はくらし難くのみ、霞める山際を眺め(一)侘び給ふに、暮(二)れ行くは侘しくのみ思し入らるゝ人にひかれ奉りて、いとはかなう暮れぬ。まぎるゝ事なくのどけき春の日に、見(三)れどもくあかず、(四)その事ぞと覺ゆる隈なく、愛敬つきなつかしげなり。さるはかの對の御方には劣りたり。(六)大殿の君の盛に匂ひ給へるあたりにてはこよなかるべき程(五)の人を、(七)類なく思さるゝ程なれば、また知らずをかしとのみ見給ふ。女はまた、大將殿を、いと淸げに、又かゝる人あらむやと見しかど、こまやかに匂ひ、淸らなる事は、(八)こよなくおはしけりと見る。硯ひきよせて、手習(九)などし給ふ。いとをかしげに書きすさび、繪などを見所多く畫き給へれば、(一〇)若き心地には、思ひ(一一)も移りぬべし。匂「心(一二)より外にえ見ざらむ程は、これを見給へよ」とて、いとをかしげなる男女、諸共に添ひ臥したるかたを畫き給ひて、匂「常に斯くてあらばや」など宣ふも、涙おちぬ。

匂(一三)「長き世をたのめてもなほ悲しきはたゞ明日知らぬ命なりけり

(一)匂が
(二)下品な物腰
(三)石山詣は薫にかくしてせんとせし事なれば迎の來たるを薫に知らるゝが恐しき也
(四)以下右近の心
(五)薫が此處に來て居らるゝ由をいひて斷りたらば、薫程の人の居るか居ぬかは京では何處でも分つて居るかも知れぬと思ひて
(六)侍女等にも相談せず
(七)浮舟が月の障になりて
(八)石山へ行かれぬが殘念なりと
(九)迎の人々に
(一〇)何處にも出ぬ

ず。他事は、いとをかしう氣近き様に答へ聞えなどして、靡きたるを、いと限なうらうたしとのみ見給ふ。(一)日高くなる程に、迎の人來たり。車二、馬なる人々の、例の荒らかなる七八人、男ども多く、(二)しな〲しからぬけはひ、囀りつゝ入り來たれば、人々かたはらいたがりつゝ、(三)「彼方に隠れよ」と言はせなどす。右近、(四)如何にせむ、(五)殿なむおはすると言ひたらむに、京にさばかりの人のおはしおはせず、自ら聞き通ひて、かくれなき事もこそあれ、と思ひて、(六)この人々にも殊に言ひあはせず、返事かく。

右近昨夜より(七)穢れさせ給ひて、いと(八)口惜しき事を思し歎くめりしに、今宵夢見さわがしく見えさせ給へれば、今日ばかり愼ませ給へとてなむ、物忌にて侍る。返す〲口惜しく、物の妨のやうに見奉り侍る。

と書きて、(九)人々に物など食はせて遣りつ。尼君にも、「今日は物忌にて、(一〇)渡り給はぬ」と言はせたり。

(一)浮舟を
(二)侍女等も
(三)薫の居らるゝ上は浮舟は出かけられぬならん
(四)物忌と札に書きて簾につけておく也、人に知らせん爲也
(五)母北方の來らんことを恐れて夢見の惡かりしを口實に母北方が來ても逢はせぬ用意をする也
(六)浮舟に
(七)器具などの調はぬを目ざましく匂が思ひて
(八)浮舟が洗はゞ我も洗はん
(九)浮舟は今迄薫を見なれて居たるに
(一〇)匂を見て
(一一)匂の如きを
(一二)浮舟の心
(一三)薫中君母北方など
(一四)此匂の一件が知れたらば
(一五)中君
(一六)匂が浮舟の素姓を知らぬを氣にかけて
(一七)浮舟がたとへ如何なる下賤の身なりとも

事なくて暮し給へ」と、大願をぞ立てける。

石山に今日詣で(一)させむとて、母君の迎ふるなりけり。(二)この人々も皆精進し、清まはりてあるに、侍女「さらば、(三)今日はえ渡らせ給ふまじきなゝめりな。いと口惜しき事」と言ふ。日高くなれば、格子などあげて、右近ぞ近く仕うまつりける。母屋の簾は皆おろし渡して、(四)物忌など書かせて附けたり。母君もや自らおはするとて、(五)夢見騒がしかりつと言ひなすなりけり。(六)御手水など參りたる樣は、例のやうなれど、(七)まかなひ目ざましう思されて、匂「(八)其所に洗はせ給はば」と宣ふ。(九)女いと樣ようく心にくき人を見習ひたるに、時の間も見ざらむは、(一〇)死ぬべしと思し焦るゝ人を、志深しとは、(一一)斯かるを言ふにやあらむと思ひ知らるゝにも、(一二)怪しかりける身かな、(一三)誰も、(一四)物の聞えあらば、如何に思さむと、まづ(一五)かの上の御心を思ひ出で聞ゆれど、(一六)知らぬを、匂「返すぐ\いと心憂し。猶あらむ儘に宣へ。(一七)いみじき下衆といふとも、いよ\/なむ哀なるべき」と、理なう問ひ給へど、その御答は絶えて爲

る事を聞えさする、山賤なども侍らましかば、如何ならまし」と言ふ。内記は實にいと煩はしくもあるかなと思ひ立てり。右近「時方と仰せらるゝは誰にか然なむ」(一)と傳ふ。笑ひて、時方(二)「勘へ給ふ事どもの恐ろしければ、然らずとも逃げてまかりでぬべし。まめやかにはおろかならぬ御氣色を見奉れば、誰も〳〵身を捨ててなむ。よし〳〵(三)宿直人も皆起きぬなり」とて、急ぎ出でぬ。右近、(四)人に知らすまじうは如何はたばかるべきと、わりなう覺ゆ。人々起きぬるに、右近(五)「殿はさる樣ありて、いみじう忍びさせ給ふ氣色見奉れば、(六)道にていみじき事のありけるなゝめり。御衣どもなど、夜さり忍びて持て參るべくなむ、仰せられつる」など言ふ。御達、侍女「あなむくつけや。木幡山はいと恐ろしかゝなる山ぞかし。(七)例の御前もおはせ給はず、やつれておはしましけむよ。あないみじや」と言へば、右近「あなかまあなかま。下衆などの塵ばかりも(八)聞きたらむに、いといみじからむ」と言ひ居たる、心地おそろし。(九)あやにくに(一〇)殿の御使のあらむ時如何にいはむと、「初瀬の觀音、今日

(一)斯く〳〵と匂の仰せあつたり
(二)色々右近に攻撃されるのが恐ろしき故匂の仰なくても歸るべし
(三)匂の浮舟に對する御執心の深きを見居る故一生懸命で此處迄御供申したりと也
(四)之を人に知らせぬ樣に取計らふ譯にはゆかぬ
(五)薰
(六)昨夜御出の途中にて
(七)いつもの通り前拂もさせず
(八)少しでも此樣子を悟られたらば大變なるべし
(九)右近の心
(一〇)薰から使が來たらば

(一)今日母北方より石山へ同行の爲迎の車の來べき筈なるが
(二)匂が一旦御歸りなされて
(三)又ゆつくり御出ありてもよろしかるべし
(四)老巧な言ひ方をする哉と
(五)人に謗られるのも構ふ氣にならぬ
(六)迎が來たらば其返事に
(七)我が此處へ來たる事を人に知られぬ樣にせよ
(八)浮舟の
(九)大内記に
(一〇)其では餘り見苦しかるべしと其方より匂に申上げて下され
(一一)匂のあつかましく動かぬをいふ
(一二)匂が其樣に思はれても御供の人の心得で取扱ふべきであらう
(一三)匂を案内せしぞ
(一四)下々の者が何の思慮もなく匂の昨夜の始末を言ひふらす事もあらば

れたりしも、かう遁れざりける御宿世にこそありけれ、人のしたるわざかは、と思ひ慰めて、右近「(一)今日御迎にと侍りしを、如何にせさせ給はむとする御事にか。斯う遁れ聞えさせ給ふまじかりける御宿世は、いと聞えさせ侍らむ方なし。折こそいとわりなく侍れ。なほ(二)今日は出でおはしまして、御志侍らば、(三)長閑にも」と聞ゆ。(四)およずけても言ふかなと思して、匂「我は月頃物思ひつるに、耄れ果てにければ、(五)人のもどかむも言はむも知られず、ひたぶるに思ひなりにたり。少しも身の事を思ひ憚らむ人の、斯かるありきは思ひ立ちなむや。(六)御返には、今日は物忌など言へかし。(七)人に知らるまじき事をば、誰が爲にも思へかし。他事はかひなし」と宣ひて、(八)この人の、世に知らず哀に思さるゝまゝに、萬の譏も忘れ給ひぬべし。右近出でて、この音なふ(九)人に、右近「斯くなむ宣はするを、(一〇)猶いとかたはならむとを申させ給へ。(一一)あさましう珍らかなる御有樣は、(一二)さ思し召すとも、かゝる御供の人どもの御心にこそあらめ。いかで斯う、心幼うは(一三)率て奉り給ひしぞ。(一四)無禮げな

(一)匂が
(二)中君
(三)今更仕方もなければ
(四)なまじ逢ひて却て
(五)匂が
(六)匂の心
(七)何事も生きて居る間の事、「戀ひ死なん後は何せん生ける身の爲こそ君を見まくほりすれ」の意
(八)匂の家司出雲權守
(九)匂は山寺に忍びて籠り居ると甘く調子を合せて置け
(一〇)右近が
(一一)自分の不注意より起りし昨夜の失錯を思ふに
(一二)以下右近の心
(一三)匂に對して失禮也
(一四)手籠にせんとせし時
(一五)匂が

頃思ひわたる様宣(一)ふに、この宮と知りぬ。いよ〳〵恥かしく、かの上(二)の思さむ事など思ふに、又(三)たけき事なければ、限なう泣く。宮もなか〳〵(四)にて、容易く逢ひ見ざらむ事を思すに、泣き給ふ。

夜はたゞ明けに明く。御供の人來て聲づくる。右近聞きて參れり。(五)出で給はむ心地もなく、飽かずあはれなるに、(六)又おはしまさむ事も難ければ、京には求め騷がるとも、今日ばかりは斯くてあらむ。(七)何事も生ける限の爲こそあれ、たゞ今出でおはしまさむは、誠に死ぬべく思さるれば、この右近を召寄せて、匂「いと心地なしと思はれぬべけれど、今日はえ出づまじうなむある。男どもは、このわたり近からむ所に、よく隱ろへて侍へ、(八)時方は京へものして、(九)山寺に忍びてなむと、つきづきしからむ樣に、答などせよ」と宣ふに、(一〇)いとあさましくあきれて、(一一)心も無かりける夜の過失を思ふに、心地も惑ひぬべきを思ひ鎭めて、(一二)今は萬におほほれ騷ぐとも、かひあらじものから、(一三)なめげなり、(一四)怪しかりし折に、いと深う思し入(一五)

匂「我人に見すなよ。(一)來たりとて、人驚かすな」と、いとらうらうじき御心にて、もとよりほのかに(二)似たる御聲を、(三)唯かの御けはひにまねびて入り給ふ。(四)ゆゝしき事の樣と宣へる、如何なる御姿ならむといとほしくて、(五)我も隱ろへて見奉る。いと細やかになよなよと裝束きて、香の芳しき事も(六)劣らず。(七)近う寄りて、御衣ども脱ぎ、馴れ顏に打臥し給へれば、右近「(八)例の御座にこそ」など言へど、物も宣はず。御衾まゐりて、(九)寢つる人々起して、少し退きて皆寢ぬ。(一〇)御供の人など、例の此處には知らぬならひにて、「(一一)哀なる夜のおはしましざまかな。(一二)かゝる御有樣を御覽じ知らぬよ」など、さかしらがる人もあれど、右近「あなかま給へ。夜聲は、さゝめくしもぞ喧しき」など言ひつゝ寢ぬ。(一三)女君は、(一四)あらぬ人なりけりと思ふに、あさましういみじけれど、聲をだにせさせ給はず、(一五)いとつゝましかりし所にてだに、わりなかりし御心なれば、ひたぶるにあさまし。(一六)初よりあらぬ人と知りたらば、聊いふかひもあるべきを、夢の心地するに、やうやう、(一七)その折のつらかりしこと、年

(一)我が來たりとて人をおこすな
(二)薫に
(三)薫の
(四)恐ろしき事に逢ひたりと薫(實は匂)がいひたるはどの樣な事ぞと
(五)右近も
(六)薫に
(七)匂が浮舟の寢所に
(八)いつもの所へ行つて御やすみあれ
(九)浮舟の近くに寢て居し侍女等を起して
(一〇)薫の來る時いつも供人は尼の方にのみ在りて浮舟方にては構はぬ事になり居る故いよいよ人違なるを悟らざる也
(一一)今夜の薫の御出は有難き御志かな
(一二)浮舟が御分りにならぬのか
(一三)浮舟
(一四)人違ひ
(一五)憚るべき二條院にてさへ無理に手籠にせんとせし程の匂の心なれば
(一六)浮舟が初より人違なることを知り居たらば少しは拒む事も出來しならんに
(一七)二條院にて手籠にせんとせし時の事

(一)朝の内にでも
(二)母の處からの御迎の車は
(三)まとめて
(四)浮舟の後
(五)薫の來れるかと
(六)思も寄らぬ時分に御出なされし事哉
(七)浮舟が物詣に出らるる由を立聞きせるを幸に薫のまねをして間に合せをいふ也
(八)大藏太輔仲信、薫の家司、大内記の舅
(九)薫に
(一〇)右近が匂とは思ひもよらず戸を開く
(一一)飛んでもない此姿のよく見えぬ樣に

(一)つとめての程にも、これは縫ひてむ。急がせ給ふとも、御車(二)は日たけてぞあらむ」と言ひて、しさしたる物どもとり具(三)して、几帳に打ち懸けなどして、轉寢の樣に寄り臥しぬ。君も少し奥に入りて臥す。右近は北面に行きて、暫しありてぞ來たる。君(四)の跡近く臥しぬ。眠たしと思ひければ、いと疾う寢入りぬる氣色を見給ひて、又せむ樣もなければ、忍びやかにこの格子を叩き給ふ。右近聞きつけて、「誰ぞ」と問ふ。聲づくり給へば、あてなる咳嗽と聞き知りて、殿(五)のおはしたるにやと思ひて、起きて出でたり。匂「先これ開けよ」と宣へば、右近「怪しう覺えなき程(六)にも侍るかな。夜はいたう更けて侍らむものを」といふ。匂「物(七)へ渡り給ふべかゝなりと、仲信(八)が言ひつれば、驚かれつるまゝに出で立ちて、いとこそ理なかりつれ。まづ開けよ」と宣ふ聲、いとようまねび(九)似せ給ひて、忍びたれば、思ひも寄らず(一〇)かい放つ。匂「道にて、いとわりなく恐ろしき事のありつれば、怪しき姿になりてなむ。火(一一)暗うなせ」と宣へば、右近「あないみじ」とあわてて惑ひて、火は取りやりつ。



(一)殿の眞實さへかはらずば浮舟の幸福も中君に劣るべからず
(二)他の人とならば比較してもよけれど中君の事は決して口に出すな
(三)浮舟と中君とはどの位な親族關係の中ならん、匂の心
(四)中君は
(五)平凡で調はぬ處ある女であつても、あれ程熱心であつた女を見つけた際の今では其儘引込んで仕舞ふ事の出來ぬ匂の性質なるに
(六)浮舟は物詣に行くのぢやと見える、匂の心
(七)と言うて今夜の中にはどう仕樣もなしと
(八)匂が見つめ居るに

かしら人どものおはせで、御心のどかに、かしこうもてなして、おはしますにこそはあゝめれ」と言ふ。侍女「殿(一)だにまめやかに思ひ聞え給ふ事變らずば、劣り聞え給ふべき事かは」と言ふを、君少し起きあがりて、浮舟「いと聞きにくき事。(二)餘所の人にこそ、劣らじとも如何にとも思はめ、かの御事なかけても言ひそ。漏り聞ゆる樣もあらばかたはらいたからむ」など言ふ。(三)何ばかりの親族にかはあらむ、いとよくも似通ひたるけはひかな、と、思ひ比ぶるに、心恥かしげにあてなる所は、(四)彼はいとこよなし。此はたゞらうたげに細なる所ぞいとをかしき。よろしうなりあはぬ所を見つけたらむにてだに、さばかりゆかしと思ししめたる(五)人をそれと見て、さて止み給ふべき御心ならねば、まして隈もなく見給ふに、いかでかこれを我が物にはなすべきと、わりなく思し惑ひぬ。(六)物へ行くべきなゝめり、親はあるべし、いかで此處ならで又は尋ね逢ふべき、(七)今宵の程にはまた如何すべき、と心も空になり給ひて、猶(八)まもり給へば、右近、「いと眠し。昨夜も漫に起き明してき。

（一）京の母の家に泊らずに此處へ御歸りなされ
（二）京の住居は
（三）此儘何處へも行かずに
（四）氣安く
（五）一體乳母が性急なる故俄に石山詣などの事を勸めたるならん
（六）物に辛抱して
（七）乳母を京へやらずに留めておくのであつた
（八）かの浮舟を手籠にせんとせし時附き居たりし乳母のありしを匂が思ひ出したる也
（九）中君
（一〇）夕霧
（一一）六君よりは中君の方がずつと匂に重んぜられて居る
（一二）浮舟の乳母の如きやかましき附人が無くて

へらむこそよからめ。輕々しう、いかでかは、音なくては這ひ隱れさせ給はむ。御物詣の後は、やがて渡り（一）おはしましねかし。かくて心細き樣なれど、心に任せて、安らかなる御住居にならひて、（二）なか〳〵旅心地すべしや」など言ふ。又あるは、侍女「猶暫し斯く（三）て待ち聞えさせ給はむぞ、のどやかに樣よかるべきや。京へなど迎へ奉らせ給へらむ後、おだしくて親にも見え奉らせ給へかし。このおとゞ（五）のいと急にものし給ひて、（四）俄に斯う聞えなし給ふなゝめりかし。昔も今も物念じ（六）して長閑なる人こそ、幸は見果て給ふなれ」など言ふなり。右近「などて、（七）このままを留め奉らずなりにけむ。老いぬる人は、むづかしき心のあるにこそ」と惡むは、乳母やうの人を譏るなゝめり。實に（八）憎き者ありかしと思し出づるも、夢の心地ぞする。かたはらいたきまで、打解けたる事どもを言ひて、右近「（九）宮の上こそいとめでたき御幸なれ。（一〇）左の大臣の、さばかりめでたき御勢にて、嚴しうののしり給ふなれど、若君生れ給ひて後は、（一一）こよなくぞおはしますなる。（一二）斯かるさ

れ奉る。やをら上りて、(一)格子の隙あるを見つけて寄り給ふに、(二)伊豫簾はさらさらと鳴るもつゝまし。新しう清げに造りたれど、流石に荒々しくて隙ありけるを、誰(三)かは來て見むと打解けて、穴も塞がぬなるべし。几帳の帷子打ち(四)懸けておし遣りたり。火あかう燈して、物縫ふ人三四人居たり。童のをかしげなる、絲をぞよる。これが顏、まづかの(五)火影に見給ひしそれなり。(六)うちつけ目かと、猶疑はしきに、右近と名のりし若き人もあり。(七)君は肘を枕にて、火をながめたるまみ、髮のこぼれかゝりたる額つき、いとあてやかになまめきて、(八)對の御方にいとよう覺えたり。この右近、(九)物折るとて、右近「かくて渡らせ給ひなば、(一〇)とみにしもえ歸り渡らせ給はじを、(一一)殿は、この司召のほど過して、朔日頃には必ず(一二)おはしましなむと、昨日の御使も申しけり。(一三)御文にはいかゞ聞えさせ給へりけむ」と言へど、答もせず、いと物思ひたる氣色なり。右近「(一四)折しも這ひ隱れさせ給へる樣ならむが、見苦しさ」と言へば、向ひたる人、侍女「それは、(一五)斯くなむ渡り給ひぬると、御消息聞えさせ給

(一)匂が寢殿へ
(二)細き竹にて編める簾
(三)こんな處へ誰も來て覗く者もあるまじと油斷して
(四)上へ折返したる也、是より匂が覗き居る中の様子
(五)二條院にて見し童なり
(六)一寸見たせいでさう見えるのかと
(七)浮舟は
(八)中宮によく似て居るとて
(九)縫物に折目をつける
(一〇)浮舟が御出かけなされたらば、母に伴はれて明日石山へ詣づべき約束あ也、此事下に見ゆ
(一一)薫は
(一二)宇治へ
(一三)薫の御手紙には何とありましたか
(一四)丁度薫の來る時分に留守にしては隱れた樣に見えて不都合也
(一五)薫の來る前是々で石山詣に出られたりと薫へ中上げて置くが宜しからん

出で立ち給ふにつけても、古を思し出づ。(一)あやしきまで心を合せつゝ率てありきし人のために、後めたきわざにもあるかなと、(二)思し出づる事も樣々なるに、京の内だに、(三)むげに人知らぬ御ありきは、然いへどもえし給はぬ御身にしも、怪しき樣のやつれ姿して、御馬にておはする心地も物恐ろしく、やゝましけれど、物のゆかしき方は、進みたる御心なれば、山深うなるまゝに、いつしか、如何(四)ならむ、(五)見合する事もなくて歸らむこそ、さう〴〵しく怪しかるべけれ、と思すに、心もさわぎ給ふ。法性寺の程までは御車にて、それよりぞ御馬には奉りける。急ぎて、宵過ぐる程におはしましぬ。内記、案内よく知れるかの(六)殿の人に、問ひ聞きたりければ、宿直人ある方には寄らで、葦垣し籠めたる西面を、やをら少し毀ちて入り(七)ぬ。我(八)も流石に、まだ見ぬ御住居なれば、たど〳〵しけれど、人繁うなどしあらねば、寢殿の南面にぞ、火ほの暗う見えて、そよ〳〵と音する。參(九)りて、内記「まだ人は起きて侍るべし。たゞ是より(一〇)おはしまさむ」と案内して、入

(一)昔宇治へ行きし時分の事を
(二)以下匂の心、我と一つ心になりて我を中君に手引してくれた薫に對して
(三)丸で人に知られずに歩くことは出來ぬ御身分なるに
(四)以下匂の心
(五)折角其女を見て其が彼の女でなくてすご〳〵歸つたらば
(六)薫の家來
(七)大内記が一人入りたる也
(八)大内記も
(九)匂の待ち居る處へ
(一〇)寢殿から

(一)我が曾て一寸逢ひし事ある女が
(二)用心は
(三)御供の人だけには知るべき譯なり
(四)むやみに出あるきて輕率なりといふ批難を蒙るのが
(五)言ひ出したれば
(六)五位の位を賜はりし
(七)今明日の間は薫が行く害はなしと

らむ人は、(一)早うほのかに見し人の、行方も知らずなりにしが、大將に尋ね取られにけりと、聞き合する事こそあれ。確には知るべき樣も無きを、唯物より覗きなどして、それかあらぬかと見定めむ、となむ思ふ。聊人に知らるまじき構(二)は、如何すべき」と宣へば　あな煩はしと思へど、内記「おはしまさむ事は、いと荒き山越になむ侍れど、殊に程遠くは侍はずなむ。夕つ方出でさせおはしまして、亥子の時にはおはしまし著きなむ。さて曉にこそは歸らせ給はめ。人の知り侍らむ事は　(三)唯御供にさぶらひ侍らむこそは。それも、深き心はいかでか知り侍らむ」と申す。匂「然かし。昔も一度二度通ひし路なり。(四)輕々しきもどきおひぬべきが、物の聞のつゝましきなり」とて、返すぐ\あるまじき事に、我が御心にも思せど、斯うまで(五)打出で給へつれば、え思ひ留め給はず。御供に、昔も彼所の案内知れりし者二三人、この内記、さては御乳母子の藏人より(六)かうぶり得たる若き人、睦まじき限を擇り給ひて、(七)大將今日明日よもおはせじなど、内記に能く案内聞き給ひて、

(一)人よりは眞面目なりとて利口ぶる薫が却て人の思ひもつかぬ巧者な人に知れぬやり方をして居る
(二)大内記
(三)薫方
(四)薫の
(五)匂の
(六)此薫の隠し女の果して浮舟なる事はどうして突留めやうぞ
(七)薫の
(八)中君とはどうして懇意な中ならん
(九)中君がぐるになりて
㊄ 大内記匂宮を宇治に導く、隙見、匂宮薫に假裝して浮舟に逢ふ
(一〇)匂が
(一一)任官式
(一二)匂は
(一三)匂の御氣に入らんと

心を留めたるとなむ聞きしは、斯かる事こそはありけれ。いづら、人よりはまめなりとさかしがる人しも、ことに人の思ひ到るまじき隈ある構よ」(一)と宣ひて、いとをかしと思したり。(二)この人は、(三)かの殿にいと睦まじく仕う奉る家司の聟になむありければ、(四)隠し給ふ事も聞くなるべし。(五)御心のうちには、如何にして、(六)この人を、見し人かとも見定めむ。(七)かの君のさばかりにて居ゐたるは、なべてのよろしき人にはあらじ。(八)この邊には、いかで疎からぬにかあらむ。(九)心をかはして隠し給へりけるも、いと妬うおぼゆ。

唯その事を、この頃は(一〇)思ししみたり。賭弓、内宴など過して心のどかなるに、(一一)司召など言ひて人の心盡すめる方は何とも思さねば、宇治へ忍びておはしまさむ事をのみ思しめぐらす。この内記は、(一二)望む事ありて、晝夜いかで(一三)御心に入らむと思ふ頃、例よりは懐しう召しつかひて、匂「いと難き事なりとも、我が言はむ事はたばかりてむや」など宣ふ。畏まりて侍ふ。匂「いと便なき事なれど、かの宇治に住む

頃よりは、ありしよりも(一)屢物し給ふなり。下の人々の忍びて申しゝは、女をなむ隠し居ゑさせ給へる、(二)けしうはあらず思す人なるべし、あのわたりに領じ(三)給ふ所々の人、皆仰(四)にて參り仕う奉る、宿直にさしあてなどしつゝ、京よりもいと忍びて、さるべき事など(五)はせさせ給ふ、如何なる幸人の、流石に心細くて居給へるならむ、となむ、唯この十二月の頃ほひ申すと聞き給へし」と聞ゆ。いと嬉しくも聞きつるかなと思ほして、匂「確(六)にその人とは言はずや。彼所にもとよりある尼をぞ訪ひ(七)給ふと聞きし」内記「尼は廊になむ住み侍るなる。(八)この人は今建てられたるになむ、きたなげなき女房なども數多して、口惜しからぬけはひにて居て侍る」と聞ゆ。匂「をかしき事かな。(九)何心ありて、如何なる人をかは、さて居ゑ給ひつらむ。猶いと氣色ありて、なべての人に似ぬ御心(一〇)なりや。左の(一一)大臣など、この人(一二)のあまり道心に進みて、山寺に夜さへともすれば泊り給ふなる輕々しさ、ともど(一三)き給ふと聞きしを、實に、などかさしも佛の道には忍び歩くらむ、猶かの故郷に

(一)前々よりも
(二)薫の憎からぬ人なるべし
(三)薫の領地の者ども
(四)薫の命によりて宇治の山荘へ奉公する
(五)用事は辨じてやる
(六)誰それとは
(七)薫が
(八)浮舟は
(九)薫がどういふ積で
(一〇)薫の
(一一)夕霧
(一二)薫の、以下夕霧の詞をまねていふ也
(一三)我も夕霧の言を聞きて、成程なぜあの様に佛いぢりにかゝつて居るのか、矢張戀人の故郷が戀しいのであらうと思ひ居しが

(一)出過ぎ者なり
(二)人は生長の後が思はるゝ樣に小きうちは大樣なのがよい
(三)叱るな
(四)此童の素姓を說明する也

㊃ 匂宮大內記に浮舟の隱れ家を聞く

(五)匂が
(六)匂の心
(七)薫
(八)いくら戀人の形見でもあの樣な處に泊るとは餘りなる事と思ひしに扨はあの女を隱し置けるならんと
(九)薫方に
(一〇)詩集
(一一)行つて見たいものぢや
(一二)念佛堂
(一三)作り方を指圖せられたりと

し過して(一)侍り。おひさき(二)見えて、人はおほどかなるこそをかしけれ」など憎めば、中君「あなかま。幼き人な腹だてそ(三)」と宣ふ。去年の冬(四)人の參らせたる童の、顔はいと美しかりければ、宮もいとらうたくせさせ給ふなりけり。

我が御方におはしまして、怪しう(六)もあるかな、宇治に大將(七)の通ひ給ふことは、年頃(五)絶えずと聞く中にも、忍びて夜泊り給ふ時もありと人の言ひしを、いと餘り(八)なる人の形見とて、さるまじき所に、旅寢し給ふらむ事と思ひつるは、かやうの人隱し置き給へるなるべしと、思し得る事もありて、御文のことにつけて遣ひ給ふ大內記なる人の、かの殿(九)に親しき便あるを思し出でて、御前に召す。參れり。韻塞すべきに、集(一〇)ども選り出でて、此方なる厨子に積むべき事など宣はせて、右大將の宇治へいますること、猶絶え果てずや。寺をこそ、いとかしこく造りたゝなれ。いかでか見るべき(一一)」と宣へば、內記「いと畏く嚴しく造られて、不斷の三昧(一二)堂など、いと尊くおきてられ(一三)たりとなむ聞き給ふる。通ひ給ふことは、去年の秋

など、細々と、言忌もえしあへず、物歎かしげなる樣の、頑しげなるも、打返し打返し、あやしと御覽じて、匂「今は宣へかし。誰がぞ」と宣へば、中君「昔かの山里(一)にありける人の女の、さる樣ありて、この頃彼所にあるとなむ聞き侍りし」と聞え給へば、(二)おしなべて仕う奉るとは見えぬ文がきをと、心得給ふに、かの煩(三)はしき事とあるに思しあはせつ。卯槌をかしう、徒然なりける人のしわざと見えたり。(四)またぶりに、山橘つくりてつらぬき添へたる枝に、

浮舟「(五)まだ古りぬものにはあれど君がため深きこゝろにまつと知らなむ

と、殊なる事なきを、(六)かの思ひわたる人のにやと思し寄りぬるに、御目とまりて、匂「返事し給へ。情なし。隱い給ふべき文にもあらざめるを、など御氣色のあしき。(七)まかりなむよ」とて立ち給ひぬ。女君、少將などして、中君「いとほしくもありつるかな。幼き人の取りつらむを、人はいかでか見ざりつるぞ」など、忍びて宣ふ。少將「(八)見給へましかば、いかでかは參らせまし。すべて(九)この子は、心地なうさ

(一)宇治に
(二)一通りの奉公人の文とは見えぬ文體なるにと思ひて
(三)右近の文の中にいやな事がある故中君方へ行くことを浮舟が厭ふとあるに照し合せて浮舟なる事を悟れり
(四)二股になりたる枝
(五)此木はまだ古くならぬ若木なれど若君の爲に千年を待つ木なりと知り給へ、まだふりぬ―末古りぬ、またぶり
(六)我が日頃慕ひ居る浮舟の歌かと
(七)自分は引下るべし
(八)私が見附けたら御前へ出す筈はなし
(九)文を取次ぎたる童



給はむとする」と宣へば、中君「見苦しう、何かは、その女どちの中に書き通はしたらむ打解け文をば、御覽ぜむ」と宣ふが、さわがぬ氣色なれば、匂「さば見むよ。女の文がきは、如何ある」とて開け給へれば、いと若やかなる手にて、

浮舟「覺束なくて年も暮れ侍りにける。山里のいぶせさこそ、峰の霞も絶間なくて。(一)」とて、端に、「これ若君の御前に、あやしう侍るめれど」と書きたり。殊にらうらうじき節も見えねど覺なきを御目たてて、この立文を見給へば、實に女の手にて、(二)(三)

右近「年改りて何事かさぶらふ。御私にも、いかに賴もしき御悦多く侍らむ。(四)こゝには、いとめでたき御住居の心深きを、猶ふさはしからず見奉る。(五)斯くてのみつくづくと眺めさせ給ふよりは、時々は渡り參らせ給ひて、(六)御心も慰めさせ給へと思ひ侍るに、(七)つゝましく恐ろしきものに思し懲りてなむ、物憂き事に歎かせ給ふめる。(八)若君の御前にとて、卯槌參らせ給ふ。(九)おほきおまへの御覽ぜざらむ程に、御覽ぜさせ給へとて。(一〇)

(一)御疎遠にて
(二)如何はしき品なれど進上する
(三)目をつけて
(四)中君御一身にとりても
(五)浮舟の宇治に居らるるは結構なれど猶不相應に思はる
(六)中君方へ浮舟が
(七)浮舟は
(八)中君方へ行く事を
(九)正月初卯の日の祝物、木にて造りたる小さき槌、邪氣を避くる效ありといふ
(一〇)匂宮の御覽なされぬ時に

(一)中君が

㊂ 匂宮中君の處にて浮舟の文を見る

(二)匂が中君方へ

(三)無分別に

(四)中君

(五)使が

(六)宇治からの文なれば例の如く中君に御目にかけるが宜しからんとて

(七)銅線にて造りて

(八)薫が何くはぬ顏でよこしたのかも知れぬ、宇治からといふもそれらしく思はれる

(九)薫のであつたら始末がわるいと

(一〇)極り惡ければ

人に勝りてもてなし給へば、ありしよりは(一)少し物思ひ靜まりて過し給ふ。

正月の一日過ぎたる頃渡り(二)給ひて、若君の御年まさり給へるを、弄びうつくしみ給ふ晝つ方、ちひさき童、綠の薄樣なるつゝみ文の大きやかなるに、小き鬚籠を小松につけたる、又すくぐしき立文とり添へて、奥なく(三)走り參る。女君(四)に奉れば、宮、匂「それは何處よりぞ」と宣へば、童「宇治より大輔のおとゞにとて、(五)もてわづらひ侍りつるを、(六)例の御前にてぞ御覽ぜむとて、取り侍りぬる」と言ふも、いとあわたゞしき氣色にて、童「この籠は、(七)金を造りて、色どりたる籠なりけり。松もいとよう似て造りたる枝ぞよ」とて、笑みて言ひつゞくれば、宮も笑ひ給ひて、匂「いで我ももてはやしてむ」と召すを、女君、いとかたはらいたく思して、中君「文は大輔がり遣れ」と宣ふ御顏の赤みたれば、宮、(八)大將のさりげなくしなしたる文にや、宇治の名のりもつきぐし、と思し寄りて、この文を取り給ひつ。流石に(九)それならむ時にと思すに、いと(一〇)まばゆければ、匂「開けて見むよ。怨じやし

やう思し知り、人の有樣を見聞き給ふまゝに、(一)これこそは誠に、昔を忘れぬ心ながさの名殘さへ、淺からぬ例なゝめれと、哀も少からず。(二)ねびまさり給ふまゝに、人柄も世の覺も、樣ことにものし給へば、(三)宮の御心のあまり頼もしげなき時々は、(四)思はずなりける宿世かな、(五)故姫君の思しおきてし儘にもあらで、(六)かく物思ひ憚るべき方にしもかゝり初めけむよと、思す折々多くなむ。されど(七)對面し給ふ事は難し。(八)年月もあまり昔を隔て行き、內々の御心を深う知らぬ人は、(九)なほ〳〵しきたゞ人こそ、さばかりのゆかり尋ねたる睦をも忘れぬに、つき〴〵しけれ、なぞ斯う限ある程に、例に違ひたる有樣ぞ、など言ひ思はむもつゝましければ、宮の絶えず(一〇)おほし疑ひたるも、いよ〳〵苦しう(一一)思し憚り給ひつゝ、自ら疏き樣になり行くを、さりとても絶えず、(一二)なほ同じ心の變り給はぬなりけり。宮もあだなる御本性こそ、(一三)見ま憂き節も雜れ、若君のいと美しうおよずけ給ふまゝに、(一四)外にはかゝる人も出で來まじきにやと、(一五)やむごとなきものに思して、打解けなつかしき方には、

(一)薫の仕方こそは、以下中君の心
(二)薫が
(三)匂
(四)薫に背きて匂に嫁ぎしを悔む也
(五)大君
(六)なぜ斯く自分に心配をかける匂に靡きしならんと
(七)薫に中君が
(八)以下中君の心
(九)身分卑しき者こそ此位な昔の緣を忘れず睦まじくもすれど、立派な方方がどうしてあの樣な並はづれたる附合をするならん杯と
(一〇)中君と薫との中を
(一一)中君が
(一二)薫は
(一三)中君にとりて
(一四)中君以外の女には
(一五)中君を

(一)かの人は、たとしへなくのどかに思し掟てゝ、(二)待遠なりと思ふらむと、心苦しうのみ思ひやり給ひながら、所狹き身の程を、さるべき序なくて、かやすく通ひ給ふべき道ならねば、(三)神の諫むるよりも理なし。されど、(四)今いとよくもてなさむとす、(五)山里の慰と、思ひおきてし心あるを、少し(六)日數も經ぬべき事ども作り出でて、のどやかに行きても見む、さて、しばしは(七)人の知るまじき住所して、やうやうさる方に、(八)かの心をものどめ置き、我が爲にも人のもどきあるまじく、(九)斜にてこそよからめ、俄に、何人ぞ、(一〇)何時よりなど、聞き咎められむも物騷がしく、初の心に違ふべし、(一一)又宮の御方の聞き思さむ事も、(一二)もとの所をきはゞしう率て離れ、昔をわすれ顔ならむも、いと本意なし、など思ししづむるも、例のいとの(一三)どけさ過ぎたる御心がらなるべし。(一四)わたすべき所思し設けて、忍びてぞ造らせ給ひける。(一五)少し暇なきやうにもなり給ひにたれど、(一六)宮の御方には、猶たゆみなく心寄せ仕う奉り給ふこと同じ様なり。見奉る人も怪しきまで思へれど、(一七)世の中をやう

㊀ 氣長なる薫、猶中君に對する情を忘れず
(一)薫
(二)宇治に居る浮舟が
(三)「戀しくば來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに」
(四)やがて甘くやる積、以下薫の心
(五)浮舟を彼處に置くは元々宇治へ行きし時の慰めにと思ひてせし事故
(六)宇治にて暇取るべき用事を拵へて
(七)宇治に浮舟をおきて
(八)浮舟の心をも和らげ
(九)よい加減に目立たぬ様にするが一番
(一〇)何時から浮舟に關係しはじめたるぞ抔と
(一一)中君
(一二)際立ちて宇治から京へ引取り
(一三)氣長過ぎたる
(一四)浮舟を引取るべき
(一五)薫大納言になりたれば也
(一六)中君
(一七)中君が

憎し給ひけり。匂「思はずに心憂し」と、（一）はづかしめ怨み聞え給ふ折々は、いと苦しくて、（二）ありの儘にや聞えてましと思せど、（三）やむごとなき樣にはもてなし給はざなれど、淺はかならぬ方に、心留めて（四）人の隱し置き給へる人を、物言ひさがなく聞え出でたらむにも、さて聞き過し給ふべき御心樣にもあらざめり、（七）侍ふ人の中にも、（五）はかなう物をも宣ひ觸れむ（六）と思し立ちぬる限は、さるまじき里までも尋ねさせ給ふ、御樣よからぬ御本性なるに、さばかり月日を經て、（八）思し染むめるあ（九）たりは、まして必ず見苦しき事取り出で給ひてむ、外より傳へ聞き給はむは如何はせむ、（一〇）何方ざまにもいとほしくこそはありとも、（一一）防ぐべき人の御心樣ならねば、（一二）餘所の人よりは聞きにくゝなどばかりぞ覺ゆべき、とてもかくても、（一三）我がおこたりにてはもて損はじ、と思ひかへし給ひつゝ、いとほしながらもえ聞え出で給（一四）はず、（一五）こと樣につきぐ\しくはえ言ひなし給はねば、（一六）おしこめて物怨じしたる、世の常の人になりてぞおはしける。

（一）匂が中君を
（二）舟浮の身分を匂に明さんかと中君が思へど
（三）薰が浮舟を重々しく取扱ひもせねど、以下中君の心
（四）薰の
（五）匂に語るも
（六）聞きばなしにして手を出さずに居る匂の性質ならず
（七）匂方の侍女に對しても
（八）どこ迄も附け廻して本望を遂げる
（九）浮舟をいふ
（一〇）薰の爲にも浮舟の爲にも
（一一）其が爲に思ひ止まる匂の性質ならねば
（一二）浮舟が匂の手に入る樣にならば我は姉妹だけに一層見つともなき感がするなるべし
（一三）自分の過から事を惹起す樣の事はせじ
（一四）浮舟の事を明さず
（一五）甘くつくり事をしてごまかす事は出來ぬ故
（一六）何も言はずに嫉妬する

# 浮舟

## 梗概

㊀ 匂宮切に浮舟を思ふ。中君、浮舟の素姓を匂宮に隠す。㊁ 氣長なる薫、猶中君に對する情を忘れず。㊂ 匂宮、中君の處にて浮舟の文を見る。㊃ 匂宮、大内記に浮舟の隠れ家を聞く。㊄ 大内記、匂宮を宇治に導く。隙見。匂宮、薫に假裝して浮舟に逢ふ。㊅ 薫、匂宮を見舞ふ。匂宮の煩悶。㊆ 薫宇治に行く。浮舟の羞恥。薫の愛情。㊇ 宮中の詩會。㊈ 匂宮雪中宇治に行く。夜浮舟と共に宇治川を渡りて、大内記の所縁の家に宿す。㊉ 匂宮、薫、各浮舟に文を贈る。浮舟の煩悶。⑪ 薫の浮舟を引取るべき準備。匂宮の薫を出し抜きて浮舟を引取るべき準備。浮舟自殺を企つ。⑫ 薫、浮舟と匂宮との關係を悟る。文を浮舟に贈りて祕密を知れる由をほのめかす。⑬ 祕密を知れる浮舟の侍女等の心配。薫武士を遣して宇治の山莊を警衛せしむ。浮舟自殺を期して祕密の文を燒く。⑭ 匂宮又忍びて宇治に赴く。警固の嚴しきに妨げられて浮舟に逢はず。⑮ 浮舟自殺の念愈〻切なり。匂宮の文。母の文。

㊀ 匂宮切に浮舟を思ふ、中君浮舟の素姓を匂宮に隠す

(一)匂が浮舟に逢ひし事を忘れず
(二)手重き身分の人ではなき様子なりしが、以下匂の心
(三)中君
(四)つまらぬ事の爲に
(五)女に關係した事で中君を匂が惱らしがる

(一)宮猶かの仄なりし夕を思し忘るゝ世なし。(二)事々しき程にはあるまじげなりしを、人柄のまめやかにをかしうもありしかなと、あだなる御心には、口惜しうて止みにし事と、妬う思さるゝ儘に、(三)女君をも(四)斯うはかなき事ゆゑ、強に(五)かゝる筋の物

ひくあたりに習ひて、いとめでたく、思ふやうなりと、侍從も聞き居たりけり。さるは扇(一)の色も心おきつべき閨の古をば知らねば、ひとへにめで聞ゆるぞ、後れ(二)たるなゝめりかし。事(三)こそあれ、怪しくも言ひつるかな、と思す。尼君の方より菓物まゐれり。箱の蓋に、紅葉蔦など折り敷きて、故なからず取りまぜて、敷きたる紙に、ふつゝかに書きたる物、隈なき月にふと見ゆれば、(四)(五)目とどめ給ふほどに、菓物いそぎにぞ見えける。

辨　やどり(六)木は色かはりぬる秋なれどむかしおぼえて澄める月かな

と古めかしく書きたるは、恥かしくも哀にも思されて、

薫　里(七)の名もむかしながらに見し人のおもがはりせるねやの月かげ

わざと返事とはなくて宣ふを、侍從なむ傳へけるとぞ。

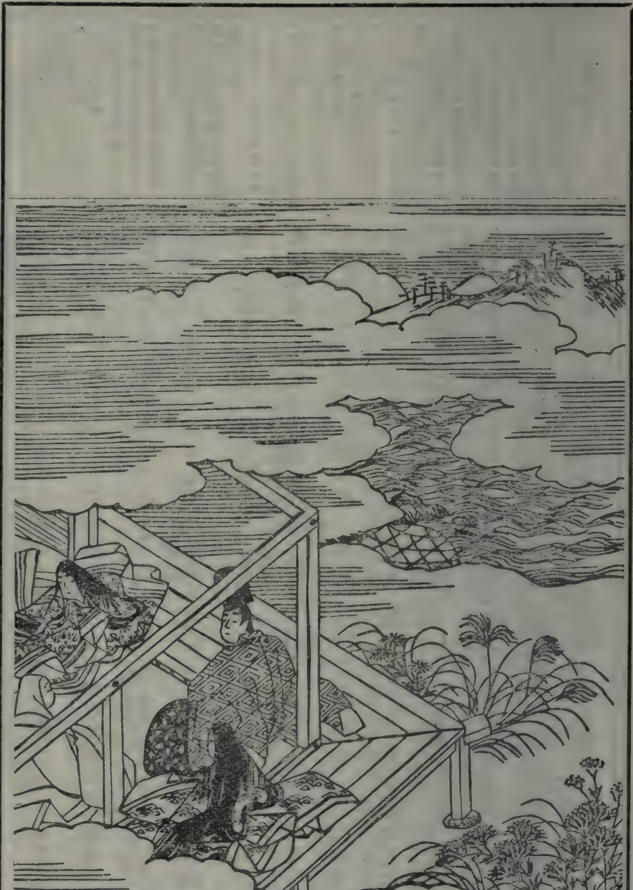
(一)班女が漢の成帝に寵を失ひて我身を秋の扇に比し詩を作りて怨みを述べたる故事を侍從は知らぬ故
(二)心の足らぬといふは此事なるべし
(三)謡ふべき事もあるべきに變な事を謡つたものかなと薫が思ふ
(四)薫が
(五)書きたるものをよく見んとすれば自ら餘所目には菓物に氣を取られて居る樣に見ゆると也
(六)大君と浮舟と人はかはれども相手は同じ薫故昔が思はるゝと也、前の薫の「宿り木と思ひ出でずば」の歌をうけてよめり
(七)宇治といふ里の名も月も昔にかはらねど、人のみは昔の大君は今の浮舟と替りたるよ

(一)薫が
(二)八宮も大君も在世の時分
(三)浮舟が
(四)我が其方に對する愛情が濃かなるべし
(五)八宮
(六)薫の如き他人でさへ
(七)其方はなぜ其樣な田舍にのみ居た事ぞ
(八)浮舟が
(九)大君が
(一〇)琴などは不調法ならぬ樣に浮舟を仕込まんと薫が思ひて
(一一)琴は少しは習ひし事ありや
(一二)吾妻琴也、東國育ち故東琴は習ひしならんと也
(一三)和歌さへよみつけぬ私、故況や東琴などは出來ぬ、東琴を大和琴ともいふ故大和歌さへ出來ぬといふ也
(一四)浮舟をもきても、薫の心
(一五)薫の愛が淺からぬなるべし
(一六)朗詠「班女閨中秋扇色、楚王臺上夜琴聲」
(一七)武事をのみ事とせる東國にそだちたる身には

て、いとなつかしくまさぐりつゝ眺め給ふに、月さし出でぬ。宮の御琴の音のおどろおどろしくはあらで、いとをかしく哀に彈き給ひしはやと思し出でて、薫(一)「昔誰(二)も誰もおはせし世に、こゝに(三)生ひ出で給へらましかば、今少し(四)哀は勝りなまし。親王(五)の御有樣は、餘所の人(六)だに哀に戀しくこそ思ひ出でられ給へ。などて、さる(七)所には年頃經給ひしぞ」と宣へば、(八)いと恥かしくて、白き扇をまさぐりつゝ、そひふしたるかたはらめ、いとくまなう白うて、なまめいたる額髮の隙など、いとよく(九)思ひ出でられて哀なり。(一〇)まいてかやうの事もつきなからず教へなさばや、と思して、薫(一一)「これは少しほのめい給ひたりや。あはれ(一二)我がつまといふ琴は、さりとも手ならし給ひけむ」など問ひ給ふ。浮舟「その(一三)大和詞だに、つきなく習ひにたれば、ましてこれは」といふ。いとかたはに心後れたりとは見えず。こゝに置きて(一四)もえ思ふまゝにも來ざらむ事を思すが、今より苦しきは、(一五)斜には思さぬなるべし。琴は押しやりて、薫(一六)「楚王の臺の上の夜の琴の聲」と、誦じ給へるも、(一七)かの弓をのみ

かしかりしのみ思ひ(一)出でられて。髪(二)のすそのをかしげさなどは、細々とあてなり。宮(三)の御髪のいみじくめでたきにも劣るまじかりけりと見給ふ。(四)かつは(五)この人を如何にもてなして有らせむとすらむ、只今、(六)物々しげにてかの宮に迎へすゑむも、音聞便なかるべし、さりとて是彼(七)ある列にて、おほぞうに交らはせむは本意なからむ、しばし此處に隱してあらむと思ふも、見ずばさう〴〵しかるべく、哀におぼえ給へば、疎ならず語らひ暮し給ふ。(八)故宮の御事も宣ひ出でて、昔物語をかしう細やかに言ひ戯れ給へど、唯(九)いとつゝましげにて、ひたみち(一〇)に恥ぢたるを、さ(一一)うざうしうおぼす。(一二)あやまりても、斯うも心もとなきはいとよし、敎へつゝも見てむ、田舍びたるざれ(一三)心もてつけて、しな〴〵しから(一四)ず、はやりかならましかばしも、形代不用ならましと思ひ直し給ふ。此處にありける琴、箏の琴召し出でて、(一五)かゝる事はたましてえ爲じかしと、口惜しければ、ひとり(一六)調べて、宮(一七)亡せ給ひて後、此處にて斯かる物にいと久しう手觸れざりつかし、と珍らしく我ながら覺え

(一)薫が
(二)浮舟の
(三)女二宮の
(四)薫が
(五)さし當り浮舟をどう所置したものであらう、以下薫の心
(六)一廉の妻の資格で三條の邸に呼び取るも外聞如何なり
(七)幾人も居る侍女のなみにして
(八)八宮
(九)浮舟の様
(一〇)むやみに
(一一)薫が
(一二)惡いにしても此の如き種類の不足は仔細なし、仕込みさへすればよい譯也、以下薫の心
(一三)お轉婆で
(一四)品惡く輕率では折角の身代も役に立たぬと
(一五)浮舟は音樂などは勿論不得手ならんと
(一六)薫が
(一七)薫の心



(一)此處は假住居故特に遠慮する必要もないのに、薫の心
(二)食事
(三)新築の寢殿の樣子
(四)山川の景色見榮ある樣に造りたるを
(五)浮舟が
(六)薫が我をどうするのかと
(七)調はぬ、浮舟の事をかくして寺の見分に託したる也
(八)宇治へ來て
(九)女二宮
(一〇)薫が
(一一)浮舟の方へ
(一二)浮舟が隱れる譯にも行かずして
(一三)浮舟の
(一四)乳母抔が精々注意して着襲ねさせたれど
(一五)大君の

するを、(一)わざと思ふべき住居にもあらぬを、用意こそ餘なれ、と見給ふ。御庄より例の人々、騷がしきまで參り集る。女の御臺(二)は、尼君の方より參る。道は繁かりつれど、(三)この有樣はいと晴々し。河の氣色も山の色も、(四)もてはやしたる造り樣を見出して、(五)日頃のいぶせさ慰みぬる心地すれど、(六)如何にもてない給はむとするにかと、浮きて怪しう覺ゆ。殿は京に御文書き給ふ。

薫(七)まだなりあはぬ佛の御飾など見給へおきて、今日よろしき日なりければ、急ぎ(八)物し侍りて、みだり心地の惱ましきに、物忌なりけるを思う給へ出でてなむ、今日明日こゝにて愼み侍るべき。

など、母宮にも(九)姫宮にも聞え給ふ。

打解けたる(一〇)御有樣今少しをかしくて、(一一)入りおはしたるも恥かしけれど、(一二)もて隱すべくもあらで居給へり。(一三)女の御裝束など、(一四)色々によくと思ひてし襲ねたれど、少し田舍びたる事もうち雜りてぞ、(一五)昔のいとなえばみたりし御姿の、あてになまめ

地す。忍びがたげなる(一)鼻すゝりを聞き給ひて、(二)我も忍びやかに打ちかみ給ひて、(三)流石に如何思ふらむといとほしければ、薫「あまたの年頃、この道を行きかふ度重なるを思ふに、そこはかとなく物哀なるかな。少し起き上りて、この山の色も見給へ。いと埋れたりや」と、(四)強ひてかき起し給へば、をかしき程に(五)さし隠して、つつましげに見出したるまみなどは、(六)いとよく思ひ出でらるれど、おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ、(七)心もとなかゝめる。(八)いといたう兒めいたるものから、用意の淺からず物し給ひしはや、と猶行く方なき悲しさは、(九)むなしき空にも滿ちぬべかゝめり。

(一〇)おはし著きて、(一一)あはれ(一二)亡き魂ややどりて見給ふらむ、誰によりて、かく漫に惑ひありくものにもあらなくに、(一三)と思ひ續け給ひて、下りては少し(一四)心しらひて立ち去り給へり。(一五)女は、母君の思ひ給はむ事など、いと歎かしけれど、(一六)艶なる樣に心深く哀に語らひ給ふに、思ひ慰めて下りぬ。(一七)尼君は此方に殊更におりて、廊にぞ寄

(一)尼の
(二)薫も
(三)浮舟が
(四)浮舟を
(五)浮舟が扇にて顏を
(六)大君の佛が
(七)大君の代りとしてはどうかと案じらるゝ
(八)薫が大君を思ひ出したる也
(九)「我戀は空しき空に滿ちぬらし思ひやれども行く方もなし」
㊆ 薫浮舟を宇治に伴ふ
(一〇)宇治に
(一一)薫の心
(一二)大君の
(一三)薫が
(一四)心遣ひして浮舟より離れて居たり、浮舟に對して遠慮せる也
(一五)浮舟
(一六)薫の
(一七)遠慮して別の處にて車よりおりて

さし出でたる朝日影に、尼君はいとはしたなく覺ゆるにつけて、(一)故姫君の御供にこそ、かやうにても見奉りつべかりしか、在り經れば思ひかけぬ事をも見るかな、と悲しう覺えて、つゝむとすれど打顰みつゝ泣くを、侍從はいと憎く、(二)物のはじめに、(三)かたち異にて乘り添ひたるをだに思ふに、何ぞ斯く(四)いやめなると、憎く嗚呼に思ふ。(五)老いたる者は、漫に涙もろにあるものぞと、疎に打ち思ふなりけり。君も、(六)見る人は憎からねど、空の氣色につけても、(七)來し方の戀しさ勝りて、山深く入るまゝに、霧立ちわたる心地し給ふ。(八)打ち眺めて倚り居給へる、(九)袖の重なりながら、長やかに(一〇)出でたりけるが、川霧に濡れて、御衣の紅なるに、御直衣の(一一)花の、おどろ〳〵しう移りたるを、(一二)おとしがけの高き所に見つけて、引き入れ給ふ。

薫　(一三)かたみぞと見るにつけてもあさぎりの所せきまでぬるゝ袖かな

と心にもあらず獨言ち給ふを聞きて、いとゞ絞るばかり、尼君の袖も泣き濡らすを、若き人、(一四)怪しう見苦しき世かな、(一五)心ゆく道に、いとむづかしき事添ひたる心

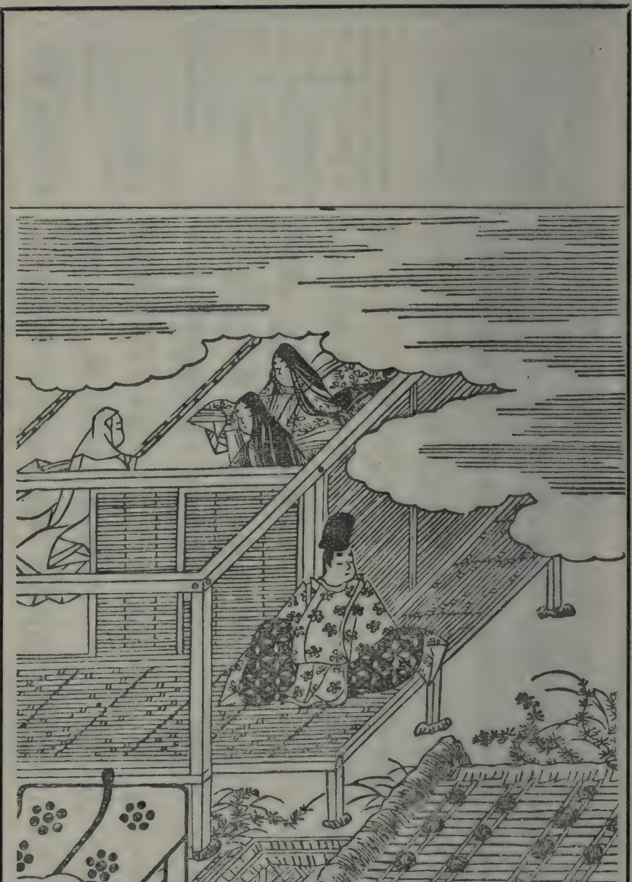
(一)一體なら大君の御供をしてこそ此樣な場合にも逢ふべき筈なりしに
(二)浮舟の輿入に
(三)尼が僧形にて同乘したるさへ快からぬに
(四)涙がちなる
(五)侍從の心を作者の註釋していふ也
(六)目前の浮舟を愛せぬ譯では無けれど
(七)大君の
(八)薫の
(九)直衣の袖と下著の袖と
(一〇)車の外に
(一一)花色、薫の直衣也
(一二)勾配の急なる所にて見つけて、かゝる處にて居直る故袖の濡れたるに氣のつきし也
(一三)浮舟を大君の形見ぞと見るにつけても
(一四)侍從の心
(一五)今は得意の旅なるに

（一）薫の
（二）明日よりいよ〳〵九月の節に入るにて今日はまだ九月には非ずと辯解する也
（三）今度は薫の浮舟をつれ行く御伴をして宇治へ行く事は御免蒙るべし
（四）中君の手前もあれば
（五）宇治へ
（六）中君に浮舟の事を
（七）薫が
（八）中君へは跡で侘びてもすむ事ぢや
（九）宇治へ浮舟をつれて行きても案内者がなくては取附處がない
（一〇）浮舟の供に一人は行かでは叶はず
（一一）浮舟
（一二）侍從と尼と
（一三）浮舟の供に立たず
（一四）遠路故牛をかけ替ふる也
（一五）侍從
（一六）薫を
（一七）浮舟
（一八）車の屋根裏にある鈎にかけて隔にしたる也

のづから（一）思す様あらむ。後めたうな思ひ給ひそ。（二）九月は明日こそ節分と聞きしか」と言ひ慰む。今日は十三日なりけり。尼君、辨「（三）此度はえ參らじ。（四）宮の上聞し召さむ事もあるに、（五）忍びて行きかへり侍らむも、いとうたてなむ」と聞ゆれど、まだきに（六）この事を聞かせ奉らむも、（七）心恥かしく覚え給ひて、（八）薫「それは後にも罪さり申し給ひてむ。（九）彼處もしるべなくては、たづきなき所を」とせめて宣ふ。薫「（一〇）人一人や侍るべき」と宣へば、（一一）この君に添ひたる（一二）侍從と乘りぬ。乳母尼君のともなりし童なども（一三）後れて、いと怪しき心地して居たり。近き程にやと思へば、宇治へおはするなりけり。（一四）牛などひき替ふべき心設し給へり。河原過ぎ法性寺のわたりおはしますに、夜は明けはてぬ。（一五）若き人はいとほのかに（一六）見奉りて、めで聞えて、漫に戀ひ奉るに、世の中のつゝましさも覺えず。（一七）君ぞ、いとあさましきに物も覺えで、うつぶし臥したるを、薫「石高きわたりは苦しきものを」とて、抱き給へり。羅の細長を、（一八）車の中に引き隔てたれば、花やかに

いさゝか開けたれば、薫「飛彈の工匠(一)も怨めしき隔かな。かゝる物の外には、まだ居習はず」と憂へ給ひて、如何し給ひけむ、入り給ひぬ。(二)かの人形の願も宣はで、(三)唯、「覺なきものの間より見しより、漫に戀しきこと、然るべきにやあらむ、怪しきまでぞ思ひ聞ゆる」とぞ語らひ給ふべき。(四)人の樣いとらうたげにおほどきたれ(五)ば、見劣もせず、(六)いと哀とおぼしけり。程もなう明けぬる心地するに、鳥などは鳴かで、大路近き所に、おほどれたる聲(七)して、如何にとか聞きも知らぬ名のりを(八)して、打群れて行くなどぞ聞ゆる。かやうの朝ぼらけに見れば、物戴きたる者の、(九)鬼のやうなるぞかしと聞き給ふも、かゝる蓬のまろ寢にならひ給はぬ心地にをかしうもありけり。宿直人も門あけて出づる音す。(一〇)各入りて臥しなどするを聞き給ひて、人召して、車妻戸に寄せさせ給ふ。(一一)かき抱きて乘せ給ひつ。誰も〳〵、(一二)あやしう、あへなき事を思ひ騷ぎて、「九月にもありけるを、(一三)心憂のわざや。如何にしつる事ぞ」と歎けば、尼君もいとほしく、思の外なる事どもなれど、(一四)辨「お

(一)此隔の遣戸をつくりたる大工が恨めしと也
(二)遣戸の中へ
(三)大君の身代りに浮舟をしたき趣などは語らず
(四)薫が浮舟に
(五)浮舟の樣子
(六)近づきて見ても別に見劣りもせず
(七)しまりのなき聲
(八)物賣の呼び聲をいふ
(九)物賣の樣子をいふ、かねて見し彼の鬼の如き者どもが行くのぢやわいと
(一〇)夜番せし人が
(一一)浮舟を車に
(一二)浮舟方の附人
(一三)九月は嫁娶を忌む月なれば也
(一四)薫が今浮舟を連れ行くは案外の事なれど



忍びて聞えめ、近き程なれば」といふ。薫「初々しく、(一)などてか然はあらむ。若き(二)御どち物聞え給はむは、(三)ふとしもしみつくべくもあらぬを、怪しきまで、(四)心のどかに物深うおはする君なれば、よも人の許なくて、打解け給はじ」などいふ程、雨やゝ降り來れば、空はいと暗し。宿直人の怪しき聲したる、夜行(五)うちして、宿直人「家(六)の辰巳の隅の崩(七)いと危し。この人の御車入るべくば、引き入れて御門さしてよ。かゝる人の供人こそ、心はうたてあれ」など言ひあへるも、むく〱しく(八)聞き習はぬ心地し給ふ。薫「佐野(九)のわたりに家もあらなくに」など口ずさびて、鄙びたる簀子の端つ方に居給へり。

　薫(一〇)さしとむるむぐらやしげき東屋のあまりほどふる雨そゝぎかな

と打拂ひ(一一)給へる追風、いとかたはなるまで、東の里人(一二)も驚き(一三)ぬべし。

(一四)とざまかうざまに聞え免れむ方なければ、南の廂に御座引きつくろひて、入れ奉る。心(一五)やすくも對面し給はぬを、これかれ押し(一六)出でたり。遣戸といふもの鎖して、

(一)初心しく其樣な事をするには及ばぬ
(二)若い者同士で
(三)さう直によい中になるものではない上に
(四)薫は
(五)夜廻りをして
(六)家の
(七)崩れたる箇處
(八)厭はしく
(九)「苦しくも降り來る雨か三穂が崎佐野の渡に家もあらなくに」
(一〇)久しく待たせたるは妨ぐる人などありての事かと也、催馬樂東屋「東屋のまやのあまりの雨そそぎ我立ち濡れぬ此の戸開かせ」
(一一)雨を
(一二)此處に出入るは鄙東の田舍者ばかりなる由前に見えたり
(一三)香に
(一四)何と言ひぬけて薫を追ひかへす譯にもゆかぬ故
(一五)浮舟が薫に
(一六)浮舟を

(一)思ひ立ちて參りたり
(二)薫
(三)浮舟を忘れぬ樣な口を薫がきかるゝも
(四)薫が
(五)尼が薫の使ならんと思ひて
(六)宇治の山莊の近處の薫の領地の支配人の名を言はせたれば
(七)尼が
(八)薫が來たのぢやわいと
(九)合點のゆかぬ
(一〇)浮舟に申上げんとて來れる也
(一一)尼をして浮舟に取次がしめたり
(一二)浮舟の心
(一三)母の方へ

の、怪しきまで宣はせしかば、思ひ給へ(一)おこしてなむ」と聞ゆ。君も乳母も、めでたしと見置き聞えてし人(二)の御樣なれば、忘れ(三)ぬさまに宣ふらむも哀なれど、俄にかく(四)思したばかるらむとは思ひも寄らず。宵うち過ぐるほどに、宇治より人參れりとて、門忍びやかに打叩く。(五)然にやあらむと思へば、辨開けさせたれば、車をぞ引き入るなる。怪しと思ふに、薫「尼君に對面賜はらむ」とて、(六)この近き御庄の預りの、名のりをせさせ給へれば、(七)戸口にゐざり出でたり。雨少しうち灑ぐに、風はいと冷に吹き入りて、言ひ知らず薫り來れば、(八)斯うなりけりと、誰も〳〵、心ときめきしつべき御けはひをかしければ、用意も無くあやしきに、まだ思ひあ(九)へぬ程なれば、心さわぎて、「如何なる事にかあらむ」と言ひあへり。薫「心やすき所にて、月頃思ひあまる事も聞え(一〇)させむとてなむ」と(一一)言はせ給へり。(一二)如何に聞ゆべき事にかと、君は苦しげに思ひて居給へれば、乳母見苦しがりて、乳母「然おはしましたらむを、立ちながらやは返し奉り給はむ。(一三)かの殿にこそ、斯くなむと

(一)方々の氣をかねて女二を大事がらねばならぬ上に浮舟を戀するも

(十六) 辨の尼浮舟を訪ふ、薫浮舟を訪ふ

(二)尼に約束せし日の
(三)宇治へ
(四)尼の車に附添はせよ
(五)尼が迎の車に
(六)浮舟の家に
(七)浮舟の家は
(八)浮舟が
(九)八宮
(一〇)浮舟に逢ひし後は
(一一)匂方
(一二)薫

へり。此方彼方とかしづき聞え給ふ宮仕に添へて、むづかしき私の心の添ひたるも、(一)苦しかりけり。

(二)宣ひしまだつとめて、むつまじく思す下﨟の侍一人、顔知らぬ牛飼つくり出でてつかはす。(三)薫「御庄の者どもの、田舎びたる召し出でて、つけよ」(四)と宣ふ。必ず出づべく宣へりければ、いとつゝましく苦しけれど、打ちけさうじつくろひて乘(五)りぬ。野山の氣色を見るにつけても、古よりの故事ども思ひ出でられて、眺め暮してなむ來著きける。(六)(七)いと徒然に人めも見えぬ所なれば、心やすく引き入れて、かくなむ參り來つると、しるべの男して言はせたれば、初瀬の供にありし若人、出で來ておろす。怪しき所に(八)ながめ暮し明すに、昔語もしつべき人の來たれば、嬉しく呼び入れ給ひて、親と聞えける人(九)の御あたりの人と思ふに、睦まじきなるべし。尼君「哀に人知れず(一〇)見奉りし後よりは、思ひ出で聞えさせぬ折なけれど、世の中かばかり思う給へ捨てたる身にて、かの宮(一一)にだに參り侍らぬを、この大將(一二)殿

と、例ならず強ひて、薫「明後日ばかり車奉らむ。その旅の所尋ねおき給へ。(一)ゆめ嗚呼がましく僻わざすまじうを」と、ほゝ笑みて宣へば、(二)煩はしく、(三)いかに思す事ならむと思へど、奥なくあはく〳〵しからぬ(四)御心ざまなれば、おのづから(五)我が御爲にも、人聞などはつゝみ給ふらむと思ひて、辨「さらば承りぬ。近き程にこそ。(六)御文などを見せさせ給へかし。(七)ふりはへさかしらめきて、心しらひのやうに思はれ侍らむも、今更に伊賀姥にやと、つゝましくてなむ」と聞ゆ。薫「文はやすかるべきを、人の物言ひうたてあるものなれば、(八)右大將は、常陸守の女をなむよばふなるなども、とりなしてむをや。その守のぬし、(九)いと荒々しげなゝめり」と宣へば、うち笑ひて、いとほしと思ふ。暗うなれば出で給ふ。下草のをかしき花ども、紅葉など折らせ給ひて、(一〇)宮に御覽ぜさせ給ふ。かひなからず(一一)おはしぬべけれど、畏り置きたる樣にて、いたくも馴れ聞え給はずぞあゝめる。内裏より、(一二)たゞの親めきて、入道の宮にも聞え給へば、いとやむごとなき方は、限なく思ひ(一三)聞え給

(一)浮舟の今の居處を突留めておき給へ
(二)我を浮舟に逢はせても我は決して無暗な事はせぬと辨明し置いてくれ
(三)尼の心
(四)薫の
(五)薫自身の爲にも外聞惡き擧動などは愼むならんと
(六)浮舟の居處は薫の三條邸から近き處なり、豫め薫から文でもやつてもいて下され
(七)さうでなければ私がわざ〳〵出かけて薫を私の了簡で浮舟に取持つ樣にと思はれては伊賀姥の樣で極が惡い、伊賀姥といふ女人の媒して誇られたる古き物語のありしならんといふ
(八)人が噂して
(九)常陸守
(一〇)女二宮に土産にしたる也
(一一)薫の女二に對する態度、女二が妻になりたる甲斐がないといふ程ではなけれど
(一二)平人の娘を嫁らす樣な態度で女三に女二の事を賴みある故
(一三)薫が女二を

流石に初々しく覺えてこそ、音づれ寄らね。猶これ(一)より傳へ果て給へ」と宣へば、弁「一日、かの母君の文侍りき。忌違ふ(二)とて、此處彼處になむあくがれ(三)給ふめる、この頃も、あやしき小家に隱ろへものし給ふめるも、いと心苦しく、少し(四)近き程ならましかば、其處にもわたして心安かるべきを、荒ましき山道に、たはやすくもえ思ひ立たでなむ、と侍りし」と聞ゆ。薫「人々の斯く(五)恐ろしくすめる道に、まろこそ古りがたく分け來れ。何ばかりの契にかと思ふは哀になむ」とて、例の涙ぐみ給へり。薫「さらば、(六)その心安からむ所に、消息し給へ。自らや(七)は彼處に出で給はぬ」と宣へば、弁「仰言を傳へ侍らむことは易し。今更に京を見侍らむ事は物憂くて、宮(八)にだにえ參らぬを」と聞ゆ。薫「など(九)てか。ともかくも人の聞き(一〇)傳へばこそあらめ。愛宕(一一)の聖だに、時に從ひては出でずやはありける。深き誓を(一二)破りて、人の願を滿て給はむこそ尊からめ」と宣へば、弁「人(一三)わたす事も侍らぬに、聞きにくき事もこそ出でまうで來れ」と、苦しげに思ひたれど、薫「猶よき折なゝなるを」

(一)尼がよく話をまとめてくれ
(二)以下母の文を詞とまねていふ也
(三)浮舟が
(四)宇治が近い處であつたら宇治へ浮舟をやりて置けば安心なれど
(五)「荒ましき山道」といへるを受けていふ
(六)今浮舟の居る隱れ家へ手紙をやつてくれ
(七)いつそ尼自身出かけて行かぬか
(八)中君方
(九)其樣な事はない筈
(一〇)人に評判されたら恐かるべけれど、知れさへせねば心配はいらぬ
(一一)愛宕山の奥に籠りて世を捨て果てたる僧でも
(一二)京へは出てしと定めし決心を翻へして
(一三)衆生濟度の爲ならずして京に出でなどせば謗を受くる事もあらんと也

はしましたり。久しう見給はざりつるに、山の紅葉も珍らしう覺ゆ。毀ち(一)し寢殿、此度はいと晴々しう造りなしたり。昔いとことそぎて(二)聖だち給へりし住居を思ひ出づるに、故宮(三)も戀しう覺え給ひて、樣替へて(四)けるも、口惜しきまで思さるれば、常よりも眺め給ふ。もとありし御しつらひは、(五)いと尊げにて、今片つかたを、女しく細やかになど、一方(六)ならざりしを、網代屛風、何かの荒々しきなどは、かの(七)御堂の僧坊の具に、殊更になさせ給へり。山里めきたる具どもを、殊更にせさせ(八)給ひて、いたうも事そがず、いと淸げに故々しくしつらはれたり。遣水の邊なる岩に居給ひて、頓にも立たれず。

薰　絶えはてぬ淸水になどかなき人のおもかげをだにとゞめざりけむ

泪を拭ひつゝ、辨の尼君の方に立ち寄り給へれば、いとかなしと見奉るに、唯ひ(九)そみにひそむ。長押にかりそめに居給ひて、簾のつまを引き上げて、物語し給ふ。(一〇)几帳に隱ろへて居たり。事のついでに、薰(一一)かの人形は、さいつ頃宮にと聞きしを、

(一)取毀したるあとへ新に寢殿をつくりし也
(二)萬事簡單にして
(三)八宮をも
(四)舊の模樣を改めたるをも
(五)佛を主にしたる飾附にて
(六)此處彼處趣一樣ならざりしを
(七)寢殿を作り改めたる堂の
(八)今度新に造りて
(九)尼が悲に堪へぬ樣也
(一〇)尼が
(一一)浮舟は中君方に居る樣に聞きたれども

かりしも思ひ出でらる。(一)母君だつやと、いと哀げなる文をかきておこせ給ふ。(二)疎ならず心苦しう思ひあつかひ給ふめるに、かひなうもて扱はれ奉る事と、打泣かれて、「(三)いかに徒然に、見習はぬ心地し給ふらむ。しばし忍び過し給へ」とある返事に、

浮舟　つれ〴〵は何か。心やすくてなむ。

(四)ひたぶるにうれしからまし世の中にあらぬ所と思はましかば

幼げに言ひたるを見る(五)儘に、ほろ〴〵と打泣きて、斯う惑(六)はしはふるゝ様にもてなす事と、いみじければ、

母　(七)うき世にはあらぬ所をもとめても君がさかりを見るよしもがな

(八)となほ〴〵しき事どもを言ひかはしてなむ心をのべける。

かの(九)大將殿は、例の秋深くなりゆく頃、慣ひにし事なれば、ねざめ〴〵に物忘せず、(一〇)哀にのみ覺えたまひければ、宇治の御堂つくり果てつと聞き給ふに、(一一)自らお

(一)此句誤脫あるべし、宣長翁は「母君いかにやと」の誤なるべしといへり
(二)母が心にかけて色々心配して下さるのに、浮舟の心
(三)母の手紙の文句
(四)此處がいつそ世間を全く離れたる處ならば尚住み易くて嬉しかるべし
(五)母が
(六)浮舟を方向に迷ふ樣な目にあはせる事よと
(七)假令どんな處に置いてもよいから兎に角其方を出世させて見たし
(八)平凡な歌を
㊟ 薫宇治に行く、辨の尼に浮舟を媒せん事を賴む
(九)薫
(一〇)大君の事のみ思ひ出さるゝ故
(一一)宇治へ

(一)浮舟よりどの位勝りたる女ならば心を惹かされる事であらうか
(二)身分の高下に伴ひて容貌も心も高下のあるものと見える
(三)浮舟に
(四)女二宮を妻にして居る薫に女二を見た目で浮舟を見られては
[illegible] 母北方かくれ家に文を贈りて浮舟を慰む
(五)浮舟の居る三條の家
(六)常陸守の所縁のものなれば也
(七)中君の
(八)無理な仕方せし匂宮の御樣子も
(九)浮舟の心

なし見奉り給へらむ人は、今少し斜ならず、如何ばかりにてかは心を留め給はむ、世の人の有樣を見聞くに、(一)劣り勝り賤しう貴なる品に從ひて、容貌も心もあるべきものなりけり、(二)我が子どもを見るに、この君に似るべきやはある、少將を、この家の内に又なき者に思へども、宮に見比べ(三)奉りしかば、いとも口惜しかりしに、推し量らる。(四)當帝の御かしづき女を得奉り給へらむ人の御目移しには、いともいとも恥かしく、つゝましかるべきものかな、と思ふに、漫に心地もあくがれにけり。

(五)旅の宿は徒然にて、庭の草もいぶせき心地するに、(六)あやしき東聲したる者どもばかりのみ出で入り、慰に見るべき前栽の花もなし。打ちあばれて、晴々しからで明し暮すに、宮の上の御有樣思ひ出づるに、若い心地に戀しかりけり。(八)生憎だち給へりし人の(七)御けはひも、流石に思ひ出でられて、(九)何事にかありけむ、いと多く哀げに宣ひしかな、名殘をかしかりし御移香も、まだ殘りたる心地して、恐ろし

北方しめゆひし小萩がうへもまよはぬにいかなる露にうつる下葉ぞ

とあるに、(一)いとほしく覺えて、

少將「(二)宮城野の小萩がもとと知らませばつゆも心をわかずぞあらまし

いかで自ら(三)聞えさせあきらめむ」と言ひたり。(四)故宮の御事聞きたるなゝめりと思ふに、いとゞ、(五)いかで人とひとしくとのみ、思ひ扱はる。あいなう(六)大將殿の御樣容貌ぞ、戀しう(七)面影に見ゆる。(八)同じうめでたしと見奉りしかど、(九)宮は思ひ離れて、心もとまらず、侮りて押し入り給へりけるを思ふもねたし。(一〇)この君は、流石に尋(一一)ねおほす心ばへのありながら、うちつけにも言ひかけ給はず、(一二)つれなし顏なるしもこそいたけれ、萬につけて(一三)思ひ出でらるれば、(一四)若き人はまして、かくや思ひ出で聞え給ふらむ、我がものにせむと、(一五)かく憎き人を思ひけむこそ、見苦しき事なるべかりけれ、など、唯心にかゝりて、眺めのみせられて、とてやかくてやと萬に、(一六)善からむあらましごとを思ひ續くるに、いと難し。(一七)やむごとなき御身の程御もて

(一)約束せし浮舟はおとなしく待ち居たるに、君はどうして妹の方に乘り替へ給ひしぞ

(二)浮舟が八宮の御子なることを知りたらば妹に心を移すではなかりしものを

(三)御目にかゝりて申譯がしたし

(四)八宮との關係を

(五)どうか浮舟を人並に出世させたしと、母の心

(六)薫

(七)北方の

(八)匂も薫も、以下母の心

(九)匂の方は頭から斷念して居る故

(一〇)薫

(一一)浮舟を

(一二)知らぬ顏をして居る所がすばらしい

(一三)薫の事が自分さへ思ひ出されるから

(一四)浮舟は

(一五)少將を

(一六)よささうな計畫ばかりを

(一七)立派な女を見馴れて居る薫は、以下母の心



なりたり
(一七)少將の樣が
(一八)打解けた少將の樣は見た事がないから見てやらんと北方が思ひて
(一)少將が
(二)少將の居る方へ北方が行きて
(三)少將の體
(四)薄紅梅色
(五)何處に惡い處があると
(六)大人づくらず
(七)中君が匂と竝びて
(八)少將が
(九)匂の御前に居るを見た時の樣に
(一〇)匂の御前に居たりしは此人では無かりしと迄思はるゝ時、丁度下の樣な事を言つてぶちこはしたり
(一一)匂宮
(一二)自分が參つた時は丁度匂宮御他出の際なりしかば
(一三)「移ろはん事だに惜しき秋萩にをれるばかりも置ける露哉」
(一四)浮舟の約束を變改せし心の卑しさを思へば
(一五)匂の御前に出ての見すぼらしさは

にと思ひて、長閑に居給へる(一)晝つ方、此方に渡りて(二)物より覗く。(三)白き綾のなつかしげなるに、今樣色(四)の擣目なども淸らなるを著て、端の方に前栽見るとて居たるは、何處(五)かは劣ると、いと淸げなゝめるはと見ゆ。女まだいと(六)かたなりに、何心もなき樣にて添ひ臥したり。(七)宮の上の竝びておはせし御樣ども思ひ出づれば、口惜しの樣どもやと見ゆ。(八)前なる御達に物など言ひ戲れて、打解けたるは、(九)いと見しやうに、匂なく人わろげにも見えぬを、(一〇)かの宮なりしは、こと少將なりけりと思ふ折しも言ふ事よ。少將「兵部卿(一一)の宮の萩の、猶殊に面白くもあるかな。いかでさる種ありけむ。同じ枝ざしなどのいと艶なるこそ。一日(一二)參りて、出で給ふ程なりしかば、え折らずなりにき。(一三)事だに惜しきと、宮のうち誦じ給へりしを、若き人たちに見せたらましかば」とて、我も歌よみ居たり。北方「いでや心ばせ(一四)の程を思へば、人とも覺えず、(一五)出消えはいとこよなかりけるに、何事言ひ居たるぞ」と呟がるれど、いと心地なげなる樣は流石にしたらねば、如何言ふと試に、

(一)無分別ではない女で、北方の性質をいふ
(二)我儘に
(三)常陸守の家にも浮舟を隱し置いて置けぬ事はなけれど
(四)隱しておくを可愛想に思ふ故此樣にもする事なるが
(五)調はず
(六)言ひ附けては置きたれども
(七)常陸守に
㊵母北方少將を隙見す、歌を少將に贈る、浮舟をもてあます
(八)聟の世話を
(九)常陸守
(一〇)北方が見つともなく夫と一緒に聟の世話をせぬと
(一一)北方の心
(一二)此聟故に匂宮に浮舟が附纒はさるゝ樣な事も出來たのぢやと
(一三)大事に思ふ浮舟の身の上が此樣な不都合な事になりし故
(一四)一向少將の世話をせず
(一五)匂の御前で少將が一向つまらぬ者に見えしにより北方が非常に輕蔑し居る故
(一六)浮舟の聟にして自分一人のものにして少將を大事にするのであつたにと殘念がりし心はなく

しく思はれ言はれむが、安からぬなりけり。(一)心地なくなどはあらぬ人の、なま腹立ちやすく、(二)思ひの儘にぞ少しありける。(三)かの家にも隱ろへてはすゑたりぬべけれど、しか隱ろへ(四)たらむをいとほしと思ひて斯く扱ふに、年頃傍去らず、旦暮見ならひて、互に心細くわりなしと思へり。北方「此處は、まだ斯くあばれて、(五)危げなる所なゝめり。さる心し給へ。曹司々々にある者どもも、召し出でて使ひ給へ。宿直人の事など言ひ置きて(六)侍るも、いと後めたけれど、(七)彼處に腹立ち怨みらるゝが、いと苦しければ」と、打泣きて歸る。

少將のあつかひを、(八)守は又なきものに思ひ急ぎて、(九)諸心に、(一〇)樣惡しく、營まずと怨ずるなりけり。(一一)いと心憂くこの人により斯かる紛どももあるぞかしと、(一二)またなく思ふ方の事のかゝれば、(一三)つらく心憂くて、をさをさ見入れず。(一四)かの宮の御前にていと人げなく見えしに、(一五)多く思ひおとしてければ、私物に思ひかしづかましを(一六)など、思ひし事は止みにたり。(一七)こゝにては如何見ゆると、まだ(一八)打解けたる樣見ぬ

意なきわざかなと思せど、(一)え留め給はず。あさましうかたはなる事に、(二)驚き騒ぎたれば、をさ〳〵物も聞えで出でぬ。かやうの方違所と思ひて、小さき家設けたりけり。三條邊に、ざればみたるがまだ作りさしたる所なれば、はか〴〵しきしつらひもせでなむありける。北方「あはれ(三)この御身ひとつを、萬に持て惱みきこゆるかな。心に叶はぬ世には、有り經まじきものにこそありけれ。(四)自らばかりは、唯一向に、(五)しな〴〵しからず、人げなう、(六)さる方に這ひ籠りて過しつべし。(七)この御ゆかりは、心憂しと思ひ聞えしあたりを、睦び聞ゆるに、便なき事も出で來なば、いと人笑へなるべし。あぢきなしや。異樣なりとも、(八)こゝを人にも知らせず忍びておはせよ。自らともかくも仕う奉りてむ」と言ひ置きて、自らは歸りなむとす。(九)君は打泣きて、世にあらむ事所狹げなる身と、思ひ屈し給へる樣、いと哀なり。親はた況て、(一〇)あたらしく惜しければ、恙なくて思ふごと見なさむと思ひ、さるかたはらいたき事につけて、人にも淡々

(一)中君が
(二)北方が
(三)浮舟一人を
(四)北方自身丈ならば
(五)身分立派ならず
(六)卑しき身として引籠りてさへ居れば其でよし
(七)中君方は浮舟が兄弟と認められざりし關係から一體は快からず思ひ居るれにも拘はらず浮舟の爲と思ひて近づき寄れるに
(八)此の今の住居を
(九)浮舟
(一〇)浮舟の身を埋もれさすが惜しき故、どうかして無事に出世させて見たしと思ひ

(一)中君の
(二)北方が中君は必ず怒り居るべしと期せし故恥かしくなりたる也
(三)中君の心を計り兼ねたる故匂の一件は北方が言ひ出さず
(四)浮舟が
(五)匂の事をほのめかす也
(六)本意の如く尼になして深き山に住ませたらば何時も不相變にて心配もなかるべきに
(七)私が浮舟を構はずに置いたらば後めたくもあるべけれど
(八)動もすればけしからん事をするよくない人が時々此處には來らるれども、匂をいふ
(九)浮舟の爲惡い樣にはせじと
(一〇)八宮に浮舟が子として認められざりし事は今更言はぬ
(一一)自分と中君との親類關係をいふなるべし
(一二)物忌の間をごたごたせぬ處で過させて

心恥かしげなる(一)御まみを見るも、心の鬼に(二)恥かしくぞ覺ゆる。(三)如何に思すらむと思へば、えも打出で聞えず。北方「斯くて(四)侍ひ給ふは、年頃の願の滿つ心地して、人の漏り聞き侍らむも目安く、おもだたしき事になむ思ひ給ふるを、(五)流石につゝましき事になむ侍りける。(六)深き山の本意は、みさをになむ侍るべきを」とて、打泣くもいとほしくて、中君「こゝには、何事か後めたく覺え給ふべき。とてもかくても、(七)疎々しく思ひ放ち聞えばこそあらめ、(八)怪しからずだちてよからぬ人の、時々ものし給ふめれど、その心を皆人見知りたゝめれば、心づかひして、(九)便なうはもてなし聞えじと思ふを、如何に推し量り給ふにか」と宣ふ。北方「更に御心をば隔ありても思ひ聞えさせ侍らず。(一〇)かたはらいたう許なかりし筋は、何にかかけても聞えさせ侍らむ。その方ならでも、思し放つまじき(一一)綱も侍るをなむ、に頼み聞えさする」など、疎ならず聞えて、北方「明日明後日かたき物忌に侍るを、(一二)おほぞうならぬ所にて過して、又も參らせ侍らむ」と聞えて誘ふ。いとほしく本

かは。いとほし」と言へば、右近ぞ、「然もあらじ。(一)かの御乳母の、(二)引きすゑて、すずろに語りうれへし氣色、(三)もて離れてぞ言ひし。(四)宮も、逢ひでも逢はぬやうなる心ばへにこそ、打ちうそぶき口ずさび給ひしか。いさや、(五)殊更にもやあらむ。其は知らずかし。(六)昨夜の火影のいとおほどかなりしも、事あり顔には見え給はざりしを」など、うちさゝめきて、いとほしがる。

乳母車乞ひて(七)、常陸殿へ往ぬ。北の方に斯う(八)くといへば、胸つぶれ騷ぎて、人(九)もけしからぬ樣に言ひ思ふらむ、正身もいかゞ思すべき、(一〇)かゝる筋の物にくみは貴人もなきものなりと、己が心ならひに、(一一)あわたゞしく思ひなりて、夕つ方參り(一二)ぬ。宮(一三)おはしまさねば心安くて、北方「怪しく心幼げなる人を參らせ置きて、後やすくは頼み聞えさせながら、(一四)鼬の侍らむやうなる心地のし侍れば、よからぬものどもに、憎み怨みられ侍る」と聞ゆ。中君「いと然言ふばかりの幼げさにはあらざめるを、後めたげに(一五)氣色ばみたる御まかげこそ(一六)、煩はしけれ」とて笑ひ給へる、

(一)まだ匂とよい中になつた譯ではあるまじ
(二)右近を
(三)匂とは關係のない樣に言ひたり
(四)匂
(五)或はわざとそんな事を言うたのかも知れぬ
(六)浮舟の樣子の大樣なりしを見ても昨夜は無事に免れしものと思はる
【十二】浮舟の乳母母北方に浮舟の近狀を語る、浮舟三條の別宅に隱さる
(七)車を借りて
(八)匂の事を話したる也
(九)北方の心
(一〇)中君も
(一一)嫉妬につきては貴人も卑しき者とかはらぬものなりと
(一二)二條院へ北方が
(一三)匂宮
(一四)鼬の行きながら屢後を顧る如くとかく浮舟の事が氣がかりなる故其方をのみ心配して外の子どもに不足を言はるゝと也
(一五)樣子ありげな仰しやり樣こそ
(一六)手をかざして日光を遮ること、鼬が振りかへる時に然する故前の鼬の譬によりていふ也

(一)中君が
(二)以下中君の心
(三)浮舟の
(四)大方父に似たるならん
(五)大君は父に似
(六)大君は、以下中君の心
(七)浮舟は
(八)薫の相手に不足はあるまじ
(九)姉樣形氣で
(一〇)浮舟を
(一一)八宮
(一二)八宮の樣子
(一三)浮舟の心
(一四)昨夜の匂の始末を知つて居る侍女等は
(一五)匂と浮舟との中はどうなつたのであらう
(一六)浮舟の
(一七)中君がどの樣に浮舟を世話やきても、既に匂とあの樣な事になつて居てはやきがひもあらじ

(一)給はことに目も留め給はで、(二)いと哀なる(三)人の容貌かな、いかで斯うしも有りけるにかあらむ、(四)故宮にいとよく似奉りたるなゝめりかし、(五)故姫君は宮の御方ざまに、我は母上に似奉りたりとこそは、古人ども言ふなりしか、實に似たる人はいみじきものなりけり、と思し比ぶるに、涙ぐみて見給ふ。(六)彼は、限なくあてに氣高きものから、なつかしうなよゝかに、かたはなるまで、なよ〳〵と撓みたる樣し給へりしにこそ、(七)これは、まだもてなしの初々しげに、萬の事をつゝましうのみ思ひたるけにや、見所多かるなまめかしさぞ劣りたる、故々しきけはひだにもて附けたらば、(八)大將の見給はむにも、更にかたはなるまじ、など(九)このかみ心に思ひ扱はれ給ふ。物語などし給ひて、曉方になりてぞ寢給ふ。(一〇)傍に臥せ給ひて、(一一)故宮の御事ども、(一二)年頃おはせし御有樣など、まほならねど語り給ふ。(一三)いとゆかしう見奉らずなりにけるを、いと口惜しう悲しと思ひたり。(一四)昨夜の心知りの人々は、侍女「(一五)如何なりつらむな。(一六)いとらうたげなる御樣を、(一七)いみじう思すとも、かひあるべき事

(一)是程でもなき女をさへ珍らしきを好む匂の御氣風なればと
(二)中君の前故浮舟が右近と少將とに恥ぢ隠れる事もせぬ故
(三)此邸を窮屈に思ひ給ふな
(四)大君
(五)大君に似たる浮舟の様子を見れば
(六)親身の人なき我を大君が我を思ひし様に浮舟が思ひくれたらば
(七)中君を我とは丸てかけ離れたものゝ様に思ひ居しに
(八)中君が
(九)浮舟が中君にさし向ひて
(一〇)是所ぞといふ惡き所なく
(一一)大君が出て來た様に思はるゝ故

に思しつきなば、めざましげなる事はありなむかし、(一)いと斯からぬをだに、珍らしき人、をかしうし給ふ御心を、と二人ばかりぞ、(二)御前にてえ恥ぢあへ給はねば、見居たりける。物語いとなつかしくし給ひて、中君「(三)例ならずつゝましき所など、な思ひなし給ひそ。(四)故姫君のおはせずなり給ひし後、忘らるゝ世なくいみじく、身も怨めしく、類なき心地して過すに、(五)いとよく思ひよそへられ給ふ御様を見れば、慰む心地して哀になむ。(六)思ふ人もなき身に、昔の御志の様に思さば、いと嬉しくなむ」など語らひ給へど、いと物つゝましくて、また鄙びたる心に、答へ聞えむ事もなくて、浮舟「(七)年頃いと遙にのみ思ひ聞えさせしに、かう見奉り侍るは、何事も慰む心地し侍りてなむ」とばかり、いと若びたる聲にて言ふ。(八)繪など取出でさせて、右近に詞讀ませて見給ふに、(九)向ひて物恥もえしあへ給はず、心に入れて見給へる火影、(一〇)更に此處と見ゆる所なく、細かにをかしげなり。額つきまみの薫りたる心地して、いとおほどかなるあてさは、(一一)唯それとのみ思ひ出でらるれば、

(一)浮舟
(二)行かずに居ては却て實際密通して仕舞った樣に思はるべければ
(三)私が
(四)中君方
(五)多少なりとも男を知り居る女ならば格別、おぼこ娘の浮舟なれば斯うなくてはならぬ譯と氣の毒
(六)浮舟の樣
(七)中君を無類の美人と思ひ居しに浮舟が之に比べて劣れりとは見えず、侍女等の心
(八)浮舟に匂が思ひ附きたらばとんでもない事が起るならん、侍女等の心

ておはする、細やかにをかしげなり。

この君(一)は誠に心地も惡しくなりにたれど、乳母「いとかたはらいたし。事しも(二)あり顏に思すらむを、唯おほどかにて見え奉り給へ。右近の君などには、事の有樣初より語り(三)侍らむ」と、せめて唆し立てて、(四)此方の障子のもとにて、乳母「右近の君に物聞えさせむ」と言へば、立ちて出でたれば、乳母「いと怪しく侍りつる事のなごりに、身もあつうなり給ひて、まめやかに苦しげに見えさせ給ふをいとほしく見侍る。御前にて慰め聞えさせ給へとてなむ。過もおはせぬ御身を、いとつつましげに思ほし侘びにたゝめるも、(五)いさゝかにても世を知り給へる人こそあれ、いかでかはと理にいとほしく見奉る」とて、引き起して參らせ奉る。(六)我にもあらず、人の思ふらむ事も恥かしけれど、いと柔らかにおほどき過ぎ給へる君にて、押し出でられて居給へり。額髮などの、いたう濡れたるをもて隱して、燈の方に背き給へるさま、(七)上を類なく見奉るに、氣劣るとも見えず、あてにをかし。これ(八)

と聞え給へば、少將右近、(一)目まじろきをして、(二)かたはらいたくぞ思すらむ」と言ふも、唯なるよりはいとほし。(三)いと口惜しく心苦しきわざかな、(四)大將の心留めたる樣に宣ふめりしを、如何に淡々しく思ひおとさむ、かくのみ亂りがはしくおはする人は、(五)聞きにくゝ(六)實ならぬ事をもくねり言ひ、又誠に少し思はずならむ事をも、流石に見許しつべうこそおはすめれ、(七)この君は、(八)言はで憂しと思はむ事ぞ、いと恥かしげに心深きを、(九)あいなく思ふこと添ひぬる人の上なゝめり、(一〇)年頃見ず知らざりつる人の上なれど、心ばへ容貌を見れば、(一一)え思ひ放つまじう、らうたく心苦しきに、(一二)世の中はあり難くむづかしげなるものかな、(一三)我が身の有樣は、飽かぬ事多かる心地すれど、(一四)かく物はかなき目も見つべかりける身の、然ははふれずなりにけるにこそ、實に目安きなりけれ。今は唯この憎き心添ひ給へる(一五)人の、なだらかにて思ひ離れなば、更に何事も思ひ入れずなりなむ、と思ほす。いと多かる御髮なれば、頓にもえ乾しやらず、起き居給へるも苦し。白き御衣一襲ばかりに

(一)目くばせして
(二)中君が眞に密通したりと思はるゝならんと
(三)以下中君の心
(四)薫が浮舟に執心の樣に言はれしに、今夜の始末を薫に聞かせたらば如何に無分別な事と輕蔑するならん
(五)匂をいふ
(六)實際なき事をも咎め立てし又實際不部合な事をも咎めぬ事もある
(七)薫は
(八)口には出さずに腹でけしからぬと思つて居るのが
(九)つまらなく苦勞の多い浮舟の身の上
(一〇)今迄は見ず知らざりし浮舟なれど
(一一)打棄て置き難く
(一二)渡りにくゝ
(一三)中君自身
(一四)浮舟の樣につまらぬ目にも逢ふべかりし身が、甘くさうならずに仕舞ひたればこそ見憎からず世を送り居る譯なり
(一五)薫が自分への戀を諦めてくれたらば何も心配せずに濟すべし

(一)行きつけぬ身で
(二)長谷へ
(三)今迄は浮舟を侮りてのみありしに、此樣に打て變つた身にもなるものかと人が思ふ程の
(四)氣樂らしく
(五)匂
(六)此方の門が內裏への近道と見えて
(七)意味ふかき古歌

(八)浮舟の心に
(九)乘替の馬

㊤中君浮舟を慰む
(一〇)中君
(一一)浮舟が
(一二)今夜の一條を知らぬ風にて
(一三)匂が御歸りなさるまじ
(一四)髮を洗ひし故か
(一五)此方へ來給へ
(一六)暫らくして參上すべし

---

(一)ならはぬ御身に、度々頻りて詣で給ふことは、人のかく侮り樣にのみ思ひきこえたるを、斯くもありけりと思ふ(二)ばかりの、御幸(三)おはしませとこそ念じ侍れば、我が君は人笑はれにては止み給ひなむや」と、(四)世を安げに言ひ居たり。

宮は急ぎて出で給ふなり。(六)內裏近き方にやあらむ、此方の御門より出で給へば、(五)物宣ふ御聲もきこゆ。いとあてに限もなく聞えて、(七)心ばへある故事など打誦じ給ひて過ぎ給ふほど、(八)漫に煩はしく覺ゆ。(九)うつし馬ども引き出して、宿直に侍ふ人、十餘人ばかりして參り給ふ。

(一〇)上、(一一)いとほしくうたて思ふらむとて、(一二)知らず顏にて、中宮「大宮惱み給ふとて參り給ひぬれば、今宵は出で給はじ。(一三)ゆするのなごりにや、(一四)心地も惱ましくて、起き居侍るを、わたり給へ。徒然にも思さるらむ」と聞え給へり。浮舟「みだり心地のいと苦しう侍るを、(一五)ためらひて」と、乳母して聞え給ふ。中宮「いかなる御心地ぞ」と、立ち返り訪ひ聞え給へば、(一六)浮舟「何心地ともおぼえ侍らず、唯いと苦しく侍り」

(一)下樣の戀の樣で
(二)常陸守邸
(三)夫婦で
(四)常陸守の詞をまねていふ也、浮舟にばかりかかつて居て
(五)内に花聟の居るに餘處へ泊りに行つて居る杯とは以ての外
(六)常陸守が言はれた
(七)一體右近少將の仕方が不都合に思はれる
(八)内輪のもめは折々あるにしても
(九)浮舟
(一〇)中君が
(一一)浮舟は同じ孤兒でも母がある故よしと也
(一二)他人の氣受は
(一三)母君がどうにかなさるならん
(一四)浮舟は度々長谷にも詣でし也

たくつませ給へるこそ、(一)直人の懸想だちて、いとをかしくも覺え侍りつれ。(二)かの殿には、今日もいみじく(三)いさかひ給ひてけり。(四)唯一所の御上を見あつかひ給ふとて、我が子どもをば思し捨てたり、(五)客人のおはする程の御旅居見苦しと、荒々しきまでぞ(六)聞え給ひける。下人さへ聞きいとほしがりけり。(七)すべてこの少將の君ぞ、いと愛敬なくおぼえ給ふ。この御事侍らざらましかば、(八)内々やすからずむつかしき事は折々侍りとも、なだらかに、年頃の儘にておはしますべきものを」など、打歎きつゝ言ふ。(九)君は、たゞ今はともかくも思ひ廻らされず、唯いみじくはしたなく、見知らぬ目を見つるに添へても、(一〇)如何に思すらむと思ふに、侘しければ、うつぶし伏して泣き給ふ。いと苦しと見あつかひて、乳母「何かかく思す。(一一)母おはせぬ人こそ、たづきなう悲しかるべけれ。(一二)餘所の覺は、父なき人はいと口惜しけれど、さがなき繼母に憎まれむよりは、これはいと安し。(一三)ともかくもし奉り給ひなむ。な思し屈せそ。さりとも長谷(一四)の觀音おはしませば、哀と思ひ聞え給はむ。

匂「誰か參(一)りたる。例のおどろ〱しく脅す」と宣はすれば、右近「宮(二)の侍に平の重經となむ名のり侍りつる」と聞ゆ。出(三)で給はむ事のいとわりなく口惜しきに、人目も思されぬに、右近立ち出でて、この御使を西面にて問へば、申(四)し次ぎつる人も寄り來て、侍「中務(五)の宮も參らせ給ひぬ。大夫(六)はたゞ今なむ、參りつる道に、御車引き出づる見侍りつ」と申せば、實に俄に時々惱み給ふ折々もあるをと思すに、(七)人の思すらむ事もはしたなくなりて、いみじう恨み契り置きて出で給ひぬ。

(八)恐ろしき夢の覺めたる心地して、汗に押し浸して臥し給へり。乳母うちあふぎな(九)どして、乳母「かゝる(一〇)御住居は、萬につけて、つゝましう便なかりけり。(一一)斯くおはしましそめて、更によき事侍らじ。あな恐ろしや。限(一二)なき人と聞ゆとも、安からぬ御有樣は、いと味氣なかるべし。餘所(一三)のさし離れたらむ人にこそ、善しとも惡しとも覺えられ給はめ。人聞もかたはらいたき事と思う給へて、降(一四)魔の相を出して、つと見奉りつれば、いとむくつけく、下衆々々しき女と思して、手(一五)をいとい

(一)使には
(二)中宮の
(三)匂の心
(四)前に奥へ取次ぎたる匂方の侍も來て
(五)匂の兄弟
(六)中宮大夫
(七)匂が
(八)他人の手前も行かずには居られなくなりて
⊕ 浮舟の乳母浮舟を慰む
(九)浮舟の心
(一〇)人の家に居るは
(一一)匂が一度浮舟の處へ來だしては
(一二)相手がいくら貴人でも中君と姉妹であつて見れば到底丸く納まる筈なければつまらぬ事なるべし
(一三)中君と無關係なる男にこそ兎に角嫁すべきである
(一四)魔を降す不動樣の樣な恐ろしい顏をして匂を睨みつけたれば
(一五)匂が私の手をひどくつめりなされしこそ

(一)どうして浮舟の居るのをかぎ附けたるならんと
(二)匂のいつもの習慣をいふ也、上達部が多く來て遊び戲るゝ場合には
(三)匂が遲く中君の方へ行かるゝ事もある故皆油斷して居る
(四)浮舟の側に
(五)匂を
(六)明石
(七)匂に申上げん
(八)申上げたりとも匂が動くべくもなき事なれば
(九)未だ眞實に打解けはせぬならんと
(一〇)中君
(一一)見つともなき匂の性質
(一二)中君をまでも嫌ふならんと
(一三)右近が匂の側へ行きて

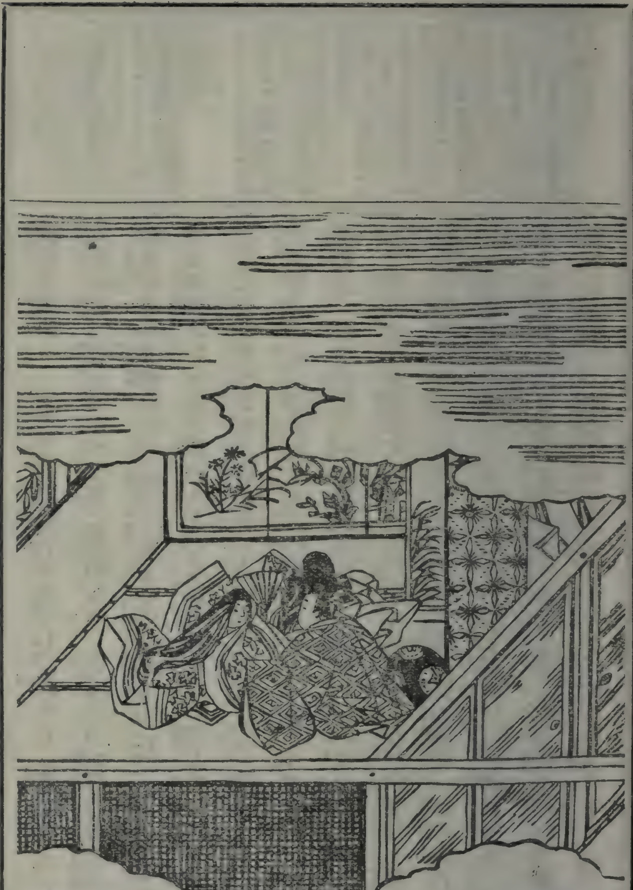
人々も少し若やかによろしきは、見捨て給ふなく、怪しき人の御癖なれば、(一)いかでかは思ひ寄り給ひけむと、あさましきに、物も言はれ給はず。右近「(二)上達部數多參り給へる日にて、遊び戲れ給ひては、例もかゝる時は(三)遲くも渡り給へば、皆打ち解けて休み給ふぞかし。さても如何にすべき事ぞ。かの乳母こそおずましかりけれ。(四)つと添ひ居てまもり奉り、(五)引きもかなぐり奉りつべくこそ思ひたりつれ」と、少將と二人していとほしがる程に、内裏より人參りて、(六)大宮この夕暮より御胸惱ませ給ふを、只今いみじく重く惱ませおはします由申さす。右近、「心なき折の御惱かな。(七)聞えさせむ」とて立つ。少將、「いでや、(八)今はかひなくもあゝべい事を、をこがましく、あまりな脅し聞え給ひそ」と言へば、右近「(九)否まだしかるべし」と、忍びてさゝめき交すを、(一〇)上は、いと(一一)聞きにくき人の御本性にこそあゝめれ、少し心あらむ人は、(一二)我があたりをさへ疎みぬべかゝめりと思す。(一三)參りて、御使の申すよりも、今少しあわたゞしげに申しなせば、動き給ふべき樣にもあらぬ御氣色に、

ここにいと怪しき事の侍るに、見給へ困じて(一)なむ、え動き侍らでなむ」右近「何事ぞ」とて探り寄るに、袿姿なる男の、いと芳しくて添ひ臥し給へるを、例のけしか(二)らぬ御樣と(三)思ひ寄りにけり。(四)女の心合せ給ふまじき事と推し量らるれば、右近「實にいと見苦しき事にも侍るかな。(五)右近は如何にか聞えさせむ。今參りて、(六)御前にこそは忍びて聞えさせめ」とて立つを、あさましくかたはに誰も〳〵思へど、宮は怖ぢ給はず。(七)あさましきまで、あてにをかしき人かな、猶何人ならむ、右近が言ひつる氣色も、いとおしなべての今參にはあらざゝめり、と心得難く思されて、と言ひかく言ひ怨み給ふ。(八)心づきなげに氣色ばみてももてなさねど、唯いみじう(九)死ぬばかり思へるが、いとほしければ、(一〇)情ありてこしらへ給ふ。右近、上に(一一)、右近「云こそおはしませ。いとほしく(一二)如何に思はすらむ」と聞ゆれば、中君「例の心憂き御樣かな。(一三)かの母も、如何に淡々しく、けしからぬ樣に思ひ給はむとすらむ。(一四)後安くと返す〴〵言ひ置きつるものを」と、いとほしく思せど、(一五)いかゞ聞えむ。(一六)侍ふ

(一)仕末に困って
(二)又しても匂の御いたづらなるべしと
(三)右近が
(四)浮舟が承知でした事ではなさそうなれば
(五)私には何とも申上げかねる
(六)中君に密告すべし
(七)匂の心
(八)浮舟が厭はしげに腹立ちたる風もせねど
(九)死ぬ程に恥かしく
(一〇)匂が無理な事もせず柔らかにだます
(一一)中君に
(一二)浮舟が
(一三)浮舟の母も今夜の始末を聞かば
(一四)安心の出來る樣に預りてくれよと
(一五)何と言ひ樣もなし
(一六)侍女をも少し若くて遊皮のむけたるは遣らず逃さぬ匂の癖故

開けて來たり。乳母「これは如何なる事にか侍らむ。怪しきわざにも侍るかな」と聞ゆれど、憚り(一)給ふべき事にもあらず。かくうちつけなる御しわざなれど、言の葉多かる御本性(二)なれば、何やかやと宣ふに、暮れはてぬれど、匂(三)「誰とか聞かざらむほどは許さじ」とて、馴れ〳〵しく臥し給ふに、宮なりけりと思ひ(四)はつるに、乳母いはむ方なくあきれて居たり。大殿油は燈籠にて、侍女(五)「今わたらせ給ひなむ」と人々言ふなり。御前(六)ならぬ方の御格子どもぞおろすなる。此方(七)は離れたる方にしなして、高き棚厨子一具ばかり立て、屛風の袋に入れ込めたる、所々に寄せかけ、何か(八)荒らかなる様にし放ちたり。かく人(九)の物し給へばとて、通ふ道の障子一間ばかりぞ開けたるを、右近とて、大輔が女の侍ふ來て、格子おろして此處(一〇)に寄り來なり。右近「あな暗や。まだ大殿油も參らざりけり。御格子を、苦しき(一一)に急ぎまゐりて、闇に惑ふよ」とて引き(一二)上ぐるに、宮(一三)もなま苦しと聞き給ふ。乳母はたいと苦しと思ひて、物(一四)づつみせず、はやりかにおぞき人にて、乳母「物聞え侍らむ。こ

(一)匂は平氣なり
(二)匂の
(三)名を聞かぬ内は
(四)乳母が
(五)中君が髮を洗ひ仕舞ひてやがて居間へ歸らるべしと也
(六)中君の居間の前だけ格子をあけて置く也
(七)浮舟の方
(八)何もかも置き放しにしてある
(九)其を浮舟が居るからとて
(一〇)浮舟の方へ
(一一)苦しがつて早くおろして
(一二)格子を
(一三)匂
(一四)此乳母は無遠慮にして輕率なる氣の強い女にて



參の口惜しからぬなゝめりと思して、この廂に通ふ障子を、いと密におし開け給ひて、やをら歩み寄り給ふも人知らず。(一)こなたの廊の中の坪前栽の(二)、いとをかしう色々に咲き亂れたるに、遣水のわたりの石高きほど、いとをかしければ、端近く(三)添ひ臥して眺むるなりけり。開きたる障子を、今少し押し開けて、屏風のつまより覗き給ふに、宮とは思ひもかけず、(四)例此方に來馴れたる人にやあらむと思ひて、起きあがりたる樣體、いとをかしう見ゆるに、(五)例の御心は過し給はで、衣の裾をとらへ給ひて、此方の障子引きたて給ひて、屏風の間に居給ひぬ。(六)あやしと思ひて、扇をさし隱して、見返りたる樣いとをかし。扇を持たせながら、(八)とらへ給ひて、匂(七)「誰ぞ。名のりこそゆかしけれ」と宣ふに、むくつけくなりぬ。(九)さる物のつらに、顏を外樣にもてかくして、いといたう忍び給へれば、(一〇)このたゞならずほのめかし給ふらむ大將にや、芳しきけはひなども思ひわたさるゝに、(一一)いと恥かしくせむ方なし。(一二)乳母、人げの例ならぬを、怪しと思ひて、あなたなる屏風を押し

---

(一)浮舟の居る方の
(二)小庭の植込の
(三)浮舟が
(四)浮舟が匂の來たるとは思ひもよらず
(五)浮舟を匂が只は置かれず
(六)浮舟が
(七)扇で顏を隱して
(八)浮舟の手を
(九)匂が屏風などの陰に顏を背けて
(一〇)彼の我に懸想するといふ噂の薫ならんかと、浮舟の心「にや」の下に「と」あるべし
(一一)薫らしく思はるゝに
(一二)浮舟の

(一)夕霧

㊉ 匂宮思はず浮舟を見附けて手籠にせんとす

(二)中君方へ

(三)髮を洗ふ事

(四)中君が居ぬ故寂しといふ也

(五)匂の留守中に何時も中君の髮を洗ふ樣にするに

(六)髮洗ふ事を

(七)洗ふべき日なし、日の吉凶を擇めげ也

(八)九月は正五九月の中、十月は神無月なれば忌むなりといふ

(九)若君の方に侍女等が行きてある間に

(一〇)浮舟の隱れ居る方

(一一)織出模樣

(一二)見るともなしに上の袖口や何やが見ゆる也

(一三)新參の侍女の氣の利いたのが居るならんと匂が思ひて

心地よげにて、左の大殿の君達など(一)、碁うち韻ふたぎなどしつゝ遊び給ふ。夕つ方宮此方(二)に渡らせ給へれば、女君は御ゆする(三)の程なりけり。人々もおの〳〵打ち休みなどして、御前には人もなし。小き童のあるして、匂「折悪しき御ゆするの程こそ、見苦しかゝめれ(四)。さう〴〵しくてや眺めむ」と聞え給へば、大輔「實にお(五)はしまさぬ隙々にこそ例はすませ。怪しう日頃も(六)物憂がらせ給ひて、今日過ぎばこの月は日もなし(七)。九十月(八)はいかでかはとて、仕う奉らせつるを」と、大輔いとほしがる。若君も寢給へりければ、其方(九)にこれかれある程に、宮はたゝずみありき給ひて、西の方(一〇)に例ならぬ童の見えけるを、今參のあるかなど思して、さし覗き給ふ。中の程なる障子の、細目に開きたるより見給へば、障子のあなたに、一尺ばかり引きさけて、屏風立てたり。そのつまに、几帳簾に添へて立てたり。帷子一重を打ちかけて、紫苑色の花やかなるに、女郎花の織物(一一)と見ゆる重なりて、袖口さし出でたり。屏風の一枚疊まれたるより(一二)、心にもあらで見ゆるなゝめり。(一三)今

(一)隱れて通ふ女の所からは此樣にして紛れ歸るのぢやと、匂の心
(二)若し薫などが中君の處へ來しにはあらずやと疑ふ也
(三)常陸守の女房位に殿附は耳障り
(四)北方が
(五)浮舟の身の上を思ふにつけて
(六)浮舟を賤しき身分にして仕舞ふ事は
(七)此處へ出入りさせるのか
(八)浮舟の母を侍女の大輔の友達なりと中君が言ひなす也
(九)人聞の惡い樣な事ばかりわざと仰しやるのがつらい
(一〇)引歌未詳
(一一)匂が
(一二)直り

ふ。(一)かやうにてぞ、忍びたる所には紛れ出づるかしと、御心ならひに(二)思し寄るもむくつけし。供人「常陸殿のまかでさせ給ふ」と申す。若やかなる御前ども、供人「(三)殿こそあざやかなれ」と、笑ひあへるを聞くも、實にこよなの身の程やと(四)悲しく思ふ。(五)唯この御方の事を思ふ故にぞ、己も人々しくならまほしく覺えける。まして(六)正身を、なほ〳〵しくやつして見む事は、いみじくあたらしく思ひなりぬ。宮入り給ひて、匂「常陸殿といふ人や(七)こゝに通はし給ふ。心ある朝ぼらけに、急ぎ出でつる車添などこそ、ことさらめきて見えつれ」など、猶思し疑ひて宣ふ。聞きにくくかたはらいたしと思して、中君「(八)大輔などが若くての頃、友達にてありける人は、殊に今めかしうも見えざゝめるを、故々しげにも宣ひなすかな。(九)人の聞き咎めつべき事をのみ、常にとりない給ふこそ、(一〇)無き名はたてて」と打背き給ふも、らうたげにをかし。明くるも知らず大殿籠りたるに、人々あまた參り給へば、(一一)寢殿にわたり給ひぬ。后の宮は、こと〴〵しき御惱にもあらで、(一二)おこたり給ひにければ、

(一)浮舟を可愛想に
(二)中君の御意見に任すべし
(三)今迄の薫の心深かりしを頼みにしてうつかり肌を許したら將來は又どうなるか分らぬ

九 匂宮母北方の車を見て怪しむ

(四)常陸守方から迎の車をよこして
(五)娘の婚禮を北方が構はずに出あるき居ると怒りたる也
(六)浮舟を
(七)尼にせんか如何と思案をきめる間、「如何ならん巖の中に住まばかは世の憂き事の聞えこざらん」
(八)浮舟
(九)母に別れん事を心細く思へど
(一〇)浮舟が
(一一)匂
(一二)匂が若君を
(一三)北方の車を

---

(一)いとほしく思ひ給へ侍る。それも唯御心(二)になむ。ともかくも、思し捨てず物せさせ給へ」と聞ゆれば、いと煩はしくなりて、中君「いさや、來(三)し方の心深さに打解けて、行くさきの有樣は知り難きを」と、打歎きて、殊に物も宣はずなりぬ。

明けぬれば、車(四)など率て來て、守の消息など、(五)いと腹立たしげに、劫したれば、北方「辱く萬に頼み聞えさせてなむ。猶しばし(六)隱させ給ひて、(七)巖の中にとも如何にとも、思ひ給へめぐらし侍る程、數に侍らずとも、思ほし放たず、何事をも教へさせ給へ」など、打泣きつゝ聞え置きて、この御方(八)も、いと心細く、ならはぬ心地に、(九)立ち離れむ事を思へど、今めかしくをかしく見ゆるあたりに、暫しも見馴れ奉らむと思へば、流石に(一〇)嬉しくも思ほえけり。車引き出づるほどの少し明うなりぬるに、宮、(一一)内裏よりまかで給ふ。若君(一二)覺束なく思ひ給ひければ、忍びたる樣にて、御車なども例ならでおはしますにさしあひて、(一三)推し留めて立てたれば、廊に御車寄せており給ふ。匂「何の車ぞ。暗き程に急ぎ出づるは」と、目留めさせ給

し給ひけりとこそ覺ゆれ。幼くおはしけるより、行(一)もいみじくし給ひければよ」など言ふもあり。また、侍女「前の世こそゆかしき御有樣なれ」など、口々めづる事どもを、(二)座に笑みて聞き居たり。(三)君は忍びて宣ひつる事を、ほのめかし宣ふ。中君「思ひそめつる事、執念きまで輕(五)しからず物(四)し給ふめるを、(六)實にたゞ今の有樣などを思へば、煩はしき心地すべけれど、(七)かの世を背きてもなど思ひ寄り給ふらむも、同じことに思ひなして、試み給へかし」と宣へば、北方「つらき目見せず、人に侮られじの心にてこそ、鳥の音聞えざらむ住居まで、思ひ給へおきつれ。實に人の(八)御有樣けはひを、見奉り思う給ふるに、下仕(九)の程などにても、かゝる人の御あたりに、馴れ聞えむはかひありぬべし。まいて若き人は、心つけ奉りぬべく侍るめれど、數ならぬ身に、(一〇)物思の種をやいとゞ蒔かせて見侍らむ。貴きも卑きも、女といふ者はかゝる筋にてこそ、この世、後の世まで、苦しき身になり侍るなれと、思ひ給へ侍ればなむ、

(一)薫が
(二)浮舟の母が
(三)中君
(四)浮舟につきて薫の言ひし趣を母君に語る
(五)容易に變改せぬ薫の性質なるが
(六)現在の薫の有樣を思へば浮舟を薫に許すは面倒を求むる樣な物なれど、女二宮あるをいふ
(七)尼にする積で薫に任せて見ては如何
(八)薫の
(九)下女の身分であつても
(一〇)浮舟を薫に差上げたらば心配の種を求めさせる樣なものなるべし

ぬるを、(一)うちつけになど、淺う思ひなすまじう、宣はせ知らひ給ひて、(二)はしたなげなるまじうはこそ。(三)いとうひ〳〵しう習ひにて侍る身は、何事も嗚呼がましきまでなむ」と、語らひ聞えおきて出で給ひぬるに、この母君、「いとめでたく思ふやうなる御樣かな」とめでて、(四)乳母のゆくりかに(五)思ひよりて、度々言ひし事を、あるまじき事に言ひしかど、この御有樣を見るには、(六)天の川を渡りても、かゝる彦星の光をこそは待ちつけさせめ、(七)我が女は、斜ならむ人に見せむは惜しげなる樣を、夷めきたる人をのみ見習ひて、少將をかしこきものに思ひけるを、悔しきまで思ひなりにけり。(八)寄り居給へりつる眞木柱も茵も、名殘匂へるうつり香、いへばいと殊更めきたるまで有り難し。(九)時々見奉る人だに、度毎にめで聞ゆ。侍女「經などを讀みて、功徳の勝れたる事あゝめるにも、香の芳しきをやむごとなき事に、佛の宣ひ置けるも理なりや。(一〇)藥王品などにも、取りわきて宣へる、(一一)牛頭栴檀とかや、おどろ〳〵しき物の名なれど、(一二)先づかの殿の近く振舞ひ給へば、佛はまこと(一三)

(一)突然に浮舟を薫が望むと思つて母が薫の心を淺く解釋する事なき樣に
(二)附穂のない樣な思がなければ浮舟を我物にもすべし
(三)繼路には
(四)薫を
(五)附穗もなくに薫を聟にせんことを言ひ出して
(六)假令年に一度の逢瀨でも此樣な夫をこそ持たせたし
(七)浮舟は大抵の男にやるのは惜しい物なるに
(八)薫の
(九)薫を
(一〇)法華經の中
(一一)「若有レ人、聞二是藥王菩薩本事品一、能隨喜讃善者、是人現世、口中常出二青蓮華香一、身毛孔中常出二牛頭栴檀之香一」牛頭栴檀は牛頭山の栴檀
(一二)薫が眼前に其例を見せる故
(一三)うそはつかぬと

矢張中君に對して心を惱ます譯ならば宇治に浮舟を本尊にすゑて置いても滿足は出來まじ
(一)浮舟の母に我が浮舟をほしがる由を
(二)浮舟に讓る遁口上が大君の中君に讓りたるに似て縁起が惡い
(三)浮舟をなでものにして大君の戀しさを除かんと也、「なでもの」は禊の時に用ふる人形
(四)なで物は棄てて仕舞ふもの故、なで物にするといふ樣な御心では憑みにならぬ
(五)「大ぬさの引く手數多になりぬれば思へど得こそ憑まざりけれ」
(六)浮舟が氣の毒
(七)「大ぬさと名にこそ立てれ流れても遂に寄る瀬はありてふものを」
(八)つまらぬ爭を此無常な世の中でする事哉
(九)薫が中君に捨てらるるをいふ
(一〇)浮舟の母も薫が長居しては怪しむべければ
(一一)浮舟の母

め。時々心やましくば、なか〳〵山水も濁りぬべく」と宣へば、はて〳〵は、
中君「うたての御聖心や」と、ほのかに笑ひ給ふも、をかしう聞ゆ。薫「いでさらば(一)傳へはてさせ給へかし。(二)この御遁言葉こそ、思ひ出づればゆゝしく」と宣ひて、また涙ぐみぬ。

薫(三)「見し人のかたしろならば身にそへて戀しきせゞのなでものにせむ

と例の戲に言ひなして、紛らはし給ふ。

中君(四)「みそぎ河せゞに出さむなでものを身に添ふかげと誰かたのまむ

(五)引手數多にとかや。さかしらなれど、(六)いとほしくぞ侍るや」と宣へば、薫(七)「つひに寄る瀬は更なりや。(八)いとうれたき樣なる水の泡にも爭ひ侍るかな。(九)掻き流さるゝ撫物、いで誠ぞかし。いかで慰むべき事ぞ」など言ひつゝ、暗うなるもうるさければ、中君(一〇)「かりそめに物したる人も、怪しと思ふらむとつゝましきを、今宵は猶疾くかへり給ひね」と、こしらへやり給ふ。薫「さらばその(一一)客人に、かゝる心の願年經

(一)匂が遲參したるが、是は中君の所爲ならんと思ふ
(二)匂の代りを務めてくれたる挨拶也
(三)匂が今夜宿直なるをつきとめて薫が下心ありて來れるなるべし
(四)大君が忘れられず
(五)薫が
(六)さう何時迄も大君を忘れずに居られる譯はなし、以下中君の心
(七)薫が忘れぬ樣に言ふは一旦深く思ひ込みし事故今更丸で忘れるのも工合惡しと思ひての事かと思へど
(八)矢張心底から大君を思ひ居る薫の心根を
(九)中君が
(一〇)薫が中君に
(一一)中君が
(一二)中君に懸想する薫の心をやめさせる材料を與へる積りでか浮舟の事を中君が話し出して、「戀せじとみたらし川にせし御禊神はうけずぞなりにけらしも」
(一三)浮舟は二條院に隱れて居ると
(一四)浮舟も見たくはあれど突然中君を浮舟に乘換へる氣にもなれず
(一五)浮舟が我が中君に對する戀を叶へてくれるならよけれど其が叶はず

も(一)いと懈怠して參らせ給へるを、あいなう御あやまちに、推し量り聞えさせてなむ」と聞え給へば、中君「實に(二)疎ならず、思ひやりふかき御用意になむ」とばかり答へ聞え給ふ。宮は内裏にとまり給ひぬるを見おきて、たゞならずおはしたるなゝめり。例の物語、(三)いと懷しげに聞え給ふ。事に觸れて、唯古(四)の忘れがたく、世の中の物憂くなり勝るよしを、現には言ひなさで、(五)かすめ憂へ給ふ。(六)さしもいかでか、世を經て心に離れずのみはあらむ、(七)猶淺からず言ひそめてし事のすぢなれば、名殘なからじとにや、など見なし給へど、人の御氣色は著きものなれば、見もて行くまゝに、(八)哀なる御心ざまを、(九)岩木ならねば思ほし知る。(一〇)恨み聞え給ふ事も多かれば、(一一)いとわりなく打歎きて、(一二)かゝる御心をやむる御禊をせさせ奉らまほしく思すにやあらむ、かの人形宣ひ出でて、(一三)「いと忍びてこのわたりになむ」と、ほのめかし聞え給ふを、(一四)彼もなべての心地はせず、ゆかしくなりにたれど、打ちつけにふと移らむ心地はたせず。薫「いでや、(一五)その本尊願滿て給ふべくはこそ尊から

(一)匂と薫と
(二)別々に見ればどちらがどちらとも言はれず
(三)薫をいふ
(四)匂は薫に壓倒さるゝ事はなし
(五)人拂ひし
(六)薫の
(七)北方が
(八)薫に逢ふが氣恥かしく
(九)際限なく心深き樣
(一〇)明石の子ども
(一一)匂の

みじきものに聞ゆめれど、宮の御有様には、え竝び給はじ」と言へば、御前に侍ふ人々、侍女「いさや、えこそ聞え定めね」と聞えあへり。中君「むかひて(一)おはせし樣、宮はいと情なげに、見にくゝこそ見え給ひしか。とり(二)放ちては、いづれもともかくも分れず。容貌よき人は、(三)人を消つこそ憎けれ」と宣へば、人々わらひて、侍女「されど御前には、壓され奉り給はざゝめり。如何ばかりならむ人が、宮をば消ち奉らむ」(四)などいふ程に、今ぞ車より下り給ふなると聞く程、かしかましきまで追ひ(五)のゝしりて、頓にも見え給はず。待たれたる程に、歩み(六)入り給ふ樣を見れ(七)ば、實にあなめでた、をかしげとも見えずながらぞ、なまめかしうあてに淸げなるや。漫に見え(八)苦しう恥かしくて、額髮なども引きつくろはれて、心はづかしげに用意多く、(九)際もなき樣ぞし給へる。內裏より參り給へるなるべし、御前どものけはひ數多して、寓「昨夜后の宮の惱み給ふよし承りて參りたりしを、宮達(一〇)の侍ひ給はざりしかば、いとほしく見奉りて、(一一)宮の御代に今まで侍ひ侍りつる。今朝

（一）陸奥の名所に浮島あり、されば陸奥に在りし頃の事を語る意味なるべし
（二）「世の中は昔よりやは憂かりけん我身一つの爲になれるか」
（三）常陸にありし頃の物語
（四）我が邸
（五）子ども
（六）自分をさがし居るならん
（七）國守の妻杯になり下るのはつらきものと
（八）浮舟は中君に任せて自分は構ふまじ
（九）どうか見苦しく落ぶれる樣の事なくてあらせたしと中君が思ふ
（一〇）以下浮舟を批評する中君の心
（一一）氣ばたらきもあり
（一二）大君の樣子によく似て居る
（一三）大君の身代りをさがして居る薫に
（一四）薫
（一五）浮舟
（一六）一寸見た人々がひどく薫を譽めるけれども

など、年頃の物語、浮島（一）の哀なりし事も聞え出づ。北方「我身（二）ひとつのとのみ、言ひ合する人も無き、筑波山（三）の有樣も、斯くあきらめ聞えさせて、何時も〳〵、いと斯くて侍はまほしく、思ひ給へなり侍りぬれど、彼處（四）には善からぬ怪（五）しのものども、いかに立ち騷ぎ（六）もとめ侍らむ。流石に心あわたゞしく思ひ給へらるゝ。（七）かかる程の有樣に身をやつすは、口惜しきものになむ侍りけると、身にも思ひ知らるゝを、（八）この君は唯任せ聞えさせて、知り侍らじ」など、かこち聞えかくれば、（九）實に見苦しからでもあらなむと見給ふ。容貌（一〇）も心ざまも、え憎むまじうらうたげなり、物恥もおどろ〳〵しからず、樣よう兒めいたるものから、かど（一一）なからず、近く侍ふ人々にも、いとよく隱れて居給へり、物など言ひたるも、昔の人（一二）の御樣に、怪しきまで覺え奉りてぞあるや、かの人形（一三）もとめ給ふ人に見せ奉らばや、と打思ひ出で給ふ折しも、大將殿（一四）參り給ふと人聞ゆれば、例の御几帳引きつくろひて、心づかひす。この客人（一五）の母君、北方「いで見奉らむ。ほの（一六）かに見奉りける人の、い

ど、人も聞きけりと思ふに(一)、少將の思ひ侮りける樣などほのめかして、北方「命侍(二)らむかぎりは、何か、朝夕の慰めぐさにて見過しつべし。打捨て侍りなむ後は(三)、思はずなる樣に、散りぼひ侍らむ(四)が悲しさに、尼になして、深き山にやしすゑて(五)、さる方に世の中を思ひ絶えて侍らましなどなむ、思う給へわびては、思ひ寄り侍る」など言ふ。中君「實に心苦しき御有樣にこそはあゝなれど、何か人に侮らるゝ御有樣は、かやうになりぬる人のさがにこそ(六)。さりとてもえ堪へこもらぬわざなりければ(七)、むげにその方に思ひおきて給へりし身だに(八)、かく心より外にながらふれば、まいていとあるまじき御事なり(九)。やつい給はむも(一〇)、いとほしげなる御樣にこそ」など、いと大人びて宣へば、母君いと嬉しと思ひたり(一一)。ねびにたる樣なれど、由なからぬさまして淸げなり。いたく肥え過ぎにたるなむ(一二)、常陸殿とは見えける。北方「故宮のつらく情なく思し放ちたりしに(一三)、いとゞ人げなく、人にも侮られ給ふと見給ふれど、かう聞えさせ御覽ぜらるゝにつけてなむ(一四)、古の憂さも慰み侍る」

(一)少將との縁談は人の噂にも上れりと思ふ故
(二)私の存命中は手許に置きても濟むべし
(三)私の死後は
(四)落魄するのが
(五)置きて
(六)浮舟や我が如く便なくなりたる身の常也
(七)其でも丸で世の中を捨てる譯にもゆかぬ物故
(八)世捨人にならんと決心せし我さへ
(九)浮舟を尼にする事は
(一〇)身をやつして尼になるも
(一一)北方の樣子
(一二)下品なるをいふ
(一三)八宮が情なく浮舟を子ともせざりし故何人にも侮られる譯なりとは思へど
(一四)中君が親切に言うて下さるので

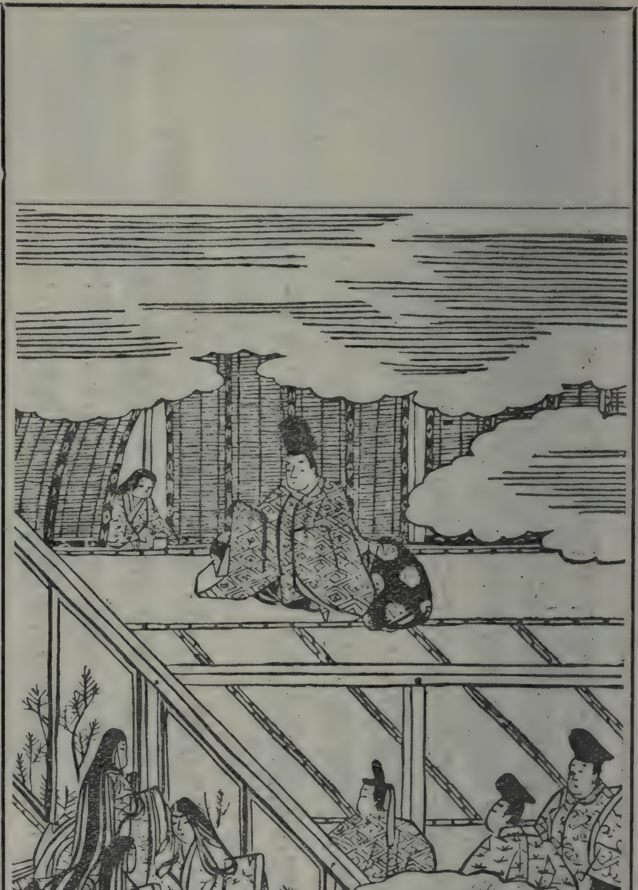
常に思ひなされて、見奉り知らずなりにければ、あるを、猶(一)この御事は、盡きせずいみじくこそ。大將殿(二)の、(三)萬の事に心の移らぬ由をうれへつゝ、淺からぬ御心の樣を見るにつけても、いとこそ口惜しけれ」と宣へば、北方「大將殿は、さばかり世に例なきまで、帝の(四)かしづき思したゞなるに、心驕し給ふらむかし。(五)おはしまさましかば、猶この事せかれしも、し給はざらましや」など聞ゆ。中君「いさや、(六)樣のものと、人笑はれなる心地せましも、(七)なか〳〵にやあらまし、(八)見果てぬにつけて心にくゝもある世にこそはと思へど、(九)かの君は、如何なるにかあらむ、怪しきまで物忘せず、(一〇)故宮の御後の世をさへ思ひやり深く、後見ありき給ふめる」など、心美しう語り給ふ。北方「(一一)かの過ぎにし御かはりに尋ねて見むと、この數ならぬ人(一二)をさへなむ、かの辨の尼君には宣ひける。(一三)さもやと思ひ給へ寄るべき事には侍らねど、(一四)一本ゆゑにこそはと、辱けれど、哀になむ思ひ給へらるゝ御心深さなる」など言ふ序に、(一五)この君をもて煩ふこと、泣く〳〵語る。(一六)細かにはあらね

(一)大君の事は悲しさ盡くる時なし
(二)薫
(三)大君の事のみ思はれて何事にも氣が乘らぬと歎きて
(四)薫を大事にせらるゝに
(五)大君存生ならば矢張薫と女二宮との縁を妨ぐる譯にはゆかず、つらき思をしたであらう
(六)姉妹揃ひて同樣の運命に逢ひて
(七)却つて惡いかも知れぬ
(八)大君も半途で亡くなりたればこそ床しくも思はるゝならんとは思へども
(九)薫は
(一〇)八宮の後世の事迄心配して
(一一)死せし大君の代に
(一二)浮舟
(一三)薫に差上ぐる抔とは中々思ひも寄らぬ事なれど
(一四)是も大君の妹なればこそ其迄に言うても下さる事と、「紫の一本故に武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る」
(一五)浮舟の所置に困り居る事
(一六)委しくは語らねど

のつまより覗き給へるを、打見給ひて(一)、立ち返り寄りおはしたり。匂「御心(二)よろしく見え給はば、やがてまかでなむ。猶苦しくし給はば(三)、今宵は宿直にぞ。今は一夜を隔つるも覺束なきこそ、苦しけれ」とて、暫し慰め遊ばして、出で給ひぬる樣の、返すゞ見るとも見るとも飽くまじく、匂ひやかにをかしければ、出で給ひぬる名殘さうゞしくぞ眺めらるゝ。

女(四)君の御前に出で來て、いみじくめで奉れば、田舍びたると思して笑ひ給ふ。北方「故上(五)の亡せ給ひしほどは、いふかひなく(六)幼き御程にて、如何にならせ給はむと、見奉る人も故宮(七)も思し歎きしを、こよなき御宿世の程なりければ、さる山懷の中にも、生ひ出でさせ給ひしにこそありけれ。口惜しく、故姫君(八)のおはしまさずなりにたるこそ、飽かぬ事なれ」など、打泣きつゝ聞ゆ。君も打泣き給ひて、中君「世の中の怨めしく心細き折々も、又斯くながらふれば、少しも思ひ慰めつべき折もあるを、いにしへ(九)頼み聞えける影どもに後れ奉りけるは、なかなかに尋

(一)匂が
(二)明石の御病氣がよささうならば直に歸つて來べし
(三)明石が
(四)中君の前に行きて北方が匂を譽め立つれば
(五)中君の母
(六)中君が
(七)八宮
(八)大君
(九)幼時父母に死なれし事は丸で覺えのなき事故却て尋常の事と思はれて深く悲しくもなきが



宮(一)、日たけて起き給ひて、匂「后(二)の宮例の惱ましくし給へば、參るべし」とて、御裝束などし給ひておはす。(三)ゆかしう覺えてのぞけば、うるはしく引きつくろひ給へるはた、似るものなく、氣高く愛敬づき淸らにて、若君をえ見捨て給はで、もてあそびおはす。御粥強飯など參りてぞ、(四)こなたより出で給ふ。今朝よりまゐりて、侍の方にやすらひける人々、今ぞ參りて(五)物など聞ゆる中に、淸げだちて、(六)何でふ事なき人のすさまじき顏したる、直衣著て太刀佩きたるあり。御前にて(七)何とも見えぬを、侍女「彼ぞこの常陸守の婿の少將な。初(八)はこの御方にと定めけるを、守の女を得てこそ勞はられめ(九)など言ひて、(一〇)かじけたる女の童をえたるなゝなり」侍女「いさ、(一一)この御あたりの人はかけてもいはず。(一二)かんの君の方より、よく聞く便のあるぞ」など、己がどち言ふ。(一三)聞くらむとも知らで、人のかく言ふにつけても、(一四)胸つぶれて、少將をめやすき程と思ひける心も口惜しく、實に(一五)異なる事なかるべかりけりと思ひて、いとゞしく侮らはしく思ひなりぬ。若君の這ひ出でて、御簾

---

❽ 母北方中君に浮舟の所置を謀る、中君薫に浮舟の事を語る、母北方薫を隙見す、中君浮舟を薫に許さんことを勸む

(一)匂
(二)明石姫君
(三)北方が
(四)中君の方より
(五)匂に
(六)別に難ずべき點なき、是常陸守の聟の左近少將也
(七)目にもつかぬを
(八)浮舟の聟にと
(九)常陸守に大事にせらるべし抔
(一〇)常陸守の次女を誘りていふ也
(一一)二條院では頓と其樣な噂もせず
(一二)常陸守
(一三)北方が聞いて居るとも氣が附かずに
(一四)北方が
(一五)少將は格別の人でもなささうなりと

(一)假令一年に一度の逢瀨でも
(二)匂が抱きて
(三)中君
(四)匂が几帳をどけて
(五)八宮
(六)非常に違つたものだやと
(七)匂が
(八)匂が
(九)匂の樣子
(一〇)母北方の心
(一一)卑しき我々づれは
(一二)浮舟も此樣に宮樣に連添はしても
(一三)富の力を賴みて
(一四)常陸守
(一五)娘ども
(一六)樣子が非常に劣つて居るを

樣容貌を見れば、(一)織女ばかりにても、かやうに見奉り通はむは、いといみじかるべきわざかな、と思ふに、(二)若君抱きてうつくしみおはす。(三)女君短き几帳を隔てておはするを、(四)推しやりて、物など聞え給ふ。御容貌どもいと淸らに似合ひたり。(五)故宮の淋しくおはせし御有樣を、思ひくらぶるに、宮達と聞ゆれど、(六)いとこよなきわざにこそありけれと覺ゆ。几帳の内に入り給ひぬれば、若君はわかき人乳母などもてあそび聞ゆ。人々參り集れど、(七)(八)惱ましとて大殿籠り暮しつ。御臺こなたにまゐる。(九)萬の事けだかく、心ことに見ゆれば、(一〇)我がいみじき事を盡すと思へど、(一一)なほ〳〵しき人のあたりは口惜しかりけり、と思ひなりぬれば、(一二)我が女もかやうにてさし竝べたらむに、かたはならじかし、(一三)ゆたけき勢を賴みて、(一四)父ぬしの、后にもなしてむと思ひたる人々は、(一五)おなじ我が子ながら、(一六)けはひこよなきを思ふも、猶今より後も心は高く遣ふべかりけりと、夜一夜あらましごとに思ひつづけけり。

(一)奉公人といふ名目なりし爲に
(二)八宮に
(三)中君を
(四)二條院の人々には方角よけといふ振れ込で浮舟が來し事故
(五)前にも北方は二條院に來し事ある也
(六)匂が二條院へ來し也
(七)北方が
(八)力にして
(九)匂の前に
(一〇)各自の職掌の事
(一一)匂の
(一二)匂の
(一三)何といふ立派な御身分ぞ、以下北方の心
(一四)中君の運のよさよ
(一五)餘所に居て思へば
(一六)いくら立派な夫でもつらき思をさせられてはつまらぬと
(一七)匂の

は離れ奉るべき人かは。(一)仕う奉ると言ひしばかりに、(二)數まへられ奉らず口惜しくて、かく人には侮らるゝ、と思ふには、かく強ひて(三)睦び聞ゆるもあぢきなし。(四)こゝには御物忌と言ひてければ、人も通はず、二三日ばかり母君も居たり。(五)此度は心のどかに、この御有樣を見る。

(六)宮わたり給ふ。ゆかしくて物の間より(七)見れば、いと淸らに、櫻を折りたる樣し給ひて、我が(八)賴もし人に思ひて、つらう怨めしけれど心には違はじと思ふ常陸守より、樣容貌も人のほども、こよなく見ゆる五位四位ども、(九)相跪き侍ひて、この事かの事と、(一〇)あたり〳〵の事ども、家司どもなど申す。又若やかなる五位ども、顏も知らぬどもも多かり。我が繼子の式部の丞にて藏人なる、內裏の御使にて參れり。(一一)御あたりにもえ近く參らず、こよなき(一二)人の御けはひを、(一三)あはれこは何人ぞ、かかる御あたりにおはする(一四)めでたさよ、(一五)餘所に思ふ時は、(一六)めでたき人々と聞ゆとも、つらき目見せ給はばと、物憂く推し量り聞えさせつらむあさましさよ、(一七)この御有

て、のゝしりけるを、下種などは、それをいとかしこき情に思ひければ、君も、(一)いとあらまほしく、心かしこく取り寄りにけりと思ひけり。北の方、(二)この程を見捨てて知らざらむも僻みたらむと思ひ念じて、唯するまゝに任せて見居たり。(三)客人の御出居、侍としつらひさわげば、家は廣けれど、(四)源少納言東の對には住む、男子などの多かるに、所もなし。(五)この御方に客人住みつきぬれば、廊などほとり(六)ばみたらむに、住ませ奉らむも飽かずいとほしく覺えて、とかく思ひめぐらす程、(七)宮にとは思ふなりけり。(八)この御方ざまに數まへ給ふ人のなきを、侮るなゝめりと思へば、(九)ことに許い給はざりしあたりを、あながちに參らす。乳母若き人々、(一〇)二三人ばかりして、西の廂の、北に寄りて人氣遠き方に局したり。年頃かく(一一)遙なりつれど、(一二)疎く思すまじき人なれば、參るときは恥ぢ給はず、(一三)いとあらまほしく、けはひ殊にて、若君の御あつかひをしておはする御有樣、羨ましく覺ゆるもあはれなり。(一四)我も(一五)故北の方に

(一)少将も満足して常陸守に縁を求めたるは賢き遣方なりしと思ひ居れり
(二)守が親しき聟をもてなす騒の中を逃出して行くも意地悪き事なるべしと悸へて
(三)こゝは少将の御座敷と
(四)先妻の娘の聟
(五)浮舟の方に少将が居る故
(六)端近なる處に浮舟を置くのも可愛想で
(七)中君へ預けんと北方が思へる也
(八)常陸守の勝手な振舞も浮舟に身寄のなきを侮りての事と北方が思ふ故
(九)ろく／＼承知もせぬ中君の處へ
(一〇)浮舟に付添ひて二條院へ移りて
(一一)無沙汰なりしかど
(一二)中君が北方を疎くは思はぬ筈なれば北方も別段二條院へ行くことを窮屈に思はず
(一三)中君が
(一四)母北方の心
(一五)北方は八宮の北方の姪也

で止みにし人を、我ひとり殘りて、知り語らはむもいとつゝましく、又見苦しき(一)樣にて世にあぶれむも、知らず顏にて聞かむこそ、心苦しかるべけれ、異なる事なくて、互に(二)散りほはむも、無き人の御爲に見苦しかるべきわざを、思し煩ふ。大輔(三)が許にも、いと心苦しげに言ひ(四)やりたりければ、大輔「さる(五)樣こそは侍らめ。人にくゝは(六)したなくもな宣はせそ。かゝる(七)劣の者の、人の御中にまじり給ふも、世の常のことなり。あまりいと情なく宣ふまじき事なり」など聞えて、大輔「さらば、かの西の方に(八)、かくろへたる所し出でて、いとむづかしげなゝめれど(九)、さても過ぐい給ひつべくば(一〇)、しばしの程」と言ひ遣しつ。いと嬉しと思ほして(一一)、人知れず出でたつ。(一二)御方もかの御あたりをば、睦び聞えまほしと思ふ心なれば、なかなか、かゝる事どもの出來たるを嬉しと思ふ。守、(一三)少將のあつかひを、如何ばかりめでたき事をせむと思ふに、そのきら〳〵しかるべき事も知らぬ心には、唯荒らかなる東絹(一四)どもを、押しまろがして投げ出でつ。食物も所狹きまでなむ運び出で

(一)浮舟が落ぶれるのを構はぬも
(二)中君も浮舟も世に落ぶれ漂泊せんも
(三)中君方の侍女
(四)常陸守の北方が
(五)中君にいふ詞
(六)人を當惑させる樣な返事をなさるな
(七)浮舟をいふ
(八)二條院の西の對に隱れ間を拵へて
(九)甚だ面倒な譯ではあれど
(一〇)暫時浮舟を預るべし
(一一)北方が
(一二)浮舟も中君には親しみ寄りたく思ふ事故
(一三)少將をどの樣に丁寧に扱はんかと
(一四)關東で出來たる粗製の絹



(一)少將も媒の詞によりて常陸守方の立派なるを信じ缺點もなき樣に思ひて、浮舟に約束したる日より此頃に通ひ初めたり
㊆浮舟二條院に預けらる、母北方匂宮を隙見す
(二)浮舟の乳母
(三)浮舟を今迄通り側に置くのもいやなれば
(四)中君
(五)用事がなくて手紙を上げるも失禮と常は御遠慮申して思ふ樣に御音信も申上げねど
(六)浮舟を他所に置きたく思ふ故
(七)其御殿の内に隱して置いて下さらば
(八)私如きつまらぬ者の手一つでは保護しきれず
(九)御手助けを乞ふ處としては、第一に中君を數へる
(一〇)中君が
(一一)父八宮が、以下中君の心

柄のあたらしく、警策にものし給ふ君なれば、我も〱と、婿に取らまほしくする人の多かゝなるに、取られなむも口惜しくてなむ」と、かの媒に謀られ言ふもいと嗚呼なり。(一)男君も、この程の嚴しく思ふやうなる事と、萬の罪あるまじう思ひて、その夜もかへず來そめぬ

母君、かの御方(二)の乳母、いとあさましく思ふ。ひが〱しき樣なれば、とかく見(三)あつかふも心づきなければ、(四)宮の北の方の御もとに御文奉る。

北方(五)その事と侍らでは、狎々しくやと畏りて、え思ひ給ふるまゝにも聞えさせぬを、愼むべきこと侍りて、暫時所(六)かへさせむと思ひ給ふるに、(七)いと忍びて侍ひ給ひぬべき、かくれの方候はば、いとも〱嬉しくなむ。(八)數ならぬ身ひとつの影に隱れもあへず、哀なることのみ多く侍る世なれば、(九)頼もしき方には先づなむ。

と、打泣きつゝ書きたる文を、(一〇)哀とは見給ひけれど、(一一)故宮の、さばかり許し給は

㊅ 少將常陸守の聟になる

(一)娘の婚禮の支度を
(二)浮舟の方によいのが澤山居る故其を當分次女の方へ借してくれ
(三)浮舟の方は帳なども新調したる事故此方を婚禮の時其儘用ひる事にして早急の事故別に次女の爲に用意する事はすまじ
(四)浮舟方に守が來て
(五)北方が今まで見よくさつぱりと調へて置きし室内を
(六)厨子は棚の戸あるもの、二階は戸無きもの
(七)默つて傍觀す
(八)浮舟
(九)北方の腹は分つた
(一〇)浮舟も他の娘も
(一一)我次女を北方が構はぬなら構はぬでよろしと也
(一二)北方が構はぬなら
(一三)娘の樣子
(一四)丸々した子
(一五)小袿の丈位の長さ
(一六)髮の末が細くない
(一七)守が
(一八)北方が浮舟の聟にしかゝりたる人を橫取するでもなしとは思へど
(一九)少將の人物が惜しいもので

守はいそぎ(一)立ちて、守「女房など、(二)こなたにめやすき數多あゝなるを、この程はあらせ給へ。やがて(三)帳なども新しく仕立てられたゝめる方を、事俄になりにたゝめれば、取りわたし、とかく改むまじ」とて、(四)この西の方に來て、立ち居とかくしつらひ騒ぐ。(五)目安き樣にさばらかに、あたり〳〵あるべき限りしたる所を、さかしらに屛風ども持て來て、いぶせきまで立て集めて、(六)厨子二階など、怪しきまでし加へて、心をやりて急げば、北の方見苦しく見れど、口入れじと言ひてしかば、(七)たゞに見聞く。(八)御方は、北面に居給へり。守、(九)「人の御心は見知りはてぬ。唯、(一〇)同じ子なれば、さりともいと斯くは思ひ(一一)放ち給はじとこそ思ひつれ。(一二)さばれ世に母なき子は無くやはある」とて、女を、晝より乳母と二人、撫でつくろひ立てたれば、憎げに(一三)もあらず。年十五六の程にて、いと小やかにふくらか(一四)なる人の、髮美しげにて(一五)小袿のほどなる、(一六)裾いとふさやかなり。これをいとめでたしと思ひて、(一七)撫でつくろふ。守「何か、(一八)人のことざまに思ひかまへられける人をしもと思へど、(一九)人

(一)女三宮の御殿も結構なれども其處に浮舟を置くも心配なもの也
(二)中君
(三)身分はともあれ一人を守つてくれる男が夫としては頼もしい
(四)八宮
(五)我を女の數とも思召さゞりしかば
(六)常陸守は
(七)一本槍で
(八)何か事ある時の常陸守の心構が
(九)心にあはぬ事あれば喧嘩をしても黒白をわける
(一〇)自分がつまらぬ身分では其中に交りてもつまらぬ
(一一)浮舟を
(一二)浮舟を

の御方にあらせて、時々も見むとは思しもしなむ。(一)それはた實にめでたき御あたりなれども、いと胸痛かるべきことなり。(二)宮の上の、かく幸人と世に申すなれど、物思はしげに思したるを見れば、(三)如何にも〳〵二心なからむ人のみこそ、めやすく頼もしきことにはあらめ。我が身にても知りにき。(四)故宮の御有樣は、いと情々しく、めでたくをかしくおはせしかど、(五)人數にも思さゞりしかば、如何ばかりかは心憂くつらかりし。(六)このいといふかひなく、情なく樣あしき人なれど、(七)ひたおもむきに二心なきを見れば、心やすくて年頃をも過しつるなり。(八)折節の心ばへの、かやうに愛敬なく用意なきことこそ憎けれ、歎かしく怨めしき事もなく、かたみに(九)打ち諍ひても、心に合はぬ事をばあきらめつ。上達部親王達にて、みやびかに心恥かしき人の御あたりといふとも、(一〇)我が數ならではかひあらじ。萬の事我が身からなりけりと思へば、萬に悲しくこそ(一一)見奉れ。いかにして、(一二)人笑へならずしたて奉らむ」と語らふ。

(一)かゝる嫌な奴の傍には寄りつくまじと思へど
(二)申込を承諾して大騒ぎする故
(三)申込む少將も承諾する守も丁度よき相手同士分らずやの寄合なれば
(四)自分は
(五)何處へか暫時行つて居たい
(六)浮舟
(七)少將の變改は却て浮舟の幸であるのかも知れぬ
(八)少將をいふ
(九)浮舟の美點もわかるまじ
(一〇)薫
(一一)浮舟を思ひて仰せられた事もある
(一二)薫へ差上ぐる御思案をなされ
(一三)薫は大抵の女はいやと仰せられて
(一四)夕霧、紅梅
(一五)娘の聟にしたき趣を
(一六)女二宮
(一七)浮舟を女三方の侍女にして置きて

て、かくは言ひなるべしや。(一)かく心憂く近きあたりを見じ聞かじと思ひぬれど、守の斯くおもだたしき事に思ひて、(二)受取り騒ぐめれば、あさましく(三)あひ〳〵にたる世の人の有様を、(四)すべて斯かる事に口入れじと思ふに、いかで(五)此處ならぬ所に、しばしありにしがな」と打歎きつゝ言ふ。乳母もいと腹だたしう、(六)わが君をかく貶しむる事と思ふに、乳母「何か、(七)これも御幸にて違ふ事とも知らず。かく心口惜しく御座しける君なれば、(八)あたら(九)御様をも見知らざらまし。わが君をば、心ばせあり、物思ひ知りたらむ人にこそ見せ奉らまほしけれ。(一〇)大將殿の御様容貌の、ほのかに見奉りしに、さも命延ぶる心地のし侍りしかな。(一一)哀にはた聞え給ふなり。御宿世に任せて、(一二)さも思し寄りねかし」と言へば、北方「あな恐しや。人の言ふを聞けば、年頃、(一三)おぼろげならむ人をば見じと宣ひて、(一四)左の大殿、按察大納言、式部卿宮などの、いと懇に(一五)ほのめかし給ひけれど、聞き過ぐして、帝の(一六)御かしづき女を得給へる君は、如何ばかりの人をか、まめやかには思さむ。(一七)かの母宮など

(一)我が次女を望みて來し少將を奪って浮舟に宛がはんとしたるは不都合なり
(二)結構な親王の御娘をほしいといふ人は誰もなく、賤しい我が娘を少將は望まれる
(三)北方が
(四)少將は浮舟は望ましからずとて我が娘に乘り更へたれば
(五)御意の通りと
(六)思慮なく
(七)しばらく考へるに
(八)浮舟方に北方が
(九)浮舟が
(一〇)浮舟の器量は
(一一)娘どもの聟はどれも同じく大事には思へども
(一二)特に浮舟の聟の爲には
(一三)一人前にもならぬ次女を
(一四)浮舟をさしおいて斯く申込むとは何事

長々と、滞る所もなく言ひ續けて、守「我を思ひ隔てて、(一)あこの御懸想人を奪はむとし給ひけるが、おほけなく心幼きこと。(二)めでたからむ親王の御女をば、ようぜさせ給ふ君達あらじ。賤しく異様ならむ某等が女子をこそ、賤しうも尋ね宣ふめれ。かしこく(三)思ひ企てられたれど、(四)もはら本意なしとて、外様へ思ひなり給ひぬべかゝなれば、同じくばと思ひてなむ、さらば(五)御心と許し申しつる」など、怪しく(六)奥無く、人の思はむ所も知らぬ人にて、言ひ散らし居たり。北の方あきれて物も言はれで、(七)とばかり思ふに、世の中の心憂さをかきつらね、涙も墮ちぬばかり思ひ續けられて、やをら立ちぬ。

(八)此方に渡りて見るに、(九)いとらうたげにをかしげにて居給へるに、(一〇)さりとも人には劣り給はじとは思ひ慰む。乳母と二人、北方「心憂きものは人の心なりけり。おのれは、(一一)同じ如思ひあつかふとも、(一二)この君のゆかりと思はむ人のためには、命をも讓りつべくこそ思へ。親なしと聞き侮りて、(一三)まだ幼くなりあはぬ人を、(一四)さし越え

（一）少將は拔目なき男にて
（二）浮舟に約したる日より實娘の方へ通ひ始めたり
㊄ 少將の心變りを知れる北方の憂悶
（三）少將の心變りを知らずして浮舟の婚姻の用意をする也
（四）室内の飾附
（五）浮舟
（六）母北方の心
（七）八宮が死なれても
（八）薫の申込に對しても身分不相應ではあるが應ぜぬ譯もない
（九）世間では常陸守の子であるやら無いやら分らず
（一〇）實子で無いとて却て輕蔑するらしいのが殘念
（一一）母北方の心
（一二）少將をいふ
（一三）かく懇に申込まれたる上は其に隨ふがよろしかるべし
（一四）口前のよきに
（一五）聟取の當日が
（一六）浮舟方に北方が

もしき事をこそと、（一）いと全くかしこき君にて、思ひ取りてければ、日をだに取り替へで、（二）契りし暮にぞおはしはじめける。

（三）北の方は人知れずいそぎ立ちて、人々の裝束せさせ、（四）しつらひなど由々しうし給ふ。（五）御方をも頭洗はせ、取りつくろひて見るに、（六）少將などいふ程の人に見せむも、惜しくあたらしき樣を、哀や親に知られ奉りて生ひ立ち給はましかば、（七）おはせずなりにたりとも、（八）大將殿の宣ふらむ樣にも、おほけなくとも、などかは思ひ立たざらまし、されど、内々にこそ斯く思へ、（九）外の音聞は守の子とも思ひわかず、また實を尋ね知らむ人も、（一〇）なか〳〵貶しめ思ひぬべきこそ悲しけれ、など思ひつづく。（一一）如何はせむ、盛過ぎ給はむもあいなし、賤しからず目安き程の（一二）人の、（一三）かく懇に宣ふめるを、など心ひとつに思ひ定むるも、媒の（一四）かく言善くいみじきに、女はまして賺されたるにやあらむ。（一五）明日明後日と思へば、心あわたゞしく忙がしきに、（一六）此方にも心のどかに居られたらず、そゝめきありくに、守外より入り來て、

(一)幸なるべき事と思へどよくは分らずと卑下していふ也
(二)媒人が
(三)北の方の方へも
(四)少將方へ
㊃少將常陸守の女に婿を定む
(五)媒人が少將に
(六)常陸守の樣子を
(七)舊註贖勞の字をあてたり、今の所謂運動費の類
(八)變改の趣を斷りしか
(九)北方が非常に力を入れて居るのに其をはづして實娘に乘替へたらば不都合な樣に批難する人もあるべし
(一〇)常陸守の實の二女
(一一)浮舟は中での年長者故
(一二)少將の申込を浮舟に振向けて返事をされし迄なり
(一三)母が非常に浮舟を大事にすると、少將の心も
(一四)突然今の樣に言ふも
(一五)一旦は北方に恨まれ
(一六)行末力になる方を取るがましなりと

の童の爲にも、幸(一)とあるべき事にやとも知らず」と、よろしげにいふ時(二)に、いと嬉しくなりて、妹にも斯る事ありとも語らず、彼方(三)にも寄りつかで參(四)りぬ。守の言ひつる事を、いとも〱よげにめでたしと思ひて、聞ゆれば(五)、君少し鄙び(六)てぞあるとは聞き給へど、憎からず、打ち笑みて聞き居給へり。大臣にならむそ(七)くらうを取らむなどぞ、あまりおどろ〱しき事と、耳留りける。少將「さて、かの北の方には斯くとものしつや(八)。かの志(九)ことに思ひ始め給ふらむに、引き違へたらむ、僻々しくねぢけたる樣にとりなす人もあらむ。いざや」と思したゆたひたるを、媒「何か北の方も、かの姫君(一〇)をば、いとやむごとなきものに思ひかしづき奉り給ふなりけり。唯中(一一)のこのかみにて、年もおとなび給ふを、心苦しき事に思ひて、其方(一二)にとおもむけて、申されけるなり」と聞ゆ。月頃は、又なく、世の(一三)常ならずかしづくと言ひつるものの、うちつけに斯く言ふも如何ならむ(一四)、と思へども、猶ひとわたりは(一五)、つらしと思はれ、人には少し譏らるとも、ながらへて(一六)頼

(一)少将
(二)少将は實に得難き聟君なれば
(三)少将から言込のあるを幸に極めて仕舞ふがよかるべし
(四)常陸守が
(五)少将が外へ氣がむいて仕舞ふべし
(六)唯々はげる心配のない實際を申上げるのぢや
(七)少将の現在の俸祿などの不足の點は
(八)下にも置かず大事にすべし
(九)中途で我が死にたりとも
(一〇)此家の外に所有權を争ふ人はなし
(一一)此少将に奉らんとする娘は別段の愛子也
(一二)少将が大事にしてくれるなら
(一三)少将を
(一四)後楯の處は私が確に引受くべし
(一五)少将の爲にも、

(一)この君ぞ、帝にも親しく仕う奉り給ふなる。御心はた、いみじう警策に、重々しくなむおはしますめる。(二)あたら人の御婿を、(三)かう聞え給ふ程に思ほし立ちなむこそよからめ。かの殿には、我も〳〵婿とり奉らむと申す所々侍るなれば、(四)こゝに滋々なる御けはひあらば、(五)外ざまにも思しなりなむ。これ(六)唯後安きことをとり申すなり」と、いと多く、よげに言ひつゞくるに、いとあさましく鄙びたる守にて、打笑みつゝ聞き居たり。守「(七)この頃の御徳などの、心もとなからむ事はな宣ひそ。某命侍らむほどは、(八)頂にも捧げ奉りてむ。心もとなく、何を飽かぬとか思すべき。たとひ(九)あへずして、仕う奉りさしつとも、のこりの寶物、領じ侍る所、ひとつにても(一〇)又とり争ふべき人なし。子ども多く侍れど、これは(一二)樣異に思ひそめたる者に侍り。唯眞心に(一一)思しかへりみさせ給はば、大臣の位をもとめむと思し願ひて、世になき寶物をも盡さむとし給はむに、無き物侍るまじ。當時の(一三)帝しか惠み申し給ふなれば、(一四)御後見は心もとなかるまじ。これ(一五)彼の御爲にも、某が女

(一)媒が
(二)少將の志は
(三)常陸守の承諾してくれるのが望で
(四)當人は子供でも
(五)奧床しからぬ振舞、繼子の聟になるをいふ
(六)少將をいふ、以下媒が所謂媒人口をきく也
(七)浮氣に派手ならず
(八)一本に「この頃の」とある由なれば、其に隨ひて現在はまだ官卑くて祿も薄き樣なれどの意とすべきか
(九)少將の
(一〇)賤しき人の富めるには勝れり
(一一)今度の藏人頭に此少將がなるべき由は帝の仰ありし也
(一二)以下所謂帝の仰の趣
(一三)少將が
(一四)妻を娶りて其實親を後楯にせよ
(一五)直に出世させてやる

の思ひ給へむ事をなむ、思ひ給へ憚り侍る」と、いと細やかに言ふ。(一)よろしげなゝめりと嬉しく思ふ。媒「何かと思し憚るべきにも侍らず。(二)かの御志は、唯一所の(三)御許侍らむを願ひ思して、(四)いはけなく年足らぬ程におはすとも、眞實の親の、やむごとなく思ひおきて給へらむをこそ、本意叶ふにはせめ、專らさやうの、(五)ほとりばみたらむ振舞すべきにもあらず、となむ宣ひつる。(六)人柄はいとやむごとなく、おぼえ心にくゝおはする君なりけり。若き君達とて、(七)好々しくあてびてもおはしまさず、世の有樣もいとよく知り給へり。領じ給ふ所々もいと多く侍り。(八)まだころの御德なき樣なれど、(九)自ら人の御けはひのありける樣、(一〇)直人のかぎりなき富といふめる勢には、勝り給へり。來年四位になり給ひなむとす。(一一)こたびの頭は疑ひなく、帝の御口づからこて給へるなり。(一二)萬の事足らひてめやすき朝臣の、(一三)妻をなむ定めざゝなるはや、然るべき人擇りて(一四)後見を設けよ、上達部には、我しあればば、(一五)今日明日といふばかりに、なし上げてむ、とこそ仰せらるなれ。何事もたゞ

(一)浮舟を他人がましく隔てると
(二)私には浮舟の事を口出しさせぬ事故
(三)少將から
(四)親の私を見込みて御申込の事とは
(五)次女
(六)聟にならんと
(七)滅多な人を聟にするは心配の種と思ふ故
(八)少將の親なるべし
(九)常陸守が
(一〇)少將を
(一一)少將の人物勝れて居る故此人に御奉公申したしと思ひしかど
(一二)親しみなく
(一三)娘を
(一四)今迄の御趣意を無にしたる樣に妻が思ふならんと其を案じる

らぬ身に、樣々思ひ給へあつかふ程に、母なるものも、これ(一)を他人と思ひ分けたる事と、くねり言ふこと侍りて、ともかくも口入れ(二)させぬ人のことに侍れば、ほのかに然なむ仰せ(三)らるゝ事侍りとは、聞き侍りしかど、某(四)を取所に思しける御心は、知り侍らざりけり。さるはいと嬉しく思ひ給へらるゝ御事にこそ侍るなれ。いとらうたしと思ふ女(五)の童侍り。數多の中に、これをなむ命にもかへむと思ひ侍る。(六)宣ふ人々あれど、今の世の人の御心、定なく聞え侍るに、なか〳〵(七)胸痛き目をや見むの憚に、思ひ定むる事もなくてなむ、いかで後安くも見給へ置かむと、且暮かなしく思ひ給ふるを、少將殿におき奉りては、(八)故大將殿にも、(九)若くより參り仕う奉りき。家の子にて見奉り(一〇)しに、いと警策(一一)に、仕う奉らまほしと、心づきて思ひ聞えしかど、遙なる所に、打續きて過し侍る年頃のほどに、うひ〳〵(一二)しく覺え侍りてなむ、參りも仕う奉らぬを、かゝる御志の侍りけるを、返す〴〵畏りながら、仰のごと(一三)奉らむは易き事なれど、(一四)月頃の御心違へたる樣に、この人

つしかと思ほすほどに、ある人の(一)申しける樣、(二)誠に北の方の御腹にものし給へど、(三)かんの殿の御女にはおはせず、君達のおはし通はむに、世の聞えなむ諂ひたる樣ならむ、受領の御婿になりたまふかやうの君達は、唯(四)私の君の如く思ひかしづき奉りて、手に捧げたるごと、思ひあつかひ後見奉るにかゝりてなむ、(五)さる振舞し給ふ人々ものし給ふめるを、流石に(六)その御願は強ちなる樣にて、をさ〳〵(七)受けられ給はで、氣劣りておはし通はむこと、便なかりぬべき由をなむ、切に譏り申す人々あまた侍るなれば、たゞ(八)今思し煩ひてなむ。初より唯、(九)きら〳〵しう、人の後見と頼み聞えむに、堪へ給ふべき御覺をえらび申して、聞えはじめ申しゝなり、更に(一〇)こと人物し給はむといふ事知らざりければ、(一一)本の御志の儘に、まだ幼きも數多おはすなるを、(一二)許い給はゞいと嬉しくなむ、御氣色見てまうで來、と仰せられつれば」と言ふに、守、更に、かゝる御消息侍るよし、(一三)委しく承らず。誠に(一四)おなじ事に思ふべき人なれど、(一五)善からぬ童べあまた侍りて、はかぐ〵しか

(一)少將に
(二)浮舟は
(三)常陸守の娘に非ず
(四)娘の親が聟を主人の樣に尊びて
(五)地方官の聟になる公達もあるに
(六)繼娘の聟になつて其樣に主人扱にせよとは言ひ憎い事で
(七)常陸守に珍重されず他の聟より安く思はれて居るはつまらぬと
(八)少將が
(九)元々親の常陸守が立派で後楯になる人物なるを見込みて申込みたる也
(一〇)娘の中に他人が交つて居樣とは思はずに浮舟にかゝり合ひし事故
(一一)少將の本意の通り
(一二)實娘の聟になる事を
(一三)自分は知らぬ
(一四)浮舟は實子同樣に思ふべき筈の人なれど
(一五)自分に實子が多く行屆かぬ私が其方を心配して居るを見て

せまほしう、見る所ありて思ひ始めし事なり。もはら顏容貌の勝れたらむ女の願もなし。(一)しな貴に艶ならむ女を願はば、やすく得つべし。されど、(二)淋しう事打合はぬ、みやび好める人のはて〳〵は、物清くもなく、人にも人とも覺えたらぬを見れば、少し人に譏らるとも、なだらかにて世の中を過さむ事を願ふなり。守に斯くなむと語らひて、(三)さもと許す氣色あらば、何かはさも(四)」と宣ふ。

(五)この人は、(六)妹のこの西の御方にある便に、かゝる御文なども取り傳へ始めけれど、守には委しくも見え知られぬ者なりけり。たゞ行きて守の居たりける前に行きて、媒「(七)とり申すべき事ありてなむ」と(八)言はす。守、「(九)このわたりに時々出入はすと聞けど、(一〇)前には呼び出でぬ人の、何事言ひにかはあらむ」と、なま荒々しき氣色なれど、媒「左近少將殿の御消息にてなむ侍ふ」と言はせたれば逢ひたり。(一一)語らひ難げなる顏して、近う居寄りて言ふやう、媒「(一二)此頃内の御方にて、消息聞えさせ給ふを、御許ありて、(一三)この月の程にと契り聞えさせ給ふこと侍るを、(一四)日をはからひて、い

(一)素性貴く
(二)貧乏で不足勝で居ながら派手好きなる人の身の終はよい暮しも出來ず人にも輕蔑されるを見れば
(三)實娘をやりてもよしと承知する樣ならば
(四)さうしても差支なし
㊂ 少將の媒人常陸守に說きて寵愛の次女を少將に嫁せしめんとす
(五)媒人
(六)浮舟に仕へて居る
(七)申上ぐべき
(八)取次に
(九)其男は
(一〇)逢ひたる事はなき男が來たるは
(一一)媒人が言ひ出しにくさうにして
(一二)此方に少將が文をよこして浮舟を所望したるに
(一三)今月中に婚姻と約束したりしに
(一四)吉日を選びて居る中に

つべからむ人もがなと、宣はせしかば、さる便知り給へりと、取り申ししなり。更に浮びたる罪侍るまじき事なり」と、(一)腹惡しく詞多かるものにて申すに、君いと(二)あてやかならぬ樣にて、少將「さやうのあたりに行き通はむ、(三)人のをさ〳〵許さぬ事なれど、(四)今樣の事にて、咎あるまじう、もてあがめて後見だつに、罪隱してなむあるを、(五)同じごと内々に思ふとも、餘所の覺えなむ、へつらひて人の言ひなすべき。(六)源少納言讃岐の守などの、うけばりたる氣色にて出で入らむに、(七)守にもをさをさ受けられぬ樣にて、交はむなむ、いと人げなかるべき」と宣ふ。(八)この人追從あり、うたてある人の心にて、(九)これをいと口惜しう、此方彼方にいとほしう思ひければ、媒「誠に守の(一〇)女とおぼさば、(一一)まだ若うなどおはすとも、しか傳へ侍らむかし。(一二)中にあたるをなむ、姫君とて、守はいとかなしうし給ふなる」ときこゆ。少將「いさや、(一三)初より然言ひよれる事をおきて、又言はむこそうたてあれ。されど我が本意は、かの守の主の人がらものものしく、大人しき人なれば、後見にも

(一)其媒の男は
(二)品惡き樣子をして
(三)地方官杯の聟になる事は人がよくも言はぬ事なれど
(四)常世の風で娘の親が非常に大事にして世話してくれるのを取得にして聟になつて居るのであるに
(五)浮舟も内々では實子同樣かも知れぬが他人は我が常陸守に諂ひて聟になりたる樣に評判すべし
(六)先妻腹の姫の聟達
(七)我は繼娘の聟で
(八)此媒人は追從する嫌な男にて
(九)此緣談の破るゝを兩方へ氣の毒に思ひて
(一〇)實の娘の聟になる御望ならば
(一一)實の娘はまだ年弱であつても構はぬ、其娘の方へ御取持すべし
(一二)今の北方の腹に三人ある娘の中の第二女を
(一三)初浮舟を望んで話をしかけて置きながら其をやめて他の娘をと望むは

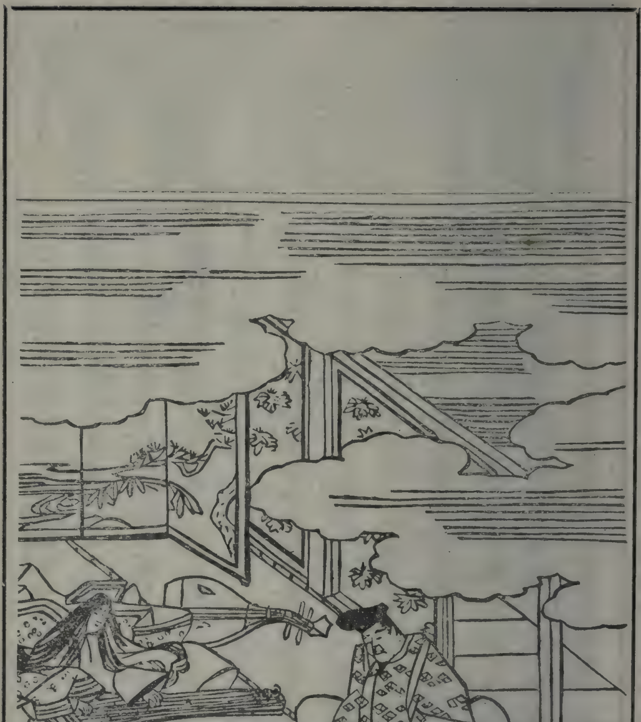
(一)娘ども
(二)夫のあるのは
(三)浮舟
(四)少將は
(五)萬の憚を忘れて縁組する積になりたる譯なるが
(六)婚姻後に少將の仕向が案外な事でもありては
(七)仲立の者が
(八)少將の樣子
(九)實娘でなくては一段卑く他人にも思はれて
(一〇)よく穿鑿もせずしてよい加減な話をするとは不都合なり
(一一)わが妹が常陸守方に知るべあるによりて
(一二)浮舟は娘どもの中にて一番大事がらるゝ由なれば實子ならんと思ひし也
(一三)浮舟の
(一四)浮舟を寵愛して
(一五)名譽にもなる樣なよき聟を取らんと
(一六)少將がどうかして常陸守方へ取次ぎ吳れる人がほしいと仰せられし故私方に便宜がある由申上げしなり

若き人々(一)あまた侍れど、思(二)ふ人具したるは、自らと思ひ讓られて、こ(三)の君の御事をのみなむ、はかなき世の中を見るにも、後めたういみじきを、物(四)思し知りぬべき御心ざまと聞きて、斯う萬(五)のつゝましさを忘れぬべかゝめるに、若し思は(六)ずなる御心ばへも見えば、人笑へに悲しうなむあるべき」と言ひけるを、少將の君に(七)まうでて、「云々なむ」と申しけるに、氣(八)色あしくなりぬ。少將「初より更に、守の御女にあらずといふ事をなむ聞かざりつる。同じことなれど、人(九)聞きも氣劣りたる心地して、出入せむにもよからずなむあるべき。(一〇)ようも案内せで、浮びたる事を傳へける」と宣ふに、いとほしくなりて、媒「委しくも知り給へず。女(一一)どもの知りたる便にて、仰言を傳へはじめ侍りしに、中(一二)にかしづく女とのみ聞き侍れば、守のにこそはとこそ思ひ給へつれ。他人の子持給へらむとも、問ひ聞き侍らざりつるなり。容貌(一三)心も勝れてものし給ふこと、母上(一四)のかなしうし給ひて、おもだた(一五)しう氣高き事をせむと、崇めかしづかると聞き侍りしかば、いか(一六)で彼邊の事傳へ

りにて、琴、琵琶の師とて(一)内教坊のわたりより、迎へ取りつゝ(二)習はす。(三)手ひとつ弾き取れば、(四)師を立ち居をがみて喜び、祿を取らすること埋むばかりにて、もて騒ぐ。(五)はやりかなる曲のものなど教へて、(六)師と、をかしき夕暮などに、弾き合せて遊ぶ時は、涙をつゝまず、をこがましきまで、流石に物めでしたり。かゝる事どもを、母君は少し物の故知りて、いと見苦しと思へば、ことにあへしらはぬを、常陸「(七)あこをば思ひ貶し給へり」と、常に怨みけり。

かくてかの少將、契りし程を(八)待ちつけで、「同じくば疾く」と責めければ、(九)我が心ひとつに斯う思ひ急ぐも、いとつゝましう、(一〇)人の心の知り難きを思ひて、初より(一一)傳へ初めける人の來たるを、近う呼び寄せて語らふ。北方「(一二)萬多く思ひ憚る事のあるを、月頃かう(一三)宣ひて程經ぬるを、なみ〳〵の(一四)人にも物し給はねば、辱う心苦しうて、(一五)斯う思ひ立ちにたるを、(一六)親などものし給はぬ人なれば、(一七)心ひとつなるやうにて、かたはらいたく、(一八)打ちあはぬ樣に見え奉る事もやと、かねてなむ思ふ。

(一)宮中の音樂掛
(二)儂どもに
(三)娘が一曲習ひ終れば
(四)常陸守が
(五)輕薄なる
(六)儂が
(七)實子の儂を母君が浮舟よりは可愛がらぬと
㊂ 北方浮舟を左近少將に嫁せしめんとす、少將浮舟を嫌ふ
(八)待ち遠にして、
(九)母の心
(一〇)少將の心底
(一一)少將の文を取次ぎたる人の
(一二)浮舟につきては常陸守に氣兼する點のある上
(一三)少將が
(一四)少將が
(一五)婚姻は八月と定めたるが
(一六)浮舟は父親のなき子故
(一七)自分の手一つでする樣なもの故
(一八)萬事不行屆に少將に思はれはせぬかと



(一)學才は人にも認められ居れども
(二)今迄の女と緣を切りて
(三)浮舟に懸想しつゝあり
(四)以下母の心
(五)了簡もすわりて
(六)人柄も上品なり
(七)身分よき人は何といひても我々の處へは寄りつかぬ
(八)浮舟に少將の文を取次ぎて
(九)母が
(一〇)浮舟を
(一一)浮舟の器量よきを認めたらば
(一二)婚姻の期を
(一三)母が少將に約束して
(一四)玩びの道具を拵へても
(一五)浮舟に與へんとて隱し置き
(一六)下等品を
(一七)常陸守に
(一八)常陸守は何といふ事なしに道具といふ道具は皆集めおきて
(一九)澤山置き重ねたる形容

かに、才(一)ありといふ方は人に許されたれど、きら〱しう今めいてなどは、えあらぬにや、通ひ(二)し所なども絶えて、いと懇に(三)言ひわたりけり。この母君、數多(四)かゝる事いふ人々の中に、この君は人柄も目安かゝなり、心(五)定りて物思知りぬべかゝめるを、人(六)もあてなりや、これより勝りて、こと(七)〴〵しき際の人はた、かよるあたりを、さはいへど尋ね寄らじ、と思ひて、この(八)御方に取りつぎて、さるべき折々は、をかしき樣に返事などせさせ奉る。心(九)ひとつに思ひまうけて、守こそ疎(一〇)に思ひなすとも、我は命をも讓りてかしづきてむ、樣(一一)容貌のめでたきを見つきなば、さりとも、疎になどは、よも思ふ人あらじ、と思ひ立ちて、八月(一二)ばかりと契り(一三)て、調度をまうけ、はかなき遊物(一四)をせさせても、樣殊に樣をかしう、蒔繪螺鈿のこまやかなる心ばへ勝りて見ゆる物をば、この(一五)御方にと取りかくして、劣(一六)のを、「これなむ良き」とて見す(一七)れば、守はよくしも見知らず、そこ(一八)はかとなき物どもの、人の調度といふ限は、唯取り集めて竝べすゑつゝ、目(一九)を僅にさし出づばか

(一)母が
(二)常陸守
(三)親戚も卑しからず
(四)富有なれば
(五)身分相應に高く構へて
(六)大層に構へたるに合せては、常陸守の性質
(七)常陸守が
(八)物言ひが訛りたる樣にて
(九)權門勢家を恐しがり
(一〇)ぬけ目なく用心深き風あり
(一一)花やかなる道即ち音樂などの方には心得なく
(一二)斯かる下品なる家なるにも拘らず
(一三)若き宮仕女ども此家に々集り
(一四)庚申の夜眠れば三尸蟲といふ蟲天に上りて人の惡を天帝に告ぐるといふ佛説によりてこの夜は起きて居るを庚申待又は庚申ともいふ、此時退屈なる故歌合音樂其他樣々の遊をする也
(一五)きらびやかにて他人からは見苦しく思はるる程
(一六)娘に懸想せる人々
(一七)浮舟が
(一八)浮舟をよい樣に評判して

て見奉らばやと、旦暮まもりて、(一)撫でかしづく事限なし。(二)守も賤しき人にはあらざりけり。上達部の筋にて、(三)中らひも物きたなき人ならず、(四)德いかめしうなどあれば、(五)程々につけては思ひあがりて、家の內もきら〳〵しく、物清げに住みなし、(六)事好したる程よりは、怪しう荒らかに田舍びたる心ぞつきたりける。(七)若うより、さる東の方の、遙なる世界に埋もれて、年經ければにや、聲などほと〳〵うち歪みぬべく、(八)物うち言ふ、少しだみたる樣にて、(九)豪家のあたり恐ろしく、煩はしきものに憚りおぢ、すべていと(一〇)全く隙間なき心もあり、(一一)をかしき樣に、琴笛の道は遠う、弓をなむいとよく引きける。(一二)直〳〵しきあたりとも言はず、勢にひかされて、よき(一三)若人どもつどひ、裝束有樣はえならず整へつゝ、腰折れたる歌合物語、(一四)庚申をし、(一五)まばゆく見苦しく、遊びがちに好めるを、(一六)この懸想の君達、「(一七)らう〳〵じくこそあるべけれ、容貌なむいみじかゝなる」など、(一八)をかしき方に言ひなして、心を盡しあへる中に、左近少將とて、年二十二三ばかりの程にて、心ばせしめや

おこせけれど、(一)まめやかに御心留るべき事とも思はねば、唯然までも尋ね知り給ふらむ事とばかり、をかしう思ひて、(二)人の御程の、たゞ今の世に有り難げなるをも、(三)數ならましかばなどぞ、萬に思ひける。

(四)守の子どもは、(五)母なくなりにけるなど數多、(六)この腹にも、姫君とつけてかしづくあり。まだ幼きなど、次々に五六人ありければ、(七)樣々にこの扱をしつゝ、(八)他人と思ひて隔てたる心のありければ、常にいとつらきものに(九)守をも怨みつゝ、(一〇)いかで引きすぐれて、おもだたしき程にしなしても見えにしがなと、旦暮この母君は思ひ扱ひける。(一一)樣容貌の、斜にとり交ぜてもありぬべくは、いと斯うしも何かは苦しきまでも、もて惱まし、同じこと思はせてもありぬべき世を、(一二)物にもまじらず、哀にかたじけなく生ひ出で給へば、(一三)あたらしく心苦しきものに思へり。女多かりと聞きて、なま君達めく人々も、(一四)音なひ言ふ、いと數多ありけり。(一五)初の腹の二三人は、皆樣々に(一六)くばりて、大人びさせたり。今は(一七)我が姫君を、思ふやうに

(一)薫の本氣で懸想して居るとは思はれぬ事故
(二)薫の身分の
(三)此方の身分がよくば薫を聟に取りたいものなれど杯と北方が思へり
(四)常陸守の息子等
(五)先妻の子
(六)今の妻卽中將の君腹
(七)常陸守が實子の世話をのみ燒きて
(八)浮舟を他人と思ひて
(九)北方中將の君が
(一〇)浮舟を
(一一)浮舟の器量が一通りで常陸守の實子共と一つにして置いても似合はしき位ならば、母も左程苦勞もせず實子共と同樣に人にも思はせて通りもするのであるが
(一二)浮舟は水際だちて上品に育ちし故
(一三)母が
(一四)常陸守の娘の許へ手紙などをよこす者
(一五)先妻腹の娘
(一六)片附けて
(一七)浮舟を

# 東屋

## 梗槩

㊀常陸守娘どもをかしづく。北方浮舟をかしづく。㊁北方、浮舟を左近少將に嫁せしめんとす。少將浮舟を嫌ふ。㊂少將の媒人、常陸守に説きて寵愛の次女を少將に嫁せしめんとす。㊃少將、常陸守の次女に婿を定む。㊄少將の心變りを知れる北方の憂悶。㊅少將、常陸守の聟になる。㊆浮舟二條院に預けらる。母北方を隙見す。㊇母北方、中君に浮舟の處置を謀る。中君、薫に浮舟の事を語る。母北方、薫を隙見す。中君、浮舟を薫に許さん事を勸む。㊈匂宮、母北方の車を見て怪しむ。㊉匂宮思はず浮舟を見つけて手籠にせんとす。⑪中君、浮舟を慰む。⑫浮舟の乳母、母北方に浮舟の近状を語る。浮舟三條の別宅に隱さる。⑬母北方、少將を隙見す。歌を少將に贈る。浮舟をもてあます。⑭母北方、かくれ家に文を贈りて浮舟を慰む。⑮薫宇治に行く。辨の尼に浮舟を媒せん事を頼む。⑯辨の尼、浮舟を訪ふ。薫、浮舟を訪ふ。⑰薫、浮舟を宇治に伴ふ。

(一)筑波山を分け見まほしき御心はありながら、は山の茂りまで強ちに思ひ入らむも、いと人聞輕々しう、傍痛かるべき程なれば、思し憚りて、御消息をだにえ傳へ(二)させ給はず。かの尼君の(三)許よりぞ、母北の方に、宣ひし(四)樣など、度々ほのめかし

㊀常陸守娘どもをかしづく、北方浮舟をかしづく

(一)薫が浮舟に心を懸けては居るものゝ自分から挑みかけるのも見つともなき程の身分輕き相手なれば、「筑波山は山繁山繁けれど思ひ入るには障らざりけり」浮舟は常陸守の娘分故此歌によりて書けり

(二)浮舟へ

(三)辨の尼

(四)薫の

(一)大君に似たる人もあるかと草木を分けて今日も此處まで來たり、かほ鳥はうつくしき鳥
(二)尼が浮舟に

に、何時のほどなる御契にかは」と、打笑ひて、辨「さらば然傳へ侍らむ」とて入る
に、

薫「かほ鳥の聲もきゝしにかよふやとしげ木をわけて今日ぞ尋ぬる(一)

唯口ずさみの樣に宣ふを、(二)入りて語り聞えけり。

(一)頼みおきたる浮舟方への傳言はどうしたぞ
(二)浮舟に
(三)薫の思召の趣は
(四)浮舟を大君の代とは恐入りたる身代りなりと申されしが
(五)薫が御忙しき樣に聞きたり、恰も薫が女二宮を娶る頃なり
(六)斯樣々々と申上げもせざりしに
(七)浮舟が初瀨へ、
(八)浮舟が尼方に親しみ寄るも故八宮の由緣を思へばなり
(九)中將の君
(一〇)浮舟が
(一一)薫の居らるゝ事を告げるにも及ばぬと思ひて浮舟には默つて居る
(一二)わが微行の樣子を知らせたくなしとて
(一三)浮舟の一人で來たのが却て氣易し
(一四)予が偶然來合せたるも深き緣なりと浮舟に傳へよ
(一五)あまり突然で深き緣などとはまだ言はれぬ

るを、(一)如何にぞかの聞えし事は」と宣へば、辨「しか仰言侍りし後は、さるべき序侍らばと待ち侍りしに、去年は過ぎて、この二月になむ、初瀨詣のたよりにはじめて(二)對面して侍りし。かの母君に、(三)思召したる樣はほのめかし侍りしかば、(四)いとかたはらいたく辱き御よそへにこそは、侍るなれ、などなむ侍りしかど、その頃ほひは、(五)のどやかにもおはしまさずと承りし、折便なく思ひ給へつゝみて、(六)斯くなむとも聞えさせ侍らざりしを、又この月に(七)もまうでて、今日歸り給ふなめり。行き歸りの中宿には、かう(八)睦びらるゝも、唯過ぎにし御けはひを尋ね聞ゆる故になむ侍るめる。(九)かの母君は、障る事ありて、此の度はひとり物し給ふめれば、(一一)斯くおはしますとも、何かは物し侍らむとて」と聞ゆ。(一〇)薫「田舍びたる人どもに、(一二)忍びやつれたるありきも見えじとて、口かためつれど、如何あらむ。下衆どもは隱あらじかし。さて如何すべき。(一三)一人物し給ふらむこそなか〳〵心やすかンなれ。かく(一四)契深くてなむ參り來あひたると傳へ給へかし」と宣へば、辨「(一五)うちつけ

（一）浮舟の
（二）中君にも
（三）薫の心
（四）身分も續き柄も是より以下なる女でも是程似て居る女を見ては
（五）八宮には
（六）八宮の
（七）まだ此世に生きて居られしに我は君を死せしと思ひしよと、浮舟を何處迄も大君にして言ふ詞
（八）方士をして楊貴妃の在處を蓬萊山まで尋ねさせて釵だけを持來らせて見し玄宗は、以下薫の心なれど
（九）浮舟は大君とは別人なれど
（一〇）畢竟浮舟に宿縁のあるのであらう
（一一）薫が近處に居て覗くならんと尼は合點したれば
（一二）薫
（一三）浮舟の

する聲（一）けはひの、ほのかなれど、宮（二）の御方にもいとよく似たりと聞ゆ。哀（三）なりける人かな、斯かりけるものを、今まで尋ねも知らで過しける事よ、これ（四）より口惜しからむ際のしなならむゆかりなどにてだに、かばかり通ひ聞えたらむ人を見ては、疎かには思ふまじき心地するに、ましてこれは、知（五）られ奉らざりけれど、誠に故（六）宮の御子にこそはありけれ、と見なし給ひては、限なく哀に嬉しく覺え給ふ。たゞ今も這ひ寄りて、（七）世の中におはしけるものをと言ひ慰めまほし、蓬（八）萊まで尋ねて、かんざしの限を傳へて見給ひけむ帝は、猶いといぶせかりけむ、（九）これはこと人なれど、慰所ありぬべき様なり、と覺ゆるは、（一〇）この人に契のおはしけるにやあらむ。尼君は物語少しして疾く入りぬ。人の咎めつるかをりを、（一一）近くて覗き給ふなゝめりと心得てければ、打解けごとも語らはずなりぬるなるべし。

日暮れもて行けば、（一二）君もやをら出でて、御衣など著給ひてぞ、例召し出づる障子口に、尼君召し出で給ひて、（一三）有様など問ひ給ふ。薫「折しも嬉しくまうで來合ひた

今の程うち休ませ給へるなり」と、御供(一)の人々心しらひ(二)て言ひたりければ、この君(三)を尋ねまほしげに思し宣ひしかば、かゝる序に物言ひ觸れむと思ほすによりて、日を暮し給ふにや、と思ひて、かく覗き給ふらむとは知らず、例の御庄(四)の預どもの參れる、破籠や何やと、此方にも入れたるを、東人どもにも食はせなど、事ども行ひおきて、うち假粧じて、客人(五)の方に來たり。譽め(六)つる裝束、げにいとかはらかにて、みめもなほ由々しく淸げにぞある。辨「昨日おはし著きなむと待ち聞えさせしを、などか今日(七)も日闌けては」と言ふめれば、この老人、乳母「いと怪しう苦しげにのみせさせ給へれば、昨日はこの泉河のわたりに留りて、今朝も無(八)期に御心地ためらひてなむ」と答へて(九)、起こせば今ぞ起き居たる。尼君を恥らひて、そばみ居たる(一〇)かたはらめ、これより(一一)はいとよく見ゆ。誠にいと由あるまみの程、かんざしのわたり、彼をも(一二)、委しくつくづくとしも見給はざりし御顏なれど、これを見るにつけて、唯(一三)それと思ひ出でらるゝに、例の涙おちぬ。尼君の答うち

(一)薫の
(二)氣をきかせて
(三)薫は兼て浮舟を見たしと仰せられし事故、以下辨の尼の心
(四)薫の領地の役人等が辨當などを持參したるを尼の方にもくれたるを
(五)浮舟方
(六)浮舟の侍女の譽めたる
(七)今日然も遲くはどうして來られしぞ
(八)長い間ぐづぐづして出立したり
(九)浮舟を
(一〇)側を向きて居たる
(一一)薫の方からは
(一二)大君をも
(一三)丸で大君そつくりに

(一)浮舟の處へ
(二)飲料の湯也
(三)もし〳〵之を召上れなどと言ひて浮舟をおこせど
(四)斯かる樣子を見なれぬ薫の目には
(五)浮舟以上の美人を、以下作者の薫に對する評
(六)薫が
(七)よく〳〵の事でなければ目につかず
(八)堅すぎるとて人に批難される位なるに
(九)浮舟はどれ程の美人でもなきに
(一〇)薫の方へも案内を言越したれども
(一一)薫は御不快で

しかど、東にてかゝる薫物の香は、え合せ出で給はざりきかし。この尼君の住居は、かくいと幽におはすれど、裝束のあらまほしく、鈍色青鈍といへど、いと清らにぞあるや」など讚め居たり。彼方の簀子より童來て、(一)童「(二)御湯など參らせ給へ」とて、折敷どもも取り續きてさし入る。菓子取り寄せなどして、侍女「(三)ものけ給はる。これ」などおこせど、驚かねば、二人して、栗などやうの物にや、ほろ〳〵と食ふも、(四)聞き知らぬ心地には、かたはらいたうて退き給へど、又ゆかしくなりつゝ、猶立寄り〳〵見給ふ。(五)これより勝るきはの人々を、后の宮をはじめて、此處彼處にて、容貌よきもあてなるも、こゝら飽くまで見あつめ給へれど、(六)(七)おぼろげならでは、目も心もとゞまらず、(八)あまり人にもどかるゝまで、ものし給ふ御心地に、たゞ今は、(九)何ばかり勝れて見ゆる事もなき人なれど、かく立去り難く、強ちにゆかしきも、いと怪しき心なり。

尼君は、(一〇)この殿の御方にも、御消息聞え出したりけれど、「(一一)御心地なやましとて、

この人々は安らかに下りなしつれど、いと苦しげにやゝみて、久しく(三)下りてゐざ(一)り入る。濃き(四)袿に、撫子とおぼしき細長(二)、若苗色の小袿著たり。四尺の屏風を、(五)この障子に添へて建てたるが、上より見ゆる穴なれば、殘る處なし。此方をば後めたげに思ひて(六)、彼方ざまに向きてぞ、添ひ臥しぬる。侍女「さも苦しげにおはしましつるかな。泉河の船渡も、誠に今日はいと恐しうこそありつれ。この二月(七)には、水の少かりしかば善かりしなりけり。いでや、ありきは(八)、東路を思へば、何處(九)か恐ろしからむ」など、二人(一〇)して苦しとも思ひたらず言ひ居たるに、主(一一)は音もせでひれ臥したり。腕(一二)をさし出でたるが、圓らかにをかしげなる程も、常陸殿(一三)など言ふべくも見えず、誠にあてなり。やう／＼腰痛きまで立ちすくみ給へど、人のけはひせじとて、猶動かで見給ふに(一四)、若き人、侍女「あな芳しや。いみじき香の香こそすれ。尼君の焚き給ふにやあらむ」と驚く。老人、侍女「誠にあなめでたの物の香や。京人(一五)は猶いとこそみやびかに今めかしけれ。天下(一六)にいみじき事と思したり

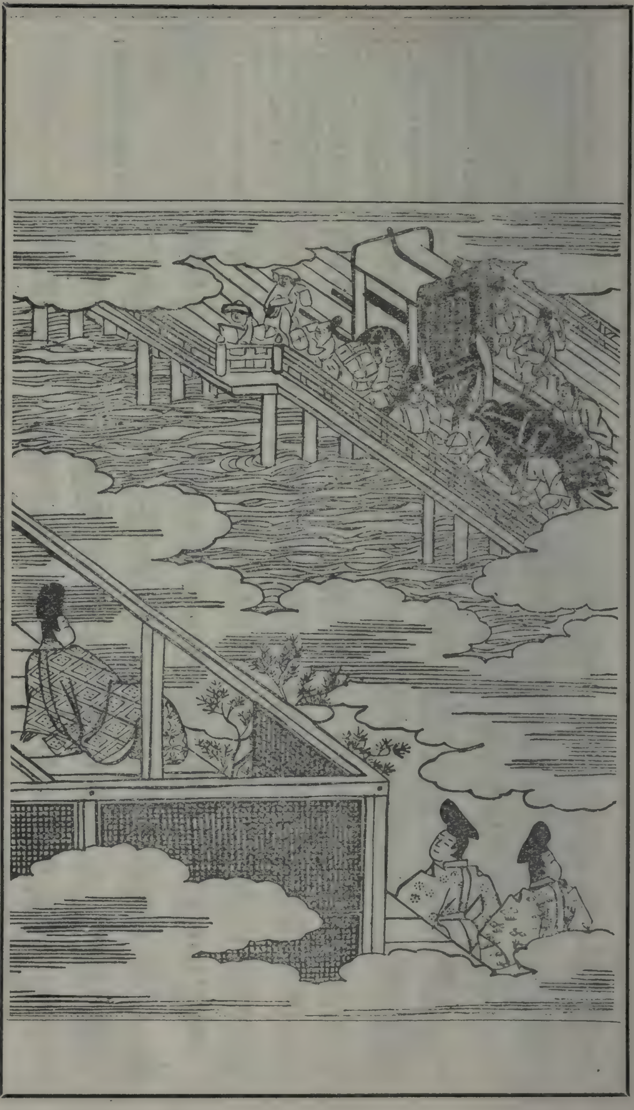
(一)侍女等は
(二)浮舟は難儀さうに躊躇して
(三)長くかゝりて下りての意なるべし
(四)濃紅色の
(五)薫の覗き居る所の障子
(六)浮舟が
(七)二月にも初瀬に詣でしなるべし
(八)旅行は
(九)何處も氣安い事ぢや
(一〇)前に見えたる二人の侍女也
(一一)浮舟
(一二)浮舟の樣子
(一三)常陸前司の娘など言ふべき身分卑しき女とは見えず
(一四)薫が久しく立ち居て
(一五)尼をいふ
(一六)常陸介の北方が非常な御自慢なりしかど

(一)薫が浮舟の樣子を
(二)薫の衣の音がする故
(三)ばかりを
(四)浮舟が車より
(五)薫はかの車が浮舟なりと聞くと早速
(六)邸内の人々に口止をしたる故
(七)他の所に居られる
(八)同乘したる若き侍女
(九)今下りたる女は
(一〇)侍女、乳母なるべし
(一一)又も極りを仰しやる
(一二)得意になりて
(一三)浮舟が
(一四)大君を思ひ出させる
(一五)薫が
(一六)低くなりて居るを

穴(一)より覗き給ふ。御衣(二)の鳴れば、脱ぎおきて、直衣指貫の限り(三)を著てぞおはする。とみ(四)にも下りで、尼君に消息して、斯くやむごとなげなる人のおはするを、誰ぞなど案内するなるべし。君(五)は、車をそれと聞き給へるより、薫「ゆめ、その人にまろありと宣ふな」と、まづ口(六)がためさせ給ひてければ、皆然心得て、人々「はやく下りさせ給へ。客人はものし給へど、他方(七)になむ」と言ひ出したり。若き人(八)のある、まづ下りて、簾うち揚ぐめり。御前どもの樣よりは、この(九)おもと馴れてめやすし。又大人びたる人(一〇)今一人下りて、「早う」といふに、浮舟「怪しくあらはなる心地こそすれ」と言ふ聲、仄なれどいとあてやかに聞ゆ。侍女「例(一一)の御こと。此方は前々もおろし籠めてのみこそは侍るめれ。さては又何處のあらはなるべきぞ」と、心(一二)をやりて言ふ。つ(一三)ゝましげに下るゝを見れば、まづ頭つき樣體細やかにあてなる程は、いとよう物(一四)思ひ出でられぬべし。扇をつとさし隱したれば、顏は見えぬ程心もとなくて、胸(一五)打ち潰れつゝ見たまふ。車は高く、下るゝ所は下(一六)りたるを、

（一）薫が宇治の舊邸に入りて
（二）薫が
（三）訛りたる
（四）浮舟
（五）行きにも
（六）おゝ其こそ辨に聞きし浮舟ならんと、
（七）薫の供人をば
（八）浮舟の車を引入れよ
（九）他に御客があれど其は奥の座敷に居る故表の方は差支なし
（一〇）宇治邸の人をして
（一一）薫の
（一二）薫の並々ならぬ人たるべき樣子が知れるものと見えて
（一三）浮舟方の人々が憚りて
（一四）邪魔にならぬ樣にのけて置きて
（一五）浮舟の
（一六）格子を下して戸締りしてある

を見給ひ過ぎむが猶哀なれば、其方ざまにおはするに、女車の事々しき樣にはあらぬ一つ、荒ましき東男の、腰に物負へる數多具して、下人も數多く頼もしげなる氣色にて、橋より今渡り來る見ゆ。田舍びたるものかなと見給ひつゝ、殿（一）はまづ入り給ひて、御前どもなどはまだ立騷ぎたる程に、この車もこの宮をさして來るなりけりと見ゆ。御隨身どもかやく／＼と言ふを制し給ひて、「何人ぞ」と問（二）はせ給へば、聲（三）うち歪みたる者、「常陸の前司殿の姫君（四）の、初瀨の御寺にまうでて歸り給へるなり。（五）初もこゝになむ宿り給へりし」と申すに、（六）おいや聞きし人なンなりと思し出でて、（七）人々をば他方にかくし給ひて、「はや御車入れよ。（八）此處に又人や（九）どり給へど、北面になむ」と（一〇）言はせ給ふ。（一一）御供の人も皆狩衣姿にて、事々しからぬ姿どもなれど、（一二）猶けはひや著からむ、（一三）煩はしげに思ひて、皆馬ども（一四）引きさげなどしつゝ、畏りつゝぞ居る。（一五）車は入れて、廊の西のつまにぞ寄する。この寢殿はまだあらはにて、簾もかけず。（一六）おろし籠めたる中の二間に立て隔てたる、障子の



（一）四方に庇ある絲毛の車、高貴の人ならでは用ひざるもの
（二）金張の金具を用ひたる車
（三）網代車
（四）御供の車
（五）薫方の人々
（六）女二の容貌
（七）此處が缺點と見ゆる所
（八）斯かる佳人を妻にしたる我が運、薫の心
（九）其が爲に大君の事が忘れられゝばよいが
（一〇）薫の心
（一一）かゝるつらき目にあひたるは斯く〳〵の報なりしと悟りて
（一二）宇治の寺
共　薫宇治に行く、浮舟の初瀬詣の歸途宇治の山莊に宿するに逢ふ
（一三）四月の
（一四）薫が
（一五）辨の尼を尋ねずして歸るのが、前の尼の歌により朽木といへる也

さながら御送仕う奉らせ給ひけり。廂の御車（一）にて、廂なき絲毛三つ、檳榔毛の黄（二）金づくり六つ、たゞの檳榔毛二十、網代二つ（三）、女房三十人、童下仕八人づつ侍ふに、又御迎のいだし車ども（四）十二、（五）本所の人々乗せてなむありける。御送の上達部殿上人の祿など、いふ限なき清らを盡させ給へり。

斯くて心安く打解けて見奉り給ふに、（六）いとをかしげにおはす。小やかにあてにしめやかにて、こゝは（七）と見ゆる所なくおはすれば、宿世の程（八）口惜しからざりけりと、心傲せらるゝものから、過ぎにし（九）方の忘られればこそはあらめ、猶紛るゝ折なく、物のみ戀しく覺ゆれば、（一〇）この世にては慰めかねつべきわざなゝめり、佛になりてこそは、怪しくつらかりける契のほどを、（一一）何の報とあきらめて思ひ離れめ、と思ひつゝ、（一二）寺のいそぎにのみ心をば入れ給へり。

賀茂の祭など、さわがしきほど過して、二十（一三）餘日の程に、例の宇治へ（一四）おはしたり。造らせ給ふ御堂見給ひて、すべき事ども掟て宣ひなどして、さて例の朽木（一五）のもと

(一)藤の花の美しきを嘆美したる也
(二)帝の御聟になりたる薫の仕合よきを喩へて言へるなり
(三)紅梅
(四)少しは間違ひもあるかも知れぬ
(五)別に面白い歌もなかりし様なり
(六)薫
(七)催馬樂の曲名
(八)合唱
(九)夕霧
(一〇)今上より
(一一)女二を薫が三條邸へ引取れり
(一二)藤宴に列したる女官等全部

また誰とか、

君(一)がため折れるかざしはむらさきの雲におとらぬはなのけしきか

紅梅　世(二)のつねのいろとも見えず雲居までたちのぼりけるふぢなみの花

これや此の腹(三)だつ大納言のなりけむとこそ見ゆれ。かたへ(四)は僻事にもやありけむ。かやうに、殊(五)なるをかしき節も無くのみぞあゝなりし。夜更くるまゝに、御遊いと面白し。大将(六)の君の、「あなたふと」(七)謡ひ給へる聲ぞ、限なくめでたかりける。按察も、昔勝れ給へりし御聲のなごりなれば、今もいと物々しくて、うち(八)合せ給へり。左(九)の大殿の御七郎、童にて笙の笛ふく。いとうつくしかりければ、御衣賜はす。大臣下りて舞踏し給ふ。曉近くなりてなむ歸らせ給ひける。祿ども、上達部、親王達には、上(一〇)より賜はす。殿上人樂所の人々には、宮の御方より品々賜ひけり。

その夜さりなむ、宮(一一)まかでさせ奉り給ひける。儀式いと心ことなり。上の女房(一二)

(一)斯かる事は又とあるまじ、下の事をいふ
(二)女二を禁中に置きながら平人なる薫が通ひ行きて
(三)藤の宴には出席して
(四)其作歌は
(五)上流の人々とても歌は別段よくもなけれど
(六)次の歌は
(七)帝の冠に挿すべき藤花を折りて差上げたる時の歌なりとか
(八)折るとて
(九)得意らしきが憎らし

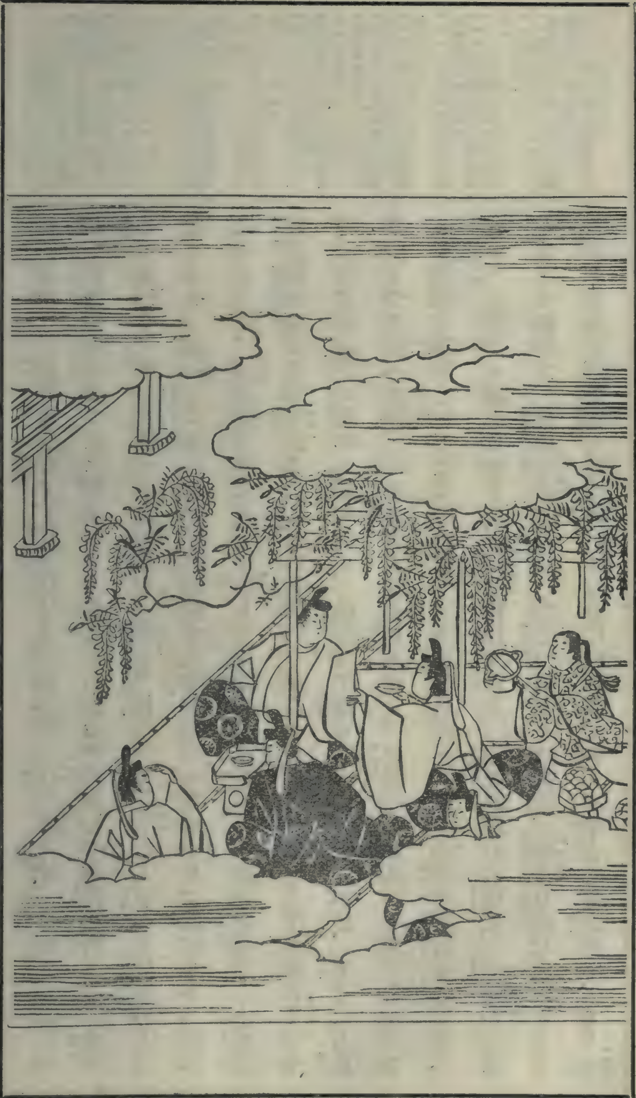
がらは實に契ことなゝめれど、何ぞ、時の帝の斯くおどろ〳〵しきまで婿かしづきし給ふべき。またあらじかし(一)、九重の内(二)におはします殿近きほどにて、唯人の打解け侍ひて、果は宴や何やと、もて騒がるゝ事は」など、いみじく謗りつぶやき申し給ひけれど、さすがゆかしかりければ、參りて(三)、心の中にぞ腹立ちる給ひける。紙燭さして歌ども奉る。文臺のもとに寄りつゝ置くほどの氣色は、各したり顔なりけれど、例の(四)如何に怪しげに古めいたりけむと思ひやれば、あながちに皆も尋ね書かず。かみの町(五)の上臈とて、御口つきどもは、特なること見えざゝめれど、しるしばかりとて、一つ二つぞ問ひ聞きたりし。これは(六)、大將の君の、下りて御かざし(七)折りて參り給へりけるとか。

薫　すべらぎのかざしに折る(八)とふぢの花およばぬえだに袖かけてけり

うけばりたるぞ憎きや。

(九)今上　よろづ世をかけてにほはむ花なれば今日をもあかぬ色とこそみれ





督御まかなひ仕う奉り給ふ。御盃まゐり給ふに、大臣、(一)しきりては便なかるべし、宮達の御中に、はた然るべきもおはせねば、大將にゆづり聞え給ふを、憚り(二)申し給へど、御氣色も如何ありけむ、御盃(三)捧げて、「をし」(四)と宣へる聲遣ひもてなしさへ、例の公事なれど、人に似ず見ゆるも、今日はいとゞ見なしさへ添ふ(五)にやあらむ。(六)さし返し賜はりて、(七)下りて舞踏し給へるほど、いと類なし。上臈の親王達大臣などの賜はり(八)給ふだにめでたき事なるを、これはまして御婿にて、もてはやされ奉り給へる御おぼえ、疎ならず珍らしきに、限(九)あれば、下りたる座に歸りつき給へる程、心苦しきまでぞ見えける、按察の大納言は、我(一〇)こそかゝる目も見むと思ひしか、ねたのわざや、と思ひ居給へり。(一一)この宮の御母女御をぞ、昔心がけ聞え給へりけるを、參り(一二)給ひて後も、猶思ひ離れぬ樣に、聞え(一三)かよはしなどし給ひて、果は宮を(一四)得奉らむの心つきたりければ、御後見(一五)望む氣色ももらし申しけれど、聞召しだに傳へずなりにければ、いと心やましと思ひて、按察「人(一六)

(一)夕霧が重ねて自分のみ天盃を頂戴するも面白からず、さりとて之を宮達に讓らんとすれば又生憎相當の人居合せぬ故其盃を薫に讓りたるを
(二)薫が辭したれど今上の御意が薫にと[illegible]りしものと見えて
(三)薫が
(四)物音を靜むる詞、天盃頂戴の時に敬意を表して言ふなるべし
(五)帝の御聟也大將也と思つて見る故立派に見えるのかも知れぬ
(六)別の土器にうつして天盃の酒を飲むをいふ
(七)庭上に降りて御禮を申上ぐる也
(八)天盃を
(九)身分に限あれば薫が元の下座に著席する也
(一〇)薫の如き面目を施すべしと
(一一)按察が其藤壺女御に懸想したりしに
(一二)藤壺が入内の後も
(一三)按察が文などを贈りて
(一四)女二を
(一五)聟になりたき望を藤壺に言ひ出したれど藤壺取次もせざりし故
(一六)薫は成程高運の人らしくは見ゆれど

ぶらひ給ふ。南の庭の藤の花のもとに、殿上人の座はしたり。後涼殿の東に、樂所の人々召して、暮れ行くほどに、雙調吹きて、上の御あそびに、宮(一)の御方より、御琴ども笛など出させ給へば、大臣をはじめ奉りて、御前にとりつゝ參り給ふ。故六條院の御手づから書き給ひて、入道(二)宮に奉らせ給ひし琴の譜二卷、五葉の枝につけたるを、大臣取り給ひて奏し給ふ。つぎ〳〵に、琴、箏の御琴、琵琶、和琴など、朱雀院の御物どもなりけり。笛は、(三)かの夢に傳へし、古のかたみのを、また無きものの音なりと、(四)めでさせ給ひければ、(五)この折の清らより又は、何時かははえ〴〵しき序のあらむと思して、(六)取う出給へるなンめり。大臣和琴、三宮琵琶など、とり〴〵に賜ふ。(七)大將の御笛は、(八)今日ぞ世になき音のかぎりは吹き立て給ひける。殿上人の中にも、唱歌につきなからぬどもは召し出でつゝ、いと面白く遊ぶ。宮の御方より、(九)粉熟まゐらせ給へり。沈の折敷四つ、紫檀の高杯、藤の村(一〇)濃の打敷に、折枝縫ひたり。銀の様器、(一一)瑠璃の御盃、瓶子は紺瑠璃なり。兵衞

(一)女二
(二)女三
(三)柏木の靈が夕霧の夢に現はれて色々祕藏の笛につきて頼みし事横笛の卷にあり
(四)今上かれて稱美ありたる故
(五)此度を除きては
(六)薫が
(七)薫
(八)柏木の靈が此笛は自分も中々十分には吹き難しといひし詞を受けて今日ぞといへり
(九)餅の類
(一〇)藤色のぼかし染の地に藤枝を縦模様にしたる切を敷布に用ひたり
(一一)盤

(一)薫がこゝに誇りたる程の惡き人物ならば帝が聟にして親み給ふ筈もなき事故
(二)薫の政務に當りての器量は立派なものならんと思はれる
(三)中君が赤兒を見せたるも
(四)薫が
(五)女二宮へ行かねばならぬ故
(六)薫が
(七)薫の
(八)「折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯の鳴く」
(書)藤花の御宴、薫天盃に賜はる、女二宮三條邸を移る
(九)藤壺からは三條宮は方角が惡くなるべしと
(一〇)夏の節に入らぬ前に女二を薫が三條宮へ引取る事に極めたるが其前日に藤見の宴ある也
(一一)女二宮が主人役になる譯にはあらず
(一二)夕霧
(一三)紅梅なるべし
(一四)此二人髭黑の子
(一五)匂

いとほしけれ。(一)然わろびかたほならむ人を、帝のとりわき切に近づけて、むつび給ふべきにもあらじものを、(二)誠しき方樣の御心おきてなどこそは、めやすくものし給ひけめ、とぞ推し量らるべき。實にいとかく(三)幼きほどを見せ給へるも哀なれば、例よりは物語など細やかに(四)聞え給ふほどに、暮れぬれば、(五)心やすく夜をだに更すまじきを、苦しう(六)覺ゆれば、歎く〳〵出で給ひぬ。「をかしの(七)人の御匂や。(八)折りつればとかやいふ樣に、鶯も尋ね來ぬべかゝめり」など、煩はしがる若き人もあり。

夏にならば、(九)三條の宮ふたがる方になりぬべしと定めて、四月朔日頃(一〇)節分とかいふ事まだしき前に渡し奉り給ふ明日とての日、藤壺に上わたらせ給ひて、藤の花の宴せさせ給ふ。南の廂の御簾あげて、御倚子たてたり。おほやけわざにて、ある(一一)じの宮の仕う奉り給ふにはあらず、上達部殿上人の饗など、内藏司より仕う奉れり。

(一二)左の大臣、(一三)按察の大納言、(一四)藤中納言、左兵衞督、親王達は、(一五)三宮、常陸宮などさ

(一)それも我が有樣のやうにぞ、うらやみなく身を怨むべかりけるかし、何事も、數ならでは、世の人めかしき事もあるまじかりけり、と覺ゆるにぞ、いとゞかの打解けはてでやみなむと、思ひ給へりし御心おきては、猶いと重々しう思ひ(二)出でられ給ふ。(三)若君を切にゆかしがり聞え給へば、恥かしけれど、(四)何かはへだて顏にはあらむ、(五)わりなき事ひとつにつけて、怨みらるゝより外には、いかでこの人の御心に違はじ、と思へば、自らはともかくもいらへ聞え給はで、乳母して(六)さし出でさせ給へり。(七)更なる事なれば、憎げならむやは。ゆゝしきまで白く美しくて、たかやかに物語し、打笑ひなどし給ふ顏を見るに、(八)我がものにて見まほしく羨ましきも、(九)世の思ひ離れ難くなりぬるにやあらむ。されど、(一〇)いふかひなくなり給ひにし人の、世の常の有樣にて、かやうならむ人をも、留めおき給へらましかば、とのみ覺えて、この頃おもだたしげなる(一一)御あたりに、いつしかなどは思ひよられぬこそ、餘りすべなき君の御心なゝめれ。(一二)かく女々しくねぢけて、まねびなすこそ

(一)大君が存生ならば又大君も我と同樣に女二宮の事につきて我身の數ならぬを苦に病みたるなるべし、と中君の心
(二)薫に何時迄も肌を許さじと決心して居し大君の分別の重々しかりしを思ひ出す
(三)中君の子を薫が見たがる故
(四)中君の心
(五)薫の戀を受附けぬ事につけて
(六)赤兒を
(七)兒柄の惡かるべき筈はなければ
(八)薫の心
(九)遁世の宿志が鈍りたるならんか、以下薫の心
(一〇)大君が當前に我が妻であつて斯かる子を殘して死にたらば
(一一)女二の腹に早く生れゝばよいとは思も寄らぬとは餘り無理な薫の注文
(一二)斯かる事を愚痴らしく書くのは薫に氣の毒、作者の自評

㉔ 薫中君を訪ひて赤兒を見る
(一)中君腹
(二)薫が
(三)五十日の祝の餅の用意
(四)世話やきつゝ
(五)世間並にすぐれてと
(六)細工人等が
(七)薫が匂の留守に中君を訪へり
(八)氣のせいかして大納言になりて一層重みが附いたる樣に見ゆ
(九)女二宮の聟にもなりたる事故我に懸想じみたる事などは言はぬならんと、中君の心
(一〇)薫の態度は依然たるもので
(一一)女二宮の聟になりたる事をいふ
(一二)むやみに中君に訴へる
(一三)女二の聟になり昇進もしたるに其にも滿足せず矢張我を忘れぬ情の深さよと、中君の心
(一四)大君が
(一五)中君が

宮の(一)若君の五十日になり給ふ日數へ取り給ひて、(二)その餅のいそぎ(三)を心に入れて、沈、籠物檜破籠などまで見入れつゝ、(四)尋常のなべてにはあらずと、(五)思し志して、沈、紫檀、白銀、黃金など、道々の細工どもいと多く召し侍はせ給へば、我劣らじと、(六)樣々の事どもをし出づめり。(七)自らも、例の宮のおはしまさぬ隙におはしたり。(八)心のなしにやあらむ、今少し重々しくやむごとなげなる氣色さへ添ひにけりと見ゆ。今はさりとも、むづかしかりし漫ごとなどは、思ひ紛れ給ひにたらむ、と思ふに(九)心安くて、對面し給へり。されど、(一〇)ありしながらの氣色に、まづ涙ぐみて、(一一)薫「心にもあらぬ交らひ、いとゞ思の外なるものにこそと、世を思ひ給へ亂るゝことなむ勝りにたる」と、(一二)あいだちなくぞ憂へ給ふ。中君「いとあるまじき御事かな。人もこそ自らほのかにも漏り聞き侍れ」などは宣へど、(一三)かばかりめでたげなる事どもにも慰まず、忘れがたう覺え給ふらむ心深さよと、哀に思ひ聞え給ふに、疎にもあらず思ひ知られ給ふ。(一四)おはせましかばと、(一五)口惜しう思ひ出で聞え給へど、

て、(一)おはします寝殿を譲り聞え給ふべく宣へど、(二)「いと辱からむ」とて、御念誦堂のあはひに、廊をつゞけて造らせ給ふ。西面に(三)移ろひ給ふべきなゝめり。東の對どもなども燒けて後、麗しく新しくあらまほしきを、いよ〳〵磨き添へつゝ、細かにしつらはせ給ふ。(四)かゝる御心づかひを、内裏にも聞し召して、(五)程なく打解けうつろひ給はむを、如何と思したり。帝と聞ゆれど、(六)心の闇は同じ事になむおはしましける。(七)母宮の御許に、御使ありける(八)御文にも、唯この(九)御事をのみなむ聞えさせ給ひける。故朱雀院の、とりわきて、この(一〇)尼宮の御事をば、聞え置かせ給ひしかば、かく(一一)世を背き給へれど、おとろへず、何事も(一二)もとのまゝに、(一三)奏せさせ給ふ事などは、必ず聞召し入れ給ふ、御用意深かりけり。(一四)斯くやむごとなき御心どもに、互に限もなくもてかしづき騷がれ給ふおもだたしさも、如何なるにかあらむ、心の中にはことに嬉しくも覺えず、猶ともすれば、うち眺めつゝ、宇治の寺造ることをぞ急がせ給ふ。

(一)女二に自分の御殿を
(二)其では勿體なしとて
(三)女二が
(四)薫の
(五)まだ婚姻後間もなきに打解けて薫の方へ引取らるゝを然るべからぬ樣に思召したり
(六)子故の煩惱は
(七)女三
(八)朱雀の
(九)薫の妻を娶る事につきてのみ
(一〇)女三の身の上をば今上に頼み置かれ
(一一)女三が
(一二)今上が元の儘に扱ひ
(一三)女三が
(一四)今上や女三に大事がらるゝ薫は面目ありとして満足すべき筈なのに

(一)御心にて、來し方の例なきまで、同じくばもてなさむと、思し掟つるなゝめり。帝の御婿になる人は、昔も今も多かれど、かく盛の御世に、たゞ人のやうに、婿とり急がせ給へる類は、少くやありけむ。(二)左の大臣も、(三)珍らしかりける人の御おぼえ宿世なり。(四)故院だに、朱雀院の御末にならせ給ひて、(五)今はとやつし給ひし際にこそ、(六)かの母宮を得奉り給ひしか。我はまいて、(七)人も許されぬものを、拾ひたりしや」と宣ひ出づれば、(八)宮はげにと思すに、恥しうて御答もえし給はず。

三日の夜は(九)大藏卿よりはじめて、(一〇)かの御方の心寄せになさせ給へる人々、家司に仰言賜ひて、忍びやかなれど、(一一)かの御前、隨身、車ぞひ、舍人などまで祿たまはす。その程の事どもは、私事の樣にぞありける。かくてのちは、(一二)忍び〳〵に參り給ふ。心のうちには、猶忘れ難き(一三)古ざまのみ覺えて、晝は里に起き臥し眺めくらして、暮るれば(一四)心より外に急ぎ參り給ふをも、ならはぬ心地に、いと物憂く苦しうて、(一五)まかでさせ奉らむとぞ思しおきてける。(一六)母宮はいと嬉しき事に思し

(一)薫を大事にして遣らんと
(二)夕霧
(三)薫の時めき方運のよさはえらいものぢや
(四)源氏
(五)出家せられし際
(六)源が女三を娶りたり
(七)落葉をいふ
(八)落葉
(九)女二宮の母方の伯父
(一〇)中君に志ある人々が薫の家司に相談して
(一一)薫の
(一二)薫が女二へ
(一三)大君の事のみ慕はしく
(一四)嫌々ながら女二へ行くも
(一五)女二を私邸に引取らんと決心せり
(一六)女三

(一)中君を夕霧は快からず思へども
(二)中君自身
(三)夕霧
(四)中君が子持になりて仕舞ひたれば、薫の心
(五)薫には疎くなるべし
(六)匂の愛情
(七)中君の爲よかれと祈り來りし事を思へば

(廿)女二宮裳著、薫と婚す
(八)藤壺即ち明石姫君腹の女二宮
(九)薫が女二宮へ通ひ始めたり
(一〇)あれ程立派にかしづかれたる女二宮に平人の薫が配するのは
(一一)此縁組は帝の御意に出でたるにもせよ
(一二)すつぱりと遣つて仕舞ふ今上の氣風で

り。(一)よろしからず思すあたりなれど、宮の思さむ所あれば、御子の君達など參り給ひて、すべていと思ふ事無げにめでたければ、(二)御自らも、月頃物思はしく心地の惱ましきにつけても、心細う思しわたりつるに、斯くおもだたしく今めかしき事どもの多かれば、少しは慰みもやし給ふらむ。(三)大將殿は、かくのみ(四)大人び果て給ふめれば、いとゞ(五)我が方ざまは氣遠くやならむ、又(六)宮の御志もいと疎ならじ、と思ふ心は口惜しけれど、又初よりの(七)心おきてを思ふには、いと嬉しくもあり。

かくてその月の二十日あまりの程にぞ、(八)藤壺の宮の御裳著のことありて、またの日なむ(九)大將參り給ひける。その夜の事は忍びたる樣なり。「(一〇)天の下ひゞきていつくしう見えつる御かしづきに、たゞ人の具し奉り給ふぞ、猶飽かず心苦しく見ゆる。(一一)さる御許はありながらも、たゞ今斯くしも急がせ給ふまじき事ぞかし」と、謗らはしげに思ひ宣ふ人もありけれど、思し立ちぬる事、(一二)すがくしうおはします



り。大將殿(一)も、よろこびに添へて、嬉しくおぼす。昨夜(二)おはしましたりしかしこまりに、やがて(三)この御よろこびも打ち添へて、立ちながら(四)參り給へり。かく籠り(五)おはしませば、參り(六)給はぬ人なし。御產養、三日は例の唯宮の御私事にて、五日の夜は、大將殿(七)より屯食五十具、碁手の錢(八)、椀飯(九)などは、世の常のやうにて、子持の御前(一〇)の衝重三十、兒の御衣五重襲にて、御襁褓などぞ、事々しからず、忍びやかにしなし給へれど、こまかに見れば、いとわざと目馴れぬ心ばへ(一一)など見えける。宮の御前(一二)にも淺香の折敷十二して、高杯どもにて、粉熟(一三)參らせ給へり。女房の御前には、衝重をばさるものにて、檜破籠三十、樣々しつくしたる事(一四)どもあり。人目に事々しくは、ことさらにしなし給はず、七日の夜は、后の宮よりの御產養なれば、參り給ふ人々いと多かり。宮の大夫(一五)をはじめて、殿上人上達部、數知らず參り給へり。內裏にも聞し召して、今上「宮の始めて大人び給ふ(一六)なるには、いかでか(一七)」と宣はせて、御佩刀奉らせ給へり。九日も、大殿(一八)より仕う奉らせ給へ

(一)薫も自己の昇進の喜びにかされて
(二)匂が大饗に出席しくれし答禮に
(三)出產の祝
(四)玄關まで抔の意
(五)匂が
(六)見舞に
(七)薫
(八)圍碁の賭物にする錢
(九)椀に飯を堆く盛りて客にすゝむる也
(一〇)中君
(一一)心を盡して調へたる也
(一二)匂宮
(一三)餅の類、米の粉と麵粉とにて作る、點心に用ふる物
(一四)手を盡したる料理あり
(一五)中宮大夫
(一六)はじめて父となれるをいふ
(一七)祝をせずには置かれぬ
(一八)夕霧

(一)紅梅が從來左大將なりしを辭したる故闕員を生じたる也
(二)薫が方々へ御禮に歩きて匂方へも來たり
(三)中君が
(四)匂宮が中君方に
(五)中君方へ薫が
(六)答禮
(七)右近衞寮の人々を饗應する席へ御出あれと
(八)中君
(九)饗應は夕霧の大饗の時の例によるべしとて
(一〇)相伴役
(一一)匂も出席したれども中君の事が氣がかり故
(一二)六君方では
(一三)素性をいへば中君とて六君に劣りたる譯ならねど
(一四)六君方は萬事高くとまつて居るなるべし
中君男子を生む、方方よりの産養
(一五)中君の子

右のおほい殿左にておはしけるが、辭し給へる所なりけり。(一)よろこびに所々ありき(二)給うて、この宮にも參り給へり。いと(三)苦しくし給へば、(四)此方におはします程なりければ、やがて(五)參り給へり。匂「僧など侍ひて、いと便なき方に」と驚き給ひて、あざやかなる御直衣、御下襲など奉り、ひき繕ひ給ひて、下りて(六)答の拜し給ふ御有樣ども、とりぐ\にいとめでたし。薫「やがて今宵(七)つかさの人に祿賜ふあるじの所に」と、請じ奉り給ふを、(八)惱み給ふ人によりてぞ、思したゆたひ給ふめる。左のおほい殿のし給ひける儘にとて、六條院にてなむありける。(一〇)垣下の親王達上達部(九)、大饗に劣らず、あまり騷がしきまでなむ集ひ給ひける。(一一)この宮もわたり給ひて靜心なければ、まだ事も果てぬに急ぎ歸り給ひぬるを、(一二)大殿の御方には、「いと飽かずめざましう」と宣ふ。(一三)劣るべうもあらぬ御程なるを、たゞ今のおぼえの花やかさに思し儆りて、(一四)おしたちてもてなし給へるなゝめりかし。辛うじてその曉に、(一五)男にて生まれ給へるを、宮もいとかひありて嬉しく思した

なりぬれど、一所の御志（一）こそおろかならね、大方の世には、物々（二）しうもてなし聞え給はざりつるを、この折ぞ、何處にも／＼聞召し驚きて、御とぶらひども聞え給ひける。中納言（三）の君は、宮の思し騷ぐらむにも劣らず、如何におはせむと歎きて、心苦しく後めたく思さるれど、（四）限ある御訪らひばかりこそあれ、餘りも得まうで給はで、忍びてぞ御禱などもせさせ給ひける。さるは、女二（五）の宮の御裳著、たゞこの頃になりて、世の中ひゞき營みのゝしる。萬の事、帝（六）の御心一つなる樣に思し急げば、御後見無きしもぞ、なか／＼めでたげに見えける。女御のし置き給へる事をばさる物にて、作物所、さるべき受領（七）どもなど、とり／＼に仕う奉る事ども、いと限なし。やがてその程に、參（八）りそめ給ふべき樣にありければ、男方も心づかひし給ふ頃なれど、例（九）の事なれば、其方ざまには心も入らで、この御事のみいとほしう思し歎かる。

二月の朔日頃に、直物（一〇）とかいふことに、權大納言（一一）になりて、右大將かけ給ひつ。

（一）匂こそは中君を大事がりもすれど
（二）中君を重んじもせざりしに
（三）薫は
（四）一通りの見舞だけはすれど
（五）薫に降嫁すべき筈の人、婚禮前に裳著の式をせねばならぬ故用意ある也
（六）帝が萬事自身でする樣に
（七）朝廷にて何か事あれば國々の守が之を承りて事を辨じ其によりて己の地位を保ち又は更によき地位を求めなどするは此頃の風俗也
（八）裳著の頃より薫が女二へ通ふ樣にとの仰ある故
（九）薫の例の癖なれば女二の方の事は氣が進まず中君の事ばかり心配して居る
●　薫權大納言に進む、大饗
（一〇）除目の濟みて後追加して行はるゝ任官式
（一一）薫が

（一）侍女等の心、中君と六君とは比べ物にならぬと思へばうんざりする
（二）夕霧
（三）夕霧に
（四）氣のもめる世の中
（五）中君
（六）夕霧方の
（七）宇治へ退きて
【二十】中君不快、匂宮黨等の心配
（八）中君が産の近づきし也
（九）明石中宮
（一〇）中君が匂に嫁してより

ども、いと多くひき續き給へる御勢こちたきを見るに、（一）竝ぶべくもあらぬぞ屈しいたかりける。人々のぞきて見奉りて　侍女「さも淸らにおはしける（二）大臣かな、然ばかり、いづれともなく若う盛にて淸げにおはさうずる御子どもの、（三）似給ふべきもなかりけり。あなめでたや」と言ふもあり。又、侍女「さばかりやむごとなげなる御樣にて、わざと御迎に參り給へるこそ憎けれ。（四）やすげなの世の中や」など打歎くもあるべし。（五）御自らも、來し方を思ひ出づるよりはじめ、かの花やかなる（六）御中らひに、立ちまじるべくもあらず、幽なる身の覺をと、いよ〳〵こゝろぼそければ、（七）なほ心安く籠り居なむのみこそ、目安からめ、などいとゞ覺え給ふ。はかなくて年も暮れぬ。

正月の晦日がたより、例ならぬ樣に惱み給ふを、（八）宮まだ御覽じ知らぬことにて、如何ならむと思し歎きて、御修法など、所々にて數多せさせ給ふに、又々始め添へさせ給ふ。いといたう煩ひ給へば、（九）后の宮よりも御とぶらひあり。（一〇）かくて三年に

(一)盤渉は呂の調、前の黄鐘は律の調也
(二)催馬樂の曲名、匂が謠ふ也
(三)面白さに聞惚れ居る樣
(四)匂が
(五)匂の樣な結構な方に附合ふ處ではなかりし
(六)宇治へ歸りたく中君が思ひて
(七)匂が中君に
(八)六君方
(九)夕霧
(一〇)我が居間の方に匂が行きて
(一一)別に用事がなき時は

てぞ、うち歎きて少ししらべ給ふ。ゆるびたりければ、盤渉調(一)にあはせ給ふ。かきあはせなど、爪音をかしげに聞ゆ。「伊勢の海(二)」謠ひ給ふ御聲のあてにをかしきを、女ばら物の後に近づき參りて、笑みひろごり居たり(三)。侍女「二心(四)おはしますはつらけれど、それも理なれば、猶我が御前をば、幸人とこそ申さめ。かゝる御有樣(五)にまじらひ給ふべくもあらざりし年頃の御住居を、又歸り(六)なまほしげに思して、宣はするこそいと心憂けれ」など、たゞ言ひに言へば、若き人々は、「あなかまや」など制す。御琴ども教へ(七)奉りなどしつゝ、三四日籠りおはして、御物忌などことつけ給ふを、かの殿(八)には怨めしく思して、大臣(九)内裏より出で給ひけるまゝに、此處に參り給へれば、宮、匂「事々しげなる樣して、何しにいましつるぞとよ」とむづかり給へど、あなた(一〇)に渡り給ひて對面し給ふ。夕霧「異なる事なき(一一)程は、この院を見で久しうなり侍るも哀にこそ」など、昔の御物語ども少し聞え給ひて、やがて引連れ聞え給ひて出で給ひぬ。御子どもの殿ばら、さらぬ上達部殿上人な

いと見所ありてうつろひたるを、とりわきて折らせ給ひて、匂「花の中に偏に」と(一)誦じ給ひて、匂「なにがしの御子の、(二)この花めでたる夕ぞかし、いにしへ天人の翔りて、琵琶の手教へけるは。何事も淺くなりにたる世は物憂しや」とて、御琴さしおき給ふを、口惜しと思して、中君「心こそ淺くもあらめ、昔を傳へたらむ事さへ(三)は、などてかは然しも」とて、覺束なき手などをゆかしげにおぼしたれば、(四)匂「さらば獨言はさうぐ\しきに、さしいらへし給へかし」とて、(五)人召して箏の御琴とり寄せさせて、彈かせ奉り給へど、中君「昔こそまねぶ人ものし給ひしかど、(六)はかばかしく彈きも留めずなりにしものを」とて、つゝましげにて手も觸れ給はねば、匂「かばかりの事も、(七)隔て給へるこそ心憂けれ。この頃見るあたりは、(八)まだいと心解くべき程にもあらねど、かたなりなる初事をも隱さずこそあれ。すべて女は、やはらかに心美しきなむよき事とこそ、その中納言も(九)定むめりしか。かの君に(一〇)はた、斯くもつゝみ給はじ、こよなき御中なゝめれば」など、まめやかに怨みられ

(一)朗詠「不是花中偏愛菊、此花開後更無花」
(二)西宮左大臣高明菊を賞して此句を誦しけるに唐土の廉承武といふ琵琶の名手の靈來りて開後は開盡の誤謬なる由を告げ石上流泉の琵琶の祕曲を高明に授けて去りし故事
(三)昔の傳によりて習ひたる手迄が左迄昔に劣る筈はなし
(四)自分の習ひ得て居らぬ處をきゝたがれば
(五)合奏してくれ
(六)父に習へば習ふべかりしをよくも習はずに仕舞ひたれば
(七)斯かる些事につけても
(八)六君はまだ昨今にて馴染も薄けれど、よくも出來ぬ事迄隱さずにして見せる
(九)薫
(一〇)薫に對しては是程遠慮もすまじ

（一）薫から斯く文が度々來れば中君が内々は其に心を惹かされ居るならん
（二）匂の服裝
（三）琵琶は嗜める道故
（四）懷胎にて大儀なる樣也
（五）匂の我に飽きて六君に移る心も薄と共に穗にあらはれたり
（六）「月見れば千々に物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねど」
（七）中君が
（八）匂が
（九）斯る女には薫も必ず懸想するならんと
（一〇）霜に色がかはりきらず
（一一）手入してあるは却て色のかはる事遲き也。此頃は菊の霜にあひて色の變れるを賞美したる也

見ゆるに、まだ穗に出でさしたるも、露を貫きとむる玉の緒、はかなげにうち靡きたるなど、例の事なれど、夕風なほあはれなる頃なりかし。

匂（一）穗にいでぬもの思ふらししのすゝき招くたもとの露しげくして

なつかしきほどの御衣どもに、直衣ばかり著たまひて、琵琶を彈き居給へり。黄（二）鐘調のかきあはせを、いと哀にひきなし給へば、女君も心に入り給へる事にて、（三）物怨じもえし果て給はず、ちひさき御几帳のつまより、（四）脇息に寄りかゝりて、ほのかにさし出で給へる、いと見まほしくらうたげなり。

中君（五）「秋はつる野べの氣色もしのすゝきほのめく風につけてこそ知れ（六）我が身ひとつの」とて涙ぐまるゝが、流石に（七）恥かしければ、扇を紛らはしておはする心の中も、らうたく推し（八）はからるれど、かゝ（九）るにこそ人もえ思ひ放たざるらめと、疑はしき方たゞならで、怨めしきなゝめり。菊の、まだよくもうつろひ（一〇）はてで、わざと繕ひ（一一）たてさせ給へるは、なか〱遲きに、如何なる一本にかあらむ、

（一）辨の尼の方へ、言ひ遣し下され
（二）何げなく
（三）我が居るのを聞いて用心して此樣に書きたるならん
（四）實際多少其手加減もありしならん
（五）匂が
（六）己は見ないからとて匂が外を向いて居る
（七）寺にしてこそ至當と存じ居りしに
（八）自分が遁世したき時わざ〳〵別に寺をさがすよりも宇治の寢殿を寺にして置いて其へ行けば舊宅を保存する譯にもなりて好都合なれば、「如何ならん巖の中に住まばかは世の憂き事の聞え來ざらん」
（九）有難く思ふべし
（一〇）薫と中君との中は斯く仔細なき交際なるべしとは思へど
（一一）匂が自分の浮氣から推測して
㊈ 匂宮中宮方に宿る、夕霧匂宮を伴ひて自邸に歸る、中君の感傷
（一二）きはだちて

---

尼君に、さるべき仰言はつかはせ。（一）

などぞある。匂「よくもつれなく（二）書き給へる文かな。（三）まろありとぞ聞きつらむ」と宣ふも、（四）少しは實に然やありつらむ。女君は事なきを嬉しと思ひ給ふに、あながちにかく（五）宣ふをわりなしと思して、打怨じて居給へる御樣、萬の罪も許しつべくをかし。匂「返事書い給へ。（六）見じや」とて外樣に背き給へり。あまえて書かざらむも怪しければ、

中君「山里の御ありきの羨ましくも侍るかな。彼處は實に、（七）さやうにてこそよくと思ひ給へしを、（八）殊更に又巖の中もとめむよりは、荒らし果つまじく思ひ侍るを、如何にもさるべき樣になさせ給はば、（九）疎ならずなむ。

と聞え給ふ。（一〇）かう憎き氣色もなき御睦なめりと見給ひながら、（一一）我が御心ならひにたゞならじと思すが、安からぬなるべし。

かれ〴〵なる前栽の中に、尾花の、（一二）物より殊に手をさし出でて招くが、をかしく

(一)昔此處に宿りし事を思ひ出さずば如何に寂しき宇治の旅寢ならん、やどりき—寄生木、宿りき
(二)此老尼の宿を昔の名殘と思ひて宿り給へる御いたはしさ
(三)尼の歌を評していふ
(四)薫が
㊅薫携へ歸りたる蔦を中君に贈る
(五)薫が中君へ
(六)恰も匂が居合せたり
(七)薫の居る三條宮は二條院の南にあり
(八)取次が
(九)何か譯ありさうに言ひて
(一〇)宇治へ行きて
(一一)御目にかゝりて申上ぐべし
(一二)中君の承諾を得て建物を移轉さすべし

と思しくてもたせ給ふ。

薫　やどりき(一)と思ひいでずば木のもとの旅寢もいかにさびしからまし

と獨言ち給ふを聞きて、尼君、

辨　荒(二)れはつるくち木のもとをやどりきと思ひおきけるほどの悲しさ

飽くまで古めきたれど、故なくはあらぬをぞ、聊の慰(四)には思されける。

宮(三)に紅葉奉れ給へれば、男宮(六)おはしましける程なりけり。「南(七)の宮より」とて、何(八)心(五)もなく持て參りたるを、女君例のむづかしき事もこそと、苦しく思せど、取隱さむやは。宮、「をかしき蔦かな」と(九)、たゞならず宣ひて、召し寄せて見給ふ。御文には、

薫　日頃何事かおはしますらむ。山里(一〇)にものし侍りて、いとゞ峰の朝霧に惑ひ侍りつる、御物語もみづからなむ(一一)。かしこの寢殿、堂になすべき事、阿闍梨に言ひつけ侍りにき。御許し(一二)侍りてこそは、外に移すことも物し侍らめ。辨の



ふ折あらむ序に、斯くなむ言ひしと傳へ給へ」などばかり宣ひ置く。辨「(一)母君は、故北の方の御姪なり。辨も(二)離れぬ中らひに侍るべきを、(三)そのかみは外々に侍りて、委しうも見給へ馴れざりき。先つ頃京より、(四)大輔がもとより申したりしは、かの君(五)なむ、いかでかの御墓にだに參らむと宣ふなる、さる心せよ、など侍りしかど、まだ此處に、(六)さしはへては音なはず侍るめり。今、然らばさやうの序に、かゝる仰言など傳へ侍らむ」と聞ゆ。明けぬれば(七)歸り給はむとて、昨夜後れてもて參れる絹綿などやうのもの、阿闍梨におくらせ給ふ。尼君にも賜ひ、法師ばら尼君の下衆どもの料にとて、布などいふ物をさへ召して賜ぶ。(八)心ぼそき住居なれど、かゝる御訪らひ撓まざりければ、(九)身の程にはいと目安く、しめやかにてなむ行ひける。木枯の堪へ難きまで吹きとほしたるに、殘る梢もなく散り敷きたる紅葉を、踏み分けたる跡も見えぬを、見わたして、(一〇)頓にもえ出で給はず。いと氣色ある深山木(一一)にやどりたる蔦の色ぞまだ殘りたる。(一二)薫「こだに」など少し引取らせ給ひて、宮へ(一三)

(一)中將の君は八宮の北方の姪なり
(二)従姉妹也
(三)中將の君が八宮に居りし時分辨は他所に在りて
(四)浮舟の侍女
(五)浮舟が八宮の墓參だけなりともしたしと
(六)態々尋ねては來ぬ
(七)薫が
(八)尼の今の生活は
(九)身分に合せては
(一〇)薫が
(一一)寄生したる
(一二)是でもせめて歸の土産にせんとて「こだに」は蔦の類なりとも又はくちなし也ともいふ說あれども今新釋の一說に從ふ
(一三)中君へ贈らんとて

（一）中將の君を
（二）八宮が僧同樣の生活をする事になりしを中將が極り惡がりて暇を取りたるが
（三）浮舟の無事なる由を八宮方へ其となく知らせたるを八宮が聞きて
（四）中將の君が
（五）中將の夫が常陸守になりて赴任したるが
（六）中君方
（七）一頃は
（八）中將の君が手紙にまで書いてよこしたり
（九）薰の心
（一〇）大君の樣子に少しでも似て居る女があらばそ
（一一）八宮は子とも思はれざりしかど骨肉には相違なし
（一二）わざ〳〵でなくとも彼から此處へ音信して來る事もあらば我が斯樣斯樣と言ひたりと傳言せよ

に思しなりて、またとも御覽じ入るゝ事も侍らざりけり。あいなくその事に思し懲りて、やがて大方聖（一）にならせ給ひにけるを、はしたなく思ひて、え侍はずなりにけるが、陸奥守の妻（二）になりて下りけるを、一年上りて、（三）その君平かに物し給ふよし、このわたりにもほのめかし申したりけるを、聞召しつけて、更にかゝる消息あるべき事にもあらず、と宣はせ放ちたりければ、かひなくてなむ（四）歎き侍りける。さて又常陸に（五）なりて下り侍りにけるが、この年頃音にも聞え給はざりつるが、この春上りて、（六）かの宮には尋ね參りたりけるとなむほの聞き侍りし。かの君の年は、二十許になり給ひぬらむかし。いと美しく生ひ出で給ふがかなしき、などこそ、中頃は、（七）文にさへ（八）書きつゞけて侍るめりしか」と聞ゆ。委しく聞き明らめ給ひて、（九）さらば誠にてもあらむかし、見ばや、と思ふ心出で來ぬ。薰「昔の（一〇）御けはひに、かけても觸れたらむ人は、知らぬ國までも尋ね知らまほしき心あるを、數ま（一一）へ給はざりけれど、近き人にこそあゝなれ。（一二）わざとはなくとも、このわたりに音な

(一)大君
(二)尼が語るにつけて薫が聞きつゝ大君の性質を思ふ也、「こめかしく」以下大君の性質をいふ
(三)中君は、以下薫の心
(四)疎き人に對しては恥をかゝす樣な應對もし兼ねまじき人柄なれど
(五)我に對しては情の深い所を見せ通さうと思ひ居る樣なり
(六)浮舟の事を薫が
(七)此頃浮舟が在京するといふ事は存じませぬ
(八)浮舟の身の上は
(九)八宮
(一〇)八宮が窃に手をつけしを
(一一)是浮舟也
(一二)我子なるべしと八宮が思召したる故其以來中將の君を厭ひて

など聞ゆ。故姫君の御事どもはた、盡きもせず、年頃の御有樣など語りて、何の折何と宣ひし、(一)花紅葉の色を見ても、はかなく詠み給ひける歌語などを、つきなからず、打戰きたれど(二)語るもこめかしく、言少なるものから、をかしかりける人の御心ばへかなとのみ、いとゞ聞き添へ給ふ。(三)宮の御方は今少し今めかしきものから、(四)心許さざらむ人の爲には、はしたなくもてなし給ひつべくこそものし給ふめるを、(五)我にはいと心深く情々しとは見えて、いかで過してむとこそ思ひ給ひつれ、など心の中に思ひくらべ給ふ。さて物の序に、(六)かの形代の事を言ひ出で給へり。辨「(七)京にこの頃侍らむとはえ知り侍らず。(八)人傳に承りし事の筋なゝなり。(九)故宮の、まだかゝる山住もし給はず、故北の方亡せ給へりけるほど近かりける頃、中將の君とて侍ひける上臈の、心ばせなどもけしうは侍らざりけるを、(一〇)いと忍びて、はかなきほどに物宣はせけるを、知る人も侍らざりけるに、(一一)女子をなむ産みて侍りけるを、(一二)然もやあらむと思す事のありけるからに、あいなく煩はしう物しき樣

(一)中君方へ送るべき品あらば
(二)此樣な老人を何やかや世話やく筈もなけれど
(三)辨の尼を
(四)柏木
(五)尼が話す
(六)柏木が臨終に薫を見たく思ひ居られし樣子などが思ひ出さるゝにつけて
(七)私の晩年に薫に逢ふにつけても柏木存生中に親しく御宮仕申上げし驗がある樣に思はれて
(八)大君の卒去や中君の不仕合やら
(九)中君よりも
(一〇)中君を
(一一)中君に隔心のある故ならん抔と
(一二)出家したる私なれば

は、かの廊に物し給へ。(一)京の宮にとり渡さるべき物などあらば、御庄の人召して、あるべからむ樣に物し給へ」など、まめやかなる事どもを語らひ給ふ。外にては、(二)かばかりにさだ過ぎたらむ人を、何かと見入れ給ふべきにもあらねど、夜も近く(三)臥せて、昔物語などせさせ給ふ。(四)故權大納言の君の御有樣も、聞く人なきに心安くて、いと細やかに(五)聞ゆ、辨「(六)今はとなり給ひし程に、珍らしくおはしますらむ御有樣を、いぶかしきものに思ひ聞えさせ給ふめりし御氣色などの、思ひ給へ出でらるゝに、かく思ひかけ侍らぬ(七)世の末に、かくて見奉り侍るなむ、かの御世に睦まじう仕う奉り置きし驗の自ら侍りけると、嬉しくも悲しくも思ひ給へ知られ侍る。心憂き命のほどにて、(八)斯くさま〴〵の事を見給へ過し、思ひ給へ知り侍るなむ、いと恥かしく心憂く侍る。(九)宮よりも、時々は參りて(一〇)見奉れ、覺束なく絶え籠り果てぬるは、こよなく(一一)思ひ隔てけるなゝめりなど、宣はする折々侍れど、(一二)ゆゆしき身にてなむ、阿彌陀佛より外には、見奉らまほしき人も無くなりて侍る」

異様にも造りかへむの心にてなむ」と宣へば、阿闍梨「とざまかうざまに、いともかしこく尊き御心なり。むかし、(一)別を悲みて、屍をつゝみて數多の年頸にかけて侍りける人も、佛の御方便にてなむ、かの屍の嚢を捨てて、遂に聖の道にも入り侍りにける。この寝殿を御覽ずるにつけて、(二)御心動きおはしますらむ、ひとへに(三)怠怠じき御事なり。(四)又後の世の御勸ともなるべき事に侍りけり。急ぎ仕う奉らすべし。暦の博士のはからひ申して侍らむ日を承りて、物の故知りたらむ工匠二三人も賜はりて、細かなる事どもは、(五)佛の御教のまゝに仕う奉らせ侍らむ」と申す。とかく宣ひ定めて、御庄の人ども召して、(六)この程の事ども、阿闍梨の言はむ儘にすべき由など仰せ給ふにはかなく暮れぬれば、その夜はとまり給ひぬ。(七)この度ばかりこそは見めと思して、立ちめぐりつゝ見給へば、佛も皆かの寺に移してければ、尼君の行の具のみあり。いとはかなげに住ひたるを、哀に如何にして過すらむと見給ふ。薫「この寝殿はかへて(八)つくるべき様あり。造り出でむほど

(一)觀音勢至の二菩薩前生に繼母に殺されしかば其親屍を頸にかけて歎き居しが遂に佛道に入りたる故事なりといふ
(二)薫が煩惱を起すのは
(三)其を其儘にしておくは行居かぬ事なり
(四)寺にするは後世の爲、にもなる事也
(五)宗規の通りに
(六)寺普請につきての用事萬端
(七)此寝殿を見るも今度限りと薫が思ひて
(八)建て直すべき仔細あり、普請中は廊に住み給へ、尼にいふ詞

り。言ひても言ひても、(一)むなしき空にのぼりぬる煙のみこそ、誰も遁れぬ事ながら、(二)後れ先だつ程は、猶いといふかひなかりけり」とて、また泣き給ひぬ。

阿闍梨召して、例のかの(三)御忌日の經佛のことなど宣ふ。薫「さて此處にかく時々(四)ものするにつけても、(五)かひなきことの安からず覺ゆるがいと益なきを、この寢殿毀ちて、かの山寺の傍に、堂建てむとなむ思ふを、同じくば疾く始めてむ」と宣ひて、堂いくつ、廊ども、僧房など、あるべき事ども書き出で宣ひなどさせ給ふを、阿闍梨「いと尊き事」と聞え知らす。薫「(六)昔の人のゆゑある御住居にしめ造り給ひけむ所をひき毀たむも、情なき様なれど、(七)その御志も、功徳の方にはすゝみぬべく思しけむを、(八)とまり給はむ人々を思しやりて、え然はおきて給はざりけるにや、今は兵部卿宮の(九)北の方こそは知り給ふべければ、かの宮の御料とも言ひつべくなりにたり。されば、(一〇)こゝながら寺になさむ事は便なかるべし。(一一)心に任せて然もえ爲じ。所の樣もあまり川面近く、(一二)顯證にもあれば、猶寢殿を(一三)うしなひて、

(一)大君の死こそ
(二)生き殘りて居る間は歎の種也
(三)大君の一週忌
(四)我が來るに附けても
(五)今の樣では來甲斐のなきが不滿足故
(六)八宮が折角面白き住居として場所を取りて造りたる家を
(七)八宮の御心も佛の方には篤かりし樣なりしに
(八)子どもの事を思ひて寢殿を寺にする事は見合せたりと思はる
(九)此山莊は中君の支配なれば匂の所有ともいふべし
(一〇)寢殿を有形の儘寺にするは不都合なり
(一一)我が一了簡でも出來ぬ
(一二)あらはに他所から見え過ぎる故
(一三)取りのけて

(一)薫が宇治へ
(二)年老いたるをいふ
(三)憚りて御前へ出ませぬ
(四)辨が
(五)外に同情して聞いてくれる人もなき大君の昔話を其方とせんとて來たり
(六)大君が中君の爲に匂の來ぬを心配せしは丁度此頃の事と思へば
(七)大君の御心配なされし通り匂と中君との中が美しからぬ此頃の御樣子を聞くに附けても色々氣ばかりもめる
(八)大君が深く歎き入りて遂に死なれたる其元は我が匂を取持ちたる故ぞと思へば一層悲し
(九)匂の六君を娶りたるは常然の事
(一〇)中君の爲氣遣な事は無き樣也

ば、九月二十日餘の程におはしたり。いとゞしく風のみ吹き拂ひて、心すごう荒ましげなる水の音のみ宿守(一)にて、人影もことに見えず。見るにまづかきくらし、悲しきことぞ限なき。辨の尼召し出でたれば、障子口に、青鈍の几帳さし出でて參れり。辨「いと畏けれど、ましていと恐ろし(二)げに侍れば、(三)つゝましくてなむ」と、まほには出で來ず。薫「いかに(四)眺め給ふらむと思ひやるに、(五)同じ心なる人もなき物語も聞えむとてなむ。はかなくも積る年月かな」とて、涙をひと目浮けておはするに、老人はいとゞ更にせきあへず。辨「(六)人の上にて、あいなく物を思ほすめりし頃の空ぞかしと、思ひ給へ出づるに、何時と侍らぬ中にも、秋の風は身にしみてつらく覺え侍りて、實に(七)かの歎かせ給ふめりしもしるき世の中の御有樣をほのかに承るも、樣々になむ」と聞ゆれば、薫「とある事もかゝる事も、ながらふれば直る樣もあるを、(八)味氣なく思ししみけむこそ、我が過の樣に猶悲しけれ。(九)この頃の御有樣は、何か、それこそ世の常なれ。(一〇)されどうしろめたげには見え聞え給はざめ

(一)油斷させて逃込みたれば
(二)此場合無暗に無分別な眞似をするのも中君の爲は勿論自分の爲にもつまらぬ譯故
(三)薫の心
(四)人からは批難されずに自分の滿足する仕方がありさうなものぢやと
(五)色戀にかけては薫は踏込んで修行した黑人でなき故か
(六)自他の身のをさまりばかり案じて居る
(七)浮舟をも、以下薫の心
(八)逢つて似て居るか居ぬかを見極めたし
(九)重き身柄でもなき故手に入れる事はむつかしくもなかるべけれど
(一〇)若し其女が氣に入らなかつたら却て煩を求めるやうなもの
(一一)浮舟の方には氣がすゝまず
(一三)薫宇治の山荘に行く、寢殿を寺に造り改めんとす、辨の尼に浮舟の事を聞く

たはらいたく覺え給ひて、うちたゆめて入り給ひぬれば、男君、理とは返す〴〵思へど、猶いと怨めしう口惜しきに、(一)思ひしづめむ方もなき心地して、涙のこぼるゝも人惡ければ、萬に思ひ亂るれど、ひたぶるに淺はかならむもてなしはた、猶いとうたて我が爲もあいなかるべければ、(二)念じかへして、常よりも歎きがちにて出で給ひぬ。

(三)斯くのみ思ひては如何すべからむ、苦しうもあンべいかな、如何にしてかは、(四)大方の世のもどきあるまじき樣にて、流石に思ふ心の叶ふわざをすべからむ、など、(五)おりたちて練じたる心ならねばにや、(六)我が爲人の爲も心安かるまじき事を、わりなく思しあかす。似たりと宣ひつる(七)人をも、(八)いかでかは誠かとは見るべき、(九)さばかりの際なゝれば、思ひよらむに難うはあらずとも、(一〇)人の本意にもあらずば、うるさくこそあるべけれ、など、(一一)猶そなた樣には心もたゝず。

宇治の宮を久しく見給はぬ時は、いとゞ昔遠くなる心地して、すゞろに心細けれ

(一)人形の代り位にはなるべしと思ふ
(二)八宮は其女を我子とも思ひ居らざりしに
(三)花降らす工がほしと前に薫がいひし事
(四)浮舟が
(五)中君に便り來りしを
(六)とう／＼上京し來りし也
(七)浮舟の容貌をいふ、一寸見たせいでもあらうが
(八)其母親が
(九)宇治に置かれて大君の身代りにされたらば此上もなき仕合なるべし、其程にするにも及ばぬ
(一〇)薫の心、中君が薫につけ廻さるゝを體よく逃れんとして居るのぢやと思へばつらけれど浮舟も見たくもある
(一一)薫の懸想を以ての外の事と中君が思ひながらも人目に分る樣に薫に恥をかゝせもせぬは我が切なる情を酌知りて居る故なるべしと思へば胸が踊りて
(一二)中君は

とかく慰めむ方なきよりはと思ひ寄り侍る。人形の願ばかりには、などかは山里の本尊にも思ひ侍らざらむ。猶たしかに宣はせよ(一)」と、うちつけにせめ聞え給ふ。中君「いさや、(二)いにしへの御許もなかりし事を、斯くまでも漏し聞ゆるも、かつはいと口輕けれど、(三)變化のたくみ覓め給ふいとほしさにこそ、斯くも」とて、中君(四)「いと遠き所に年頃經にけるを、母なる人のいとうれはしき事に思ひて、あながちに尋ね(五)よりしを、はしたなくもえ答へで侍りしに、(六)ものしたりしなり。(七)仄なりしかばにや、何事も思ひし程よりは、見苦しからずなむ見えし。これを如何樣にもてなさむと歎く(八)めりしに、(九)佛にならむはいとこよなき事にこそはあらめ。然まではいかでかは」など聞え給ふ。(一〇)然りげなくて、斯ううるさき心をいかではなつわざもがなと、思ひ給へると見るはつらけれど、さすがに哀なり。(一一)あるまじき事とは深く思ひ給へるものから、顯證にはしたなき樣にはえもてなし給はぬも、見知り給へるにこそはと思ふ心ときめきに、夜もいたく更け行くを、(一二)内には人目いとか

(一)親しみ寄るべき譯があればこそ
(二)なぜ今迄私に其話をして下されざりしぞ
(三)其浮舟との關係もよく分らず
(四)八宮は我々姉妹が落魄せん事を非常に氣遣ひたりしに今は大君もなくなり我身一つにつくぐ父の遺言が味はるゝ處へ又つまらぬ異母妹迄が出て來て噂の種になるのがつらし
(五)其女は八宮の忍び女が出來た子を育てたものらしと鑑定したり
(六)其丈では分らぬ、話すならはつきり言うて貰ひたし
(七)中君が話さず
(八)どこそこに居る人と位は言つてもよけれど
(九)委しく話し過ぎては
(一〇)楊貴妃の死後其魂の在處を知らんとして方士が東海の中なる三神山を尋ね蓬萊宮にて尋ねあひし長恨歌の故事、海と蓬とかけていへり
(一一)其女の事をも其程深くは思はねども

宣ふを、夢語かとまで聞く。薫「さる(一)べき故あればこそは、さやうにも睦び聞えらるらめ。など(二)か今まで斯くもかすめさせ給はざらむ」と宣へば、中君「いさや、そ(三)の故も、如何なりけむ事とも思ひわかれ侍らず、物(四)はかなき有様どもにて、世に落ち留りさすらへむとすらむ事とのみ、後めたげに思したりし事どもを、唯一人かきあつめて思ひ知られ侍るに、又あいなき事をさへ打添へて、人も聞き傳へむこそ、いといとほしかるべけれ」と宣ふ氣色見るに、宮(五)の忍びてものなど宣ひけむ人の、しのぶ草摘み置きたりけるなるべしと見知りぬ。似たりと宣ふゆかりに耳とまりて、薫「斯(六)ばかりにては。同じうば言ひ果てさせ給ひてよ」と、いぶかしがり給へど、流石にかたはらいたくて、えこまかにも聞(七)え給はず。中君「尋ねむと思す心あらば、そのわたりとは聞えつべけれど、委しくはしも得知らずや。又あま(九)り言はば、御心劣(八)もしぬべき事になむ」と宣へば、薫「世(一〇)を海中にも、魂のありか尋ねには、心のかぎり進みぬべきを、(一一)いとさまで思ふべきにはあらざゝなれど、い

も侍りけるを、さやうならむ變化の人もがな」など、とざまかうざまに忘れむ方な(一)き由を、歎き給ふ氣色のいと心深げなるも、いとほしうて、今少し近くすべり(二)寄りて、中君「人形のついでに、いと怪しく思ひ寄るまじき事をこそ思ひ出で侍れ」と宣ふけはひの少しなつかしきも、いと嬉しく哀にて、薫「何事にか」と言ふまゝに、几帳の下より手を捉ふれば、いとうるさく思ひならるれど、如何樣に(三)してかかる心をやめて、なだらかにあらむと思へば、この(四)近き人の思はむ事のあいなくて、さりげなくもてなし給へり。中君「年頃は(五)世にやあらむとも知らざりし人の、この夏頃遠き處よりものして(六)、尋ね出でたりしを、疎くは思ふまじけれど(七)、またうちつけに、さしも何かは睦び思はむと思ひ侍りしを、さいつ頃來たり(八)しこそ、怪しきまで、昔の(九)人の御けはひに通ひたりしかば、哀に覺えなり侍りにしか。かた(一〇)みなど、かう思ほし宣ふめるは、なかなか何事もあさましくもて離れたりとなむ、皆人々も言ひ侍りしを、(一一)いとさしもあるまじき人の、いかでかは然はありけむ」と

(一)大君を
(二)中君が
(三)中君の心、どうかして薫の此樣な心をやめさせて
(四)少將の思はくがいやで中君が何氣なく裝うて居る
(五)生きて居るとも思はざりし人が、中君の異母妹浮舟をいふ
(六)京へ來りて私を尋ね來りしを
(七)突然親しくすべきでもなしと
(八)浮舟が
(九)大君の樣子に
(一〇)私を大君の形見と薫は仰せらるれど、私は丸で大君とは違つて居ると皆がいふ
(一一)似て居ぬ筈の浮舟がどうしてあの樣に似るものか

（一）私の親切を御詳めになりたればこそと嬉しく思はぬではなし
（二）言ひつゞけ
（三）薫が物に倚りかゝり居る
（四）中君は
（五）「戀しさの限だにある世なりせばつらきを強ひて歎かざらまし」
（六）せめて心ゆく迄泣きたいが、「戀ひわびぬ音をだになかん聲立てゝいづくなるらん音無しの里」
（七）宇治
（八）大君の肖像を人形につくり
（九）中君に戀して居る今の薫の樣子では其人形も祓の時にみたらし川に流さるゝ人形の樣にやがて捨てられるのかと危ぶまれて氣の毒なり
（一〇）肖像を畫にかゝせれば又慾張の畫師が醜く畫いて薫に愛相をつかさせる惧あり、漢の毛延壽が漢武帝の妾達を畫きし時金を贈りし女をば美しくかき贈らざりし王昭君を醜くかきし故事
（一一）氣に入りたる樣に作らせるはむつかし
（一二）未考

とかしこき事に思しおきて宣はするや、この御山里いでたち急ぎに、辛うじて召しつかはせ給ふべき。それも實に（一）御覽じ知る方ありてこそはと、疎にやは思ひ侍る」など宣ひて、猶いと物怨めしげなれど、聞く人あれば、思ふまゝにもいかでかは（二）つゞけ給はむ。外の方を眺めいだしたれば、やう／＼暗うなりにたるに、蟲の聲ばかり紛なくて、山の方小暗くて、何のあやめも見えぬに、いとしめやかなる樣して（三）寄りゐ給へるも、煩はしとのみ（四）内にはおぼさる。薫「（五）限だにある」など、いと忍びやかに打誦じて、薫「思う給へわびにて侍り。（六）音なしの里ももとめまほしきを、（七）かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、（八）昔覺ゆる人形をもつくり、繪にも畫きとめて、行ひ侍らむとなむ、思う給へなりにたる」と宣へば、中君「哀なる御願に、又うたて（九）みたらし川近き心地する人形こそ、思ひやりいとほしう侍れ。（一〇）黄金もとむる繪師もこそなど、うしろめたくぞ侍るや」と宣へば、薫「そよ。その工匠も繪師も、いかでか（一一）心には叶ふべきわざならむ。（一二）近き世に花降らせたる工匠

（一）是が縁といふものか
（二）大君を
（三）出家の望は
（四）大君に對する戀の成立たぬ悲を慰むる爲に色色の女に關係して
（五）外の女に逢ひたらば大君を忘れる事が出來るかと
（六）中君以外の女に惚れる事は出來ぬ
（七）せん方なさに中君に心を打明くるぞと也
（八）大君存生中は勸められても中君には關係せざりし位なれば、今更斯ういふはちと浮氣らしく思はるゝかも知らねど
（九）實際の戀中になりて貰ひたき心があらばこそけしからん奴とも思はるべけれど
（一〇）斯く親しく面會し
（一一）普通の男と違つて私の堅い事は
（一二）うしろめたく思ふ程ならば
（一三）御目にかゝる筈はない、「べく」は「べし」の誤歟
（一四）薫の並々ならぬ眞實を認めたればこそ
（一五）此方から進んで手紙を上る事さへあるる
（一六）此方から文をやりたり抔大層な事の樣に仰せらるゝは宇治行の事につきての御手紙か

かひをのみならひ侍りしを、然る（一）べきにや侍りけむ、憂きものから疎ならず（二）思ひそめきこえ侍りし一節に、かの本意（三）の聖心は、さすがに違ひやしにけむ。慰（四）ばかりに、此處にも此處にも行きかゝづらひて、人の（五）有樣を見むにつけて紛るゝ事もやあらむなど、思ひ寄る折々侍れど、更に外（六）ざまに靡くべうも侍らざりけり。萬（七）に思ひ給へわびては、心の（八）ひく方の強からぬわざなりければ、すきがましき樣に思さるらむと恥かしけれど、あるまじき（九）心のかけても侍らばこそめざましからめ、唯斯（一〇）ばかりの程にて、時々思ふ事をも聞えさせ承りなどして、隔なく宣ひ通はむを、誰かは咎め出づべき。世（一一）の人に似ぬ心の程は、皆人にもどかるまじく侍るを、猶後やすく思しなれ」など、怨みゝ泣きみ聞え給ふ。中君「うしろめたく（一二）思ひ聞えば、かく怪しと人も見思ひぬべきまでは、聞え（一三）侍るべくや。今頃此方彼方につけつゝ、見知る（一四）事どもの侍りしかばこそ、樣異なる頼もし人にて、今はこれ（一五）よりなどさへ、驚かし聞ゆれ」と宣へば、薫「さやうなる折も覺え侍らぬものを、い（一六）

なむ痛き。しばし押へて」と宣ふを聞き給ひて、薫「胸は押へたるは苦しう侍るものを」と、打歎きて居直り給ふほども、實にぞ下安(一)からぬ。薫「如何なれば、斯くはしも常に惱ましうは思さるらむ。(二)人に問ひ侍りしかば、しばしこそ心地はあしかゝなれ、さて又よろしき折あり、などこそ教へ侍りしか。あまり若々しくもてなさせ給ふなゝめりかし」と宣ふに、いと恥かしうて、中君「胸は何時ともなく斯くこそは侍れ。昔の(三)人もさこそはものし給ひしか。長(四)かるまじき人のするわざとか、人も言ひ侍るめる」とぞ宣ふ。(五)實に誰も千年の松ならぬ世を、と思ふには、いと心苦しう哀なれば、この召し寄せたる人の(六)聞かむもつゝまれず、(七)かたはらいたき筋の事をこそ擇り止むれ、昔より思ひ聞えし樣などを、(八)かの御耳ひとつには心得させながら、人は又かたはにも聞くまじき樣に、樣よく目安くぞ言ひなし給ふを、實にありがたき御心ばへにもと(九)聞き居たり。何事につけても、(一〇)故君の御事をぞ盡せず思ひ給へる。薫「いはけなかりし程より、世の中を思ひ離れて止みぬべき心づ

(一)薫の心、「中君の側へなるたけ人を寄せじ」と思ふ故に、少將の來るを見て表面は何氣なく裝へども內々は心安からぬ也
(二)懷胎の間の樣子を
(三)大君も
(四)胸痛は早死する人の病む病なりとか
(五)薫の心、「憂くも世の思ふ心に叶はぬか誰も千歲の松ならなくに」
(六)少將の聞き居る手前も憚られず
(七)人前では言はれぬ樣な事丈は言はずに置けども
(八)中君に丈は分つて他人に聞かれては餘り見つともなくない樣な風に體裁よく話すを
(九)少將が
(一〇)大君の事を薫が

(一)薫が
(二)人目を憚る故
(三)醫師のつもりで簾內へ入れてくれぬか
(四)薫が中君に近づきしを見し女等
(五)薫を簾外に置くは、
(六)人が左樣いふ物を反對するも角立つて却て穩ならぬと思ひて
(七)中君の
(八)大君の病み初めの樣子に似て居る樣に思はれるも忌々しく
(九)薫が
(一〇)中君が用心して非常に引込んで離れて居るを薫がつらく思ひて
(一一)中君が
(一二)中君が

て聞え出し給へるを聞くに、いみじうつらくて、涙のおちぬべきを、人目(二)につゝめば、強ひて紛はして、薫(一)「悩ませ給ふをりは、知らぬ僧なども近く參り寄るを、(三)醫師などの列にても、御簾の內には侍ふまじくやは。かく人傳なる御消息なむ、かひなき心地する」と聞え給ひて、いとものしげなる御氣色なるを、一夜(四)物のけしき見し人々、「(五)實にいと見苦しく侍るめり」とて、母屋の御簾うちおろして、夜居の僧の座に入れ奉るを、女君誠に心地もいと苦しけれど、(六)人の斯う言ふに、うたて掲焉ならむも、又いかゞとつゝましければ、物憂ながら少しゐざり出でて、對面し給へり。いとほのかに、時々物宣ふ御けはひ(七)の、昔(八)の人の惱みそめ給へりし頃、まづ思ひ出でらるゝも、ゆゝしう悲しくて、かきくらす心地し給へば、(九)とみに物も言はれず、ためらひつゝぞ聞え給ふ。(一〇)こよなく奥まり給へるもいとつらくて、簾の下より几帳を少しおし入れて、例の馴れ〳〵しげに近づき寄り給ふが、(一一)いと苦しければ、わりなしと思して(一二)、少將の君といふ人を近く召し寄せて、中君「胸

る氣色見せつゝ聞え給ふを、女君いとわびしき事添ひにたる身と思し歎かる。(二)ひとへに知らぬ人ならば、あな(一)物狂しと、はしたなめさし放たむにも安かるべきを、昔より樣異なる頼もし人にならひ來て、(三)今更に中あしくならむも、なかなか人目(四)あやしかるべし、流石に淺はかにもあらぬ御心ばへ有樣の、哀を知らぬにはあらず、さりとて、心かはし(五)顏にあへしらはむも、いとつゝましく、如何はすべからむ、と萬に思ひ亂れ給ふに、(六)侍ふ人々も、少しものの言ふかひありぬべく若やかなるは、皆あたらしき心地して、見給ひ馴れたる人とては、かの山里の古女ばらなり、思ふ事をも同じ心になつかしう、言ひあはすべき人の無き儘には、故姬君を思ひ出で聞え給はぬ折なし。(七)おはせましかばこの人もかゝる心も添へ給はましやと、いと悲しく、宮のつらくなり給はむ歎よりも、(八)この事いと苦しく覺ゆ。(九)男君も強ひて思ひわびて、例のしめやかなる夕つ方(一〇)おはしたり。やがて端に御褥さし出でさせ給ひて、中君「いと惱ましき程にてなむ、(一一)え聞えさせぬ」とぞ、人し

(一)中君
(二)以下中君の心
(三)恥をかゝせて突放すはざうさもなき事なれど
(四)薫は從來一種特別な後見人として力にし來りし人故
(五)薫の切なる情を酌知らぬ譯では無けれど、さりとて相思の中の樣に受答するも憚あり
(六)侍女等を見廻はしても少し相談相手になりさうなるは皆新參で
(七)大君さへ存生ならば薫が我に懸想する事もあるまい
(八)薫の始末を中君が苦にやみたり
(九)薫も我慢しきれず
(一〇)中君方へ
(一一)御目にかゝれぬ

に響きたる御有様の花やかさに、かつは宮の内の人の見思ふらむ事も、人げなき事と、思し亂るゝ(一)ことも添ひて歎かしきを、(二)中納言の君はいとよく押し量り聞え給へば、疎(三)からむあたりには見苦しくだく〳〵しかりぬべき心しらひの樣も、侮(四)るとはなけれど、何かは事々しくしたて顏ならむも、なか〳〵覺えなく見咎むる人やあらむと、思すなりけり。今ぞ(五)又例(六)のめやすき樣のものどもなどせさせ給ひて、御小袿織らせ、綾(七)の料賜はせなどし給ひける。(八)この君しもぞ、宮にも劣り聞え給はず、樣殊にかしづきたてられて、(九)かたはなるまで心傲もし、世を思ひすまして、あてなる心樣はこよなけれど、(一〇)故親王の御山住を見そめ給ひしよりぞ、淋しき所の哀さは樣ことなりけりと、心苦しう思されて、(一一)なべての世をも思ひめぐらし、深き情をもならひ給ひにける。(一二)いとほしの人ならはしやとぞ。

かくて、猶(一三)いかで後安く大人しき人にてやみなむと思ふにも隨はず、心にかゝりて苦しければ、御文などを、(一四)ありしよりは細やかにて、ともすれば忍びあまりた

(一)六君方の花やかなる生活に比較されては匂の從者等の手前も恥かしと
(二)薫は中君の心をよく推量して
(三)親しからぬ處へやるとしてはごた〳〵して見苦しき贈物も
(四)中君を侮るではなけれど仰山に特別仕立などにしては却つて意外に思つて不審を立てる人もあるべしと分別してあの如き有合物を贈りたる也、
(五)又あらためて薫が衣類を中君へ賜る也
(六)見惡からぬ衣裳
(七)綾を織るべき材料
(八)薫も匂に劣らず大事にされて育ちたる貴公子故
(九)餘りなる迄
(一〇)八宮
(一一)廣く世情を顧み
(一二)八宮がよくも薫を感化したる事哉
㊅薫、中君を訪ひて情を訴ふ、中君浮舟の事を薫に語る
(一三)是非中君への戀を思ひ切りて老實な男になつて仕舞ひたいと思へども其が出來ず、薫の心
(一四)前々よりは委しく書きて

も思ひ煩はで(一)、人々に取散らし(二)などしたれば、各さし縫ひなどす。若き(三)人々の御前近く仕う奉るなどをぞ、とりわきてはつくろひ立つべき。下仕どもの、いたく萎えばみたりつる姿どもなどに、(四)白き袷などにて、掲焉ならぬぞなか〳〵目安かりける。誰かは、(五)何事をも後見聞ゆる人のあらむ。宮は(六)、疎ならぬ御志の程にて、(七)萬をいかでと思しおきてたれど、細なる内々の事までは、如何は思し寄らむ。(八)限もなく人にのみかしづかれて、ならはせ給へれば、(九)世の中のうちあはず寂しきこと、如何なるものとも知り給はぬ、理なり。(一〇)艶にそゞろ寒く、花の露をもてあそびて、世は過すべきものと思したる程よりは、(一一)思ほす人の爲なれば、自ら折節につけつゝ、まめやかなる事までも扱ひ知らせ給ふこそ、有難く珍かなる事なゝめれば、「いでや」など(一二)謗らはしげに聞ゆる、御乳母などもありけり。童べなどのなり(一三)鮮かならぬ、折々打交りなどしたるをも、女君はいと恥かしく、(一四)なか〳〵なる住居にもあるかななど、人知れず思す事無きにしもあらぬに、ましてこの頃は、世

(一)大輔が
(二)分け與へなど
(三)作者の評、お側附の若い侍女などを殊に身綺麗にさせておくがよし
(四)其等の女の分にとて薫から賜りたるは白き袷などにて
(五)薫の外には中君を世話する人なし
(六)匂宮
(七)是非世話を燒く積りなれど
(八)匂は無暗に人に大事にされてのみ居る人故
(九)世間の不足といふ事を御存知なきも道理
(一〇)只世の中は花やかに送るべき物と思ひ居る割合には
(一一)思ふ女の事とて折折は經濟向の世話をやく事もあるのは甚だ珍しい位の事故
(一二)匂を惡くいふ
(一三)身綺麗ならぬのが
(一四)二條院の住居は晴がまし過ぎて迷惑

もなどやあらむ。染めたるなどは今は(一)わざともし置かぬを、急ぎてこそせさせめ」と宣へば、薫「なにか、事々しき用にも侍らず。侍はむにしたがひて」とて、(二)御匣殿などに問はせ給ひて、女の裝束ども數多くだりに、淸げなる細長どもも、たゞあるに隨ひて、(三)たゞなる絹綾などとり具し給ふ。(四)自らの御料と思しきには、(五)我が御料にありける、紅の擣目なべてならぬに、白き綾どもなど、數多かさね給へるに、(六)袴の具は無かりけるに、如何にしたりけるにか、(七)腰のひとつありけるを、引き結び加へて、

薫(八)むすびける契ことなる下紐をたゞひとすぢにうらみやはする

(九)大輔の君とて、大人々々しき人の、睦まじげなるにつかはす。(一〇)「とりあへぬ樣の見苦しきを、つきづきしうもて隱して」など宣ひて、(一一)御料のは、忍びやかなれど、(一二)箱にて包も異なり。(一三)御覽ぜさせねど、前々も、かやうなる(一四)御心しらひは常の事にて、目馴れにたれば、(一五)氣色ばみ返しなど、ひこじろふべきにもあらねば、いかゞなど

(一)特に用意はして無いが
(二)衣服を司る女官
(三)染めぬ
(四)中君の著料
(五)薫の著料なる
(六)男の物なれば女の袴の一式は無かりしに
(七)引腰、女の袴をはきたる時かざりに引く紐
(八)我物と思ひ居し中君が人の物になつて仕舞ひしも緣なれば一向に恨みても仕方がなかるべし
(九)中君の侍女
(一〇)薫より大輔へ注意してやる詞、取敢へず有るに儘せて贈る品故甘く見苦しからぬ樣に取計らひてくれ
(一一)中君の分
(一二)箱に入れて
(一三)中君に別段見せもせねど
(一四)薫の心入は
(一五)改まつて返しなどぐづ〳〵すべき譯もなき故

(一)移香一件のありたる今日は
(二)薫の風采も、以下匂の心
(三)薫に挑まれては女も無下にはね附ける譯には行くまい
(四)薫と中君は丁度よき似合の中なれば
(五)匂が中君方に滯留する也
(六)六君方へは
㊄ 薫衣類を中君に贈る
(七)薫
(八)中君方に
(九)薫の心
(一〇)中君方の爲よかれと思ひ來りし自分が此樣な情を起すとはけしからぬ
(一一)此樣子では匂が中君を捨てる了簡はないらしいと
(一二)侍女等
(一三)衣裳が
(一四)女三
(一五)用意の衣類
(一六)必要が生じたり
(一七)來月は九月、正五九月は佛事の月也
(一八)白衣

かし、と疑はるゝには、いとゞ今日(一)は安からず思さるゝ、理なりかし。(二)かの人の氣色も、心あらむ女の、哀と思ひぬべきを、(三)などてかは、ことの外にはさし放たむ、(四)いとよき間なれば、互にぞ思ひかはすらむかし、と思ひやるぞ、わびしく腹立たしく妬かりける。猶いと安からざりければ、(五)その日も出で給はず。(六)六條院には、御文をぞ二度三度奉れ給ふを、「いつの程につもる御言の葉ならむ」と呟く老人どももあり。

(七)中納言の君は、宮のかく(八)籠りおはするを聞くにも、心やましく覺ゆれど、(九)わりなしや、我心のをこがましう惡しきぞかし、(一〇)後やすくと思ひそめてしあたりの事を、かくは思ふべしや、と強ひてぞ思ひ返して、(一一)さは言へど思し捨てざゝめりかし、と、嬉しくもあり。(一二)人々のけはひなどの、なつかしき程に、(一三)萎えばみたゝめりしを、と思ひやり給ひて、(一四)母宮の御方に參り給ひて、薫「よろしき(一五)まうけの物どもや侍ふ。(一六)つかふべき事なむ」と申し給へば、母宮「例のたゝ(一七)む月の法事の料に、(一八)白きものど

と靜かに見廻さる。(一)君はなよゝかなる薄色(二)どもに、瞿麥の細長襲ねて、うち亂れ給へる御樣の、(三)何事もいとうるはしく、事々しきまで盛なる人の御裝何くれに思ひくらぶれど、氣劣りても覺えず、なつかしうをかしきは、志(四)の疎ならぬに、恥なきなゝめりかし。(五)まろに美しく肥え給へりし人の、(六)少し細やぎたるに、色はいよいよ白うなりて、あてにをかしげなり。かゝる御移香(七)などの、著からぬ折だに、愛敬づきらうたき所などの、猶人には多くまさりて思さるゝ儘には、(八)これを、兄弟などにはあらぬ人の、氣近く言ひ通ひて、事に觸れつゝ、おのづから聲けはひをも聞き見馴れむは、いかでかたゞには思はむ、必ずしか思ひよりぬべき事なるをと、我がいと隈なき御心ならひに、思し知らるれば、常に心をかけて、しるき(九)樣なる文などやあると、近き御厨子小唐櫃などやうの物をも、然りげなくて見給へど、さる物もなし。唯(一〇)いとすくよかに言少にて、(一一)なほ〳〵しきなどぞ、(一二)わざともなけれど、物にとり交ぜなどしてもあるを、(一三)あやし、猶いと斯うのみはあらじ

(一)中君
(二)薄紫
(三)萬事立派ずくめの六君の風采に比較しても
(四)匂の愛が深き故六君に比して恥しからずと思はるゝなるべし
(五)丸々と、以下中君の容貌
(六)懷胎して痩せたる也
(七)薫の移香をかぎつけぬ内から匂は中君の器量のよきを見ては次の如くに思へりと也
(八)匂の心、兄弟でもない男が此女に親しまば必ず戀情の起る害と浮氣な自分の心から推測し居る事故
(九)戀中になつて居る趣がわかる樣な薫の文がありはせぬかと
(一〇)眞面目に
(一一)平凡な文など
(一二)特に仕舞ひ置いた樣でもなく
(一三)匂の心

(一)匂が

(二)年來連添ひし中を此位の事にて別れるはつらし、みなれ―身馴れ、見馴れ、か―斯、香

(三)是だから薫も此女に打込むのぢやと、匂の心

(四)匂も涙をこぼし

(五)中君の樣子

(六)一向に憎む譯にはゆかず

(七)匂が

(八)中君方にて食す

(九)六君方の結構づくめなるを見て來た目には

(一〇)侍女の姿も著古した衣を著た者などもありて

かりの程やは經ぬる。思の外に憂かりける御心かな」と、すべて、まねぶべくもあらず、いといとほしげに聞え給へど、ともかくも答へ給はぬさへ、いとねたくて、(一)

匂 また人に馴れける袖のうつりがを我身にしめてうらみつるかな

女は、あさましう宣ひつゞくるに、言ふべき方も無きを、「いかゞは」とて、

中君 みなれぬる中の衣とたのみしをかばかりにてやかけはなれなむ

とて打泣き(二)給へる氣色の、限なう哀なるを見るにも、斯かればぞかしと、(三)いとゞ心やましくて、(四)我もほろ〳〵とこぼし給ふぞ、色めかしき御心なるや。誠に、いみ(五)じき過ありとも、(六)ひたぶるにはえぞ疎みはつまじく、らうたげに心苦しき樣のし給へれば、えも怨みはて給はず、宣ひさしつゝ、かつはこしらへ聞え給ふ。

又の日も、心のどかに(七)大殿籠り起きて、御手水御粥なども此方(八)にまゐらす。御しつらひなども、(九)さばかり輝くばかり、高麗唐土の錦綾をたち重ねたる目うつしには、尋常に打馴れたる心地して、(一〇)人々の姿も、なえばみたる打交りなどして、い

りがたかりけれど、猶打解く（一）べくはたあらざりけりかし、などいよ〳〵心遣せらるゝにも、久しく（二）とだえ給はむ事は、いと物恐ろしかるべく覺え給へば、言に出でては言はねど、過ぎぬる方よりは、少し（三）繼はし樣にもてなし給へるを、宮はいとゞ限なう哀と思したるに、（四）かの人の御移香の、いと深うしみ給へるが、世の常の香の香に入れ（五）、薫きしめたるにも似ず、著き匂なるを、（六）その道の人にしおはすれば、怪しと咎め出で給ひて、如何なりし事ぞと氣色（七）とり給ふに、（八）殊の外にもてはなれぬ事にしあれば、言はむ方無くわりなくて、いと（九）苦しと思したるを、さればよ、必ず然る（一一）事はありなむ、よもたゞには思はじと思ひ渡る事ぞかし、と御心（一〇）騷ぎけり。さるは、單衣の御衣なども、脫ぎ（一二）かへ給ひてけれど、怪しう（一三）心より外にぞ、身にしみにける。匂「（一四）かばかりにては、殘ありてしもあらじ」と、萬に聞きにくゝ宣ひつゞくるに、心憂く（一五）て、身ぞ置きどころなき。匂「（一六）思ひ聞ゆる樣異なるものを、我（一七）こそさきになど、かやうに打背く際は異にこそあれ。又御心（一八）おき給ふば

（一）薫と雖も打解けて附合ふ譯にはゆかぬと
（二）匂の久しく來ぬのは
（三）少し離れがたき風を見するを
（四）薫の移香が中君に染みたるが
（五）「入れ」は衍文歟
（六）匂は香道の黑人なれば
（七）聞き糺すに
（八）薫に近づきしは萬更無い事でもなき故
（九）中君が
（一〇）匂の心
（一一）薫が中君に近づく事はあるべし
（一二）中君が
（一三）案外に
（一四）斯く移香が染み居る位ではてつきり薫と寢したに極つて居る
（一五）中君が
（一六）我は其方を深く思ふのに
（一七）「人よりは我こそ先に忘れなめつれなきをしも何か頼まん」棄てちるゝ位なら此方から棄ててやるといふ樣な擧動をするは賤しき者の事
（一八）其方が我に隔心を生ずる程の無沙汰もせざりしに

（一）薫
（二）中君が
（三）存命中は場合に應じて穩かにしてゆかんと
（四）匂が
（五）丁寧に詫言をいふ
（六）中君の
（七）匂は身持女に近づきし事なき故
（八）六君方
（九）匂が
（一〇）男は皆かく口先の甘いものかしらと、中君の心
（一一）薫の
（一二）年來薫の親切は有難く思ひ居たれど、戀の方にては薫の情もけしからぬと思へば
（一三）匂の將來の約束も當にならぬとは思へど
（一四）以下中君が薫の事を心中に評する詞
（一五）油斷させて
（一六）大君には遂に逢はざりし事など

し人に思ふ人も（一）、疎ましき心添ひ給へりけり、と見給ふに、世の中いと所狹う思（二）ひなられて、猶いと憂き身なりけりと、唯消えせぬ程は（三）、あるに任せて、おいらかならむ、と思ひ果てて、いとらうたげに、心美しき樣にもてなして居給へれば、（四）いとゞ哀に嬉しく思されて、日頃の怠など、（五）限なく宣ふ。（六）御腹も少し脹らかになりにたるに、かの恥ぢ給ふしるしの帶の引き結はれたる程など、いとあはれに、（七）まだかゝる人を氣近くても見給はざりければ、珍らしくさへ思したり。（八）打解けぬ所にならひ給ひて、萬のこと心やすく、なつかしく（九）思さるゝ儘に、疎ならぬ事どもを盡せず契り宣ふを聞くにつけても、（一〇）斯くのみ言よきわざにやあらむと、強ちなりつる人の御氣色も思ひ出でられて、（一一）年頃哀なる御心ばへとは思ひ渡りつれど、かゝる方樣にては（一二）、あはれをもあるまじき事と思ふにぞ、（一三）この御行く先の頼めは、いでやと思ひながらも、少し耳とまりける。（一四）さても、あさましう（一五）たゆめたゆめて、入り來たりし程よ。（一六）昔の人に疎くて過ぎにし事など語り給ひし心ばへは、實に有

あらで、いとらう〱じく恥かしげなる氣色も添ひて、流石になつかしう(一)言ひこしらへなどして出だし給へる程の御心ばへなどを思ひ出づるも、妬うも悲しうも、樣々に心にかゝりて、わびしく覺ゆ。何事も、(二)いにしへにはいと多く勝りて思ひ出でらる。(三)何かは、(四)この宮かれはて給ひなば、我を頼もし人にし給ふべきにこそはあンめれ、(五)さても、顯れて心安きさまにはえあらじを、(六)忍びつゝ又思ひます人なき、心のとまりにてこそはあらめなど、唯この事のみ、つと覺ゆるぞ、けしからぬ心なるや。(七)さばかり心深げにさかしがり給へど、(八)男といふものの心憂かりける事よ、(九)なき人の御悲しさは、言ふかひなきかたにても、いと斯う苦しきまではなかりけり。これは、萬にぞ思ひめぐらされ給ひける。「(一〇)今日は宮渡らせ給ひぬ」など人の言ふを聞くにも、(一一)後見の心はうせて、胸うちつぶれて、いと羨しう覺ゆ。(一二)宮は、(一三)日頃になりにけるは、我が御心さへ恨めしう思されて、俄に渡り給へるなりけり。(一四)何かは、心隔てたる樣にも見え奉らじ、(一五)山里にと思ひ立つにも、頼も

(一)甘く言ひぬけなどして薫を返した處など
(二)宇治の添臥の時には勝りて
(三)薫の心
(四)匂が捨てたらば中君は我を力にするに違なし
(五)其樣になつた曉にも人目晴れて通ふ譯にはゆくまじければ
(六)忍びたる中ながら他に見かへる女のないといふ深い中で過すべきであらうなどと
(七)薫の性質を作者の評する詞
(八)男といふ者はいやなもので
(九)大君に對しては其死を悲むのも斯迄切ては無かりしに、今の悲は其以上で思ひ至らぬ隈なし
(一〇)匂が中君方へ行かれた
(一一)中君の世話親たる了簡はなく
(一二)匂宮
㊃匂宮中君方に宿して薫の移香を怪しむ
(一三)幾日も中君に無沙汰したるは
(一四)中君の心
(一五)宇治行を企てても

(一)外の事は考へられぬ
(二)薫の心
(三)薫が
(四)薫より中君へ
(五)さつぱりしたる
(六)本意を遂げざる悔しさは昔の宇治の添臥の時にかはらぬ
(七)つらく思ふ道理はないのにつらくのみ思はれて何とも申上げ樣なし
(八)薫の感
(九)中君が
(一〇)薫の所爲を
(一一)無暗に迷惑がる一方ではなく

添ひたる心地して、更に他事も(一)覺えずなりにたり。(二)宇治にいと渡らまほしげに思い給ふめるを、さもや渡し聞えてまし、など思へど、まさに宮は許し給ひてむや、さりとて、忍びてはたいと便なからむ、如何樣にしてかは、人目見苦しからで、思ふ心の行くべき、と心も(三)あくがれて眺め臥し給へり。

まだいと深き旦に(四)御文あり。例の、うはべは、いと(五)けざやかなる立文にて、

薫(六)いたづらにわけつるみちの露しげみむかしおぼゆる秋の空かな

御氣色の心憂さは、(七)理知らぬつらさのみなむ、聞えさせむかたなく。

とあり。御返なからむも、人の例ならず見咎むべきを、いと苦しければ、

中君 承りぬ。いと惱ましうて、え聞えさせず。

とばかり書き給へるを、(八)あまり言少なるかなと、さう〴〵しくて、をかしかりつる御けはひのみ戀しう思ひ出でらる。(九)少し世の中をも知り給へるけにや、さばかりあさましうわりなしとは(一〇)思ひ給へりつるものから、(一一)ひたぶるにいぶせくなどは

りし御心の用意なれば、猶いと思ひの儘にもてなし聞え給はざりけり。かやうの筋は、(一)細にもえなむまねびつゞけざりける。(二)かひなきものから、人目のあいなきを思へば、萬に思ひ返して出で給ひぬ。

まだ宵と思ひつれど、暁近うなりにけるを、見咎むる人もやあらむと煩はしきも、(三)女の御爲のいとほしきぞかし。(四)悩ましげに聞き渡る御心地は理なりけり、いと恥かしと思したりつる腰のしるしに、(五)多くは心苦しう覺えてもやみぬるかな、例のをこがましの心や、と思へど、(六)情なからむことは、猶いと本意なかるべし。又(七)たちまちの我心の亂に任せて、あながちなる心をつかひて後、心安くしもえあらざらむものから、(八)わりなく忍びありかむ程も心づくしに、女のかた〴〵思し亂れむ事よ、(九)などさかしく思ふにせかれず、今の間も戀しきぞわりなかりける。(一〇)更に見ではえあるまじく覺え給ふも、かへすがへす生憎なる心なりや。(一一)昔よりは少し細やぎて、あてにらうたげなりつるけはひなどは、(一二)立離れたりとも覺えず、身に

(一)委しく書く譯にもゆかぬ
(二)本望を遂げず斯く泣に攻め寄せた效もない譯なれど
(三)中君の爲に心配する譯なり
(四)中君は懐胎なれば不快なるも道理也、以下薫の心
(五)腹帯がありし故それが氣の毒で手を出すのをやめたのであつた
(六)無理な事をするのは面白くなし、以下薫の心
(七)一時の情の發作にまかせて無理な事をしたあとで
(八)無理に我慢して暮すも氣の盡きる譯で
(九)分別らしくは考へるものの其では防ぎ切れず
(一〇)中君に逢はずには居られぬ樣な心持がするも
(一一)中君の樣子
(一二)離れて居る樣には思はれず

き好きしくめざましき心はあらじと、心安く思せ」とて、いとのどやかにもてなし給へれど、月頃の悔し(一)と思ひ渡る心のうちの、苦しきまでなり行く樣を、つぶつぶと言ひつゞけ給ひて、許すべき氣色にもあらぬに(二)、せむ方なくいみじとも世の常なり。なか〳〵むげに(三)心知らざらむ人よりも、恥かしう心づきなくて、泣き給ひぬるを、「こは何ぞ。あな若々し」とは言ひながら、言ひ知らずらうたげに、心苦しきものから、用意深く恥かしげなるけはひなどの、(四)見し程よりも、こよなくねびまさり給ひにけるなどを見るに、(五)心から餘所人にしなして、かく安からずもの思ふ事、と悔しきにも、又實に音は泣かれけり。近く侍ふ女房二人ばかりあれど、すゞろなる男の入り來たるならばこそは、(六)こは如何なる事ぞとも參り寄らめ、かく疎からず聞えかはし給ふ御中らひなゝめれば、さる樣こそはあらめと思ふに、傍痛ければ、知らず顏にてやをら退きぬるぞ、いとほしきや。男君は、古を悔ゆる心の忍びがたきなども、いとしづめ難かりぬべかゝめれど、(七)昔だに有りがたか

(一)中君を人の物にしたるを後悔する心の中の
(二)中君の心
(三)丸で氣心を知らぬ人に斯樣な目にあはされるよりも恥かしく
(四)昔添臥せし時よりは
(五)我が心がらで中君を他人にして仕舞つて
(六)どうした事ぞといひて近づきて中君を護りもすべけれど
(七)宇治にて添臥せし時さへ手は出さざりし程の愼深さなれば、今夜も手は出さずに仕舞ひたり

の月は過ぎぬめれば、朔日の程にもとこそは思ひ侍れ。唯いと忍びてこそよからめ。何か世の許など事々しうは(一)」と宣ふ聲の、いみじうらうたげなるかなと、常よりも昔思ひ出でらるゝに、えつゝみあへで(二)(三)、寄りゐ給へる(四)柱のもとの、簾の下より、やをらおよびて(五)、御袖をひかへつ。女、然りやあな心憂と思ふに、何事かは言はれむ、物も言はで、いとゞ引き入り給へば、それに附きて(六)いと馴れ顔に、半は内に入りて添ひ臥し給へり。薫「あらずや、(七)忍びてはよかるべう思すこともありけるが嬉しきは、ひがみゝかと聞えさせむとぞ。疎々しく思すべきにもあらぬを、心憂の御氣色や」と怨み給へば、(八)答すべき心地もせず、思はずに憎く(九)思ひなりぬるを、せめて思ひ鎭めて、中君「思の外なりける御心の程かな。人の思ふらむ事よ。あさまし」とあばめて(一〇)、泣きぬべき氣色なる、(一一)少しは理なれば、いとほしけれど、薫「これは(一二)咎あるばかりの事かは。かばかりの對面は、古をも(一三)思し出でよかし。過ぎに(一四)し人の御許もありし物を、いとこよなう思しけるこそ、なか〳〵うたてあれ。好

(一)九月朔日
(二)匂の許を乞ふ事なるべし
(三)薫がこらへかねて
(四)薫の
(五)手をのばして
(六)薫が
(七)忍びてならば君に添ひ臥してもよいと思召さるゝ樣なるを甚だ辱く我は思へど、其は私の聞損ひか然らざるか明かに承りたくて斯く入り來れる也、時に取てのごまかし文句を薫がいふ也
(八)中君が
(九)薫を
(一〇)恥しめて
(一一)薫の心
(一二)人に咎めらるべき程の事ではなし
(一三)昔もあつたではないか
(一四)大君も君を我に許したりしに、私が君に近づくを飛んでもなき事の樣に思はるゝは然るべからぬ事

(一)中君を宇治へやる事は私一了簡では出來ませぬ
(二)匂に機嫌を損ねぬ樣に頼みて
(三)少しの物の行違の爲に中君が輕率な擧動をした樣に匂に思はれてはならぬ
(四)私が引受けて
(五)人と違つて私の間違なき事は匂も御存知
(六)中君を匂に遣つて仕舞つた事を始終後悔し居て
(七)「取返すものにもがなや世の中をありしながらの我身と思へば」
(八)病氣の快き時分に萬事御話致すべし
(九)宇治行を
(一〇)宇治の
(一一)御機嫌取りに

などやうに思はせて、言少に紛らはしつゝ、山里にあからさまに渡し給へと思しく、いと懇に思ひて宣ふ。薫「それ(一)はしも、心一つにまかせては、え仕う奉るまじき事に侍るなり。猶宮に唯(二)心うつくしう聞えさせ給ひて、かの御氣色に隨ひてなむよく侍るべき。然らずば、少(三)しも違ひめありて、心輕くもなど思しものせむに、いとあしく侍りなむ。然だにあるまじくば、道のほどの御送迎も、おりたちて仕う奉らむに、何の憚かは侍らむ。(五)うしろやすく人に似ぬ心の程は、(四)宮も皆知らせ給へり」など言ひながら、折々は、過(六)ぎにし方の悔しきを忘るゝをりなく、(七)「ものにもがなや」と、取返さまほしき様などほのめかしつゝ、やう〳〵暗くなり行くまでおはするに、いとうるさく覺えて、中君「さらば、心地も惱ましくのみ侍るを、又(八)よろしく思ひ給へられむ程に、何事も」とて、入り給ひぬる氣色なるが、いと口惜しければ、薫「さても、何時ばかりに思(九)し立つべきにか。いと繁う侍りし道(一〇)の草も、少しうち拂はせ侍らむかし」と、(一一)心とりに聞え給へば、しばし入りさして、中君「こ

(一)昨日は匂が居られると承りし故
(二)年來の私の懇なる志がやう〳〵其驗が見えて來たのか
(三)中君が
(四)法事をなし下されしを感謝し居る私の心中を只默つて居たらば、其感謝の念の一端を現はす事も出來ぬと思ひて御招き申したる也
(五)中君が奧深く居て
(六)中君の居場所が
(七)懸想心ある故胸がどきどきする也
(八)匂が案外薄情であつたと思はせる樣に
(九)批難もし
(一〇)匂の怨めしさ抔は口に出す譯にもゆかぬ
(一一)引歌未詳

させ給へりし喜びに、すなはちも參らまほしく侍りしを、(一)宮渡らせ給ふと承りしかば、折悪しくやはとて、今日になし侍りにける。さるは、(二)年頃のしるしもやうやうあらはれ侍るにや、隔少し薄らぎ侍りにける御簾の内よ。珍らしく侍るわざかな」と宣ふに、(三)猶いと恥かしく、言ひ出でむ言の葉もなき心地すれど、中君「(四)一日嬉しく聞き侍りし心の中を、例の唯結ぼほれながら過し侍りなば、思ひ知る片端をだにいかでかはと口惜しさに」と、いとつゝましげに宣ふが、(五)いたく退きて、たえ〴〵仄に聞ゆれば、心もとなくて、「(六)奧いと遠くも侍るかな。まめやかに聞えさせ承らまほしき、世の御物語も侍るものを」と宣へば、實にと思して、少しみじろき寄り給ふけはひを聞き給ふにも、(七)ふと胸うちつぶるれど、さりげなくいとど鎭めたる樣して、(八)宮の御心ばへ、思はずに淺うおはしけりとおぼしく、かつ(九)は言ひも疎め、又慰めも、かた〴〵に靜々と聞え給ひつゝおはす。女君は、(一〇)人の御怨めしさなどは、打出で語らひ聞え給ふべき事にもあらねば、唯「(一一)世やは憂き」

（一）薫が中君方へ
（二）中君への戀情
（三）丁子の汁にて黄に染めたる也
（四）一夜宇治にて薫が己の傍に臥したりし事
（五）薫の
（六）薫を夫にしてもよかりしにと位は
（七）匂の
（八）非常に薫の方が勝れて居るのが分るにや
（九）中君が薫に氣の毒て
（一〇）譯の分らぬ奴と薫が自分を思ふならんと思ひて
（一一）私を態〻御呼立になりし譯では無けれど
（一二）私の參る事を

と、怨めしう思ひ給へらるれ。よろづは今侍ひてなむ。あなかしこ。

と、すくよかに、白き色紙のこはぐ\しきにてあり。

さて又の日の夕つ方ぞ渡り給へる。（一）人知れず思ふ（二）心し添ひたれば、あいなく心づかひ痛くせられて、なよよかなる御衣どもを、いとゞ匂はし添へ給へるは、餘りおどろ\/しきまであるに、丁子染（三）の扇の、もてならし給へる移香などさへ、たとへむ方なくめでたし。女君も怪しかりし（四）夜の事など、思ひ出で給ふ折々無きにしもあらねば、まめやかに哀なる御心ばへ（五）の、人に似ず物し給ふを見るにつけても、（六）然てもあらましをとばかりは、思ひもやし給ふらむ、いはけなき程にしおはせねば、怨めしき人（七）の御有樣を、思ひ比ぶるには、何事もいとどこよなく（八）思ひ知られ給ふにや、常には隔多かるもいとほしく、（九）物思知らぬさまに思ひ給ふらむ、（一〇）など思ひ給ひて、今日は御簾の内に入れ奉り給ひて、母家の簾に几帳添へて、我は少しひき入りて對面し給へり。薫「（一一）わざと召しとは侍らざりしかど、例ならず（一二）許

名殘なからましかば、いかにいとほしくと思ひ給へらるゝにも、(一)疎ならずのみなむ。然りぬべくは(二)自らも。

と聞え給へり。陸奥紙に、ひきも繕はずまめだち書き給へるしも、いとをかしげなり。(三)故宮の御忌日に、(四)例の事どもいと尊くせさせ給へりけるを、喜び聞え給へる樣の、おどろ〳〵しくはあらねど、(五)實に思ひ知り給へるなゝめりかし。例は、(六)これより奉る御返をだに、打解けずつゝましげに思ほして、(七)はか〴〵しくも續け給はぬを、「自ら」(八)とさへ宣へるが、珍らしく嬉しきに、(九)心ときめきもしぬべし。(一〇)宮の今めかしく好みたち給へる程にて、思し怠りけるを、實に心苦しく推し量らるれば、いと哀にて、をかしやかなる事もなき御文を、うちも置かずひき返しひき返し見ゐ給へり。御返は、

薫　承りぬ。一日は、(一一)聖だちたる樣にて、(一二)殊更に忍び侍りしも、さ思ひ給ふるやう侍る頃ほひにてなむ。名殘と宣はせたるこそ、(一三)少し淺くなりにたる樣に

(一)御親切を深く感謝する
(二)御目にかゝりて御禮申上げたし
(三)八宮
(四)薫が法會を取行ひしを
(五)中君が心から有難く思ひしならん
(六)薫の文の返事さへ
(七)ろくに文も書いてよこさぬに
(八)「さりぬべくは自らも」と文に書けるをいふ
(九)薫が
(一〇)此頃は匂が珍らしい六君に心をひかれて中君の方を疎にして居る際なれば
(一一)僧の樣な所行をして、八宮の法事を行ひしをいふ
(一二)わざと其を中君に隱したるは了簡がありて也、知らせたらば中君が一緒に行きたしと言出すべしと遠慮したるをいふ
(一三)我が志が淺くなりたる樣に聞えて

給へる。(一)三條殿腹のおほい君を、東宮に參らせ給へるよりも、(二)この御事をば、いとことに思ひおきて聞え給へるも、宮の御覺有樣がらなゝめり。

かくて後二條院に(三)、え心安く渡り給はず。輕らかなる御身ならねば、思すまゝに、晝の程などもえ出で給はねば、やがて同じ南の町に(四)、年頃ありし樣におはしまし(五)て、暮るれば又え引きよぎても渡り給はずなどして(六)、待遠なるをり〳〵あるを(七)、(八)斯からむずる事とは思ひしかど、さしあたりては、いと斯うしもやは名殘なか(九)るべき、げに心あらむ人は、數ならぬ身を知らで(一〇)、交らふべき世にもあらざりけり、と返す〴〵も、山路わけ出でけむ程(一一)、うつゝとも覺えず悔しく悲しければ、猶いかで忍びて渡りなむ(一二)、むげに背く樣にはあらずとも(一三)、しばし心をも慰めばや、憎げにもてなしなどもせばこそ、うたてもあらめ、など心ひとつに思ひあまりて、(一四)恥かしけれど、中納言殿に(一五)御文奉れたまふ。

中君　一日の御事は(一六)、阿闍梨の傳へたりしに、委しう聞き侍りにき。かゝる御心の(一七)

(一)三條殿腹の夕霧の第一女
(二)六君
㊂中君の疑悶、薫を招きて宇治に赴かん事を謀る、薫切なる情を中君に訴ふ
(三)匂が中君方へは容易に行かれず
(四)夕霧の邸内に
(五)昔匂が此處に住みし時の樣に
(六)六君を打捨置きて中君方へ行く譯にもゆかず
(七)中君が
(八)中君の心
(九)斯う現金に打てかはらずともよささうな物
(一〇)身分も考へずによい人の中に交るべきではなかつたと
(一一)宇治を出たのが悔しく
(一二)宇治へ行きたし
(一三)匂を振捨つるといふ譯ではなけれど
(一四)宇治へ行つて後匂に對して穩ならぬ仕打でもしたらば惡からんが、さうしなければ行つても仔細はあるまいと
(一五)薫
(一六)八宮の法會を薫が營みし事
(一七)薫が昔を忘れず斯く法會迄行ひくるゝ情がなくば如何に死者の爲にも氣の毒ならんと

十三　美しき六君、匂君の愛情

(一)匂
(二)六君
(三)六君の容貌
(四)未熟なる點なく
(五)かたほは整はぬ也
(六)夕霧が目の無い迄に祕藏にして居るも尤
(七)中君が此點に於ては勝れりと思はる
(八)六君の樣子
(九)怜悧らしい
(一〇)侍女
(一一)きまり切つたる折目正しき衣裳附は匂が鼻について居るべければ
(一二)合點のゆかぬと思はるゝ位に氣取り過ぎて居る

につけつゝ多かるべし。

宮(一)は女君(二)の御有樣、晝見聞え給ふに、いとゞ御志まさりにけり。大(三)さよき程なる人の樣體いと淸げにて、髪のさがりば頭つきなどぞ、ものより殊に、あなめでたと見え給ひける。色あひ餘りなるまで匂ひて、ものものしく氣高き顏の、まみいと恥かしげにらうらうじう、すべて何事も足らひて、容貌よき人と言はむに飽かぬ所なし。二十に一二ぞ餘り給へりける。いはけなき程ならねば、(四)かたなりに飽かぬ所なくあざやかに、盛の花と見え給へり。限なくもてかしづき給へるに、(五)かたほならず。實に(六)親にては、心も惑はし給ひつべかりけり。唯やはらかに愛敬づきらうたき事ぞ、(七)かの對の御方はまづ思し出でられける。(八)物宣ふ答なども、恥らひ給へれど、又あまり覺束なくはあらず、すべていと見所おほく、(九)かどかどしげなり。よき若人(一〇)ども三十人ばかり、童六人、かたほなるなく、裝束なども、(一一)例のうるはしき事は、目馴れて思さるべかめれば、引きたがへ、(一二)心得ぬまで好みそし



(一)君の情人として人に許され難き身分で君に逢ひそめたるが殘念なりといふ意なるべし
(二)我が君に對する情は淺くは見ゆべけれど下心はいつも變らず
(三)按察が
(四)物思に夜をあかすなどいふ意氣筋の人眞似ではなく
(五)薫は別に情々しき風を見せるでもなけれど樣子のよいので情らしく見えるのかして
(六)薫が冗談にも手をかけた女はどうかして薫の近くに暮したしと思ひて強ひて女三方に宮仕へに來るも

べかゝめり。

按察(一)うちわたし世にゆるしなき關川をみなれそめけむ名こそをしけれ

いとほしければ、

薫(二)深からずうへは見ゆれどせき川のしたのかよひはたゆるものかは

深しと宣はむにてだに頼もしげなきを、この上の淺さは、(三)いとゞ心やましく覺ゆらむかし。妻戸を押しあけて、薫「まことは、この空を見給へ。いかでかこれを知らず顏にては明さむとよ。(四)艶なる人まねにはあらで、いとゞ明しがたくなり行く夜な〳〵の寢覺には、この世後の世までなむ思ひやられて哀なる」など、言ひ紛らはしてぞ出で給ふ。(五)殊にをかしきことの數を盡さねど、樣のなまめかしき見なしにやあらむ、情なくなど、はた人に思はれ給はず、(六)かりそめの戲言をも言ひそめ給へる人の、氣近くてだに見奉らばやとのみ思ひ聞ゆるにや、あながちに、世を背き給へる宮の御方に、緣を尋ねつゝ參り集りて侍ふも、哀なること、程〳〵

でゐて、離(一)れぬ中らひなれど、これかれ火明う挑げて、すゝめ聞ゆる盃などを、いと(二)めやすくもてなし給ふめりつるかな、と宮の御有様をめやすく思ひ出で奉り給ふ。實(三)に我にても、よしと思ふ女子持たらましかば、この(四)宮をおき奉りて、內裏にだにえ參らせざらまし、と思ふに、誰も〳〵、宮(五)に奉らむと志し給へる女は、なほ源中納言にこそと、とり〴〵に言(六)ひならふなるこそ、我がおぼえの口惜しくはあらぬなゝめれ、さるはいと(七)あまり世づかず、古めいたるものを、など心驕もせらる。內(八)裏の御氣色あること、誠に思したらむに、斯くのみものうく覺えば、如何すべからむ、お(九)もだたしき事にはありとも、如何はあらむ、如何にぞ、故(一〇)君にいとよく似給へらむ時に、嬉しからむかし、と思ひ寄らるゝは、流石(一一)にもて離るまじき心なゝめりかし。例の寢覺がちなる徒然なれば、按(一二)察の君とて、人(一三)よりは少し思ひ勝し給へるが局におはして、その夜は明し給ひつ。明け過ぎたらむを、人の咎むべきにもあらぬに、苦しげに急ぎ起き給ふを、た(一四)ゞならず思ふ

(一)親類の中ではあれど
(二)匂がうまく受け答へして居た事かな
(三)薫の心
(四)匂を除きては
(五)匂にめあはせんと思ふ娘は寧ろ薫にやつた方がよいと
(六)口くせにいふ
(七)我は餘り色氣がなく
(八)女二宮を賜はるべき思召が事實ならば
(九)女二の聟になるは面目ある事なれども
(一〇)女二の容貌が大君に似て居たらば
(一一)女二の聟になるのが強ちいやでも無いと見える
(一二)女三宮の侍女
(一三)薫が他の女よりもやゝ愛情のあつき女の
(一四)按察が氣にする

重襲の唐衣、裳の腰も(一)皆けぢめあるべし。六位四人は、綾の細長、袴など、數は(二)限ある事を飽かずおぼしければ、物の色しざまなどをぞ、淸らをつくし給へりける。(三)召次、舍人などの中には、みだりがはしきまで、いかめしうなむありける。實にかく賑はしう花やかなる事は、(四)見るかひあれば、物語などにも、まづ言ひたてたるにやあらむ。されど、委しうはえぞ數へ立てざりけるとや。

中納言殿の御前の中に、(五)なま覺あざやかならぬや、暗きまぎれに立ち交りたりけむ、歸りてうち歎きて、供人「我が殿の、(六)などかおいらかに、この殿の御婿にうちならせ給ふまじき。味氣なき御獨住なりや」と、中門のもとにて呟きけるを、聞きつけ給ひて、をかしとなむ思しける。夜の更けて睡たきに、かのもてかしづかれつる人々は、心地よげに醉ひみだれて、より臥しぬらむかし、と(七)羨ましきなゝめりかし。

(八)君は入りて臥し給ひて、(九)はしたなげなるわざかな、事々しげなる樣したる親の出

(一)小腰引腰とて裳のかざり紐なり、織出模樣、染模樣など種々高下ある也
(二)人々に賜はる數は定まり居りて多く與へる事も出來ぬと
(三)取次役
(四)例を亂す程多く賜はりたり
㊟　薫の感情、按察の君の局に泊る
(五)餘りよき待遇を受けざりし男が交つて
(六)薫がなぜ大人しく夕霧の聟にならぬのであらう
(七)ちやほやもてなされたる匂の御供の人々は
(八)薫が自邸に歸りて
(九)極り惡さうな事哉、今夜の宴會の事を薫が思ふ也



(一)夕霧と一緒になりて
(二)匂が夕霧邸へ
(三)未詳
(四)三ッ目の餅
(五)夕霧
(六)酒宴の席に著かん事を
(七)匂が大君方に居る也
(八)雲井雁
(九)夕霧の子
(一〇)盃を匂に
(一一)夕霧方は面倒な家故聟になるは嫌なり抔匂が曾て薫に對していひし事を今思ひ出したる也
(一二)薫の樣子
(一三)薫が
(一四)重き身柄の殿上人

もろ心にあつかひ給へるを、大臣は人知れずなまねたしと思しけり。

(一)宵少し過ぐる程に(二)おはしましたり。寝殿の南の廂、東に倚りて御座參れり。御臺八つ、(三)例の御皿など、麗しげに淸らにて、又小き臺二つに、花足の皿ども、いまめかしうせさせ給ひて、(四)餅參らせ給へり。珍らしからぬ事書きおくこそ憎けれ。(五)大臣渡り給ひて、「夜いたう更けぬるを」と、女房して(六)そゝのかし申し給へど、(七)いとあざれて、頓にも出で給はず。(八)北の方の御兄弟の、左衞門督、藤宰相などばかり物し給ふ。辛うじて出で給へる御樣、いと見るかひある心地す。あるじの(九)頭中將、御盃さゝげて御臺まゐる。つぎ〳〵の御土器、二度三度まゐり給ふ。源中納言のいたく(一〇)すゝめ給へるに、宮少しほゝ笑み給へり。「(一一)煩はしきわたりを」と、ふさはしからず思ひて言ひしを、思し出づるなゝめり。されど(一二)見知らぬ樣にていとまめなり。東の對に出で給ひて、御供の人々もてはやし給ふ。おぼえある殿上人どもいと多かり。(一三)四位六人は、女の裝束に細長添へて、(一四)五位十人は、三

(一)中君が
(二)匂が自分に
(三)懷胎の事、中君の心
㊉盛なる六君の三ッ日目の祝
(四)匂の新婚より三日目
(五)明石姬中宮
(六)夕霧
(七)薫を夕霧が
(八)六君の三ッ目の祝儀
(九)夕霧が
(一〇)以下夕霧の心持をいふ、薫は前に六君を嫌ひたる關係あれば此祝に薫をよぶは氣恥しけれど
(一一)薫の外に然るべき身寄もなく
(一二)薫は又招待して席上の光を增すに足るべき人柄なれば旁夕霧が薫を誘ひしなるべし
(一三)薫が
(一四)六君を匂に取られたるを

ばかりになるも、我ながら憎き心かなと、(一)思ふ〳〵聞き臥し給へり。(二)初より物を思はせ給ひし有樣などを思ひ出づるも、疎ましきまでおぼゆ。(三)この惱ましき事も如何ならむとすらむ、いみじう命短き族なれば、かやうならむ序にもや、はかなくなりなむとすらむ、思ふには、惜しからねど、悲しくもあり、又いと罪深うもあゝなるものをなど、まどろまれ給はぬまゝに思ひ明し給ふ。

(四)その日は、(五)后の宮惱ましげにおはしますとて、誰も〳〵參りつどひ給へれど、いさゝかなる御風におはしましければ、異なる事もおはしまさずとて、(六)大臣は晝まかゝで給ひにけり。(七)中納言の君さそひ聞え給ひて、ひとつ御車にてぞまかゝで給ひにける。(八)今宵の儀式いかならむ淸らを盡さむと思すべかゝめれど、限あらむかし。(一〇)この君も心恥かしけれど、(九)親しき方の覺は、我方樣に(一一)又さるべき人もおはせず、(一二)物の榮にせむに、心ことに、はたおはする人なればなゝめりかし。(一三)例ならずいそがしうまかで給ひて、(一四)人の御上に見なしたるを口惜しとも思へらず、何やかやと

(一)中君の心、男女の關係を
(二)中君が
(三)中君のへ
(四)食事を
(五)中君が食はんともせざれば
(六)匂の
(七)中君
(八)宇治の山莊
(九)宇治にあの儘居たらば此蜩の聲も只一通りの寂しさ位で聞き過したるならんに
(一〇)匂が六君方へ
(一一)涙の多く落つるを形容していふ

はしたなかるべきが、歎かしきなンめり。(一)かゝる道を、いかなれば淺からず人の思ふらむと、昔物語などを見るにも、人の上などにても怪しう聞き思ひしは、實に疎なるまじきわざなりけり、と我が身になりてぞ、(二)何事も思ひ知られ給ひける。宮は、常よりも哀に打解けたる樣にもてなし給ひて、匂「むげに物參らざンなるこそいと惡しけれ」など宣ひて、よしある御菓子召しよせ、又さるべき人召して、殊更に調ぜ(三)させ給ひなどしつゝ、(四)そゝのかし聞え給へど、いと(五)遙にのみ思したれば、匂「見苦しきわざかな」と歎き聞え給ふに、暮れぬれば、夕つ方寢殿へ渡り給ひぬ。風涼しく大方の空をかしき頃なるに、今めかしきにすゝみ給へる(六)御心なれば、いとゞしく艶なるに、物おもはしき人の(七)御心の中は、萬に忍び難き事のみぞ多かりける。蜩の鳴く聲にも、(八)山の蔭のみ戀しくて、

中君　(九)おほかたに聞かましものをひぐらしの聲うらめしき秋の暮かな

今宵はまだ更けぬに出で(一〇)給ふなり。御さきの聲の遠くなるまゝに、(一一)海人も釣する

(一)落葉
(二)代筆にもせよ中君の前で見られては六君が迷惑なるべし
(三)代筆でさし出すは嬾な事故自分で書く樣に六君にすゝめたれど
(四)六君が獨り打萎れ居るは昨夜の首尾のどんなでありし故やら
(五)不足がましい口上は見るも面倒
(六)中君以外に女を持たずに氣樂に暮したいと思ふに
(七)以下作者の評、他に女を持たずに經來れる平人の夫婦の中こそ外に女が出來ては他人も妻を氣の毒にも思ふべけれど宮樣となれば其樣はゆかぬ
(八)かくあるのが當然
(九)匂をば
(一〇)妻妾を
(一一)中君を
(一二)中君と匂が
(一三)中君自身
(一四)匂が餘り大事にし過ぎし故

むと思して、ひきあけ給へるに、繼母(一)の宮の御手なゝめりと見ゆれば、今少し心安くてうち置き給へり。宣旨書(二)にてもうしろめたのわざや。

落葉 さかしらはかたはら痛さ(三)に、そゝのかし侍れど、いと惱ましげにてなむ。

女郎花(四)しをれぞまさるあさ露のいかにおきけるなごりなるらむ

あてやかにをかしう書き給へり。匂「かごとがましげ(五)なるも煩はしや。誠は、心安(六)くてしばしはあらむと思ふ世を、思の外にもあるかな」などは宣へど、又二つな(七)くて然るべきものに思ひならひたるたゞ人の中こそ、かやうなる事のうらめしさなども、見る人苦しくはあれ、思へばこれはいと難し。(八)つひにかゝるべき御事なり。宮達と聞ゆる中にも、(九)筋異に世の人も思ひ聞えたれば、(一〇)幾人もくえ給はむこと、もどきあるまじければ、人もこの御方(一一)をいとほしなども思ひたらぬなるべし。(一二)かばかり物々しくかしづきすゑ給ひて、心苦しき方疎ならず思したるをぞ、幸におはしけるとはきこゆる。(一三)自らの心にも、(一四)あまりにならはし給ひて、俄に

（一）我は心にやましき點がない故
（二）何程甘い言をいうても情の有無は詞の端でわかるものぢや
（三）我が身になつて考へてくれ給へ
（四）自分の身が自分で自由にならぬのぢや
（五）中君を他の婦人よりも大事にする我志を知らすべき機會がある
（六）六君方
（七）中君方の表へ來たり
（八）使が頂戴の衣裳を肩にかけて來たる也
（九）六君への御使なるべしと
（一〇）今朝は早く中君方へ來て居たのに匂がいつの間に六君へ文をやりしならんと
（一一）目前に六君の文を見せびらかすのは氣の毒なるに
（一二）使者が
（一三）出來るなら中君に何もかも打明けて居る樣に見せんと匂が思ひて中君の前で文をあけたるに

宣ふにつけて推し量られ侍りぬれ」とて、少しほゝ笑みぬ。匂げに我が君や、をさなの御物言や。（一）されど誠には心に隈の無ければ、いと心やすし。（二）いみじう言選して聞ゆとも、いとしるかるべきわざぞ。むげに世の理を知り給はぬこそ、らうたきものからわりなけれ。（三）よし我が御身になしても思ひめぐらし給へ。（四）身を心ともせぬ有様なりかし。若し思ふ樣なる世もあらば、（五）人に勝りける志の程も、知らせ奉るべき一節なむある。容易く言出づべき事にもあらねば、命のみこそ」など宣ふ程に、（六）彼處に奉り給へる御使、いといたう醉ひ過ぎにければ、少し憚るべき事も忘れて、けざやかにこの（七）南面に參れり。（八）海人の刈る珍らしき玉藻にかづき埋もれたるを、（九）然なゝめりと人々見る。（一〇）いつの程に急ぎ書き給ひつらむと見るに、安からずはありけむかし。宮も、強ちに隱すべきにはあらねど、（一一）さしぐみは猶いとほしきを、（一二）少しの用意はあれかしと、なまかたはら痛けれど、今はかひなければ、女房して御文とり入れさせ給ふ。（一三）同じくば隔なき樣にもてなしはてて

(一)匂の心
(二)中君に
(三)一方に早く六君に逢ひたき心持もするは六君に對する情が濃かなのであらう
(四)中君に逢つて居る間は又中君に對する情が前に異る事もないと見えて
(五)現世では此短き命の間でさへ君の薄情な所が現はれさう故
(六)匂をあてにする氣になる
(七)中君が
(八)中君が煩悶の樣子を匂に見られまいと
(九)涙が
(一〇)中君が顏をそむける故
(一一)匂が自分の方へむかせて
(一二)其方は何でも我が言ふ通りになる可愛き女と思ひ居たるに
(一三)中君の涙
(一四)匂の御心が一夜に變りたる事が其お言葉で分ります

て、(一)なつかしう愛敬づきたる方は、(二)これに竝ぶ人はあらじかし、と思ひながら、猶又(三)とくゆかしき方の心いられも立ちそひ給へるは、御志の疎にもあらぬなめりかし。(四)されど見給ふ程はかはるけぢめも無きにや、後の世までと誓ひ頼め給ふ事どもの盡きせぬを、聞くにつけても、中君「實にこの世は、いと短かゝめる命待つ間も、つらき御心は見えぬべければ、(五)後の契や違はぬ事もあらむと思ふにこそ猶こりずまに又も頼まれ(六)ぬべけれ」とて、いみじう念ずべかめれど、え忍びあへぬにや、今日は泣き(七)給ひぬ。日頃も、(八)いかでかく思ひけりと見え奉らじと、萬に思ひ紛らはしつるを、樣々に思ひ集むる事し多かれば、さのみも得もて隱されぬにや、(九)こぼれそめては頓にもえためらひ給はぬを、いと恥かしくわびしと思ひて、いたく背き(一〇)給へば、強ひてひき向け(一一)給ひつゝ、匂「聞ゆるまゝに、(一二)哀なる御有樣と見つるを、猶隔てたる御心こそ物し給ひけれな。さらずば夜のほどに思し變りにたるか」とて、我が御袖して涙(一三)を拭ひ給へば、中君「夜の間(一四)の心がはりこそ、

（一）匂が
（二）中君を見つめ
（三）てれかくし
（四）身體の工合の惡きも暑い中だけの事の樣に
（五）祈禱
（六）匂が眞面目な話につけても口前のよきを中君が嫌には思へど
（七）よくさう綺麗な口をきいたものぢや、六君に對する嫉妬の樣子をあらはさぬをいふ。

るもうたてあれば、少し起きあがりておはするに、打ち赤み給へる顔の匂など、今朝しもことにをかしげさ勝りて見え給へば、（一）あいなく涙ぐまれて、しばし（二）うちまもり聞え給ふを、恥かしく思して打ちうつぶし給へる、髪のかゝりかんざしなど、猶いと有りがたけなり。宮も、なまはしたなきに、細やかなる事などは、ふともえ言ひ出で給はぬ、（三）おもがくしにや、匂「など斯くのみ惱ましげなる御氣色ならむ。（四）暑き程の事とか宣ひしかば、いつしかと涼しきほど待ち出でても、なほはればれしからぬは見苦しきわざかな。樣々にせさする（五）事も、怪しう驗なき心地のみこそすれ。然はありとも、修法はまた延べてこそはよからめ。驗あらむ僧もがな。なにがし僧都をぞ夜居には侍はすべかりける」など樣なる、まめごとを宣へば、（六）かゝる方にも言よきは、心づきなく覺え給へど、むげに答へ聞えざらむもうたてあれば、中君「昔も、怪しう人に似ぬ有樣にて、かやうなる折は侍りしかど、自らいとよくおこたるものを」と宣へば、匂（七）「いとよくこそ爽かなれ」と打ち笑ひ

(一)發育したる
(二)匂が六君の人品を想像する也
(三)きつぱりして
(四)疎末にする氣にもなれぬ

九 中君の感慨、匂宮つとめて中君を慰む

(五)匂が六君方より
(六)中君の方
(七)六君への文
(八)六君が御氣に入らぬでも無さゝうな
(九)斯うなると中君が御氣の毒
(一〇)匂がいくら六君と中君とに厚薄の差をたてぬ積でも中君が壓倒される事になるであらう
(一一)我が居間で六君の返事を見たしと
(一二)中君と只一夜の隔なれど
(一三)中君方へ
(一四)匂の
(一五)寢て居るも異なもの故、中君の心

になどはあらで、よき程になりあひたる(一)心地し給へるを、如何ならむ(二)、物々しくあざやぎて(三)、心ばへも、たをやかなる方はなく、物誇りかになどやあらむ、然あらむこそ、うたてあるべけれ、など思せど、さやうなる御けはひにはあらぬにや、御志疎なるべう(四)も思されざりけり。秋の夜なれど、更けにしかばにや、程もなく明けぬ。

歸り(五)給ひても、對へ(六)はふともえ渡り給はず、しばし大殿籠りて起きてぞ、御文書(七)き給ふ。「御氣色(八)けしうはあらぬなゝめり」と、御前なる人々つきじろふ。侍女等「對の(九)御方こそ心苦しけれ。天の下(一〇)にあまねき御心なりとも、自ら氣壓さるゝ事もありなむかし」など、たゞにしもあらず、皆馴れ仕う奉りたる人々なれば、安からずうち言ふ事どもありて、すべて猶妬げなるわざにぞありける。御返(一一)も此方にてこそは、と思せど、夜の(一二)程の覺束なさも、常の隔よりは如何と心苦しければ、急ぎわ(一三)たり給ふ。寢くたれの御容貌(一四)、いとめでたく見所ありて、入り給へるに、臥した(一五)

(一)召上らねば
(二)縁喜惡く思ひ出さる事、大君の逝去前物を食はざりしをいふ
(三)匂宮の事
(四)六君が出來てもよもや中君を棄てる事はあるまじ
(五)元來の深い中は全くきれては仕舞はぬ者ぢや
(六)中君の心
(七)よかれ惡かれ噂をして貰ひたくなし
(八)匂のするが儘にさせて見て居たし
(九)中君は人に噂されるは嫌にて自分一人匂を恨んで居たいのであろう
(一〇)薫があれ程熱心で居るのに中君が靡けばよいのに
(一一)大君が中君を薫に與へんとせし事を知り居る老人共は
(一二)中君の御運
(一三)匂は中君を氣の毒とは思ひながら
(一四)六君に
(一五)夕霧方
(一六)六君の容貌

は忌み侍るものを、あさましうはかなき御くだものをだに(一)御覽じ入れねば、如何にならせ給はむ。あな見苦しや。(二)ゆゝしう思ひ出でらるゝことも侍るを、いとこそわりなけれ」などいふ。若き人々は、「心憂の世や」と打歎きて、若人「いでやこの(三)御事よ。(四)さりとも、かくて疎にはよもなりはてさせ給はじ。さ言へど、(五)もとの志深う思ひそめつる中は、名殘なからぬものぞ」など言ひあへるも、(六)樣々に聞きにくく、今は如何にも〳〵(七)かけて言はざらなむ、(八)たゞにこそ見め、と思さるゝは、(九)人には言はせじ、我一人恨み聞えむとにやあらむ。「いでや、(一〇)中納言殿の、さばかり哀なる御心深さを」など、(一一)そのかみの人々は言ひあはせて、(一二)「人の御宿世の怪しかりける事よ」と言ひあへり。

(一三)宮は、いと心苦しく思しながら、色めかしき御心は、いかでめでたき樣に待ち思はれむと心假粧して、えならず薫きしめ給へる御けはひ、いはむ方なし。(一四)待ちつけきこえ給へる(一五)所の有樣も、いとをかしかりけり。(一六)人の御程、さゝやかにあえか

(一)逢つて居る間はいやな處もなき匂の氣立仕向けに段々苦勞も薄らぎ來りしに
(二)六君一件につきては言ひ樣もなき迄つらく我身の運も是迄といふ樣な氣がする
(三)死せし父や姉と違つて匂はいくら情が薄くなつても時々位は訪ひ來ぬ筈はなしとも
(四)命さへあらば又匂との中も元の樣になる事もあるべしなど自ら慰める積でも
(五)「わが心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」
(六)宇治の
(七)宇治にて聞きし椎の葉の音には
(八)既往の事は忘れて中君が斯く思ふならんか、歌を釋したる也
(九)月をつく〴〵と眺むるを忌みし事平安朝頃の風俗也

し程よりは、人數にもなる樣なる有樣を、長かるべき事とは思はねど、(一)見る限は憎げなき御心ばへもてなしなるに、やう〳〵思ふ事薄らぎてあり經つるを、(二)このをりふしの身の憂さはたとへむ方なく、限と覺ゆるわざなりけり、ひたすら世になくなり給ひにし人々よりは、さりとも、これは時々もなどかはとも(三)思ふべきを、今宵かく見捨てて出で給ふつらさに、來し方行く先皆かき亂り、心細くいみじきが、我心ながら思ひやる方なく、心憂くもあるかな、(四)自らながらへば、など、慰めむことを思ふに、更に(五)姨捨山の月のみ澄みのぼりて、夜更くるまゝによろづ思ひ亂れたまふ。松風の吹き來る音も、(六)荒ましかりし山おろしに思ひ比ぶれば、いとのどかに懷しう目やすき御住居なれど、今宵はさもおぼえず、(七)椎の葉の音には劣りて覺ゆ。

中君 山里のまつのがけにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

(八)來し方は忘れにけるにやあらむ。老人どもなど、老人「今は入らせ給ひね。(九)月見る

(一)女君は日頃も萬に思ふ事多かれど、いかで氣色に出さじと、萬に念じ返しつゝ、つれなき樣し給ふことなれば、(二)殊に聞きも咎めぬさまに、おほどかにもてなしておはする樣、いと哀なり。中將の參り給へるを聞き給ひて、(三)流石にかれもいとほしければ、出で給はむとて、匂「今いと疾く(四)參りこむ。一人月な見給ひそよ。心空なればいと苦し」と聞えおき給ひて、なまかたはら痛ければ、かくれの方より寢殿へ渡り給ふ御うしろでを(五)見送るに、(六)ともかくもおもはねど、(七)唯枕の浮きぬべき心地のすれば、(八)心憂きものは人の心なりけりと、我ながら思ひ知らる。(九)幼きほどより心細く哀なる身どもにて、(一〇)世の中を思ひとゞめたる樣にもおはせざりし一所を、賴み聞えさせて、(一一)さる山里に年經しかど、唯いつとなく徒然に凄うはありながら、いとかく心に染みて世を憂きものとも思ひ知らざりしに、(一二)打ち續きあさましき御事ども(一三)を思ひし程は、世に又とまりて片時經べくもおぼえず、戀しう悲しきことの類あらじと思ひしを、命長くて今までもながらふれば、(一四)人の思ひたり

(一)中君
(二)夕霧よりの案内を知らぬ顔して
(三)匂の心、待ち居る六君も氣の毒故
(四)直に行つて來る
(五)中君が
(六)別に何といふはつきりした感じもなけれど
(七)涙がこぼれて
(八)自分で自分の心が儘にならぬをかこつ也
(九)以下「ながらへば」迄中君の心
(一〇)姉妹にて
(一一)世捨人なる父一人を力にして
(一二)つく〳〵世の憂きを感じはせざりしに
(一三)引續き父や姉に別れし時は
(一四)匂宮に引取られて他人の思ひしよりは立派な人並の生活をする樣になりたるが



㊇ 匂宮六君と婚す
(一)夕霧方
(二)匂の聟入を
(三)匂がまだ來らず氣がかりなれば
(四)此緣組は元來餘り匂が好まぬ事故、夕霧の心
(五)夕霧の方より催促したるに
(六)匂が
(七)二條院に中君といふ女を置いてある故の事と思へば氣がもめる譯なれど
(八)折角聟取の用意したる今夜を徒に過すも
(九)匂は是から六君方へ行く所を中君に見せたくなしと思ひて內裏から直に夕霧邸へ行く積りで內裏に居たりしに、中君がやりたる文の返事が來て其返事が何とあつたのか匂が感動して中君方へ行き居る所なりし也
(一〇)中君の

消ちつゝ、御前にては物思なき樣をつくり給ふ。

(一)左の大殿には、六條院の東の大殿を磨きしつらひて、限なくよろづを調へて(二)待ち聞え給ふに、十六日の月やう〳〵さしあがるまで心もとなければ、(三)いとも御心にいらぬ事にて、(四)如何ならむと安からず思して、(五)案內し給へば、「この夕つかた內裏より出で給ひて、(六)二條院になむおはしますなる」と人申す。(七)思す人持給へればと、心やましけれど、(八)今宵過ぎむも人笑へなるべければ、御子の頭中將して聞え給へり。

夕霧　大ぞらの月だにやどるわが宿に待つよひすぎて見えぬ君かな

宮は、なか〳〵今なむとも見えじ、心苦し、と思して、內裏におはしけるを、御(九)文聞え給へりける、御返やいかゞありけむ、猶いと哀に思されければ、忍びて渡り給へりけるなり。(一〇)らうたげなる有樣を見捨てて、出づべき心地もせず、いとほしければ、萬に契りつゝ、慰めかねて、諸共に月を眺めておはする程なりけり。

べき御心なるも、煩はしくて、(一)侍の別當なる、右京大夫召して、薫「(二)昨夜まかでさせ給ひぬと承りて參りつるを、おはしまさぬ程なりければ口惜しさを、內裏にや參るべき」と宣へば、右京「今日はまかでさせ給ひなむ」と申せば、薫「さらば(三)夕つ方も」とて出で給ひぬ。

猶この御けはひありさまを聞き給ふ度ごとに、(五)などて昔の人の御心掟をもてたがへて、(四)思ひ隈なかりけむと、悔ゆる心のみ勝りて心にかゝりむづかしく、なぞや人やりならぬ心ならむと、思ひかへし給ふ。(七)そのまゝにいまだ精進にて、いとゞ(六)行をのみし給ひつゝ、明し暮したまふ。(八)母宮は猶いと若くおほどきて、物しどけなき御心にも、(九)かゝる御氣色を、いと危くゆゝしと思して、女三「(一〇)幾世しもあらじを、見奉らむほどは、かひある様にて見え給へ。世の中を思ひ捨て給はむをも、(一一)かゝる身にては妨げ聞ゆべきにもあらぬを、この世にては、(一二)いふかひなき心地すべき心惑に、いとゞ罪や得らむ」と宣ふが、辱くいとほしくて、(一三)よろづを思ひ

(一)二條院の取締、匂宮の家來なるべし
(二)匂が昨夜退出せられし趣を聞きて
(三)夕方でも又參るべし
(四)薫が中君に接する毎に
(五)なぜ大君の勸に背きて了簡もなく中君を匂に取持ちしならんと
(六)前に中君を取らざりしも今其を後悔するも皆我心柄なるにと
(七)大君の逝去後引續きて薫は精進にて
(八)女三宮
(九)薫の樣子を
(一〇)我一生も殘少き故我存命中は見る甲斐ある生活をして見せてくれ
(一一)自分が尼の身故
(一二)薫が世を厭ふ樣では生甲斐なき心持がすべき故寧ろ罪を造る事になるべし
(一三)薫が萬事をこちへて

ましき山道に侍れば、思ひつゝなむ月日隔たり侍る。(一)故宮の御忌日は、かの阿闍梨に、さるべき事ども皆言ひおき侍りにき。彼處は(二)猶尊き方に思しゆづりてよ。時々(三)見給ふるにつけては、心惑の絶えせぬもあいなきに、(四)罪失ふ様になし侍りなばやとなむ思ひ侍るを、またいかゞ思しおきつらむ。(五)ともかくも定めさせ給はむに隨ひてこそはとてなむ。有るべからむやうに宣はせよかし。何事も疎からず承らむのみこそ、本意かなふにては侍らめ」など、まめだちたる事どもを聞え給ふ。經佛など、(六)この上も供養じ給ふべきなゝめり。(七)かやうなる序にことつけて、やをら籠り居なばやと、おもむけ給へる氣色なれば、薫「いとあるまじき事なり。猶何事も心のどかに思しなせ」など、敎へ聞え給ふ。日さしあがりて、人々參り集まりなどすれば、あまり長居も(八)事有り顔ならむにより、出で給ひなむとて、薫「(九)何處にても御簾の外にはならひ侍らねば、はしたなき心地し侍りてなむ。(一〇)今又かやうにも侍はむ」とて立ち給ひぬ。(一一)宮の、などかなき折には來つらむと、思ひ給ひぬ

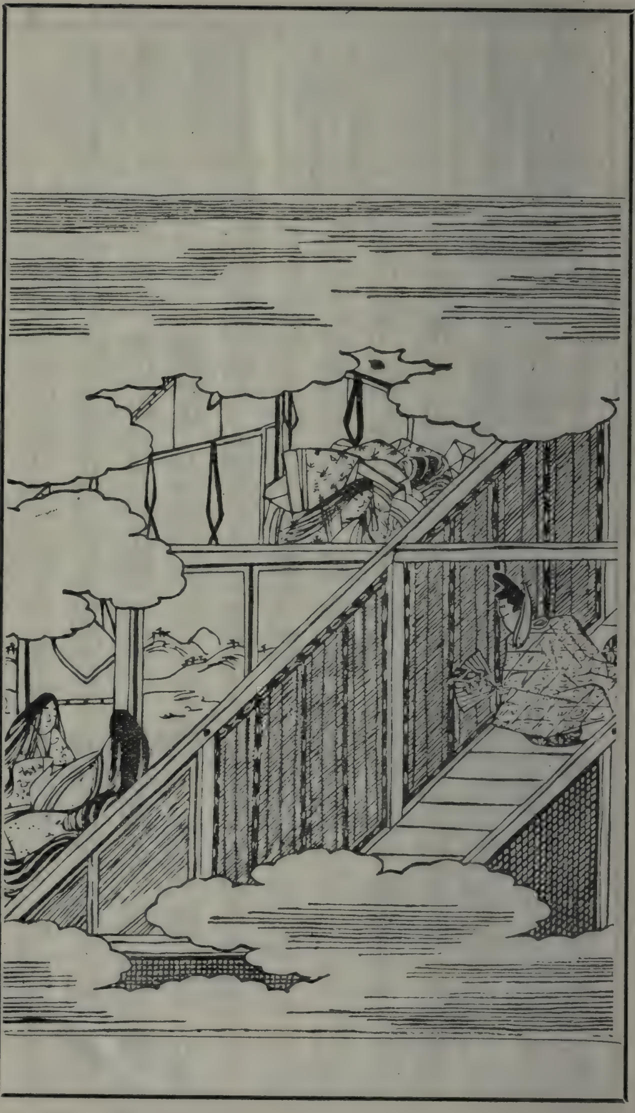
(一)八宮
(二)いつそ山莊を寺にしてお仕舞ひなされ
(三)舊邸の其儘なるを見るにつけては
(四)寺にして罪亡ぼしをしたしと思ひますが御意は如何
(五)どうにでも御差圖次第
(六)薫のする上になほ中君もする筈
(七)法事に托して宇治へ引込んで仕舞はんかとの中君の計畫らしき故
(八)中君との中を疑はるる種故
(九)中君に對面するには簾外におかれて他人行儀にされる事は今迄なかりし故
(一〇)御簾の外なりとも又參るべし
(一一)匂の氣質として今朝の訪問の事を聞かば必ず何故我が留守に來しならんと疑ふべきがうるさく

き夢こそ、覺ますべき方なく思ひ給へらるゝは、同じごと、世の常なき悲びなれど、(一)罪深き方は勝りて侍るにやと、それさへなむ心憂く侍る」とて、泣い給へるさま、いと心深げなり。(二)昔の人をいとしも思ひ聞えざらむ人だに、この人の思ひ給へる御氣色を見むには、座にたゞにもあるまじきを、まいて(三)我も物を心細く思ひ亂れ給ふにつけては、いとゞ常よりも、(四)面影に戀しく悲しく思ひ聞え給ふ心なれば、(五)今少し催されて、物もえ聞え給はず、(六)ためらひかね給へるけはひを、互にいと哀と思ひかはし給ふ。中君「(七)世の憂きよりはなど、人は言ひしをも、(八)さやうに思ひ比ぶる心もことに無くて、年頃は過し侍りしを、今なむ猶いかで(九)靜なる樣にても過さまほしく思ひ給ふるを、さすがに心にも叶はざゝめれば、辨の尼こそ羨ましく侍れ。(一〇)この二十日あまりの程は、(一一)かの近き寺の鐘の聲も聞き渡さまほしく覺え侍るを、忍びて(一二)渡させ給ひてむやと、聞えさせばやとなむ思ひ侍りつる」と宣へば、薫「(一三)荒らさじと思ほすとも、いかでかは。(一四)心やすき男だに、いと往來のほど荒

(一)後世の障りには此新しき悲の方が餘計になるならんと
(二)大君を左程思はぬ人でも薫の歎く樣を見ては
(三)中君自身も
(四)大君を
(五)一層薫の言葉に悲を催されて
(六)涙をこらへかね
(七)「山里は物の寂しき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり」
(八)山里の寂しさと世の憂さとを
(九)山里に
(一〇)八宮の三週忌に相當すれば宇治へ行きて法事も營みたしと也
(一一)阿闍梨の寺
(一二)宇治へつれて行きて下されと薫へ願はうかと思ひ居たり
(一三)宇治へ屢往復して舊邸を保存したく思召すとも其は出來る話でなし
(一四)手輕に行ける男の身てさへ

ひて後二三年ばかりの末に、世をそむき給ひし嵯峨院にも、六條院にも、さしのぞく人の、(一)心をさめむ方なくなむ侍りける。木草の色につけても、水の流に添へても、涙にくれてのみなむ歸り侍りける。(二)かの御あたりの人は、上下心淺き人なくこそ侍りけれ。方々集ひものせられける人々も、(三)皆所々に別れ散りつゝ、おの〱思ひ(四)離るゝ住居をし給ふめりしに、はかなき程の女房などはた、まして心をさめむ方なく覺え侍りける儘に、物覺えぬ心に任せつゝ、山林に行きまじり、すゞろなる田舍人になりなど、哀に惑ひ散るこそ多く侍りけれ。さてなか〱(五)皆荒らし果て、忘草生ふして後なむ、この(六)左の大臣も渡り住み、宮達などもかたがたものし給へば、昔に返りたるやうに侍るめる。(七)さる世に類なき悲しさと見給へし程の事も、年月經れば、思ひさます折の出で來るにこそはと見侍るに、實に限(八)あるわざなりけりとなむ見え侍りし。斯くは聞えさせながらも、かの古(九)の悲しさは、(一〇)まだいはけなく侍りける程にて、いと然しもしまぬにや侍りけむ。猶この近(一一)

(一)悲に堪へざりき
(二)源に仕へし人々は
(三)婦人達
(四)世を背きたる
(五)なまじ六條院が元の儘にては懷舊の情に堪へざる故、源を慕ふ事の深き丈に却て荒らして昔の俤を殘さず昔を忘るゝ樣にして後
(六)夕霧
(七)差當りては此上なく悲しく思はるゝ事も
(八)悲みも限のあるものと
(九)源氏逝去の際の悲みは
(一〇)薫が幼少の時分故其程に感ぜざりしかも知れぬ
(一一)大君を失ひし悲



どいひて、大事にすめる理(一)のうれへにつけて、歎き思ふ人よりも、これや今少し罪の深さは勝るらむ」など言ひつゝ、折り給へる花を、扇にうち置きて見居給へるが、やう／＼赤み(二)もて行くも、なか／＼色のあはひをかしう見ゆれば、やをら(三)さし入れて、

薫(四)「よそへてぞ見るべかりけるしら露のちぎりかおきしあさがほの花

(五)殊更びてしももてなさぬに、露を落さで持たまへりけるよと、をかしう見ゆるに、(六)置きながら枯るゝ氣色なれば、

中君(七)「消えぬまにかれぬる花のはかなさにおくるゝ露はなほぞまされる

何にかゝれる」と、いと忍びて言もつゞけず、つゝましげに言ひ消ち給へるほど、(八)猶いとよく似給へる(九)かなと思ふにも、まづぞ悲しき。薫「秋の空は今少し(一〇)ながめのみ勝り侍る、徒然の紛らはしにもと思ひて、先つころ宇治に物し侍りしに、庭も(一一)籬も誠にいとゞ荒れはてて侍りしに、堪へ難きこと多くなむ。故院(一二)の亡せさせ給

(一)理の當然なる事につきて心配するよりも私の心配は罪深かるべし
(二)萎れゆく也
(三)花を簾内へ
(四)大君が我に托し置きたる中君なれば、其言葉通り中君を大君と思ひて我物にすべきであつた
(五)わざとする氣でもなかりしに
(六)露のかゝり居る儘
(七)露のきえぬ間に枯れたる此花の如くはかなくなりし大君よりも、生き殘れる我は一層のはかなきを感ずと也
(八)何を頼りの我が命ぞの意
(九)大君に
(一〇)常より一層
(一一)「里は荒れて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる」
(一二)源氏の逝去後は源氏の晩年二三年の間遁世し居られし嵯峨院にも

ぬ人がらなるを、いよ〳〵しめやかにもてなしをさめ給へれば、今は(一)自ら聞え給ふ事も、やう〳〵うたてつゝましかりし方少しづつ薄らぎて、(二)面馴れ給ひにたり。(三)惱ましう思さるらむ様も、「如何なれば」など問ひ聞え給へど、はか〴〵しくも御いらへ聞え給はず、常よりもしめり給へる(四)氣色の心苦しきも、(五)哀におしはかられ給ひて、細やかに世の中の有るべき様などを、(六)兄弟やうの者のあらまし様に、教へ慰め聞え給ふ。(七)聲などもわざと似給へりとも覺えざりしかど、怪しきまで(八)唯それとのみ覺ゆるに、人目見苦しかるまじうは、簾もひきあげて、さしむかひ聞えまほしく、うち惱み給へらむ容貌ゆかしう覺え給ふも、猶世の中に物思はぬ人はえあるまじきわざにやあらむ、とぞ思ひ知られ給ふ。(九)人々しくきら〳〵しき方には侍らずとも、心に思ふことあり、歎かしく身をもて惱む様になどは無くて過しつべきこの世と、みづから思ひ給へしを、(一〇)心から、悲しきことも、をこがましく悔しき物思をも、かた〴〵に安からず思ひ侍るこそいとあいなけれ。(一一)官位な

(一)中君が自身挨拶する事の恥かしさも少しづつ薄くなりて
(二)薫に
(三)中君の病狀を薫が
(四)中君の
(五)薫の心に
(六)兄弟などのすべき様に
(七)中君の聲もそれ程似て居る様にも思はれざりしに、以下薫の心
(八)丸で大君の様に思はるゝ故
(九)私は榮華な暮しは出來ずとも心配なく世を送る事は出來る身と信じ居たるに
(一〇)我が心柄で恐しき目にあひ殘念な思をもするはつまらぬ事
(一一)他人が

だきまだき來にけり、と思ひながら、人召して、中門の開きたるより見せ給へば、「御格子ども皆(一)まゐりて侍るべし。女房のけはひなどし侍りつ」と申せば、降りて、(二)霧の紛に樣よく歩み入り給へるを、宮の忍びたる所より歸り給へるにやと見る(三)に、露にうちしめり給へる薫、例のいと(四)樣異に匂ひ來れば、「猶(五)いとめざましうはおはすかし、心をあまりをさめ給へるこそ憎けれ」など、あいなく若き人々などは聞えあへり。(六)驚き顔にもあらず、よき程に打ちそよめきて、御褥さし出でなどする樣も、いと目やすし。薫「これ(七)に侍へと許させ給ふほどは、人々しき心地すれど、猶かゝる御簾の前に、さし放たせ給へるうれはしさになむ、屢もえ侍はぬ」と宣へば、侍女「さらば如何は侍るべからむ」と聞ゆ、薫「北(八)面などやうの隱ぞかし、かかる古人などの侍はむに、理なるやすみ所は。それもまた唯御心(九)なれば、憂へ聞ゆべきにも侍らず」とて、長押におし懸りておはすれば、例の人々、「猶(一〇)あしこ許に」な(一一)どそゝのかし聞ゆ。(一二)もとよりけはひはやりかに雄々しくなどは物し給は

(一)既に上げたる樣也
(二)薫が車より
(三)匂方の女等が
(四)他人に異なりたる香がする故
(五)薫は何というてもすばらしいものぢや、只餘り眞面目にして居らるゝが憎らしい
(六)薫に不意を襲はれた譯なれど女中等が周章てた樣を見せず
(七)此處に居れと許さるる處は面目ある心持もすれども、此樣な處にもかるゝ他人行儀が氣にくはぬので動もすれば御無沙汰になる
(八)私如き老人の居るには奥向の隱れたる所が適當なり
(九)其方の御計にある事
(一〇)彼處まで出て御挨拶あれ
(一一)中君を
(一二)薫の樣子

(一)二條院、三條宮よりは北に當ればいふ
(二)匂を載せ行きし車を供人が持ち歸りたりと也
(三)中君
(四)朝の內に中君を訪ふべし
(五)氣取つて居る浮氣男どもとは比べ物にならず
(六)露の消えぬ間といふべき極めてあだなる人生と知りつゝも、猶其一時の色に迷はんとするか、我心よ
(七)なまめき立てるを憎むなるべし
(八)匂の留守にて女ばかり故、以下薫の心

人召して、薫「北(一)の院に參らむに、事々しからぬ車さし出ださせよ」と宣へば、侍「宮は昨日より內裏になむおはしますなる。昨夜御車(二)率てかへり侍りにき」と申す。薫「さばれ、かの對(三)の御方の惱み給ふなる、訪ひ聞えむ。今日は內裏に參るべき日なれば、日たけぬ前に(四)」と宣ひて、御裝束し給ふ。出で給ふまゝに、下りて花の中に交り給へる御樣も、殊更に艶だち色めきてもてなし給はねど、怪しう、たゞ打見るになまめかしう恥かしげにて、いみじう氣色(五)だつ色好みどもに準ふべくもあらず。おのづからをかしうぞ見え給ひける。朝顏をひき寄せ給ふに、露いたう溢る。

薫「けさの間の色にやめでむおく露の消えぬにかゝる花と見る〱はかな(六)」など獨言ちて、折りて持給へり。女郞花をば、見過ぎて(七)ぞ出で給ひぬる。明け離るゝまゝに、霧の立ちみちたる空をかしきに、女どち(八)はしどけなく朝寢し給へらむかし、格子妻戸などうち叩き聲づくらむこそ、初々しかるべけれ、朝ま

しかた行くさきの人の上さへ、味氣なき世を思ひめぐらし給ふ。(一)なげのすさびに物をも言ひ觸れ、氣近くつかひならし給ふ(二)人々の中には、(三)自ら憎からず思さるゝも有りぬべけれど、誠には心留るも無きこそ(四)さわやかなれ。さるは、(五)かの君達の程に劣るまじき際の人々も、時世に隨ひつゝ衰へて、心細げなる住居するなどを、尋ね取りつゝ(六)あらせなど、いと多かれど、(七)今はと世を背き離れむ時、この人こそと(八)とりたてて、心とまる絆になるばかりの事は無くて過してむ、と思ふ心づかひ深かりしを、(九)いでさも悪く、我が心ながらねぢけてもあるかな、など、常よりもやがてまどろまず明し給へる晨に、霧の籬より、花のいろ〳〵面白く見え渡る中に、朝顏のはかなげにて交りたるを、猶殊に目とまる心地し給ふ。「(一〇)明くる間咲きて」とか、常なき世にも準ふるが、心苦しきなゝめりかし。格子もあけながら、いと假初に打臥しつゝ明し給へば、この花の開くる程をも、唯一人のみぞ見給ひける。

(一)薰が假初の慰に情をかけ
(二)女中達
(三)氣に入りたる女もあるべけれど
(四)さつぱりしたものぢや
(五)大君中君に劣らぬ身分の女も
(六)薰方に召使ひなどしておく女多けれど
(七)以下薰の心
(八)特別に心残りのする女はなくて暮さんと
(九)大君故には自分の了簡ながら不埒にも初の趣意を破りてしまひし事哉と
(一〇)「朝顏は常なき花の色なれやあくる間咲きてうつろひにけり」

(一)薫の心
(二)匂がおくびにも出さぬ樣ぢや
(三)匂の如き
(四)一人の女に凝り固まる性癖から見る故
(五)大君を失ひて後の我心では、以下薫の心
(六)中君を得たく思ふ心の
(七)大君の妹と思ふ故に戀しいのぢや
(八)大君と中君とは殊に中がよかりしに
(九)跡に殘る中君を我と思へと
(一〇)薫の仕向が萬事氣に入らぬ事はなし、只中君を薫にと思ひしをはづして匂に娶したるのみが恨めしくて此世に念が殘るべし、大君の詞
(一一)大君在天の靈も此度の六君の一件の出來しにつけては

しは憚り給はじや、と思ふに、(一)いでや今は、その折の事など、(二)かけても宣ひ出でざゝめるかし、猶あだなる方に進み、移りやすなる人は、(三)女の爲のみにもあらず、頼もしげなく、輕々しき事もありぬべきなゝめりかし、など憎く思ひ聞え給ふ。我が誠にあまり一方に(四)しみたる心ならひに、人はいとこよなくもどかしく見ゆるなるべし。(五)かの人を空しう見奉りなしてし後思ふには、帝の御女を賜はむと思しおきつるも、嬉しくもあらず、(六)この君を得ましかばと覺ゆる心の、月日に添へて勝るも、唯かの(七)御ゆかりと思ふに、思ひ離れ難きぞかし、兄弟といふ中にも、(八)限なく思ひかはし給へりしものを、今はとなり給ひにし果にも、「(九)とまらむ人を同じ事と思へ」とて、「(一〇)萬は思はずなる事もなし、唯かの思ひおきてし樣を、違へ給へるのみなむ、口惜しう怨めしき節にて、この世には殘りぬべき」と宣ひしものを、(一一)天翔りても、かやうなるにつけては、いとゞつらしとや見給ふらむ、などつく〴〵と人やりならぬ獨寢し給ふ夜なくは、はかなき風の音にも目のみ覺めつゝ、來

かに物し給ふわたりにて、(一)ゆるびなく聞えまつはし給はば、(二)月頃も然もならひ給はで、待つ夜多く過し給はむこそ、哀なるべけれ、など思ひ寄るにつけても、(三)あいなしや我が心よ、何しに(四)ゆづり聞えけむ、(五)昔の人に心をしめてし後、大方の世をも思ひ離れて澄み果てたりし方の心も濁りそめしかば、唯(六)かの御事をのみ、とざまかうざまには思ひながら、流石に(七)人の心許されであらむ事は、初より思ひし本意なかるべしと憚りつゝ、唯如何にして少しも哀と思はれて、(八)打解け給へらむ氣色をも見むと、行く先のあらましごとのみ思ひ續けしに、人は(九)心にもあらずもてなして、流石に(一〇)一方にしも得さし放つまじう思ひ給へる慰に、同じ身ぞと言ひなして、本意ならぬ方におもむけ給ひしが、妬く怨めしかりしかば、まづその(一一)心掟を違へむとて、急ぎせしわざぞかし、などあながちに女々しう物狂しく(一二)率てありきたばかり聞えしほど思ひ出づるも、いとけしからざりける心かな、と返す返すぞ悔しき。宮も、さりともその程の有樣思ひ出で給はば、我が聞かむ所をも少

(一)斟酌なく匂を我方にのみ引附くる様にせば
(二)中君は馴れもせぬ寂しき夜を送る事多かるべしなど
(三)薫の心
(四)中君を匂に
(五)大君に惚れてからは世間を捨てた積の心も濁りし故
(六)大君の事
(七)大君が承知もせぬに無理な事をしては
(八)大君の
(九)薫に從ふことを否みて
(一〇)嫌ふ一方でもない様子でせめての心ゆかしに我も妹も同じ事ぞといふ口實で望みもせぬ中君を押附けられしが
(一一)大君の趣意を通させじとて匂を取持ちし譯であった
(一二)匂を案内し

(一)中君が
(二)さし出て御懐胎なりといひ知らせる者もなければ
(三)何日に匂と六君との婚禮あるべしとの趣を匂からは聞かず他より傳聞して中君が知れり
(四)中君に隔をおく積てはなけれど
(五)中君
(六)中君の心
(七)婚禮の日取さへ聞かせぬかと
(八)中君が引取られてからは
(九)方々へ泊りて夜内をあける事もなかりしを
(一〇)六君が出來てから俄に外何ばかりしたらば中君が何といふならんと
(一一)豫め外泊しつけて中君にれさせんとするを中君は其意を解せず、其をも惡くばかり解釋する樣なり
㊆薫の煩悶、朝顔の花を携へて中君を訪ふ
(一二)薫
(一三)六君の一件を
(一四)匂は浮氣者故、以下薫の心
(一五)中君を愛せぬではなくとも
(一六)六君の方に
(一七)手強き夕霧の家風故

など宣ふ折もあれど、(一)いと恥かしうし給ひて、さりげなくのみもてなし給ふを、(二)さし過ぎ聞え出づる人もなければ、確にもえ知り給はず。

八月になりぬれば、(三)その日など外よりぞ傳へ聞き給ふ。宮は、(四)隔てむとにはあらねど、言ひ出でむ程心苦しういとほしく思されて、然も宣はぬを、(五)女君はそれさへぞ心憂く覺え給ふ。(六)忍びたる事にもあらず、世の中なべて知りたる事を、(七)その程などだに宣はぬ事と、いかゞ怨めしからざらむ。かく(八)渡り給ひにし後は、ことなる事なければ、内裏に參り給ひても、夜とまる事は殊にし給はず、(九)此處彼處の御夜がれなどもなかりつるを、(一〇)俄に如何に思ひ給はむと、心苦しき紛らはしに、この頃は、時々御宿直とて參りなどし給ひつゝ、(一一)かねてより慣はし聞え給ふをも、唯つらき方にのみぞ思ひおかれ給ふべき。

(一二)中納言殿も、いといとほしきわざかなと(一三)聞き給ふに、(一四)花心におはする宮なれば、(一五)哀とは思すとも、(一六)今めかしき方に必ず御心移ろひなむかし、女方も、(一七)いとしたゝ

し世に(一)おはせましかば、又(二)かやうに思す事はありもやせまし、それを(三)いと深う、いかで然はあらじと思ひ入り給ひて、とざまかうざまにもて離れむことを思して、容貌をもかへてむとし給ひしぞかし、必ず(四)さる様にてぞおはせまし、今思ふに、いかに重りかなる御心掟ならまし、亡き(五)御影どもも、我をば如何にこよなき淡つけさと見給ふらむと、恥かしう悲しく思せど、何かは、(六)かひなきものから、かゝる氣色をも見え奉らむと、忍びかへしつゝ、聞(七)きも入れぬ様にて過し給ふ。宮(八)は常よりも、哀になつかしう起き臥し語らひ(九)契りつゝ、この世のみならず、長(一〇)き事をのみぞ頼め聞え給ふ。さるはこの五月ばかりより、(一一)例ならぬ様に惱ましうし給ふ事もありけり。こちたく苦しがりなどはし給はねど、常よりも物參ることいとゞなく、臥してのみおはするを、まだ(一二)さやうなる人の有様など、よくも見知り給はねば、たゞ暑き頃なれば斯くおはするなゝめりとぞ思しける。さすがに怪しと思し咎むる事もありて、匂「もし如何なるぞ。(一三)然る人こそさやうには惱むなれ」

(一)大君が
(二)匂の様に外に女を拵へる事があつたかも知れぬ
(三)大君が深く考へて其様な目には遇ひたくなしと思ひて色々と逃れる工夫をして
(四)若し今存命ならば必ず尼になりて居らるべし
(五)父や姉の靈も
(六)斯く思へる事を匂に知られてもつまらぬ事故知らすまじと思ひて
(七)六君の事は知らぬ振して
(八)匂宮
(九)中君に
(一〇)後の世までかけて契る
(一一)中君懐胎せし也
(一二)匂は女の懐胎の様子などまだよく知らぬ事故
(一三)懐胎せる女が其方の様に苦しがるものぢや

㊅匂宮と六君との婚禮八月と定まる、中君の煩悶
(一)夕霧
(二)六君と匂との婚姻を
(三)中君
(四)中君の心
(五)我は人數ならぬ身故
(六)匂は移り氣な人と
(七)今迄と打て變つてつらくされる其當座は
(八)丸で縁が切れて仕舞ふ樣な事はなくとも
(九)都へ引取られずあの儘宇治に引込切りにするよりは、一旦出て又歸るは宇治の人々の手前も恥かし
(一〇)八宮の遺言を背きて山莊を離れし輕率さを
(一一)大君、以下中君の心
(一二)しつかりした處
(一三)薫

(一)左の大殿には急ぎ立ちて、(二)八月ばかりにと聞え給ひてけり。二條院の對の御方には、聞き給ふに、(四)さればよ、いかでかは、(五)數ならぬ有樣なゝめれば、必ず人笑へ(三)に憂き事出で來むものぞとは、思ふ〳〵過しつる世ぞかし、(六)あだなる御心と聞き渡りしを頼もしげなく思ひながら、目に近くては、殊につらげなる事も見えず、哀に深き契をのみし給へるを、(七)俄にかはり給はむほど、如何は安き心地はすべからむ、たゞ人の中らひなどの樣に、(八)いとしも名殘なくなどはあらずとも、如何に安げなき事多からむ、猶いと憂き身なゝめれば、遂には山住に歸るべきなゝめり、など思すにも、(九)やがて跡絶えなましよりは、山賤の待ち思はむも人笑へなりかし、とかへす〴〵も、(一〇)故宮の宣ひ置きしことに違ひて、草のもとを離れにける心輕さを、恥かしうもつらくも思ひ知られ給ふ。(一一)故姫君の、いとしどけなく、ものはかなき樣にのみ、何事をも思し宣ひしかど、心の底のづしやかなる所は、(一二)こよなくもおはしけるかな、(一三)中納言の君の、今に忘らるべき世なく、歎き渡り給ふめれど、若

(一)眞木柱腹
㊄　女二宮薫に定らんとす
(二)婚姻差支へなき也
(三)薫から言ひ出したら直に女二を許さんと
(四)薫に
(五)薫の心
(六)聟取の時日を今上が
(七)薫自ら今上の思召をも承れども
(八)大君
(九)薫の心
(一〇)大君
(一一)卑しき身分の女でも、以下薫の心
(一二)大君に少しでも似て居る女ならば氣にも入るべし
(一三)漢武帝が李夫人の姿を烟の中に見たりといふ反魂香
(一四)女二宮の方を急ぐ氣にはなり得ず

の大納言の、紅梅の御方(一)をも猶思し絶えず、花紅葉につけても宣ひ渡りつゝ、いづれをもゆかしうは思されけり。されどその年は變りぬ。

女二宮も御服はてぬれば、(二)いとゞ何事にかは憚り給はむ。「(三)さも聞え出でばと思召したる御氣色になむ」と、(四)告げ聞ゆる人々もあるを、(五)あまり知らず顔ならむも、ひがひがしうなめげなりなど思しおこして、さるべき便して、氣色ばみ聞え給ふ折折もあるに、はしたなき樣はなどてかはあらむ。その程に(六)思し定めたゝなりと傳にも聞き、(七)自ら御氣色をも見れど、心の中には、猶飽かで過ぎ給ひにし人(八)の悲しさのみ、忘らるべき世なく覺ゆれば、(九)うたてかく契深く物し給ひける人(一〇)の、などてかは流石に疎くては過ぎにけむ、と心得難く思ひ出でらる。(一一)口惜しき品なりとも、(一二)かの御有樣に少しも覺えたらむ人は、心もとまりなむかし、昔ありけむ香(一三)の烟につけてだに、今一度見奉るものにもがな、とのみ覺えて、(一四)やむごとなき方ざまに、いつしかなどは急ぐ心もなし。

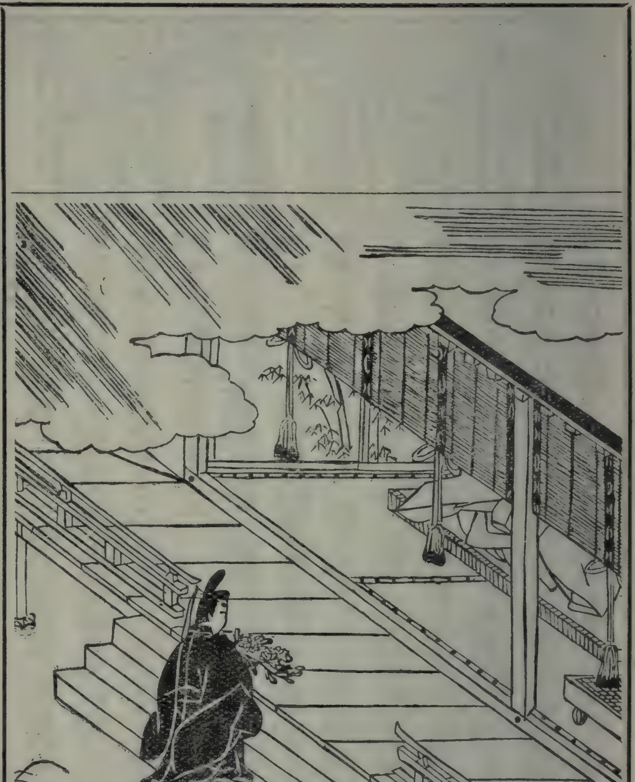
(一)六君を匂に取持つ樣に
(二)匂を論す也
(三)夕霧が六君を匂にと思ひて眞劍に年來希望して居るものを
(四)外戚次第でよくもなりあしくもなる
(五)今上が段々老年に近づく故譲位せんとして居らるゝ事故其方が近々東宮になるかも知れぬ
(六)平人は本妻を持てば他に愛を分けるのがむつかしくもあれど
(七)夕霧が眞面目くさりて居ながら
(八)雲井雁を落葉宮と並べ置きて二人の間互に恨みのなき樣に甘くやりて居るではないか
(九)匂は
(一〇)希望通りにいけば即ち東宮にもならば幾人女を持つても仔細はなし
(一一)尤らしく
(一二)匂も元より根がいやでもなき事故強ひて斷りもせず
(一三)夕霧の聟になれば萬事折目正しく鄭重にされて今迄氣樂にし來りたる身が窮窟なるべく思ひていやにもなる譯なれども
(一四)夕霧に惱まれてもつまらぬと
(一五)紅梅右大臣

中宮にもまめやかに恨み申し給ふこと、度重りければ、聞召し煩ひて、中宮「いと(二)ほしく、(一)斯くおふなく〳〵、(三)思ひ心ざして年經給ひぬるを、生憎に遁れ聞え給はむも、情なき樣ならむ。親王達は、(四)御後見からこそ、ともかくもあゝなれ。(五)上の御世も末になり行くとのみ思し宣ふめるを、(六)たゞ人こそ、一方に定りぬれば、又心をわけむ事も難げなゝめれ、それだに、(七)かの大臣のいとまめだちながら、(八)此方彼方羨なくもてなして、ものし給はずやはある。ましてこれは、(九)(一〇)思ひおきて聞ゆる事もかなはば、數多も侍はむになどかあらむ」など、例ならず言つゞけて、ある(一一)べかしう聞えさせ給ふに、(一二)我が御心にも、もとよりもて離れて、はた思さぬことなれば、強ちには、などてかはあるまじき樣にも聞えさせ給はむ。唯(一三)いと麗しげなるあたりに取籠められて、心安くならひ給へる有樣の所狭からむ事を、なま苦しく思すに、物憂きなれど、實にこの大臣(一四)に、餘り怨ぜられ果てむもあいなからむ、などやう〳〵思し弱りにたるなるべし。あだなる御心なれば、あの按察(一五)

ほしき人々の御事どもをも、よく聞き過しつゝ年經ぬるを、(一)今さらに聖やうのものの、世にかへり出でむ心地すべき事と思ふも、かつは怪しや、殊更に心を盡す人だにこそあゝなれ、とは思ひながら、(二)后腹におはせばしもと覺ゆる心の中ぞ、餘りおほけなかりける。

かゝる事を(三)左大臣殿ほの聞き給ひて、六の君は(四)さりともこの君にこそは、澁々なりとも、(五)まめやかに恨み寄らば、遂にはえ否び果てじと思しつるを、(六)思の外なる事出で來ぬべかゝめりと、妬く思されければ、(七)兵部卿宮はた、(八)わざとにはあらねど、折々につけつゝ、(九)をかしきさまに聞え給ふ事絶えざりければ、(一〇)さばれ、等閑の御すきにはありとも、さるべきにて、御心とまるやうもなどかなからむ、(一一)水漏るまじく思ひ定むとても、なほ〳〵しき際に下らむはた、いと人わろく、飽かぬ心地すべし、など思しなりにたり。夕「(一二)女子後めたげなる世の末にて、帝だに聟もとめ給ふめる世に、(一三)ましてたゞ人の盛過ぎむもあいなし、など(一四)誹らはしげに宣ひて、

(一)今更人の聟にならば丸で山籠りせる僧が浮世に逆戻せる樣なものならんと思ふも氣紛れの沙汰なり
(二)女二が明石中宮腹ならば嘸よからんにと
四 夕霧六君を匂宮に配せんとす
(三)夕霧
(四)何でも窠にやらねばならぬ
(五)此方で本氣で持懸けたら
(六)女二宮の聟になつて仕舞ふかも知れぬと
(七)匂
(八)特に六君に執心といふ程にはあらねど
(九)六君を挑む事
(一〇)匂の懸想は常座の慰にもせよ緣があれば其から眞に惚込む事も無いとは言はれぬ、以下夕霧の心
(一一)何程六君一人を守つてくれる男でも身分卑しき聟では外聞惡く
(一二)今は末世で娘を持てば誰も氣が氣でなく
(一三)平人の娘の
(一四)今上を



る戯にてもこれなむ善かるべき」とて、碁盤召し出でて御碁の敵に召し寄す。(一)何時もかやうに、氣近くならし纒はし給ふにならひにたれば、然にこそはと思ふ(二)に、今上「よき賭物はありぬべけれど、輕々しくはえ渡すまじきを、何をかは」(三)(四)など宣はする御氣色いかゞ見ゆらむ。(五)いとゞ心づかひして侍ひ給ふ。さて打たせ給ふに、三番に數ひとつ負けさせ給ひぬ。(六)今上「ねたきわざかな」とて、今上「まづ今日はこの花一枝ゆるす」(七)と宣はすれば、御答聞えさせで、降りて面白き枝を折りて參り給へり。

薫　世のつねの垣根ににほふ花ならばこゝろのまゝに折りて見ましを(八)

と奏し給へる用意あさからず見ゆ。

今上　霜にあへず枯れにし園の菊なれどのこりの色はあせずもあるかな(九)

と宣はす。かやうに、折々ほのめかさせ給ふ(一〇)御氣色を、人傳ならず承りながら、例の心の癖なれば、いそがしくしも覺えず。(一一)いでや本意にもあらず、(一二)樣々にいと(一三)

(一)薫を
(二)薫は何時もの通りに心得居たるに
(三)暗に女二宮をいふ
(四)其他には何を贈物にすべき
(五)薫は何と見て取りたるか
(六)今上が一番の負け越しになりたる也
(七)此菊一枝折る事を許す、朗詠に「聞得園中花養艷、請君許折一枝春」此詩の花は娘を喩へたるなれば女二宮の事を含みて斯くは言へる也
(八)御前の花故心のまゝに折らずと也、女二宮の事を心得てよめると見ゆ
(九)枯れにし菊は藤壺女御、殘の色は女二宮
(一〇)女二宮を下されんとする思召を
(一一)急ぎて帝の聟にならんとも思はず
(一二)女二の聟になるは我本意にあらず、以下薫の心
(一三)大君が中君を娶らせんといふをも夕霧が六君を與へんといふをも聞流しにし來りたるに

(一)我が存命中に女二の所置を定めんと
(二)女三の時の通り順ぉしに薫を聟にする外には
(三)薫は皇女の聟にしても不釣合な事はあるまいが、以下今上の心
(四)宇治の大君をいふ、此頃はまだ大君存生也、外に戀人があればとて本妻を疎略にする樣な事はせぬ性質らしいが
(五)薫もいつか本妻を持たぬ事はない筈
(六)本妻のきまらぬ前に女二宮の事を持懸けて見やうかしらと
(七)今上が女二と
(八)今上の御子
(九)薫
(一〇)女二宮は喪中なれば也

つゞけて、ともかくも御覽ずる世にや思ひ定めましと、思し寄るには、やがてそ(一)の序のまゝに、この中納言(二)より外に、よろしかるべき人また無かりけり。宮達の(三)御傍にさし竝べたらむに、何事もめざましくはあらじを、もとより思ふ(四)人持たりとて、聞きにくき事などうち混ずまじう、はたあゝめるを、遂(五)にはさやうの事なくてしも得あらじ、さらぬ(六)前に、さもやほのめかしてまし、など折々思召しけり。

(七)御碁など打たせ給ひ、暮れ行くまゝに、時雨をかしき程に、花の色も夕ばえしたるを御覽じて、人召して、今上「たゞ今、殿上に誰々か」と問はせ給ふに、侍臣「中(八)務の親王、上野の親王、中(九)納言源の朝臣侍ふ」と奏す。今上「中納言の朝臣こなたに」と仰言ありて、參り給へり。實にかく取りわきて召出づるもかひありて、遠く薫れる匂よりはじめ、人に異なるさまし給へり。今上「今日のしぐれ、常より殊に長閑なるを、遊(一〇)などすさまじき方にて、いと徒然なるを、いたづらに日を送

にも異腹なりけり、殊に世(一)のおぼえ重りかにもあらず、やむごとなからぬ人々を、頼もし人にてものし給はむも、女は心苦しき事多かりぬべきこそいとほしけれなど、(二)御心ひとつなる樣に思しおつかふも、安からざりけり。

(三)御前の(四)菊うつろひ果てで盛なる頃、空の氣色の哀にうちしぐるゝにも、まづこの(五)御方に渡らせ給ひて、(六)昔のことなど聞えさせ給ふに、御答なども、おほどかなるものからいはけなからず打聞えさせ給ふを、うつくしく思ひ聞えさせ給ふ。(七)かやうなる御樣を見知りぬべからむ人の、もてはやし聞えむも、などかはあらざらむ、朱雀院の(八)姫宮を、六條院にゆづり聞え給ひし折の定どもなど、おぼし出づるに、(九)しばしは、いでや飽かずもあるかな、然らでもおはしなまし、と聞ゆる事どもありしかど、(一〇)源中納言の、(一一)人より殊なる有樣にて、かく萬を(一二)後見奉るにこそ、その(一三)かみの御おぼえ衰へず、やむごとなき樣にてはながらへ給ふめれ、然らずば、(一四)御心より外なる事ども出で來て、自ら人に輕められ給ふ事もやあらまし、など思し

(一)大藏卿修理大夫位な輕き身分の人々を
(二)今上が自分一人の外には心配する人もなき樣に
㊁今上薫を女二宮の聟にせんとす、薫と碁を圍みて共意をほのめかす、氣乘のせぬ薫
(三)清涼殿の庭の
(四)菊は霜の爲に色のかはりたるを賞したる也
(五)今上が女二方へ
(六)故女御の噂
(七)女二の人柄に思ひ附きて大事にして呉れる聟も無い事はない筈、以下今上の心
(八)女三宮
(九)初の内は此縁組思はしからず、もつと良い緣もありさうな物と思はそる事もありしかど
(一〇)今では女三の腹に生れたる薫が
(一一)人に生れ優りて
(一二)女三の身の上を
(一三)女三が當時の威勢衰へず
(一四)女三の身の上に不慮の失態など生じて

(一)藤壺は
(二)藤壺なくては
(三)卑しき身分の
(四)女二宮
(五)今上が
(六)内裡へ女二宮を引取りたり、表向には忌中に内裡へ引取る事はならぬ故忍びてする也
(七)今上が女二宮方へ
(八)喪服に
(九)女二の
(一〇)今上が
(一一)以下今上の心
(一二)藤壺異腹の兄弟

し急ぎて、何事もなべてならぬ樣にと思しまうく。古より傳りたりける寶物ども、この折にこそはと搜し出でつゝ、いみじく營み給ふに、女御夏頃物怪に煩ひ給ひて、いとはかなく亡せ給ひぬ。いふかひなく口惜しきことを、内裏にもおぼし歎く。心ばへ(一)情々しく、懷しき所おはしつる御方なれば、殿上人どもも、「(二)こよなくさう〲しかるべきわざかな」と、惜み聞ゆ。大方(三)さるまじき際の女官などまで、偲び聞えぬはなし。宮(四)はまして、若き御心地に、心細う悲しく思し入りたるを聞召して、(五)心苦しく哀に思召さるれば、御四十九日過ぐるまゝに、(六)忍びて參らせ奉らせ給へり。日々に(七)渡らせ給ひつゝ見奉らせ給ふ。(八)黑き御衣にやつれておはする樣、いとゞらうたげにあてなる氣色まさり給へり。(九)御心樣もいとよく大人び給ひて、母女御よりも、今少ししづやかに、重りかなるけしきの勝り給へるを、後安くは見(一〇)奉らせ給へど、誠には、(一一)御母方とても、後見と賴ませ給ふべき、御伯父など樣のはか〲しき人もなし、僅に大藏卿、修理大夫などいふは、女御(一二)

せし時、人より前に參り給ひにしかば、むつまじう哀なる方(一)の御思は、殊に物し給ふめれど、(二)そのしるしと見ゆる節もなくて年經給ふに、中宮(三)には、宮達さへ數多、こゝら大人び給ふめるに、さやうのことも少くて、唯女宮(四)一所をぞ持ち奉り給へりける。(五)我がいと口惜しう、人に壓され奉りぬる宿世、歎かしく覺ゆるかはりに、この宮をだに、いかで(六)行末の心も慰むばかりにて見奉らむと、(七)かしづき聞え給ふこと疎ならず。御容貌もいとをかしくおはすれば、帝(八)もらうたきものに思ひ聞えさせ給へり。(九)女一宮を、世に類なきさまにもてかしづき聞えさせ給ふに、(一一)大方の世のおぼえこそ及ぶべうもあらね、内々の(一〇)御有樣はをさ〳〵劣らず。父大臣の御勢嚴しかりし名殘、いたく衰へねば、殊に心もとなき事など(一二)なくて、侍ふ人々のなり姿よりはじめ、たゆみなく時々につけつゝ、調へ好みて、今めかしくゆゑ〳〵しき樣にもてなし給へり。

(一三)十四になり給ふ年、御裳著せ奉り給はむとて、春よりうちはじめて、他事なく思

---

(一)今上の御寵愛は
(二)時めきもせぬ也
(三)明石姫君
(四)女二宮
(五)藤壺の心
(六)思出のある樣によき生活をさせたきものと
(七)藤壺が
(八)今上
(九)明石姫君腹
(一〇)今上が
(一一)世間に重んぜられる點は迚も及ばねども
(一二)宮中の交際日常の生活など何事につけても不足なくて
◉女二宮の裳著藤壺女御の逝去によりて延引
(一三)女二宮

㊀藤壺女御に大事がらるゝ女二宮
（一）椎本の卷の初頃
（二）今上の女御なり、源氏の取持にて今上東宮たりし時に參りし事梅枝の卷に見えたり

# 宿木

## 梗槩

㊀藤壺女御に大事がらるゝ女二宮。㊁女二宮の裳著藤壺女御の逝去によりて延引。㊂今上薫を女二宮の聟にせんとす。薫と碁を圍みて其意をほのめかす。氣乘のせぬ薫。㊃夕霧、六君を匂宮に配せんとす。㊄女二宮、薫に定まらんとす。㊅匂宮と六君との婚禮八月と定まる。中君の煩悶。㊆薫の煩悶。朝顔の花を携へて中君を訪ふ。㊇匂宮、六君と婚す。㊈中君の感慨。匂宮つとめて中君を慰む。㊉盛なる中君の三ッ目の祝。⑪薫の感情。按察の君の局にとまる。⑫美しき六君。匂宮の愛情。⑬中君の憂悶。薫を招きて宇治に赴かん事を謀る。薫切なる情を中君に訴ふ。⑭匂宮、中君方に宿して薫の移香を怪しむ。⑮薫衣類を中君に贈る。⑯薫、中君を訪ひて情を訴ふ。中君、浮舟の事を薫に語る。⑰薫、宇治の山荘に行く。寢殿を寺に造り改めんとす。辨の尼に浮舟の事を聞く。⑱薫携へ歸りたる蔦を中君に贈る。⑲匂宮中君方に宿る。夕霧、匂宮を伴ひて自邸に歸る。中君の感傷。⑳中君不快。匂宮、薫等の心配。㉑薫權大納言に進む。大饗。㉒中君男子を生む。方々よりの產養。㉓女二宮裳著。薫と婚す。㉔薫、中君を訪ひて赤兒を見る。㉕藤花の御宴。薫天盃を賜はる。女二宮三條邸に移る。㉖薫宇治に行く。浮舟の初瀨詣の歸途宇治の山荘に宿するに逢ふ。

㊀この（一）頃藤壺と聞ゆるは、故左大臣殿の女御に（二）なむおはしける。まだ東宮と聞えさ

(一)直接に應對する事が恥かしいのでぐづぐづして居る中に
(二)暇乞に中君方へ
(三)匂が
(四)なぜ非常に他人行儀に薫を遠くに置くのぢや
(五)中君に對しては
(六)薫が引受けて世話して居たりしに
(七)或は我が馬鹿を見る事になりはせぬかとは思へど、猶薫と中君との中を疑へる也
(八)餘り油斷も出來ぬ
(九)中君の心
(一〇)薫の親切はかねて身にしみて感じて居る事故
(一一)薫のいふ通りに
(一二)薫を大君の代りと思ひて其意味を薫に知らせたしとは思へど
(一三)匂が色々と薫との中を懸念する故

らせ給ふ樣をも、見え奉らせ給ふべけれ」など聞ゆれど、人傳ならず、ふとさし出(一)で聞えむ事の、猶つゝましきを、やすらひ給ふ程に、宮出で給はむとて、御まか(二)り申に渡り給へり。いと淸らにひき繕ひ假粧じ給ひて、見るかひある御樣なり。中納言は此方になりけりと見給ひて、(三)匂「などか、(四)むげにさし放ちては出し居ゑ給へる。(五)御あたりには、あまり怪しと思ふまで、(六)後やすかりし心寄を、(七)我が爲はをこがましき事もやと覺ゆれど、流石にむげに隔多からむは、罪もこそ得れ。近やかにて、昔物語もうち語らひ給へかし」など、聞え給ふものから、匂「然はありとも、(八)あまり心ゆるびせむも、又如何にぞや。疑はしき下の心にもぞあるや」と、うち返し宣へば、(九)一方ならず煩はしけれど、我が御心にも、(一〇)哀深く思ひ知られにし人の御心を、今しも疎なるべきならねば、(一一)かの人も思ひ宣ふめる樣に、(一二)古の御かはりと準へ聞えて、斯う思ひ知りけりと、見え奉る節もあらばや、とは思せど、流石に、とやかくやと、(一三)方々にやすからず聞えなし給へば、苦しう思されけり。

宮は内裏へ參り給はむとて、御車の裝束して、人々多く參り集りなどすれば、立ち出で給ひて、對の御方へ(二)參り給へり。山里のけはひひきかへて、御簾の内心に(一)くゝ住みなして、をかしげなる童の透影ほの見ゆるして、御消息聞え給へれば、(三)御褥さし出でて、昔の心知れる人なるべし、(四)出で來て御返きこゆ。薫「朝夕の隔もあるまじう思う給へらるゝ程ながら、(五)その事となくて聞えさせむも、(六)なか〳〵狎れ狎れしき咎もやとつゝみ侍る程に、世の中變りにたる心地のみぞし侍るや。(七)御前の梢も霞へだてて見え侍るに、哀なる事多くも侍るかな」と聞えて、うち眺めて物し給ふけしき、心苦しげなるを、(八)實におはせましかば、(九)覺束なからず行きかへり、かたみに花の色、鳥の聲をも折につけつゝ、少し心ゆきて過しつべかりける世を、など思し出づるにつけては、ひたぶるに堪へ籠り給へりし住居の心細さよりも、(一〇)飽かず悲しう口惜しきことぞ、いとゞ勝りける。人々も、女房「世の常に(一一)疎々しくなもてなし聞え給ひそ。(一二)限なき御心のほどをば、今しもこそ、見奉り知

(一)匂の前を薫が
(二)中君方
(三)薫が來れる由申入れたれば
(四)宇治の頃薫に馴染ありし人と見えて
(五)近所なれど
(六)格別用もなきに御機嫌を向ふも狎れ〳〵し過ぎて匂に疑はれるかも知れぬと
(七)御邸の木が我の宿から見えるにつけても
(八)成程大君存生ならば、以下中君の心
(九)薫方の人々と繁々往復して
(一〇)榮華の暮しをするにつけて却て
(一一)一通りの御客の樣に薫を疎末にし給ふな
(一二)薫の御親切を感謝して居る事を今こそ示しなさるがよし

所人に讓らむが口惜しきに、さもやなしてまし、年頃人知れぬものに思ひけむ人をもなくなして、物心細く眺め居給ふなるを、など(一)思し寄りて、さるべき人して(二)氣色とらせ給ひけれど、薫「世のはかなさを目に近く見しに、いと心憂く身もゆゝしく覺ゆれば、(三)如何にも〳〵さやうの有樣は物憂くなむ」と、すさまじげなる由聞き給ひて、匂「いかでか、(四)この君さへ、(五)おほな〳〵言出づることを、物憂くはもてなすべきぞ」と恨み給ひけれど、親しき御中らひながらも、(六)人樣のいと心恥かしげに物し給へば、え強ひても聞え動かし給はざりけり。

花盛のほど、二條院の櫻を(七)見やり給ふに、(八)主なき宿のまづ思ひやられ給へば、薫「(九)心安くや」など獨語ちあまりて、(一〇)宮の御許に參り給へり。(一一)此處がちにおはしまし著きて、いとよう住み馴れ給ひにたれば、(一二)めやすのわざやと見奉るものから、例のいかにぞや覺ゆる心の添ひたるぞ、あやしきや。されど實の御心ばへは、いと(一四)哀に(一三)後やすくぞ思ひ聞え給ひける。何くれと御物語聞えかはし給ひて、夕つかた、

(一)薫は大君を失ひて心細き折なれば
(二)薫に交渉せしめたれど
(三)相手の如何に拘はらず女沙汰は無用
(四)匂のみか薫まで
(五)我が本氣になりて言ひ出した事を
(六)薫の
㊆薫、二條院に中君を訪ふ
(七)薫が
(八)宇治の山莊
(九)「淺茅原主なき宿の櫻花心やすくや風に散るらん」
(一〇)匂
(一一)匂は近來多くは二條院にのみ居つきて
(一二)中君と中の睦まじきをいふ
(一三)何となく氣にかゝりて思はるゝ氣のするは
(一四)中君の匂に愛せらるゝを安心に思へり

中納言(一)は、三條の宮に、この廿日餘のほどに渡り給はむとて、この頃は日々にお(二)はしつゝ見給ふに、この院(三)近き程なれば、けはひ(四)も聞かむとて、夜更くるまでおはしけるに、奉り給へる御前の人々歸り參りて、有樣など語り聞ゆ。いみじう(五)御心に入れて、もてなし給ふなるを聞き給ふにも、かつは嬉しきものから、流石に我心ながら、をこがましく胸打潰れて、薫「物(六)にもがなや」と、返すぐ\獨言たれて、

　薫 しなてる(七)やにほの湖に漕ぐ船のまほならねどもあひ見しものを

とぞ言ひ(八)くたさまほしき。

左(九)の大殿は、六の君を宮(一〇)に奉り給はむこと、この月にと思し定めたりけるに、かく思(一一)の外の人を、この程より前にと、おぼし顔にかしづきする給ひて、離れおはすれば、いと物しげに思したりと聞き給ふも、いとほし(一二)ければ、御文は時々(一三)奉り給ふ。御裳著(一四)のこと、世に響きて急ぎ(一五)給へるを、延べ給はむも人笑へなるべければ、廿餘日に著せ奉り給ふ。同じゆかりに珍らしげなくとも、この中納言を餘

(一)薫
(二)三條宮へ工事を見に行く也
(三)二條院
(四)引移の樣子を聞かんとて其常日は夜更まで三條宮に居りしに
(五)匂が中君を
(六)「取返すものにもがなや世の中をありしながらの我身と思へば」
(七)匂の珍重する中君は實は眞の契こそなけれ我が一夜は共寢せし女なり「しなてるや」はにほの湖の枕詞なるべし
(八)妬ましさにけちが附けたくなる
㊅ 夕霧の六の君裳著、匂宮を聟にする事中止、薫を聟にせんとす
(九)夕霧
(一〇)匂に
(一一)思もよらぬ中君を何でも六君の來ぬ前にと思へる如く急に呼取りて六君へは寄りつかぬ故
(一二)匂が氣の毒に思ひて
(一三)六君へ
(一四)六君の
(一五)匂宮を聟に取る前にする必要あれば急ぎし也

(一)遠方には出つけぬ中君故
(二)山を出づる月もまた山に歸るを見れば我も亦遂には宇治に歸るべきかと也
(三)山に歸る月と替りて山を出行く我が終りは如何ならんと
(四)今思へば宇治に居し時の物思は數ならずと其當時に立戻りたき心持す
(五)中君二條院に入る、匂宮の寵愛、薫の失意
(五)二條院に
(六)車を
(七)匂宮
(八)どの位に取扱はれる事かと危ふく思はれし中君が俄に本妻として引取られし事故
(九)匂宮の寵愛は一通ならぬ事なるべしと

御中のかよひを、理の絶間なりけりと、少し思し知られける。七日の月のさやかにさし出でたる影、をかしく霞みたるを見給ひつゝ、いと遠きに(一)ならはず苦しければ、うち眺められて、

中君(二)ながむれば山よりいでて行く月も世にすみわびて山にこそ入れ

(三)様かはりて、遂に如何ならむ、とのみ危く、行末うしろめたきに、年頃何事をか(四)思ひけむとぞ、取返さまほしきや。

宵うち過ぎてぞおはし著きたる(五)。見も知らぬ様に、目も輝くこゝちする殿づくりの、三つば四つばなる中にひき入れて(六)、宮いつしかと待ちおはしましければ、御車のもとに、自ら寄らせ給ひて、おろし奉り(七)給ふ。御しつらひなど、あるべき限して、女房の局々まで、御心留めさせ給ひける程著く見えて、いとあらまほしげなり。如何(八)ばかりの事にかと見え給へる御有様の、俄にかく定り給へば、おぼろ(九)げならず思さるゝ事なゝめりと、世の人も心にくゝ思ひ驚きけり。





よりも、御前の人々數多く奉れ給へり。大方の事をこそ、宮よりは思し掟つめれ、細やかなる内々の御あつかひは、唯この(一)殿より、思ひ寄らぬ事なく訪ひ聞え給ふ。日暮れぬべしと、内にも外にも催し聞ゆるに、心あわたゞしう、(二)何方ならむと思ふにも、いとはかなく悲しとのみ覺え給ふに、(三)御車に乘る大輔の君といふ人のきこゆ。

大輔(四) ありふれば嬉しきせにも逢ひけるを身をうぢ河になげてましかば

うち笑みたるを、(五)辨の尼君の心ばへにこよなうもあるかなと、心づきなう見給ふ。今一人、

女房(六) 過ぎにしが戀しきことも忘れねど今日はたまづもゆくこゝろかな

いづれも(七)年經たる人々にて、皆かの御方をば、(八)心よせ聞えたゞめりしを、今はかく思ひ改めて言忌するも、心憂の世や、と覺え給へば、物も言はれ給はず。

道の程遙けくけはしき山路の有樣を見給ふにぞ、(九)つらきにのみ思ひなされし人の

(一)薫がよく氣がつきて
(二)何處へ行くのかしらと、中君の心
(三)中君に陪乘する
(四)辛抱すれば此の如き嬉しき目にもあふものを身の憂き時に身でも投げて仕舞ひたらば悔しかりしならん
(五)辨の尼の了簡とは雲泥の差かなと、中君の心
(六)大君の悲しさも忘れねど、今日の御引移の嬉しさはたまらぬ
(七)古く仕へ居る女にて
(八)大君を大事がりしに、中君の心
(九)匂の來ぬを薄情なりとのみ思ひしかど是では無沙汰も道理と

世に住みつかむ事も、いと有り難がるべきわざと覺ゆれば、樣に隨ひて、こゝを(一)ばあれはてじとなむ思ふを、さらば對面もありぬべけれど、暫しのほども、心細くて立ちとまり給ふを見おくに、いとゞ心もゆかずなむ。(二)かゝる容貌なる人も、必ずひたぶるにしも堪へ籠らぬわざなゝめるを、猶世のつねに思ひなして、時々も見え給へ」など、いと懷しう語らひ給ふ。(三)昔の人の持てつかひ給ひし、さるべき御調度どもなどは、皆この人に留め置き給ひて、中君「かく(四)人より深く思ひ沈み給へるを見れば、前の世もとりわきたる契(五)もやものし給ひけむと思ふさへ、睦まじく哀になむ」と宣ふに、(六)いよ〳〵童べの戀ひて泣く樣に、心をさめむ方なくおぼほれ(七)居たり。

皆かき(八)掃ひ、萬とりしたゝめて、御車ども寄せて、(九)御前の人々、四位五位いと多かり。(一〇)御みづからも、いみじうおはしまさまほしけれど、事々しくなりて、なかなか惡かるべければ、唯忍びたる樣にもてなして、(一一)心もとなく思さる。中納言殿

(一)京に移りて長持ちがするかどうか甚だ覺束なき事故、次第によりては又此處へ歸るべしと思へば、「あれはてじ」は「かれはてじ」の誤歟
(二)尼なりとて必ず常に引籠り居るものとも限らぬ故、何も浮世の常と思ひて時々我許に尋ねて來よ
(三)大君の
(四)辨の尼が特別に大君の死を悲むを見れば
(五)尼と大君と
(六)辨の尼の樣
(七)淚にくれ
(八)座敷を
(九)迎の人々也
(一〇)匂宮も非常に來たかりしなれど自身來ては仰山にて
(一一)匂が

(一)一切を空しきものと觀ずべき
(二)我も大君の戀しさは忘れがたしと也
(三)戀しさの
(四)匂などに疑はれはせぬかと
㊃ 中君宇治を出でて京に移る
(五)薫の
(六)中君の侍女等は引越を嬉しがりて
(七)辨の尼は
(八)袖の浦は出羽の名所、藻鹽を垂るゝはしほたるゝ意、あま—海士、尼
(九)匂に引取られても行末覺束なき我には其方の昔を戀ふる涙とは又特別なる悲あり

れど、さしもあるまじうて、深き底に沈み過さむもあいなし。(一)すべてなべて空しく思ひ取るべき世になむ」など宣ふ。

薫「身を投げむ涙の川にしづみてもこひしきせゞにわすれしもせじ(二)

如何ならむ世に、少しも思ひ慰むることありなむ」と、(三)果もなき心地し給ふ。歸らむ方もなく眺められて、日も暮れにけれど、すゞろに旅寢せむも(四)人の咎むる事やと、あいなければ、かへり給ひぬ。

(五)思ほし宣ひつる様をかたりて、辨はいとゞ慰め難く昏れ惑ひたり。(六)皆人は心ゆきたる氣色にて、物縫ひ營みつゝ、老いゆがめる容貌も知らず、繕ひさまよふに、(七)いよ〳〵やつして、

辨(八)人はみな急ぎたつめる袖のうらにひとり藻鹽を垂るゝあまかな

とうれへ聞ゆれば、

中君(九)しほたるゝあまのころもに異なれや浮きたる浪にぬるゝわが袖

(一)辨が留守して居るのは
(二)命の長きを厭へば厭ふほど其にはりあひて益命がのびる也
(三)大君が私を棄てて死なれし事が怨めしく
(四)薫に訴へるも
(五)薫が
(六)辨がひどく年はよりたれど
(七)髮を剪りたれば
(八)薫が大君の事を嘆く餘りには
(九)大君を尼にすればよかつた、以下薫の心
(一〇)命の
(一一)大君が尼になつて生きて居たらば嘸心深き話が出來たであらうなど
(一二)辨の尼までが
(一三)辨の尼の樣子
(一四)老いては何事にも涙が先に立つ、其涙の川に身を投げたらば大君より先に死ぬ事が出來てよかりしならんに
(一五)身を投ぐるも
(一六)早く佛になる望はあれども又さうゆかずに身を殺したる罪によりて地獄の底に陷りてはつまらぬ

(一)物し給はむは、いと哀に嬉しかるべき事になむ」など、えも言ひやらず泣き給ふ。辨「厭ふに榮えて延び侍る命のつらく、又如何にせよとて、(三)うち捨てさせ給ひけむと(二)恨めしく、なべての世を思う給へ沈むに、罪もいかに深く侍らむ」と、思ひける事どもを(四)愁へかけ聞ゆるも、頑しけれど、いとよく(五)言ひ慰め給ふ。(六)いたくねびにたれど、昔淸げなりける名殘を(七)そぎ捨てたれば、額のほど樣變れるに、少し若くなりて、さる方にみやびかなり。(八)思ひわびては、(九)などかゝる樣にもなし奉らざりけむ、それに(一〇)延ぶる樣もやあらまし、(一一)さても如何に心深く語らひ聞えてあらまし、など一方ならず覺え給ふに、(一二)この人さへ羨ましければ、隱ろへたる几帳を少し引きやりて、こまやかにぞ語らひ給ふ。げに、むげに(一三)思ひぼけたる樣ながら、物打言ひたる氣色、用意、口惜しからず、故ありける人の名殘と見えたり。

辨　(一四)さきに立つ淚のかはに身をなげば人におくれぬいのちならまし

とうちひそみ聞ゆ。薫「(一五)それもいと罪深かゝなる事にこそ。(一六)かの岸に到ることはあ



中君見る人もあらしにまよふ山里にむかしおぼゆるはなの香ぞする

言ふともなく仄にて(一)、絶え〴〵聞えたるを、懐しげに打誦じ(二)なして、

薫(三)袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根ごめうつろふ宿やことなる

堪へぬ涙を樣よく拭ひかくして、言多くもあらず。薫「又も猶(四)、かやうにてなむ何事も聞えさせ寄るべき」など、聞え置きて立ち給ひぬ(五)。御わたりにあるべき事ども、人々に宣ひおく(六)。この宿守に、かの髭がちの宿直人などは侍ふべければ、このわたりの近き御庄(七)どもなどに、その事ども宣ひあづけなど、まめやかなる事どもをさへ定め置き給ふ。

辨ぞ、辨(八)「かやうの御供にも、思ひかけず長き命いとつらく覺え侍るを、人もゆゝしく見思ふべければ、今は世に在るものとも人に知られ侍らじ」とて、容貌も替へ(九)てけるを、強ひて召出でて(一〇)、いとあはれと見給ふ。例の昔物語などせさせ給ひて、薫(一一)「こゝには、猶時々參り來べきを(一二)、いとたづきなく心細かるべきに、かくて

(一)あらし―嵐、有らじ
(二)薫が中君の歌を誦したる也
(三)大君の愛せし梅は昔の如くなれども中君が京へ移る事になりては此舊宅も昔の家とは思はれず
(四)此樣にして又も目にかゝりて萬事御世話申上ぐべし
(五)引越につきての指圖を薫が人々にしおく
(六)此舊邸の留守居としては
(七)薫の領地の支配者に此宇治邸の監督の事など言ひ附け
(八)今更京への御供をするにつけても
(九)尼になりたるを
(一〇)薫が
(一一)此宇治へは
(一二)誰も居なくては便なく心細かるべければ

(一)斯様な事をむざと強ふるもどんなものかと思つて必ず其様にするとも極められぬ
(二)此舊宅を棄てたくはなしと切に思ひ居る處へ是からはお互の住居が近くなるべしなど仰せらるるにつけても
(三)大君に似たるを
(四)薫の心、我心がらで此人を他人のものにして
(五)以前の關係
(六)きつぱりと色氣はなれて
(七)「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして」
(八)大君を思ひて
(九)「さ月まつ花橘の香をかけば昔の人の袖の香ぞする」
(一〇)中君の心
(一一)此梅に大君が

む限は、聞えさせ承りて、過さまほしうなむ侍るを、如何は思召すらむ。人の心さまゞ\に侍る世なれば、あいなくやなど(一)、一方にもえこそ思ひ侍らね」と聞え給へば、中君「宿をばかれじと(二)思ふ心深く侍るを、近くなど宣はするにつけても、萬に亂れ侍りて、聞えさせやるべき方もなくなむ」と、所々言ひ消ちて、いみじく物哀と思ひ給へるけはひなど、いとよう覺え(三)給へるを、心から(四)餘所のものに見なしつると思ふにいと悔しく思ひ給へれど、かひなければ、その(五)世の事かけても言はず、忘れにけるやと見ゆるまで、けざ(六)やかにもてなし給へり。御前近き紅梅の、色も香もなつかしきに、鶯だに見過しがたげに打鳴きて渡るめれば、まして「春や昔の(七)」と、心を(八)惑はし給ふどちの御物語に、折哀なりかし。風のさと吹き入るゝに、花の香も客人の御匂も、橘(九)ならねど昔思ひ出でらるゝつまなり。徒然(一〇)の紛らはしにも、世の憂き慰にも、心留め(一一)ておそび給ひしものをなど、心にあまり給へば、

も覺え給はず、ほれぐ〵しげにて眺め臥し給へるに、薫「月頃のつもりも、そこはかとなけれど、いぶせく思ひ給へらるゝを、片端もあきらめ(一)聞えさせて、慰め侍らばや。例のはしたなく(二)なさし放たせ給ひそ。いとゞ(三)あらぬ世の心地し侍り」と聞え給へれば、中君「はしたなしと思はれ奉らむとしも思はねど、いさや、心地も例の樣にも覺えず、かき亂りつゝ、いとゞはかぐ〵(四)しからぬ僻事もやと、つゝましうてなむ」と、苦しげに思いたれど、「いとほし」(五)など此彼聞えて、中の障子の口にて對面し給へり。(六)いと心恥かしげになまめきて、又この度はねびまさり給ひにけりと、目も驚くまでにほひ多く、人にも似ぬ用意など、あなめでたの人やとのみ見え給へるを、(七)姫君は、面影さらぬ人の御事をさへ思ひ出で聞え給ふに、いと哀と見奉り給ふ。薫「盡きせぬ御物語なども、(八)今日は言忌すべくや」など言ひさしつつ。薫「(九)渡らせ給ふべき所近く、この頃過してうつろひ侍るべければ、(一〇)夜中曉とつきづきしき人の言ひ侍るめる、何事の折にも疎からずおぼし宣はせば、(一一)世に侍ら

(一)胸の思を打明けて
(二)他人あしらひをせらるゝな
(三)さうされては彌々知らぬ世界にでも行つた心持になる
(四)つまらぬ受對へでもするかと思つて遠慮勝になる
(五)御會ひなされねば薫へ御氣の毒
(六)薫の樣子
(七)中君が薫を見るにつけて大君の事を思ひ出てたる也
(八)引移りの吉日の前日なれば遠慮すべしと也
(九)君の御引越先の御近處へ此頃に私も引越す筈故、中君は二條院、薫は三條院へ引移る也
(一〇)親しき同士は夜中曉といはず往來するといふ俗諺の通り
(一一)私の一生涯は御懇意に願ひたく思ふが

事しからぬものから、品々こまやかに思しやりつゝ、いと多かり。侍女「折につけては(一)忘れぬ様なる御心よせの有りがたく、兄弟なども、得いと斯うまではおはせぬわざぞ」など、人々は聞え(二)知らす。(三)あざやかならぬ古人どもの心には、(四)かゝる方を心にしめて聞ゆ。若き人々は、侍女「時々も(五)見奉りならひて、今はと(六)異様になり給はむを、さうぐしくいかに(七)戀しう覺えさせ給はむ」と聞えあへり。

自らは、(八)渡り(九)給はむこと明日とてのまだつとめて、おはしたり。例の客亭の方におはするにつけても、(一〇)今はやうく物馴れて、我こそ人より先に(一一)かうやうにも思ひそめしかなど、(一二)ありし樣宣ひし心ばへを思ひ出でつゝ、(一三)流石にかけ離れ、殊の外になどは、はしたなめ給はざりしを、(一四)我が心もて怪しうも隔たりにしかなと、胸いたく思ひつゞけられ給ふ。垣間見せし障子の穴も思ひ出でらるれば、寄りて見給へど、この中をば(一五)おろし籠めたれば、いとかひなし。(一六)内にも人々思ひ出で聞えつゝ、(一七)うちひそみあへり。中の君は、まして催さるゝ御涙の川に、(一八)明日のわたり

(一)薫が昔を忘れず世話し下さるは有難き事にて
(二)中君に
(三)はでやかならぬ
(四)生活上の薫の世話を有難く思ひて中君に言ひ聞かす
(五)中君が薫を
(六)薫を離れて匂の世話になるを
(七)中君が
(八)薫
(九)中君が京へ引移るべき前日の朝
(一〇)大君が存生ならば今頃は段々馴染みて、薫の心
(一一)斯く大君を引取らんと思ひ附きし事なるに
(一二)大君の樣子
(一三)大君が靡かぬものの流石厭ひもせず、薫の心
(一四)我が遠慮勝なる心から遂に終まで本意を遂げざりし悔しさよと
(一五)簾を
(一六)大君を
(一七)泣顔つくりあへり
(一八)明日の引越の事も考へられず

とても又せめて心ごはく、堪へ籠りてもたけかるまじく、（一）「淺からぬ中の契も、（二）絶えはてぬべき御住居を、いかに思し得給ふぞ」（三）とのみ、恨み聞え給ふも、少しは理なれば、如何すべからむと思ひ亂れ給へり。二月の朔日頃（四）とあれば、程近くなるまゝに、花の木どもの氣色ばむも、殘ゆかしく、峰の霞（五）のたつを見棄てむことも、おのが常世（六）にてだにあらぬ旅寢にて、如何にはしたなく人笑はれなる事もこそなど、萬につゝましく、心ひとつに思ひ明し暮し給ふ。御服も限ある事なれば、脫ぎ棄て給ふに、御禊も淺き心地ぞする。親一所（七）は、見奉らざりしかば、戀しきこともおぼえず。その御代に（八）も、この度の衣を深く染めむと、心にはおぼし宣へど、流石に然るべき故も無きわざなれば、飽かず悲しき事限なし。中納言殿より、御車、御前の人々、博士（九）など奉れ給へり。

薰　はかなしやかすみの衣（一〇）たちしまに花のひもとくをりも來にけり

實にいろ／＼いと淸らにて奉れ給へり。御わたり（一一）の程のかづけものどもなど、事

（一）其かひもあるまじく
（二）匂との中も
（三）どうなさる御積りぢやと匂から言はれるも
（四）朔日頃引取るべしと匂より通知し來れる故
（五）「春霞立つを見捨てゆく雁は花なき里にすみやならへる」
（六）雁は常世の國のものと言ひならへり
（七）中君の母は早く死したる也
（八）姉の爲に重き喪に服せんと
（九）陰陽博士、祓の爲に用あれば也
（一〇）喪に服し給ひしは昨日今日の樣に思ひしに早除服の時になりけるよ、霞の衣は喪服をいひ花の紐とくとは中君の除服の爲に花やかなる衣裳を調へたるをいふ
（一一）中君より目下の人人に賜はるべき品

(一)中君を匂に取持ちたるが薫の過の様に思はる
(二)大君の形見とては中君を措いて外になき故
(三)他人としての關係では
(四)中君を
(五)何か不都合な關係があってする事と思召すか
(六)大君が中君を自分と思って娶ってくれよと頼まれし事を
(七)中君の閨に入りて一夜をあかせし事は匂にも語らざりし也、いはせの森の呼子鳥は引歌あるべけれど未詳
(八)薫の
(九)匂の如く自分が中君を引取るべきであつたと
(一〇)斯く中君に未練を殘して居ては遂には不都合な了簡も出て來るべし其では皆の爲に宜しかるまじと思ひ切る
(一一)薫の心
(一二)中君が匂に引取られるにしても
(一三)中君の力になる者は我が外には無しと
(一四)中君の引移る用意
㊂中君引移の用意、薫宇治を訪ふ辨の尼との對話
(一五)宇治
(一六)宇治を見棄つるも、中君の心「いざこゝに我世は經なん菅原や伏見の里の荒れまくも惜し」

と嬉しき事にも侍るかな。あいなく自らの過となむ思ひ給へらるゝ、飽かぬ昔の(一)名殘を、また尋ぬべき方も(二)侍らねば、(三)大方には、何事につけても、心寄せ聞ゆべき人となむ(四)思ひ給ふるを、(五)もし便なくや思し召さるべき」とて、かの(六)こと人とな思ひわきそと讓り給ひし心掟をも、少しは語り聞え給へど、(七)いはせの森の呼子鳥めいたりし夜の事は、殘したりけり。(八)心の中には、かく慰め難き形見にも、實にさてこそ、(九)かやうにも扱ひ聞ゆべかりけれと、悔しき事やう〳〵勝り行けど、今はかひなきものゆゑ、常に(一〇)斯うのみ思はば、あるまじき心もこそ出で來れ、誰が爲にも味氣なくをこがましからむ、と思ひ離る。(一一)さても、(一二)おはしまさむにつけても、誠に(一三)思ひ後見聞えむかたは、又誰かはと思せば、(一四)御わたりの事ども心まうけせさせ給ふ。

(一五)彼處にも、よき若人童などもとめて、人々は心ゆき顏に急ぎ思ひたれど、今はとてこの(一六)伏見を荒しはてむも、いみじう心細ければ、歎かれ給ふ事盡せぬを、さり

哀にもをかしうも、泣きみ笑ひみとか言ふらむ樣に聞え出で給ふに、まして、さ(一)ばかり色めかしう、涙もろなる御癖は、(二)人の御上にてさへ、袖もしぼるばかりになりて、(三)かひ〴〵しくぞあひしらひ聞え給ふめる。空の氣色もはた、實にぞ哀知り顏に霞わたれる。夜になりて烈しう吹き出づる風の氣色、まだ冬めきていと寒げに、大殿油も消えつゝ、(四)闇はあやなきたど〴〵しさなれど、互に聞きさし給ふべくもあらず、盡せぬ御物語を(五)えはるけやり給はで、夜もいたう更けぬ。(六)世に例あり難かりける中の睦を、匂「いで、然りとも、(七)いと然のみはあらざりけむ」と、(八)殘りありげに問ひなし給ふぞ、わりなき御心ならひなめるかし。さりながらも、(九)物に心え給ひて、(一〇)歎かしき心のうちもあきらむばかり、かつは慰め、又哀をもさまし、さま〴〵に語らひ給ふ御樣のをかしきにすかされ奉りて、實に心に餘るまで思ひ結ぼほるゝ事ども、少しづつ語り聞え給ふにぞ、(一一)こよなく胸の隙あく心地し給ふ。宮も、(一二)かの人近く渡し聞えてむとする程の事ども、語らひ聞え給ふを、薫「い

(一)匂の人となりをいふ
(二)他人の身の上話を聞いてさへ
(三)話しがひある樣に
(四)「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ」
(五)語り盡し得ずして
(六)珍しき薫と大君との戀中の話を匂が聞きて、「あり難かりける」とは、あれ程親しくしながら終に大君が肌を許さざりしをいふ
(七)さうばかりでもなかりしならん
(八)薫がなほ隱し立てして居るらしく
(九)匂は察しのよい人で
(一〇)薫の胸の晴れる位に
(一一)薫が胸のすく心地がする
(一二)中君を引取るべき用意につきて

がたければ、京(一)にわたし聞えむと思し立ちにたり。

内宴(二)など物騒しき頃過して、中納言の君(三)、心(四)に餘ることをも、又誰にかは語らはむと思し侘びて、兵部卿の宮の御方に參り給へり。しめやかなる夕暮なれば、宮うち眺め給ひて、端近くぞおはしましける。箏の御琴搔きならしつゝ、例の御心(五)よせなる梅の香をめでおはする。下枝(六)を押し折りて參り給へる(七)にほひの、いと艶にめでたきを、折をかしう思して、

匂「折る(八)人のこゝろにかよふ花なれや色には出でずしたににほへる

と宣へば、

薫「見る人(九)にかごとよせける花の枝を心してこそ折るべかりけれ

煩はしく(一〇)」と、戯れかはし給へる、いとよき御あはひなり。細やかなる御物語どもになりては、かの山里(一一)の御事をぞ、まづは如何にと宮は聞え給ふ。中納言も、過ぎにし方の飽かず悲しきこと、當時より今日まで思の絶えぬ由、折々につけて、

(一)中君を京へ引取らんと

㊂ 匂宮薫に中君を引取らんとする事を語る

(二)正二三月中に宮中にて催さるゝ宴會、親王以下參りて詩をつくりなどする例なり、此年は早くありし也

(三)薫

(四)大君を失へる悲

(五)匂の好きなる

(六)薫が

(七)薫の

(八)此花がまだ開かずして匂を内に藏せるは恰も薫が何くはぬ顏して中君を手に入れ居るに似たり、匂は此二人の中を疑ひ居る也

(九)どうせ其樣に疑けれるなら此方も其積りで疾うに手を出すのであつた

(一〇)うるさい言ひがかりをする

(一一)宇治

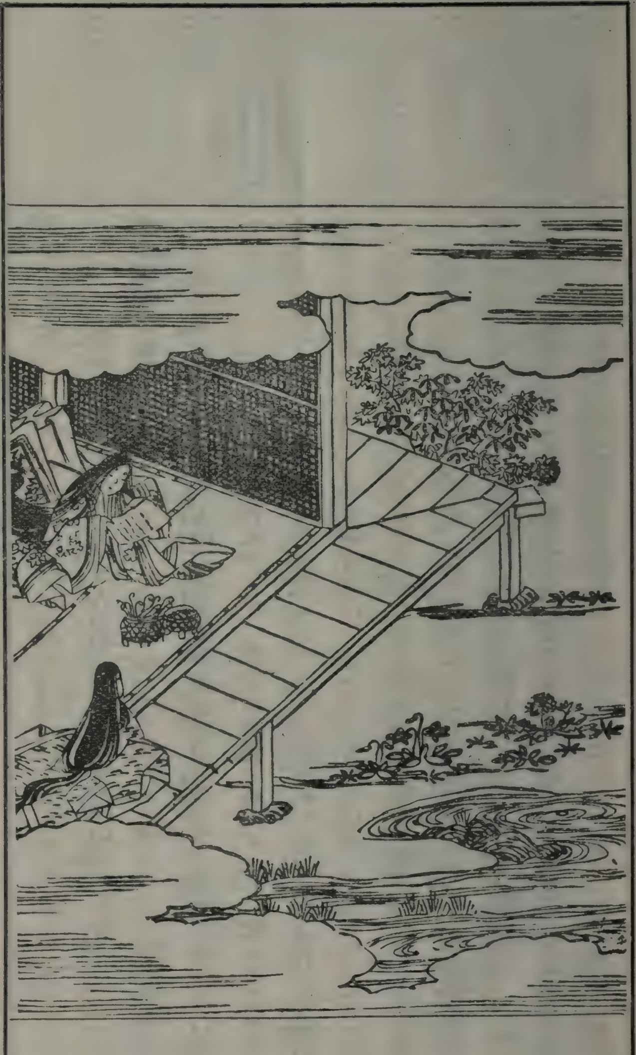
書かせ給ふ。

中君「この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰のさわらび(一)

使に祿取らせさせ給ふ。

いと盛に匂ひ多くおはする人の、(二)樣々の御物思に、少しうち面痩せ給へるしも、いとあてになまめかしき氣色まさりて、昔人にも(三)覺え給へり。竝び給へりし折は、とりぐ\(四)にて、更に似給へりとも見えざりしを、(五)打忘れては、ふとそれかと覺ゆるまで通ひ給へるを、人々「(六)中納言殿の、骸をだに留めて見奉るものならましかばと、朝夕に戀ひ聞え給ふめるに、(七)同じくば見え(八)奉り給ふ御宿世ならざりけむよ」と、見奉る人々は口惜しがる。かの御(九)あたりの人の通ひ來る便に、御有樣は絶えず聞きかはし給ひけり。(一〇)盡きせず思ひほれ給ひて、(一一)新しき年とも言はず、いやめ(一二)になむなり給へる、と聞き給ひても、實に(一三)うちつけの心淺さには物し給はざりけりと、いとゞ今ぞ哀も深く思ひ知らるゝ。(一四)宮はおはします事の、いと所狹く有り

(一)かたみ―形見、籠
(二)中君
(三)大君に似て居る
(四)別々の美しさにて
(五)中君一人になりし今はつい忘れて大君かと思はれる程大君に似て居るを見て
(六)薫
(七)大君を
(八)中君が薫の妻になる運がなぜ無かつたのであらう
(九)薫に仕ふる人
(一〇)薫と中君と
(一一)薫が
(一二)涙がちに
(一三)中君の心、薫の大君に對する思は一時の淺き戀ではなかつたわいと
(一四)匂宮は宇治へ行く事がむつかしき故



しまさずなりにし悲しさよりも、やゝ打勝りて戀しく侘しきに、如何にせむと、明け暮るゝも知らず(一)惑はれ給へど、(二)世に留るべき程は限あるわざなりければ、死なれぬもあさまし。阿闍梨のもとより、

阿闍梨　年あらたまりては、何事かおはしますらむ。御祈は、たゆみなく仕うまつり侍り。今は(三)一所の御事をなむ、やすからず念じ聞えさする。

など聞えて、蕨、土筆、をかしき籠に入れて、「これは童べの(四)供養じて侍る初穗なり」とて奉れり。手はいと惡しうて、歌は、わざとがましく(五)引放ちてぞ書きたる。

阿闍梨　(六)君にとてあまたの春をつみしかば常をわすれぬはつわらびなり

(七)御前によみ申さしめ給へ。

とあり。(八)大事と思ひまはして詠み出しつらむ、と(九)思せば、歌の心ばへもいとあはれにて、(一〇)なほざりにさしも思されぬなゝめりと見ゆる言の葉を、めでたく好ましげに書き盡し給へる、(一一)人の御文よりは、こよなく目留りて、涙もこぼるれば、返事

(一)中君が
(二)壽命はきまつて居るもの故
(三)中君の事ばかりを心にかけて佛に祈り居る
(四)我にくれたるものの初穗
(五)一字々々ぼつ／＼と書きたり、假名を書きなれぬ樣也
(六)八宮在世の頃より必献上し來りし故今年も差上ぐるぞと也、つみ－積み、摘み
(七)中君の御前へ取次いで下されと侍女等に宛て言へる也
(八)此歌は阿闍梨が一生懸命によみしならんと
(九)中君が
(一〇)さう粗末にも思つて居ぬらしき文句を
(一一)匂宮の文

# 源氏物語

## 早蕨

### 梗概

㊀ 寂しき中君の生活。阿闍梨蕨土筆を中君に贈る。㊁ 匂宮、薫に中君を引取らんとする事を語る。㊂ 中君引移の用意。薫宇治を訪ふ。辨の尼との對話。㊃ 中君宇治を出でて京に移る。㊄ 中君二條院に入る。匂宮の寵愛。薫の失意。㊅ 夕霧の六の君裳著、匂宮を聟にする事中止。薫を聟にせんとす。㊆ 薫、二條院に中君を訪ふ。

(一)やぶしわかねば、春の光を見給ふにつけても、いかで斯くながらへにける月日ならむと、夢の様にのみ(二)覺え給ふ。行きかふ時々に隨ひ、花鳥の色をも音をも(三)同じ心に起き臥し見つゝ、(四)はかなき事をも、本末をとりて言ひかはし、心細き世の憂さもつらさも、打語らひ合せ聞えしにこそ、慰む方もありしか、をかしき事哀なる節をも、(五)聞き知る人もなき儘に、萬かきくらし、心ひとつを碎きて、(六)宮のおは

㊀ 寂しき中君の生活、阿闍梨蕨土筆を中君に贈る

(一)日光は照さぬ隈もなければ、「日の光やぶしわかねばいそのかみ古りにし里も花は咲きけり」

(二)中君が

(三)姉大君と

(四)つまらぬ歌をよみても姉が上の句をよめば妹が下の句をつくるといふ樣にし

(五)今は誰に語りて聞いて貰ふ事も出來ねば

(六)父を失ひし時の悲しさよりも

源氏物語總索引……四七一—五二六

# 源氏物語　四　目録


早蕨　一
宿木　二五
東屋　一三七
浮舟　二一三
蜻蛉　二九七
手習　三六五
夢浮橋　四四三
略系圖　四六五

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

# 源氏物語

四

